ランドスケープ・アゲート

紅亜真探

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ランドスケープ・アゲート

【Ｎコード】
Ｎ０８１３Ｇ

【作者名】
紅亜真探

【あらすじ】
「十五年だ……十五年……」

そう、アレサンドロは告白する。
遠い昔の思い出と、ひとりの女性への恋心を。
……そしてそれが、すべての始まりとなった。

◇

巨大人型兵器と、それに関わる人々の想いが交錯するファンタジー系戦記。
改稿をおこなうことも多いですが、読みやすくするためのもので、内容の変更はほとんどありません。
火曜更新です。

主要登場人物（前書き）

登場人物紹介ページを作っては、というご意見を取り入れ、仮ではありますが作成してみました。
本文のおともにどうぞ。

主要登場人物

＜主人公サイド＞

ユウ　（ヒュー・カウフマン）
　二十二歳。本作主人公。
＞ｉ１２４４７―１７５５＜

アレサンドロ　（アレサンドロ・バッジョ）
　三十歳。主人公の相棒。パーティのリーダーであり医師。
＞ｉ１２４４８＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１７５５＜

ララ　＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞ララ・シュトラウス＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞
　十六歳。本作ヒロイン。『レッドアンバー』はコードネーム。
＞ｉ１２４４９―１７５５＜

モチ
　雄の白フクロウ。人造魔人計画の実験体。
＞ｉ１２４５０―１７５５＜

ハサン　（シャー・ハサン・アル・ファルド）
　魔術師の異名を持つ盗人。ユウの師。

ジョーブレイカー
　自由区エド・ジャハンの戦士。

セレン　（セレン・ノーノ）
　天才肌の女性科学者。

メイ　（メアリー・ミラー）
セレンの助手。

テリー　（テリー・ロックウッド）
鉄機兵団出身のスナイパー。

クジャク
魔人。棒術の達人。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

＜帝国サイド＞

ギュンター　（ギュンター・ヴァイゲル）
帝国七将軍のひとり。

サリエリ　（ヴィットリオ・サリエリ）
ヴァイゲル軍紋章官。

クローゼ　（カール・クローゼ・ハイゼンベルグ）
帝国七将軍のひとり。

バレンタイン　（アルバート・バレンタイン）
ハイゼンベルグ軍紋章官。

マリア・レオーネ　（マリア・レオーネ・リドラー）
帝国七将軍のひとり。

ササ・メス

リドラー軍紋章官。

ラッツィンガー　（ジークベルト・ラッツィンガー）
帝国七将軍のひとり。筆頭将軍。

コッセル　（エルンスト・コッセル）
ラッツィンガー軍紋章官。

ケンベル　（オットー・ケンベル）
帝国七将軍のひとり。テリーの師。

ホーク　（デューイ・ホーキンス）
帝国七将軍のひとり。

グレゴリオ　（ヨーゼフ・グレゴリオ）
ホーキンス軍紋章官。飛行戦艦オルカーンの艦長も務める。

クラウディウス　（セロ・クラウディウス）
帝国七将軍のひとり。

鉄仮面
謎の多い黒騎士。

バイパー　（コブラ・パイソン・アナコンダ）
聖鉄機兵団独立戦闘部隊の通称。隠密部隊。

スダレフ
帝国宮廷博士。

シュナイデ

スダレフの元にいた娘。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

＜その他＞

カラス
魔人。十五年前に死亡。

オオカミ
魔人。十五年前に死亡。

ヤマカガシ　（ジョゼッペ・ペルデンドス）
魔人。化学を専門とする老人。

ジャッカル　（ウォレン・ストーン）
魔人。医師。アレサンドロの師。

ミミズ
魔人。鍛冶師の老人。

カジャディール
メイサ神殿大祭主。

ヌッツォ
カジャディールの随身官。

ディアナ
メーテル神殿大祭主。

盗人ふたり

廃墟の闇の中、ふたりの持つ光石灯だけが煌々と輝いている。
「みなそこの……あかつきにこいをした」
壁に彫りこまれた一文字一文字を追うユウの指先が、泥にまみれて汚れた。
「マッケの『水底の乙女』だ。どうしてこんなところに……」
「放っとけ、そんなもん。行くぞ」

かつては空にあったという、この魔人最後の砦が落ち、十五年。
大戦の記憶は、いまだ語られることも多いが、それでも確実に過去のものとなった。
魔人の遺した技術によって、人類の文明レベルも、ここにきて急速に進歩している。
だが、鉄くずのひとかけら、書物の一ページでも、魔人の遺物はまだ金になる。
ユウとアレサンドロ。彼らもまた、そうした『飯のタネ』を探す盗掘者だった。
それにしても……。
身体にカビが生えそうだと、ユウはいつも思う。
空気は湿り、土臭い。ぬかるみに足を取られることなど、日に十も二十もある。
厳重にパッキングしておかなければ食料も長くもたない。
これで割に合う稼ぎがあればまだいいが、ここ半月ほどはそうした喜びとも遠ざかっていた。

「『水底の乙女』……どういう話か知ってるか？」
先を進むアレサンドロが、口火を切った。
「暁に恋した乙女が……月に相談する」

「それで？」
「それだけだ。『月影黙って微笑むばかり』、と」
「ああ……」
アレサンドロはうなずいたが、そのまま口をつぐんでしまった。
どうにも、いつもの彼らしくない。
「違ったか？」
「いや、そうじゃねえが……、昔、その原作ってヤツを読んだことがあってよ」
こんなに分厚くて、とアレサンドロは指を五センチも広げて見せた。
「そいつでは、相談を持ちかけられた月が、乙女に言うのさ。そんなに好きなら暁の胸に飛びこんでみたらどうですか、ってな。乙女は言われた通り、次の朝日が海から顔を出す、その瞬間を狙って、暁の馬車にすがりつく。だが、海の雫でできた乙女の身体は、その熱で……」
パッ、と手を開く。
「『月影黙って微笑むばかり』って、な」
「救われないな」
「ああ、まったくだ。救われねえ……」
言って、アレサンドロは取りつくろうように笑った。
「まあ、おとぎ話ってのはそんなもんさ。忘れてくれ。『水底の乙女』で思い出した、ただのウンチクだ」

それからしばらく、ふたりは無言だった。
行動を共にして一カ月。勿論、こうしたことも今まで何度かあった。
しかし今日は、やはりいつもと空気が違う。
ユウは少しばかり不安になった。
「アレサンドロ」
「なんだ？」

「どうかしたか」
「……まぁな」
歩みが止まる。
「聞きてえか？俺が今、なにを考えてたか」
「……いや、いい」
「いいのかよ」
アレサンドロの背中が笑った。
だがその背中が、話したくない、そう言っているように見えたのだ。
「お前のそういうところ、好きだぜ、ユウ」

そのときだった。

「おい！誰だ！」
振り向いた目に、強烈な光が突き刺さった。
姿は見えないが間違いない、この砦を管轄する地方騎士団の巡回だ。
「くそっ！この辺りはコースから外れてたはずだぞ！」
「いいから、逃げよう！」
ふたりはすでに駆け出している。
手早くライトに覆いをかけ、目についた亀裂に滑りこんだ。
あとは、手元だけとなったわずかな視界と、互いの息遣いのみを頼りに、這うように、滑るように。
しかしその先は……。
「行き止まり……！」
もし、それと気づかずに踏み出していれば、崖下の急流に呑まれていただろう。
大峡谷に落下した砦はその衝撃で裂け、今は内部を、幾筋もの川が走っているのだ。
天地左右にも道はない。

そうこうしている間にも追跡者の靴音はその数を増やし、すぐ近くまで迫ってきている。
ここまでか。
ユウは思った。
谷川に身を投じれば、あるいは逃げられるかもしれない。
だがたとえ捕らわれたとしても、せいぜい鞭を二、三十発受ければ済む。一か八かのリスクを背負うほどの話でもないのだ。
ユウの緊張が、ふ、と途切れたその瞬間、
「じゃあな、ユウ」
アレサンドロの身体が宙に舞った。
「アレサンドロ！」
空をつかむユウの手。上がる水柱。
「馬鹿な……どうして」
どうすればいい？どうすれば！
ユウは意を決し、自らも身を投げ出した。

光

……薪の弾ける音がする。

脂の焦げる、香ばしい匂い。
微笑む男。そのひざに乗った少年。
差し出される食事。
頭をなでる手。
光る指輪。

ぱちん。
再び、薪が跳ねた。

「よお、生きてるか？」
「……アレサンドロ」
焚き火に浮かび上がる姿は、まぎれもなくその人だった。
下着一枚で岩に腰掛け、小枝をもてあそんでいる。
ユウも身を起こそうとひじをつくと、薄手のシャツが胸から落ちた。裸だった。
ああ、そうか。
ここにきてようやく、ユウは自分たちが激流に呑まれたのだということを思い出した。
「あんたが、助けてくれたのか」
「いや。お前が勝手に流れ着いただけだ。俺と同じ場所にな」
アレサンドロは枝を火に投げ入れ、
「まったく。泳げねえなら適当に捕まっておけって話だぜ」
くくっと喉の奥で笑った。
「あんたが飛びこんだりするからだ」
「おいおい、俺のせいか？俺を助けにきたってんなら、それこそ溺

れてちゃ世話ないぜ」
ぐうの音も出ない。
実際泳げないわけでもないのだが、今回ばかりは勝手が違った。
転がるように押し流され、呼吸の確保さえままならない中で岸辺にとりすがろうと何度ももがいてはみたのだ。
しかし、苔にぬめった岩肌が、その度にユウを突き放した。
今もまだ、肺が焼けるように痛む。
「ま、お互い無事でよかったってことで、よしとしておこうぜ」
釈然としなかったが、ユウはうなずかざるを得なかった。
「それにしても……」
「なんだ」
「お、お前、女だったのか！なんて展開でもありゃあ、少しは脱がし甲斐もあったのによ」
「……悪かったな」

なけなしの食料が、パッキングのおかげで難を逃れたのは不幸中の幸いだった。
そして、今が夏の盛りだったことも。
二人は固く焼きしめられたパンとチーズでとりあえずの腹を満たし、服が乾くまでの間、仮眠をとることにした。
堆積した川砂に、瓦礫から引きずり出した帝国軍旗を敷けば、申し分ない寝床となった。
「じゃ、お疲れさん」
「ああ」
だが、ものの数秒で寝入ってしまったアレサンドロと違い、ユウは、なかなか寝つけなかった。
身体は重く、思った以上に消耗している。が、頭の芯が冴えきっている。
さっきの、夢のせいだ。
ユウは無理やり目蓋を閉じ、思い返した。

若い父、幼い兄、そして……。
だるい左腕を持ち上げる。
小指に輝く、姉の形見。
触れると、身体の一部であるかのように温かい。
胸が詰まり、軽い頭痛が走った。
「姉さん……」
唇をリングに寄せ、ユウは、今度こそ眠るために目蓋を閉じた。

……オォ……。

「！」
ユウの身体が、反射的に動いた。
物音の方向に視線を残しながら、短剣を引き抜き、火の落ちかけた薪へ砂をかける。
完全な暗闇にはならなかった。
足元がほの白く光っているのは、おそらく川砂に光石が含まれているのだろう。

オオ……オォ……ォ……。

遠吠え。いや、獣の気配はしない。風だろうか。
姿勢も低く柄を握りこみ、暗がりを凝視すると、
「うっ……！」
突然の閃光が走り、ユウは身を固くした。
光石灯ではない。もっと、強くも、柔らかい光だ。
ユウはゆっくりと目蓋を上げ、かざした手の向こうを見た。
そして、我が目を疑った。
誘うように手を差し伸べて。黒い翼を天に開いて。
それは確かにそこにいた。
「天……使……ッ！」

刃が、手からこぼれ落ちた。

天使

遠吠えが、高く低く、洞内に響いていく。
どれほどの時間が流れたものか。
いや、計ってみれば、それは、ほんの数分のことだったのかもしれない。
後光を背負い立つ黒い天使が、次第にその光を失い始めた。
「あっ……」
ユウはとっさに飛び出した。
とにかく身体が動いた。
「待ってくれ」
伸ばした指先をかすめるように、光が引いていく。
ユウはがむしゃらに追いかけた。
「待ってくれ……！」
……もうどこにも、その姿はなかった。

ユウは冷たい岩壁を前に、ひざまずいた。
奇跡に感謝して、ではない。
ただただ、目の前の現実が信じられなかった。
まさか本当に天使だったとでもいうのか。
自分に、なにか啓示を与えるため降りてきたと？
ユウは苦笑した。まるで神話か三文小説だ。
では魔人か？
だが彼らは、人と変わらぬ姿をしていたという。
思い巡らせるユウの目の端に、
「？」
ふと、奇妙なものがとまった。
触れてみると木製の棒である。
明らかに人の手で加工された、棍棒のようなものが三〇センチほ

ど壁から突き出ている。
なにか、ユウの心に引っかかるものがあった。
この形、この角度。
まるで壁から『手』が生えているような……。
「あ……！」
ユウは小さく叫んだ。
そして飛びつくように、手探りで岩壁を調べ回った。
「そういうことか……！」
わかってみれば、なんのことはない。
これはただの、自然のいたずらだ。

今、おぼろげに見えるだけでも、この場所がかつて、壁に囲まれていた空間だったらしいことはわかる。
まず、その支柱のどこか一本が崩れ、両側の梁が引きずられるように落下した。
おそらく間の壁が支えとなり、完全な崩落はまぬがれたのだろう。
だが、柱は縦の衝撃でいくつかに断たれ、梁にはひびが入った。
それが実に上手く天使の胴となり、羽となった。
あとは、背後から強い光を当ててやればいい。
逆光は鋭角的なシルエットをごまかし、神秘的な状況の演出にもなる。
演出といえば、あの腕もそうだ。
ほんの一部分立体感を持たせるだけで、天使は実に生き生きとしたものとなった。
『目の錯覚』と『思いこみ』。それが天使の正体だったのだ。
それにしても、見事にだまされた。
ユウはあまりの馬鹿ばかしさに、笑いを噛みしめた。

それから、数分も経った頃だろうか。
例の遠吠えと共に、にわかに周囲が明るくなった。

天使が、再び現れたのだ。
しかし、今となっては驚くことではない。タネのバレた手品だ。
だが一方で、その光はユウに新たな事実を気づかせるきっかけとなった。
そう、『向こう側は外につながっている』のだ。
遠吠えは、天使のシルエットを描く岩の裂け目を、風が吹き抜ける音。
天使の出現と音が連動していることを考えれば、後光の正体もおのずと察しがつく。
月光だ。
風が吹けば雲が動く。
月はその度に見え隠れを繰り返す。
その、月光が差しこむ場所。
少なくとも天井のない空間であることは間違いない。

ユウは振り返った。
急流に乗り、随分と下層まで流されてきたように思う。
この辺りは特に損傷の激しい区画で、遺物を掘り出そうにも手持ちの短剣や軽工具では、とても歯が立たないだろう。
つまり結局は一度外に出て、態勢を整えるか、上層に戻るかするしかないのだ。
外に出るためには……また川を下るか？
考えるまでもない。
答えはひとつだ。
ユウは、『天使の腕』を両手でしっかりと握り、ひとつ息をはくと、
ゴ、トンッ……！
力任せに引き抜いた。

意地

ドッ
ドドドドォォ……。

「う、おお？おお？」
これには、さすがのアレサンドロも飛び起きた。
「な、なんだ？おいユウ！お前、なにやった！」
と、衣服をかき集めて叫んだが、ユウの返事はない。ユウは、もはや遮るもののない月光の、その青白い光の中で、なかば放心したように立ち尽くしている。
「おい？ユウ……？」
一点に注がれるユウの視線を追ったアレサンドロもまた、同じく言葉を失った。

天井の落ちたドームに、どこまでも白く輝く満月。藍色の帳。
かつての床は、雨水か川の支流を引きこんだのだろう。
水につかり、そこはまるで、湖だった。
その、かすかに波立つ水面。
月光を受け、ビロードのように輝く水面に、もたれ合いながら立つ、ふたつの巨大な人影が……。

「Ｎ・Ｓ《ナハト・ズィーガー》……！」

遠目ではあるが、おそらく間違いない。いや、それ以外考えられない。
あれこそ、先の大戦において魔人が造り出したという人型兵器、Ｎ・Ｓ。
一体で五千の兵からなる騎士団を滅ぼしたとか、ひと飛びで星の

裏側まで行けたとか、とにかく噂だけならばユウも耳にしている。
だが、その多くは十五年前に失われ、かろうじて残ったものも、ほとんどが帝国によって回収されたはずだった。
もしこれが本物で、しかも完品ということになれば、誰であろうと惜しまず金を積むだろう。
ユウの心は踊った。
「行こう。まず状態を……！」
ユウは瓦礫を飛び越えるべく、岩のひとつに手をかけた。
……が。
「待ちな」
何故だろう。その腕はアレサンドロにつかまれ、ぐいと引き戻されてしまったのである。
かえりみるアレサンドロの顔は、険しかった。

「悪いが、お前はここまでだ、ユウ」
「え……？」
ユウは、言葉の意味をはかりかねた。
「とっとと失せな。そして忘れろ。あれのことも、俺のことも」
「待ってくれ、アレサンドロ。あんた、なにを言って……」
「聞くな。……話したく、ねえんだ」
語尾をかすれさせたアレサンドロの顔が、つらそうに歪められた。
「そういうわけにはいかない」
と、ユウが尚も食い下がると、
「聞いてどうする。話によっちゃ譲ってくれるってのか？」
「それは……」
「いいから行きな。少しでも俺のことを思うなら、ただ口をつぐんでてくれりゃ、それでいい」
「……嫌だ」
アレサンドロは荒々しく舌打ちした。
「なら勝手にしな。どっちにしろ、お前はここで退場だ」

この男は一体どうしたというのか。
考える間もなく、ユウは川べりまで、力ずくに引きずられてきてしまった。
このままでは、また急流下りだ。
「アレサンドロ！くそっ、冗談じゃない！」
ユウはアレサンドロを弾き飛ばした。
自分の身がどうのという話ではない。
わけもわからず、ただ流されるのが我慢できなかった。無性に腹が立った。
「俺にだって意地があるんだ！」
「だったらどうする？俺を殺すか？」
「なに……？」
「ああ、あれが欲しいならそうすりゃあいい。その方がいっそ、スッキリするさ」
「なにが、スッキリだ！」
ユウの拳が、アレサンドロの左頬をまともに打ち抜いた。
「づ……」
「馬鹿にして！いい加減にしろ！」
「こ、の……ッ！」
一歩も譲らぬ、殴り合いになった。

「ガキが、粋がってんじゃねえ！」
「歳をとっていれば偉いのか！あんたのがよっぽどガキだ！」
「そういう話じゃねえだろうが！」
「じゃあなんだ！どういう話だ！話せるのか！あんたに、なにが話せるっていうんだ！」
「ああ？」
「肝心なことを、いつもあんたは隠してる！今だってそうだろ！」
「うるせえ！てめえになにがわかる！てめえに、俺の気なんぞわか

りゃしねえ！」
「ああ、わかるもんか！だから話せと言ってるんだ！」
「ッ……！」
「アレサンドロ！」
「うるせえって、言ってるだろうがよ！」
アレサンドロの蹴りは空を切った。

ユウはおぼつかない足取りでタオルを川にひたし、恐る恐る口元に当てた。

「……ッ！」

もうしばらくは、なにを口に入れても血の味しかしないだろう。

「ちっ、くしょう……」

横たわり、同じように顔を覆ったアレサンドロも、低く、うめいた。

ふたりが息も絶え絶えにへたりこんだのは、あれから三十分も後のことである。

唇も目も、今では見るも無惨に腫れ上がり、身体中いたるところに痛々しい大アザができている。

「……畜生……痛えな……」

アレサンドロが再び、今度は自分に言い聞かせるように、うなった。

「……なあ、ユウ……」

「うん……？」

切れた唇のせいで、出る声はどこか間が抜けている。

「意地ってのは……なんの意地だ？」

「？」

「あれを、Ｎ・Ｓを見つけたって意地か？それとも……」

「あんたの……相棒としての意地だ。……たぶん」

金にこだわる気持ちも、ないと言えば、嘘になる。

だがそれ以上に、いつまでも腹を割ろうとしないこの男への苛立ちや失望が大きかったのは確かだ。

それだけ、ユウの信頼は固かったのだ。

しかし、

「相棒、か……」
くぐもった笑いが、タオルの下からこぼれた。
「お前の言葉は素直すぎて、聞いてるこっちが恥ずかしくなるな」
「……茶化すな」
「そんなつもりはねえさ」
ほめてるんだぜ、アレサンドロは言った。
「そう、馬鹿正直でまっすぐで、頭も経験も足りねえくせに前に出たがってよ。空回りしてるのにも気づかねえ……」
ぽつり、ぽつりと言葉が続く。
「昔の俺がそうだった」

アレサンドロはそこで、それまで決して解こうとしなかった左腕の包帯を取り去った。
「見えるか？」
掲げたのは、日に焼け損なった肌と、赤黒くくすんだ入れ墨。
ユウは目を見張った。
「見たことくらいあるだろ」
確かにその印を知っている。そして、その意味するところも。
「魔人の……！」
「ああ」
アレサンドロは静かに半身を起こした。
「俺は……こっち側の人間だったのさ」

ユウは、唖然とした。
その『赤い三日月』の入れ墨こそ、魔人の奴隷だった証なのである。
それは魔人に魅入られ、身も心も捧げた狂信者。
労働、戦闘、魔人のためならば、彼らはどのような酷使にも応え、どのような死でも受け入れたという。
大戦では、実に万に及ぶ奴隷たちが先兵として命を落としたのだ。

「なんて言われてるがな……」
アレサンドロは包帯を丸め、投げ捨てた。
「俺たちは、奴隷とは違う」
「え？」
「帝国だ。この国が自分たちの戦争を正当化するために、俺たちに奴隷のレッテルを貼った。魔人の悪らつぶりのアピールと……俺たちを殺す言い訳にな」
「待ってくれ。どうして、あんたたちまで……」
「簡単なことさ。俺たちは難民だった」
「難民？」
「ああ。あの頃はどこも、ひどかった。なにを作ろうと全部搾り取られ、文句のひとつでも口にのぼせようもんなら縛り首だ。みんな、魔人を頼って逃げるしかなかった」
「それが、気に入らなかった……」
「臭いものに蓋。してみれば、十五年前の戦は、俺たちこそが標的だったのかもしれねえな。そうでなくても、一石二鳥だ」
『協力者』や『難民』では、帝国の内情が悪いと、外の国へ知らしめるようなもの。
だからこその『奴隷』か。
ユウは唇を噛んだ。
勝てば官軍とはいえ、この国のなんと醜いことか。
……いや。
この国の非情さなど、自分とて百も承知していたはずだ。
で、ありながら、真実を歪めて当然のごとく受け入れていたのは、やはりそれが他人事だったからに他ならない。
ユウは自分を恥じた。
「誰だってそんなもんさ。多少疑問が残っても、時間がそれを押し流す」
ただ……、と、アレサンドロは言葉をつなぎ、
「魔人の下で、俺たちはなにも強いられちゃいなかった。俺たちは

自由だった。好きであいつらと生き、あいつらのために戦った。こいつも……」

左腕の入れ墨を、愛おしげにさする。

「遊び……みてえなもんだった。仲間意識ってのか、こんなちょっとしたことでも、あいつらに近づけた感じでよ。みんな喜んでやってたぜ」

幸せそうな笑みだった。

「それだけが真実だ。俺にとってはな」

「そうか……」

ユウは、疑問が晴れたような気がした。

騎士団の巡回に過剰な反応を見せたのは、奴隷と知れれば否応なく収容所送りとなるため。

N・Sについても、かつての仲間を帝国に売られるようなものだ。いい気はしないだろう。

だが、しかし。

事はユウが考えるほど単純ではなかったのだ。

「……でもよ」

ふ、と月が隠れ、辺りが薄闇に包まれた。

「俺が全部壊した」

「え……？」

「俺が、殺したんだ……」

アレサンドロの声に、今は深い悲しみが満ちている。

カラス

十五年前。
アレサンドロはまだ、十五歳の少年だった。
彼女のことも、初めは母親か姉のように慕うばかりだった。

彼女の名は、カラス。
魔を宿し、人へと変異した鳥獣・昆虫。その、魔人のひとりである。
名の通り、あの黒鳥から転生した女性だった。
すらりとした肢体。輝く黒髪。露に濡れるまつ毛。
肌の白さは白磁にも勝り、唇はみずみずしく膨らむ、薄紅の蕾。
アレサンドロには彼女の美しさが、今も鮮やかに思い出される。

そして彼女はまた、魔人の中でも特に力のある戦士だった。
アレサンドロの知る中でも、彼女に勝てた者はひとりか、ふたり。
N・Sを駆り、天空を自在に舞い飛ぶその武勇は遠く聞こえ、聖鉄機兵団にも『黒の魔女』、『人喰鳥』として、いまだに噂が残っている。

そんな、強く、気高く、美しいカラス。
月日を重ねるうち、アレサンドロ少年の想いは、憧れへ、そして恋心へと変わっていった。
だがそれは……、決して叶うことのない初恋だった。

アレサンドロはここまで語り、沈黙した。
あぐらをかいているが、がっくりと頭を垂れ、指を組むその姿は、まるで祈りを捧げているように見える。

ユウはただ黙って、次の言葉を待った。

気づいてしまうと、想いというものは、日に日にその大きさを増していく。

焼きついた彼女の姿。彼女の匂い。彼女の声。

毎晩、アレサンドロは自身をかき抱くようにして眠った。

毎日、彼女を見つめ続けた。

だが皮肉なことに、だからこそ、アレサンドロは知ってしまった。

彼女もまた、ひとりの男を見つめ続けていることに。

相手の名は、オオカミ。

砦の指揮をとる、魔人だった。

豊富な知識。的確な判断。カラスに勝る力。容姿。

男としての魅力に満ち満ちた彼は、確かに、カラスと並び立っても遜色のない男だった。

だから、仕方がない。

アレサンドロは、そう納得した。納得するしかなかった。

どれほど想おうと、カラスが自分を見てくれない限りは、ただの片思い。

ならば、今は彼女の幸せを第一に考えるべきなのだ、と。

胸の苦しみは、それこそ尋常ではなかった。

彼女を想っていた頃の、何倍もの痛みがアレサンドロを引き裂いた。

だが、彼女のため。

すべては、彼女のために。

アレサンドロは十五歳。まだ、少年だった。

「なにが正解だったのか、いまだにわからねえ」

アレサンドロは眉をひそめた。
「今の俺だったら……いや、それでも引いていたのかも、しれねえな」

帝国の大軍勢が目の前に迫っている、と物見から報告が入ったのは、それからまもなくのことだった。
砦はにわかに色めき立ち、アレサンドロも失恋の痛手が薄れるほど、N・Sの整備助手として忙しく立ち回る日々が続いた。
無論、そう簡単に忘れられるはずもなく、カラスのN・Sを未練がましく磨き上げていたりもしたが、それでもただ泣き暮らすよりはましだった。
眼下に見える帝国の旗は、日に日に増えていった。

そして、緊張感の高まる中、ある日のこと。
いつものように格納庫へ向かったアレサンドロは、そこで、自身のN・Sにしなだれがかり、静かに目を閉じるカラスの姿を見た。
しばらく会えずにいた彼女は少しやつれ、アレサンドロ、と呼ぶ声に涙が出そうになった。
どうしたの。
痛む心でアレサンドロは聞いた。
すると、少し悩みごとがあるのだという。
オオカミのこと？
カラスの顔色が変わった。
アレサンドロは、ああ、やはりそうか、と感じた。
気が遠くなった。

……そこからのやり取りを、アレサンドロは詳しく覚えていない。
ただ、戦いが始まればどうなるかわからない。言いたいことがあるなら伝えておいた方がいい、というようなことを話した記憶が、

おぼろげにある。

そのときのアレサンドロは、とにかく早く話を切り上げ、部屋へ戻りたいと、そればかり考えていたのだ。

これ以上、彼女の口からオオカミの名を聞きたくはなかった。

それが、カラスと話す最後の機会になるとも知らずに。

俺は……

「翌朝だ。格納庫に行ってみると、やけに騒がしかった」
それまで淡々としていたアレサンドロの声が、感情的に震えた。
「カラスが。オオカミが。みんな口々にそう言ってるんだ。俺は野次馬をかき分けて、なにが起こったのか、見にいった。見にいって……」
アレサンドロは声を詰まらせ、顔を覆った。
「見にいって……」
「なにを、見たんだ……？」
答えがない。
「アレサンドロ……？」
「……あれだ」
「え……？」
アレサンドロが指差したのは、あの、二体のN・Sである。
「じゃあ、あれが……」
「……カラスと、オオカミだ。ふたりは、殺し合って……」
「どうして……」
「知るかよ！俺に、わかるかよ……」
そこから先は、嗚咽に消えた。

「……俺は、月影だ」
「？」
「言わなきゃよかった……オオカミに会えなんてよ……そうすりゃ、カラスは死なずにすんだ……この砦だって……」
ユウはハッと息を呑んだ。
アレサンドロが語った、『水底の乙女』の原典。
カラスは水底の乙女。暁はオオカミ。
月影の一言で、消えてしまった幸せ。

アレサンドロはずっと、重ね合わせていたのだろうか。
「違う」
ユウは強く、かぶりを振った。
「月影はどうか知らない。でもあんたのは、カラスの幸せを考えてしたことだ。自分でそう言ったじゃないか」
「ユウ……」
「黙って笑ってたわけでもない。誰もあんたを責めたりしない。カラスだって……！」
しかしアレサンドロは、
「ハ……お前は本当に、素直だよな」
呆れ顔に、笑った。
「なあ、ユウ。お前、女に惚れたことあるか？」
「え……」
胸に、手を当てる。
「……わからない」
「だろうな。そんな感じだぜ」
思わず吹き出したアレサンドロは、のっそりと立ち上がり伸びをした。
その顔からは、もう悲壮感は消えていた。

「さて、と。なんだか、サッパリしたな」
「ん……俺もだ」
「お前には、悪ぃことしたな」
「いや、いいんだ。それより……これから、どうする？」
「そうだな……」
N・Sのことがある。
「俺が、ここで盗掘なんざやってたのは、あいつらの供養のためだった」
アレサンドロと同じ、入れ墨の仲間。そして魔人たち。
「鉄機兵団より、他の連中より先に、あいつらの形見を見つけて…

…土に帰してやるために」
その気持ちは、ユウにもよくわかる。
「あれも、そうしてやりてえな」
「……そうか」
ユウはうなずいた。
「もちろん、つき合ってくれるんだろ？」
「え……？」
「なんだお前。ホントに、話聞いただけで満足してんのか？」
「いや……、でも、いいのか？」
「いいもなにも……」
にやり、笑う。
「相棒なんだろ？こうなりゃ、とことんつき合ってもらうさ」

お前は……

空が白み始めている。
ふたりの服はもう乾いていたが、このまま裸ついでにN・Sの様子を見にいこう、ということになった。

「聞いてもいいか」
几帳面なユウが、いつもの、売りもののような丁寧さで服をたたみながら、言った。
「どうして俺と行動してたんだ?」
一ヶ月前、盗掘中に出会ったふたり。
共に行こうと誘いをかけたのは、他ならぬアレサンドロの方だった。
パーティを組んでの盗掘は、単純な労働力の増加以上に、役割を分担することで、とにかく様々な利点がある。
だからこそ、ユウも乗った。
だが、生活をかけてやっている以上、分け前で血生臭い話になることも往々にしてあるのだ。
特に今回の場合、大物中の大物でありながら、アレサンドロに売る気どころか譲る気もなかった。
これは当然、もめる。
でもよ、とアレサンドロは、自分の服をユウに投げてよこした。
万事、こうしたことはユウ任せである。
「十五年だ。俺たちだけじゃねえ、鉄機兵団だって動いてる。大体の場所は掘り尽くされて、これ以上、大したものは見つからねえ。普通はそう思うさ」
言われてみれば確かにそうだ。
「今まで、お前以外にも何人かと組んできたしな。商売っ気を出したわけじゃねえが……なにかと便利だろ?だからだな」

「そうか」
「それがまさか」
アレサンドロは声を上げて笑った。
「今になってあのN・Sが出てくるとはよ。ツイてると言うか、ツイてねえと言うか……。お前も、よく見つけたもんだな」
「いや、運がよかったんだ。月が……」
待てよ。
ユウは言葉を呑んだ。
天使と遠吠え……。
カラスと、オオカミ……。
「ん？」
「いや、なんでもない」
さすがにそれは考えすぎだろう。
「ただの、偶然だ」
ふうん、と、アレサンドロはあごをかいた。

「俺もひとつ。……お前、金をなにに使ってる？」
「金？」
「とぼけるなよ。お前は稼ぎがまとまった額になると、決まってどこかに持っていく。知ってるぜ」
それは事実だった。
「単純に考えりゃあ、コレだが……」
と、小指を立てたが、
「違うな。博打もねえ。仕送りって線も薄い。だとすると、なんだ？」
腕を組み、完全に探偵気分である。
ユウは、とりあえず見守ることにした。
「捨て犬にコソコソ餌をやってる……お前なら、あり得るな」
「それぐらいのことに、まとまった金はいらないだろ」
「そりゃそうだ。だったら……分割でなにか買った……おい、笑う

な」
「ああ、すまない」
「で、なんだ？なにに使った？いさぎよく吐け」
尋問みたいだな。ユウは思った。
だが正直、秘密にしていたわけでも、面白い話でもない。
「神殿に、寄進してる」
「は？」
「寄進だ」
「……」
滑稽な顔だった。
「マジかよ……、本物だな、お前」
「どういう意味だ」
「いや、ある意味お前らしいというかな……。しかし、なんでまた」
「ん……昔、ちょっと。それに、父が神官だったんだ」

ユウの父が仕えた地母神メイサは、慈悲にあつい神である。
父は下位神官で、裕福ではなかったが、自分たちが生きていける最低限の食料、衣料以外は、すべて困窮にあえぐ人々に分け与えていた。
「父のおこないは正しかったと思うし、尊敬もしてる。でも正直に言えば、俺はとても、そこまでにはなれない。わかってても、明日の自分にいくら金がかかるかなんてわからないし……全部なくすのは無理だ」
「それが普通だぜ」
「だから、必要な分を差し引いた残りで、その真似事をしてる。それに……」
「それに？」
「いや……たぶん、純粋な善意とは違うんだ」
ユウは、最後の上着をたたみ終えた。
「純粋、ねえ」

アレサンドロは肩をすくめ、
「お前の言う通りかもしれねえが、俺からすりゃ十分いい子ちゃんだぜ」
大げさにため息をついた。

予想外の幸、不幸

湖に入ってみると、水は思ったほど冷たくもなかった。
深さはせいぜい、腰まで届くかどうか。
底を踏み進む自分たちの足がはっきり見えるところをみると、どこかで水の出入りがあるのだろう。
飲み水にもなりそうだった。
「歩くにはおっくう、泳ぐには微妙。やれやれ、面倒臭ぇ深さだな」
アレサンドロは指で水を弾き、言った。
やはり心中穏やかでないのだろう。
N・Sに近づくにつれ、落ち着きのない行動が増えている。
「そういや、親父さん。神官だったって言ってたな」
「ああ」
「過去形ってことは、やっぱりあれか？」
「ああ、亡くなった」
「他は？」
「他？」
「おふくろさんや、兄弟、とかよ」
「それもみんな」
「そうか」
「だから、気にしなくていい」
「うん？」
「もしもN・Sのことでひと悶着あったとしても、面倒をかける人はいない」
アレサンドロはなにか言いたげに口を開いたが、
「お見通しか。可愛くねえな」
結局は、ばつが悪そうに首をかいたのだった。
「ハハ」
「ハ、ハ」

ふたりは笑い、笑いながら顔を上げた。
アレサンドロが、細く、長く、息をはき出した。

それは全高にして、およそ十五メートル。
右に、黒曜石のごとき艶を持ち、背には翼、腰には長く尾羽を垂らした、黒紫のＮ・Ｓ、カラス。
左に、研ぎ上がったばかりの刃のように輝き、ふわりとした尾も美しい、白銀のＮ・Ｓ、オオカミ。
顔こそ機械じみているが、その生物的な美しさは、誰の目をも釘づけにするに違いない。
互いの剣が、互いの胸部を深々と貫き通すその様も、裏に隠された殺意をかけらも感じさせない、ある種荘厳な神聖画を思わせた。
「なんだ……」
アレサンドロの口から、つぶやきがもれた。
「俺はこいつを目の前にしたら、もっと取り乱しちまうと思ってた……。案外、平気なもんだな」
そう眉を寄せ、薄情だよな、と、寂しく笑うその肩を、ユウは静かにさする。
「十五年だ……十五年」
「……ああ」
「でもよ……今でも……」
と、唇を噛み、言葉を呑みこんだアレサンドロは、両の手のひらで、自分の顔を張った。
ぱぁん、ぱぁんと、音が響いた。
「いや、なんでもねえ。女々しいだけだ。……よし、ちょっと見てくる」
「大丈夫か」
「ああ、こいつも、早く楽にしてやらねえとな」
言うが早いかアレサンドロは、前かがみで低くなったカラスのふくらはぎにひょいと飛び移り、サルを思わせる身軽さで、左翼まで

這い上がっていった。
「よっ……」
腰のホルダーから光石灯を外し、ぶら下がるように傷口をのぞきこむと、
「……頚椎、胸椎……修復は進んでる……光炉は軽症ってことか……」
「どうだ？」
「意外に悪くねえな。手伝ってくれ」
「ああ」
視線もくれずに手招きするアレサンドロに応え、ユウも同じ手順で、カラスをよじ上った。
しかし、これがなかなかの重労働である。
線が細く、丸みを帯びたカラスの身体は、滑りやすい上に安定感も悪い。
装甲の隙間を探り探り、カラスの左肩にたどり着いた頃には、額からは、かなりの汗が吹き出ていた。
「大丈夫か？」
アレサンドロが、くすりと笑う。
「問題ない」
ユウは額をぬぐった。
「前に回れるか？」
「ああ」
「喉の下だ」
三十センチ角程度のプレートが見える。
「ナイフでこじ開けろ。問題ねえ、多少傷ついてもすぐ治る」
「わかった」
ユウはカラスの胸部装甲へ飛び移った。
短剣を抜き、窪んだプレートの溝に押し当てる。
と……、
「……ッ！」

ユウの視界が、突如、暗転した。

トレース

硬い。
身体中が硬い。重い。
『う……う』
ユウはうめいた。

「……ユウ」

アレサンドロの声がする。額をつつくのは彼か……。
「おい、ユウ！」
『……ッ！』
ユウは鋭く息を吸い、覚醒した。
すぐ鼻先に、血相を変えたアレサンドロが、へばりついている。
……へばりついている？
ユウは目を見張った。
人並みなオオカミの背中。
それを貫く刃も薄く、アレサンドロに至っては、まるで人形のようだ。
なんとＮ・Ｓカラスの目を通し、景色を見ていたのである。
「それが、Ｎ・Ｓに乗る、ってことだぜ」
アレサンドロはユウが無事らしいと知るや、大きく息をはき、オオカミの肩へと飛び移った。
そこからは丁度、カラスの顔を真正面に見ることができる。
「めまい、なんかはねえか？」
『ああ』
「なら横向いてみな。Ｎ・Ｓは、乗り手の動きが、そのまま伝わるようにできてる」
アレサンドロの言う通り、ぎりぎりと筋肉がきしみ、視界が変わ

った。
「な？」
『ああ』
「帝国のもどきと違って、面倒な操作はいらねえが、神経がつながってる分、傷つきゃ痛え」
『いや……痛くはない。なにかが、胸に詰まってるぐらいの感じだ』
「ああ、ツイてるぜ。お前は乗ったばかりで、つながりがまだ鈍い。おまけにこいつも、脊椎がちょいと傷ついてやがる」
『……』
要するに、ツイていなければ、今頃激痛でショック死、ということともあったということか。
アレサンドロが心配するはずである。

「で、だ。どうする？本当は俺がやるつもりだったが……、そのままひとつ、働いてくれるか？」
はっきりとうなずいたユウの動きも、カラスへと正確にトレースされた。
なるほど簡単だ。ユウは思った。
「首から上は問題ねえな。指はどうだ？」
『ん……動きそうだ』
少し硬く、痺れてもいるが、指先一本一本の感覚は伝わってくる。
「よし。とりあえず、二体を離すぜ」
ユウはアレサンドロの指示を受けながら、硬直するカラスの指を、オオカミの指を、剣の柄からゆっくりと引き剥がしていった。

そうして、どれほどの時間が経っただろうか。
ぐらり、オオカミが揺れた。
『！』
前のめりになるその腕を、ユウはとっさにつかみかける。
「構うな！お前は踏ん張ってろ！」

どっと、水しぶきを上げ、オオカミの巨体が倒れた。
「オオカミは後だ。お前はお前のことだけ考えてりゃいい」
アレサンドロはカラスの肩に、間一髪、飛び退いていた。
「さて、次が大仕事だぜ」
『ああ』
ユウは胸に突き立ったままの剣の柄を握り、呼吸を整え、引いた。

ずるり。

『う……』

ずるり、ずるり。

厚い板が、肉を通っていく。
感覚はあるのに痛みがない。それが逆に、気味が悪い。
『ッ……』
吐き気がこみ上げたが、ユウはそれを呑みこみ、残りを一息に引き抜いた。
倒れかかる身体を必死で持ち直し、剣を支えにひざをつくと、
『はあ……は……』
抑えていた息が、一気にあふれた。
「大丈夫か？」
『……あ、あ』
アレサンドロも転げ落ちたが、上手く受身を取ったようだ。
「痛みは」
『ない』
ユウは胸を押さえ、立ち上がりにかかった。
まだ、オオカミが残っているのだ。
「無理すんな。こっちは俺がやる」
『でも……』

「でも、じゃねえ！」
有無を言わせぬアレサンドロの迫力に、ユウは二の句が継げなかった。
ユウの何倍もＮ・Ｓに通じている、アレサンドロが言うのだ。
『……すまない』
アレサンドロは、かぶりを振った。
「謝ることかよ。よくやってくれたぜ。さ、早く降りて休め」
『……』
「どうした？」
『降り方が、わからない』
そもそもどうやって乗ったかさえも、記憶にないのである。
ああ、そうだよな、と、アレサンドロは首をかいた。
「まあ、そう難しいことじゃねえ。要はイメージだ」
『イメージ……？』
「Ｎ・Ｓから降りる自分をイメージする。いや、出る……脱ぐ……ってのが近いか」
……漠然としている。
ユウは首をひねった。

が、次の瞬間。

「う、わっ！」
突然身体が軽くなり、ユウは空中へと放り出されていた。
なにをどうされた、ということではない。まるで空間を飛び越えたような。
しかしそれを深く考える暇もなく、ユウは頭から湖へと落ちこんでしまった。
「ぶ、は！」
「ハ、ハハ！」
「アレ、サンドロ……」

「プ、フ、フ。そんな顔すんな。筋はいいぜ。そのうち上手く乗り降りできるようになるさ」

アレサンドロは再び、腹をかかえて大笑いした。

天井が抜け落ちているとはいえ、谷底には日差しが少ない。
アレサンドロはユウに光石灯を持たせ、オオカミの傷口に向かい合った。
「見ろよ」
小型ナイフを開き、むき出しの筋肉を軽く突くと、桃色の繊維はその柔軟な弾力で刃先を押し返す。
「すごいな。これが、人工なのか」
「ああ。帝国の奴は完全に機械だが、こいつは違う。魔人が作った、もうひとつの身体だ」
アレサンドロは湖で回収した包みから、五センチほどもある針と、太い糸を取り出した。
「光炉は心臓。乗り手は脳みそ。こうして筋肉もありゃあ、骨も腱もある。自力で傷を治す力だってな。人間と同じだ」
すでに背骨は破片が集められ、元の形に固定してある。
そこに、革を巻いた指の腹を使い、アレサンドロが針を突き通した。

ひと針、ひと針。それこそ全身を使っての縫合が進む。
「上手いな」
ユウは感心しきりに言った。
「医者みたいだ」
器具や傷口の大きさに差はあれ、糸の断ち方、結び方はまさにそれだ。
手ぎわもいい。
「そう言ってもらえんのは嬉しいがな……」
アレサンドロは苦笑し、首を振った。
「こいつの整備を一年もやってりゃ、誰だってこのぐらいはできる

ようになる。こっちに関しちゃ、俺は……まだまだだ」
最後の糸を結び切り、アレサンドロはオオカミの装甲板を、元通り覆いかぶせた。
「さ、次に行こうぜ」
あとはN・Sの自然治癒力まかせなのだという。

そして実際、二体の傷口は三日でふさがった。
人間にすれば尋常ではない、驚異的な回復能力である。
「光炉が無事だったのは大きかったな」
アレサンドロは糸を抜く手も軽やかに、言った。
「供養するつもりで治してやるってのも、ちょいと複雑だがよ、もう少し、頑張ってもらわなけりゃならねえからな」

ふたりはこの三日間、二体のN・Sをどこへ葬るかを話し合った。
帝国に侵されず、文明からも切り離された場所。
極力人目につかずに、たどり着くことができる場所。
選ばれたのは、西海の秘境アルケイディア群島だった。
ただし、その群島、実は地図にも名が載っていない。
七つの海を渡り歩いたと自称する魔人マンタが、砦の子供たちに語り聞かせた寝物語。
そこに登場した夢の楽園である。
極彩色の花々。ずっしりと果汁を含んだ果実。輝く珊瑚礁。青い海。透き通る空。
子供たちのみならず、山育ちの魔人たちも皆、美しいアルケイディアに思いをはせ、いつかきっとと語り合ったという。
無論それだけでは眉唾ものだが、アレサンドロが言うには、海を渡ることのできた魔人たちの間では、それと知られた場所であったらしい。
そしてもし仮に、そこが夢幻の桃源郷だったとしても、西海には『竜の喉』と異名をとるパーシバル大海溝が走っている。

いざとなれば帝国の手の及ばぬ深海に、Ｎ・Ｓを眠らせてやることもできるだろう。
ユウにも、これ以上の場所はないように思えた。
「どのくらいかかるかわからねえが、どんな回り道をしても必ず連れていく。必ずな。……でもよ、いいか、ユウ」
「？」
「もし……」

ロロロロロ……。

「！」
その、明らかに異質な駆動音に、ふたりは身体をこわばらせた。
「しっ……」
アレサンドロは指を立て、口を開きかけたユウを制する。
音は上空を旋回しているようだ。
「間違いねえ、鉄機兵団の、Ｌ・Ｊ《リヒト・イエーガー》だ……」

Ｎ・Ｓを元に開発された対兵器Ｌ・Ｊは、コクピット式の操縦方法を採用し、近頃では傭兵や土木作業員、中には格闘賭博用などにも広く普及している。
しかし、空を飛ぶほどの性能ともなると、そうした民間機ではありえないのだ。
「通り過ぎてくれるといいな」
「ああ。それにしても……」
アレサンドロは鋭く舌打ちした。
「嫌なタイミングだな」
今ここで戦闘になれば、当然、ふたりは出ていかざるを得なくなる。
日中だけは避けたかった。
「とはいえ、黙って見てるってわけにもいかねえ、か……。とりあ

えず、いつでも動けるようにしておこうぜ」
ふたりは手早く身支度を整え、ユウはカラスに、アレサンドロはオオカミに隠れ、息をひそめた。
そのうちに、
『おい、ここじゃないか？』
『む、間違いない』
『よし、降下する。アルノー隊、続け』
声が聞こえ、アレサンドロが歯噛みする。
「クソッ、目当てはここか」
「アレサンドロ」
「わかってる」
小声でやり取りしたふたりの身体が光球となり、Ｎ・Ｓに吸いこまれた。
同時に、天井の穴より姿を現したのは、帝国三〇三式Ｌ・Ｊ。虫羽に見える飛行翼（フラップブレード）を装備した、下位騎士用機である。

『見ろ！Ｎ・Ｓだ！』
嬉々とした声が響いたが、ユウとアレサンドロは微動だにしなかった。
『機兵長に報告！発見せり！』
『了解！』
Ｌ・Ｊは、二体の背後に着水した。
『これがＮ・Ｓ……初めて見るな』
『おお、俺もだ……』
ひざまずいたカラスの肩に、手がかかる。
まさにそのとき。
ユウの身体が動いた。
『あっ！』
振り向きざまに刃を抜き払い、Ｌ・Ｊ一体の腰を、音もなく切り

裂く。
滑るように胴が落ち、小さな爆発と共に水蒸気が吹き上がった。
『こいつ、動くぞ！』
思わぬ奇襲に、帝国騎士は完全に浮き足立った。
『本隊に連絡を……うわぁっ！』
『ああ……ッ！』
勝負は、一瞬で決まった。

『やるな』
華麗な動作で剣を鞘に収め、オオカミを操るアレサンドロが言った。
ユウは驚きを隠せない。
短剣程度しか扱ったことのない自分が、これほどの長剣を、それも体勢を一切崩されることなく振るうことができる。反応速度も上がっている。
まるで、強靭な筋肉と鋭敏な神経を、全身に移植されたかのように。
これがＮ・Ｓ。
ユウは胸の内で、うなった。

『時間がねえ。いいか、ここからは別行動だ。互いが、奴らを引きつけながら逃げる。デローシスの中央図書館、歴史書のコーナー。先に着いた方がそこで待つ』
『わかった』
『待て、あとひとつ』
『ん？』
『ヤバイと思ったら、迷わずＮ・Ｓを捨てて逃げろ』
『ッ！……どうして！』
『奪われたら奪い返してやりゃあいい。だが俺たちは、捕まりゃおしまいだ』

ユウの腕を握るオオカミの手に、力がこもった。
『いいか、ユウ。信じるも信じねえもねえ。お前にカラスを預ける。だが、そのためにお前を死なせるのもごめんだ』
『アレサンドロ……』
『頼むから、無茶はしてくれるな。いいな?』
『……わかった。あんたも』
『ああ、生きてまた、会おうぜ!』
オオカミの拳が、ドーム外壁を打ち抜いた。

メイサの縁（1）

アレサンドロは無事に逃げられただろうか。
朦朧とする意識の片隅で、ユウは思った。
あれから一昼夜を走り続け、今ようやくに、陽が昇ろうとしている。
八体のL・Jを斬ったカラスだが、自身もまた、脇腹に深い傷を負っていた。

本来ならば、ここでN・Sを降り、修復を待つべきなのだろう。
しかし、ユウにはできなかった。
立ち止まることさえ、はばかられた。
恐ろしかったのだ。
鉄機兵団は、すぐそこまで迫っているかもしれない。
もし、修復の途中で追いつかれでもしたら。もし、うっかり、眠ってしまったら……。

冗談ではなかった。
それではアレサンドロに申し訳が立たない。情けない。
アレサンドロにはああ言ったが、もとよりカラスを置いて逃げることなどできるユウではないのだ。
『ッ……！』
脇腹の激痛と疲労は、容赦なく、ユウを苦しめる。
デローシスへ行く。その使命感だけが今、足を進ませていた。

『……？』
ふと、かすかな旋律が、ユウの耳をかすめた。
幻聴だろうか。
周囲を見回すが、そこにあるのは木々ばかりだ。

……豊かなれ……。

『！』

永遠なる母……。

違う。

『伸びよ……我、さきわいの地に……』

ユウは歌にあわせて口ずさむ。

そうだ。間違えるはずもない。

この響きは……、

『メイサの、神歌』

神官であった父が、朝な夕な祭壇に捧げていた、あの歌。

ユウの足が我知らず、歌の方角へ向いた。

そして……、

「きゃあ！」

『あ……』

気づいたときには、もう遅い。

あれほど警戒心もあらわだったものが、それこそなんの考えもなしに、天幕を張る一団の中へ、フラフラと進み出てしまっていたのである。

四、五十人からなるその集団は、蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

叫ぶ者。灯明台につまづき、ひっくり返る者。ほうほうの態で天幕へ転がりこむ者。

その様子を、ひとつの天幕から歩み出た長身の老人がぐるり眺め、

「なんと……」

眉をしかめた。

ハクトウワシを思わせる、その眼光と威厳は、ただの年寄りのものではない。

「皆を鎮めよ。神兵はなにをしておる」

老人は、かたわらでオロオロと目を泳がせている随身官に尋ねた。

「は、は、皆……」

「それどころではない？」

「は、申し訳もなく……」

老人は舌打ちした。

「大祭主様も、どうか天幕へお戻りを、お戻りを……」

袂をつかみ、今にも泣き出さんばかりの随身官を、しかし、老人は静かに叱りつけた。

「たわけ。ならば、わしが動かねばなるまいが」

「あっ、な、なりません！大祭主様！猊下！お戻りを！」

まったく臆する様子もなくＮ・Ｓカラスへ向かう大祭主を、随身官はしばし身を揉んで見つめていたが、覚悟を決めたか、その後を追った。

当のユウは、驚きと混乱で、ただただ立ちすくむばかりだった。

どうにかしなければならないのはわかっている。が、どうすればいいのかわからない。

逃げるべきか？黙らせるべきか？

どちらも正しいとは思えなかった。

「これ」

天幕のひとつが燃え上がる。

「これ」

『あ……』

そこでようやく、ユウは足元の人影に気づいた。

白く、豊かな頭髪と髭を蓄えた、老人。

なんといっても神官の息子である。旅装ではあるが、それが位の高い人物であることはひと目で見て取れた。

「そなた、魔人か？」
大祭主の声は、喧騒の中でもよく通った。
『いや……』
「では、その巨人、Ｎ・Ｓではない？」
『いや……』
ユウは困った。魔人ではないが、Ｎ・Ｓである。
大祭主も首をかしげた。
「ふむ、とにかくも、いたずらに人心を騒がすものではない。用があるならば降りるがよい」
『……いや……』
「いつまでもそれでは話にならぬぞ、魔人よ」
さすがにこれではいけない。ユウは思った。
『俺は、魔人じゃない。あなたたちにも用はない』
「なんと？」
『迷惑をかけたことは謝る。悪気はなかった』
「む」
息を詰め、頭を下げるカラスの脇腹が深々と切り裂かれているのを、このとき初めて、大祭主の目がとらえた。
そしてすべてを看破した。
「……戦屋め。まだ足りぬと言うか……」
忌々しげに唇を噛み、
「若者よ！」
立ち去りかけたユウを、呼び止める。
「どこへ行くかはきくまい。だがその近程まで、我らが送り届けよう」
『え……？』

メイサの縁（2）

「な、なにを仰いますか！Ｎ・Ｓなど、鉄機兵団に見つかればなんとなりましょう！」

それまで、押し黙ってやり取りをみていた随身官が、大祭主に取りすがった。

「お考え直しを……！あれは……魔物にございます！」

「なればよ」

大祭主は随身官の額を、ぺちんと叩いた。

「なればこそ、奴らに渡すわけにはゆくまい。どうかな？」

『でも……』

「荷車も貸そう」

確かに、護衛用Ｌ・Ｊの載せられたカーゴが、広場の奥に数台見える。

Ｎ・Ｓが現れたというのに、誰ひとり、起動させた者はいなかったようだ。

「あれは歩かせればよい」

どうやらこの老人はＬ・Ｊが好きではないらしい。

ユウは、正直迷った。

神官を疑う心などない。むしろこれは神の助けとも思える。

しかし、だからこそ、迷惑もかけたくはない。

従者らしい男が言う通り、鉄機兵団に見つかればどうなるか、である。

言葉を探す、そのユウの姿に、老人は目を細めた。

「若者よ、名は？」

『……ヒュー・カウフマン』

「よろしい。わしは、カジャディール」

『カッ……！』

心臓に杭打たれたかのような衝撃だった。
それまでの葛藤など忘れ、ユウはＮ・Ｓを飛び降りると、両ひざを折り、老人の前にひれ伏した。
カジャディールこそ帝国圏メイサ神殿の最高位に座する、祭主の中の祭主。
並の者ならば、声を聞くどころか、姿を見ることさえ到底叶わぬ、まさに雲の上の存在なのである。
「お許しください。大祭主様とは知らず……ご無礼を」
ユウは声を絞り出し、土を固く握りしめ、わなないた。
「よい。しかしこれでわかろうよ。帝国騎士とてなにするものぞ」
「は……」
「そなた、察するにメイサの子であろう」
「はい」
「ならば尚のこと、この年寄りを頼るがよい」
カジャディール大祭主は随身官の止めるのも聞かず、片ひざをつき、土に汚れたユウの手を取り上げた。
「これも、お導きよ」
「大祭主様……！」
ユウはあまりの恐れ多さに声を詰まらせ、面を伏せた。
随身官は、まだなにか言いたげに、口をパクつかせている。

デローシス近郊に到着した朝、ユウはこの数日の温情に、深々と頭を垂れた。
実際それは下にも置かぬもてなしぶりで、移動は大祭主と同じ車。夜になれば見張りをつけられることもなく、貴重な神書を読むことも、Ｎ・Ｓの様子を見にいくことも自由にできた。
説教なども、大祭主自ら招いてくれたほどである。
これほどの扱いを受けたのは、ひとえに大祭主自身がユウを憎か

らず思っていたからに他ならない。
「行くか」
見送る声にも、自然と暖かいものがあふれている。
「ご恩は忘れません」
「なに、これも縁。わしこそ、この出会いに感謝しておるよ、カウフマン」
「勿体無い、お言葉です」
うなずいた大祭主は、あの口やかましい随身官ヌッツォを呼び寄せた。
天幕からよろよろと現れたヌッツォは、なにか、重そうなものをかかえていた。
「手向けじゃ、受け取れ」
と、恐縮するユウに、なかば無理やり押しつけられたそれは、剣であった。
「倦まずたゆまず鍛錬に励む姿、まこと我が神兵にも見習わせたいものよ」
「あ……」
見られていた。
うつむいたユウを、大祭主はにやり、笑った。
そして、
「これはかつて、わしが腰にあったもの」
大祭主はユウの手から、剣を抜き払った。
それは、反りも美しい片刃の長剣で、刃文の浮く刃は朝日を浴び、凛と冴えた光を放っている。
「多少くたびれておるが、騎士のなまくらに劣るものではない。幸いあれにも……」
と、仰ぎ見る先には、Ｎ・Ｓカラスの太刀。
「よう似ておる」
大祭主は、刃を鞘に収めた。
「さ、受け取れ。わしにはもはや、無用の長物よ」

「は……」
ユウは身の引き締まる思いで、押しいただいた。
「なによりのものです、大祭主様……」
胸の奥底が熱くなり、声が震えた。
「では……これで」
「うむ。メイサの加護があらんことを」

「よい若者でしたなあ」
走り去るカラスの後ろ姿を見送り、ヌッツォがため息をもらした。
真摯なユウの態度に、こちらも感じ入るところがあったようだ。
「若い割に欲がなく、学も深い。父御はメイサの神官であったと聞き及びましたが、さぞや立派な人物であられたのでしょうな」
「ふむ」
「それにしても、鉄機兵団に見つかりませんで本当によろしゅうございました。もう、一時はどうなりますことかと……」
手をこすり合わせ、うきうきと言うヌッツォに、大祭主は、
「たわけ。奴らには、とうの昔に知れておるわ」
「は？いや、まさか……ではなぜ、その、野放しに？」
「わからぬか？」
「は……」
「たわけ」
勃然と言い放ち、天幕へときびすを返した。

メイサよ。我らが母。
いかなる試練もその慈悲深き故。
ただ、別して願わくば、
御子の旅路が行く末に、最良の実を結ばんことを。

つぶやくほどの祈りは、大地に溶けて消えた。

再会と難題

表通りを歩むユウの姿を見ても、誰ひとり気に留める者はいなかった。
何故ならば、デローシスは交通の要地である。
帝都へ向かう者。鉱山帯、樹林帯へ向かう者。
商人。旅人。大道芸人。出稼ぎ労働者。騎士。傭兵くずれのならず者。
東西の街道を行く者ならば、誰もがデローシスを訪れる。
見慣れぬ者がひとり増えたところで、さして問題にもならないのだ。
無論、挙動不審では話にならない。
ユウはつとめて、平然と歩いた。

さて、ユウは一体、どこへＮ・Ｓを隠してきたのか。
なんと、街をぐるりと取り囲む防壁の、門隣に設けられた駐機場である。
ユウはそこに、『改造Ｌ・Ｊ』のふりをして泊めてきたのだ。
値段は張るが、汎用Ｌ・Ｊを自分好みにカスタマイズし乗り歩く傭兵や若者は、最近特に増えているという。
実際ユウが利用した駐機場にも、これでもかと派手にペイントされたものや、騎士の鎧を模した甲冑をまとったもの。とにかくカラスが霞んでしまうほどの面々がそろっていた。
そしてさらに好都合なことに、そうした改造Ｌ・Ｊの乗り手は、手塩にかけた愛機を、むやみに触られることを毛嫌いするきらいがあるのである。
管理の男もそれは心得たもので、いくらか大目に金をつかませ、近づくなとユウが言ったときには、
「わかってますよ」

などと愛想よく言って寄こしたのだった。

もちろん、危険な賭けではある。
見るものが見れば、たちどころにそれと知れてしまうだろう。
だが、東部乾燥帯に近く、荒涼としたデローシス周辺地域には、隠し場所となる場所が少ない。
下手な工作をするよりは、という苦肉の策である。
それが、開門直後のことだった。
市街中心部までは、そこから乗合馬車で小一時間。
ユウは昼前に、デローシス中央図書館へ到着した。

貴族の屋敷跡を改装したという建物は、門構えからしてとにかく豪奢であった。
しかし、生憎と、建物の見てくれにも、いつか心まかせに堪能したいと思っていた帝国一の蔵書にも、今は目を配るだけの余裕はない。
ユウは案内板を見ながら、広大な敷地内を足早に移動した。
外周回廊を右に折れ、左に折れ、何気なく目をやった庭園の腰掛けに、
「アレサンドロ……！」
その後ろ姿を見つけたときは、さすがに、一気に気が抜けた。

アレサンドロは晴天に視線を泳がせ、落ち着きなく、背もたれに拍子を打っている。
ユウはいたずら心に足音を忍ばせ、背後に近づき、
「歴史書のコーナーじゃなかったか？」
言った。
指がぴたりと止まり、アレサンドロが転がるように振り向いた。
「ユウ……おい、ユウ！」
「アレサンドロ！」

ふたりは、固く抱き合った。
「よかった」
「ああ、よかった」
「三日待ったぜ」
「早いな」
「おかげで、歴史書は読み尽くしちまった」
「ふ」
「ハ、ハ」
そして再び、互いの無事を強く喜び合ったのだった。

セミが騒々しく鳴きたてる中、噴水の片隅ではスズメたちがたわむれ、水しぶきを上げている。
腰掛けには熱いほど、熱がこもっていた。
「神のご加護、ってやつか」
カジャディール大祭主から譲り受けた太刀を前に、アレサンドロは笑った。
「寄進甲斐があったじゃねえか」
「馬鹿言うな」
「ハ、冗談さ。どうやら、金を積んで手に入るような代物でもなさそうだしな」
アレサンドロは鞘を十センチほどずらし、中の刀身をしげしげ眺めた。
「エド・ジャハンの連中が使ってる剣だな。なるほど、こいつなら鉄兜だって切れそうだ」
L・Jも切れるかも、などと冗談を言う。
「それにしても、俺もどうかしてたな」
「なにが」
「よりによって、こんな街を選んじまうとはよ。もっと人目につかねえ場所はいくらでもあるだろ」
「それは、俺も思った」

「なら言えよ」
「そんな暇はなかっただろ」
「そりゃあ、な」
「まあ、お互い無事でよかったってことで、よしとしよう」
ユウが、にやりと笑って見せると、アレサンドロは目を丸くし、
「……ハ、ハハ、そうか。ああ、よしとしよう。よしとしようぜ」
ユウの頭を、くしゃくしゃになでた。
雲ひとつない青空へ、スズメたちが飛び立っていった。

「で、だ。実は……ちょいと気になる噂を耳に挟んでな」
「噂……？」
「ここから南に出城があるだろ。俺たちの砦を攻めるときに鉄機兵団が造ったもんで、今までずっと放りっぱなしだと思ってたんだが……、どうも二、三年前から、Ｌ・Ｊの研究開発みてえなことをやってるらしい」
「初耳だな」
「ああ、俺もだ。正直勝手にやってくれってとこだが、今まで三体、Ｎ・Ｓが運びこまれてるって話でよ。それが、な」
確かに聞き捨てならない話だった。
「どうするんだ？」
「さあ、どうしたもんかな。お前、どう思う」
ユウはしばし沈黙し、
「……リスクが、大きすぎる」
結論を出した。

三体というのが気にかかった。
二体までなら運び出せるかもしれない。
いや、話は帝国の施設である。それだけでもかなりの計画と運が必要となるだろう。
それを三体。

しかもその後、計五体のN・Sを守り通せるかを考えると、首をひねらざるを得ない。

「だよな」

アレサンドロは観念したように、背もたれにのけぞった。

「大体、まともに動く状態かもわからねえんだ。どう転ぼうが、結局は命を捨てるか、N・Sを捨てるかの二択になる。下手すりゃ……」

命とN・S、両方を失う。

「やっぱ、諦めるしかねえ、か」

ユウには言葉もなかった。

「いや、それでいい。とりあえずはカラスとオオカミだ。今は仕方ねえさ」

そう、今は仕方がない。

ならばせめて、

「奴らに利用されないようにするぐらいは、できないのか？」

「！」

アレサンドロは、ユウを見た。

「そうか……そうだな。それぐらいなら、なんとかなるかもしれねえ」

何度もうなずく。

「でかしたぜ、ユウ！そうだ、よし、それでいこう！奴らの鼻を明かしてやろうぜ！」

声

空の弓張り月を眺め、ララ・シュトラウスは不機嫌だった。
今日こそは熱い湯につかり、柔らかいベッドで寝られると思っていたのだ。
「それがなんで仕事？」
上からの命令は研究施設及びサンプルの警護。
魔人砦に現れたという、新たなＮ・Ｓを警戒してのようだった。
だがララにとってはそんなことよりも、奪われてしまった自分の楽しみの方がはるかに重要だったのだ。
ララはイライラとした手つきで腰のポーチをかきまわすと、キャンディ・バーを一本、無作為に選び取った。
赤いラベルは、お気に入りのイチゴ味。
「フン」
まんざらでもない風に包装を剥がし、口にくわえた。
「あーあ。ホント、ついてなぁい」
言った声は、どこか楽しげだった。

それと同じ南デローシス城塞内で今、ユウとアレサンドロは耳をそば立たせている。
城塞といっても元はただの出城。
補給庫とＬ・Ｊの整備施設だけを備えた簡易的なものだと、少なくともユウは思っていた。
それがどうだろう。
大格納庫を三棟かかえる巨大軍事基地が、ここにはあった。
このどこかにＮ・Ｓがいる。
「間違いねえな」
スモックを羽織った技術者らしい男たちの立ち話を盗み聞き、ふたりは目顔にうなずいた。

「では、これで」
技術者たちが二手に分かれた。
アレサンドロは、左に折れた男を追う、と手振りで示す。
それは、頭に白いものがまじった年配の男で、片手に荷物をかかえ持った姿といい、いかにもまだ仕事を続ける様子であったのだ。
珍しい電気式の照明に照らされた、幅広い石積みの通路を、男は足早に、わき目も振らず進んでいく。
そうして、十分ほど歩いただろうか。
男は四つ角を右に折れ、突き当たりの大扉をくぐり、消えた。
表札はない。
「さて、どんぴしゃであってくれよ」
アレサンドロは、引き戸を細目に開け、中をのぞき見た。
「……チッ」
「どうした？」
「ハズレだ」

ふたりは薄暗い部屋、いや、倉庫に足を踏み入れた。
天井は高く、二階吹き抜けになっている。
大小様々な空のケージが、それも何百と並んでいた。
「あそこから上がっていっちまった。まだ奥があるみてえだな」
アレサンドロがあごで示した先には、なるほど、上階へ伸びる階段と通路がある。
「追うか？」
「そうだな」
ふたりは足を踏み出した。
と、そこへ、
「その前に、扉を閉めてください」
突如、低い、男の声がしたのである。
「！」

驚いたふたりが振り向き、開いたままの扉を確認するも人影はない。
ユウは通路にも顔を出してみたが同様である。そのままそっと戸を閉めた。
「どうも」
再び、どこからともなく、声が言った。
「余計な騒ぎは、ごめんですので」
「誰だ」
「誰というほどのことはありません。気にせず、先へどうぞ」
声は別段感情もなく、淡々としている。
「はいそうですか、ってなわけにはいかねえだろ」
「ホウ。何故です。騎士を呼ぶような真似はしません。私はなにも見なかった。なにも聞かなかった」
「それを信用しろってのか？」
「はい」
アレサンドロはひとつ、大げさにため息をついた。
「どうも面倒なことになっちまったな」
「同感です」
「とりあえず、顔を見せねえか？」
「それは、残念ながら……」
「理由は」
「さ、身体的なものとでも言いましょうか。どうしてもと言うなら、そちらからどうぞ。五一二号ケージです」
「ケージ……？」
ユウとアレサンドロは顔を見合わせ、ホルダーから光石灯を外した。
五〇九、五一〇……。
頭文字「五」は、二メートル四方はある、かなりの大型ケージに割り振られているようだった。

中はやはり、どれも空である。
ただ、五一二だけは違った。
そこにいたのは白く、丸々とした……、
「鳥……？」
「灯りは消してください。光は苦手です」
首が百八十度ぐるりと回り、正面を向いた。
体高五十センチはあろうかというそのフクロウは、目をしばたたかせ、開いた口がふさがらない様子のふたりに、
「気持ちはわかります」
事も無げに言ったのだった。

話を聞いてみると、北部森林帯の生まれだというフクロウは、もう四年近くも、この場所にいるのだという。

当時、この施設では、Ｌ・Ｊの開発ともうひとつ、別の研究がおこなわれていた。

それが、人造魔人計画。

「文字通り、人工的に魔人を誕生させる計画です」

フクロウの薄く閉じられた目が、針のように光った。

「最終的な目標は、みっつ。五感の強化。知能レベルの向上。そして……」

「不老不死」

アレサンドロの言葉を受け、フクロウは小さく、うなずいた。

「皇帝家、貴族、富裕層。いわゆる特権階級のための計画だったのでしょう。しかし結局は、魔人の謎を深めるばかり。唯一の成功例である私とて、せいぜい言語を獲得しただけにすぎません」

「計画は消えたのか」

「さ、どうでしょう。私を生かしているところを見ると、まだ未練はあるのかもしれません。軍部が反対しているという噂もあります」

「どっちにしても、いい迷惑だな」

「まったく」

フクロウは、どのような質問に対しても、すべてよどみなく答えた。

で、ありながら、ユウたちの名や身上に関しては一切問おうとしない。

単に興味を持たないだけかもしれないが、その態度は実に信頼できる相手として、ふたりの目に映った。

飾らない、その純朴な気質もいっそ好ましく思える。
そこでユウとアレサンドロは、今までのいきさつを手短に語って聞かせ、
「なにか知らないか？」
尋ねてみたのだった。
返答は、すぐに帰ってきた。
「それならば道が違います。今来た扉を出て、四つ角を右へ……」
道順がつらつらと並べ立てられる。
「随分と詳しいな。ずっと鳥カゴ暮らしじゃねえのか？」
「さ。長くひとつところにいれば、つまらないことに通じるものです」
アレサンドロは、へえ、とあごをかいた。
「だが、悪ぃがこっちは、お前さんのようにそう賢くはねえんだ。今のを全部覚えていけってのは無理がある。ああ、とても行けたもんじゃねえ。道案内でもいねえことにはな。なあ、ユウ」
視線がかち合い、ユウはすぐに、その言葉の意味を理解した。
「ああ、ああ、そうだ。だから案内に立ってくれ。一緒に行こう」
すると、それまで眠るようだったフクロウが、カッと目を見開き、
「ホ。なるほどそれは……悪くない、提案です」
と、声を上げたかと思うと、
「外へ出るなど、考えたこともありませんでした。長くひとつところにいれば、つまらないことに囚われもする、ということですか……」
みるみる小さくなってしまったのだった。

「よし、決まりだな。鍵は？」
「やってみる」
ユウは大ぶりな錠前に、鉤手のついた用意の針金を差しこんだ。
錠前外しはユウの得意分野である。
ものの数秒で、錠は難なく外れた。

「まさか、このような日が来ようとは」
すっかり気をよくしたフクロウは、ひょこひょこ身体を揺らしながら、歩いて檻を出た。
それは単に、扉が狭く、飛ぶことができなかったためだったが、その愛らしい仕草には、思わずふたりとも笑ってしまった。
「外、ああ、外」
フクロウの声には、隠しきれない興奮の色が浮き出ている。
「あなた方には、なんと礼を言ったらいいか……」
「なあに、気にすんな。帝国のやり口が気に入らねえだけだ」
「恐れ入ります」
「俺はアレサンドロ。こいつはユウ。お前は？」
「残念ですが、名はありません。ここではただの、五一二号です」
「そうか……」
ユウは何気なく、フクロウの頭に手を乗せた。
「あ……」
「どうした？」
「……柔らかい」
「お前なあ、なに言って……」
アレサンドロも乗せる。
「あ……」
「な？」
「……こいつは、ヤバイな」
特に首周りや腹は、指を離すのが惜しまれるほどだ。
フクロウはされるがまま、むしろうっとりと、なでられるのを楽しんでいるようである。
「白くて、丸くて、柔らかい……」
フクロウの名は、『モチ』に決まった。

「あれです」
先陣を切って飛んでいたモチが、屋根の縁に、音もなく着地した。

三人は今、屋外に出ている。
N・Sには当然警備がついており、目を避けるには格納庫の換気口から近づくのがよい、とモチが提案したのを受けてのことだった。
換気口は直径にして一メートル弱。昼間は採光の役割も果たしている横穴で、これには連結している研究棟の屋上から、渡り廊下の屋根を経て、乗り移ることができる。
こうした情報を、モチはどうも、この城塞に住み暮らす野バトたちから得ているらしかった。
彼いわく、
「のんびり屋ですが、気のいい連中です」
だそうである。

さて、その横穴から中をのぞくと、確かにN・Sの後姿がそこにあった。
金属製の足場が穴の真下にまで続いている。
ユウとアレサンドロは警備の目をうかがいながらロープを下ろし、三メートルほどの高さを滑り降りた。
「騎士は？」
「六名です」
遠目も夜目も利くモチが答えた。
「意外に少ないな」
「だが、好都合だ」
アレサンドロは背を向けるひとりの騎士に、スルスルと忍び寄り、絞め落とした。

「慎重にいこうぜ。見つからねえのが第一だ」

そして……。

すべての警備騎士を眠らせるのに、五分とかからなかった。

「大した腕前です。随分と、悪事慣れている」

六人の騎士を縛り上げ、猿ぐつわを噛ませる様子を眺め、モチが言った。

「ハ、そりゃ褒めてんのか？」

「無論です」

しかし、軽口を叩けたのもここまで。

ようやくに対面を果たしたＮ・Ｓの有様に、

「ひどいな……」

三人は愕然となった。

形は留めているが、胸は暴かれ光炉が露出し、割られた腹からはなにか、黒い卵のようなものが、管のつながったまま取り出されている。

とても動かす動かさないどころの話ではなかったのだ。

「ヤギに、イモリに、……ハチか」

アレサンドロは眉を寄せ、うめいた。

「知り合いか？」

「ハチだけはな。……やかましい女だったぜ」

確かスズメバチだった、と、アレサンドロは重い足取りで、『黒い卵』に向かった。

モチをひと回り大きくした程度のその卵は、螺鈿（らでん）のように七色に輝く、金属とも石ともつかない物体で、Ｎ・Ｓとの間に走る二本の管の中には、そこを行き来する光の粒子が見える。

「これは？」

「核だ。こいつが、Ｎ・Ｓと俺たちとをつないでる」

つまり、トレースシステムをつかさどる装置であり、五感の接続、同一化を一手にまかされた回路である。Ｎ・Ｓの体内において、最も重要で、最も謎に満ちた物体だ。

台座に乗ったそれに、静かにふれたアレサンドロが、

「こいつを壊しゃあ……Ｎ・Ｓは、終わりだ」

「……」

「ハ……そう心配すんな。そこまではしねえさ。ちょいと、眠ってもらうだけだ」

と言った、次の瞬間。

「あっ……！」

なんと、アレサンドロの手のひらが、固いはずの卵の中へ呑みこまれていったものである。

「ホウ」

ひじまで入ったところで、どこをどうしたものか、みるみるその内部が濁り始める。

管を渡る粒子の流れも、いつの間にか止まっていた。

「どうなってる」

「さあ、俺に聞くなよ。俺は教わった通りやってるだけだ。だが、まあ、これで……」

アレサンドロは腕を抜いた。濡れている様子もない。

「もう手は出せねえだろうぜ」

「……と、言いますと？」

「外部から強制的に休眠指令を入れた。そのうち、筋肉と内臓が収縮を始めて……骨格と装甲だけになる」

「なるほど」

「おいモチ、ちゃんと見張ってんのか？」

「無論です」

頼むぜ、とアレサンドロは、イモリへ向かった。

残されたユウも、試しに、すでに色を失くしたハチの核にふれて

みた。
やはり固い。だが、つるりとした感触が肌に吸いつくようだ。
……生きている。
何故かはわからないが、確かにそう感じ、ユウは胸をなで下ろした。

「誰か来ます」
扉の小窓から通路の様子をうかがい見ていたモチが、低く叫んだのはそのときだった。
「何人だ？」
言いながら、イモリの処理を終えたアレサンドロが、ヤギへと急ぐ。
「ひとりです」
「ユウ、頼む。こっちは、もう少しで終わる」
「わかった」
ユウはモチを下がらせ、扉の内側に、ぴたり張りついた。
待つこと、数秒。
引き戸のローラーが、けたたましく音を立て、光が筋となって差しこんできた。

「ねぇ、ちょっとぉ……」
素早く伸ばされたユウの腕が、その襟首をつかみ上げた。
「あっ……！」
力ずくで引きこんだ身体は、予想外に軽い。
合わせるともなしに、目が合うと、
「！」
燃えるような赤い瞳。赤い髪。
「女……！」
ユウは思わず、手を離してしまった。
勢いで振り飛ばされる形となった少女は、そのまま転がるように

尻餅をついた。
「いっ……！たぁ……」
潤みがかった少女の目が、ユウをにらみつける。
「ちょっと！なによ、あんた！」

これが、ララ・シュトラウス。
この幼さの残る少女が、城塞の警護を任された聖鉄機兵団機兵長だと、当然、ユウは思いもしない。
剣を差してはいるが、ユウが騎士ではないと気づいたのだろう。
ララはすぐさま、壁に垂れる呼び鈴へ飛びついた。
「待て！」
もみ合いになったが、力ではユウが勝る。
難なく後ろ手にねじり上げ、少女を壁に押しつける。
「痛い！痛いったらぁ！」
「静かにしろ」
「するわけないじゃない！バカ！」
暴れるララのヒールが、ユウの足の甲に食いこんだ。
「ぐっ……！」
ユウが悶絶したその隙に、ララが呼び鈴を引く。
ベルが鳴った。

「くそっ！」
「おい！」
呼び声に目を向けると、アレサンドロがＮ・Ｓの足場で、大きく手招きしている。
「くそっ！」
ユウは再びうめき、痛む足を引き引き、その後を追った。
「待ちッ……あっ！」
とっさにつかみかかったララだが、そうはいかなかった。
翼を広げると一メートルにもなるフクロウが、鋭い鉤爪を振りか

ざし、襲いかかってきたのである。
「やだ！なによ、これ！」
「モチ！」
「先にどうぞ。ここは私が」
「すまない！」
「いっ！痛ぁ！」
振り払おうとするララのむき出しの腕が傷つき、血がにじんだ。
「バカ！なんなのよぉ！」
踏んだり蹴ったりの泣き声を背に、ユウは換気口から外へ出た。

「すまない」
「なっちまったもんはしょうがねえ。やることはやった」
「同感です」
役目を終えたモチが、ふわりと現れ、手掛かりに降り立った。
「今は逃げることです。屋根づたいに行けば、外の防壁まで出られます」

対決三〇八式（1）

鳴り響くサイレンと、哨戒灯の光。
上空には、Ｌ・Ｊの出撃音が渦巻いている。
首尾よく城塞の外まで逃げおおせた三人は、西に広がる山林へと走りこんだ。
奥へ分け入り、小高い丘を越え、目印を頼りに地面に積みあがった枝葉を払うと、顔を見せたのはもちろん、Ｎ・Ｓである。
「どうせ見つかっちまう！小細工なしで突っ切るぞ！」
「わかった！」
「お前は適当にな」
「わかりました。武運を祈ります」
起動したＮ・Ｓが立ち上がった。
この辺りの樹高では、到底その巨体を隠すことはできない。
上空を旋回していた三〇三式Ｌ・Ｊが、間髪入れず急降下してきた。
突き出されたランスの先端を左足を引いてかわし、ユウは叩きつけるように刃を抜く。
腿を切り落とされたＬ・Ｊは、きりもみしながら木々をなぎ倒し、爆炎を上げた。
『行くぞ！』
陸戦用一〇八式を含め、さらに多くのＬ・Ｊが迫っている。
ユウとアレサンドロは、山間を縫うように走った。

ふと横を見ると、モチも、つかず離れずついてきている。
その、ごく自然な羽ばたきが、ユウにはとても、うらやましく映った。
こうしたときこそ飛べればと思うのだが、カラスの背にある翼は、どれほど力を入れようとピクリとも動かない。

いや、むしろ、どこに力を入れていいのかさえわからないのだ。
聞けば、今まで鳥型Ｎ・Ｓに乗った人間で、飛ぶことのできた者はいなかったという。
人間は、『飛ぶようにできていない』のではなく、『飛ばないようにできている』のだ、と。
だが、ユウにはどうも、納得しきれない部分があった。
いつか、飛べそうな気がする。
そう、ユウは思っている。

デローシス近郊に出ると、視界はぐっと広がった。
ここに至るまでに、ふたりは合わせて十体のＬ・Ｊを行動不能にしている。
元より戻るつもりのないふたりは、デローシスへは向かわず、西に進路を取った。
すると、
『！』
ふたりの足が、止まった。
白み始めたばかりの空の下、その行く手の乾燥した大地に、真紅のＬ・Ｊが仁王立ちしている。

帝国三〇八式Ｌ・Ｊ。

二対のリアブレード。盛り上がった、頭部のプルセンサー。
これで昆虫の腹部があれば、浮かび出されるシルエットはＮ・Ｓスズメバチそのままだっただろう。
実は、今まで数多く相手にしてきた三〇三式を含め、三〇〇系と呼ばれる帝国Ｌ・Ｊは、すべてあのハチを元に開発された機体なのである。
下二桁はその開発順を示し、三式に関して〇八は、
『最新型か』

見た目ひとつ取っても、野暮ったい三〇三式に比べ洗練されている。
指揮官機なのは間違いない。
『遅ぉい』
三〇八式に乗る騎士は、せせら笑った。
『この声……』
ララ・シュトラウスである。
ララはパネルを操作し、倍率の上がった画像を、メインモニターに映し出すと、
『ふぅん、それがＮ・Ｓなんだぁ』
興味津々に言った。
その間にも、剣を携えた一〇八式、槍をかかえる三〇三式の包囲網が、つけ入る隙なく展開されていく。
総数にして十二。完全に囲まれてしまった。
『チッ……』
『ねぇ、どっちがさっきの奴？ほら、あたしが足踏んづけてやった方』
甘えかかるようなララの言葉には、若干の西部なまりがある。
『ねぇ、どっち？』
『……俺だ』
ユウが進み出た。
『……そ。じゃあ、あんたから……』
と、次の瞬間。
三〇八式は、カラスに肉薄している。
『さよなら！』
……この一撃をかわすことができたのは、まったくの幸運だった。
ユウが反射的に動かなければ、ララの操る三〇八式のランスは、正確に頭部を貫通していただろう。
『このっ……！』

土埃を巻き上げ、三〇八式は空中で静止する。
『生意気！』
と、再び動いたその軌道は、予測できれば直線的、避けるのは容易い。が、やはり速い。
二撃目は再び空中に、三撃目は大地に突き刺さった。
『ユウ！』
アレサンドロは叫んだが、Ｌ・Ｊ部隊との戦闘に入り、とても助けに入れる状況ではなかった。

『そういえば……あの鳥、どこ？』
ランスを引き抜くララは、一方的な展開に上機嫌だった。
ユウたちは知るはずもないが、ララは先の御前試合において、前人未到の百体斬りを果たした天才Ｌ・Ｊ乗りなのである。
つまりその分、プライドも高い。
『あいつだけは、むしってやるの。絶対』
コクピットの中、ララはちらりと、操縦桿を握る自身の腕を見た。
白い肌は、無数にできたミミズ腫れで、痛々しくふくらんでいる。
『教えてくれたら、助けてあげるけど』
『さあ、知らないな』
ユウはひとつ息をはくと、太刀を正眼に構え直した。

心が、驚くほど静かに澄み渡った。

『……フン』
両者はしばし、にらみ合い……。
三〇八式の機体が、予備動作もなしに、ふ、と動いた。
来る。
同時に、カラスも踏み出す。
突きと突き。
ここまでの三撃同様、この少女は顔面しか狙わないだろうと、ユ

ウは見当をつけていた。
それが、当たった。
噛み合ったランスの切っ先が、カラスの左頬を浅く、えぐるようにかすめる。
だがそれにひるむことなく、ユウはもう一歩前へ、刃を突き出した。

対決三〇八式（2）

『あっ！』

驚いたのはララである。

確かに、相手を甘く見ていたところはある。

しかし、今まで槍の軌道は読まれても、それを真正面から受けようなどという者はいなかった。

しかも、そこからさらに踏みこんでくるのだ。

『ああっ……！』

ララは勢いバーニアを吹かし機体ををよじらせたが、加減を忘れた無理な方向転換は、三〇八式の体勢を完全に崩してしまった。

しまった、と思ったが、もう遅い。

その隙を見逃さず、

『むっ！』

体を返したユウが、袈裟懸けに太刀を振り下ろす。

背を向けた三〇八式の左羽が二枚、飛んだ。

『うっそ！』

コクピットのサイドモニターが、赤く明滅を繰り返し、異常を訴えてくる。

だが、ララも負けてはいない。

『こ、の程度でっ！』

姿勢制御も兼ねるブレードの破損を逆手に取り、バーニアの噴射圧で回転。

振り向きざま、鋭く槍を突き上げる。

『くっ！』

つばを弾かれ、カラスの太刀も宙を飛んだが、やはりユウはそれに見向きもせず、体当たり同然に相手の懐へ。

ふたつの身体が、もつれるように倒れ、地が揺れた。

『……ッ！』

ララが目を開けると、のしかかったカラスの手のひらが、三〇八式の胸部コクピットハッチに、ぴたり、押しつけられていた。

『……なんで？』

言うララの声は、震えている。

『なんで、そこでやめるわけ？』

『もう、勝負はついた』

『アハ、ハ……なにそれ、どこが？』

『……？』

『まだ戦えるじゃない！あんたも！あたしも！』

槍の穂先を握った三〇八式の右手が、カラスのこめかみを狙う。

ユウは、それをすんでのところで振り払った。

『こんなので、終わったなんて言わせない！言わせないんだからぁ！』

『……そうか』

密着していたカラスの機体が、暴れる三〇八式から離れた。

と、思うと、右腕を振りかぶり、

『ぁッ……！』

声にならない悲鳴が、ララの口からこぼれた。

直後、響き渡る、雷鳴のごとき金属音。

カラスの拳が、手首まで隠れるほど深く、三〇八式の顔面に突き刺さっている。

激しく振動したコクピットの中では、瞬時に、すべてのモニターがブラックアウトし、めくれこんだ装甲板の内側で、バシバシと火花が飛んだ。

『これで満足か』

三〇八式は、ピクリとも動かなかった。

デローシスの北、数十キロの地点を移動中であった、帝国七将軍のひとり、ギュンター・ヴァイゲルの元にその知らせが届いたのは、数時間後のことである。

この男、ララの直属の上官にあたる。

「シュトラウスがやられたぁ？死んだのか！」

と言うギュンターの目の前には今、朝食とも思えない、庶民がとても口にできないような品々が並んでいるが、これだけでも、この国が軍部にどれほどの重きを置いているか、よくわかるというものだ。

そして、

「いえ、命に別状はないとのことです」

報告書を片手に銀縁眼鏡を押し上げたこの男は、紋章官ヴィットリオ・サリエリ。

敵味方の軍旗に描かれた紋章から戦場の情勢を読み、作戦を組み立てる、言わば軍師である。

そのサリエリの報告に、

「へぇ……」

ギュンターはナイフを放り出し、革張りの椅子に沈みこんだ。

そうして、たまりかねたように、

「……ッ、ククッ、ク、ハ、ハ、ハッ！そいつは愉快だな！」

パンくずを口からまき散らした。

「土つけられたってのは気にいらねぇが、そうか、ざまぁねぇ！」

腹をかかえ、品なく笑う上官を、切れ長の瞳が静かに見つめている。

「おい、サリエリ」

「は」

「そいつら、今どこにいる」

「戦われるおつもりですか」

「当たり前ぇだ。俺が取った首、あの女に見せつけてやる。ク、ククッ、目に浮かぶぜ、アイツの悔しがる顔がよ！」

しかし、
「それは、賢明とは申せません」
あくまで冷静に、サリエリは言い切った。
「敵を知り、己を知れば百戦危うからず。いかんせん、情報が少なすぎます」
「あぁ？阿呆が。情報集めはテメェの仕事だろうが。戦いになる前にやっとけ」
「いいえ、まずはご自身で、ララ・シュトラウスに会われるべき。会っていただきます」
態度はいんぎんだが、言葉は有無を言わさぬ。それがヴィットリオ・サリエリ。
「……チッ、わかった」
多くの場合、ギュンターが折れる。
「負け犬の面、見ておくのも悪かねぇ」

そのとき、伝令官が新たな報告を携え、専用車両の戸を慌しく叩いた。
情報を受け取ったサリエリもまた、瞠目する。
「なんと……」
「あぁ？」
「ララ・シュトラウスが、姿を消したそうです」
「なにっ？」
ギュンターが飛び上がった。
「車両を奪い、制止に入った三名が負傷。内一名が……」
「ざっけんな！」
激しく椅子を蹴り上げる。
「あ、の……クソがぁッ！」

ビビり屋

帝国中部領、ウィンザー。
帝都にも程近いこの土地に、本来、追われる身であるユウたちは、踏みこむべきではない。
それでも尚、三人がここへ立ち寄ったのには、もちろん理由があった。
N・Sに乗る上で、頭を悩ませるひとつの問題。
運搬問題の解決のためである。

N・SやL・Jはその巨大さ故に、どこにいようが、とにかく目立つ。
それはカーゴに乗せたとしても同様で、鉄機兵団としてはこれほど見つけやすく、また監視しやすい対象もないだろう。
そうなると、当然こちらも常に目を光らせておく必要があるわけで、それは実のところ、大きな負担になっていたのだ。
いくら、夜半はモチが、その役割を引き受けてくれるとはいえ、である。
そこで、知恵を貸してくれるだろう人物に会いにいこう、ということになったわけだ。
その男は、
「ペルデンドス、なんて小洒落た名で通ってるが、正体は魔人のヤマカガシ。おかしな爺さんさ」

アレサンドロは、今まで幾度も、その年寄りの元に滞在している。
そのほとんどが戦後で、なんでも集団暮らしに馴染めず、早い段階で隠棲したために、戦に巻きこまれなかったものらしい。
「整備助手やってた頃に引き合わされてよ。N・Sのあれやこれやを、まあ、いろいろ仕込まれたぜ」

という、N・Sのプロフェッショナルは、緑深いエ・ルーゼの森に住んでいる。

『なにがおかしいってよ』

ブナ林を歩むオオカミの肩には、モチが座りこみ、固く目蓋を閉じている。

昼に弱い彼は眠っているのだろう。ゆらりゆらりと、今にも転げ落ちそうだ。

『あの爺さん、自分の足音にも腰抜かすような、とにかくひどいビビり屋でな。いや、冗談抜きに、だぜ』

『まさか』

『まさかもなにも……』

アレサンドロは喉まで出かけた言葉を、呑みこんだ。

『会えばわかるさ』

遠くで草をはんでいた鹿の一群が、ひょいと顔を上げ、こちらの動向をうかがい見ていた。

『あそこだ』

指差された先には、なるほど、小高い丘の山肌に、小さな板がはまっている。

狐か狸でも住んでいそうな洞穴に、そのまま戸をつけた格好である。

N・Sを降りると、ますます小さい。

これで収まるなら、ヤマカガシはよほど背の低い人物に違いない。

ユウがくぐるとすれば、かなり腰を丸めならなければならないだろう。

「さて」

アレサンドロはひざまずき、手を振った。

下がれ、ということらしい。

ユウはおとなしく従った。

「ペルデンドス」
アレサンドロが呼びかけ、扉を叩く。
「……」
「ペルデンドース？」
……沈黙。
「忘れちまったか？アレサンドロだ」
カタ。
ようやく、扉の内側で物音がした。
「あ、あれは、いない、いない」
返ってきたのは、か細い声である。
「出ていったよ、出ていった」
「いや、俺がアレサンドロだって話さ」
「……」
「アレサンドロ。アレだぜ、ヤマカガシ」
「……」
ゆっくり、かんぬきが抜かれ始めた。
一本、二本……。
「増えてるな」
なんと、六本。
アレサンドロは、なんともいえない顔で、苦笑を浮かべた。
そのときだ。
カチャン！
「きゃあぁ！」

「う、お！」
アレサンドロを押しのけ、突然開かれた戸口から、小男が転がり出てきた。
「きゃあああぁ！」
何故かはわからない。わからないが、とにかくパニック状態である。
目をむき、指をわななかせ、あちらへ走りＮ・Ｓに足をかけては、
「きゃあぁぁ！」
こちらへよろめきユウとぶつかっては、
「ひぃいぃぃ！」
しまいには、なんの不幸か、とうとう足を滑らせたモチがオオカミの肩から、ぼたり、目の前に落ちてきて、
「フクッ！……むぅん」
気絶してしまった。

「……な？」
アレサンドロが首をすくめた。
これはもう、笑うしかない。

解決？

しっとりと湿り気のある大気には、緑の匂いが蒸れこもっている。
見上げれば、枝葉の隙間からこぼれ落ちる光が、
「まるで光石の粒だ……」
顔に降り注いだ。
波のように駆けていく風も、頭上で交わされる小鳥たちのさえずりも、どれもが皆、心よい。
思えば、こうして穏やかな気持ちで空を仰ぐのも久しぶりのことだった。

さて、その夏の勢い残る日差しの下に、ヤマカガシはなにか、液体の入ったビーカーを差し出した。
灰色に濁った、粘質の液体である。
陽を浴びたその中に、みるみる光の粒が沸き始めると、
「な？な？」
蚊の鳴くような声で、ヤマカガシが言った。

あの後……。
アレサンドロが上手くとりなしてくれたおかげで、ヤマカガシは随分と、落ち着きを取り戻している。
いまだに警戒心をぬぐいきれない様子で周囲を見回したりなどしているが、気絶に比べれば可愛いものだ。
ユウの腹まで届くかどうかの背丈をさらに縮め、常にひざをかかえるように震えているヤマカガシは、頭ははげ上がり、シワの深い顔の中心に、ほとんど高さのない、穴だけの鼻がぽつんとついている。
なにより異彩を放つのは、その長く垂れ下がった眉の下の、握りこぶし大もある目玉で、それが焦点定まらず、あちらこちらへ泳ぐ

様は、なかなか恐ろしい。
「いや……、な？と、言われてもよ……」
ビーカーをのぞきこんだアレサンドロは、ユウを見やった。
ユウも、首をかしげるばかりである。
「なぞなぞをしにきたわけじゃあ、ねえんだがな」

するとそこへ、樹上で眠っていたはずのモチが、
「それは……」
「きゃあ！」
「……不愉快です」
「まあ、そう言うな。悪気はねえんだ、なあ？」
飛びついてきたヤマカガシの背を、アレサンドロはあやすようになでた。
「で？なんだ？」
モチはひとつ、息をはいた。
「それは……」
ちらり、ヤマカガシを見る。
「よく似ています。あの、Ｎ・Ｓの核に」

「あっ！」
ユウとアレサンドロは同時に声を上げた。
「そうだ、確かに！」
渦を巻く七色の輝き。確かによく似ている。
「ああ。おい、どうなんだ？」
「そ、そう、そうそう。あ、あ……そんなに、見ないで……」
ヤマカガシはモチに背を向け、頭をかかえて縮み上がった。
「もういいかい？アレ。もういい？」
早口に訴えるが、さすがに、
「いやいや、もうちょい頼むぜ。な？」
「……う、う」

「こいつは、本当に、あの装置と同じものなんだな」
ヤマカガシは、小刻みに何度もうなずいた。
「原液だよ……」
「原液？つまり、あの核は……元は液体だってのか」
「そ、そうそうそう」
「それで、これを？」
「これに……Ｎ・Ｓを入れる」
「入れる？ひたすってことか？」
「ち、違う違う……入れるんだよ、入れるんだよ」
「だから、その入れるってのは……ん、まあ、とにかくやってみてくれ。俺たちはなにをすりゃあいい？」
すると、今や全体が虹色に染まった液体を胸に抱いたヤマカガシは、Ｎ・Ｓに近づくと、それを半量、オオカミのつま先に垂らした。

そこからは一瞬の出来事。

「あっ……！」
という間に、オオカミの巨体が光に包まれ、消え失せる。残り半量を垂らされた、Ｎ・Ｓカラスも同様にだ。
そして残ったのは、ウズラの卵ほどの、あのＮ・Ｓ核そのままの塊がふたつ。
ヤマカガシは素早くそれを回収すると、周囲に目を配りながら、駆け戻った。
「な？な？」
アレサンドロの手のひらに、二個の黒い卵が乗せられた。
ユウとアレサンドロ、モチさえも、ただただ呆気にとられ、言葉を失った。

その後の、いろいろな意味で難解なヤマカガシの説明を、ユウが

噛み砕いたところでは、
「あの液体は、ふれたものを『情報』に変える」
どうもそういうことらしい。
文字で『N・S』と書くように、そこには質量も体積も、時間の流れさえも存在しない。
そもそもN・Sの操縦も、その情報の一部分となっておこなわれている、というのだ。
では、それが一体、どういう形の情報なのかというと、
「……よく、わからないな」
というのが、正直なところだった。

とにもかくにも、これでN・Sの運搬問題は解消できた、ようだ。

日没

「あたし、鉄機兵団辞めたの」
「そうかい。そうだってね」
「だから、おせん別ちょうだい」
「いいとも」

ユウたち三人がヤマカガシの元で言葉を失っていた、丁度その頃。
ララは南デローシス砦のさらに南、とある帝国の研究施設に車を乗りつけていた。
話の相手は、セレン・ノーノ。この施設の一研究員である。
だが、彼女の権限はそれに留まらない。
彼女もまたララと同じ、誰もが一目置く『天才』なのだ。
歳にして十歳の差があるふたりが、こうして友人関係を築いているのも、天才は天才同士、どこか惹かれあうものがあるのだろう。
「ね、なにくれるの？」
「ついて来ればわかるよ」
少年のような語り口だが、セレンはララより、はるかに大人の体つきをしている。
背が高く歩幅も広いため、ララは彼女と歩く際、どうしても小走りになった。
「それより……」
セレンが続けた。
「負けたんだって？」
「まぁね」
ララは意外に、あっけらかんとしている。
「黒いＮ・Ｓ」
「そう。黒くて、ステキな人」
「ステキ？」

表情の少ないセレンが、このときばかりはさすがに足を止め、いぶかしげに眉をひそめた。
しかし、それを気にも留めず、
「ホントにスゴかったんだから！こうやって、頭を、ガコーンって」
ララは小さな拳を突き出す。
そして、あごに指を当て、声真似で、
「『これで満足か？』……キャ～ッ！カッコいーい！」
「……なるほど。ララらしい」
セレンは、再び歩き始めた。
「あたしね、彼のところに行くの」
それについて、ララも、跳ねるように歩き出す。
「彼と一緒に行くの。決めたの」
赤い瞳は、セレンを通り越し、遥か彼方を見つめている。
セレンはその、夢見る眼差しに、
「ふうん」
ただ、鼻を鳴らした。
「……恋する乙女は、太陽にも飛びこむ、か」
「なに？」
「いいや。いいね、女の子」
「アハハッ！なにそれ！」

南デローシス砦と違い、そもそもが研究施設として建てられたここでは、通路も部屋も、すべて壁は白く塗られている。
「ここだよ」
セレンは施設奥にララを導き、同じく白い扉を開けた。
そこは、格納庫。
「わ」
ララは手を打ち、手すりに駆け寄った。
「なに？これ」
「試作機」

「アハハッ！そんなの、見ればわかるって」

肩幅も胸厚も三〇八式の一、五倍はある、無骨な、純白の機体。背部に四基、脚部に一基ずつの大型スラスターを備え、両肩には突き出した四段のウイングバインダー。

そこに身の丈ほどもあるシールドと、柄の短いスピナー（穂先の回転するランス）が付属している。

「型番は？」

「ないよ。オリジナル」

つまり、Ｎ・Ｓのコピーではなく、これまでつちかわれてきた人間の技術によって、一から製作されている、ということだ。

能力は高いが、技術者不足で数が少ない。故に、

「うっそ！将軍機？」

「いずれは、そうかもね」

「へええ」

そんな代物を、セレンはせん別にくれようというのだ。

ララは階段を駆け下り、グラウンドラインからオリジナル機を見上げた。

「でも、ちょっとゴツくない？」

「突進力なら『ドゥーベ』にも負けないよ」

「可愛くなぁい」

「肩はちょっといいだろ？羽根飾りのマントみたいで」

「うーん、まぁね」

「六時間くれれば、赤にも塗り替えできる」

「ホント？それ、お願い！」

「了解」

セレンが通信機を通じて指示を出すと、すぐさま数十人の作業員が現れ、作業が開始された。

オリジナル機が許可なしにやり取りされることに関して、特に意

見しようという者もいない。
これは『権限』というより、この研究所の『性格』だ。
「名誉や金なんかより、データと実績」
以前、セレンがそう、ララに語ったことがある。
聖鉄機兵団だろうと誰だろうと、満足のいく数字が出せればそれでいい。
それが試作機ならば尚更なのだ。
「だから、ねえ、ララ」
セレンは言う。
「こんな機会は滅多にない。七将軍とも戦ってくれると嬉しいね」
ララは待ってましたとばかりに、にっ、と笑った。
「いいよ」
「だからララは好きだよ」
セレンは、ララの頭を片腕に抱いた。

六時間後。

調整の終わったリニアシートに、ララは深々と腰を沈め、ベルトを締めた。
三〇八式よりも大型のモニターが、周囲の景色を次々と映し出す。
色も鮮明だ。
『どう？』
セレンの声がする。
頭部を少し傾けると、姿が見えた。
『新しいのって最っ高！』
『オリジナルはジャジャ馬だから、きっとお気に召すよ』
作業員総出で足場が取り外され、『準備よし』の旗が振られた。
『このベッドは空けておくから、いつでも送り返して。方法はさっき言った通り』
『はーい』

盾と槍を取り、専用の大扉をくぐると、赤い夕日が哨戒灯のように天へ光を放っている。
ララは目を細めた。
『黒いＮ・Ｓの行き先は、すぐつかめると思うよ。後をつけまわしてる連中がいるみたいだから』
『ふぅん』
どこかの諜報部隊だろう。
『それって誰の？』
『あれだよ。クラウディウス』
『ああ』
イヤな奴。ララはあの男が苦手だった。
『わかったら知らせるよ』
『うん、よろしく。早くね！』
『努力するよ』
ララはコントロールパネルを操作した。
とりあえずはデローシスへ向かうつもりだ。

『……そうだ』
ララの手が止まる。
『サンセット！』
『なにが？』
『この子の名前』
『ああ。ふうん、いいんじゃない？ララらしい』
『じゃあ決定！』
メインスラスターに火が入り、格納庫脇まで下がったセレンは、手を上げた。
『またね！』
轟音と共に、サンセットは加速、空へ舞い上がる。
『アッハハハッ！すっごい、コレ！すっごぉい！』
赤い巨体は瞬く間に、北の空へ消えた。

「サンセットか」
残されたセレンは、乱れた髪を手ぐしで整え、
「いいね」
にこりと笑った。

モチの哲学

その夜もユウはひとり、ヤマカガシの穴ぐらから少し離れた川べりで、太刀を振り続けていた。
何百、何千と。全身汗みずくになって、尚。

もっと速く。
もっと強く。
刀に、振られるな。

一朝一夕で達人になれるとは、もちろん、ユウも思ってはいない。が、やはりそうした思いはつきまとう。
先の戦いも、結局は運がよかっただけなのだ。
荒い息をはきながら、ユウは渇ききった喉をごくりと鳴らし、うっとうしく張りついた前髪を指で散らした。
見上げると、満天の星空。
茂みから走り出た一匹のヤマネが、ユウの姿に一瞬、身をすくませた。
と、そこへ。
「！」
間髪入れず、灰色の塊が、まるで一条の矢のように地へ突き立った。
風が巻き、ヤマネの小さな叫び声が、ユウの耳に入る。

「……落ちたものです」
と、うめいたのは、モチである。
狩ろうとしたヤマネは、爪から逃れ、走り去ってしまったようだ。
「フム……」
モチは、ゴロゴロと喉を鳴らし、倒木に乗った。

「失礼しました」
「いや、いいんだ。残念だったな」
「なに、また見つければいいだけのことです」

ユウは太刀を剣帯の鞘に収め、ヤマカガシに借りた光石ランプの覆いを取り去った。
使われているのは、純度の低い光石である。暖色の柔らかい光が、せいぜい周囲一、二メートルを照らし出す、程度の力しかない。
しかし、そのかすかな光さえ邪魔に感じられるほど、近頃のユウは暗闇での鍛錬を好み、また意義を感じていた。
無論、本当の意味での暗闇ではない。
目が慣れると、自分の姿や太刀の反り、周囲の木々くらいは、おぼろに見える。
その中で刃を振ると、大気を裂く刃風や、鋭く走る影に意識が集中し、徐々に自分自身の気も研ぎ澄まされていくように思えるのだ。
ユウは川の水をすくい取り二口飲むと、固く絞ったタオルで汗をぬぐった。
森を吹きぬける風が、肌に快かった。

「人間の持つ階層的な思考形態を『理性』というならば……」
「え？」
突然の声に、ユウは心臓が止まるかと思った。
「『理性』とは、『欲』です」
モチは、ただ空の一点を見つめている。
ひとり言のような、そうでもないような。
言葉は続く。
「もっと便利に。もっと安全に。もっと早く。もっと、もっと……。
無論、それが、よい方向に働く場合もあるでしょう。しかし……」
モチは静かに目を伏せた。
「我々は、ねだってはならないのです」

「……そう、だろうか」
わけがわからないながらも、ユウは思わず、口に出していた。
「それじゃあ、俺たちにはなんの進歩もない」
「では進歩とは？」
「発展、していくことだ。次のステップに」
「今与えられた力だけでも、十分な結果が残せるとしたら、どうです」
「結果がどうなるかなんて、誰にもわからない。ねだることで可能性が得られるなら、それはねだるべきだ」
遠まわしに自分の鍛錬を否定されているようで、ユウの語気は、ついつい荒くなった。
一方、モチは、
「過ぎた欲望は、いずれ目的を離れ、独り歩きを始めるようになります。それを講じるために、目的を探すようになるのです。それが正しいとは私には思えません。本末転倒、まさに、本末転倒」
声を抑え、噛みしめながら言葉をつむぐ。
「それだってわからない。大体、今がなければ次もないんだ。未来を恐れて、できることもしないで結果を待つなんて、俺は嫌だ」
「人事を尽くして天命を待つ。それは私とて賛成です。努力の上にこそ、生は成り立っている。しかし、あるものは、ただあるように生きることにこそ意義がある、と私は思うのです」
「意義？」
「人は人であり、フクロウはフクロウであり、魔人は魔人です。それぞれに与えられた生があり、性がある。我々は……」
と、ここまで言ったところでモチは、はたとなにかを思いつき、言葉を呑んだ。
「……我々？……私は……」
「？」

「私は、何者なのでしょう」

丸いモチの瞳が、虚ろに泳いだ。

「人？フクロウ？魔人？……いいえ……」

爪が、倒木の繊維を引き剥がす。

「あるものは、あるように。なったものは、なったように。無いものはねだらず、有るものはうとまず。ああ、ああ、それならば……」

モチは声を上げ、ユウを見た。

「私が、間違っていました」

「え……？」

「私はもはや、フクロウではないのです。使える頭があるのなら、もっと使うべきでした」

そう、そうでした、と、ひとり納得し、モチの身体は大きくふくらんだ。

「今有るものを活かすことは、無いものねだりではありません。それこそ努力、生の糧。私はただ、努力を怠っていた」

そして、最後に姿勢を改め、

「あなたのおかげで答えが見つかりました。実に、実にいい議論でした」

頭を垂れたのだった。

逆に、納得がいかないのは、ユウである。

「いや、俺は……」

自分の鍛錬とは別のところにモチの意図はあったらしく、解決もしたらしいが、どこか置いてきぼりで、すっきりとしない。

「……なにか、悩みでもあったのか？」

つい、聞いた。

「さ。悩みというよりこれは……、固執、とでも言いましょうか」

モチは、気恥ずかしげに身をよじった。

「先ほど、ヤマネを逃がしました」

「ああ」
「そして、ふと思ったのです。『罠でも仕掛けてみようか』と。しかし本来、フクロウは、罠などというものは使いません。楽をして食事にありつこうなど、ああ、私は欲深くなったものだ、と……自分自身に、失望したのです」
「それで、ねだってはならない、か」
そういうことならば、別に反対はしなかった。
ユウは、小さく笑った。
「ですが、これからはこの知恵を活かし、私なりの新しい狩りを模索しましょう」
「なったものは、なったように、か」
「いかにも」
どこかで、別のフクロウが鳴いた。

「ときに、ユウ」
「なんだ?」
「あなたがねだるものとは、一体なんです」
ユウは、どきりとした。
「それは……」
奇妙な罪悪感が、胸に沸き起こる。
「力……いや、技術、かもしれない」
「ム……」
別に後ろ暗いことではない。
しかし、沈黙したモチの、その針のような静かな眼光に、ユウはつい顔を背けた。
「……あなたは、いい青年です」
「え……?」
「アレサンドロもそう。私は、あなた方が好きです」
モチの声は優しい。
「今更ですが……N・Sなど、背負って欲しくはありませんでした」

「……モチ……」
「いえ、これは、つまらないことを……」
今度はモチが、視線を外した。
「さて。私は、剣の道については詳しくありません。ですが、思うに……」
と、思案顔のモチは、川の流れを目で追いながら、
「力を求めるならば、心を強くすることです。技術を求めるならば、経験を積むことです」
ユウは目を見張る思いがした。
確かにそれは、的を射ている。やはり、
「俺は……どちらも足りない」
「ですが、どちらの芽も、確かに、あなたの中にある。焦らないことです。こればかりは、努力より心がけです」
それも正しいだろう。
ユウは黙って、素直にうなずいた。

「さ。もう休んだほうがいいでしょう。私はもう少し……」
「狩りか」
「はい。少し思うところもありますので。ああ、ユウ」
「なんだ？」
「私は、これからもあなた方と行きます。もはや、野生には戻れません」
「……そうか」
「魔人にも会いたいのです。同じく野生を失った彼らが、どのように生き、なにを思うか。実に興味があります」
そう、仁王立ちに堂々と語るモチの言葉に、迷いはない。
と、思うと、少しばかり声を落とし、
「ここだけの話、あの臆病な蛇だけでは不満です」
これには、ユウも笑ってしまった。

「では、おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」
モチは暗闇へ飛び立ち、ユウは光石ランプを手に、ヤマカガシの穴ぐらへと歩を向けた。
思えばモチの言ったことは、取るに足りない、当たり前のことかもしれない。
しかし闇雲に振り続けていた剣の先に、なにかが見えた。
それだけで、ユウの足取りは軽くなった。

モチの発明

ヤマカガシの穴ぐらは、入口は狭いが天井は高く、なかなか快適な住居だった。

壁は泥で塗り固められ、居間には荒削りの木板で組まれた、こじんまりとした家具がきれいに並べられている。

奥へ行けば、左は台所、右は寝室。

さらに床の敷板には跳ね上げ戸がついており、段梯子を下りると、食物の貯蔵庫と、ビーカーや試験管の並ぶ実験室へ続いている。

その実験室の仮眠用ベッドで、昨夜、ユウは眠った。

土壁をくりぬいただけの簡素なものだが、アレサンドロが滞在する折に使っている場所を譲ってくれたのだ。

「狭かったろ」

「いや、居心地よかった」

「そうか？」

物好きだ、と笑うアレサンドロは今、台所で腕を振るっている。

玉ネギが甘く炒められる匂いに、ユウの腹の虫が鳴った。

……ところで。

ふたりの左中指には今、昨日まではなかった、鈍色の指輪が輝いている。

Ｎ・Ｓを封じこめたあの卵を、さらに加工し、人目につかない形に作り変えたのだ。

呼び出すときは乗り降りと同様、ただ念じてやればいいのだという。

魔人の技術は、まるで魔法だ。

我ながら子供じみた発想に思え、ユウは苦笑した。

左手にはこれで、小指と中指に指輪がはまることになったわけだが、これについても、ユウは元々、こうしたアクセサリーの類が嫌いではない。

宝石や金銀の価値、というより、彫金や細工が好きなのだ。

自分で買うほどではないが、街ですれ違う女性や貴族のそれを、しげしげ眺めてしまうことも、ままある。

ゆえに、まったく抵抗はなかった。

「おいユウ、皿出してくれ。そこ入ってるからよ」

「ああ」

朝の涼しさを含んだ風が、開け放たれたままの戸口から、入っては抜けていく。

そこに、

「おはようございます」

モチが滑りこんできた。

「きゃあ」

ヤマメの蒸焼きに粗塩を振っていたヤマカガシは、思わず、その壷を取り落とした。

「よお、朝帰りか。お安くないな」

普段モチは、日の出前には戻る。しかも今朝は、

「どうしたんだ?その……」

両目に、木の皮をはぎ、円く切り取ったものを貼りつけている。

それで前が見えるのかというと、しっかり細かな穴が開けてある。

丁度、サングラスのような格好だ。

「これは、ま、副産物とでも言いましょうか」

モチは爪を器用に使い、その皮を剥がした。

そしてさらに、かたわらに置いた、かかえるほどのカゴを、ずいと前へ差し出すと、

「皆さんでどうぞ」

ひとつ、大きなあくびをしたのだった。

それはつるを編んだ手製のもので、中をのぞくと褐色の野ウサギが二羽、入っていた。
「これは、すごいな」
「大猟のおすそ分け、ってわけか。昨日はよっぽど儲けたらしいな」
「はい、試作品にしては、予想以上の成果です」
「試作品？」
「ええ」
細かく刻んだ野菜やベーコンを山ほど混ぜこんだオムレツが、テーブルに並んだ。
これに、ヤマメと米を葉で包み、蒸したものが今日の朝食である。
単純作業が続く家事は面倒臭がるアレサンドロだが、料理はむしろ好きで、美味い。
「さあて、メシにしようぜ」
四人が食卓にそろった。

「で？試作品てのは？」
「これです」
モチが取り出したのは、クルミである。
なんの変哲もないように見えるが、長さ十センチほどの太い紐が、枝のかわりに垂れている。
「これは？」
「昨夜思いつきました、新しい狩りの手法です」
「へぇ、こいつで、どうやって」
「ま、見てもらいましょうか」
モチは再び木の皮を目に貼り、外へ出た。
「ペルデンドス博士は、それなりの覚悟を。では……」
くちばしと爪に火打石を挟み、クルミの紐に、火をつける。
じりじりとそれが短くなる隙に、モチは飛び立った。
数秒後……。

パンッ

「うっ！」

「おっ！」

破裂音と共に、一瞬の、強烈な光が走った。

光石灯どころではない。反射的に顔をそむけたが、それでもユウの目には、きつく残像が焼きついている。

耳の端に聞こえたのは、小鳥の群れが逃げていく羽音だ。

「あ、つ、つ、なんだありゃ……」

アレサンドロは、目蓋の上から目を揉み、

「あぁあ、まだ見えねえ」

と、うなった。

するとここで、なんとあの、最も心配されたヤマカガシが、

「すごい、すごい」

手を叩き、歓声を上げたのである。

ヤマカガシは、プレゼントをちらつかされた子供のように表へ走り出ると、破片をかき集め、うきうき、いそいそと検分を始めた。

這いつくばってにおいをかぎ、眺め、舐める。

「おや、これは博士の専門でしたか」

いつの間にか舞い戻ったモチにも驚くことなく、むしろ自ら抱きつくと、

「すごい、すごい」

きゃっきゃ、と笑った。

「尾羽が折れます」

モチが言った。

その頃になって、ようやく視力が戻ったユウとアレサンドロも、

「やれやれ」

と、ヤマカガシのあとを外に出たが、どうにも、陽の光が目に痛い。

アレサンドロはまだ、眉間を押さえている。
「確かにすげえが、なんだこりゃ。どうやってこんなもん作った」
「さ、それは……ま」
モチは珍しく、言葉を濁した。
「もったいぶるなよ」
言われても、どことなく言いにくそうな様子でモチは首を回していたが、興味津々に次の言葉を待っているヤマカガシの姿に観念したのか、ついに、
「火薬と、……一フォンスを」
つぶやくように答えた。
「一フォンス！」
ヤマカガシが叫ぶ。
「一フォンス？」
ユウとアレサンドロは顔を見合わせた。
一フォンスは帝国通貨の最小金額で、銀色の小さな貨幣なのだが、
「それを削り、粉末にしたものに火をつけますと、このように」
激しい火花が散るのだという。
「知らなかったな」
「いや、知ってたにしても、金を削ろうって気にはならねえよ」
「ハハ、確かに」
鳥ならではの思いつきである。
「なんにせよ大したもんだぜ、こいつは。なにかと役立ちそうだ」
「恐れ入ります」
モチはホッとしたように身体を上下させた。

……と、ここで。
ユウはふと、思い立った。
「……この金、どこから？」
「あ」
アレサンドロが、戻りかけた足を止めた。

「ユウ、一度こぼれたミルクは、元には戻りません」
モチは、いやに落ち着いている。
「発明にはなにかしら犠牲が生じるものです。私も何度、この目を潰しかけたことか」
何故かヤマカガシが、嬉しそうに何度もうなずいた。
アレサンドロは、モチをかかえ上げ、
「別にそういうことを聞いてるんじゃねえ。……おい、目をそらすな」
「誤解です」
「だったら、正直に言いな」
「……」
「……」
「……アレサンドロの財布から拝借しました」
「や、やっぱりか！てめえ！」
モチの無断借用は十五フォンスほど。
大した金額ではないが、安酒の一杯くらいは飲めただろう。

グラッパ

それから終日かけて、意気投合したモチとヤマカガシは、閃光弾の改良に取り組んだ。

ヤマカガシの専門分野は、その通り、化学である。

N・Sの開発にも、躯体ではなく、核を中心とする内部機関の担当として携わっていたもので、金属粉、しかも硬貨に着火、発光させるという、この突飛な思いつきが、彼の興味を一気に引きつけたらしい。

ふたりはまず、導火線に火薬を混ぜこみ、着火性能と燃焼時間を安定させることに成功した。

その後、一フォンス硬貨の燃焼実験を繰り返し、さらには外殻を、今のままクルミか、クヌギのどんぐりか、はたまたトチの実かで迷っていたようだが、これは結局、加工のしやすいクルミでいいだろうという結論に落ち着いた。

ちなみに、開発に費やした十フォンスは、今回すべて、ユウの懐から出ている。

「おかげで、いいものができました」

「ふたりのおかげで、だろうが」

「ホウ。これは失礼を」

ヤマカガシが、シシシ、と笑った。

そうして和気あいあいと夕食を済ませ、外はすでに、深夜さながらの闇が降りている。

これからがモチの活動時間ではあるが、さすがに睡眠時間が足りないようで、

「今日はこれで」

モチは、ヤマカガシと共に寝室へ消えた。

「すっかり、仲よくなっちまったな」
「ああ、よかった」
「よかった？」
ユウがうなずく。
「昨日モチが、もう野生には戻れないと言ってたんだ。だから……」
ああして、野のフクロウたちの代わりに、モチが仲間だと思える者が多く現れるのは、ユウも嬉しかった。
やはりモチには、幸せになってもらいたいと思う。
モチがそうだと言ってくれたように、ユウも、モチのことが好きなのだ。
そうか、とアレサンドロは、グラスに注いだグラッパ・ブランデーを、ちびり舐めた。
「あいつも気の毒だよな。どっちつかず、ってのもよ」
「他の魔人にも、会いたいと言ってた」
「ふうん」
「いるのか？まだ……魔人は」
「いるぜ。十五年前に生き残った連中なら、何人か知ってる」
「そうか」
「それに……」
「？」
「きっと今でも、どこかで魔人化が起こってる」

ユウは、ハッと息を呑み、小さくうなった。
魔人の数が増えるのはいい。
しかし、
「また……戦になる、のか」
それが、手放しで喜べない。
アレサンドロも同様なのだろう。
「目の上のコブだと思われるようになりゃあ、そう、かもな。そこまではわからねえよ」

吐き捨てるように言い、空のグラスを満たした。
続けて、ユウにもボトルを差し出すが、こちらは、ほとんど減っていない。
「酒、駄目か？」
「ん」
ユウは、それをごまかすように、グラスへ口をつけた。
実は、ユウは酒に弱い。
ビールでさえ一時間かけて一杯、飲めるか飲めないか、なのだ。
四十度以上にもなるグラッパなど、考えるだに恐ろしい。
「早く言えよ」
アレサンドロは笑い、グラスの中身を少量、木製のタンブラーに移した。
「こいつは水割りでもいけるぜ」
「ん……すまない」
「なあに、お前が大酒飲みって方が気味悪ぃさ」
かなり薄めに作り、口をつけてみると、ぶどうの香りが残る、意外にも飲みやすい酒である。
「美味い……」
アレサンドロはまた、笑った。

「考えてみりゃ、お前とサシで飲むのも、これが初めてだよな」
言いながらアレサンドロは、ユウのグラスに残ったグラッパを、ひと口に喉へ流しこむ。
「街に戻っても別行動。互いの寝ぐらも知らねえで、一ヶ月。……ハ、それでよくお前も、俺を相棒だなんて思えたもんだな」
ユウは、うつむいた。
「俺だって、何度も疑問に思ったんだ」
「じゃあなんで早々に手を切らなかった？俺は最初に言ったはずだぜ。いつ見限ってくれてもかまわねえ、ってな」
「それは……」

正直、ユウにもわからない。

「本当に、わからねえよな、人生なんて。昨日まで赤の他人だったのが、ちょいとした拍子に運命背負い合ったり、味方だと思ってた奴が、敵に転んだりよ」

グラスの酒が、ゆらゆら揺れる。

「浮かんだと思や沈み、沈んだと思や浮き……。モチにだって、これから、いい目が回ってくるのかも知れねえ。俺にも、お前にもな」

「ああ……だと、いいな」

ユウは心底、そう思った。

「まあ、お前くらいになりゃ、神様がドでかい幸運を落としてくれるさ」

「だから、茶化すな」

「ハハ、ハ」

と、そのとき。

どすん、と、なにかが、戸板に打ち当たった。

チンピラと眼鏡

「おい、もう逃げられねぇぞ」
それは、いら立った、若い男の声であった。
「出て来やがれ！いるのはわかってんだ！」
と、蹴りつけられたらしい戸板が激しくきしみ、かんぬきが鳴る。
無論すでに、
「あいつら起こしてくる」
アレサンドロは奥の寝室へ向かった。
残されたユウは、つかんだ太刀の鯉口を切り、いざとなれば迎え撃つ覚悟で、戸口の前に立った。
「おい、ぶち破るぞ、コラ」
……やってみろ。
腰を落とし、扉を見すえるユウの瞳に、闘志がふくらんだ。
……が。

「聞いてんのか！シュトラウス！」

「！」
違う。
「違う、アレサンドロ。これは、人違いだ」
「なに？」
モチとヤマカガシを床下へ放りこんだアレサンドロが、駆け戻ってきた。
「人違い？」
「俺たちじゃない。こいつが探してるのは、シュトラウスだ」
「シュトラウス？知らねえな」
ユウも同様である。
しかし、そうこうしている間にも、

「出てこいや！」
外の男はわめき、扉を蹴り続けている。
「やれやれ、とにかく、話してみるか」
でなければ、本当にぶち破りかねない。
首をかき、アレサンドロはひとつ、咳払いをした。

「どなたです？」

途端、静かになった。
優しげに作られたアレサンドロの声に、明らかに動揺している。
動揺が、広がっている。
「これは……ひとりじゃねえな」
アレサンドロが、つぶやいた。

「テメェこそ、なにモンだ」
男が言う。
「ここの住人です」
「あぁ？」
「なんのご用でしょう」
すると、なにやら言い争う声が聞こえ、今とは別の男が、
「夜分遅くに、すまないが……」
話を継いだのだ。
ユウとアレサンドロは、思わず、顔を見合わせた。
先ほどのつれ合いとは到底思えない、落ち着き払った口ぶり。
ふたりの胸に、一抹の不安がよぎった。
はたして……、

「私は、聖鉄機兵団、紋章官ヴィットリオ・サリエリ」

……まさか、としか言いようがない。

アレサンドロを見ると、口は固く結ばれ、眉が、ぐっと寄っている。

鞘を握るユウの手に、力がこもった。

「聞きたいことがある。外に出たまえ」

「……少し、お待ちを」

言うが早いかアレサンドロは、ユウを引き寄せた。

「出るしかねえな」

「俺も行く」

「いや、……いや、そうだな。お前はあれを持って出ろ」

「閃光弾か」

「なにもなけりゃあ、それでいい。だが、もし俺が首を二回叩いたら、あれを奴らの目の前に放って、すぐにここへ逃げこめ。心配ねえ。ここには出口が山ほど掘ってある。きっと逃げられる」

「わかった」

「頼むぜ」

手早く打ち合わせを済ませ、支度を整えると、ふたりは丸めてあった毛織物を、マントのごとく羽織った。

これは、居間で眠るアレサンドロの、毛布として用意してあったものである。

「幸運を祈ります」

床の跳ね上げ戸から、頭だけ出したモチが、小さく言った。

その隣では、ヤマカガシの大きな目玉も、不安げに揺らいでいる。

「心配ねえさ」

自分に言い聞かせるように再び言ったアレサンドロは、水がめの水を音を立てて飲み下し、口をぬぐった。

ユウは、細く、長く、息をはき出した。

表に出たふたりを待ち受けていたのは、日中のような明るさと、各々、手に光石灯を掲げた、数十人の騎士だった。

これほどの人数が近づいていたことに何故、気づかなかったのか。
そんな苦々しい胸の内をひた隠しに隠し、ふたりは前へ進み出た。
値踏みするような目つきでこちらを眺める紋章官は、年の頃三十前後。銀縁眼鏡の、涼やかな顔立ちをしている。
対して、
「こちらは、グライセン帝国、聖鉄機兵団軍団長がひとり、ギュンター・ルドル・ファン・ヴァイゲル将軍閣下であらせられる」
金の胴鎧を身にまとい、組み立て椅子にふんぞり返る将軍は、ユウから見ても若く、暴力的で高圧的な、抜き身の刃のような男であった。
さっきの、チンピラが……。
さすがのユウも、驚きを隠せない。
紋章官サリエリは続ける。
「閣下の御前であることをわきまえ、問いに答えるように」
ユウとアレサンドロは、頭を垂れた。

「では、身分と名を」
「はい。私はデローシスのアントニオ・カッサーノ。これはロストンのトビアス・エルマンデルと申しまして……」
アレサンドロは、さもそれらしく並べ立てた。
「学者です。学者の、卵です」
「それが何故ここに」
「我らの師、ジョゼッペ・ペルデンドスが、あの隠居所に住まいしておりまして……。なにぶん、師は高齢につき、こうして月に一度、世話に上がっている次第」
「……なに」
仮面のようなサリエリの表情が、初めて動いた。
「ジョゼッペ・ペルデンドス……あの？」
「誰だ？」
とは、ギュンター。
「高名な化学者です。近年では、ビスも熱も使わず金属同士を接合させる、面白い液体の提案をされています。油を原料とする以前までのものと違い、この液体の利点としては熱に強く、耐薬品にも優れ……」
「もういい。さっさと本題に入れ」
「……は」
サリエリは小さく首を振り、眼鏡を正した。

「君たちも感づいているだろうが、我々は人を探している。若い女性だ」
「はあ」
「背丈は、そう、君の肩まで。赤い髪、赤い目」
ユウの脳裏に、あの三〇八式の少女が浮かんだ。

おそらくアレサンドロもそうだったのだろう。ふたりの目が、ぴたりと合う。

しかし、だからといって、今のふたりに関わる理由はない。

そ知らぬ顔で、

「申し訳ありませんが……」

アレサンドロが言いかけた、まさに、そのときだった。

「いました！」

息せき切って駆けこんできた若い騎士が、ギュンターの前にひざまずいた。

「発見、拘束いたしました、閣下！」

「……おう」

ギュンターは、にんまりと犬歯を見せて笑った。

「でかした」

「はっ」

「どこだ」

「ただいま、こちらに」

これを聞き、焦ったのはユウとアレサンドロである。

あの少女は、ふたりを見知っているのだ。顔を合わせれば、どうなるか。

かといって、ここで下手に動けば、かえって自らの首を絞めることになる。

ふたりの頬に、冷や汗がつたった。

そこに、

「痛ッ！引っ張んないでよ、バカ！能無し！役立たず！」

まさに、デローシス砦で聞いた、あの声。

髪を振りたて、叫び散らすララを中央に、騎士の小隊が闇を割って現れた。

ララは左足を引きずり、木製の手かせを馬上の騎士に引かれている。
衣服も顔も、黒く泥に汚れていた。
「ク、ハハ、いい格好だな、シュトラウス」
「ギュンター！あんた、しつっこいよ！」
幸い、ユウたちは目に入っていないらしい。
「おうおう、負け犬の遠吠えにしか聞こえねぇな」
「フン、どっちが」
「あぁ？」
「そっちこそ、Ｌ・Ｊじゃあたしに勝てないからって、こんなことで調子に乗ってさ。あんたの手柄じゃないっての、バカ！」
つり上がったギュンターの目が、血走った。
「帰って絵本でも読んでりゃいいの。それがお似合いでしょ！」
「……、の、ア、マ！」
ついに、ギュンターが拳を振りかぶった。
サリエリは止めない。
ララは固く目を閉じ、歯を食いしばった。
顔を背けないのは、精一杯の反抗。真正面から受けてやるつもりだった。
……が、

「あれ……？」

衝撃が、来ない。
恐る恐る、目を開けたララは、
「あっ！」
驚きと喜びの、ないまぜになった声で叫んだ。
ギュンターの腕が、手首をつかまれ、上向きにねじり上げられている。
その相手こそ、誰あろうユウだったのだ。

「ンだ？テメェ……」
青白い炎のような殺気と、無言のままに立つユウの凛然とした視線とが噛み合い、火花を上げた。
一触即発。
すぐに、アレサンドロが間に入った。
「これは申し訳ありません。このエルマンデルは神兵崩れで、どうも血の気が多くて……」
しかし、それをさらに押しのけ、
「やっと、捕まえた！」
ララが、ユウの胸へしがみつく。
「え……？」
「あぁ？」
ギュンターの、そして周囲の気が完全にそがれた。

ここらが潮時か。
アレサンドロは、今しがたユウの懐からすり取った閃光弾へ、すかさず着火した。
と、同時に、
「ッ！なにしやがる！」
ギュンターを突き飛ばし、その目の前へ、放る。
「ギュンター様！」
爆発物を察知したサリエリが、ギュンターの上へ覆いかぶさった。
その瞬間。

パギュン！
「うわっ！」
「あっ！」

……このときすでに、ユウとアレサンドロは穴ぐらへと逃げこんでいる。

大荷物をかかえて。

炎立つ

床下実験室のキャビネット裏に隠された抜け道を、ものも言わずに駆け抜けると、すぐに河原に出た。
エ・ルーゼ一帯の森を貫く、幅十メートルほどの川である。
その中でも、ここは下流。森外れに近い。
「モチ、お前が先に立て。このままここを抜けるぜ」
アレサンドロが服の土を払い、言った。
「了解です」
と、答えたモチは、穴の中では飛べず、ヤマカガシに抱かれて、ここまできている。
そのヤマカガシは今、闇におびえ、震えていた。
「ヤマカガシ」
「ひ……、な、なに……？」
「お前には、悪いことしちまったな」
ヤマカガシは小刻みに、かぶりを振った。
「よそに移るか、しばらく、ほとぼりを冷ましたほうがいい。一緒にロストンまで行こうぜ。たぶん、先生はまだいるはずだ」
「あ……、うん、うん、ジャッカル、あれならいい」
「だろ？」

「アレサンドロ……こっちは、どうする？」
「うん？」
見ると、ララを横抱きにかかえたユウが、息を弾ませている。
ララは手かせに拘束された腕を、そのユウの首に巻きつけていた。
「なんだ、お前。ずっとそれで走ってきたのか」
ただでさえ天井の低い道だったのだ。横抱きでは尚更つらい。
正直、ユウの腰は悲鳴を上げていた。
「この子が……、放してくれないんだ」

だってぇ、と、ララは唇を尖らせた。
「ダメだって言うんだもん」
「なにを」
「ついてくるなって」
「当たり前だ」
と、ユウ。
「だから、いいって言うまで、絶ッ対放さない。あたしは、絶対、一緒に行くんだから！」
ユウはげんなりと、眉間にしわを寄せた。
「さっきから、この調子なんだ」
「はあ、なんでまた」
「わからない」
「いや、そうじゃなくてよ」
「？」
ユウはまだ、気づいていないのだ。
アレサンドロとユウとでは、向けられる視線の意味が、まったく違うことを。
「……ハ、まあいいさ」
アレサンドロは、おどけた調子で肩をすくめた。

「どうするもこうするも、ここに置いていくわけにもいかねえだろ？」
「む……」
「要するに、自分で歩いてくれりゃいいってことか？無理だと思うがな」
「え、ちょっ、やめてよ！バカ！変態！」
「変態はねえだろ。いいから、見せてみな」
アレサンドロは、静かにブーツを引き下ろした。
「やっぱりな」
左足首が太く腫れ上がっている。

そういえば、とユウは思った。
ララが足を引きずっていたことを、思い出したのだ。
「どれ……」
手のひらで押し包むように患部をさぐり、その具合をみたアレサンドロは、
「ああ、やっぱり、動かさねえ方がいい」
折ったタオルに水を含ませ、足首に巻きつけ、固定した。
「しばらくはこのままだ。お前、もうちょい運んでやれ」
「……わかった」
「お前も、変な抱きつき方してねえで、背負ってもらえ。手かせも外してな」
「えー」
あくまで横抱きにこだわるララは、不満げに声を上げた。

そこへ起こった、突然の轟音。
『ハッハァ！』
なんと、川向こうの木立に黄金色のＬ・Ｊが現れ、猛然と五人に襲いかかってきたのである。

「ギュンター！」
それはまさしく、オリジナルＬ・Ｊ。
ギュンター専用将軍機『ミザール』。
『言ったろうが！もう逃げられねぇってなぁッ！』
大気が逆巻き、ミザールの拳が頭上へ迫った。

「くそっ！」
飛び出したのはアレサンドロである。
左手をミザールへと突き出し、
「伏せろ！」
叫ぶや否や、光が走る。

『なに！』
実体化したN・Sオオカミは、ミザールの腕を数歩しざって受け止めると、
『おおらぁあ！』
一本背負いに投げ打った。
宙を舞ったミザールの巨体は、地を揺らし、木々を数十メートルに渡り、なぎ倒した。
『行け！』
アレサンドロが叫ぶ。
『行け！すぐに追いつく！』

ユウとモチは顔を見交わし、うなずいた。
考えている暇はない。
ユウはララを背にかかえ直し、ヤマカガシの手を取ると、森の中へと飛びこんだ。
先を行くモチの白い羽毛が、墨を流したような暗闇に浮かんで見える。
光石灯の使えない今、その姿と、その目だけが頼りだ。
ユウはとにかく、わき目も振らず、ひた走った。
まずは、森を抜けることだ。
アレサンドロならば心配ない。相手が将軍であろうと適当にあしらい、上手く逃げてくれるはずだ。

しかし……。
そんな想いをあざ笑うかのように、爆発音が一転、森を揺るがした。
にわかに周囲が赤く染まり、振り返り見たユウたちは、
「ああ……」
茫然と立ちすくむ。
そこには渦を巻く火柱が、天を貫くばかりに、ごうごうと噴き上

がっていたのである。

火炎のミザール

燃えさかる炎の中。
オオカミと数十メートルの距離を隔てて対峙するミザールには、圧倒的な威圧感があった。
他の、どのＬ・Ｊとも似つかない、金色の装甲。
両肩から角のように突き出した、二門の火炎放射砲。
そう、あの火柱を起こし、森を地獄へと変えたのは、まさにこれである。
虚をつかれたオオカミの左腕もまた、黒く焼かれてしまった。
『ハ、なるほど。結構な芸をお持ちで』
などと言いながらも、アレサンドロは苦々しい思いを隠しきれない。
将軍ギュンター・ヴァイゲル。
先ほどまでは、そうとも思わなかったが、今、ミザールに搭乗したこの男は、なにかが違う。
こいつは、やばい。
そう、本能が告げていた。
ブナの巨木が、火の粉を散らし、倒れた。

『シュトラウスをやったってのは、黒い奴だってな』
唐突に、ギュンターが口を開いた。
『あの辛気臭ぇ野郎の方か。チェッ、つまらねぇ』
『なに？』
『つまらねぇって言ってんだ』
アレサンドロはむっとした。
実は逃げるタイミングを計っていたのだが、さすがにこれは、聞き捨てならない。
そもそもアレサンドロは、十五年前の戦から、鉄機兵団に対して

好意的な感情など持てるはずがないのだ。
『……俺じゃあ、楽しめねえってか』
と、湧き上がる怒りを押さえきれず、
『随分と、言ってくれるな！』
大地を蹴りつけ、飛び出していた。
『ハ、ハ！なら、楽しませてみろよ！』

先手を取ったのはミザールだ。
ミザールは両腕を交差させ、腰に装備した二条の鞭を、引き抜く勢いのままにオオカミへと走らせる。
十字に襲いくる鞭の、その上を飛び越えつつ剣を振るうも、オオカミの切っ先は、退いたミザールの胸先をかすめただけであった。
さらに、着地際。
『そら！止まるな！』
と、間髪入れず打ちこまれたひざ蹴りを転がり避けたアレサンドロは、背部タンク目がけ斬りつけたが、これもまた、いとも簡単に弾かれてしまう。
『チィッ……！』
この運動性といい、強度といい、
『バケモノめ……！』
火傷で引きつれた左腕が痛んだ。
『ク、ハハッ、どうした？ブルって、もらしちまったか？尻尾を巻いて逃げるかよ。ええ？犬コロ！』
『誰がだ、この、ヒヨコ頭！』
『ハッ』
憎らしく笑ったギュンターは、フットペダルを一気に踏みこんだ。
ドッ、と加速したミザールが、一瞬でオオカミの眼前まで迫り、その喉輪を持ち上げる。
『その調子だ！最期まで強がってみせろ！』
と、上半身がめりこむほど強烈に、ミザールは、オオカミを地面

へ叩きつけた。
『がっ……は！』
『まだ死ぬなよ！』
ミザールは、そのままさらに十回、二十回と、まるで虫を踏み潰すかのごとく、オオカミの顔面を蹴りつける。
『ハッ、ハハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハッ！』
陶酔した笑いが、焼け落ちていく森に響いた。
『ああ、つまらねぇ！つまらねぇな！なんだ、Ｎ・Ｓってなこんなもんか！どいつもこいつも、ビビりやがって！見ろ！ただのガラクタじゃねぇか！化けモンが作った、でかいだけのガラクタだ！出てこい、シュトラウス！テメェを逃がそうとした野郎はこのザマだぞ！ええ？』
と、蹴る。蹴る。蹴る。
しかし、
『……ガラクタ……？』
オオカミの震える指は、尚もミザールの足をつかんだ。
『あいつらを……』
『あン？』
『あいつらのＮ・Ｓを、舐めるなよ、ガキが』
『……へぇ』

力なくも、まだ挑みかかろうとするオオカミを、ミザールは再び、右腕一本で持ち上げた。
頭部が、かなり激しく損傷している。
後頭部はひしゃげ、折れ曲がったひさしが、右目を完全に覆い隠している。
『ハン、これがガラクタじゃなかったら、なんだ？』
コクピットのギュンターは、おぞましく笑った。
『ポンコツか？クズ鉄か？』
『ぐ、く……』

機械の指が食いこみ、オオカミの喉が、みしり、と音を立てる。
白く、かすみかける意識を、割れんばかりの頭痛がつなぎ止めた。
『……おい、犬コロ』
ギュンターが、言う。
『テメェこそ舐めんなよ?』
カバーが開き、オオカミの喉へ押し当てられた手のひらに現れたのは、噴射口。
『この、『火炎のミザール』を、よ!』

ドォンッ!

空気を震わせる爆音と共に、ゼロ距離から噴出した紅蓮の炎が、オオカミの全身を包みこんだ。
『ッ……ァ、ァ、ァ!』
アレサンドロの身体が大きくのけぞり返り、言葉にならない悲鳴が上がる。
首元の装甲板が、じぶじぶと沸騰した。
『どうだ。ゴミに似合いの最期じゃねぇか』

そこに。
炎の海を躍り越え、現れた巨影がひとつ。
刃が閃き、支えを失ったオオカミは、その場に崩れ落ちた。
『ハッ!出やがったな、黒いの!』
一息早く飛び退いたギュンターが、待ってましたとばかりに、叫んだ。

『すまない。遅くなった』
『……ユウか……馬鹿野郎が、戻ってきやがって。……ハ、助かったぜ』
途切れ途切れに絞り出されるアレサンドロの声は、かすれている。
それもそのはず。カラスの胸に抱かれたオオカミは、ひどい有様だった。
頭部は言うまでもなく、喉を中心に下顎から胸、肩までが無残に焼けただれている。
炎に囲まれたこの状況では、N・Sを降りることもできず、アレサンドロは今、どれほどの苦痛を味わっているものか。
ユウの胸が痛んだ。
『あとは任せてくれ』
『ユウ……！やっつけようなんて、思うな』
立ち上がるカラスにすがり、オオカミは辛そうに、ごくりと喉を鳴らした。
『背中についてる、タンク』
『あの筒か？』
うなずいたオオカミのあごから、溶けて皮膜のめくれ上がった装甲板が剥がれ落ちた。
『燃料だ。カラスの剣なら……斬れるかも、しれねえ』
『わかった』
ユウはオオカミを横たえ、静かに腰を上げた。
『話は終わったか？』
言うミザールは、両手の鞭をもてあそんでいる。
『どうだ？とっときの秘策でももらえたか？』
と、その口調はいかにも馬鹿にした様子だが、ユウはそれに答え

ず、ただ、ゆったりとした動作で太刀を抜き払い、脇へと構えた。
『チェッ、やっぱり、辛気臭ぇ野郎だぜ』
と、吐き捨てるミザールの腰も低く落とされ……。
『行くぞ！』
ふたりが、同時に叫んだ。

オオカミとカラスならば、跳躍力、加速力、最高速度、すべてオオカミが勝る。
純粋な意味での力も、そうである。
その中でカラスが誇るのは運動性。そして特別ごしらえの太刀だ。
『そらそらそらぁッ！』
雨と降り注ぐミザールの鞭をかいくぐり、カラスは徐々に間合いを詰めていく。
振り払われるその隙を突き、身体を反転させると、
『ッ！』
ユウは、ミザールの胸元をすくい上げた。
やったか、と思われたが、そうやすやすと斬られるギュンターではない。ミザールは、右足を引いてそれをかわし、照準を合わせる間もなく、火を放っている。
ユウは前転で回避し、起き上がりざまにもうひと太刀、横なぎに振るった。
『ハッハァ！』
刃は、空を切ったのみである。
火炎放射の反動で、ミザールはすでに体ひとつ分、カラスと距離をとっていたのだ。
さすが。
見守るアレサンドロさえ舌を巻く手並みである。
そうするうちにもミザールは、動きを止めることなく再び転進。
カラスへと突貫した。
『ぐっ！』

真正面から体当たりを受け、カラスの身体が地を転がった。
『つ、ぅ……』
追撃は、なかった。

『おいおい、これでしまいか？』
ギュンターは、操縦桿からも手を離す余裕ぶりである。
指を鳴らし、
『まだ、あの犬コロのが……』
言いかけた、そのときだった。

『……なに？』

ギュンターは、我が目を疑った。
電子音が鳴り響き、メインモニターに警告文が映し出されたのである。
『破損？なにが！』
まったく覚えがない。
コントロールパネルを操作し、光点の示す場所を目視で確認すると、
『な、あっ……！』
バックパックの左右側面から、下へ突き出ている二本の燃料タンク。
左側のそれが、ものの見事に切断されている。
こぼれた液体燃料によって、ミザールの左わきから足先まではすでに濡れつくし、ゆらゆらと、炎の色を照り返していた。
『ンな……、馬鹿な！』
むき出しのタンクはミザールの急所。しかしそれ故に、様々な合金を何枚と重ね合わせた、絶対的な強度が与えられた場所、でもある。
それを、音もなく、

『斬りやがっただと……！』
ギュンターの衝撃は大きい。
そして、次の瞬間。
左の足元に投げ入れられたものを見て、ギュンターは、さらに大きく目をむいた。
火が残ったままの、枝。
投げたのは、今しも立ち上がったユウである。
ギュンターの顔が、醜くゆがみ……、
『テ、メ、ェ』
うめいた、直後。
液体燃料を浴びた、ミザールの左足が火を噴いた。
『因果応報だ！ギュンター・ヴァイゲル！』
『う、うおおおぉぉぉッ！』
叫びは炎の渦に巻かれ、かき消えた。

『狙って……やったのか？』
ひじを立て、半身起こしたアレサンドロが、言った。
『ああ……、たぶん』
『大した奴だぜ、お前は』
『あんたとカラスのおかげだ。立てるか？』
『いちち、もっと、優しくやってくれ』
呼吸は荒いが、さしあたってのことはなさそうだとみて、ユウはひとまず胸をなで下ろした。
『起こすぞ』
オオカミの腕を肩に回し、引き上げる。
ぱちん、と、背後で火がはぜた。

『ク、ククッ……そりゃそうだ……』

『！』

ユウとアレサンドロは、心臓を握られる思いがした。

振り向くと炎の中、だらりと腕を下げ、棒立ちになったミザールが、ふたりに顔を向けている。

その両目は、炎の色より尚、紅い。

『火炎のミザールが、火でやられるわきゃねぇわな』

左タンクが、バックパックのジョイント部分から切り離され、落ちた。

同時に踏み出したミザールの、その一歩ごとに、まとう炎の勢いは弱まっていったが、鬼気迫るその姿は、ふたりの背筋を凍りつかせた。

『おい、そんな死にぞこない放っとけ。まだ続けんだろ？』

ユウは、オオカミをかかえたまま、後ずさった。

『続けねぇ、なんて言わねぇよなぁ……、言わせねぇぞ、クソがぁッ！』

黒くすすけたミザールの右腕が前へと突き出され、手のひらと右肩、ふたつの砲口の奥に陽炎が揺らめいた。

駄目だ。

この体勢では、とてもかわしきれない。

『ユウ、いい、置いてけ……ッ！』

『馬鹿言うな！』

『ゴチャゴチャ言ってる暇ぁ、ねぇぞ！』

ギュンターは操縦桿を握りこみ、トリガーを押しこもうと、指に力をこめた。

が……。

『ぐっ！』

それより早く、ミザールの眼前で弾けた連続的な火花。

ギュンターは握りを外し、とっさに目を覆ってしまう。
『ちっくしょう！さっきの！』
閃光弾。
『モチか！』
間に割って入ったのは、まさしく白フクロウである。
「ユウ！力を貸します！撤退を！」
『させるかぁぁッ！』
ミザールの火砲が、今こそ火を噴いた。

『モチ！』
モチの背後へ、炎が迫る。
ユウは手を伸ばし、その手のひらに、小さな身体を包みこんだ。
『ぅ、あっ！』
ユウの目に耳に、突如、ノイズが走った。

飛翔

炎の大奔流がすべてを呑みこみ、押し流していく。
ユウとアレサンドロは、それを足の下に見ていた。

『飛ん、だ……！』
『飛んでる！』

オオカミをかかえたカラスの身体が、夜空に浮いている。
ユウが、なにかをしているわけではない。
ただカラスの翼だけが、自分の意志とは関係なしに大きく風をはらみ、力強く上下に動いている。
肩甲骨の内側で柔らかい棒を転がされているような、奇妙な感覚だった。
『ホウ、どうやら、上手くいったようです』
『モチ？モチなのか？』
しかし、その姿はどこにも見えない。
いや、その声が、Ｎ・Ｓカラスの喉を震わせて出たような気がしたのは、ユウの勘違いだろうか。
『まさか、モチが……！』
『その通り、乗っています。あなたと共に、カラスに』
モチが言葉を出すたびに、ユウの頭の中はムズムズとした。
『二人乗り……？マジかよ……』
『可能性はゼロではないと、ペルデンドス博士が。ですが今は、それをくどくど説明している暇はありません』
『あ、ああ、そうだな。このまま逃げよう』
『ヤマカガシと、あいつは？』
『案内します。ユウはアレサンドロを離さないように。翼は引き受けました』

『わかった』
ふと顔を上げると、空が近い。星が近い。
ユウの心臓が高鳴った。
叫び出したい衝動が胸に詰まり、かえって言葉が出なかった。

その頃。
地上では、ギュンターが天を見上げ、
『しゃらくせぇ！』
わめいている。
しつこく右腕が持ち上がり、そこから何発、何十発と打ち出されたのは、手のひらにおさまるほどの火球だ。
『五感は共有です。目だけは開けておいてください』
言うや否や、ユウの身体に、ぐ、と重力がかかった。

右かと思えば左。左かと思えば右。
回転し、宙返りし、モチの操る翼はカラス本体やオオカミの重さなどものともせずに、次々と襲いくる火球の合間を、踊るように飛び回る。
帝国Ｌ・Ｊ、トップクラスの性能を誇るオリジナル機、ミザールのセンサーでさえ、その動きに追いつくことはかなわない。
それでもギュンターは、
『くそっ！くそっ！畜生っ！』
取りつかれたように、トリガーを押し続けた。
こうなると、タンクを失い、左ふたつの砲門が使いものにならなくなったのは、痛い。
『それさえ、なけりゃあ……！』
そう思わされることが、より一層、ギュンターを苛立たせた。
自分より劣っているはずのＮ・Ｓに、いいようにあしらわれている。
それが許せず、ギュンターは躍起になった。

『チィッ！』
みるみる遠くなるカラスの背中。
こうなりゃあ……。
リミッターを解除するしかない。最後の手段だが、負けるよりはましだ。
苦い顔を作ったギュンターの指が、素早くパネル上を走る。
小さな警告音と共にリング状のピンが持ち上がり、
『ぶっ殺してやる！』
と、引き抜いた。
……いや、引き抜こうとした途端に、なんと、ひと足早く安全装置が働き、燃料の供給が止まってしまった。
なんという運のなさ。
『ッ！……こ、の、野郎！』
ギュンターの叩きつけた拳によって、手元のサブコントロールパネルが砕けて飛んだ。

そして……。
カラスとオオカミは無事、ミザールの射程を脱したのだった。

戦いの終結を見計らったように、空から、大量の散水が始まった。
編隊を組み、飛ぶのは三〇三式。
どこにひそんでいたものか、地上でもＬ・Ｊ部隊による延焼防止措置、消火活動が始まっている。
『くそ……』
シートに身を投げ出し、憔悴した様子で目蓋を閉じたギュンターの耳にも、ミザールの装甲が水を浴び、ジリジリ音立てるのが聞こえた。
そこへ現れたのは、錆鉄色のＬ・Ｊ、一〇〇二式改『アルコル』。
サリエリ用機であった。

『炎のご使用はお控えくださいと、申し上げたはずです、ギュンター様』
『……へっ』
開口一番。大丈夫か、でも、気に病むな、でもない。
そこか、と、ギュンターは思わず口元を緩めた。
だが、心配も同情も慰めも毛嫌いするギュンターにとっては、これぐらいが丁度いい。
むっくりと身を起こし、
『シュトラウスはどうした』
聞いた。
『申し訳ありません。取り逃がしました』
言いながらも、モニターに映るサリエリは、特別焦っているようには見えない。
『今の連中と行ったか』
『十中八九、まず間違いはないかと』
『……ならいい。テメェのことだ、どうせ後はつけさせてんだろ』
ギュンターは大きく息をはき、再び天を仰いだ。
『いいか、見てろよ……。次はあの鳥野郎、ただじゃおかねぇ。ただじゃあな……』
メインモニターのイエローサインが消え、外気温、内部装甲温共に、一定の値まで下がったことを知らせる表示が映し出された。
森は、夜の闇を取り戻しつつあった。

カーゴに乗った三枚目

「N・Sの操作は、その体内に、乗り手が情報として取りこまれることでおこなわれます。それをつかさどる装置が核、ここまではいいでしょう」

木の皮で作った、例のサングラスを目に貼り、モチはヤマカガシの頭に乗っている。

「今、カラスの核における許容情報量を、仮に、十としましょう。アレサンドロは十一か、十二か。とにかく収まりきれません。対してユウは……」

「足りねえってわけか」

「その通り。ですからその足りない隙間に、私が入る余地があったというわけで……」

「もう、そんなことはどうでもいいっての。ねぇ、ちょっと休もうよぉ」

ララは、杖がわりの枝につかまり、ズルズルとその場にへたりこんでしまった。

ここソップ山道は、ロストンへの裏街道だ。

右手の斜面から、先端の尖った砂礫が時折滑り落ちてくるような粗末な道で、主に木材や鉄材を乗せた、四頭引きの荷馬車のための運搬道として利用されている。

本来ならばロストンまで、デローシスから続く平坦な中央街道を行くのが旅人の常だが、そこは追われる身。巻き添えを避けるため、ひと気の少ないこちらを選んだ。

しかしそうなると、足をくじいたララにはつらい。

「もう歩けない。足痛ぁい」

ララは泣き声を出した。

「駄々をこねるな。置いてくぞ」

「じゃあユウ、おぶってよ」
「無理言うな」
ユウはユウで、めまいの残るアレサンドロに肩を貸しているのだ。とてもその余裕はない。
「ケチ」
唇を尖らせたララは、それでも立ち上がろうと地面に手をついた。

「……あれ？」
手のひらに伝わる、かすかな振動。
「ねぇユウ。なにか来る」
「なに……？」
ユウとアレサンドロも、地に這いつくばった。
「Ｌ・Ｊじゃあ、ねえな。馬車か……？」
「いや、音にムラがない。車だ。大きいのが、一台。……カーゴ？」
「どうします。身を隠せる場所はありませんが」
モチは、そわそわ動き回るヤマカガシの上でも、顔だけは常に、こちらを向けている。
「そうだな……。一台なら、鉄機兵団とも思えねえが……」
「なら、いいじゃない。放っとけば」
「お前なあ」
「じゃあ、ぶっ潰しちゃうわけ？」
「そりゃあ……」
アレサンドロは口ごもった。
「でしょ。だったら放っとこ。あ、もしかしたら街まで乗せてくれるかも」
どこまでもマイペースなララに、男四人は顔を見合せ、肩をすくめた。

そして、数分後。
複輪タイヤの豪快な回転音を響かせ、後方の、ゆるい右カーブか

ら姿を見せたのは、ユウの言葉通り、Ｌ・Ｊカーゴだった。
山壁に寄り、道を譲ったユウたちの横を、荒い運転で走り抜けていくその側面には、なんのペイントもなされていない。
「民間だな」
ユウの耳元で、アレサンドロがため息をついた。
通り過ぎたカーゴは、そのまま、山道を登っていく。
……ように見えたのだが。
「なんだ……？」
どういうわけか、数百メートル先で停車したのだ。

運転席側のドアが開き、飛び降りたのは、亜麻色の髪の若い男。
ひざ丈の旅コートがひるがえり、胸と腰に巻かれた太いベルトの金具が、太陽の下、きらり光った。
「や、ども」
男は片手を上げ、間の抜けた挨拶をした。
「病人？乗ってく？」
「いいの？」
答えたのはララだ。
とたんに、男の目の色が変わった。
「やあ、お嬢さん」
うやうやしく、ララの手を取り、
「いいも悪いも、俺の助手席はキミ専用。よければ永遠に座っていてもらいたいね」
「アハハッ、冗談！」
「いやいや、俺は本気よ？」
目を細めたララが、ふぅん、と意地悪く、笑った。
「だったら残念でした。あたしはもう彼のものだもん、ね？」
「は？」
「なぁんだ、彼氏持ち？」
「そういうこと。でも乗せてって」

アレサンドロが口を開きかけたが、ララの手が一瞬早く、それを押さえこんだ。
男は、人懐こそうな顔を笑み崩した。
「オッケー、オッケー。でも……助手席には乗ってくれる？」
「あ、未練がましいんだ」
「ハッハハ、まぁね。諦めの悪い男よ？俺」
そして男は、とんとん拍子に進む話に乗り遅れていたユウから、
「お、おい……」
「いいからいいから、遠慮しっこなし」
と、アレサンドロを引き受けると、
「ほれ、彼氏さんは彼女を連れてきなよ」
さっさと、カーゴに戻ってしまったのだった。
「わ、気がきくぅ」
ララは手を叩いて喜んだ。
「お前……！」
「お前じゃなくて、ララ。ちゃんと名前で呼んで」
「いい加減にしろ。大体……！」
「おーい。早く乗った乗った」
「……呼んでるよ？」
「わかってる。行こう、モチ、ヤマカガシ」
「あたしはぁ？」
「……」
差し出された両手を、ユウは恨めしげににらみつけたが、
「……くそっ」
結局、ララを、横抱きに抱き上げた。
「やっぱりユウって、思ってた通り！」
ララは上機嫌である。

「あれ、それ、おたくらの鳥？」
軽快なモーター音を響かせて、エンジンが回転を始めた。

運転室のフラットな一列シートには、ララとアレサンドロ。
ユウとモチ、ヤマカガシは、その後部、ごちゃこちゃと物の詰まったトランクスペースに乗っている。
「まあ、そんなところだ」
アレサンドロが答えると、
「ははぁ、なるほど、ね」
男は思わせぶりに目を細め、カーゴを発進させた。
「じゃあ、おたくらが、レッドアンバー御一行ってわけだ」
「えぇ？」
ララが飛び上がった。
「なんでそんなこと知ってんの！」
「お、当たり？」
「当たり？じゃない！なんでかって聞いてんの！」
ララは、男の襟首を締め上げた。
「ちょっ！待った待った！運転中よ？俺」
「いいから、早く、ほら！答える！」
「おい、あ、危ねえ！やめろ！落ち着け！」
山壁に鼻をこすりつけ、車体が大きく揺れた。
「うわっ」
「きぃやぁぁ！」
「ブ、ブレーキ！ブレーキィィ！」
「その前に、首放して！」

ざ、ざ、ざりざりざり！

あわや、崖下へ真っ逆さま。
カーゴは、土煙を上げ、止まった。
「ハ、ハ、死ぬかと思った」
男は、ハンドルに顔を埋めた。
「……ごめん」

「ごめんじゃねえよ」
「だってぇ……」
「だってじゃない」
「ううん」
アレサンドロとユウに責められ、さすがのララも、しゅん、となった。
「でも、でもこいつ、絶ッ対、鉄機兵団！どこの諜報部隊か知らないけど、絶対！間違いないって！」
「いやいや、そいつは誤解……でも、ないか？」
「ほらぁ！」
「ま、ま、聞いてよ。全部話すからさ」

オール・オア・ナッシング

「俺の名前はテリー・ロックウッド。三年前に聖鉄機兵団を退役。それからこっちは賞金稼ぎ」

お尋ね者を探し出し、鉄機兵団から賞金をいただくのが彼らの仕事だが、公然と賞金をかけられたわけではない……例えば、駆け落ちした貴族令嬢や、機密を盗み出した軍部関係者などを秘密裏に捕らえ、口止め料込みで大金をせしめたりもする。

「だからこの車には無線がついてて、まあ、近くを飛んでる通信なら、だいたい盗み聞けるようになってるわけ。言ってみれば、情報で飯食ってるようなものだからさ、俺たち。で、これだ」

テリーは、シート周りに所狭しと張りつけられた紙切れの一枚を剥がした。

「『レッドアンバー逃走。協力者あり。二十代男、アントニオ・カッサーノ。トビアス・エルマンデル。年齢不詳、ジョゼッペ・ペルデンドス。白い、フクロウらしき鳥。おそらくデローシス五一二号。例のN・S二体所持。偽名の可能性高し。繰り返す……』っと」

「む……」

「どう？N・Sはともかく、特徴はよく似てるだろ？」

すると、あごをかいていたアレサンドロの指がぴたりと止まり、

「……いや、違うな」

と、言った。

「へぇ、どこが？」

「俺は二十代じゃねえ」

「……ぷ、ハハ。じゃあ三十代？見えないね、旦那」

アレサンドロのグレー、テリーのブルー。ふたりの目が合い、一瞬の沈黙が流れた。

どちらからともなく、にやりと笑い、

「どうする？」

「ふふぅん、さぁて」
「俺たちを売るか？」
「そうだなぁ」
テリーはカーゴを切り返し、アクセルを踏んだ。
「やめとくよ」

「え！なんで？」
息を詰め、やり取りを見守っていたララが、身を乗り出した。
「理由はみっつ。ひとつめ、俺は女の子の涙は見たくない」
「こいつがそんな玉か？」
「うるっさい！」
「ふたつめ。さっきから後ろで、彼氏さんが嫌ぁな殺気を出してる。俺はまだ死にたくない」
「みっつめは？」
「キャッチ＆リリース」
「雑魚は相手にしねえ、ってか」
「いやいや、むしろ稚魚の放流、かな」
テリーは屈託なく笑った。

「こいつを発信したサリエリってのは、すこぶるつきのケチんぼでね。今、おたくらを突き出しても、ひとりにつき一万。四人で四万。鳥込み、足代、手数料と色がついて、せいぜい五万五千。Ｎ・Ｓでも……一機十万かそこら」
「なにそれ、安すぎ！でもあいつならあり得る……」
「でしょ？これが他の将軍なら、少なく見ても三倍、いや、五倍にはなる。Ｎ・Ｓ諸々で、一声、百五十万だ」
「つまり……」
アレサンドロが、シートに腰をかけ直し、言った。
「俺たちに、帝国と喧嘩しろ、ってのか」
「するなと言っても、結局はそうなるさ。Ｎ・Ｓを持ってる限りね」

前を見据えるアレサンドロの眉間に、深くしわが寄った。
「だから、せいぜい引っかき回してもらって、値が上がるだけ上がったところで、俺が釣り上げようってわけ。そうだなぁ、おたくらなら……一千万！一千万はカタい！」
「……ハ、随分とまあ、高く買ってくれたもんだな」

ここまで黙って話を聞いていたユウだが、腹の底では、あまりいい気分ではなかった。
鉄機兵団に追われることは仕方ないとして、それを商売にされているのだ。
他人の生き死にを、金で。その態度が気に入らなかった。
人ごとだからだ。
最低だ、賞金稼ぎって連中は。
ユウの握りこぶしに、力がこもった。
「どうしたの、彼氏さん。気分でも悪い？」
「……俺は……」
「ん？」
「俺はあんたには捕まらない。誰も、捕まえさせない」
「……ふふん」
テリーは、口元だけで笑った。
「楽しみだね。おたくとやり合うの」
その言葉には自信がみなぎっている。
「ユウ、カッコいい」
ララは惚れ惚れと、背もたれ越しにユウを見つめた。

さて、それから小一時間後のことである。
周囲の景色が岩土から森の中へと変わり、ロストンまではおよそ二十キロ、というところで、ザザ、と無線機に雑音が入った。
『ちが……ば……きに……』

と、途切れ途切れに入ってくる言葉を、ユウたちは鉄機兵団の通信かと警戒したが、
「いやぁ、それにしちゃあノイズが多い」
テリーが言う。
無線機のつまみをいくらか調整すると、
『はっきりしねぇか！』
スピーカーを震わせて届いてきたのは、ひどいダミ声であった。
「うは」
『N・Sはどうした！いねぇ？このボケナスどもが！』
「こりゃ、うちの同業者だよ。おたくら狙いだ」
しばし聞き取った様子では、このカーゴを見張っている者がどこかにいるらしい。
それが、たどっているルートや時間帯を、逐一リーダー格の男へ報告しているのだ。
「やれやれ」
額を叩き、アレサンドロが言った。
「一難去って、また一難だ」
「ハッハ、ご愁傷さま」
「ねえ、どうすんの？」
そうだな、とアレサンドロは、しばらく天井を見つめていたが、
「別に」
「は？」
「ここで座って、やり過ごすさ」
悠々と答えた。

「それは……」
「バッカじゃない？」
ララ、そしてユウも、これには目を丸くせざるを得ない。
「そうキンキン騒いでくれるなよ。心配いらねえさ。そこの気が利くお兄さんが、俺達を守ってくれる」

「は？」
今度はテリーである。
「俺が？なんで？」
「なんで？考えてもみろ。俺たちが他の賞金稼ぎに捕まって、一番損をするのは誰だ？」
「う……」
「一千万。諦めるにはでかい。そうだろ？」
「……オール・オア・ナッシング」
「そういうこと」
モチが小さく、ホ、と笑った。
「……か、ぁ、ぁ！大したもんだよ、おたく！わかった、大サービスだ。ロストンまでは俺が請け負うよ」
「ああ。期待してるぜ、賞金稼ぎ」
そしてアレサンドロも、さも愉快そうに喉を鳴らしたのだった。

一方。
路上に立つ五機のＬ・Ｊ。
その足元で、ひとりの男が、
『近づいてますぜ』
無線連絡を受けている。
赤ら顔に髭づら。近くに寄れば、ぷんと臭うこの男こそ、通称バッカス。あのダミ声の主だ。
多くの手下をかかえた、この世界ではそれと知られた男で、そのやり口の手荒さは自身にも賞金がかけられているほど。
そのバッカスが、
「おう。テメェらもこっちに合流しろ。急げよ」
と、無線機のマイクを放り投げるか投げないかのうちに、
「……来やがった」
一本道の向こうに、カーゴが一台、現れた。

枯れ草色の一般的な車体。軍旗もペイントもなし。
報告通りのそれが、ゆっくりとした速度で近づいてくる。
「よぉし、テメェら、わかってんな。殺すんじゃねぇぞ」
コクピットハッチから延びるケーブル式の昇降機につかまり、バッカスもまた、Ｌ・Ｊへ搭乗した。
ちなみにこのＬ・Ｊ、鉄機兵団からの下げ渡し品を改良した、いわゆる改造Ｌ・Ｊである。
バランス悪く両肩の張った、見るからに力押しの機体で、手を加えられたコクピット内部もいかにもゴミゴミとして居住性が悪い。
バッカスは手元の水筒を口元へ運びながら、このあとの酒を思い浮かべて、にやりとした。
『今夜は豪遊だ。へっへ、さあ来い』
カーゴは、手ぐすね引いて待つ、バッカス機の前に停車した。

さあ、まずは脅し文句のひとつでもかまし、震え上がらせるのが常套手段。
バッカスが口を開きかけた、その前に、
『あん？』
運転席のサンルーフが開き、男がひょいと顔を出す。
『テ、テメェ！テリー・ロックウッド！』
「よ。バカのバッカス」
共に賞金稼ぎ。バッカス一味が慌てたのは、言うまでもない。
しかし、それ以上に、
「おたくもツイてないね。またまた俺と仕事がかぶるなんてさ。何回目だっけ？五回？六回？」
『十三回だ！』
何度も煮え湯を飲まされているらしい、と、ユウは感じた。
だが、そんなことはどこ吹く風。
そうだったかな、などとカラカラ笑ったテリーは、トランクスペースから引っ張り出した、金属製の長細い箱を開けた。

現れたのは、木の台座がついた鋼の筒であった。

「銃だ……」

ララがつぶやいた。

「銃……？あれが？」

この広い帝国内において、聖鉄機兵団の一部隊にのみ所持が許可されている小銃、ライフルである。

一般への流出は極端に制限されており、無論ユウたちにとっては、音に聞いても、目にするのは初めてのことだった。

「十三回もやってりゃあ、わかりそうなもんだけどね。俺には勝てないって」

『うるせぇ！今日は違うぞ！テメェは生身、俺はＬ・Ｊ！』

「自慢することじゃないでしょうが」

テリーは、胸と腰の革ベルトで、金具のように光っていた銃弾の一本を抜き取ると、慣れた手つきで装填口に挿入した。

「大体、そんなのはハンデの内に入らない。その馬鹿でかいハンマーが俺を叩き潰すまでに……」

と、ボルトハンドルを押しこみ、

「俺はおたくを三回殺せる」

『う……』

メインモニターに拡大された、テリーの突き刺すような眼差しに、バッカスは全身総毛立った。

軽口ばかりの軟派な男は、今や、どこにもいない。

「どうする？やるかい？」

引き金にかかった指が、バッカスをおびやかす。

『う、く、く……』

『バ、バッカスさん……』

たまりかねた手下の一人が、うろたえ声を出し、

『バッカスさん……』
『う、うるせぇうるせぇ！』
バッカス機は、地を踏み鳴らし、左隣のＬ・Ｊを小突いた。
『ええい、くそっ！今日のところは譲ってやる！だが、覚えてろ！次はねぇ！次はねぇからなぁ！』
お決まりの捨て台詞を残し、五機のＬ・Ｊは弾かれたように、森の中へと姿を消した。

「はい、お利口さん、と」
テリーは、銃弾を抜き取ったライフルをケースに戻すと、するりと運転席へ戻った。
「なるほど、そいつが、お前さんの商売道具ってわけだ」
「まぁね」
ケースを再びトランクへと放り、テリーはカーゴを発進させる。
「でも、余計な詮索はご無用。それこそ、商売道具、だからさ」
「推して知るべし」
「そういうこと」
テリー・ロックウッドは、元の、よく笑う青年に戻っていた。

先生

「ねえ、なんで鉄機兵団辞めたの？」
「そりゃあ、古今東西、男が身を持ち崩す理由はふたつっきゃない。女の子か、お金」
「わかった！使いこみ！」
「あんねぇ、さすがにそれは退役じゃ済まないでしょ。ていうか俺、そんなにモテなさそう？」
「少なくとも……モテそうには見えない」
「ひどい！」

そんな他愛もない話に花を咲かせ、一行は無事、ロストンに到着。関所をくぐった。
ここは、ウィンザー地方でも有数の田園都市である。
ことにワインは評判で、いくつものワイナリーが帝城への献納を許可されている。
近年は天候にも恵まれ、車窓から見える畑地や果樹園は、どこも、のどかを絵に描いたようだった。
「で？どちらまでお送りしましょうか、旦那様」
ララからもらったキャンディバーをくわえ、おどけ調子にテリーが聞いた。
「お前さんは？」
「俺？別に。今日はもう、酒飲んで寝るだけ」
ふうん、アレサンドロが顎をかく。
「確か、街道沿いに神殿があったな」
「ああ、風神様ね」
「そこでいい」
「あいよ。あ、この飴、美味いね。もう一本」
「だぁめ」

ララの手が、ぴしゃり、テリーの甲を打った。

さて、それからまた、しばらく道なりに走り……。

風神フーンの神殿は、収穫の始まった、ぶどう園の一角にあった。

石造、レンガ造の多い神殿建築の中で、フーン神殿は唯一、木造が基本とされている。

ここもその例にもれず、ひとかかえもある木柱が、反り返った切妻屋根を支えていた。

「それじゃ、頑張ってちょうだい」

神門の前へユウたちを降ろし、テリーはキザに指を立てた。

「世話になったな」

「なぁに、これも先行投資、ってね」

「そういや、そうだったな」

なら貸し借りなしだ、と、アレサンドロは笑う。

土ぼこりを上げ、市街地へ向けて走り始めたカーゴに、

「またね！」

ララが手を振ると、テリーの腕が、同じように窓から振り返されるのが見えた。

荷台を覆うシートの端も、まるで名残を惜しむかのように、いつまでもはためいていた。

「……あのＬ・Ｊも、銃とやらの威力も、結局見れずじまいになっちまったな」

「いいじゃない。きっと大したことないって。ね？ユウ」

「いちいち、くっつくな」

「い、いた、いたたたッ！」

「！」

「……なんてね」

「行こう、アレサンドロ」

このときユウは、ふとアレサンドロの様子に、かすかな違和感を覚えた。
どこか考えこんでいるような目。
だがそれも、まばたきするほどの一瞬のことだ。
「ああ、そうだな。行こうぜ」
と、答えたときには、いつもと変わらぬ様子に戻っている。
アレサンドロは、挙動不審なヤマカガシの肩を叩き、カーゴが向かったのと同じ方角へ歩き始めた。
ユウは手を差し伸べたが、
「いや、もう、大丈夫だ」
確かにその足取りは、随分とはっきりしてきたように思える。
「俺より、あっちを頼むぜ、彼氏さん」
アレサンドロが指差したのは、もちろんララだった。
「やめてくれ、あんたまで」
「ハ、まあ、とにかく頼む。怪我人がいた方が、なにかと都合がいい」
「む……」
振り返ると、期待しきったララが、満面の笑みで両腕を伸ばし、抱き上げられるのを待っている。
ユウは、げっそりと肩を落とした。
「そういや、モチはどうした。随分静かだな」
見ると、ヤマカガシの腕の中で、
「寝てる」
「ハ、豪気なこった」

空は低く垂れこめ、今にも一雨落ちてきそうな湿気が、先刻から肌を包んでいる。
家々も随分増えた街道筋を小川に沿って南へ切れこむと、右手に見えてきたのは、椀型の盛土の上に設けられた、祭壇ばかりの月神殿。

目指す場所は、その隣にあった。
背の低い柵に囲われた、白壁に赤瓦の平屋家屋で、芝生に覆われた庭を抜けて玄関をくぐると、そこは椅子と机だけの簡素な部屋である。
長椅子に年寄りが三人腰かけ、油で揚げた餅菓子をつまみ、茶を飲んでいた。

「あらあ、怪我でもなすったの？」
ユウの背にかかえられたララを見て、三人は一斉に立ち上がった。
「あらあら、可哀想にねぇ」
「痛い？ここの先生は、いいお医者様だからね。ほら、ちょっと、先生ぇ！先生ぇ！」
「先生ぇ！患者さんですよぉ！」
「わかっている、わかっている。聞こえているとも」

五十がらみの、ひょろりと背の高い医者が、奥の部屋から苦笑まじりに現れた。
長い黒髪をすべて後ろへ流し、頬のこけた顔は土色に焼け、目は、見えているのが疑わしいほどに細い。
羽織っているのは、麻袋を継ぎ合わせたような、粗末なローブである。
医者はアレサンドロとヤマカガシの姿に、一瞬驚きの表情を見せたが、
「さあ、ジェンナさん、これがいつもの薬だ。気をつけてお帰り。雨が降りそうだ」
「はいはい、先生には本当、いつもお世話になって……」
「なあに、これが私の仕事だよ。さあ、私はまだ、この患者をみなくてはいけないからね」
そ知らぬ顔で優しく背をなで、手を振って、老婆たちを送り出した。

そして、一息つくと、
「アレサンドロ……！」
「先生」
向き合ったふたりは、固く抱擁を交わしたのだった。
「ヤマカガシも久しぶりだ。ああ、昔なじみが訪ねてくれるというのは、なんとも嬉しい。さあ、なにもないが、まずは座ってくれ」
医者はいそいそと、机に残された湯飲みを盆に乗せ、うながした。
「いや先生、その前に、こいつを見てやってくれねえか」
「ああ、そうか。ふふ、私としたことが、どうも浮かれているようだな」
はにかんだ医者はララを座らせ、どれ、と左の足首を覆う包帯を外した。
すでに乾ききっている膏薬のかけらを口に含み、
「キハダか。捻挫かな？」
「間違いねえ、と思う。そいつは、水で練った」
「うむ、それでいい。見立ても、間違いはない」
「そうか、よかった」
「薬を替えよう。準備を頼む」
「わかった」
アレサンドロは、奥の診察室へと向かった。

「さ、て……」
ひざまずいたままの医者の目が、ユウとララに向けられた。
「今更だが、君たちは？」
問いかける柔らかな声色に、警戒心など微塵もない。口元には微笑みさえ浮かんでいる。
「あの子といる、ということは……魔人か？」
「冗ッ談！」
「では人間か。それはいい。それはいいな」
眉尻を下げ、笑みが、さらに深くなった。

「どういうことだ？あんたは、魔人じゃないのか」
「ふふ、魔人だとも。魔人だからこそ、人間のあの子が心配でならないのだ」

家族

「あの子と初めて会ったのは、二十年近くも前になるが……」

医師ウォレン・ストーン。本性を魔人ジャッカルというこの男は、椅子に腰かけ、居住まいを正すと語り始めた。

二十年前といえば、戦前。

魔人と人間との確執が、まだそれほど表に現れていなかった頃の話である。

当時、医師として帝国内を経めぐり歩いていたジャッカルは、あるとき、飢えで倒れた、ひとりの少年を拾った。

身に着けているものは薄汚れていたが、同年代の子に比べれば肉づきもよく、ジャッカルにはこれが、身分の高い家の子どもであることがすぐにわかった。

しかし少年は、ジャッカルがどれほど諭そうと、アレサンドロという名前以外、語ろうとしない。

家に戻ることを、かたくなに拒む。

捨ててもおけず、仕方なくジャッカルは、アレサンドロを連れて歩くことにした。

「とはいえ私も、子どもを育てるのは初めてのことだったのでね、はじめのうちは、なかなか上手く接することができなかった。まあ、それでも……」

しばらく経つとアレサンドロは、見よう見まねでジャッカルの手伝いをするようになり、もともと素質もあったのか、簡単な術式や治療ならば、ひとりでこなせるようになった。

さらにはそれが自信になったのかして、無愛想だった顔に表情が表れるようになったのもこの頃だ。

そこで、アレサンドロの世界や見識をより深めさせるためにジャッカルが預けたのが、あの、オオカミの砦だったのである。

「それから後は、随分と笑うようになって、やれやれ、これでひと安心と思っていたところに、あの戦だろう。今でもあの子の心の内には、人間に対する不信が少なからず残っている……と、私は、思っていたのだが、ふふ、そうではなかったのだなあ」

ララが、ユウの裾を引いた。

「実のところ我々は、アレサンドロも、各地の砦に救いを求め集まった者たちも、いずれ世情が落ち着けば、以前の場所へ戻るよう勧めるつもりだった。人間の何倍もの寿命を与えられた我々と彼らとでは、やはり、住む世界が違うのだ。悲しいことだが、人間は、人間の世界でのみ幸せになれる。君たちのような友人がいれば、あの子はきっと、自分の生きるべき世界で、もっと幸せになれる……」

「俺は、そうは思わねえな」

「！」

見れば、鉢を持ったアレサンドロが、背を壁に預け、立っていた。

「あのとき、あそこにいた連中はみんな思ってたぜ。ここが一番だ。ここが死に場所だ、ってな。十分、幸せに生きてた」

「アレサンドロ……」

「それを勝手に奪い取っていったのは、帝国の、人間だ」

「やめなさい」

「もし選ぶ権利があるってんなら、俺は迷わず、こんな人間の世界なんかじゃねえ、あんたたち魔人の世界を選ぶ」

「だが、お前は人間だ。人間なのだ、アレサンドロ」

「だから、なんだ！」

鉢が、机に叩きつけられた。

と、同時に。

その左中指に納まった指輪も、ジャッカルの目にとまった。

「それは……！」

「……オオカミだ」

ジャッカルが息を呑んだ。

「カラスも見つけた」
言われたジャッカルの、なんとも恨めしげな視線がヤマカガシに注がれる。
そして、
「……ああ、なんという因果だ。なんという……」
降り出した雨にかき消されるほどのか細いうめきをもらし、ジャッカルは、深く深く、うなだれてしまったのであった。

「……アレサンドロ」
悄然と、ジャッカルが言った。
「お前は、そのN・Sで、一体なにをしようというのだ」
押し黙ったアレサンドロは、ただ眉を寄せ、固く、拳を握りしめる。
「答えなさい」
ユウもまた息を詰め、次の言葉を待った。
そして……。
「ああ、そうだ……」
絞り出すように、アレサンドロは言った。
「俺はこいつで、帝国を、潰してやりてえと思ってる。あんたたちの作ったN・Sが、ガラクタなんかじゃねえと、そう証明してやりてえと思ってる……」
「やはり、そうか……」
ジャッカルは、泣き声を出し、顔を覆った。
「やめてくれ、仇討ちなど。死にに行くようなものだ」
「それならそれでいい。俺も、カラスとオオカミを殺した。裁かれて当然だ」
「まだ、そんなことを言っているのか」
「じゃあ、どうすりゃいい。教えてくれ先生。俺をどうしてえんだ」
ジャッカルは、
「その指輪をよこしなさい。そしてもう二度と、ここへ来てはいけ

ない。それが、お前のためだ」
アレサンドロの答えは、決まりきっていた。
「……できねえ、できるわけがねえ……ッ」
「アレサンドロ」
「もう消せねえんだ！この入れ墨も！思い出も！傷も！だったら、全部背負って生きてくしかねえだろ！」
そして、尚もあふれ出る想いを抑えつけるかのように唇を噛みしめ、降りしきる雨の中、飛び出していってしまったのだった。

それから、数刻の後……。
後を追ったユウは、小川にかかる板橋の上に、アレサンドロの姿を見つけた。
うずくまり、雨に打たれるまま首を垂れたその顔には、じっとりと濡れた髪が、張りついている。
その隣に、ユウもまた、腰を下ろした。
「……ユウ」
一瞥もくれずに、アレサンドロが言った。
「お前を、だましたわけじゃねえ。あのときは本当に、N・Sを眠らせてやりてえと思ってた。ついさっきまで、そのつもりだった」
「ああ……わかってる」
「でもよ、俺はやっぱり、手放したくねえんだ。恨みも、忘れることはできねえんだ」
「ああ」
「俺に、その力も、資格もねえってことはわかってる。あいつらの遺したN・Sを、手前勝手な復讐に使っていいはずねえってのも、先生が、俺を心配してくれてる気持ちもわかってる。それでも、俺は……」
深く、ため息をはく。
「俺はもう、自分でもどうしてえのか、わからなくなっちまった……」

遠くで、小さく雷が鳴った。

「なあ、アレサンドロ」

ユウは、極力明るく、声を作った。

「アルケイディアに行こう」

アレサンドロは答えない。

「俺も昔、よく言われた。悩んだときは動け。悩む前に動け。悩んでいいのは……」

言いさして、ふ、と笑う。

「いや……。だから、とにかく行こう」

アレサンドロは薄目を開け、ちらりとユウを見たが、特に追及はしなかった。

「アルケイディアに着いて、それでもまだ、やり残したことがあると思うなら、そのときこそ戻ってくればいい。俺は、とことんつき合う」

「俺が……帝国との殺し合いを望んでもか」

「ああ」

ユウは、即座に答えた。

「ふたりなら、帝国にだって、そうそう負けはしないさ」

すると、

「三人です」

いつの間にやら、ユウの背後の欄干に、ずぶ濡れのモチが止まっている。

「ユウ、これはまったく水臭い話です。私も行きます。たとえそれが、皇帝の鼻先であっても。……もっとも」

モチは翼を羽ばたかせ、水を払った。

「私を『ひとり』と数えるかどうかは、疑問ですが」

そこへ、さらに、

「ユーウー！」

雨コートを羽織ったララが、足を引き引き、駆けてきた。

「やぁっと見つけた。あ、アレサンドロも。じゃあ、早く帰ろうよお。もう、風邪引きそう」
「……」
「……なに？」
「……台無しだ」
しかし視線を落とすと、ララは足の治療もそこそこに追いかけてきたらしい。足首に巻かれた包帯がほどけかかっている。
これはこれで心配していたのかもしれないと思うと、ユウはひとりで帰れ、とも言えなくなってしまった。
「おそらく、この子は駄目と言ってもついてくるのでしょう」
モチが言う。
「え？え？どこに？」
「四人です」
「……ハ」
「ねぇ、だから、なにがぁ？」

翌朝は、快晴となった。

「これを持っていくといい。薬と、道具を少し、まとめておいた。N・Sの修理にも使えるだろう」
ジャッカルは、少し気まずそうに布袋を差し出し、アレサンドロも、それを無言で受け取った。
「西海は遠い。気をつけて、行きなさい」
「ああ」
昨晩から今まで、ふたりは目も合わせられずにいる。
「アレサンドロ、その……私は……」
もじもじと身をよじり、ジャッカルがなにか言いかけたが、
「なあ、先生」
「な、なんだ？」
「戻ったら一度、顔見せに来る。それくらいはいいだろ？」

「アレサンドロ……！」
ジャッカルは、矢も盾もたまらず、アレサンドロを抱きしめた。
「私は……、私はなんということを、お前に……」
声を震わせたジャッカルの細い目に、涙が光る。
「ああ、ああ、なにが悪いものか！お前は私の息子だ。いつでも、何度でも帰っておいで」
「先生……ありがとう」
「わ、私こそ、私こそだ……、ありがとう……ありがとう……」
ひしと抱き合うふたりの姿に、ユウとモチは顔を見交わし、うなずき合った。
かたわらに立つヤマカガシの大きな瞳からも、大粒の涙が、こぼれ落ちていた。

「……じゃあ、もう行くぜ、先生」
「うむ、うむ……。ヤマカガシのことは心配しなくていい。しばらくはここで、共に暮らすつもりだ」
「わかった。ヤマカガシも、元気でな」
しゃくり上げながらヤマカガシは、アレサンドロやユウたちと抱き合い、また涙した。
「そちらの友人たちも気をつけて。どうか、この子を支えてやってください」

さざ波立つ水たまりに、陽の光がきらめいている。
差しかかった曲がり角で振り返ると、ジャッカルとヤマカガシが、まだ、大きく手を振っている姿が見えた。
「いいなぁ、家族かぁ」
背負われたララが腕を伸ばし、しみじみと言った。
赤い髪が風に吹かれ、青空へ、ふわりと舞い上がった。

家族（後書き）

ここまでで基本編と言いますか、第一部完、という感じです。
ダラダラ、グダグダしておりますが、今後とも、よろしくお願いいたします。（；´Д｀A）

最ッ低！

「ね、飴買ってきてもいい？」
先を、跳ねるように行くララが、振り返った。
ユウに背負われることを喜んでいたララでも、ようやく足首の腫れが引き、不自由なく歩けるようになったことが、よほど嬉しかったらしい。
今朝から笑顔が絶えない。
「好きにしな」
アレサンドロが答えると、
「やった！」
走り出した。
「派手に動くなよ！」
「わかってるって！」
「西門集合だ！」
ララは大きく手を振り、人ごみに消えた。

ここはウィンザー地方、治領都市ウィンザー。
治めるのは、領主にして帝国七将軍筆頭、ジークベルト・ラッツィンガーである。
とはいえ、将軍としての責務をかかえるラッツィンガー自身が、この地にいることは滅多にない。
おかげで、こうしてユウたちも、若干の余裕を持って街を歩き回ることができるわけだ。
無論、当座の食料を調達できれば、いつも通り街を抜け、野宿するつもりでいる。

「大丈夫なのか？ひとりでやって」
言いながらユウは、胸に抱いたモチをかかえ直した。

モチは、例によって寝ている。
「心配か？」
「……そういう意味じゃない」
「また、そうツンケンすんな。女に好かれんのは悪い気分じゃねえだろ？」
「俺はもっと……静かな女が、好きだ」
「へえ」
アレサンドロが、にやりと笑った。
「お前でも、女の好み、なんてもんがあるのか」
「当たり前だ」
「言っとくが、明るく優しく、慎ましやかで家庭的、なんてのは『好み』じゃねえ。男全員が持ってる、ただの『理想像』だぜ」
「……悪かったな」
「プ、ハハ、ハ」

門が閉まるまで、まだ時間がある。天気もいい。
もう少し、のんびりしていこう。
ララは噴水の縁に腰かけ、買ったばかりの紙包みから、キャンディ・バーを一本取り出した。
「あ、レモン」
しゃぶると、とろりとした甘酸っぱさが、口いっぱいに広がる。
隣では、飴売りの手回しオルガンが、新しい曲を奏で始めていた。
「……なんだっけ、この歌」
有名な童謡。
頭をひねるが、名前だけが一向に思い出せない。
「……まいっか」
巻き上げられ、送り出されていくオルガンの譜面を、ララはそのまま、飽きることもなく眺め続けた。
一曲目が終わり、二曲目が終わり……。
そうして、ふと気がつくと、

「あっ！」
空が茜色に変わっている。
「いっけない！」
外門は、日の入りと共に閉鎖されるのが決まりである。
すでに、ユウたちは待っているに違いない。
ララはひょいと立ち上がり、紙包みを胸に駆け出した。
と……。
「お許しくださいませ！どうか、どうか！」
耳をつんざく女の叫び声に、ララは思わず足を止めた。

見ると、騎士三騎の前に、転がった水桶と、町娘がひれ伏している。
「貴様！ジラルド様のご乗馬に水を跳ねるとは何事か！」
「下民風情が！」
居丈高な、従者らしき騎士ふたりに言葉汚く罵られ、
「も、申し訳ございません！申し訳……ッ！」
娘は泣き崩れ、もはや半狂乱の態だ。
「またか……」
「自分で桶を倒しておいて……」
そうした人々のささやきも、入るともなしに耳に入ってくる。
ララは、なんとも言えぬ嫌な気分になった。
そこに、
「おい、お前たち」
鼻につく粘り声で、主らしき騎士が、言った。
顔こそ夕暮れの逆光に黒く覆われているものの、その傲岸な態度は、ララのよく知る貴族、そのものである。
その貴族はなんと、
「馬の足を汚した罰だ。足を切り落としてやれ」
などと言うではないか。
振り向き、にたりと笑った従騎士のおぞましい面に、

「ひ……ッ！」
娘は激しくかぶりを振り、地を這うように逃げ出した。

「た、助けて……！助けて……！」
しかし、それまで哀れみの目をもって様子をうかがっていた領民たちも、引き潮のごとく、その場から離れていく。
救いを求める指先は、むなしく、空をかき回した。
「クク、ク、無駄だ、無駄だ」
馬を降りた従騎士は娘の襟首をつかみ、主の前へ引き立てると、
「ほぅら、立て」
ひとりが、その身体を羽交い絞めにした。
娘のひざが、歯の根が、がたがたと震えている。
重たげに抜かれた剣が、ゆっくり、持ち上がり、
「いやぁあぁぁッ！」
娘が絶叫した。

そのとき。
「な、なんだ、貴様！」
つかつかと歩み寄ってきた赤毛の少女に、騎士たちは驚いた。
まさか、止めに入る者がいるとは。
と、思うと突然、その少女は剣を抜いた騎士の顔面に、ためらいもなく紙包みを叩きつけ、叫んだ。
「ちょっと、あんた！」
ララの剣幕に、貴族を乗せた白馬が数歩、後ずさった。
近くで見ると、貴族は二十代の、なるほどやはり、下品な面構えである。
「馬の足を汚したくなかったら、靴でも履かせれば？」
「なに？」
「代わりに足切るなんて、意味わかんない！」
「このっ！」

呆気に取られていた従騎士ふたりがつかみかかり、なんの対抗策も持たないララは、簡単に拘束されてしまった。
噛みつくようなララの視線に、見守る群衆が、皆、目をそらす。

最低、最低！あんたたち、みんな……！

「最ッ低！」
「ッ……、無礼者！」
乗馬用の鞭が、したたかに、ララの頬を打った。

駒

冷たく、硬い床の上に、ララはぺたんと座りこんでいる。
ベッドもなく、見るべきところもなく。
天井近くに開けられたひとつきりの窓から、ただ月明かりが差しこみ、鉄格子と壁に、白い四角形を描いていた。
「ユウ、どこまで行っちゃったかな……」
この牢で目を覚ましてから今まで、ララは堂々巡りを繰り返している。

おそらく、自分は置いていかれた。
なんとなしに、そう思う。

寂しい。
ララの指が、胸のブローチにかかる。

裏側のスイッチを押せば、五分とかからずサンセットが飛んでくるだろう。

逃げるのは簡単だ。

そうか、それなら……、

「もう少し、待ってみようかな」

もしかすると、ユウが助けに来てくれる、かもしれない。

……この調子である。
「あーあ、口なんか出すんじゃなかった」

丁度、その頃。
小さな燭台の、ひらひらとした灯りを中心に、ふたりの人物が対峙していた。
ひとりは、あの貴族。
もうひとりは、ともすれば闇に溶けこんでしまいそうなほど黒く、艶のない甲冑に身を包んだ、騎士らしき男。
いや。
実を言えば、男であるかどうかも定かではない。
その人物の顔は、鎧と同じ、黒の鉄仮面によって覆われていたのだ。
「いや、まさか貴殿のような方が、直々においでになるとは驚いた」
貼りつけただけの笑みを浮かべる貴族の額には、うっすらと、汗がにじんでいる。

「貴公」
鉄仮面が、言った。
「手柄を立てたくはないか」
抑揚のない、深き地の底をうごめいているかのような声である。
貴族は、ごくり、喉を鳴らした。
「手柄、とは？」
「貴公も、レッドアンバーのこと、耳にしているだろう」
「う、うむ。二体のN・Sと共に、逃走中だとか……」
「ウィンザーに入っている」
「はっ……？い、いや、馬鹿な。こちらとて、駐機場、カーゴ、検問に怠りは……！」
「声が大きい」
「う……」
慌てて口を押さえ、貴族の男は、周りを見回した。

風の音さえ、聞こえない。
ほっ、と胸をなで下ろし、
「……とにかく、こちらに抜かりはない」
「だが事実、入っているのだ、ジラルド卿」

再び場所を戻し……。
「ララ」
「うぅ……ん」
考え疲れて眠ってしまったララは、夢うつつに声を聞いた。
「ララ」
聞き覚えのある声。
「ユウぅ……？」
薄く目蓋を開けると……、
「キャッ！」
黒々とした丸い目が、すぐ近くにあった。
「な、なんだ、モチか、びっくりしたぁ」
「これは、失礼しました」
モチは首をすぼめた。

「……あれ？」

「はい？」
「モチ？」
「はい」
「なんで、ここにいるの？」
「はて、あなたの様子を見に、ですが」
ということは、
「ユウ、ここにいるの？」
「この屋敷のそばまで来ています」

「置いていかなかったの？」
「無論です」
答えを聞く度に、ララの目は輝きを増し、手が、わなわなと震えた。
嬉しい。
嬉しい。
「ど、どうしよう、モチ。あたし、叫んじゃいそう」
「我慢です」
「無理、もぅ無理」
なにかを探し求め、牢内を落ち着きなく見回したララは、最終的にモチをつかみ、その腹へ口を押し当て、
「〜〜〜ッ！」
思いの丈を爆発させた。

そうして……、
「……ふぅ、スッキリ」
羽毛から離れたララの顔は、蒸れと酸欠で赤くなっている。
「それは結構」
腹羽をなでつけたモチは、ひょこひょこと鉄格子へ向かい、看守の様子をうかがうと、
「さて」
何事もなかったように、切り出した。

「聞きました。女性を助けたとか」
「別に。そんなつもりでやったわけじゃないし」
「ホウ」
「腹立ったただけ」
あの貴族に、そしてなにより、陰口ばかりで傍観を決めこむ、卑屈で卑劣な領民たちに。
「仕方ありません。狂犬と知りつつ手を出す者はいないでしょう」

「でもぉ……」
「その貴族、我々の耳に入るだけでも、相当にあくどい男のようです。父の留守をいいことに、やりたい放題。手足を切らせるなど、日常的におこなわれているとか」
「だったら将軍に訴えるとかすればいいじゃない」
モチは大きく、かぶりを振った。
「ララ。ジークベルト・ラッツィンガー将軍こそ、その男の父親です」

「すでに駒は、貴公の手の内にある」
鉄仮面が静かに、腰かけたジラルドの背後へ回った。
「貴公が捕らえた赤毛の娘。あれこそレッドアンバー、ララ・シュトラウス」
「ま、まさか……！」
「上手く使えば、N・Sも手に入る」
重量のある手のひらが、肩に乗せられた。
「レッドアンバー、二体のN・S、その乗り手二名。生死は問わぬ。帝都へ連行するのだ。成功の暁には、父君を出し抜くことも……」
「で、できるか？」
「あるいは、軍団長への推挙を得られよう」
「おお……」
「軍団長、将軍だ、ジラルド卿」
風のない部屋で、ロウソクの炎が、揺らめいた。
見開かれたジラルドの目には、いまや、黒々とした野心のみが凝り固まっている。

「……やろう。やってみせるとも」

武者震いするその肩を、ひとつ、小さく叩き、

「それでこそだ」
す、と、鉄仮面が、ジラルドから離れた。
「はなむけに、新型を一機、進呈しよう」
闇が、言った。
「貴公には期待している」

ララの公開処刑が、ウィンザー中に公示されたのは、翌朝のことである。

前哨戦

「……騎士三名に対し暴行を加えた後、逃走！さらに……！」

長々と読み上げられる罪状を耳の端で受け流し、ララは景色を見ていた。

高く澄み渡った空に流れる、引き伸ばした、わた飴のような薄雲。

悠然と舞うトビ。

淡く透き通った昼の月。

少し目を落とせば、警備にあたる物々しい数のＬ・Ｊと、処刑台上の自分を見つめる、顔、顔、顔。

刑場となったラッツィンガー邸前広場には今、ジラルドによって多くの領民が集められている。

その、先日と変わらぬ同情視線にララは舌を出してやりたくなったが、どうも、それさえも馬鹿馬鹿しく思え……結局、フン、と鼻を鳴らして、再び空を見上げた。

「……よってこの者、断頭刑に処する！」

剣が、ララをせついた。

ニヤつくジラルド・ラッツィンガーを尻目に、断頭台の前へひざまずくと、手錠が外される。

「なにか言い残すことは？」

「別に」

と、通り一遍のやり取りを終え、冷え冷えとした剣を喉に押し当てられたまま、神官の祈りを聞いたララは、大柄な執行人によって腕を引かれた。

ここから再び後ろ手に縛り上げられ、頭に白い袋をかぶせられるのだ。

ひざまずき、斧でおさらばだ。

落ちた首は……。

……うえ。

ララは、想像で気分が悪くなった。

と、そのときだ。

一体のＬ・Ｊが、大音声と共に炎を吹き出し、前のめりに倒れた。

「わぁああ！」

「きゃあぁ！」

蜘蛛の子を散らすように、集まった領民が逃げまどう。

「むぅっ！」

椅子を跳ね飛ばしたジラルドは、目をこらし、

「出たな！」

我が意を得たりと、指を鳴らした。

黒煙の背後に立つは、間違いない。白銀と漆黒、二体のＮ・Ｓ。

ジラルドは、Ｌ・Ｊ部隊に向かい、攻撃開始の令を飛ばした。

と、そこへどうしたものか、

「うわっ！」

ジラルドの上へ、執行人が覆いかぶさってきたのである。

「な、なにをする！」

もがき、暴れるが、執行人は気絶している。

ジラルドは、そのむさくるしい肩越しに、ララを引きさらった黒髪の男が、処刑台から人々の渦へ身を躍らせるのを見た。

「なにをしている！逃げたぞ！」

その声は、群集の悲鳴にかき消された。

「ユウ！ユウ！」

「なんだ！」

戦闘から逃れようとする人波と、ふたりは逆行していた。

肩を押され、足をかけられ。

ユウは、何度も離されそうになるララの手を、その度に、強く握りしめる。

「……ううん、なんでもない！」
ララもまた、決して離れまいと、負けない力で握り返した。
そうして、数百メートル先の、広場の端まで走り続けたふたりを待っていたのは、
『ララ、無事でなにより』
モチの操る、Ｎ・Ｓカラスである。
といってもモチの場合、飛ぶか立つか、しかできないのだが。
「モチ！いろいろ、ありがと！」
と、息を弾ませ、ララが声を張り上げたのは、処刑が決定してから今日までの二晩、モチがララの元へ、飴や薬を運び続けていたからだ。
『なんの、私はただ飛んだだけです。……さ、とにかくユウは、早くＮ・Ｓへ。ここの騎士たち、どうも我々を待ち受けていた感があります』
「わかった！」
『ララは……』
「もっちろん！やるに決まってるっての！」
言うや否や。空の一点が、きらめいた。
雷のような轟きが起こり、ドッ、と地が揺れ、砂柱が立つ。
全員の視線が集まる中、無骨な姿を現したのは、言うまでもなく、真紅のオリジナルＬ・Ｊ、サンセットである。
ララはすでに、ブローチのスイッチを押していたのだ。
「な、なんだあれは！聞いてないぞ！」
執行人の下から、ようやっと這い出したジラルドが、わめいた。
「将軍機か？」
「そ、あたしの」
「え？」
「ねぇ、あそこまで運んで！早く、早く！」
困惑するユウを押しこむようにカラスへ乗せ、ララは、その手のひらからコクピットへと乗り移った。

起動音と共に、デュアルアイに光が走り、
「さ、て、と」
シートのララが、髪をかき上げる。
「なんかこの感じ、久しぶり！」
スピナーの穂先が回転を始め、サンセットの登場で凍りついていた時間も、動き始めた。

帝国直属のＬ・Ｊ騎士団が、『聖鉄機兵団』と呼び奉られるのに対し、地方領主や貴族の私設騎士団は、『地方騎士団』と、あくまで格が低い。
使用されるＬ・Ｊもそれ相応であり、鉄機兵団からの下げ渡しを装甲のみカスタマイズし、それぞれの紋章、旗印をあしらうだけ、というのが一般的である。
将軍の私兵といえど、それは同じだ。
ただし。
この地方騎士、数が多い。
特に治領都市ともなれば、領内のＬ・Ｊ、ほぼすべてが集まっているといっても過言ではない。
カラス、オオカミ、サンセット。背中合わせに立つ三体は、次から次へとわいて出るＬ・Ｊに、四方と空を、易々と固められてしまった。

『上は俺たちがやる』
ユウは言った。
取り囲む黒い装甲の大群は、一定の距離を保ちながら、こちらの出方をうかがっている。
『じゃあ、あたし、あいつのとこ行っていい？一発ぶん殴ってやるの』
『バカ息子か。ああ、好きにしな。お互い、気が済むまでやろうぜ』
『アハハッ！話せるぅ』

バーニアを噴射させ、サンセットが動いた。
同時に押し寄せる、敵機の剣槍。
足底のホバージェットが砂を弾き飛ばし、巨大な盾を前面に構えたサンセットは、その槍ぶすまへ突進した。
『うわっ！』
『わぁ！』
空高く舞い上がったカラスからは、Ｌ・Ｊの隊列が、次々と押し割られていく様子が、はっきりと見えた。
サンセットの行く手には処刑台、そしてラッツィンガー邸がある。
御曹司を守ろうと、多くのＬ・Ｊが操縦桿を切った。
そこへ立ちふさがった、アレサンドロのオオカミが、手招きで挑発し……、
『ユウ！』
『！』
転瞬。
カラスの身体が二十メートルも飛び上がり、飛行型Ｌ・Ｊの切っ先が、間一髪、その足下をかすめた。
『見物は後にしましょう』
『ああ』
そうだった。
敵は空にもいたのだ。
装甲こそ変えられているが、翼型スタビライザーの特徴的なフォルムは、帝国二〇〇系Ｌ・Ｊのもの。
地上と同様、その数、数えきれない。

『移動は頼む』
『了解です』
言うが早いか身をひるがえし、カラスは急上昇を始めた。
『待て！』
当然のごとくＬ・Ｊ部隊も、後に、ぴたりとついてくる。

高度を上げていくカラス。続くＬ・Ｊ。
間隔は縮まりもせず、広がりもせず。
次第にＬ・Ｊの陣形は、気流のあおりを受け、雁行形へ、さらに細い縦列へと変化していく。
そしてついには、隊長機を先頭に、一直線上に並んだ。
地上の人間の姿など、もうゴマ粒ほどにも見えない。
そこで、カラスは反転し、止まった。
体勢を整えるために二度、大きく羽ばたき、カラスは太刀を、正眼へ構え直す。
ひとつ鋭く、ユウは息をはき、
『行こう』
いまだ上昇中の隊列目がけ、今度は、勢いつけて落下した。

ひゅうひゅう、ごうごう、耳元で風が鳴る。
翼が、背に密着するまで折りたたまれた。
Ｌ・Ｊまでの距離が一気に詰まり、ユウは右腕を、太刀の棟に添えた。

一閃。

……Ｌ・Ｊに乗った地方騎士たちは、そのとき、なにが起こったのかわからなかった。
わからないままに、切断された自機の腕や足が、スローモーションのように、空へ流れていくのを見た。
『なんだ……？』
『そんな……！』
『ない！ない！腕が！』
混乱の中、自身も右の肩口を切り落とされた隊長機が、叫ぶ。
『まさか……、まさか生きていたというのか……黒の魔女！』
ドッと、隊長機が火を噴いた。

それを皮切りに、後続のＬ・Ｊも、まるで導火線のように順々と、小さな爆発を起こし、落ちていく。
地表寸前でどうにか体勢を持ち直し、墜落をまぬがれたユウとモチは、言葉なく、それを見守った。
どうやら、どのＬ・Ｊも、脱出装置は生きているようだった。

『……ララはどうしたでしょう』
積み重なった残骸と、油のにおい、なによりオオカミの装甲に刻まれた幾筋もの刀痕が、それまでの乱戦を雄弁に物語っている。
飛行型の多くは広場へ落ち、その下敷きとなった陸戦型も少なくない。
生き延びた者は皆撤退し、広場は今、不気味に静まり返っていた。
『嫌な予感がします』
『ああ』
モチの不安は、ユウもアレサンドロも感じているものだ。
『こういう感じは好きじゃねえな。静かすぎる』
『ララを見つけ、すぐに離れましょう』
『それがいいな』
オオカミは、剣を鞘に収めた。
そこへ、
『ちょっと……、待ってくれ』
ユウの耳が、異様な物音を捉えた。
『うん？』
『聞こえないか？なんだ、この音……』
口を閉ざせば間違いなく、どろどろという響きが、地を揺らしている。
『地鳴りか？いや、こいつは……！』
ラッツィンガー邸の一角が、突如、崩れ落ちた。

嘲笑

ドドドドド……。

来る。

なにかが来る。

崩壊の砂塵が、ララが邸内へ突入する際に空けていった塀の大穴からも吐き出され、舞い上がる。

いや、砂ばかりではない。

ララのサンセットもまた、その穴から逃げるように飛び出してきた。

直後。

ド、オォォォン！

機体全幅、およそ七十メートル。石積みの塀を砕き飛ばし、驚愕の大型Ｌ・Ｊが、その異容を現した。

先端の尖った、四対八足の脚。

天を向く広域カメラアイ。大型クロー。

横走りする様は、まさに、

『カニか！』

それがサンセットを追い、地をえぐりながら、迫っている。

試作一三〇〇式Ｌ・Ｊ。

鉄仮面の置き土産が、これであった。

ただし、

『フハハハ！見ろ、この破壊力！すばらしい！』

メインシートに陣取るジラルド・ラッツィンガーは高笑いしたが、操作はもっぱらサブシートのふたり、あの従騎士たちにまかされている。

それ以外にも、シートはふたつ。してみると、このL・J、局地戦闘における司令塔的な役割も与えられているのかもしれない。

それほど、規格外の機体であった。

『こんなの反則だって！』

と、ようやくユウたちと合流を果たしたララが叫んだのも無理はない。

『また、厄介なもん連れて来やがって！』

『あんなの、ひとりじゃ無理だっての！』

『知ってる型か！』

『知らない！でもすごい硬い！』

『来るぞ！』

カラスは上空へ、オオカミは左へ、サンセットは右へ。それぞれ飛び退いた。

駆け抜けた一三〇〇式は、勢い余って噴水へ激突したが、それさえも意に介さぬ様子で瓦礫を振り落とし、向きを変える。

間近で見る巨躯は、圧観のひと言であった。

『さぁて』

余裕たっぷりに、ジラルドが言った。

『私は寛大だ。諸君には選択の余地を与えよう』

笑いを含んだ声には、薄汚い自尊心に満ちた腹の底ばかりが透けて見える。

こうした『貴族の声』を耳にするたび、ユウは胸に、むかむかするものを覚えずにはいられない。

『おとなしく投降するならば、命ばかりは助けてやるが、どうだ？』

ララは馬鹿馬鹿しいとばかりに、鼻で笑った。

『たわ言は、あの世で言いな！下衆野郎！』

『な、ぁ……！』

ジラルドは絶句した。

『大体、人殺そうとした奴が、なに言ってんの』

『ああ、そりゃ確かに言えてるな』

『でしょ？』

額に青筋を浮かべたジラルドは、頬を引きつらせた。

『よかろう……では、帝都へは死体を送るまでよ！』

と、ひじ掛けに叩きつけられた拳を合図に、両腕を高々と持ち上げた一三〇〇式が、地を踏み鳴らす。

『殺せ！』

号令一下。

一三〇〇式の爪が、左右から、抱きつくように振り下ろされた。

それひとつで、一度に数体のＬ・Ｊを握り潰すことができるだろう剛爪である。

ユウたちは一瞬ひやりとしたが、そこは小型の利。思い思いくぐり抜けると、ぱっと散開する。

そして、狙い通り、

『だから、どうしたというのだ！』

一三〇〇式はただちに方向を変え、標的をサンセットへ絞り、鋏を開いた。

ユウとアレサンドロは隙だらけの背後へ走り寄ると、その脚へ、剣を叩きつけた。

……が。

『！』

装甲に当たった刃は、傷こそつけたものの、ことごとく弾かれてしまったのである。

あのカラスの太刀でさえ、金属塗膜を数十センチ、そいだだけにすぎない。

『そん、な……！』

言葉を失ったユウの腹を、
『ぐっ……！』
持ち上がった、一三〇〇式の脚が直撃した。
かかえるほどもある、太い幹のような脚に蹴り上げられたカラスは、そのまま宙を数十メートルも舞い、落ちた。

『く……』
背を打ち、息が詰まったが、幸い怪我はない。
『……モチ！大丈夫か？』
尋ねると、
『なんとか』
こちらも、無事だったようだ。
『すまない』
『反省は生かしてこそ価値があるものです。行きましょう』
ユウは再び立ち上がり、一三〇〇式へと取って返した。
オオカミとサンセットも、装甲に苦戦している。
『ララも硬い、と言っていました』
『ああ』
『狙うならば、関節か、目玉でしょう』
ユウも同意見である。
ならば、
『飛ぼう』
『了解です』
ひざを軽く曲げ、空へ跳ねると、翼が大きく風をつかみ、浮き上がった。

『む！飛んだぞ！』
広域カメラは伊達ではない。
ジラルドたちは、すぐに、それを察知した。
が、オオカミとサンセットが、

『おい！』
『わかってる！』
方向転換させまいと食いすがる。
カラスは低空を滑り、背後から、一枚成型の背部装甲板、カニでいう甲羅の上へ降り立った。
巨大な眼球は二本。
スモークガラスに覆われた中身は、単純なレンズのみではなく、数種類のセンサーやカメラからなる集合装置のようだ。
ユウは体勢も低く、太刀を脇構えに、素早く甲羅の上を走り抜けると、その集合カメラを、
『むっ！』
斬った。

……いや。
斬ったと思われた刃は、空を切った。
なんと、カメラは一瞬早く、本体へ収納されてしまっていたのだ。
横を見れば、もう一方も同様である。
『フ、ハ、ハ、ハ！おお、危ない危ない』
ジラルドが笑った。
『折角の新型、私も傷つけたくない。ここから先は、サブカメラだけで相手をしようか』
従騎士たちの下品な含み笑いも、もれ聞こえてきた。
『……くそっ』
こちらがカメラを狙うだろうことは、読まれていたのだ。
その上で、馬鹿にされた。
悔し紛れに太刀を突き立ててみるが、結果は同じであった。
『ヒャハハハハ！』
『ハハハ！』
『無駄、無駄』
笑いは、あざけりとなり、さらなる屈辱をユウに与える。

『とにかく一度、アレサンドロたちと合流しましょう』
モチが言った。

悲鳴

『どこまでも、ムカつく野郎だぜ』
『ホンット』
四人は今、ジラルドに、猶予を与えられている。
相談し、この後も戦いを続けるか否かを決めろ、というのだ。
だが実際は、
『どうやって、奴をぶっ壊すか』
の、一択で、話は進んでいる。

『問題は硬さ、それだけです』
『関節も駄目だ。少なくとも、俺の剣は通らねえ』
『いや、そもそも脚をいくら斬っても、あいつは倒せない。胴体を狙う方法を考えないと』
『それも、内側まで届くような、か？堂々巡りだな』
『ハッチを開けさせるってのは？』
『相手から、というのは無理があります。必要がありませんし、兵糧にしても、あの巨体です。内部に蓄える場所はいくらでもあるでしょう』
『N・Sのカニはどうなんだ？』
『悪いが、俺は見たことねえな』
『じゃあ、カニは？生のカニ』
『生……、なるほど、カニはカニ、ということですか』
『カニの弱点、か』
『ひっくり返す……、いや、ありゃあ重そうだ』
『食べるとしたら……脚抜いて……』
四人の考えが、ぴたりと重なった。
『腹か』
『駄目元だ。やってみる価値はありそうだな』

『決まったか。では、答えを聞かせてもらおうか』
円陣を解いた三体に、ジラルドは言った。
こちらは当然、今度こそ、ユウたちは投降するものと信じこんでいる。
命を助けるという条件の下、ひざまずかせ、散々辱めた後で、首を落としてやろう、などと、先ほどまで笑い合っていたのである。
ゆっくりと開いたサンセットのコクピットハッチに、ジラルドは、ほくそ笑んだ。
「答える代わりに……」
『む？』
「こいつをくれてやる！」
一三〇〇式のモニターに大きく映し出されたのは、中指を突き立て、べぇ、と舌を出す、ララの姿。
一度ならず二度までも、
『き、き……、貴様ァァァッ！』
ジラルドの怒りが、頂点に達した。
『あ、な、なりません！』
もがくようにサブシートへ飛びつき、操縦桿を奪い取ったジラルドは、従騎士が止めるのも聞かず、それをぐいと押しこんだ。
加減を忘れた一三〇〇式の脚が空回りし、地面が深く掘り起こされた。
『ふ、う、う……』
目をむき、唇をめくり上げ、鼻息も荒く歯ぎしりするその顔は、もはや貴族のそれではない。
『進め！この、ポンコツが！』
ジラルドが叫んだ、次の瞬間。
一三〇〇式の巨体が雪崩となって、サンセットへと押し寄せてきた。

『頼む！』
『無理すんなよ！』
カラスとオオカミが飛び退く。
ハッチを閉じたララは、胸の前にシールドを構え、
『上ッ等！』
一三〇〇式の突進に、自ら体当たっていったものである。

轟音立てて激突する両者。
サンセットの背部スラスター四機が、白色の炎をはき出し、陽炎が立った。
後ずさる足跡が、地面に長い筋を引き、イエローサインが点灯する。
が……、
『……ば、馬鹿な！』
ついに、一三〇〇式が、止まった。

『いい仕事だぜ、ララ！』
『当ッ然！』
すぐさまカラスとオオカミは、一三〇〇式の足下へもぐりこんだ。
二体は左右に別れ、先頭で支える脚のつけ根に陣取ると、
『う、おおおおぉっ！』
気合一声、それを押し上げた。
『重、てえぇぇ！』
アレサンドロがうめき、ユウの腰も、ひざも、ミシミシと鳴る。
だが、一三〇〇式の平たい胴体は、尻を支点に、十メートルも開いた。
『おのれ！裏返すつもりか！』
ジラルドはわめいたが、そうではない。
ユウたちの目的は、当初から腹部。その一点である。
ララは持ち上がった腹の真正面にサンセットを旋回させると、ア

ザの残る唇をぺろりと舐め、

『逝ッけ！バ、カ、ガニぃぃ！』

ホバージェットの咆哮も豪快に、そこへ、スピナーを突き立てた。
激しい回転音と共に、橙の火花が、弾け散った。

『ええい！』
『な、なりません！転倒いたします！』
『鋏は！』
『届きません！』
『この、役立たずがぁ！』
頭をかきむしり、腰の剣を抜いたジラルドは、ふたりの従騎士を斬り捨てた。
とても正気の沙汰ではない。
そうしている間にも、スピナーの先端と、一三〇〇式の腹部装甲とが、高熱を発し、赤くなっていく。
だが……穴が開かない。
ララはフットペダルを限界一杯まで踏みつけたが、それでも穴は開かなかった。
『こ、の……、いい加減にしなよ！』
ララは素早くパネルを叩き、警告音が鳴るのも聞かず、リミッターを解除した。
勢いを増したスラスターの炎に押され、機体が、半歩前へ進む。
が、既定値以上の出力に、今度は全身の関節部が悲鳴を上げた。
これ以上続ければ、光炉がオーバーヒートする。
ララが感じた、そのときだった。

ビシリ。

一三〇〇式の装甲板に、亀裂が走ったのだ。
『やった！』
嬉々としたララは、操縦桿を押しこんだ。
が、ここにきてなんと、
『あっ！』
突如、スピナーの先端が砕けてしまったのである。

バーニア全開の状態で支えを失ったサンセットは、そのまま装甲板へ突き進む形となり、スピナーの損傷によって回転の緩衝を得られなくなった右腕が、まず、ねじ切れるように破損した。
さらにその回転運動は全身に及び、サンセットは一三〇〇式の胴に激突。その上を飛び越え、二転三転しながら、地面へ落ちた。

『ララ！』
『おい！生きてるか！』
応答がない。
パッ、とカラスを降りたモチが、サンセットの元へ向かった。

『ヒ、ハハ、ハハハハハッ！』
狂喜したのは、ジラルドだ。
『ヒヒ、見ろ！こうなる運命だったのだ！お前たちなど……、ハハハハッ！』
血に濡れた剣を握りしめ、傾いたコクピットの中、踊り回る。
『馬鹿だ、馬鹿だ、ヒャ、ハハハハ！』

……ユウは、全身の血が冷えつくのを感じた。
『くそっ！畜生が！』
吐き捨てるアレサンドロへ、
『……アレサンドロ』
『ん？』

『少しの間、頼む』
『……おう』
答えるや否や、ふたりは、持ち上げたままの一三〇〇式を、もう一度強く、押し上げた。
『いいか！』
『いいぜ！』
ユウが手を離す。
『ぐぉっ！』
オオカミの身体が、ず、と沈み、ユウは、太刀を抜き払った。
その切っ先を、サンセットの刻んだ亀裂へあてがい、
『うぉぉぉぉッ！』
奥の、奥まで、突き通した。
刃の向こうで聞こえたのは、ジラルドの悲鳴、だったのだろうか。
わずかな沈黙の後。
『爆発するぞ！』
転がるように飛び退いたふたりの目の前で、一三〇〇式は連続的な爆発を起こし、閃光に包まれた。
「おい！どうだ！生きてんのか？」
仰向けに倒れたサンセットは、右腕以外大きな損傷はないものの、各所でスパークを起こしている。
バックパックからは白煙も見えた。
コクピットハッチをつつき、ララへの呼びかけを続けていたモチだが、
「わかりません」
答えた。
「ハッチは？開かないのか」

「それもわかりません。私の力では開けられないのです」
「そうか」
ユウはハッチの、向かって左側に設置されているハンドル式開閉レバーへ飛びつき、回した。
幸い、ハッチは生きていた。

「ララ？」
背を下にしたララの、後ろへ垂れた赤い髪が血のように見え、ユウはどきりとした。
顔に血の気はなく、ぐったりとシートにもたれながらも、その手はまだ、操縦桿を握っている。
コクピットへ入ったアレサンドロは、ララにまたがり、脈と頭部を入念に調べた。
「どうです？」
「ああ……」
曖昧な答えに、ユウとモチは気を揉んだ。
「……とりあえず、外に出すか」
と、慎重にシートベルトを外し、
「ユウ、そっちから引っ張り上げてくれ。ゆっくりな」
真剣に言うアレサンドロの表情が、微妙に曇っている。
ユウはなにも聞けずに、ただ腕を伸ばし、ララを預かった。
「ララ……」
モチが心配そうに見つめる中、いつも以上に重く感じるその身体を、落とさないよう、しっかりと抱きしめる。
暖かい。
息もある。
すると突然。
コクピットから伸びたアレサンドロの手が、ララの尻を強烈に張り飛ばした。

「痛ッたぁぁぁッ！」

ユウの腕の中で、ララが飛び跳ねる。

「ちょっ……！なによ、バカ！」

「……」

「あ……」

鼻同士がふれ合うほど近くで、唖然とするユウと、ララの目が合った。

ララの頬がパッと、桃色に染まり、

「ハ、その調子なら心配ねえな」

コクピットから顔を出したアレサンドロが、白い歯を見せ、笑った。

「ホ……！」

「ッ……だましたな、アレサンドロ！」

そう、ララは気絶していただけだったのだ。

「まあ、いいじゃねえか。今回はこいつが一番手柄だ。手ごろな褒美だろ？」

潰れた大ガニの死体から立ち昇る黒煙を避け、トビが風を切って飛んでいった。

裏通りの大物

こうしてユウたちは、どうにか危機を乗り越えたわけだが、飛行機能をかろうじて残した満身創痍のサンセットを、セレン・ノーノの待つキンバリー研へ送り返したララは、次に、風呂へ入りたがった。汚れに汚れた牢での三日間は、野宿以上に許せないものがあったらしい。

とにかくしつこく騒ぐので、わかったわかったとアレサンドロが連れてきたのが、このウィンザー第二の都市、ペルンである。

もちろん、宿は裏通りにある静かなものを選んだが、ジラルド・ラッツィンガーの一件以来、アレサンドロにはこうした、来るなら来い、という、ある意味開き直ったところがある。

部屋は、ララと男ふたり、二部屋取った。

「ねえユウ！ご飯食べに行こ！ご飯！……あれ？」

湯上りのさっぱりとした表情で、ノックもせずにドアを開けたララは、首をかしげた。

ベッドの上には裸足で寝転んだアレサンドロ。窓枠には、モチが座っている。

だが、

「ユウは？」

肝心のユウが見当たらない。

「あいつなら、これだろ」

ララに背をむけたまま、アレサンドロが小指を立てた。

「うっそ！」

「嘘なもんかよ」

アレサンドロは、ごろり、寝返りを打ち、

「まあ、女と言っても……って、ありゃ？」

開け放たれたままのドアに、もう、ララの姿はない。

やれやれ、と、アレサンドロは再び、窓側へ寝返りした。
「悪い冗談です、アレサンドロ」
モチが、叱るように言うのへ、
「別に、あながち冗談でもねえだろうぜ」
「ホウ？」
「女は女でも、メイサって土女神様さ」
「……なるほど」
「なにを祈りにいったかは知らねえが、いろいろあるんだろ、あいつなりに、思うことがよ」
アレサンドロは長く伸びた自身の髪をつまみ、その毛先をねじりまわした。長い野宿旅で、ひどく痛んでいる。
「……あいつには、人殺しまで、させちまったしな」
「それを気に病んでいると？私には、そうは思えません」
「だといいがな」
アレサンドロは、ひょいと起き上がり、靴を履いた。
財布の中身を確認し、
「ちょいと飲んでくる。お前は？」
「ではネズミでも探しにいきましょう。……ム」
「どうした？」
「いえ、ララが、あの道へ」
モチが翼で示したのは、誰が見てもわかる、まさに色街へ通じる路地である。
その入口ではすでに、厚化粧の女たちが盛んに男のそでを引いている。
「やれやれ。まだ、こりねえか」
アレサンドロは頭をかいた。
「モチ、任せた」
「ホ？」
「ネズミを追っかけながら遠巻きに見てりゃいい。なにかやらかしそうなら止めてやれ」

そう言い捨てると、アレサンドロは、そそくさと部屋を出ていってしまったのだった。

「……ま、いいでしょう」

ひとり残されたモチは、つぶやいた。

「えてして大物は、ああした道にひそむものです」

一方。

通りに足を踏み入れたララは、思わず、鼻をつまんでいた。

酒か、香水か、あるいは怪しげな薬をたいているのかもしれない。胸がむかつくほどのにおいが充満している。

まだ宵の口だというのに、不必要にバストを強調した女たちと、それを値踏みする男たちで、通りには、かなりの人通りがあった。

「……よし」

意を決し、胸のブローチを握りしめたララは、両側の娼館に目を走らせながら、恐る恐る歩き始めた。

しかし……。

「うぅ……」

行けども行けども、ユウは見つからない。

娼婦たちが、いぶかしげにこちらを見ている。

すれ違う男たちが皆、目を細めて自分の身体を見ている。

においい以外にも見え隠れする色街のリアルな雰囲気に、ララは今にも、泣き出しそうになった。

……と、不意に。

肩を、何者かがつかんだ。

「な、なによ……」

振り返ると、いかにも人足らしい、不潔な三人組である。

酒のにおいを、ぷん、とさせたその視線は、ララの生足へ、よだれを垂れ流さんばかりに注がれている。

いつもならば、ここで足のひとつでも踏みつけるところだが、この街の空気に完全に呑まれていたララは、ただおびえ、後ずさることしかできなかった。

パッと伸びた腕が、ララの手首を握り、

「いやっ！」

そのときだった。

「ぎゃ！」

ララの背後から突き出された棒に鼻柱を打たれ、人足が仲間を巻きこみ、盛大に倒れたのである。

「無粋なことだ」

立っていたのは、この場に似つかわしくない、襟つきの夜会風マントを羽織った身なりのいい男である。

歳はわかりにくいが、若くはない。一部の隙もなく固められた黒髪には、生え際から白い筋が入っている。

口元に生やされた髭も、丁寧に手入れがされていた。

「ここをどこだと思っている。女が欲しければ、そら、あの店でも買え」

と、男は左手に持ったステッキで、近くの娼館をさす。

もとより、それほどの考えもなく手を出していた人足たちは、怪我をしてはたまらないとばかりに逃げていった。

「あの……、ありがとう」

ララは、ほっと息をついた。

「なに、下心あってのことだ、お嬢さん」

「え？」

にやり笑った男が、さりげなく、ララを抱き寄せる。

顔を埋めた胸元から漂う甘い香水の香りを、ララは不思議と、拒絶する気にならなかった。

「礼代わりに一杯。君を誘い出す理由としては十分だろう？」

男は、ハサンと名乗った。

ところ変わって。
面倒事から逃げたアレサンドロが、大衆酒場の片隅にいる。
カウンター席、テーブル席、二階席、どれも人で埋まり、吹き抜けのホールはその喧騒で、ドラを打ち鳴らしたようになっている。
アレサンドロの前には、ブレンドウイスキーとグラス。
ウィンザーならワイン、と言われそうだが、アレサンドロにとってはジュースのようなものだ。
安物ではあったが久しぶりの酒を、アレサンドロはじっくり、味わいながら喉に通していた。

「や、旦那、久しぶり」
突然、テーブルに山と盛られたフライドポテトとソーセージが、ドンと乗った。
顔を上げれば見知った男。
「テリー・ロックウッド……？」
「お、嬉しいね。覚えててくれた」
「そりゃあな」
ニコニコと、相変わらずの緊張感のない顔だ。
「ひとり？彼氏さんは？」
「酒は、からきしでな」
「そりゃ寂しいね」
テリーは断りもなく、アレサンドロの隣に腰かけ、太いソーセージをほおばり始めた。
そのかたわらには、あの、ライフルを収めた金属ケースが置かれている。
もう来たか、とアレサンドロが思う間もなく、ポテトを口に詰め、テリーが言った。
「聞いてるよ。ここのバカ息子のこと」

無論、ジラルド・ラッツィンガーのことである。
「俺たちの値段も、跳ね上がっただろうな」
「いやぁ、ダメダメ。今回のことに関しちゃ、おたくら、お咎めなしだ」
「なに？」
「ラッツィンガー将軍の、鶴のひと声でね」
テリーの白い歯がソーセージの皮を噛み切り、汁が飛んだ。

なんでもテリーが言うには、ジークベルト・ラッツィンガー将軍は、普段の息子のおこないがどのようなものであったか、まったく知らなかったらしい。
それが今回の件で明るみに出ることとなり、非公式ではあるが、領民へ謝罪した。
ジラルドの死は、病死、という形で、帝都へ報告されたということだ。
「将軍の息子が殺されたとありゃ、当然、鉄機兵団本軍が動かざるを得ない、でしょ？バカ息子のために、それは恐れ多いってんで、まあ、そういうことにね」
ふうん、と、アレサンドロはグラスを傾けた。
「親子だってのに、冷てえもんだな」
「いやいや、公明正大と言ってもらいたいね。将軍は立派な人だよ」
「なんだ、昔の上司か？」
テリーは首を振った。
「鉄機兵団絡みの人間なら、みんなそう言うよ。そもそも息子と言っても、妹の子供、要するに甥っ子を無理やり養子にさせられたって感じでさ。ほら、将軍の地位とか財産ってのは、でかいから」
「なるほどな」
「奥方をもらわない将軍も悪いんだけどね。まぁ実際、鉄機兵団じゃそういう話は結構多いかなぁ。先行投資じゃないけど、逆に、出世の見込みがありそうな子を養子にしたりさ。……あの子もそうだ

よ」
「あの子？」
「ララちゃん」
「あ……。それであいつ、家に戻ってもしょうがねえって……」
「賞金首じゃあ、今頃、縁切られてるかもね。……だからさ、旦那」
「ん？」
「あの子は、気が済むところまで連れてってあげてよ」
「……元から、そのつもりだ」
「さっすが！」
思い切り背を叩かれ、アレサンドロは口に含みかけた酒を吹き出してしまった。

「げほ……ついでにもうひとつ、聞かせてくれ」
「あいよ」
「ジョゼッペ・ペルデンドス、いただろ。どうなったか聞いてねえか」
「ああ。あのおじいちゃんなら、ギュンターに捕まって尋問されたよ」
アレサンドロの眉が、ぴくりと動いたが、テリーはそ知らぬ顔で話を続けた。
「保護されたときには、おびえて話もできなかったらしいけどね、一緒にいた医者が証言したみたい。あのおじいちゃんは無関係で、怪我の治療で偶然立ち寄ったおたくらが、人質に連れ回してたんだ、って。見るに見かねたお医者さんが説得して、なんとか解放させることに成功しました、ってね。それで、一応落着」
「なにもなかったんだな？」
「まあ、無罪放免だね」
アレサンドロは胸をなで下ろした。
そして改めて、ジャッカルにまかせて正解だったと、心からそう思った。

その様子を横目でうかがったテリーは、空になった皿を眺め、
「事実はどうであれ、俺としては賞金首がひとり減って、商売上がったりだなぁ」
ポテトの油で光っている手のひらを、アレサンドロの鼻先へ突き出した。
「なんだ？」
「情報料」
「ツケとけ」
「あんねぇ、鉄機兵団の内部情報を賞金首に流すってのは、リスクがあるわけ。信用問題よ？わかる？」
正論である。
ため息をついてアレサンドロは、小金貨を取り出し、手に乗せてやった。
「はい、まいど」
テリーはその金で、うきうきと追加のサラダを買いにいった。

「それで？なんでお前はここにいるんだ？」
目的が自分たちでないというなら、なにを追っているのか。
アレサンドロは、少し興味を引かれた。
あわよくば、ライフルの威力を見ておきたい気もある。
腹つづみを打っていたテリーは、
「知りたい？」
身を乗り出してきた。

「暗黒街の魔術師って男が、このペルンに来てるって噂でね。でかい山だよ。なんといっても五十万の首だ」
「へえ」
五十万といえば、一般家庭五年分の食い扶持にも当たる金額だ。
ものによってはＬ・Ｊでも買える。
確かにでかい。

「さっき、その宿の方に行ってみたんだけど、お留守でね。で、とりあえず腹ごしらえをしとこうと思ったわけ」
「名前は」
「シャー・ハサン・アル・ファルド」
「知らねえな。どこの国の人間だ？」
「さあ。でも有名な男だよ？泣く子も黙る大盗賊。何年か前に一度捕まったんだけど、こりずに悪さを続けてる。ホントに知らない？」
「ああ」
そのハサンが今、ララと関わっているとは、さすがのふたりも思い至らなかった。

「でさ、旦那」
いたずらな目で、テリーが言った。
「どう？今回は俺と組んでみない？」
「と言うと？」
アレサンドロは、あえて聞いた。
「相手は暗黒街の魔術師だ。おたくは度胸もあれば頭もいい。捕まえるのに手を貸して欲しい」
「フン」
方便でも悪い気はしなかった。だが、それだけでビジネスは成り立たない。
「分け前は」
テリーはしばし考え、
「七・三」
「五・五」
「いやいやいや！」
「と、までは言わねえよ。六・四でどうだ？」
「……あ」
てはは、と、テリーは頭をかいた。
「まいったなぁ。俺、どんどん旦那が好きになってる。わかった、

六・四で手を打ちましょ」
ふたりは握手を交わした。
「期待してるよ、旦那」
「アレサンドロだ。アレサンドロ・バッジョ」
「それが本名？いい名前だね」

愛すべき馬鹿

毛足の長い絨毯に、木目も美しい長机。
クラシックな印象ながら、豪華な調度品の数々に囲まれ、ララは正直、居心地が悪かった。
柔らかすぎるソファより、コクピットのリニアシートの方が性に合うのだ。
その様子に、
「君は市井の生まれか？」
部屋へ連れこんだ張本人が、聞いた。
「あんたには関係ないでしょ」
「フフン、その気の強さは貴族様だ」
左隣でビンテージの赤ワインを舐めるハサンは、自ら立てた約束通り、ララにはふれなかった。
ただ、百戦錬磨の印象そのままに、話し上手の聞き上手。
いつの間にやら、ララも気を許し、普段の調子で話すようになっている。
「ねえ」
ララはぶどうジュースをひと口飲み、言った。
「なんで連れてきたの？」
「さて、化粧くさい女には飽きてしまってな」
「嘘」
「ほぅ……何故、そう思う？」
「……なんとなく」
「ンッフフフ、そうか、なんとなく、か」
肩を震わせ、ハサンが笑った。
常に口元に浮かべているシニカルな笑みではなく、心底楽しんでいる笑いである。
「いいだろう。では私の推理をひとつ、聞かせようか」

「推理？」
「そう、推理だ」
ハサンは、ずい、と腰を送り、ララに密着した。
「近い」
「これは失礼」
だがハサンは、間を開けようとはしなかった。

「いいか？君には恋人がいる」
その響きに、ララはどきりとした。
「だが彼は、可愛い君を放って、あろうことか女を買いに出てしまった」
甘い高鳴りは、胸を締めつける痛みへと変わった。
「君は夜の街に、彼の姿を探した。ひどい男だが愛している。そうだろう？」
ララは目頭が熱くなるのを覚えたが、ジュースを飲み干すことでこらえた。
勢いよく流しこまれたジュースが口の端からあふれ落ち、ワイングラスを置いた男の指が、それをぬぐう。
ララは、その手を叩いた。
「あたし帰る」
「そう急ぐことはない。彼はきっと、ここへ来る」
「ホント？」
思わず、声が裏返った。
「ああ、来るとも。私が君を連れ去ったことは多くの人間が知るところだ。そして誰もが言うだろう。あの男には関わるな、と。そんなところに恋人を置いておけるか？」
「でも……」
女を買いにいった男が、はたして連れ戻しに来るだろうか。
「男は気の多い生きものだ。しかし独占欲も強い。来るとも。賭けてもいい」

と、そこへ。

「そら、噂をすれば、だ」

まるで計ったように、間仕切りに引かれたカーテンの向こう側が騒がしくなった。

その合わせ目から顔をのぞかせたのは、まさに、

「……なぁんだ」

アレサンドロである。

「ん？なんで、お前がここにいるんだ？」

「それはこっちの台詞だっての！」

ララはぷりぷりとした。

するとさらに、その後ろから、

「どうしたの、旦那。なんかあった？」

と、ライフルをかついだテリーも姿を見せる。

「あっ！」

「や、こりゃまた、変なところで会うね」

ハサンは、ララの耳元へ口を寄せた。

「どっちだ？」

「どっちも違う！」

「フフン、だと思った。どうやら、君を連れ戻しに来たわけでもないらしい」

悠々とソファに背を預け、動揺を見せないハサンの声に若干の不気味さを覚えながら、アレサンドロはテリーに目配せした。お前から話せというのだ。

えへん、と、テリーは咳払いし、

「えぇと、俺はテリー・ロックウッド」

「なるほど、賞金稼ぎか」

「お、話が早くて助かるね」

ハサンは鼻で笑い、空のグラスにワインを満たした。
「いくらだ?」
「は?」
「私の首に、いくらかかっている」
「五十万」
「フフン、安く見られたものだ」
かなりの自信家である。
「まあいい。では、そこに出せ」
「は?……なにを?」
「五十万だ。当然持ってきたのだろう?」
「は?なんで?」
「『は?』の多い小僧だな。こういう男は出世せんぞ」
言われてララは、思わず吹き出してしまった。

「いいか?私の首で、お前は五十万の儲けだ」
テリーはうなずいた。
「だが私はどうだ。なんのメリットもない。得のない勝負に応じるほど、私は酔狂でも暇でもないぞ」
「い、いや、でもね……」
「だからこそだ!」
「は、あ……」
ハサンの勢いに、テリーは完全に呑まれている。
「私はこの首で五十万賭ける。お前は現金で五十万賭ける。実に公平な勝負だ。そうは思わんか?」
「う……、な、なるほど……」
「おい、テリー……」
アレサンドロは、だまされてるぞ、と言いかけたが、遅かった。
「……わかった!」
男らしくも、テリーが叫び、
「十日待ってくれ!五十万稼いでくる!」

「おい、マジかよ！」
「当てはある！旦那は、そいつから目を離さないで！十日で戻る！絶対！」
アレサンドロを置き去りに、それこそ弾丸のように出ていってしまったのだった。

「マジかよ……」
アレサンドロは、あきれかえって、ものも言えない。
「バッカ……」
「いやいや、馬鹿もあそこまでいけば愛嬌だ」
ハサンは、くっくと喉を鳴らし、グラスに口をつけた。

そのとき。
テリーと入れ替わりに、部屋へ飛びこんできた者がいる。
ユウと、モチだ。
モチは、ララが怪しげな男に連れ去られたと見て、その行き先を確認した上で、まず酒場へ向かった。
しかし、そこでアレサンドロが見つからず、神殿でユウと合流し、駆けつけたのだ。
ユウはカーテンを引き開け、そこにアレサンドロとララを見た。
そして、固まった。
「あっ！」
ララが飛び上がり、
「来た！ホントに来た！」
と、ハサンの胸倉をつかんだが、ハサンはそれに答えず、打って変わった鋭い眼光で、新たな乱入者を見ている。
「ほぅ……これが縁という奴か。奇妙な偶然もあるものだな、ユウ」
「……ハ、サン……！」

恨み言

「これは買いかぶりというものだぞ、お嬢さん」
ハサンは長い足を優雅に組み直し、せせら笑った。
「この朴念仁に女など買えるものか。抱くどころか、気の利いた挨拶ひとつできん無粋者だ。大方、神殿で頭でも垂れていたのだろう」
「え？で、でも……！」
ララはアレサンドロを見た。
「まあ、そういうことだな」
「な、なにそれ、ひどい！」
「悪かったよ」
ばつの悪い表情で、頭をかいたアレサンドロだったが、その実、そんなことよりも、当のユウと、大泥棒との関わりに気を引かれていた。
知り合いらしいふたりの間には、接点もないではない。が、どうにも人間的に不似合いな組み合わせだ。
説明を求めようと口を開くと、それより早く、ユウが動いた。
横たわる長机に、両手をつき、
「ハサン」
ため息をはくように、言った。
「髪を切ったな。みすぼらしくなったものだ」
「他に言うことはないのか」
「ほぅ、なにを言えと？」

この、人を食ったような態度は、ユウの知っているハサンそのものだ。
だからこそ、尚更腹が立った。

「俺はあんたが、死んだと思ってた」
「死んだ？フン、馬鹿馬鹿しい」
「……なにがおかしい」
「おかしいのはお前の頭だ。考えてもみろ。一介の盗人風情が、死罪になるか？」
「それは……」
その通りである。
「そう、盗人にふさわしい罰は、この程度だ」
言うとハサンは、ソファの背もたれに隠した右腕を、ユウに突きつけた。
だらりと垂れた、そでの中には、ひじ先、五センチから先がない。
「断手刑……！」
息を呑んだユウを尻目に、ふ、と自嘲気味に笑ったハサンは、ワイングラスを口へ運んだ。
「でも……それならそれで、どうして、知らせてくれなかったんだ……」
「お前は私の『遺言』に忠実だった。すぐに姿を消しただろう？」
「あんたなら、見つけることだって簡単だったはずだ！」
「それで、私が頭を下げるのか？もう一度、戻ってきてくださいと。うぬぼれるな。お前に、そこまでの執着はない」
厳しい言葉に、ユウはただ眉をひそめ、悲しげにうなだれた。
アレサンドロも、ララも、モチも、初めて見るユウの顔だった。

「そこの賞金稼ぎ」
「お、おう？」
突然呼ばれたアレサンドロが、飛び上がった。
「十日もつきまとわれては迷惑だ。こちらからつなぎをつけてやる。今日は帰れ」
「いや、そう、言われてもな……」
複雑な立場である。

「どうした。まだなにかあるのか」
「ハサン、いいんだ。アレサンドロは俺の相棒だ。すべて聞く権利がある」
「相棒？なるほど、賢い選択だな。お前も今では賞金稼ぎというわけだ」
「賞金……？なんのことだ？」
ユウは、噛み合わない話に首をかしげた。
この面倒な状況を作ったアレサンドロは、ははは、と空笑いした。

その後。
アレサンドロは、すべてを白状した。
何故、ララが色街へ行ったか。何故、自分がテリーといたか。
ユウと自分は盗掘で生計を立てているのであって、賞金稼ぎとは関係ないことも、ハサンに説明した。無論、Ｎ・Ｓ云々のことは伏せて、だ。
「アレサンドロ、最っ低」
真っ先にララが言ったが、ユウが潔白とわかり、声にも顔にも怒りはない。
先ほどまで少々機嫌が悪い様子だったハサンも、今では、にやりにやりとしながら、パイプをくゆらせている。
長年愛用のブライア。ベントタイプだ。
「そう言ってくれるな。まさかこんな、ややこしいことになるとは思わなくてよ」
ユウとアレサンドロは、Ｌ型ソファのもう片端に腰かけ、モチは木製のコートかけの上で、黙って耳を澄ませていた。

「さて」
アレサンドロがひざを叩いた。
「次はそっちが話す番だぜ」
「我々の関係か？フフ、大方は感づいているのだろう？」

「まあ、大体は、な」
「ならば、それを聞かせてくれ。今日はもう話し疲れた」
よく言う、とユウは思った。
「じゃあ、そうだな……」
アレサンドロは、顎をかきながら話し始めた。

「あんたとユウは、昔からの顔見知りだ。そしてユウには、盗人の手癖、みたいなもんがついてる」
錠前外し、足さばき、鑑定眼……。
ユウが持っているそれらの高い技術は、盗掘だけではそうそう身につかないものだ。
「あんたの下についてた、と考えるのが普通だ」
「フフン、それで？」
「何年か前に、あんたが捕まったって話は聞いてる。たぶん、そのときに別れた。で、ユウは俺と組むことになり、あんたはひとりで盗みを続けてる。……だが」
アレサンドロは、かすかに視線を泳がせた。

「あんたとユウは、今でも、よりを戻してえと思ってる」

「俺は……！」
「ユーウー」
ハサンに人差し指を立てられ、ユウは、口をつぐんだ。
「何故、そう思う？」
「ユウは言うまでもねえだろ。『どうして知らせてくれなかった』、要するに、知らせをくれりゃあ、あんたの元に飛んで戻ったってことだ。今でも思ってなけりゃ、そんな台詞は出てこねえ」
「では、私は？」
「『すぐに姿を消しただろう』、あんたは言ったな。ユウを探したって証拠だ」

ユウは、はっと息を呑み、ハサンを見た。
相変わらずの笑みの中には、毛筋ほどの動揺も浮いていない。
「それに、さっきのあんた、見るからに強がってたぜ」
「フフン」
「つまり、あんたとユウは、単純な親分子分じゃねえ。切っても切れねえ間柄、ってことだ。本当の親子……みてえな、な」
「フ……」
「正解か？」
肩をすくめたハサンは、左手で腿を叩き、拍手の代わりとした。
「悪くない。親子というのは、少々行き過ぎの感はあるがな」
「じゃあ、なに？」
ララが聞く。
「さて。私はただ、十年面倒をみてやっただけだ」
「親子を名乗るには十分な時間だぜ」
そう、アレサンドロと、ジャッカルのように。
しかしハサンは、
「人情話が好みならば、劇場へ行け」
ばっさり、切り捨てた。
「認めよう。確かに愛着はある。我ながらよく育てた。だが、それとこれとは別だ」
パイプをくわえ、尖らせた唇から煙を吹き出す。
煙は天井近くまで昇り、散った。
「ユウ、お前はどうだ？私を父と思うか？」
「いや」
「ンッフフフ、少しは悩め」
「悩むなと教えたのは、あんただ」
「これは、言うようになった」
ハサンは愉快そうに肩を震わせ、灰を落としたパイプを立てかけた。

もちろんユウは、ハサンを大切に思っていないわけではない。父親ではなくとも、かけがえのない父親代わり。師匠であり、最初の相棒だ。

離れてしまった今も、その気持ちに変わりはない。

だが、そう付け加えるのも、どこか照れくさく、黙っていた。

「アレサンドロといったか、もうひとつ訂正しておこうか」

「ん？」

「これは私の元へ戻る気などさらさらない。そうだろう？」

ユウは、深くうなずいた。

「以前ならばいざ知らず、今は互いの生活がある。ただ、神官あたりに言わせれば、それで縁が切れるわけでもない」

ハサンは、神官という言葉を、ことさら強調した。

「『何故知らせてくれなかった』。この言葉の真意は、師弟の義理を欠かした私への、単なる恨み言だ」

すると、ララが、

「だったら、うぬぼれるな、とか言わないで、素直に謝ればよかったのに」

意地悪に、ハサンの脇を、ひじでつついた。

「私にも意地があるのでな」

ハサンは、ララの頬をつついた。

「さて、そこでだ！」

突如、声を張り上げたハサンが、指を鳴らし、アレサンドロに突きつけた。

「今、私が否定しなかった部分がある。どこかわかるか？」

アレサンドロは逡巡し、

「……どこだ？」

「私が、ユウと、よりを戻したがっている」

「！」

寝耳に水である。
モチも含め、場にいる全員の目線が、ハサンに集まった。
ハサンは、いたずらに成功した悪ガキのように、笑った。
「と言っても、一度きりの助ばたらきだ。今回は少々、事が特殊でな」
「な、なんだ、びっくりしたぁ」
「……俺だけか？」
「無論だ」
ユウは、アレサンドロを見た。
「好きにしろよ」
そのひと言で、心は決まった。

「決行は三日後、報酬は十万」
「獲物は？」
ハサンは、にやりと笑い、言った。
「N・S」

オークション

その夜。

パーティ会場となったフェルグス伯爵邸のポーチには、馬車が列となって並んでいた。

どれもこれもが、黒塗りの車体に紋章をあしらった豪奢なもので、順番が回り、今しも降り立った貴族たちの礼服にも、上等な布地とアクセサリが照り輝いている。

実はこれが、ハサンとユウであった。

ふたりは、玄関口からあふれ出す、柔らかく調整された光石灯の光と優美な音楽に導かれるように歩を進め、

「どうぞ、お召し物を」

微笑むボーイが差し伸べた手に、ステッキとマントを預ける。

そのまま大ホールへと足を踏み入れると……。

そこは、別世界であった。

見上げるほどの彫像が幾体も立ち並び、壁には金糸銀糸のタペストリー。

聖画に彩られた天井には、当然のごとく、輝くシャンデリアが房も重そうに垂れ下がっている。

ホール中央では、オーケストラの演奏に合わせ、礼装姿の紳士淑女がダンスに興じ、そうでない者も談笑を交わし、酒食を口に運んでいた。

ユウは以前にも、こうして何度かパーティに紛れこんだことがあったが、今日の規模は群を抜いている。

「胸を張れ」

ユウの耳元で、ハサンがささやいた。

「わかってる」

「そら、その口の利き方だ。どこで誰が聞いているかもわからんぞ

？」

「……はい、父上」

「いい子だ」

今日のふたりは、スペンサー侯爵とその子息、ということになっている。

「さぁて、例のオークションまで、まだ時間がある。目利き遊びでもして待つとしようか」

ボーイからシャンパングラスを受け取り、ハサンはさっさと奥へ進んでいってしまった。

……そう。

このパーティに参加している貴族全員が、これからおこなわれる競売を目当てにしているのだ。

かけられる品とは、まさに、完品のＮ・Ｓ一体である。

それは数年前、フェルグス伯爵が偶然手に入れたものらしいが、当人は先々月に亡くなっている。

そこで伯爵夫人が、このようなものはあるだけ面倒、と手放すことにした。

と、いうことなのだが。

実のところは伯爵夫人、音に聞こえた浪費家で、対外的には上手く装っているが、内情は火の車。遊び金欲しさと、もっぱらの噂だ。

「でなければ、何故オークションを選ぶ必要がある。国より好事家のが金を惜しまんからだろう？」

馬車の中で、ハサンは語っていた。

「まぁ、他人様の事情などどうでもいい。帝国の目が届かん場所で、Ｎ・Ｓが取引される。その事実さえあればな」

言うまでもなく、この大盗に正々堂々競り落とす気はない。

さて……。

それからは、目についた調度品や貴族の持ちものを値踏みしたり、ハサンの差し金で、ユウが、それぞれ違う娘と三曲もダンスを踊ら

されたりで、瞬く間に時間が過ぎていった。
そうして、一時間も経った頃だろうか。
ようやく主催が会場に姿を現し、待ちに待ったオークションが始まった。

「皆様、ようこそ、お越しくださいました」
フェルグス伯爵は七十の高齢だったというが、壇上に立つのは、いかにも金を食いそうな若き未亡人である。
「亡夫の遺品を処分させていただくにあたり、これほど多くの方々にお集まりいただきましたことは、心苦しくもあり、また、喜ばしくもありますわ。皆様のご温情をもって、どうか……」
伯爵夫人は、房毛のついた扇で口元を隠し、
「高値を、お願いいたします」
ドッと、会場が沸いた。
「では、とにもかくにも、現品をお見せいたしましょう」
全員が、別の場所へ移動するものと、次の言葉を待った。
しかし、現れたのは執事の押すカート。
乗せられているのは白い敷布、そして、鈍色の指輪である。

ざわめきの中、ユウは左手を、さりげなく後ろに回した。
同じものが中指にあることを、特に、隣の男にだけは知られたくなかったのだ。
ハサンの視線は幸い、カートに注がれている。
ユウは指輪を外し、上着のポケットへ滑りこませた。

「お静かに！承知しております。これはN・Sではない。ええ、ごもっとも」
気分は歌姫か、大女優か。
伯爵夫人は大仰に手を振り、芝居がかった声色で言った。

「ですが、これこそ魔人の技術！」
ボーイたちが、前列の客を下がらせる。
「では、ご覧いただきましょう！これが、Ｎ・Ｓ！」
観客の悲鳴と共に、一瞬の閃光が会場を包みこみ、どす黒い、凝固した血色のＮ・Ｓが現れた。
大ホールが、どよめきで揺れ、
「お静かに！お静かに！」
執事が両手を広げたが、収拾にはしばらくかかりそうだ。
「フフン、私のためにあるような……」
ハサンのつぶやきが、ユウの耳に入った。

確かに、腰に細剣を帯し、ツンと耳の立ったそのＮ・Ｓは、ハサンの好みを大いに満たすものに違いない。
首元には、ファーを思わせる襟飾り。
Ｌ・Ｊでいう、リアスカート・サイドスカートはひざ丈と長く、シルエットは、今ユウがまとっている礼服そのものである。
背から垂れた翼とおぼしき膜は、ひじと手首で固定され、さながらマントか、女性のショールのようだった。

Ｎ・Ｓ、コウモリ。

「気に入った」
ハサンの右目が、針のように細く、光った。
獲物を見定めたときの癖だと、ユウは知っていた。

「お披露目はここまで！」
予想以上の反応に気をよくした伯爵夫人は、思わせぶりに、Ｎ・Ｓを指輪へ戻した。
ここからが、オークションである。
「スタートは、百万から」

と、伯爵夫人が指を掲げ、その場の全員が、息を吸う。
緊張の糸が、空間に張り巡らされ……。

「待て！」
声を上げたのはホール入口に立つ、熟年の、恰幅のいい騎士だった。
黒い胴鎧の上からでも十分にわかる。歳に似合わぬ厚い胸筋は、かなり剣を使う証拠だ。
「どなた？」
「聖鉄機兵団、ジークベルト・ラッツィンガー」
「え、えぇっ？」
今日一番のどよめきが起こった。

最後のレッスン

さて、どうして、こうなったものか。

ひと言で言えば、N・S裏取引の情報が、ラッツィンガー軍の耳にも入っていたということだろう。

伯爵夫人は事実確認のため拘束。参加者は身元を聞き取られた上で帰宅が許されたが、ハサンは他の貴族同様、むっつりとした様子で馬車に乗りこみ、会場を後にした。

ユウが知る限り、ハサン初めての失敗だった。

「……ハサン」

ハサンは答えず、窓から、ずらり並んだラッツィンガー軍の騎乗兵を眺めている。

空には、飛行型L・Jの哨戒灯がきらめいて見えた。

「もう一度やるなら、その……手を、貸してもいい」

「フン、随分と上から言うものだ」

「そんなつもりじゃない。俺だって悔しいんだ」

「私は悔しくなどない」

「嘘だ」

「ユーウー」

向き直ったハサンは、笑っている。

「悔しがる理由がどこにある？」

ユウの鼻先で、ハサンの左手が開いた。

「あっ！」

乗っていたのは紛れもなく、あの、鈍色の指輪であった。

「いつの間に……！」

「ラッツィンガーを出迎えるため、奥方は我々のすぐ横を通った。忘れたか？」

「でも……俺たちが出るとき、指輪は将軍が……！」

伯爵夫人から証拠品として取り上げていたのを、ユウは目撃して

いる。
「私が下調べもなしに盗みに入ると思うか？偽物ぐらい用意してある。あの奥方程度の目なら見破れんだろう」
取調べにおいて、伯爵夫人が身の潔白を訴えることは間違いない。証拠の指輪にしても、当然、Ｎ・Ｓなど出てこないわけで、誤情報であった、初めからそんなものはなかった、という結論が出されることとなる。
放免となった伯爵夫人が、偽物にすり替わっていると気づいても、結局は訴えられずに泣き寝入り。
Ｎ・Ｓコウモリは、完全に幻と消える。
たとえ犯人を割り出そうとしたところで、容疑者は客、使用人、聖鉄機兵団騎士と、それこそ数え上げればきりがない。
「完全犯罪とは、衆目の中でのみ生み出される芸術だ。その興奮も、またしかり」
ハサンは指輪に、情熱的なキスをした。
ちなみに。
ジークベルト・ラッツィンガー将軍に情報を流したのも、実はハサン自身であったと聞き、ユウはさらに驚いた。
ひとつは、犯人候補を増やすため。
もうひとつは、あの会場から安全に逃げるためだ。
オークション後ならばいざ知らず、始まる前の客は、聖鉄機兵団にとっては第三者。偽物とはいえ現物はあるため、所持品の検査もない。
しかも逃げたのではなく、追い出されたとなれば、ハサンとユウの印象は、限りなく薄い。
「そこまで計画済みだったら、俺は必要なかっただろ」
ユウは、少しすねた。
「本当にそう思うか？」

と、機嫌を取るように頬をつつく指を払うと、今度はおもむろに襟をつかまれ、ぐいと引かれた。
ふたりの顔が、間近に迫り、
「お前は、なにもわかっていない」
吸いこまれるような眼差しに、ユウの抗いかけた手が、力を失った。
「お前は必要だった。盗みのためではなく、私のために……」
「……ハサン」
ささやかれる優しい言葉が、ユウの耳をくすぐる。
「私を恨むか？」
ユウは、問いの意味もわからぬままに、ゆっくりと、首を横に振った。
「いい子だ」
と、微笑んだハサンの右目がさらに細まり、いつの間にか、ふたりの頬がふれ合っている。
耳元へ吹きかけられた息の熱さに、ユウは全身、鳥肌が立った。

「最後のレッスンだ」
「え……」
「盗みは奇術。盗まれる人間に、自分の意思で状況を作り出させることが肝要だ。その点、あの奥方は実によく動いてくれた。ラッツィンガーにおびえ、指輪をわざわざ、盗みやすい懐中に隠してくれた」
「……隠さなければ、盗まれなかった……」
「そうだ。堂々と指にはめていれば、盗まれることもなかった……」
「……ッ！」
ユウはハサンを突き飛ばし、距離を取った。
すぐに上着を探ったが、ない。
「探しているのはこれか？」
笑うハサンの指に、カラスの指輪が光っていた。

「ハサン！」
「偽物を用意していたと聞いた時点で、お前は気づくべきだった。私が、この指輪の正体を知っているとな」
「ハサン！やめてくれ！」
「そして警戒するべきだった。レッドアンバー、カッサーノ、エルマンデル、白フクロウ。誰もが知っているとな」
「頼む！返してくれ！」
「誰も信用するな！教えたはずだぞ、ユウ！」
ユウは、ハサンにつかみかかった。
「それだけは駄目だ！駄目なんだ！」
「フン、あの男も持っているだろう。半人前がふたり、Ｎ・Ｓはひとつで、十分だ！」
蹴り倒された勢いでドアが開き、疾走する馬車から、ユウは半身、外へ出る格好となった。
すぐ目の前で、車輪が回転している。
弾かれた小石が、頬をかすめた。
「ユウ」
と、その襟首を取り、ハサンが優しげな声で言う。
「……さらばだ」

外へ投げ出されたユウの身体は、数十メートルも地面を転がり、止まった。
痛みを押し、顔を上げると、遠ざかる馬車の後方に、上等な布地でこしらえられた袋が落ちている。
中には使いやすいよう小金貨のみで、十万入っていた。

追跡

顔向けできないことはわかっていたが、さりとて黙って、なにをするわけにもいかず、ユウはとにかく、宿で待つアレサンドロたちの元へ戻った。

これは、ユウたちが、最初に取った宿である。

事情を聞いたアレサンドロは、

「そうか……」

表情を曇らせながらも、意外にあっさり、事実を受け入れた。

「すまない。俺のせいだ。どんな罰でも受ける」

「本気で言ってんのか」

「ああ、好きにしてくれ」

ユウは、両ひざを折った。

殴り殺されようと、文句は言えない。

ハサンをよく知るユウだからこそわかる。カラスは、もう戻ってこないのだ。

「やめてよ。ユウが謝ることじゃないって……」

ララがとりなしに入ったが、

「お前は黙ってな」

優しく頭をなでられ、むぅ、と唇を尖らせた。

「ユウ、悪いと思ってんなら……」

「ああ」

「馬、買ってこい」

「……馬？」

「とびきり足の強い奴だ」

ユウは驚いた。

「追うのか？無理だ！わからないんだ、どこへ行ったのか！ハサンは足取りを追わせない！絶対に！」

「落ち着けよ、ユウ」
かがみこんだアレサンドロは、ユウの肩を叩き、申し訳なさげに笑った。
「誰も信用するな、だろ？お前には悪いが、俺だって、あのオッサンを信用してたわけじゃねえ。馬車にはモチをつけさせてもらった」
「うっそ！」
と、これはララも知らなかったことらしい。
「あわよくば、Ｎ・Ｓも……と、思ってた俺を責めるか？」
「アレサンドロ……！」
ユウは強くかぶりを振り、立ち上がった。
「買ってくる！」
「頼むぜ」

ユウはすぐさま、青毛と栗毛を連れ帰った。
どちらもよくブラシを入れられた、良馬である。
気づけば手の中にあった十万が、この二頭に化けた、というのは皮肉な話だった。
「モチから連絡は？」
「まだだ」
答えるアレサンドロの腰には、今までなかった長剣が下がっている。
アレサンドロはユウの視線に、
「できりゃあ、使いたくはねえがな」
剣を叩いた。
そうして三人は宿の勘定を済ませ、いつ事が起きてもいいように、脇の馬屋の軒先で、連絡を待った。
「少しは寝ろよ」
声をかけられたが、ユウはとても、そんな気分にはなれない。
東の空が白み、カラスが飛び始めても、一睡もできなかった。
「……遅い」

朝焼けの、紫に染まった雲を見上げたユウは、つぶやいた。

そのときである。

「……きゃっ！」

馬の腹で眠っていたララが、突如、手を振り回し始めたのだ。

「やっ！な、なにこれ！」

見ると、ララの頭に、小さなミミズクが乗っている。

そのくちばしにくわえられているのは、葉のついた木の枝だ。

「来たな！」

飛び起きたアレサンドロは、栗毛へまたがった。

「そいつは、お前が乗せてけ！」

と言うアレサンドロの言葉に従い、ユウは、立たせた青毛の鞍の前へララを座らせる。

と、同時に、ミミズクが飛び立った。

「あれを追うのか！」

「このタイミングだ、間違いねえ。あいつがつなぎだ！」

ふたりは、馬の腹を蹴った。

ミミズクは、ペルンの東外門を抜けたところで、枝を落とし、森へ帰っていった。

東はウィンザー、来た道を戻ることになる。

しかしユウたちは、ためらいもせずに馬を走らせた。

スズメ、カラス、ハト、サギ、フクロウ、ワシ、タカ、……。

この後も、適当な間隔で、もしくは分かれ道で、昼には昼の鳥が、夜には夜の鳥が、皆一様に葉のついた枝をくわえ、三人を待っていた。

ただ、おそらく赤い髪を目印にしているのだろう。

どれも頭を目がけ降りてくるので、ララだけは常に、嫌な顔で上を気にしていた。

ハサンはやはり、迂回、逆進、馬車の乗り換えを繰り返し、進ん

でいた。

「ユウ、お前どう思う。奴はどこに向かってる？」

アレサンドロに問われ、ユウは、ようやく焦りの取れた頭で、

「北部だ」

答えを出した。

ハサンは元々、北部を縄張りにする盗賊である。

以前の隠れ家は解体したのだろうが、まったく新しい場所に住み着くとは考えづらい。

はたして。

ウィンザーを抜けた辺りで、鳥たちは北寄りに進路を取るようになった。

緑が色あせ始めた山道を抜け、隣領ローカスに入ると、それは確実なものとなった。

さらに喜ばしいことに。ここにきて鳥たちが、迂回をしなくなったのである。

ハサンが、追跡者に対する警戒を解いたという、なによりの証拠だ。

「ハサンはきっと、宿を取る」

ユウは確信を持った。

……そしてついに。

とある湖畔の、小さな宿場町の街灯に、三人は、愛すべき白フクロウの姿を見出したのだった。

「おい、モチ」

らんらんと目を輝かせたモチは、ユウたちの到着にも気づかず、おそらくハサンの持ちものだろう二頭引きの馬車を、にらみつけている。

「モチ」

小声で呼んだアレサンドロが、街灯の脚を叩くと、モチは警戒心

もあらわに、鋭い視線を下に向け、
「ホ……ありがたい……」
力尽きたように、目を閉じた。
「あっ！」
「危ねえ！」
三人は腕を伸ばし、落ちてきたその身体を受け止めた。
軽い。
「これは失礼……眠って、いないもので……」
モチは、首もすわらないほど衰弱していた。
「ハサンは、あの……」
「ああ、そんなのは後だ。動くんじゃねえ」
「いえハサンは、あの宿です。二階に……」
と、息も絶え絶えに指し示されたのは、湖に面した、小体だが上等な宿である。
「ああ、よくやってくれたぜ」
アレサンドロが治療用の更布へ水を含ませ、くちばしに押し当ててやると、モチは喉を動かし、ホ、と、息をはいた。
「早く行ってください。あの男はまた、明日の朝には出ます」
「わかった。……死ぬんじゃねえぞ」
「それは、大げさというものです」
モチは、ララに預けられた。
「モチ……、モチのおかげだ。モチがいて、本当によかった」
「ホ……」
ユウに抱きしめられ、モチは気恥ずかしげに、足をうごめかせた。

「邪魔するぜ」
堂々と押し入ってきたふたりを、ハサンは、ぎょっとした目つきで見た。
「あんたでも、そんな顔するんだな」
ユウが後ろ手に施錠すると、
「……フフン」
ハサンはパイプを口に運び、美味そうに煙を吐く。
「この世には、驚愕に値する出来事が少なすぎるだけだろう」
さすがに、その声からは、もはや一切の動揺を感じ取ることはできなかった。
「オッサン、窓から離れて、そこへ座りな」
と、アレサンドロが示したのは、寝室への扉からも遠い、ひじ掛け椅子である。
ハサンは素直に従い、オットマンに足を乗せた。
「後学のためにひとつ。何故、私に追いつけた?」
アレサンドロはユウを指差し、
「神様のお導きさ」
「……なるほど」
ユウは、口から出かかった文句を呑みこんだ。
浮き上がったレンガを踏み鳴らし、窓の外を、荷馬車が通り過ぎていった。

「さて……、それで?」
「それで?とぼけるんじゃねえ。指輪を返しな」
「ほぅ、どちらの」
「……俺は、返せ、と言ったんだぜ」
「ンンッ、フ、フ、フ」

ひじをつき、手のひらに顎を乗せたハサンが、笑った。
「賢い男だ。無駄な情報を与えんよう、上手く言葉を選んでいる」
「そいつはどうも」
「それに免じて、単刀直入にいこう」
「ああ、結構だな」

「今でも、カラスに惚れているな」

「……！」
心臓に打ちこまれた杭を確かめるように、アレサンドロは胸を押さえた。
「そういうのは、ちょっと、卑怯なんじゃねえか？」
「フフン、この歳になると、他人の驚く顔を見るのがなにより楽しみになる」
「……悪趣味だぜ」
アレサンドロは、唾を飲みこんだ。

この男はどこまで知っている？どこまで気づかれた？

アレサンドロの脳が回転したが、答えが見つかるはずもない。むしろ考えれば考えるほど、次に発せられる言葉が恐ろしくなった。
ギュンターのミザールと対峙した、あのときに抱いた感情とは違う。これは、トラウマをえぐられる恐怖だ。
「アレサンドロ」
ユウが、その腕を握った。
「ハサンは、Ｎ・Ｓの正体に気づいただけだ」
「愚かだな、ユウ。何故そう決めつけられる」
射すくめるハサンの目が、ふ、と細められたのを見、アレサンドロは半歩、後ずさった。

「わかっているぞ。お前が魔人の奴隷であったことも、医者の下についていたことも、盗掘などしていた理由もな」
「ただの推理だ。あんたに人の心なんか読めやしない」
「いいや、読めるとも」
ハサンは視線を外さぬまま、手元にあったステッキを取り、もてあそんだ。
「なんなら、もっと深く暴いてやろうか」
「やめろ！」
ユウは叫んでいた。
「これ以上、惑わせるな！」
そして、ハッとした。
ここで腹を立てては、ハサンの思うつぼだ。
ユウは、深く息を吸い、太刀を抜いた。
「……俺たちは、話をしにきたんじゃない。あんたは……カラスを返せばいいんだ」
「フフン、そうだ。初めからそうして、力に訴えておけばよかったものを」
ハサンが立ち上がった。
「だが、お前に、私が斬れるか？」
「ああ……斬る」
「いいや、斬れんな。お前は優しい子だ……」
ぴゅっ、と光芒が走った。
甲高い金属音を響かせ、噛み合ったのは、アレサンドロの長剣と、ハサンのステッキである。
「なら、俺が斬ってやる」
「……なるほど。ふたり同時に扱うのは、やはり難しい」
にやりと笑ったハサンは、身体を回転させ、ステッキに仕込んだレイピアを抜き払った。
長剣とまともにかち合えば、細身のレイピアなど簡単に折れる。

しかし、ハサンは巧みなステップと剣さばきで、斬撃をことごとく受け流し、対するアレサンドロも、刺突を交えながら繰り出される俊敏な攻撃に、柔軟に対処した。
ユウに、切りこむ隙は与えられなかった。

「なかなかの腕だ」
ハサンの賞賛にもアレサンドロは答えず、突き出されたレイピアを顎先にかわし、のけぞりざま、中身のないハサンの右そでをつかむ。
が、ハサンは腕を回し、そでをアレサンドロの手首に絡ませると、関節にひじを入れ、背側へねじり上げた。
ひざ裏を蹴られたアレサンドロは、
「くっ！」
ひざまずく格好となった。

「お前の動きには覚えがあるぞ」
「……なに？」
「カラスだ」
助けに入ろうとしたユウは、切っ先を向けられ、足を止めた。
「いい女だった。気高く、賢く、慈愛に満ち、誰よりも美しい。流れるように剣を使った」
「……ッ」
「粗いが、お前の動きはまさにそれだ。あの女に教えを乞うたか」
「だったらどうした！」
「いいや？特に意味はない」
「クッ……このっ！」
アレサンドロは剣を逆手に持ち替え、背後を突いた。
体を開き、かわしたハサンは、その刃に右そでを斬らせ、アレサンドロを蹴る反動で、絨毯を転がった。
「チッ！」

「アレサンドロ！」
「いいから、あいつを追え！」
すでにハサンは、バルコニーから隣家の屋根へ飛び移っている。
ユウも、その後を飛んだ。

ハサンの身は軽い。
次から次へと飛び移っていく後ろ姿を、ユウはひたすら、追いかけることしかできなかった。
「懐かしいな、ユウ！あの頃のようだ！」
こうしたときのハサンの言葉が、本心なのか、惑わすための甘言なのか、いまだによくわからない。
だがユウは、
「そうだな」
小さく答えた。

十二年と半年である。
ハサンは十年と言ったが、出会ってから別れまで、それだけの時間を共に過ごしてきた。
今、目の前にある背中を、追い続けた年月だった。
それは実際、家族との生活よりも長い。
様々な想いが去来し、ユウの胸が熱くなった。
「どうした！泣いているのか！」
「違う！」
憎らしい。ユウは思った。
そうしている間にも、ハサンは石造りの平屋根を、駆けては飛び、また駆けていく。
「しつこい奴だ！」
「あんたこそ諦めろ！」
「フン、誰にものを言っている！」
方向転換したハサンの身体が、ふわりと夜空に舞った、そのとき

だった。

タァン！

胸を反らせ、ハサンの身体が跳ねた。

羽根のように、ゆっくりと回転しながら、

「フ、フ……、そうか……今日がその、十日目、だったか……」

遥かかなたの、一点を見やったハサンの背と胸に、みるみる鮮血が広がった。

誰も信用するな

……眠ってしまったか。

丸椅子に腰かけ、ベッドに顔を埋めた状態で、ユウは目覚めた。

耳に聞こえるのは、月女神の神歌。

顔を上げると、丁度、一節を歌い終わったハサンが、

「起きたか」

と、言う。

「それは、こっちの台詞だ」

ユウは、大きくため息をついた。

テリー・ロックウッドの放った弾丸は、ハサンの右肩、鎖骨の下を貫通した。

急ぎ、宿へかつぎ戻り、アレサンドロの手当てが施され……、それから五日。

今の今まで、昏睡状態が続いていたのである。

「アレサンドロを、呼んでくる」

ユウが立ち上がると、

「いらん」

ハサンが、手をつかんだ。

「そういうわけには……」

「ならば後にしろ。今はいらん」

「……」

強くはなかったが、その声には、決して放さぬという意思が宿っている。

ユウはため息をつき、再び腰を下ろした。

レースのカーテンに遮られた茜色の西日が、目蓋を閉じたハサンの横顔を、柔らかく照らし出している。

特に話しかけられるでもなく、穏やかな時間だけが過ぎていった。

「なにも、聞かないんだな」
言われ、ハサンは目を伏せたまま、鼻で笑った。
「お前たちが指輪も取らず、死にかけの私を放っていったというならば、何故、と問う気も起きた」
その言葉通り、カラスは無事、ハサンの荷物から見つけ出され、ユウの左中指へ戻ってきている。
コウモリも、アレサンドロの懐にあった。
「ああ、賞金稼ぎがいたな」
こちらは、例の五十万を工面して戻る途中、疾駆するユウたちを発見、尾行してきたらしい。
今は一階で、アレサンドロたちといるはずだ。
しかしそう聞いても、ハサンの表情は大きく動かなかった。
ユウはもう一度、アレサンドロを呼ぼうと声をかけたが、答えは同じだった。
「私は、誰も信用しない」
「ハサン……」
そんなことを言っている場合か。言葉が喉まで出かかったが、
「お前だけは別だ」
「……え？」
「……信じるか？」
ユウは目をそらし、
「信じるさ」
ハサンの喉が、くっくと鳴った。

やがて太陽が、この日最後の輝きを放ち、湖に沈んだ。
そろそろ、アレサンドロが様子を見にくる時刻である。
「さっきは、どうして神歌を……？」
薄闇の中、ユウは光石照明のつまみを回した。
高級宿だけあって、光量の調節ができるタイプだ。
「私とて祈りたくなるときもある」

「なにを？」
「さて、神に教えてもらえ」
と、そこに、
「彼氏さん、ちょっといい？」
テリーが、顔をのぞかせた。

「あれ？なんだ、目、覚めてたんだ」
「おかげ様でな」
「そいつは好都合」
テリーは、ずかずかとベッドへ近づき、ユウの座っていた丸椅子を奪った。
その姿はシャツにベスト。あの、銃弾を差した胸と腰のベルトも、一階に置いてきたようだ。
「おい、ちょっと待ってくれ」
ユウは遠慮会釈もないその態度に、腹が立った。
「話なら下で聞く」
「いやいや、目が覚めてるなら、こっちに直接話した方が早いからさ」
「ハサンは怪我をしてるんだ」
するとテリーは目を丸くし、
「なんだか、すっかりそっち側だね、彼氏さん」
「ッ……！」
「ユーウー」
ハサンが、例のごとく、指を振った。
「気にかかるなら、そこにいるがいい。だが、黙っていろ」
「そうそう」
ユウは唇を噛み、窓辺に立った。
口火を切ったのは、テリーだった。

「おたくらのことは聞いてるよ。十年来の師匠と弟子だって？いや

ぁ、世界は狭いね」
「まったくだ。私もまさか、ここで撃たれるとは思わなかった」
「アッハハ」
「見事な腕だ」
「お褒めにあずかり、恐悦至極」
ふたりこそ、まるで長年の友人のようだった。
「さて、ハサンさん。本題に入るけど……」
と、テリーが言うと、すかさず、
「私の首か……。ああ、好きに持っていくがいい」
ユウは驚愕した。
「おたく、ホントに話が早くて助かるよ」
「引き際は心得ているつもりだ。この期に及んで、無様な真似はしたくない」
「お察しするよ」
テリーは、ユウを一瞥し、腰を伸ばした。
「んじゃあ、まあ、一緒に来てもらおうかな。心配ないよ。依頼人に届けるまで、命は保障する」
「優しいことだ」
「それがモットーでね」
左脇に腕を差しこまれ、身を起こしたハサンの喉から、低い、うめき声がもれる。
「待て！」
そこで辛抱たまらず、ユウが叫んだ。
「口を出すなと言ったはずだ」
ハサンはにらんだが、
「それは、あんたの都合だ！俺は、こいつに誰も捕まえさせないと誓った！」
「あんねぇ、気持ちはわかるけど……」
迫るユウを振り払おうと、テリーは身を返した。

……が。

「……あら？」

右手が動かない。

振り返り、腕を見たテリーは、

「ええっ！」

素っ頓狂な声を上げた。

なんと、右の手首に、鈍く輝く真鍮の手錠がかけられていたのである。

「やれやれ、お前はまだ、私がどういう男かわかっていないらしいな、ユウ？」

「い、いやいやいや！」

テリーは、もちろん外そうと左手を伸ばしたが、そこをさらに、かちり。手錠が噛む。

しかも、天蓋の支柱を抱きこむように鎖を渡されてしまったため、完全に身動きならなくなってしまったのだった。

「フフン、賞金稼ぎ」

と、ハサンの唇が、にやりと持ち上がり、

「ひとつ教えてやろう。この道で長く生きたければ、誰も、信用、するな」

「そ、そんなぁ……」

「ンッフフフ。さあ、ユウ。あの若造を呼んで来い。すぐに出立するぞ」

「……プ、わかった」

ユウは、笑いをこらえながら階下へ走った。

「さぁて、賞金稼ぎ」

ふたりきりとなった部屋で、ハサンは、すっかりしょげ返ったテリーに、思わせぶりな視線を送った。

「これがなにか、わかるか？」
と、鼻先にちらつかされたのは、小指の先ほどの小さな鍵。
「あっ！」
テリーは身体をありったけ伸ばしてそれに噛みついたが、勢いあまってベッドの端に顔を打ちつけてしまった。
「ううー……」
「まずは問題に答えてからだ」
「て、手錠の、鍵……」
「その通り」
ハサンは、突っ伏したテリーの頭をなでた。
「これが欲しいか？」
「そりゃ、そうに決まってるでしょ」
「ならば、頼み方があることもわかっているだろう？テリー・ロックウッド」
するとテリーは、一瞬、言葉を詰まらせ、
「おたく、やっぱりそっち系の人？……あいたぁっ！」
鼻をつねられた。
「ううー……」
「さあ言え」
涙目になったテリーは、しぶしぶ両ひざをついた。ただし、手錠が梁板にかかり、両腕だけは高く掲げた状態である。
「……ハサン様、その鍵を俺にください」
「……」
「……ダメ？」
「ンンン、わかっているなら、もう一度だ」
「ハサン様、どうか、この哀れな賞金稼ぎに、お慈悲をお与えください」
ハサンは首を振る。
「ハサン様！どうか！この、意地汚く！愚かで！ちっぽけなテリー・

ロックウッドに！あなた様の愛と！真心を！お与えください！」
「ああ、よくできた」
ハサンの手が、再びテリーをなでた。
「……おたく、お弟子さんにもこんなことさせてたわけ？」
「フフン、お前はあれよりも、おねだりが上手だ」
テリーは、聞くんじゃなかった、と思った。

「ま、ほら、とにかく鍵ちょうだい」
「鍵？」
とぼけた調子で片眉を上げられ、テリーは一瞬、めまいを覚えた。
「い、いやいやいや、ここにきてそれはないでしょ。約束が違う」
「約束？いつ、誰が、なにを約束した。お前はまさか、金をくれ、と言われれば差し出すのか」
「う……ぐ……」
確かにその通りである。
「テリーよ。愚かでちっぽけな、テリー坊や」
ハサンは、テリーの亜麻色の前髪をかきわけ、いたずらな目で、のぞきこんだ。
「いいか？言葉はタダだ。そして、盗人はタダでは動かん」
「ま、まさか……」
「五十万、用意できているのだろう？それで手を打とう」
「え、えげつねぇぇぇっ！」
テリーはのけぞった。
「ほぅ、ならばこれは、馬にでも食わせるとしよう」
「ま、待った待った！」
「なんなら、お前が食っても構わんぞ」
「冗談に聞こえないからやめて！」
「フフン……それで？」
「……わかった、払うよ」

テリーは、五十万がＬ・Ｊのコクピットにあることや、その暗証番号まで、洗いざらい吐いた。

そして、包帯や薬などの準備を整えたユウたちが戻ってきた頃には、

「……なにしてんだ？お前」

「いやまあ、いろいろありまして……」

と、ハサンになでられながら、先ほどにも増して、やせ細っていたのだった。

黒の襲撃

「で、どこ行く気だ？」
馬車に乗りこみ、さすがに隠しきれぬ様子で荒く息をついたハサンに、アレサンドロは聞いた。
あれからテリーがどうなったかというと、ハサンが出がけに、その尻ポケットへ手錠の鍵を落とし入れてきている。
それは高い位置で手を拘束されたテリーにはどうやっても届かない場所で、これでしばらくは、あの賞金稼ぎの顔を見ずに済みそうだ。
「幸運を祈る」
と、とどめに猿ぐつわを噛まされたときの、言っては悪いが、まぬけで恨めしげなテリーの顔を思い出すと、アレサンドロは今でも笑えてくる。
「アレサンドロ・バッジョ」
「うん？」
「どこまで持つ」
と、逆に問われ、
「……あんたひとりじゃ、次の町にも行けねえ」
「……フ」
ハサンは乱れた髪をなでつけて、馬車の天井を仰いだ。
今、ユウはテリーの五十万を取りにいき、ララは宿で、食料を整えてもらっている。
どうにか回復したモチも、馬車を眺めながら、木の上でネズミをつついていた。
「さっき……ユウが俺を呼びにきたとき、なんて言ったかわかるか？」
「なに……？」

「ユウがなんて言ったかわかるか？」
ハサンは、思わせぶりな様子で沈黙した。
ゆったりと、扉の横にしつらえられた光石灯の明かりを調節し、出した答えは……、
「……さて、なんと言った」
突如、アレサンドロが踏み台を乗り越え、馬車へ入った。
ハサンの上着をめくると、先ほど替えたはずの包帯に、もう血がにじんでいる。
「チッ、だから言ったんだ」
アレサンドロは傷を押さえ、積んだ木箱から、治療具一式を取り出した。
「フフン、よくわかったな」
「あんたが心を読むってんなら、俺たちは身体を読んでる」
「なるほど……お前は、いい医者になる。……ッ！」
ハサンは拳を額に当て、グッと眉を寄せた。
「ユウはな……」
「ん……？」
「せめて落ち着くまで、あんたと行きてえと言った」
「……いらんと言っておけ」
「あんただって、わかってるはずだ。あいつは自分から、あれがしてえ、これがしてえと言う男じゃねえ。今までだって、ずっと俺についてきた」
「だから、どうした」
「だから、今度は俺が、あいつについていってやる。あんたを隠れ家まで送って、次の医者が見つかるまで面倒みてやる。いいな！」
しばし沈黙したハサンは、なにか思い出したように、ふ、と笑った。
処置が終わり、ユウが、ララが、全員が場にそろった。
「その金は取っておけ」

衣服と呼吸を正し、ハサンが、五十万の入った、ひとかかえある布袋を指差した。
「医師、御者、話し相手と……ペット。四人分の賃金としては、破格もいいところだ」
つまり、ユウたちを金で雇おうと言うのだ。
それがハサンの虚勢だということは、誰の目にも明らかだった。
「素直じゃないの。それも意地？」
ララにからかわれ、ハサンは、わざとらしく咳払いをした。

「どこへ行けばいい？」
御者台へ座ったユウが聞くと、
「このまま北だ。アシビエム街道を西へ」
「わかった」
鞭が入り、馬車が、なめらかに動き始める。
「ユウ、足跡を……」
「足跡を散らせ。わかってる」
言葉の端を取られ、ハサンは、フンと鼻を鳴らした。
足跡を散らす、とは、つまり迂回、逆進を繰り返す、ここに至るまでにハサンが使っていた、かく乱の手段である。
「先を飛びましょうか？」
隣の助手台にとまったモチが、宵闇の空を眺め言ったが、ユウは大丈夫だと断った。
馬の腹には、前照灯がくくりつけてある。
おまけにユウは、暗闇で馬車を走らせることに慣れていた。
だが、
「モチは、そばにいてくれ」
いてくれるだけで、心強い。
「喜んで」
モチは嬉しげに答えた。

こうして、仮眠や交代を挟みつつ、夜を日に継いで、一行は北上。アシビエム山脈に沿う街道を、一路、西へと向かった。

かつて北方諸国との国境であったアシビエム山脈は、標高三千メートル級の山々が連なる難所で、ここを越えた先が、現在の北部グライセン地方に当たる。

山肌は、五合目近くまで雪の白に包まれ、本格的な冬が近いことを、ユウに予感させた。

実を言えば、ユウはこの、稲穂が頭を垂れ始めてから大気が肌を刺し始めるまでの季節が最も好きなのだが、

「……っくちゅん！うう……さむ」

助手台に座ったララは、そうでもないようだ。

出立から数日が経ち、テリーも鉄機兵団も今のところ姿を見かけないとあって外へ出てきたはいいが、早朝の身を斬るような風に首をすくめ、足をこすり合わせている。

「だったら中に入ればいいだろ」

「大丈夫、モチ温かいし」

ララは懐に抱いたモチに、頬ずりした。

「寝てるんだ。起こすな」

「モチはこのくらいじゃ起きないって。ねー、モチ？」

「……フムゥ」

「ほら」

ユウは白く息をはき、ひざ掛けにしていた毛織りの布を、ララの肩にかけてやった。

「あ……ありがと」

「もう少し陽が高くなったら、暖かくなる。そしたら返せ」

「うん、わかった。……エヘヘヘヘ」

「妙な笑い方をするな」

ユウの振るった鞭が、ぴしりと鋭い音を立てた。

「……若いな」
車中のハサンは、左手に続く広大な牧草地をながめながら、センターテーブルにサイコロを振った。
「ああ、いい目が出たな」
白の駒が四回、盤上を移動する。
「若い恋はいい。素直な努力と、活力に満ちている」
続いて、向かいに座るアレサンドロがサイコロを振り、赤い駒が動いた。
「だが、それを邪魔しようという無粋な輩も、おうおうにして現れるものだ」
「……なに？」
「死にたくなければ、動かん方がいいぞ？アレサンドロ・バッジョ」
それが言い終わるか終わらないかのうちに、右の木立に面した窓ガラスが割れ、壁板になにかが突き立った。
手のひらに納まるほどの、柄の短いナイフが四本。同時に、馬の首にも一本ずつ、同じものが刺さっている。
もつれるように倒れた馬に乗り上げ、車体が横倒しになった。
「きゃっ！」
空中へ投げ出されたララとモチに飛びつき、ユウはふたりを抱いたまま、まだ露の残る牧草の上を転がった。

「……っ……怪我はないか」
「う、うん……たぶん……あっ！」
「ぐっ！」
突然、ユウの身体が宙に浮いた。
喉輪に回されたのは、太い、男の腕。
とっさに、間に鞭を差しこんだため窒息はまぬがれたが、それもすぐにひしゃげてしまうほどの怪力である。
「だ……誰だ……」
と問いかけるも、相手は答えず、左手をユウの後頭部に沿え、締

める右腕へ押しつけてくる。
「あ、ぐ……」
鞭の柄は、もはや、なんの役にも立たないほど折れ曲がり、ユウは足をばたつかせたが、地面にはかすりもしなかった。
「……ぐ……」
ユウは黒く染まっていく視界の端でも、同じような黒い大男がふたり、馬車の扉をこじ開けようとしている様を見た。

と、そこへララが、
「ユウを放して！」
なんと、男の顔面に、まだ寝息を立てているモチを投げつけたのである。
「！」
悲鳴こそ上げなかったものの、男は息を呑み、モチを払う。
鞠のごとくモチが地面を跳ね、その隙に腕から抜けたユウは、激しく咳きこんだ。
「ユウ！モチ！」
「ホ……もう、夜ですか」
「……よかったぁ」
モチは昼間のまぶしさに目を細めたが、特別怪我をしている様子もない。
ララはモチを抱きしめ、ユウの背をさすった。
しかし、
「あ……！」
三人の頭上に影が差し、今度は大男の手が、ララの首をつかんだのだ。
「か……は……」
のけぞったララの顎が震え、目が、こぼれ落ちるほどに見開かれる。
ユウはすぐに取りすがったが、大男の手をほどくには力が足りな

い。
「やめろ……！離せ！」
と、気道の狭まった喉から声を振り絞り、とにかく叫んだ、そのときだった。
ガラスの割れる音がしたかと思うと、直後。
突き上げるような地鳴りと共に、馬車が大爆発を起こしたのである。

「……あ……ッ……」
あまりの出来事に、周囲の時が、一瞬止まる。
飛び散ったガラスや木片、鉄片が周囲に降り注ぎ、ユウの手にも、割れ板がふれた。
ユウはそれをつかみ、馬車に気を取られた大男の腕へ、根元まで、一気に突き刺した。
「ぐうぉぉぉ！」
これには、さすがの大男も咆哮し、ララを投げ捨てた。
地面に突っ伏したララは、ひゅうと喉を鳴らし、立て続けに咳をした。
「ララ！」
苦しげに、だがしっかりとうなずいたのを確認し、ユウは、ほっと息をつく。
顔を上げると、骨格のみとなった馬車が、カラカラ車輪を回し、燃えていた。
「アレサンドロは……？ハサンは……？ねぇ！ユウ……！」
「あのふたりが……そう簡単に死ぬもんか……！」
言われてララは、ぐ、と唇を噛みしめたが、
「うっ……うっ……」
こらえきれぬ様子で、ユウの胸に顔を埋め、むせび泣いた。
立て続けに起きた出来事への、混乱。不安。
気持ちは、ユウも同じだった。

馬車を襲った大男の仲間ふたりが、怪我ひとつなく姿を現したのは、それから間もなくのことである。

全員が全員、二メートル近い巨体を持ち、黒マントのフードを持ち上げ見せた肌も、皆一様に、墨を塗ったように黒い。

「どうした」

「わからん」

「連中が火をつけた」

と、低く発せられる声も、三人よく似ている。

「死んだか」

「わからん。直前に、目潰しをたかれた」

「だが、生きているとは思えん」

「だが、死んだ証拠もないのだろう？」

「！」

「ならば、油断すべきではないな。バイパー隊の諸君」

「ハ、ハサン！」

大男の陰に、不敵な笑みを浮かべたその人が、悠然と立っていた。

幻でも、もちろん幽霊でもない。

ハサンは大男の盆の窪を、レイピアでつつき、

「さて、これから感動の再会シーンだ。静かに見守るのが悪人のマナーだぞ」

男の尻を蹴り、遠ざけた。

そして……。

「荷物を分担すんのは善人のマナーだぜ」

「アレサンドロ！」

あとから現れたアレサンドロは、自分の剣とユウの太刀、そして五十万の金袋に医療用具、その他諸々の生活用品を、両腕いっぱい

にかかえている。
「ほぅ、私が善人だと？」
「……そりゃそうだ」
アレサンドロは盛大にため息をつき、茫然と口を開けるユウたちのそばへ、荷物を降ろした。
「よう。心配しましたって顔だな」
「ア……アレサンドロォ！ハサァン！」
ララは、ふたりの首に飛びつき、わんわん泣いた。
実のところ、ユウも泣きそうになった。
「まいったな、こいつは……」
「フフン、悪くない」
アレサンドロは照れくさそうにはにかみ、ハサンはララの首筋に、優しくキスを落とした。

……のちに聞いたところによると、馬車には護身用と称して、あらかじめ、大量に火薬の詰めこまれたトランクが積まれていたらしい。
ユウの耳にした爆発直前の破壊音は、脱出口として細工を施されていた、後部のはめこみガラスが割れる音だったのだ。
と……。
よどんだ瞳で五人を見つめていた大男三人組が、ローブの下から短刀をふた振り、それぞれ両手に抜き払った。
「やれやれ、せっかちな連中だ」
ハサンが肩をすくめ、おどけた。
「あいつら、何者なんだ」
アレサンドロとハサンがいれば、もう心丈夫である。
受け取った太刀を剣帯に挟み、ユウは、視界が広くなった気さえしている。
「帝国の犬だ。いや、蛇だな」
ハサンが、くっくと笑った。

「聖鉄機兵団、独立戦闘部隊、通称バイパー隊」
「独立……」
「全員、蛇の魔人様だ」
「なんだと……？」
絶句したのはアレサンドロだった。
「なんで魔人が鉄機兵団に……！敵じゃねえか！」
「フフン、鏡を見ろ。人間の中にも魔人を愛する者がいる。逆もまたしかりだ。もっとも、そこの三人の望みは、情よりも血、なのだろうがな」
こちらの話に聞き耳を立てていたバイパーたちが、ふふ、と薄気味悪く笑った。
「勅命を受けたか、気まぐれか。なんにせよ、話せばわかるなどと思わんことだ。丸呑みされたくなければ殺す気でかかれ」
そこまで言うとハサンは、レイピアをステッキに収め、地面に腰を下ろしてしまった。
「あとは任せる」
「……やれやれ、仕方ねえな」
だが、そもそも傷のふさがっていないハサンは、馬車から脱出できただけでも御の字だ、と、アレサンドロは思っている。
「こいつらだけは頼むぜ」
ララとモチを指差した。
「いいだろう。いざとなれば三人で逃げよう」
「ハ、格好つけてコケるなよ」
アレサンドロは、剣を抜いた。

……ユウとアレサンドロ、三人の殺し屋バイパー。
「二対三か」
互いの距離は、十メートルほど開いている。
「まさか魔人とやるはめになるとはな……。気をつけろよ、いつも

とは勝手が違うぜ」
「わかった」
バイパーたちは、ゆったりとした動作で、五人の周囲を回り始めた。

N・Sの性能に、今まで、どれほど助けられていたか。ユウはそれを、骨身にしみて感じた。
鍛錬の成果で大きな失敗こそないものの、やはり実戦ともなると、素人と思われても仕方がない。
相手の技量、手数共に厄介だが、どうしても、重い太刀に振り回される。
ユウは、ともすれば折れそうになる心を叱咤しながら、バイパーの双剣を弾き続けた。
一方。
アレサンドロも、ふたり相手に、防戦に徹していた。
ひやりとする瞬間にはハサンの援護があるが、なかなか有効打が出せずにいる。
ララとモチだけ先に逃がすことも考えたが、それはかえって危ない。
どうする。このままでは、時間の問題だ。
ユウとアレサンドロの心は一致していた。
すると、
「なんだ……？」
身をひるがえしたバイパーたちが、何故だろう、ふたりから離れ、集まったのだ。
懐から筒を取り出し、双剣の刃に、なにか液体を振りかけている。
「毒か。やっこさん、とうとう本気で殺る気になったらしいな」
「毒……」
ユウは先ほど斬りつけられた左頬の傷をぬぐい、手についた血を、

ズボンで強く、こすり落とした。
「N・Sを使おう」
アレサンドロは首を振った。
「かえってやりにくくなるだけだ。逃げるにしても、その前に誰かがやられちまう」
「……」
「ハ、こりゃ緊張するなって方が無理な話だぜ」
わざと冗談めかしてアレサンドロは言ったが、ユウに、笑うほどの余裕があるはずもなかった。

……ところが、このあと。
その絶体絶命の空気は、思いもかけないところから破られることになったのである。

「あれ……？」
ララは初め、それが幻覚だと思った。
祈り方も信仰心も忘れて久しいララが、知る限りの神に救いを求め、天を仰ぐと、丁度、重く垂れこめた灰色の雲間から光が差した。
その向こうに、人間が浮かんでいたのだ。
「うっそ……」
思わず、腕に力がこもり、抱かれたモチが小さくうなる。
L・Jのような巨大なものではない。
四肢を大きく開いた、確かに人間だ。
その姿が、徐々に大きくなるにつれ、ララにも、それが浮いていたのではなく、降下してきているのだ、ということがわかった。
男だ。
「ハ、ハサン……！あれ！」
そうララが言う頃には、男は懐から広げた巨大な布をふくらませ、パラシュートのごとく風をつかんでいる。
男の身体は羽根のように軽やかに、対峙する両者の中央へ降り立

った。

全身黒ずくめの上下に、鋲を打った手甲、脚半。

目元以外を覆い隠す黒覆面と、寸の短い、つばのある刀を肩に下げた姿は、紛うことなく、忍者。

ただし。

この国には、その名で呼ばれる職業はない。

ゆえにユウは、その男がバイパーと同じ、帝国の暗殺部隊かと思った。

立ち上がった忍者が、刃を向けた相手は、バイパーだった。

「む……」

「何者だ……」

バイパーたちは、一歩二歩と後ずさり、

と、問う。

忍者は、意外にも柔らかみのある声で、

「ジョーブレイカー」

と、答えた。

超人

ジョーブレイカーと名乗った男は、超人だった。
すさまじい刃風と共に、なぎ払われた刃を身を沈めてかわし、足下を狙う剣戟を、刀で受け止める。
と、同時に、左手は、腿に幾本も差しこまれた小刀を抜き打ち、双剣を突き出しかけた三人目が、それを喉元寸前でかわしたところへ、我から飛びこむように前転、包囲をといた。
ここまでが、一瞬。
さらに斬り立てる六振りの切っ先を、するすると後退しつつ受けしたかと思うと、次の瞬間には懐へ入りこみ、ひとりの右太股を斬り裂いている。
悲鳴こそ上げなかったものの、うずくまったその巨体を踏み台に、ジョーブレイカーは五メートル近くも飛び上がった。
「む……！」
残るふたりの頭上を飛び越えざま、腰に下げた長縄が走り、
「ガッ……！」
先端の分銅が、ひとりの鼻を痛打する。
押さえた指の隙間から、おびただしく血をまき散らしながら、ふたり目のバイパーもひざをついた。
バイパーは、頭角らしい、ユウたちを襲った男だけとなった。

「……失せろ」
それでも尚、構えようとするバイパーへ、牧草の上に、ふわりと着地したジョーブレイカーが、言う。
鉢金を当てた覆面からのぞく深緑の瞳は、静かだが、刃よりも鋭い。
バイパーは、ユウたちと忍者、交互に視線を走らせ、舌を打った。
と、突然。

「……！」
バイパーの懐から、黒煙が噴き出した。
ジョーブレイカーは飛び退いたが、それは、ただの煙幕だったようだ。
風が吹き、すべてが押し流されたそこに、もはや、バイパーたちの姿はなかった。

「助かったぜ」
剣を収め、きびすを返した忍者に、アレサンドロが言った。
ジョーブレイカーは息も切らせていない。ちらりと視線をくれたのみで、アレサンドロの脇をすり抜け……、足を止めたのは、何故か、ユウの前だった。
「な、なんだ……」
うろたえたのはユウである。
こちらを直視する、一点の曇りもない瞳。
よくよく見れば、右眉の上から左の頬へ、斜めに、古い刀痕が走っている。
ジョーブレイカーの手が伸び、とっさに身構えたユウの手から、どこをどうしたものか、太刀が奪われていた。
「あ……！」
詰め寄ったユウの前に手のひらが突きつけられたのは、黙って見ていろ、ということだろう。
ジョーブレイカーは、じっと刀身を見つめ、再び、ユウへ視線を戻した。
「……」
「え……？」
なにか、つぶやいたようだったが、聞き取れない。
そのまま、太刀はユウの手元へ戻された。
「……さらばだ」
「お、おい、ちょっと待てよ！」

つかみかけたアレサンドロの指が空を切り、ジョーブレイカーは、煙のごとく消え去った。

「……なんだったんだ？あいつは」

頭をかき、アレサンドロが苦笑した。

「それを詮索できる立場でもあるまい」

「そりゃあ、な」

ハサンの言う通り、ジョーブレイカーがいなければ、どうなっていたかわからないのだ。

何者であろうと、感謝しなければ罰が当たる。

ただひとつ、アレサンドロの気にかかったことは……、

「お前、心当たりはねえのか？」

「……」

「おい、ユウ？」

「あ……す、すまない……なんだ？」

「……いや、なんでもねえ」

アレサンドロは肩をすくませた。

だが、聞こえていたところで、ユウにはなにも、答えることはできなかっただろう。

ジョーブレイカーなどという人間も、忍者も、ユウは、まったくの初対面であった。

ユウは、今頃になって震え始めた指を、何度か握っては開き、いまだ座りこむララの前へ、ひざをついた。

「大丈夫か？」

うなずくララも、モチを固く抱き、震えている。

「ごめんね。立てなく、なっちゃって」

泣きはらした顔には、まだ涙の跡が残っていた。

「無理ないさ。俺だって、怖かった」

「ホント……？」

「ああ」
「そっかぁ……」
ララは深く息をはき、モチの頭に顔を埋めた。
「なんでだろ。Ｌ・Ｊに乗ってるときは、なにがあったって、こんな風にならないのに……」
ユウはいろいろと言葉を探したが、結局、
「……なんで、だろうな」
こんな言葉しか、思いつかなかった。

「さて、どうする」
焼け落ちた馬車を眺め、誰に言うともなしに、アレサンドロが言った。
「まだ遠いのか？」
ハサンは、さぁて、とパイプケースを取り出し、口にくわえて葉を詰める。
「男の足で三十分。死にかけの足で一時間」
「なら、一時間半を見て行くか」
「これは手厳しい」
笑いながら、ハサンは靴底でマッチを擦った。
だが、実際、アレサンドロの言う通りになった。
いや。
アレサンドロがそのように調整していった、というのが正しい。
平坦な街道筋を西へ進んだ一行は、小さな無人の神殿を目印に北へ折れ、山裾を、さらに獣道へと分け入った。
ハサンとアレサンドロを先頭に、ララとモチ、少し間をおいて、ユウ。
アレサンドロはそこで、しつこいほど頻繁に、適当な場所を見つけては休憩を挟んでいったのである。
渋々、という態度をとりながらも、ハサンも、おとなしくそれに従った。

八分ほど紅葉した木々の間を太陽が見え隠れしていたが、この時間になってもまだ、空気は冷え冷えとしている。

そうして……。

ハサンの隠れ家に到着したのは、この日も昼近くになってのことだった。

かつて、北方諸国へ侵攻する際、帝国は奇襲路として、アシビエム山脈の南北を通すトンネルを掘り進めた。

当然、無謀を極めるその計画は頓挫したのだが、穴は残され、それをハサンが再利用したのだ。

しかし、ただのトンネルではない。

何百何千という騎馬を通行させるための道である。

敵軍への発覚を警戒し、間口は三メートルほどと狭く造られていたが、ひと度、足を踏み入れると、

「うわぁ」

落ちこみ気味だったララさえも、歓声を上げる大空間が、そこには広がっていた。

幅は、実に、百メートル。壁に埋めこまれた光石が照らし出す荒削りの天井は、N・Sさえ収まる高さがある。

入口付近から奥行きは確認できなかったが、それも、かなりの距離が想像できた。

だがそれ以上に驚くべきは、その空間へ積み上げられた、彫像、宝石、金塊、刀剣といった、宝物の量である。

それはもう、ひとりで集めたとは思えない数の品々が、無造作に放置されていた。

「す、ごぉぉ！」

ララは目をしばたたかせ、彫像の台座に置かれた、卵大の紅玉を手に取った。

「きれい……」
「持っていっても構わんぞ」
「え！……う、ううん、いい」
「ほぅ、無欲だな」
「だって……後が怖いし」
「ンッフフフ、賢明な判断だ」

盗品のスペースを抜けると、屋内だというのに川が流れている。大理石で道作られた川幅は、二メートル程度。水は澄み、豊かである。

ハサンが言うには、この湧き水こそがトンネル計画頓挫の元凶であったらしい。

さらに、この川を越えた先が、生活空間。

といっても、こちらも随分と手を抜いたもので、壁も目隠しもない中に、ただ雑然と家具が置かれていた。

「ほれ、あんたはこっちだ」

アレサンドロは、ベッドにかけられた埃よけの白布を剥がし、ハサンを、そこへ放りこんだ。

「ここからは絶対安静だぜ」

「酒と煙草は？」

「……ほどほどにな」

「おお、アレサンドロ先生は話がわかる」

軽く笑ったアレサンドロが脈を取り、再び顔を上げると、ハサンはすでに、深い眠りに落ちていた。

帝都の影

帝都クリスベン。
その、帝城敷地内の片隅に、人目を避けるように建てられた、とある研究棟がある。
うっそうとした木々に囲まれたそこは、日中でも薄暗く、うら寂しく。巡回の騎士以外は、誰も近づこうとはしない。
今、雑草の生えるに任せた申し訳程度の道を、草木一本折ることなく抜けてきたその人物は、ふと足を止め、鉄仮面に隠した顔を上げた。
びっしりとツタの張りついた石積みの建物から伸びる、三本の煙突。
その一本から、桃色の煙が流れ出している。
「フン」
鉄仮面はマントを払い、建物へと向かった。

「や……」
アルカリ系の、なんともいえぬ悪臭の中、沸いた窯の前で作業をしていたのは、老博士だ。
博士は、突然の来訪者の気配に腰を浮かせ、表の様子と同様、荒れ放題となっている白い髪の間から、血走った目で鉄仮面をねめ回すと、
「おお……あなた様でしたか」
これも長く絡まり合った髭をなでつけ、ヒヒ、と笑った。

博士の名は、スダレフ。
いわゆるマッドサイエンティストである。
先帝存命中は、五感を高める怪しげな興奮剤や、爆発的な効果を持つ筋肉増強剤、ときには毒ガス兵器などを作っては喜ばれていた

が、今となっては軍部の鼻つまみ者で、蔑まれながら、こうして帝城内で飼い殺されているのである。
「ラッツィンガーの息子は、いかがでしたかな」
スダレフは、薬剤で変色した指を前掛けでこすり、鉄仮面へ椅子をすすめた。
「所詮、当て馬よ」
「ほほぅ、やはり駄目でしたか」
「そうでなくては楽しめん」
「いかにも、いかにも」
「たわむれに蛇を差し向けてみたが、これも、しくじってな」
よほど気を許しているのか、今日の鉄仮面は、ジラルドの前に現れたときとは別人のように、よく喋る。
「ヒヒ、それはますます面白い」
スダレフは手を打って喜んだ。
そこへ。
ひとりのメイドが、盆に茶を乗せ、現れた。
顔立ちは愛らしいが表情がなく、年齢を計りがたい娘だ。
「どうぞ」
ティーカップを置くその手を、鉄仮面がつかみ、
「スダレフ」
「はあ」
「次は、これを使ってみようと思うが……」
「ほぉう」
スダレフが、にたりと笑った。
「それは結構でございますな」
濃紺の、飾り気のないワンピースにエプロンを羽織った娘は、握られた手を振りほどこうともせずに、機械的な視線を鉄仮面へ注いでいる。
「名は、なんといったか」
口を開きかけたスダレフを制し、鉄仮面は、娘を見た。

「シュナイデ」
「殺しの経験は？」
「ありません」
突如、鉄仮面が腰の剣を引き抜き、シュナイデの首筋を、浅く切り裂いた。
傷口からは、血のひとしずくも流れない。
シュナイデは、別段取り乱すこともなく、ただ、おかしなことをする人だ、とでも言うように、首をかしげた。
「なるほど、よくできている」
「ヒヒ、恐れ入ります。では早速、Ｌ・Ｊの調整をば……」
「任せる。私はこれから……少々忙しい」
「はいはい」
スダレフは、嬉しげに手を揉んだ。
「終わり次第、ご連絡いたします、閣下」

その頃。
同じ帝城内では、とある騒ぎが持ち上がっていた。
「大祭主がさらわれたぁ？」
「しっ！声が大きい」
屋内闘技場に声が響き、ギュンターは、同じ帝国七将軍のひとりである、カール・クローゼ・ハイゼンベルグに口をふさがれた。
端正なマスクと柔和な物腰。多くの女性から絶大な支持を得る、今年二十歳になる若将軍である。
つまり、ギュンターよりもひとつ年上、ということになる。
「放せ、気色悪ぃ。こっちは汗かいてんだ」
先ほどまで、サリエリ相手に剣の修練にはげんでいたギュンターは、クローゼを突き放し、タオルで口をぬぐった。
「大体、テメェが人払いしたんだろうが」
「それはそうだが……、用心するに越したことはない」
「あぁ？なにが用心だ」

「ギュンター様」
そこでサリエリが、口を挟んだ。

ギュンターが、もろ肌を出し、大汗をかいているのに対し、こちらは実に平然としている。
十年ほど前にヴァイゲル家へ小姓として上がったサリエリだが、それから今まで、ギュンターは勝てたためしがないのだ。
ちなみに、サリエリはこう見えて、まだ二十六歳である。
それはさておき、
「クローゼ様の、おっしゃる通りです」
サリエリは言った。

「事は、大祭主様です。表沙汰になれば、混乱は避けられません」
「さすが、サリエリ。そうなのだ。帝都の混乱は国家を乱し、余計な争いを招く元になる。だからこそ……」
「細心の注意を払え、かよ。チェッ！面倒臭ぇ」
「真面目に聞け、ギュンター」
ギュンターとクローゼは、脇に置かれた籐製のひじ掛け椅子に、それぞれ座った。
すかさず、同じ籐製のテーブルに、クリスタルグラスに満たされたアイスティーがふたり分、供される。
クローゼは、
「ありがとう」
と、何気なくサリエリに微笑みかけ、それを口に運んだ。
ひと息に干されたギュンターのグラスを、サリエリは再び、アイスティーで満たした。

「で？俺になにしろってんだ」
「いや、なにをしろということはない」
「あぁ？」

「ラッツィンガー将軍が、まだウィンザーより戻られていないだろう？ご子息を亡くされ、さぞ、お心を痛めておいでだろうが、鉄機兵団を動かすのは、ご指示をあおいでからがよかろうと、ケンベル将軍もおっしゃっておられてな」

オットー・ケンベルは聖鉄機兵団、最年長の将軍である。

足腰も弱りきり、前線に立つことはもうないだろう、と言われている。

「元老院と、皇帝陛下のお耳へ入れるのも、その後のことだ。今はそのつもりで待機していてくれ」

「ハン、悠長なこった」

「仕方ないだろう。誰の仕業か、なにが目的か、まったくわかっていないのだから」

「へいへい」

「だから真面目に聞け」

暇つぶしぐらいにはなるか。ギュンターは思った。

ユウたちがハサン追跡に走ったおかげで、ギュンター軍諜報部隊は、ペルン以降のその足取りを、見失ってしまっていたのだ。

こうして帝都でくすぶっているのも、ララの居場所がわかるまで、他にするべきことがなかったからなのである。

首輪

「火を」
アレサンドロの差し出したマッチを火種に、パイプへ火を入れる。
ベッドの天板に背を預け、二度、軽く煙を吹くと、
「悪くない」
ハサンはにやりと、それだけ言った。

あれから、傷は日に日に回復へ向かい、無理さえしなければ、医者の手は借りなくともよいところまで来ている。
意外に早くここまで至ったのは、本人の体力と、撃ち抜かれた場所がよかったのだ。
だがそうなると、ただ寝ているだけでは退屈になってくるもので、ハサンは、N・Sコウモリを見せてくれ、自分が置くつもりだった場所に飾ってくれ、と、アレサンドロに頼み、アレサンドロも医者の心情が働いてか、それを承諾したのだった。
宝物の中心に立つコウモリは、その照り返しを浴びて、金色に輝いて見えた。
「歩行許可をくれんか？アレサンドロ先生」
「うん？」
「もう少し、近くで見たい」
ハサンが、『先生』と呼ぶときは、もちろん茶化す意味もあるのだろうが、そちらの意に沿わぬことはしない、という思いを暗に含ませている。
ゆえにアレサンドロは、
「わかった、いいぜ」
コウモリの指輪だけは預かることにし、ハサンが立ち上がるのも助けてやった。
「おお、寒い」

肩をすくめたハサンは、手早くワイン色のガウンにそでを通し、素足に靴を履いた。

「もう冬だな」

「あんた、冬でもここにいるのか？」

「いや。雪が降れば、街で宿暮らしだ。女を抱き、好きなものを食って春を待つ」

「いいご身分だな」

「仕方あるまい、誰も私を捕らえられんのだから。金を持つ男が快適な生活を送ってなにが悪い」

まさに盗人猛々しい。

「でもよ、一度はぶちこまれてるんだ。警戒ぐらいしねえか？普通」

「あれは捕まってやったのだ」

「そういうのを、負け惜しみって言うんだぜ。仮にそうだとしても、片腕一本と引き換えじゃ、遊び賃は高くついたってわけだ」

すると、どういうわけか。ハサンは、くっくと笑い、

「さて、それはどうかな……」

異様な光をたたえた瞳で、虚空を見つめた。

思い出にひたっているような目だが……。

なんだ……？

アレサンドロは、背筋に冷たいものを感じた。

「ハサン、あんた……」

「……フ」

たちどころに、ハサンの目から怪しげなものが消え、元の穏やかな色が戻る。

「これだから医者は好かん。ついつい、さらけ出してしまう」

「……気になるな」

「いずれ聞かせてやる。私と、カラスとの関係もな。気になっているのだろう？」

「べ、別に、俺は……」

「色恋のそれはなかった。だが、敬愛はしていた」
「なに……？」
「今はそれだけだ。……おお、やはり近くで見るN・Sはいい。美しいな」
そこへ、近くの町へ買出しに出ていたユウ、ララ、モチが戻ってきた。

「わ、これ？新しいN・S。キレーイ！」
「ハサン、もう起きていいのか？」
「当たり前だ。私を誰だと思っている」
「ん……よかった」
ユウは頭をかきつつ、荷物を降ろすため、奥に向かった。
その後ろ姿を眺め、
「今の話、あれには黙っていろ。説明が面倒だ」
ハサンが素早く、アレサンドロへ耳打ちする。
「そりゃいいが……ハ、あんたの弱みを握った気分だな」
「フフン、切り札は大切に使え、アレサンドロ」

その夜のことだった。
「なに？」
お前たちについていく。ハサンが突然、そう言い出したのだ。
「あんた、さっきは、春まで街で暮らすって言ってたじゃねえか」
「気が変わった」
「ああ？」
「近頃は、盗人稼業も退屈になってきてな」

どうだ？とでも言うように、アレサンドロの視線が、ユウに向けられた。
その躊躇は、ユウにもよくわかる。
今のところ、ハサンがなにか、たとえばN・Sなどを狙っている

様子はない。
だが、ついていくと言うからには、腹に一物隠しているのは間違いないのだ。
それが、ユウたちにとって害となるものか、どうか。
どうとも言えず、ユウは小さく首を振った。
「さて、どうしたもんかな……」
アレサンドロは顎をかき、
「まあ……いいぜ。裏の世界に顔が利くってのは、悪くねえ」
「フフン、それはどうも」
ハサンは横たわったベッドの上で、行儀悪くパイプを吹かし始めた。
「ハサン」
「ん？」
アレサンドロの手から、枕元に投げられたそれは、Ｎ・Ｓコウモリの指輪。
「あんたが持ってな」
「ほぅ」
「それが首輪代わりだ」
「……ンッ、フ、ハ、ハ、ハ！おお、結構結構！それでこそだ！」

「ね、どういうこと？あげちゃっていいの？」
ララが、アレサンドロのそでを引いた。
「別に構わねえさ。これからは仲間だろ？」
「それはそうだけど……、なんか変」
「ハ、俺も大分、あのオッサンの扱い方がわかってきた、ってことだろうぜ」
ララは首をかしげた。
「あ……ハハ、そうか」
「え、なになに、ユウは、なにかわかった？」
「ああ、わかった」

ハサンは、盗むという過程にこそ、喜びを覚える男である。
それが、ポンと、品物を渡されたらどうだろう。いつまでも、これは他人のもの、という意識が働くに違いない。
さらに、持って逃げようものなら、ちんけな寸借詐欺に落ちぶれる。
ハサンのプライドは、それを許さない。
「つまり、えっと……」
「指輪を持ってる間は、どこにも逃げられない」
「ああ、それで首輪かぁ……。アレサンドロ、ちょっと格好いいかも」

何故だろう。
ユウの胸に、ちくりとしたものが走った。

神よ

ユウ、アレサンドロ、モチ、ララ、ハサン。
五人となったパーティは、近くの町で幌馬車を一台買い求め、アシビエム街道をさらに西へ向かった。
その生活の中で、大きく変わったことがひとつある。
小さかろうが大きかろうが、とにかく宿に泊まるようになったのだ。
「旅は、快適だからこそ、する価値がある」
というのが、ハサンの持論である。
今日もまた、パリュという、アシビエム山脈の西端、街道筋では最も大きな宿場町へ入った一行は、中心部から少し離れた、一番上等な宿を取り、食事までの時間を各自自由に過ごすことにした。

「なんでついてくるんだ」
「いいじゃない。あたし、神様にお礼言わなきゃ」
ユウとララは、人通りも多い、幅広のゆるやかな坂道を下り、パリュにただひとつのメイサ神殿へ礼拝に向かっている。
街路灯は点灯しているが、空にはまだ赤みが残っていた。
「礼？」
ユウが聞くと、ララは待ってましたとばかりに、腕に腕を絡ませてきた。
「ほら、あの黒い奴らが出たとき」
おそらく、バイパーたちのことだろう。
「あたし、神様に助けてください、ってお祈りしたの。そしたら、あのジョー……なんとかが助けてくれたでしょ？だから、お礼」
「ああ」
「別に神様なんて信じてないけど、それでも助けてくれるんだね。神様って人よすぎぃ」

ララは屈託なく笑った。
と、思うと、あ、と口をふさぎ、
「あ、ご、ごめん……別に、馬鹿にしたわけじゃないから……」
ユウの顔色をうかがい見た。
信心深いユウにとっては、面白くない言いようだったかもしれない。そう思ったのだ。
しかし、当のユウは、あっけらかんと暮れなずむ空を見ている。
「……怒ってない？」
「？……なにをだ？」

……これはこれで、ララが面白くない。
相手にされていないように思える。
ユウの腕をふりほどき、
「なんで？なんで怒ってくれないの？」
「だから、なにを……」
「あたしのことなんか、どうでもいいって思ってるんでしょ！」
「別に思ってない」
「嘘！アレサンドロが同じこと言ったら、絶対怒るじゃない！今、すっごい適当に受け流してる感じだったぁ！」

ユウは困った。
どこで逆鱗にふれたのか、まったくわからない。
「じゃあ、どうしろって言うんだ」
「どうしろって……そういうこと言ってもらいたいんじゃない！」
もう、話が通じない。
「とにかく落ち着いてくれ。人が見てる」
「関係ない！そんなの！」
「あるだろ」
「ないっての、バカ！ユウのバカぁ！」
ララはくるりと身を返し、坂を逆に、上り始めた。

「おい、ララ！」
「うるっさい！」
「ララ！」
今ここで宿に帰しても、どことなく面倒なことになりそうな気がする。
ユウはララを追いながら、どうすればいいか考えた。
ララはなにを言ってもらいたいのか。なにをしてもらいたいのか。
いや、まず落ち着かせるにはどうすればいいのか……。

『抱きしめて、キスだ』

……ハサンの声が、頭の片隅で聞こえた。
冗談じゃない。
ユウには、説得の選択肢しかなかった。

「ララ」
「……」
「ララ、なにか気に障ることがあったんなら謝る。俺は……、一体なにをしたんだ？」
「……」
「ララ」
「別に……」
「え……？」
「ユウは、なにもしてない……。だから！腹が！立つの！」
「お、おい……ララ！……くそっ！」
理解の限界を超えた今、これしか手は残されていない。
ユウは、足早に坂を上っていくララに駆け寄り、手を取って無理やり振り向かせると、
「！」
抱きしめた。

色気もそっけもない。自分の中では、ただ、恥ずかしい。
道行く人々が、ニヤニヤとこちらを見ている。
これが不正解だったらどうする。泣きわめかれたらどうする。
そればかりが頭をよぎった。
「ユウ……」
「あ、ああ……すまない……」
「……ユーウー！」
……神よ、正解に感謝します。
首に抱きつかれながら、ユウは思った。

すっかり機嫌の直った現金なララが、腕に密着し、太陽のような笑顔をユウに向けてくる。
どっと疲れたユウは、このまま宿に帰ろうかとも思ったが、
「行こ！神様に会いに行こ！」
ララに引きずられ、結局行くことになった。
「神は信じてないんだろ？」
「あ、意地悪。いいの、ユウが信じるなら、あたしも信じる」
「別に無理して信じることないさ」
「でも、信じる子の方が好きでしょ？」
「それとこれとは別だ」
「それって……遠回しに、あたしのこと好きって言ってる？」
「どうしてそうなるんだ」
「……」
まずい。
「だ、大体、神に信じるも信じないもないんだ」
「……どういうこと？」
「神は俺たちの信心の中に宿られるものじゃない。信じようと信じまいと、常にそこにおわすんだ」

「……うーん」
「たとえば……空気、あるだろ？」
「うん」
「空気がなければ、俺たちは生きていけない」
「うんうん」
「でも、空気の存在を知っている、信じているから、空気を得られる、というわけじゃない。それと同じなんだ。神々の恩恵は信心の有無に関わらず、すべて等しく、生命に与えられるものなんだ」
ふんふん、と、ララは首を縦に振った。
「だから感謝をする。神文も神歌も、すべて、日々与えられる恵みに感謝して捧げられる。信じていますというアピールでするものじゃない。恵みを祈願するならともかく、ただ漠然と、お守りください、お助けくださいと望むものでも、本来ない」
「え！そ、そうなの？」
「そうさ。もし、ララの祈った神が願いを聞き届けてくださったというのなら、それは助けてくださったのではなく、ジョーという縁を授けてくださったんだ」
「えにし……？」
「縁は、神がお与えくださる最高のお恵みだ。命と命が交わって、生が生まれ、心が動く。縁が、万象を動かす。運命という言葉が、この世に形を持って存在するというのなら、与えられる縁にこそ運命があるのであって、定められた命の行く末という解釈でその言葉を使うのは、ナンセンスだと俺は思う」
ララは呆気に取られた。
言っていることもよくわからないが、ここまで饒舌にものを語るユウを、いまだかつて見たことがない。
その食い入るような視線に気づき、
「あ……」
ユウは、はにかんだ。

「悪い。……俺、こういう話、今まであまりできなかったから……」
激しく心ときめかせたララは、ユウの腕にしがみついた身体を、もじもじと身悶えさせた。
「ぜ、全然大丈夫！わからなかったけど大丈夫！」
「……ハハ」
「～～～……ッ！」
ユウの優しい微笑みに、ララは悶え死ぬかと思った。

メイサ神殿の再会

「ユウって、神学校通ってた？」
「まさか。その歳の頃は、ハサンについて盗みをやってた」
「あ、そっか。アハハッ、なんかおかしいね」
とっぷりと日も暮れ、周囲の家々からもれる明かりが、道の両側から、ふたりを照らし出す。そろそろ酒場の表看板にも灯が入り、賑やかな声も聞こえ始める時刻だ。
どこからか漂ってくる、夕食支度のにおいに包まれながら、ふたりは市街地を西へ抜け、パリュ・メイサ神殿へと到着した。

「わ、結構立派ぁ」
ララの言う通り、正面に見える神殿建築もさることながら、左手には礼拝者を泊める、別棟の宿房まである。
石造の神殿へ足を踏み入れ、地下へと続く大階段を下ると、自然洞窟そのままの薄暗い空間に、土女神メイサの祭壇が安置されている。これは、全国のメイサ神殿、共通の造りであった。
物珍しげに視線を走らせているララの腕を引き、ユウは祈りの場所を探したが、夕食前のひとときに祈りを捧げるのは、神徒にとってごく日常のこと。この夜も多くの人々で、祭壇前は埋まっている。
「ここにしよう」
ふたりは祭壇から少々離れた、乾いた床を選び、ひざまずいた。
「祈ったことくらいあるだろ？」
「う、うん……。あ、でも、光石忘れちゃった」
「ここはメイサ神殿だから土でいい」
「あ、そか」
ふたりは、ひんやりとした、むき出しの地面に直接座り、足元の土をひとつまみ、額と胸に押し当てた。
胸の前で指を組み、

「神文知らないんだけど……」
「自分の言葉で祈ればいい。神は差別されない」
「うん。えーと……」
ララは祈った。

あのときは、ありがとうございました。
縁？をありがとうございました。
ユウと、もっと仲よくなれますように……。

「……」
薄目を開け、左隣をうがかうと、ユウは、まだ口の中でなにか唱えている。
かと思うと、頭を下げ、再び土を額と胸に当て、また祈る。それを三回繰り返した。
「心よりの祈りに、さぞやメイサもお喜びのことでありましょうな」
「ッ！……これは……！」
「あいや、そのままそのまま」
突然、背後から肩を叩かれたユウは、その神官に頭を垂れた。
「お久しぶりです。随身官様」
「いやいや、カウフマン殿もお元気そうでなにより。また会えたこと、メイサに感謝しなくてはなりませんな」
メイサ神殿最高権力者、カジャディールの随身官ヌッツォは、広い額をつるりとなで、祭壇へひざまずいた。
デローシス以来の再会である。
「随身官様。では……大祭主様もこちらに……？」
「しっ！……外へ」
「……はい」
三人は神前を辞し、再び階段を上った。

「そちらのご令嬢は……？」

「ララ・シュトラウス。今は共に旅を」
「ははあ、ではあなたがシュトラウス機兵長……。いや、こちらにもいろいろと、手配書などが回ってくることもありましてな。……それにしても、カウフマン殿」
「はい？」
「すみに置けませんなぁ」
ぐふふ、と、ユウは、ひじでつつかれた。
「え……！いや、違……！」
「メーテルのご加護がありますように」
「随身官様……！」
月女神メーテルは愛の神である。
ユウは焦って否定したが、かえってヌッツォには、
「またまた、憎い憎い」
冷やかされた。

「そ、それで、大祭主様は……」
「む……。されば……これはどうか、ご内聞に」
「はい」
「実は……大祭主猊下におかれては、十日ほど前より、少々ご体のお具合を損なわれておられ……」
「そ……！お、お加減は！」
「あ、どうか……声を。……日々のお疲れと季節の変わり目で、風邪をこじらされたのだろうということで……今はもう大事なく」
熱も下がり、今朝は粥を五膳も平らげたと聞き、ユウはメイサ神に感謝した。
「それで……いかがですかなあ、カウフマン殿。猊下の御心を、お慰めしてはいただけませぬか」
「いえ……しかし……！」
大祭主の身体に差し障りがあっては、申し訳ない。
辞退するユウの手を取り、ヌッツォは、

「いや、是非にも」
強く握りしめた。
「猊下には、事あるごとに、カウフマンはどうしているであろうかと仰せになられ、貴殿をいたくご心配なさっておられるご様子。これもお導きと思い……是非にも」
ユウは、胸が熱くなった。
「カウフマン殿、この通り。でなければ、私がもう、どのようなお叱りを受けるか……」
「いえ、随身官様。こちらからお願いします。大祭主様に、お目通りを……」
「ありがたい！」
ヌッツォは飛び上がって喜んだ。
「では、今すぐにでも！」
「はい。ああ、ララは宿に戻って、このことをアレサンドロに伝えてくれ。心配いらないからと！」
「あ、ユウ！……もぉ、バカぁ！」

神殿と同じ、石造りの宿房へ案内されたユウは、一階の、最も奥まった一室へと導かれた。
磨き上げられた壁と天井は、さながら鏡のようだが、敷かれた黒の絨毯のおかげで、寒々しさはない。
「猊下、ヌッツォでございます」
重厚な木の扉を叩き、まず、ヌッツォが部屋へ入った。
カジャディール大祭主は、濡らした白布を額に乗せ、神殿の宿房らしく閑散とした部屋のベッドへ、鬱々と身を横たえていた。

「いかがでございます？」
「……寝るのに飽いた」
「あっ！なりません猊下。またお熱を召されます！」
「たわけ。カビが生えるわ。ああ、腰が痛うてならん」

「なりません、なりません！」
「うるさい男よ。おぬしなど、ハゲてしまえ」
「おお、なんということを！ハゲませぬぞ、決して！」
「メイサよ、この男にハゲを……」
「お、おやめください！折角、このヌッツォめが、特別よく効く薬を持ってまいりましたというのに！」
「なに……？」
「少々お待ちください。ただし、ご安静に。よろしいですな？」
したり顔でそう言うと、ヌッツォはユウを招き入れた。
すると、病み上がりの青白い大祭主の顔に、みるみる血が上り、
「……カウフマン……！」
「あっ！猊下！ご安静にと……！」
「たわけ。これが寝ておられようか……！」
素足で出かけるのへ、ユウも飛びつくように、それを押しとどめた。
「大祭主様、どうか……！」
「む……む……」
カジャディール大祭主は、しぶしぶ布団をかぶった。

「息災のようで、なにより」
一度ひざまずき、すすめられた椅子へ腰かけたユウは、思ったよりも張りのあるカジャディールの声に、ほっとした。
「メイサのご加護です。本当に……感謝しています」
「おお、わしもよ。わしも、メイサに感謝を。……この命あることに……この再会に……」
カジャディールは、額と胸にふれた。
「して、どうかな？旅ゆきは」
「はい、今のところは……なんとか」
「ふふ……聞くな、か」
「そんなことは……」

ない、とは言い切れなかった。
そう言われて思いつく罪悪が、山のようにある。
もちろん、仕方のない部分も多いのだが、結局は自分で選んだ道だ。それを言い訳にするのは、あまりにもふてぶてしい。
「……申し訳、ありません」
ユウは視線を落とした。
その様子に、
「ふむ……」
カジャディールは、さてどうしたものかと髭をなでつけ、
「それを」
なにを思ったか、ユウの腰に下がった太刀を、指差した。
元はといえば、カジャディールの剣である。
ユウは、剣帯から鞘ごと抜き、半身を起こしたカジャディールへ、それを差し出した。

「刃には、のう、カウフマン」
「は……」
身体が冷えぬよう、ユウはカジャディールの肩へ、神官衣を着せかけた。
「刃には、扱う者の心が映る」
「……心が？」
「すさめばすさむ。迷えば迷う。そなたの刃は……」
と、カジャディールの目が、抜き身に沿って、上下する。
生唾を飲むユウの目の前で、
「優しい」
「え……？」
カジャディールは、ふ、と微笑んだ。
「そなた、後ろを見るには、まだ若い」
ユウの肩を、温かい手のひらが叩く。
「心おもむくまま、今はゆけ、カウフマン」

そのとき、ユウは悟った。
大祭主様は、すべてご存知だ……。
うつむいた胸の中で、つかえていたしこりが、溶けていくようだった。

おもむくままに

「大祭主猊下！」
その騎士が駆けこんできたのは、ユウが准神官の祝福を授けられているときであった。
薄桃色の甲冑とマント。透き通るような長い金髪をした顔立ちのいいその青年は、聖砂で描かれた祭紋の上に正座するユウと、陶器の聖杖を捧げ持つ大祭主の姿を目に捉えると、
「あ、こ、これは……失礼を！」
胸に手を当て、ひざまずいた。
カジャディールはそれに構わず、
「ドーム・ノイ・ター・ゼイ・ドゥーン……」
朗々と、神文を唱え続ける。
「大地の子よ。母のよき恵みが、その身にもたらされんことを」
ユウが聖杖の先に口づけを落とし、儀式は終わった。

これで、ユウは正式にメイサ神殿、准神官である。
なるよう勧めたのはカジャディールだが、それを受けたからには、旅の結末がどのようなものになろうと、メイサの子として命をまっとうする、その覚悟を決めたことになる。
恥じ入るおこないは、無論、してはならない。
誓う思いで首を垂れたユウの頭を、大きな手がなでた。
「位を戒めと思うな、カウフマン」
ユウは、ハッと顔を上げた。
「母は等しく、誰の元にもある。我々はただ種をまき、後の実りに感謝するのみよ」
「は……」
「心おもむくまま、よいな？」
「……はい……！」

ユウは生涯の忠誠をこめ、大祭主の指先にも唇を押し当てた。

「さて……」

カジャディールは、青年騎士へ向き直った。

騎士は大汗をかいている。

「ご、ご無礼をいたしました……」

「なに。そなたは、いつものことよ」

閉口する青年を笑ったカジャディールは、羽織った神官衣を脱ぎ、ベッドへ入った。

「して、何用かな？ハイゼンベルグ将軍」

ユウは仰天した。

確かに、大祭主の部屋へ押し入ることのできる騎士など、将軍しかいない。

しかし予想もしていなかった事態に、ユウの指先が震えた。

「は……」

と、将軍、カール・クローゼ・ハイゼンベルグは立ち上がり、

「病に倒れられたと聞き……」

「わざわざ見舞いに来るほど暇でもあるまいに」

「いえ、とある任務を仰せつかりまして、近くまで参りました。するとその……大祭主猊下が……明日をも知れぬ、と……」

「ふ、は、は、は！それで、血相変えて参ったか」

「申し訳ありません。情報部隊の者には、きつく申し伝えておきます」

「なに、よいよい」

「お、恐れ入ります」

クローゼの言動には、若々しく、素直な人柄があふれている。

こうした将軍もいるのか、と、ユウは思った。

帝国や将軍に対し、あまりいい印象を持っていないだけに、それは驚きであった。

「ときに、クローゼ」
「は？」
「任務とは？」
カジャディールが切り出すと、クローゼは口ごもり、
「ですが……」
ユウを見る。
「その者ならば案ずるな。いずれ、わしが手元に置こうとも思うておる男でな」
「ああ、道理で。いえ、大祭主猊下自ら、准神官の位を授けられる姿など、初めて拝見しましたので」
「やれぬわけでなし。常は、やらぬだけよ」
手元に置くかどうかはともかく、カジャディールは、ユウに少しでも、鉄機兵団に関する情報を与えようとしてくれているのである。
それと察したユウは、クローゼに気づかれぬよう小さく、だが、しっかりと頭を下げた。
「で？」
「は。大祭主猊下にも関わりある一件ではありますが、緘口令がしかれております。よって、これはあくまで、私の一存で申し上げること。どうか他言無用に」
「うむ」
「実は……、メーテル神殿、ディアナ大祭主猊下が、かどわかされました」
「なんと……！」
目をむいたカジャディールの髭が、ふるふると震えた。
無理もない。土女神メイサと月女神メーテルは姉妹神なのだ。
カジャディールとディアナ大祭主の間に、深い交流があったとしても不思議ではない。
「し、して……？」
「要求は一億フォンス。金目当てです。ラッツィンガー、クラウディウス、そして私の軍で捜査を」

「うむ、それで！」
「大祭主様……！」
つかみかかる勢いでクローゼに迫るカジャディールを、ユウは間に入り、静めた。
「犯人の目星は、ある程度まとまっております。それがアシビエムより北、北部領に根城を構える盗賊らしく、こうして我々が、調査をまかされたわけです」
「ふむ……ぅ」
「……ハイゼンベルグ将軍」
「なにかな？准神官殿」
「その、盗賊の名は？」
ユウの問いに、クローゼは怪訝な顔をした。
だが、これは大切なところだ。
ハサンと同じ、北部領の盗賊ならば、ユウもよく知っている。
「教えてください。役に、立てるかもしれない」
クローゼは、ユウの真剣な眼差しにうなずき返し、
「ヒッポだ」
はっきりと告げた。
数度会ったことのある名だ。
さて、どこで会ったのだったか……。
「確か……ザリ湖のそばに……」
隠れ家があったはずだ。
途端、クローゼの顔色が変わった。
「し、知っているのか？ザリ湖！ザリ湖なのだな？……ザリ湖のどこに！」
と、言われても、説明できる場所に、盗人の隠れ家があるはずがない。
ユウはしばし思い迷ったが、
「案内します」
ついに、言い出た。

「そうしてくれるか、ありがたい！……だが……何故君のような准神官が、それを知っている？」
「クローゼ。そのようなこと今はよい。しかし……よいのかな？」
「構いません」
「うむ……。すまぬな、この通りよ」
カジャディールは手を合わせた。

すぐに出立したいというクローゼの意向を受け、ユウは宿にも戻らず、馬へまたがった。
クローゼ軍は言葉通りの少数部隊で、紋章官アルバート・バレンタインを筆頭に、十数騎の編成である。
とはいえ、戦闘の可能性も視野に入れ、先ほど、本隊とＬ・Ｊの出軍許可を帝都へ求めたようだった。
バレンタイン紋章官は二十代後半の、いかにも実直、忠義にあつそうな人物で、ユウが案内に立つことを知らされると、
「それは、よろしく頼む」
と、自ら手を差し出し、握手を求めてきた。
「そういえば、君の名を、まだ聞いていなかったな」
そう、クローゼに問われたユウは、
「……ヒュー・カウフマン」
本名を名乗った。
「カウフマンか。うむ、緊張することはない。君についても、深く詮索しないことを誓おう。とにかく、その隠れ家まで案内してくれ」
ユウはうなずいた。
「よし、行こう！」

カジャディールが横たわるベッドまでは、この遠ざかるひづめの音は、とても聞こえるはずはない。
だが、カジャディールは身を起こすと、
「行ったか」

ぽつり、つぶやいた。
「あの子に、姿をさらしたとな」
ヌッツォはアレサンドロたちの待つ宿へ連絡に向かい、この部屋には今、カジャディールひとりだ。
では、ひとり言か……と思うと、そうでもない。
窓にかかった厚手のカーテンが大きくはためき、再び垂れたときには、その場に、男がひとり、ひざまずいていた。
あの忍者、ジョーブレイカーだ。

「たわけ。来ておるならば、何故知らせぬ」
「……は」
「まあよい。して……どう見た」
「裏におりますは、やはりクラウディウス……」
「そうではない。カウフマンよ」
「……仰せの通り、優しき男にて……」
「そちの見立てを聞いておる」
ジョーブレイカーは一瞬沈黙し、
「……未熟」
カジャディールは、ぷっと吹き出した。

このふたり、実は主従である。
デローシス近郊で、ユウがカジャディールの元を去ってより、ジョーブレイカーはその命に従い、付かず離れず、ユウの行動を見守り続けていたのだ。
カジャディールがすべてを知っている、と、ユウが感じたのは、つまりこういうことだった。
「何故、それほどまでに目をかけるか、奇妙に思うておるのであろうな」
「……」
「わしも、歳を取ったということよ」

ジョーブレイカーは、肯定も否定も、疑問も口にしなかった。
「ともかく今は、ディアナのことも気にかかる。急ぎ後を、な」
「……承知」

さて……。
パリュを発足したユウたち一行は、北部地方へと駆け向かった。
時間をかけたくないのはユウも同じ。多少の強行軍は覚悟の上である。
その日はアシビエム山脈の裾を抜けて北部領へ入り、翌日には行程の半分までを、一気に駆けた。
そこでようやく、初めての夜営を張ったわけだが、そのときユウは、ふと、誰かに呼ばれたように思え、火のそばを離れて、森へ入った。
「誰かいるのか？」
闇の中には、枯葉が鳴る音だけが、ざわめいている。
これ以上奥へ進めば、焚き火の明かりが見えなくなってしまうだろう。
しかしユウには、やはりどうしても、生き物の気配があるような気がしてならなかった。
「誰なんだ？」
と、問いかけると、不意に。ユウの足下へ、なにかがぽとり、落ちてきた。
思わず飛びしさったユウだったが、それを手に取り、
「あ……！」
思わず叫んだ。
葉のついた、枝だったのである。
見上げれば、そこには小さな小さな、茶色のフクロウが座っていた。
「お前か……？」
フクロウは、ゴロゴロと喉を鳴らし、再びなにかを落とした。

拾い上げてみると、布袋の中には、金属製の筒と手紙。
手紙には、こう書かれてあった。

隠れ家までの地図、同封。
万一のときは発光筒で合図しろ。……アレサンドロ。

地図はハサンの手によるもので、たどり着くまでの目印が、微に入り細に入り、書きこまれている。
ありがたい。ユウは思った。
その実、隠れ家までの道は、覚えているつもりでも不安があったのである。
発光筒は、筒から伸びた紐を引けば、モチの閃光弾が発射される仕掛けだ。
ユウは地図を丁寧に折りたたんで懐へしまい、発光筒はポーチへ忍ばせた。
「ありがとう。モチにもそう伝えてくれ」
小さなフクロウは、目を細めて飛び去った。

斥候

「よし、ここからは三人で行こう」
ザリ湖南岸の宿場町で、クローゼは言った。
街道はこの町から、東回りに湖を迂回し、北へ向かう。
ヒッポの隠れ家は、湖の西岸だ。
道なき道を進むことになるため、人目につく大人数での行動は避けたほうがよい、とバレンタイン紋章官が進言したのを受けての発言であった。
「私とアルバート、そしてカウフマンだ」
「いいえ、閣下。斥候ならば自分とカウフマン君、あと、気の利いた者数名で行けば十分です。閣下はここで、帝都からの連絡を待ってください」
「いや、私も行く。大祭主様が危険な状況におられるのだ。私だけが怠けるわけにはいかない」
「誰も、怠けているなどとは言いません」
「私の魂が言う」
バレンタインは言葉を失った。
「連絡を受け取る者が必要なら、アルバート、君が残ってくれ」
「できません。自分は紋章官です。閣下を守る義務があります。……わかりました。三人で行きましょう」

こういう方なのだ、と、とりあえずの拠点とした宿を出るとき、バレンタインは苦笑交じりに、ユウへ耳打ちした。
外は、すでに陽が落ちかけている。
「気温も下がる。出発は早朝だ」
バレンタインはユウの肩を叩き、待機する騎士たちに今後の予定を伝えにいった。
今夜は、フクロウの伝令は来ないようだった。

翌早朝。
息も凍るような寒さの中を、ユウとクローゼ、バレンタインは出発した。
街道を外れ、草木の中を進む。全員が徒歩である。
隠れ家への道筋は、昨夜、ベッドの中で何度も確認し、地図はもう、焼き捨ててあった。
「閣下、手を」
「そうやって、すぐ子ども扱いをする」
性格か、どうも隠密行動に向いていないふたりの前をユウが先行し、足を止め、気配をうかがっている間に追いついてきたところを、また進む。
思いのほか時間はかかったが、三人は無事、ヒッポの隠れ家へと到着した。

「……滝、ですね」
バレンタインの言う通り、見た目は滝である。
山の湧水が、十数メートルの高さを、とうとうと落ちている。
この滝つぼの、向かって左横にせり出した大岩の陰に、入口が隠されているのだ。
「見張るとすれば、この辺りでしょう。少し距離がありますが……」
「うむ」
「あの隠れ家に、他の出口は？」
「ある、と思います。逃げ道は必ず、いくつか」
「道理だな……」
バレンタインは紋章官らしく、周囲のうっそうとした景色に目を走らせ、うなずいた。
「とにかく、今日はここまでにしましょう。あとは手勢がそろってからのことです」

「そうだな」
三人が腰を上げ、今来た道を戻ろうとした、そのときであった。
数人の足音が滝の方より聞こえ、
「おい、帝都の腰抜け騎士ども！」
呼びつける声がしたのである。
とっさに身を隠し、振り向けば、三人の男とひとりの娘が、隠れ家の入口へ姿を見せたところだった。
「あ……！」
「大祭主様です、閣下……！」
「ヒッポ……！」
「なに、どれだ……！」
「左端。髭の……」
つまり、盗賊ヒッポが、ふたりの手下と共に大祭主を引き連れ、姿を現したのである。
かっぷくもよく、黙っていれば貴族のようにも見えるヒッポだが、実際は追い剥ぎ同然の、血生臭い盗みばかりする男だ。
白の神官衣に身を包んだ、歳若いディアナ大祭主は、猿ぐつわを噛まされ、喉元には刃が突きつけられていた。
「お前たちが来るのはわかっていた！おとなしく武器を捨て、出てこい！さもないと……」
大祭主の、くぐもったうめき声が響き、
「やめろ！」
クローゼが叫んだ。

「くそ、どこで情報がもれたのだ……」
「今は、そのようなことを言っているときでは……。閣下は、カウフマン君と町へ引き返してください。ここは自分が引き受けます」
「いや、戻るのは君だ、アルバート」
「閣下！」
「聞くんだ。捕らえたのが将軍だとわかれば、他のひとりやふたり、

どうでもいいと思うだろう?今は安全に町へ戻り、君が、本隊を指揮してくれ。大丈夫だ!奴は私を殺しはしない」
「クローゼ……閣下」
「……頼むぞ」
と、クローゼが進み出た。
そして……ユウもである。
バレンタインは、あっ、と身を乗り出しかけたが、言葉を呑んで一礼し、そのまま駆け去った。
「馬鹿、どうして君まで……!」
「奴も馬鹿じゃない。ひとりでここまで来るような男を、将軍とは思いません」
「む……そ、そうか」
ユウとクローゼは、剣を捨てた。

「貴様、確かハサンの弟子だな。奴もとうとう、犬に成り下がって小銭を稼ぐようになったか。この、恥知らずめ!」
ヒッポは、縛り上げたユウの面上へ、激しく、つばを吐きかけた。
「……で、騎士様は……」
「……カール・クローゼ・ハイゼンベルグ」
「なに……?」
ヒッポの顔色が変わった。
やはりいぶかしげにクローゼを眺め回し、手下を呼び寄せ、なにやら耳打ちしている。
「ほぉう、自ら……それは結構ですな、将軍閣下」
とりあえずもそう言ったヒッポの、その卑しい笑みに、ディアナ大祭主は眉をひそめた。
「丁重におもてなししてやれ」
人質となった三人は、隠れ家へと引き立てられていった。

さて……。

その様子を陰から見ていた、ふたりがいる。
アレサンドロと、ハサンだ。
こちらも、つかず離れず、クローゼ軍の後を馬車で追いかけ、同じザリ湖南岸の町に宿泊。ふたりだけは、その夜も遅いうちから、ここで待機していたのである。
「フフン、相変わらず、つまらん盗みをする男だ。芸がない。脅し文句も陳腐そのもの」
ハサンは、せせら笑った。
「どうでもいいぜ、そんなことは」
「あの若造は愚かだが、なかなか賢いな。紋章官を逃がした辺りなぞ……」
「おい、オッサン」
「そう急くな。将軍も言っていただろう?金の種を殺すことはない」
「ユウは」
「同じく金の種だ。私から強請り取るためのな」
「……で、どうする?」
「どうとは?」
「あんたにつなぎが行くまで、のんびり構えてろってのか」
「ではなにか?弟子が申し訳ございませんでした、返していただけませんか、と頼みにいけとでも?フン、馬鹿馬鹿しい」
押し黙ったアレサンドロを鼻で笑ったハサンは、持ちこんだ防寒用の毛布や酒瓶には目もくれず、バレンタインの走り去った道を、戻り始めた。
「お、おい!」
急いで荷物をかき集め、アレサンドロもその後を追う。
「だったら、俺たちが助けにいくしかねえだろ!」
「アーレサンドロー。失望させるな、お前らしくもない」
ハサンは振り上げた指を、アレサンドロの鼻先に突きつけた。
「なんのために鉄機兵団が来ている。奴らにやらせておけ」
「あいつらには……なにもできやしねえさ」

「だからこそだ。だからこそ、こちらの手のひらで動かしてやろうと言っている」
「……」
「まずは、街にいるヒッポの手下が、鉄機兵団の動向を見張っていることを知らせてやろう。その上で、あの隠れ家のすべての出入り口、人数、そして本隊はまだ動かすなと忠告をする」
「何故だ？」
「おお、まったくどうかしているぞ、アレサンドロ。ユウとカール・クローゼ、当然、脱出を図る。その前に動かれては迷惑だからだ」
「……なるほど、な」
確かに、窮地に陥った小悪党のすることは、目に見えている。
「つまり……俺たちは、ユウが逃げた後のフォローだけをしてやりゃあいい、ってわけか……」
「そうだ。コソ泥の後始末こそ、鉄機兵団にまかせればいい」
「……ユウが逃げられなかったら」
「痩せても枯れても、このハサンの弟子だ。あれは逃げる」
「……ハ」
アレサンドロは笑った。
「なんだかんだで、あんた結構、あいつのこと特別扱いしてるぜ」
すると……。

「……かも知れんな。なにしろあれは……私とカラスの子だ」

アレサンドロの手から、荷物がこぼれ落ちた。
「おお、勘違いするなよ、アレサンドロ。私とカラスは手をふれ合わせたこともない、清い関係だった。そんな妄想が生まれる程度には思っている、ということだ」
「あ……あ、あんた！そりゃ本気で趣味悪ぃぜ？おい！」
「ンッフフ、顔が真っ青だぞ？そら、早く歩け。我々の足なら、紋章官殿より早く町へ戻れるはずだ」

「おい、待て！……くそっ！そう言うなら半分ぐらい持てよ！」
「昨夜のカードのツケ、さっぱり払ってくれるというのなら、持ってやっても構わんぞ？」
「う……」
「働け働け。貧乏人の対価は肉体で、と、昔から相場は決まっている」

「お前はここだ」
ヒッポの手下どもから、散々に制裁を受けてきたユウは、足をもつれさせ、
「う……」
倒れた。
ユウが押しこまれたのは、じめじめとした独房である。
不揃いな石積みの壁には水がしみ出し、いたるところに苔がむしている。無論、窓もない。
鍵を閉めた手下は、こいつもつばを吐きかけ、去っていった。
「カウフマン！大丈夫か！」
隣の房から響く、クローゼの呼びかけに、
「あ、あ……」
それだけの声を振り絞り、ユウは這いずるように身を起こして、壁へもたれかかった。

血の味がするのは、殴られたときに切れたもので、内臓には損傷ない。
指か腕の一本でも折られるかと思ったが、それもなかった。
俺も、身代金の種か……。
ユウは深く、息をはいた。
これで、大祭主を含む三人の命は、一応保障されたわけだ。
会話を盗み聞いた様子では、クローゼが将軍本人であると、ヒッポたちも確認できたらしい。
それにしても、ハサンに身代金など……、
「フ……」
払うわけがない。
自力で逃げろ。ハサンならばそう言う。

奪われてしまったふたつの指輪と太刀も、取り戻さなくてはならない。
ユウは、ぐ、と拳を握った。

「将軍……ハイゼンベルグ将軍」
「ああ、ここにいる！どうした？痛むか？」
壁越しに聞こえるクローゼの声は、将軍とも思えないほどに、うろたえている。
「怪我は……？」
「いや、私は大丈夫だ。君には本当にすまないことをした。すっかり巻きこんでしまったな」
「いいん、です。俺が、望んだ……痛ッ」
「もう少し我慢してくれ。きっと、アルバー……」
「将軍！……誰かが、聞いてるかもしれない……」
「あ……そ、そうだな……すまない」
落ちこむクローゼの姿が目に浮かび、ユウは思わず失笑した。
「カウフマン……」
「ユウで、いいです。ヒューのユウ……」
「では、私のこともクローゼと呼んでくれ。敬語もいい。歳も近いようだし、こうなってしまっては、将軍もなにもない。そうだろう？」
「……わかった。それで……？」
「その……これだけは確認しておきたい。君はヒッポに、ハサンの弟子だと言われていた。それはあの、シャー・ハサン・アル・ファルドのことだろうか」
おそらく、今回の容疑者を絞りこむ際、ハサンにも行き当たったのだろう。
「ああ……」
ユウは正直に答えた。
「大祭主様……カジャディール大祭主様も……それはご存知なのか

？」

「……いや。……でも、俺が盗人上がりなのは、お話しした」

「その上で、准神官の位をいただいた、ということだな？」

「ああ……」

「そう、か……。うむ、それならばいいのだ」

おそらくクローゼは、カジャディールがユウにだまされ、神官の位を与えてしまったのではないか、と思ったのだろう。

たとえ、最も格の低い准神官であっても、信仰心のあついこの世の中では、神に近い者として、畏敬の念を持って接せられる。中には、神官からは金を取らない、という宿屋や食堂もあるくらいだ。

となると、その地位を利用した詐欺や押しこみ強盗などが多くなるのは必定で、手下の多い盗賊一家の中には、必ず、神官や神官もどきが含まれているのである。

クローゼは、それを心配したのだ。

「悪く思わないでくれ。これも、仕事なのだ」

「いや、いいんだ」

ユウは、手にふれた床の苔をむしり、正面の壁に向かい、投げた。

短い沈黙……。

「うん？……では何故、神官に？」

さらに、クローゼが問いかけてきた。

「父が、神官だった」

「ならば何故、盗人に……」

質問の多い男だな。ユウは思った。

正直、静かに回復させてもらいたい。

わざと、わずらわしげに、

「父が亡くなって、ハサンに……拾われたんだ」

答えたが、

「跡を継ごうとは考えなかったのか？」

クローゼは気づかなかった。
「どちらの神殿でも、ある程度の世襲は認められているだろう？」
ああ……うるさい。
「年齢的に無理でも、神学校という手も……」
うるさい。
うるさい。

「うるさい！」

「！」
クローゼが、息を呑む気配がした。
「……すまない」
「いや、謝るのは私の方だ。君のことは詮索しないと言っておきながら……。この通り、謝罪する」
壁の向こうで、頭を下げたらしい。
ユウはガンガン鳴る頭に眉をひそめ、両腕でひざをかき抱くようにして、うずくまった。

丁重に、と言っただけあって、捕虜としての待遇は悪くはなかった。
質のよい食事が、日に三度。
泥にまみれた服はともかく、身をぬぐうための水も与えられる。
時折、憂さ晴らしに殴られる以外は、ユウにも同様の扱いがなされ、それなりに快適であった。
ただ、心配なのはクローゼである。
あれ以来、向こうから話しかけてくることはほとんどなかったが、盛大なため息や、太陽神に祈る声が、よく、ユウの耳にも入ってくる。
慣れない投獄生活に重なり、安否のわからないディアナ大祭主、

動きのないヒッポ、鉄機兵団。精神的にかなり参っている様子だった。

ちなみに……。

ユウはまだ、いつ逃げ出そうとは考えていない。

今ではない、と思うだけだ。

何故とは言えないが、こういうときは自分の勘が生き死にを左右する。

だからこそ、いざそのときを逃さぬように、精神と肉体を研ぎ澄ませる努力だけは、怠ってはいなかった。

そして今も、床へ端座し、瞑想していたのだが、

「……？」

ふとユウは、胸にざわつくものを覚えたのである。

「……モチ？」

ふたりでＮ・Ｓに乗っているときの感覚に近いが、

「……違う……」

それよりも、もっと嫌な、うごめき。

寂々として暗い、深い水底の窒息感が心臓を握る。

「誰だ……」

背筋を走る悪寒は、幻ではない。

「誰だ……」

……そこで、ざわめきは消えた。

「……クローゼ」

「な、なんだ！」

あるいは、とも思ったが、飛び立つように食いついてきた声には、今の何事かに気づいた様子はない。

「いや……なんでもない」

クローゼは、明らかにがっかりとした、ため息をついた。

「気分は？」
「悪くはない。少し、暇を持て余しているが……あ！い、いや、そういう意味ではないのだ！君が悪いのではない！元はといえば私が悪い！」
「……ッハハ。いや、俺も悪かった。あのときは、気が立ってて……」
「だとしても、やはり私が悪い。……よく言われるのだ、くちばしだけの風見鶏だ、と」
「風見鶏……？」
「私の場合は、風を読むのにたけている、というよりも、風に流されて生きている、ということだが……。そんな男が、こうも話したがりの聞きたがりだと、ありがたくもない異名のひとつも、奉られるというものだろう？」
自嘲気味の言葉だが、不思議とさっぱりとした語り口である。
「……理由を」
「うん？」
「理由を聞いてもいいのか？将軍が、そんな風に言われる理由を……」
すると、
「ああそうか！これからは、まずそう聞けばいいのだな。それなら波風も立たない」
クローゼはひざを打ち、屈託なげに笑った。

カール・クローゼ・ハイゼンベルグ

あまり、大声で言う話ではないのだが、とクローゼは前置きし、
「実は、私は先帝陛下の落としだねでな」
「え……！」
「ハハ、これを聞くと、皆そういう声を出す。だが、それほどのことでもないのだ」
いや、それほどのことである。
つまり現帝の叔父であり、数少ない皇位継承権所有者だ。
「とんでもない。それならハイゼンベルグを名乗ることもないだろう？」
「あ、あ……」
クローゼは、静かに語り始めた。

クローゼが両親と慕うふたりは、地方領の執政官夫妻である。
執政官とは、各領主によって領内主要都市に置かれる、いわゆる知事や市長のような役職だが、所領を持つ貴族は無論のこと、聖鉄機兵団の騎士から比べても、かなり格が落ちる。地方騎士のようなものだ。
帝都では、子飼いの貧乏貴族、などと蔑まれることも多い。
そのクローゼの両親が、あるとき、なんらかの手柄を得る機会を得、帝都へ召喚された。
そこで、帝国でも知られた美貌の持ち主であったクローゼの母に、ひょいと手がついたのである。

「私が事の顛末を知ったのは、三年前、先帝陛下が崩御された後のことだ。もちろん、容姿の違いから、出生には、なにかいわくがあるのだろうとは思っていたが、父も、私を実の子同然に育ててくれた。それを問いただすことなど、できなくてな」

「ああ……」

「だが……おそらくふたりは、わかっていたのだろうな。私が、いずれ皇帝の子として認知され、城に入るだろうと。だから教育だけは、それに恥じぬ立派なものを受けさせてくれた。今では共に亡くなったが、両親には、本当に感謝している」

現皇帝は先帝の孫に当たる、当年十二歳の少年だが、クローゼとは別の叔父である、先帝の第二王子と、そのふたりの息子たちが、すでに皇位継承権を所有している。

これ以上の男子は必要なし、と判断した元老院は、先帝崩御後、クローゼの人品骨柄、帝国への忠誠心など、事細かに調べた上で、体裁を整えるため、貧乏貴族から有力貴族ハイゼンベルグ家へと養子に入れ、その後、聖鉄機兵団軍団長に任じたのである。

「言葉は悪いが……先帝陛下によって滅ぼされた国々の残党が、私をかつぎ上げ、混乱を巻き起こさないとも限らない。だからこその処置だ。それなりの地位での懐柔と、監視も兼ねた……処置。……ハ、ハハ、笑えるだろう？今では、噂が噂を呼んで、私の存在も周知の事実。おかげで、叩き上げの部下からは七光りと蔑まれ、貴族連中からは、敬われながらも、軽んじられる」

ユウには言葉もなかった。

そして、ここに至ってもまだ、他人事のような口ぶりで明るく話す、クローゼの心中がわからなかった。

「恨みは、ないのか……？」

「うぅむ、恨みか……。それよりも、なんと言うかな……空虚に感じるときはある。私の人生はなんなのだろうと」

「ああ」

「だが、ひと晩寝て、目が覚めても、やはり私はカール・クローゼ・ハイゼンベルグなのだ。手の届かない過去に、いくら恨みを持っても仕方ない。それぐらいならば私は、今を、一生懸命生きたい」

「……今……」
その言葉は、ユウの胸に響いた。

「私の夢はな、ユウ！いつか押しも押されぬ、ラッツィンガー将軍のような立派な将軍になって、貴族や部下を見返してやることなのだ。ハハ、根暗な夢だろう？」
「ハ、ハハ、いや、立派な夢だ。クローゼは……立派だ」
「いやあ。まあ、今の私は人に支えられている部分が多いのでな……まだまだ、一人前にもほど遠いのだが」
「そんなことはないさ。クローゼに支えられてる、そう思ってる相手だっている」
「そ、そうだろうか……。だとすれば、誰だろうな。ギュンター……は、そんな殊勝な男でもないし……」
「俺は、支えられてる」
クローゼの明るさのおかげで、この状況でも笑うことができる。
「え、よ、よしてくれ。照れる」
「バレンタイン紋章官だって、きっとそうだ」
紋章官は、クローゼを心底尊敬している。少なくともユウの目には、そう映っていた。
だが、一瞬言葉を詰まらせたクローゼは、
「ハハ……いや、アルバートは違うのだ」
「違う？」
「彼は……兄なのだ。父の違う……」
「あ……」
「だから彼には、それこそ昔から支えられてばかりで……今も心配をかけているのかと思うと、それが一番つらい」
初めて、その声が震えた。
「せめて、無事を伝えられればよいのだが……」
「クローゼ……」
そのひと言で、ユウの心は決まった。

「もう少し……我慢してくれ」
「うん？」
「二、三日内には、ここを逃げよう」
「で、できるのか？それが！」
「ああ……でもまだ、そのときじゃない」
先ほどの、胸のざわめきも気になる。
「時が来れば、俺から動く。それまでは……話でもして、暇を潰そう」
「あ、ああ！ああ！」
クローゼは喜んだ。

「では、なんの話を？」
「……俺が、どうして神殿を継がなかったか……」
「いや！私は別に、そういうつもりで過去を明かしたわけではない！」
「いいんだ。俺が、聞いてもらいたい」
「う、む……」
「面白い話じゃないし、話すのも、あまり得意じゃない。そこは勘弁してくれ」
「……わかった。心して聞こう」
「聞きたいことがあれば、いつでも言ってくれ。その方が話しやすい」
「うむ」
壁にもたれたユウは、深く息をはき、口を開いた。

目蓋の記憶

「どこから、話せばいいんだろうな……」
ユウの言葉に、クローゼは不快の色も表さず、そうだな、と首をひねった。
「君の父上は、メイサの神官だった。その父上が亡くなられて、君は盗賊に拾われた」
「ああ」
「亡くなられたのは、いつ？」
「……十五年前」
「あ……では、魔人に……」
「いや、違う。……みんな……」
「みんな？」
「騎士に殺されたんだ……」
壁の向こうで、クローゼがうなった。
「それはつまり……」
と、口ごもり、
「その……魔人の、奴隷だった、ということだろうか」
「そうじゃない。そうじゃないのに、あいつらが来て……！」
「ユウ、ユウ、落ち着いてくれ。落ち着いて、なにがあったのか、順を追って話してくれ」
「ああ……そうだな。すまない」
目を伏せたユウの、痙攣する目蓋の奥に、あの頃の幻が、陽炎のように浮き上がってきた。

ユウたち家族が暮らしていたのは、針葉樹林に囲まれた、北部領のとある村だった。
特別な産業もなく、山間の、猫の額ほどの土地を切り開き、小さな畑で自給自足に近い生活を送る。地図にもないような村である。

そこの唯一の神殿、ただひとりの神官であったのがユウの父で、今思うと、同時に村の相談役のようなこともしていたのではないだろうか。人の出入りが多かった。

そして、ユウにはまた、ふたりの兄弟がいた。

九つ違いの姉セイラと、みっつ違いの兄ダニエル。

どちらも明朗快活で、神殿横にあったユウの家は、いつも笑い声に包まれていた。

「母上は……？」

「覚えていない。物心ついたときには、もう姉さんが母親代わりで、炊事も洗濯も、全部やってた。……もしかしたら、俺たちはみんな……孤児、だったのかもしれない」

神殿が、親のない子を預かる、というのは、なにも珍しいことではない。

だが、今となってはそれを確かめるすべもないのである。

その平和な家庭、平凡な村に異変が起こったのは、十五年前。

まさに、魔人との戦が山場を迎えた頃だった。

「騎士の一団が突然村にやってきて、兵糧を差し出せと言ってきた」

これも当時は、どの村でも経験したことだ。

「でも、その年は不作で、自分たちが食べる分だけでも精一杯だった。それを団長らしい貴族に伝えにいった父さんが、なにか口論になって……まず、殺された」

クローゼの、大きく息を吸いこむ音が、ユウの耳にまで伝わってきた。

「飛び出した姉さんも、兄さんも、村の人も、みんな死んだ。全部奪われて、全部焼かれた」

「……何故……」

「口封じに決まってる。証拠を消してしまえば……後は、どうとでも言えるんだ」

「そんなわけがない！」

「……実際、国が出してる資料でも、あの村は魔人にやられた、そうなってた」
「！」
「でも……」
腿の上に置かれたユウの手が、ギチ、と、握りこまれ、
「でも……俺は見てた！」
鈍い音が響き、壁を打った拳が、再び持ち上がった。
「あいつらのやったことを、全部見てた！全部！全部！」
幾度殴りつけても、石積みの壁はびくともしない。
皮が破れ、血があふれたが、そんなことはどうでもよかった。
痛みも感じなかった。
「全部！全部だ！」
「ユウ！もういい！やめるんだ！」
クローゼが鉄格子に飛びつき、叫ぶ。
と、同時に。
くずおれたユウの目から、涙があふれ出した。
「俺は……見ていることしかできなかった……！」
「……仕方ない。君は……まだ子供だったのだろう？」
そんなことは関係ない。
嗚咽をもらしながら、ユウは、強くかぶりを振った。
と、そのときだ。
「……あ」
血に濡れた自身の手に目をやったユウの脳裏に、忘れていた記憶の断片が、不意に思い出されたのである。

「……違う」
「ユウ……？」
「俺はあのとき、団長の貴族に……つかみかかった……」
「なんだって？」
「あいつの左目を傷つけて、斬られた……！ああ……確かに斬られ

た……！」

「そんな馬鹿な！それならば君は、その、生きているはずが……」

「いや、でも傷は……大したことがなくて……気づいたら、あいつらはもう……いなかった」

必死に、記憶の糸を手繰る。

「そうだ、あのとき手についてた血は、俺のだった。ずっと……姉さんのだと思ってた」

漠然とした一瞬一瞬の光景が、閃光と共にユウの目蓋を走る中、最後に思い出されたのは……、

「黒い、雪……？」

「なに？今、なんと……？」

「痛ッ……う……ぅ！」

激しい頭痛で、記憶は断ち消えた。

「ユウ！大丈夫か？ユウ？」

「……何故だ。どうして俺は、こんな大事なことを忘れてた……」

「ユウ。幼少時の危機的状況における記憶は、混乱しやすく、閉じこめやすいと聞いたことがある。無理に思い出すことはない」

「あ、ぁ……」

「それよりも……そうだ、君はその後、ハサンに出会ったのだろう？」

「……ああ……会った」

精神的な疲労で力はないが、それでも落ち着いた様子の声に、クローゼは胸をなで下ろした。

つとめて声を明るく作り、

「どのような男なのだ？」

ユウは頭痛を追い出すように、額を叩いた。

「……初めて会ったとき、俺は……家族の墓を掘ってた」

「では、君の村にハサンが来たのか」

「ああ……。あの人は、俺の手を取って、頭を、なでてくれた。そして……妙なことを言ったんだ」
「妙なこと？」

「……『そうか、お前が約束の子か』……」

「どういう意味だ？」
「わからない。聞いても、はぐらかすばかりで……なにも教えてくれない」
「ふぅむ。まるで、父上から君を預かる予定だった、とでもいうような口ぶりだな……」
「……わからない。とにかく、あの人は、墓を掘るのを手伝ってくれた。それからずっと、育ててくれた」
「そう、か……」
そこでヒッポの手下が食事を運んできたため、話は打ち切りになった。
黙然と食事を済ませ、器を返す。
どこまでも落ち着いた様子のふたりが気に入らなかったのか。手下は不満げに舌を打ち、戻っていった。
その足跡も遠くなり……、
「……ユウ」
クローゼが再び、口を開いた。
食事中なにを思ったのか、打って変わって、思い詰めた声音である。

「君の意思とは……沿わないかもしれないが……」
「なんだ……」
「左目に傷のある、北部の地方騎士、私も探ってみる」
「……探って、どうする」
「捕らえる」

「やめてくれ」
平民による貴族への仇討ちは、帝国法で固く禁じられている。そんなことをされれば、尚更、仇討ちの機会を失ってしまうだろう。
ハサンの手を離れてからこちら、それどころではなくなっているが、ユウはまだ、あきらめたわけではないのである。
「すまない。だが、同じ騎士として、私はその男が許せないのだ」
「……」
「戦時中のこととはいえ、そのおこないは帝国騎士の恥だ。探し出し、必ず事実を証言させる。一級軍議にかけてでも処罰する」
「……勝手にしろ」
「だが、もし……！」
「？」
「もし仮に、君が先にその男を見つけ出し、仇を討ったとしても、なんら罪に問うものではない。資料がどうであろうと、罪を証明する明確な証しがなかろうと、君が平民だろうと、相手が貴族だろうと、帝国将軍、カール・クローゼ・ハイゼンベルグがそれを保証する」
「……」
「それで……許してもらえるだろうか」

ユウは、とっさに言葉が出なかった。
鉄機兵団より先に見つけ出すことができるか、それはわからない。仇を目の前にすれば、罰など恐れるものでもないだろう。
だがしかし、将軍であるクローゼの、その心が嬉しかった。
思えば、そもそもクローゼは、自分の代わりに、あの男の罪を明らかにすると言ってくれているのである。
「……ありがとう」
それしか、言葉は出なかった。
「礼は、君が仇を討てたと思えたときに。私も、そう思ってもらえるよう努力する」

「ああ。……ハハ、おかしいな。なんだか今日は、泣いてばかりだ……」

「あ、確かに、涙が出るときというのは重なるな。……私も、泣けてきた」

「どうして、お前まで泣くんだ」

「いいだろう。一緒に、泣かせてくれ」

ふたりはしばらく、泣き笑いに、泣いた。

もうひとつの逃亡

その頃。
デローシスの南、キンバリー研究所でも異変が起こっていた。
青の軍旗を掲げたマリア・レオーネ・リドラー率いる聖鉄機兵団の一軍が、逮捕令状を持ち、乗りこんで来たのである。

「それで？」
「……相変わらずだな。貴公のそういう、人を小馬鹿にした物言いは」
紅一点の将軍、マリア・レオーネは、貴族然とした勝気な眉をひそめ、シニョンに結い上げた襟足を、不快感もあらわになでつけた。
美しい、淡空色の髪である。
対するセレン・ノーノはドラフターの前に座ったまま、長いプラチナブロンドを物憂げにかき上げ、
「別に、そんなつもりはないよ」
令状を、設計図の散らばる床へ、ぽいと投げ捨てた。
「貴様……！」
マリア・レオーネのこめかみに、青筋が立った。
「皇帝陛下直々のご捺印がされた書状だぞ。不敬罪もはなはだしい！」
語気も荒く、腰から抜き払われた細剣が顎下に押し当てられたが、それでも尚、セレンは、
「ふうん」
面倒臭げに言ったきりだった。

今、この研究室には、セレンとマリア・レオーネ。その後ろ、ドアの近くには、長身の紋章官ササ・メスが、立ちふさがるように立っている。

三十五歳という噂のササ・メスだが、黄色い肌に頬のこけた、四十過ぎにも見える老け顔で、喉が潰れているのかと思われるほど言葉が少ない。将軍や紋章官仲間はともかく、どうも部下などからは気味悪がられている男である。

そして普段は、セレンのそばにもうひとり、技師で助手のメアリー・ミラーがいるはずなのだが、今日は見えない。

そのことに、もちろんマリア・レオーネも気づいている様子であったが、関係ないとばかりに打ち捨てられていた。

令状を拾い、懐へ戻したマリア・レオーネは、剣の腹でセレンの頬をひたひたと叩き、

「陛下のご命令だ、共に来てもらおう。ララ・シュトラウス逃亡ほう助の罪で、貴公を拘束する」

居丈高に告げた。

「……私だけ？」

「他の研究員には追って沙汰がある。全員に事情を聞くことになるだろう」

「ふうん」

「……さっさと立て！」

と、そこで、

「む？な、なんだ？」

扉の上部に備えつけられた赤色灯が、前触れもなく回転を始めたのに、マリア・レオーネは驚いた。

サイレンが鳴るわけでもない。

ただ光を放ち、回転している。

「これはなんだ。なんの合図だ！」

「準備完了の合図」

「なに……？」

眉をしかめるマリア・レオーネを無視し、セレンは、作業机のマイクを取った。

「メイ？」
『は、はい！こちら、メアリー・ミラー！』
スピーカーから返ってきた、メアリー、愛称メイの声は、緊張で上ずっている。
「行けるかい？」
『い、いつでも！』
「待て。なんの話をしている！」
マリア・レオーネが刃を返し、セレンへ詰め寄ると、
「じゃあ、行こう」
『はい！』
「あっ！」
突如、ドラフター周囲の床が抜け、セレンが、腰かけていた椅子ごと、その穴へ落ちこんでしまったのである。
バランスを崩したマリア・レオーネも引きずりこまれかけたが、そこはササ・メスの腕が、しっかりと捉える。
穴は音もなくふさがり、後には白い床だけが残った。
「え、ええい……！」
歯噛みしたマリア・レオーネだが、すぐさま窓へ飛びつき、
「機兵総長！下へ逃げたぞ！……ついてこい、ササ・メス！」
ドアを蹴破る勢いで、廊下へ走り出た。

長いシューターをくだり、セレンが吐き出された場所は、地下格納庫である。
「やれやれ、たまには掃除させないと駄目だね」
白衣の埃を払ったセレンは視線を上げ、目の前に横たわる全長百メートルの重戦車へ、うっとりと視線を走らせた。

枯れ草迷彩の複層重金属装甲板。
前、中、後方、計六門の百二十ミリ機関砲に、左右両舷を向いた

八連装ミサイルランチャー。
前方に反り出した巨大な双角は、攻撃その他、様々な使い方ができるが、実はアンテナとレーダーの集合体だ。
無骨に出動を待つキャタピラも、セレンにとっては我が子の手足も同様、愛おしい。
『セレン様、早く！もうここ、気づかれちゃったみたいです！』
「せっかちは嫌いだ」
『そ、そんな……もう言いません！もう言いませんから……！』
スピーカーから響くメイの泣き声を聞きながら、セレンは、ゆったりとした足取りでＬ・Ｊハッチをくぐり、格納庫からメインブリッジへ向かった。

ハンドルロックの重厚な手動ドアは、開いたままになっている。
シートは、メインモニター前にふたつ。左右サイドモニター前にふたつずつ。そして中央キャプテンシートがひとつの、計七席。
その内、操舵席にうなだれて座っているのが、メアリー・ミラーである。
こげ茶の髪を、さっぱりとショートカットにしたメイは、つなぎの作業服を愛用する、どちらかといえばアウトドア、活発、少年的、そんな印象だ。
しかし今のメイは、目に涙をため、
「セレン様……」
少女の顔で、うつむいていた。
「シャッターを開けて」
「……はい」
メイの操作で、地上へ続く通路が開放されていく。
「お、怒ってますか……？」
「何故？」
「せ、せっかち、言っちゃったから……」
するとセレンは、メイの髪に指を通し、

「別に。サンセットの格納も、上手くできてた」
メイの顔に、さっと喜びの色が差した。
「あ、ありがとうございます！セレン様！」
そこで、シャッター脇のランプがグリーンへ変わった。

「さて、と」
と、サブシートへ移ったセレンは、腰を沈め、
「ララを追おうか」
「はい！」
アイドリングしていた光炉が回転数を増し、ブリッジの計器類へ灯が入る。
「この国も、また面白くなってきたね」
「そうですか？なんだかおかしいです。Ｎ・Ｓが出てきてから、なんだかおかしいです」
「……とっくにオールグリーン」
「あ、す、すみません！ヘビィカーゴ・マンムート！出ます！」

脱走

床にシートを敷いただけの硬い寝床の上で、ユウは目を覚ました。
聞こえるのは、健やかな、クローゼの寝息だけ。
体内時計は夜明け前をさしている。
微動だにせず、天井を見つめ続けるユウの瞳へ、はっきりとした意思が表れるのに、それほど時間はかからなかった。

「……よし」
ひとつ大きく息をはいたユウは、ゆっくりと身を起こし、靴底の細工から長さ十センチ弱の太い針を引き抜いた。
盗掘業へ転身してからも、こうした盗人の心得は忠実に守っているユウである。

しかし、相手が誰であっても、監禁する際はこちらが用意した衣服に着替えさせるか、丸裸にした上で牢へ押しこめるものだ。
少なくとも、ハサンならばそうするだろう。
その辺りが素人くさい、などと思っている間に、錠前が開いた。
ここから求められるのは、慎重な行動だ。
ユウは自分に言い聞かせ、錆びた鉄格子を押した。

通路へ忍び出し、クローゼの房へ滑りこむまでに立てた物音は、錠前を外す金属音ひとつ。
都合よく仰向けに眠っているクローゼの口をふさぎ、はっと目覚めたその顔の前で、口元に指を立ててみせる。
クローゼは、うなずいた。
「待っていた」
手を取り、熱っぽく訴えるクローゼに、いささか、むずがゆさを覚えつつも、

「いけるか？」
「いつでも」
「あ……まず、聞いてくれ」
ユウは、立ち上がりかけたクローゼの肩を押さえた。
「注意がふたつ。絶対に大声を上げるな。なにがあっても、勝手なことはするな」
クローゼは、いちいち、うなずいた。
「ここを出て、まず荷物を取り返す。大祭主様をお助けして、逃げる」
「うむ。異存はない」
「緊張してるか？」
「それは……している」
「捕まっても、どうせここへ戻ってくるだけだ。身代金を受け取るまでは、殺せやしない」
「なるほど……」
「ゲームだと思えばいい」
「それは不謹慎だ」
「……軍事演習」
「あ、うむうむ、それなら……」
この面倒臭さにも、すっかり慣れてしまった。
「よし、行こう」
ユウとクローゼは鉄扉の外に立っていた見張りの男ふたりを気絶させ、自分たちの代わりに牢へ放り込むと、光石灯の淡い光に照らされた石積みの通路を、息をひそめて進み始めた。

誰もが寝入っているのか、人の気配がない。
湿った壁は、すぐに乾いた石肌をさらすようになり、時折吹き抜ける風が、牢ではさほど感じなかった寒気を運んでくる。
横目でクローゼをうかがうと、ようやくの展開に心が奮い立っているのだろう。頬を紅潮させ、目にも、歩む足にも力が満ちている。

うなずき返すその顔に、ユウは、これなら大丈夫だ、と感じたが、こうしたときこそ血気にはやった行動を取りやすいものだ。
ユウは常にクローゼとの距離に気をつけながら、見回りの姿を探した。
と、丁度そのとき。
近づきつつある足音を、耳が捉えたのである。

ユウはクローゼを手で制し、耳に集中する。
「……ひとり」
「どうする」
「道案内が必要だ」
小走りに突き当たりまで駆け、ふたりは足音の主を確認した。
右の通路から来るその男は、中肉中背。
腰に剣。それ以外に装備はない。
クローゼを下がらせ、ユウは壁を背に息をひそめた。

あくびをしながら近づく男。
その身体が見えるか見えないかの瞬間、ユウの腕が伸び、男の胸倉をつかみ上げている。
壁へ押しつけられた男が声を上げる前に、喉に入った前腕がその顎を押さえた。
錠前外しに使った太針を左目につきつけ、
「騒ぐな」
……男は両手を上げ、降伏した。
「クローゼ、武器を」
剣を奪われ、顔の長い男は、さらに情けない顔つきになった。
「俺たちの荷物、まだここにあるな」
男がうなずく。
「案内しろ」

さしたる抵抗もせずに、男は、ユウたちを宝物庫へ導いた。
ドアの前に見張りはいない。
それはそうだろう。隠れ家で警戒するべきは、出入り口と人質のみだ。
ユウは、締め落とした案内役の男を物陰へ寝かせ、鍵穴へかがみこんだ。
靴の細工から二本目の針を取り出し、差しこむ。
錠前と違い、たとえ二本でも、直針で扉の鍵を開けるのは難しい。
「外せるか？」
「……静かに。近くに、ヒッポの部屋がある」
「な、何故……？」
クローゼが、辺りを見回す。
「宝は、自分の目の届くところに置く」
「なるほど……」
か、ちゃ。
鍵が外れた。
ユウとクローゼは、気絶した案内役の男を抱きかかえて宝物庫へもぐりこみ、鍵をかけ直した。

「ああ、私の剣だ」
金目のものを物色したのだろう。部屋の中央に置かれた木机の上に、奪われた装備、道具類が散乱している。
およそ十メートル四方の部屋には、他に金箱が積んであるばかりだ。
ユウは一番に姉の指輪を探し出し、左小指へ戻した。
「……よかった」
そしてカラスの指輪。
カジャディールから授かった、神官章。
他の道具もポーチへ移し、太刀を腰に下げる。
「君は、エド・ジャハンから来たのだと思っていた」

「え……？」
「その剣だ」
「ああ、カジャディール大祭主様から……お借りしてるんだ」
「その、大祭主様との関係も気になる。祭司や祭主ならともかく、准神官の位を授けられるなど、やはり普通ではありえない。……あ、もしや君の父上と、なにか？」
「……ハハ」
すっかり調子が戻ったな。
ユウはおかしかった。
「ご縁があったんだ」
言われてクローゼは、ふぅむ、と首をかしげた。

ディアナ大祭主の居場所は、床で伸びている男からすでに聞き取ってある。
「外は、陽が昇り始めてるはずだ。ここの連中も、そろそろ起きてくる」
「慎重に急げ、だな」
うなずきあったふたりは、廊下の様子をうかがい、外へ出た。
剣と鎧は、どう気をつけても音が鳴る。
むしろ堂々と歩いた方が、怪しげに聞こえないものだ。
ユウとクローゼは忍び足をやめ、音の出るまま、早歩きに移動した。

交差路を右へ、突き当りを左へ。
さらに突き当たりで、右に顔を出すと、
「あそこだ」
ふたりの見張りが、とある部屋の前に立っている。
「ひとり頼む」
「了解だ」
一気に駆け寄ったユウとクローゼは、ぎょっと身をすくめた見張

りたちへ、その勢いのまま、体当たりを食らわせた。
ユウは背後に回りこみ、首を絞め落とす。クローゼは剣の柄頭で、相手の頭を殴りつける。
ベルトへ挟み、すぐに出せるよう用意しておいた鍵開けの道具で、三秒。
ドアを開け、
「大祭主猊下！」
クローゼが、まず飛びこんだ。
「あ、おい！クローゼ……！……くそっ」
ユウは仕方なく、気絶したふたりの巨漢をひとりで引きずり、部屋へ入った。
鍵をかけ、やれやれと振り向くと、クローゼがひざまずいている。
目の合ったディアナ大祭主は、丸く、大きな目を細め、にっこりと微笑んだ。

ビジョン

メーテル神殿、ディアナ大祭主は当年十八歳。
月女神の神光をその身に宿したといわれる、白髪の聖乙女である。
顔は青ざめ、乾いた唇はひび割れていたが、意志の強い紫の瞳は、しっかりとした輝きを持って、ユウを見つめている。
大人びた容姿からつむぎ出された、
「ハイゼンベルグ将軍」
あどけなさを残した声に、ユウは、少し驚いた。

「この方は？」
「は。彼は……メイサ神殿、ヒュー・カウフマン准神官。猊下をお助けするために、協力を頼みました。ご安心ください、信用できる男です」
「そうでしたか、メイサの……。私のために、世話をかけます」
「いえ、とんでもありません」
頭を下げる大祭主に恐縮し、クローゼ同様ひざまずいたユウも、大祭主への当然の礼として、手を取った。
すると、
「あ、だ、駄目だ、ユウ！」
「え……？」
「あ……！」
細く、可憐な大祭主の身体がぴくりと跳ね、大きくのけぞったのである。

「だ、大祭主様……？」
固く伏せられた目蓋が痙攣し、左手が、蚊を払うように振り回される。
強烈な力でつかまれているのは、ユウの手ではない。

N・Sカラスが収められた、指輪。
「大祭主様……！」
「ふれるな！」
手を伸ばしかけたユウを、クローゼが制した。
「過去か、未来か。君の、その指輪にまつわる、なにかを見ておられるのだ」
「なに……？」
手のひらを通し、千里の先も、万象の真理をも見通すという、異能の力。
世間には公表されていないが、この力こそが、歳若いディアナを大祭主たらしめたのだ。
「普段は封印のため、常に手袋をされているのだが……」
それは今、テーブルの上にある。
水差しと、水を張った洗面器が置かれているところを見ると、顔でも洗っていたのだろう。
「どうすれば」
「今は、落ち着かれるのを待つしかない」
ユウは戸惑いながらも、うなずくしかなかった。
そうして、いくばくかの、緊張の時間が流れ……。
ディアナは突然、胸元を苦しげにつかみ、
「ぁ、う……！」
ゆらり、揺らめいた。
「大祭主様！」
倒れこんできた身体を、ユウは、胸へと抱き止める。
見開かれた目が虚空を泳ぎ、焦点を定めるまでには、また、しばらくかかった。
「……あ……」
ようやく我を取り戻したディアナの額には、汗が光っている。
荒い息遣いで、指輪から右手を離し、

「ごめん、なさい……」
「いえ……」
「……手袋を……」
ディアナはクローゼから手袋を受け取り、指を通した。
「大祭主様、なにが……」
見えたのか、と、尋ねかけた言葉を呑みこんだのは、腕の中のディアナが、ユウの唇をふさぐように、手をかざしたからだ。
見つめ合う視線の内で、ディアナが、N・Sに関するなにかを見たらしいことを、ユウは直感した。
そのときである。
「見張りがいねぇ！」
ドアの外で、何者かが叫んだ。

戸板が叩かれ、ガチャガチャとドアノブが揺れる。
「鍵ぁかかってる！」
「中、確かめろ！」
「お頭に鍵借りて来い！他の連中も起こせよ！」
会話を拾っただけでも、声の主は六人。
その内ひとりが、ヒッポの元へ走ったようだ。
「くそっ……！すまない。俺がもっと、気をつけていればよかった」
ユウは無駄にした時間を悔やみ、舌打ちした。
「いいえ、私の不注意です。手袋さえしていれば……」
「猊下、責任の所在は後にしましょう。まずは逃げなければ。ユウも、しっかりしてくれ」
「……ああ」
とはいえ、どうしたものか。
部屋の出入り口は一ヶ所しかない。隠れられそうな場所も皆無だ。
つまり、こちらから出ていくか、押しこんでくるのを待つかの、二択。
どちらにしても、リスクがある。

頭をかかえたユウが、はた、と思い出した言葉は……。
「……とにかく、動け」
「うん？なに？」
「悩んだときには、とにかく動けだ！」
ユウは自分に言い聞かせ、ポーチをあさり、手持ちの道具を確認した。
「よし……！」
床へ耳を当てると、ヒッポはまだ来ていない。
「すぐにここから出よう」
ディアナとクローゼにいくつか指示を出し、ユウはつかんだ水差しを、力まかせに、床へ叩きつけた。

磁器の水差しである。
もちろん粉々に砕け、高音の、けたたましい音が響く。
「あ！おい！やっぱりここにいやがる！」
ドアの前に集まった五人の手下は、鍵を待たず、狙い通り、扉への体当たりを始めた。
「しまった！」
などと、わざとらしく叫びつつ、ユウは、ディアナとクローゼをドアの真横へ導く。
気づかれないよう、そっと鍵を開け、体当たりの振動に合わせて、一気にノブを回すと、
「うわあっ！」
支えを失った手下五人は、将棋倒しに部屋へなだれこみ、床へ積み重なってしまった。
「行こう！」
その山を飛び越え、三人は廊下へ飛び出した。

「右から、人が」
と言えば、ヒッポの手下が右から顔を出す。

「止まって」
と、立ち止まれば、間一髪、大人数が先の通路を横切っていく。
クローゼの胸に抱きかかえられ、手袋を外した右手を、前方にかざすディアナ。そこからもたらされる、ヒッポたちの動きと、出口への道順の情報は、正確を極めている。
「おつらくはありませんか、猊下」
「直接ふれているわけではありませんから……。それよりも、将軍に申し訳なくて……」
「いえ、軽いものです」
床へ積み重なった男たちの醜態を見て、少し溜飲を下げたらしいクローゼは、元気一杯答えた。
だが……。
いかなディアナの力であっても、相手の数が減るわけではない。ヒッポ一家は大所帯。ユウが噂として聞いただけでも、確か四十人近くはいたはずだ。
敵をかわせば、かわすほど、背後から迫る足音の数が増えていく。長い直線通路で振り返ると、十数人の追っ手が、血走った目で迫っていた。
「振り返るな！走れ！」
「あ、ユウ！」
ユウはパッと身を返し、二メートルほどの幅の狭い通路に、立ちふさがった。
「上等だぁ！」
「ぶっ殺せ！」
ユウはポーチからあの発光筒を引き抜き、素早く狙いを定め、紐を引いた。
鈍い発射音と共に、飛び出した閃光弾は、
「ぎゃ！」
先頭を走る男の鼻柱に直撃する。
そして、破裂音。

「うわ！」
「うぎゃあ！」
強烈な閃光に、男たちの目が潰れた。
前方を走っていた数人は、飛び散ったクルミの破片を、もろに浴びたらしい。
両手で押さえた顔面から、血がしたたっているのが見える。
すぐに方向転換し、走り出したユウの後を、追える者はいなかった。

怒涛

通路は徐々に上り坂となり、前方から吹きこんでくる風にも、新鮮な外気が感じられるようになった。
地上が近い。走る足にも、自然と意気が増す。
しかし、四つ角の交差点を前にして、
「人が、近づいています……！」
ディアナの声が、震えた。
「すべての道に……すぐ、近くに……！」
足を止めたユウとクローゼは周囲を見回したが、
「……くそ」
逃げ道はない。右の壁に、扉がひとつあるばかりだ。
「ご安心ください。活路は我々が……」
と、剣を抜きかけるクローゼを制して扉の内をうかがうと、それは粗末な武器庫であった。
「立てこもるのは危険だ。一点突破しよう」
クローゼは訴えたが、ユウはひとりうなずき、ふたりを部屋へ押しこめる。
「失礼します」
ディアナの上衣を脱がせると、クローゼの顔つきは、一層、怪訝なものとなった。
「ユウ……？」
「俺が奴らをひきつける」
「なッ……！」
「クローゼは、大祭主様のことだけを考えろ」
「馬鹿！ここまで来て、君だけを置いていけるものか！」
「駄目だ」
「駄目は君だ！」
「クローゼ！」

クローゼの肩が、びくり、跳ねた。
「……俺は心配ない。上手く逃げられたら、仲間を連れて、助けに来てくれ」
「ユウ……」
「大祭主様も、将軍を頼みます。ふたりで地上へ」
ディアナは、なにか言いたげに口を開いたが、
「……わかりました。メーテルのご加護を」
ユウの額にふれた。
「メイサのご加護を……！」
ドアを閉めたユウは、脱がせた神官衣を、あたかも誰かを抱いているように肩に絡ませ、交差点まで走る。
ヒッポの手下が現れるのを待ち……。
「いたぞ！」
見つかると同時に、今来た道を逆走した。

この場合、一点突破を主張したクローゼの判断は正しい。頭数が多いとはいえ、相手は所詮盗賊だ。先手を取ることができれば、勝算は大いにあっただろう。
それがわかっていながら、ユウが、あえて別れることを選んだのには理由がある。
このまま、クローゼの前から姿をくらまし、アレサンドロたちと合流しようと考えているのだ。
鉄機兵団の突入までやり過ごすことができれば、そのごたごたに紛れ、逃げられるはずだ、と。
別れも告げずに去ることは、つらく、義理を欠く行為とわかっていたが、今は、これが最もよい方法であるように、ユウには思えた。
だが、そうしている間にも、
「いたぞ！回りこめ！」
ユウは追い立てられるように、道を下っていく。地上はどんどん遠くなる。

石段を飛び降り、飛びくる槍を頭上にかわし、
「くそっ！」
突き当たりの扉を押し開けた先へ転がりこむと、そこには。
「Ｌ・Ｊ……？」
作業台に固定された、見たこともないＬ・Ｊが、ずらり並んでいたのである。

二足歩行のトカゲのようで、完全人型の多い鉄機兵団のＬ・Ｊに比べると、異形といっていい。
実は、海を越えた南の大国、シュワブのＬ・Ｊなのだが、ユウはそれを知らない。
荒事の多いヒッポ一家だけに、こうしたものも必要になるのか。
それにしては物々しい数だった。
……と。
「うっ！」
つい目を奪われていたユウの背を、何者かが蹴りつけた。
「手ぇかけさせやがってぇ……」
扉から、列をなして現れた手下どもは、二十を越えている。
しまった、と、ユウの左手も鯉口にかかったが、多勢に無勢。
「あ！こいつ！」
今頃気づいたか、肩にかかった空の神官衣を剥ぎ取られ、後頭部を殴られた。
倒れこんだ、その頭を踏みつけたのは、ヒッポの足だった。

「お頭……」
手下から神官衣を渡されたヒッポは、平静を装いながらも、蝋で固めた髭先を震わせ、
「立たせろ」
命令する。
ユウはすぐさま羽交い絞めにされ、両足を、左右からふたりの男

につかまれた。
ヒッポの腕が持ち上がり、ユウの頬へ、一発。
さらに、逆側から一発。
「ハサンめ！ハサンめ、ハサンめ！」
ユウの唇から血がしたたり落ち、胸元へシミを作る。
駆けこんできた手下が、ヒッポへなにか耳打ちすると、さらに、その顔色が赤黒く変わった。
低くうなったヒッポは、手下の手から細身のナイフを取り上げ、
「ぬぅぅうんッ！」
ユウの左太股へ、深く深く、突き立てた。
「あ……ぐ！」
「貴様だけは、許さん……！」
「づッ……ぐ、ぅ、ぅ……ッ！」
凶暴さをあらわにしたヒッポの手の中で、骨に当たったナイフが、きつくきつく、えぐられる。
ユウは歯を食いしばり、悲鳴を噛み殺した。
「……ここは捨てる。支度をしろ！」
ヒッポが告げると、ユウを羽交い絞めにする男を残し、手下は各々散っていった。
「こいつはどうします？」
「見せしめだ。目玉と指十本、ハサンに送りつけてやれ。その後で……」
首を締める仕草をして見せる。
「へ、へへ、承知」
そのときだった。
こぐように駆け戻ってきたひとりの手下が、
「て、鉄機兵団です！」
叫んだのだ。

「なにぃ？早すぎる！」
「い、いえ、本当なんで！入口を全部固められてたみたいで！」
「町にいた連中はどうした！鉄機兵団の見張りは！」
「さ、さあ……捕まったんじゃあ……」
ヒッポの喉奥から、獣のごとき、うなり声がもれた。
「全員呼び戻せ！Ｌ・Ｊで出るぞ！」

……してやったりだ。
ユウは湧き出る笑いを、こらえきれなかった。
驚くほど上手く、事が運んでいる。
「首が絞まるのはお前の方だ！ヒッポ！」
「うるさい！黙れ！」
「黙るのも、お前だ！」
叫ぶや否や、ユウは床を蹴り上げ、ヒッポの顔面を蹴った勢いで、背後で羽交い絞めする男の頭上を飛び越えた。
着地の際、左足に激痛が走ったが、構ってはいられない。
刺さったままのナイフを引き抜き、
「野郎ッ！」
手下のひとりが襲いかかってくるところへ、体当たり同然に突き入れる。
絶叫したその男は、腹を押さえ、転げ回った。
「ヒッポ！」
すでにヒッポは逃げ出している。
「待て！」
駆けつけてくるだろうクローゼのため、せめてヒッポだけでも縛り上げてやろうと思ったユウだったが、引きずる足では追いつけず、あと一息のところで、目の前の鉄扉が閉まる。
ユウが入ってきた扉ではない。
Ｌ・Ｊベッド脇の、おそらく隣の格納庫への扉だ。
「くそっ……！」

あまり時間をかけていると、今度は、自分が逃げる時間がなくなる。
仕方がない。ユウはその扉を放置し、来た扉へ向かうことにした。
しかし。
ヒッポの遠隔操作か、こちらにも電子ロックがかかっていたのである。
舌打ちしたユウは、壁に埋めこまれた配線盤のカバーを外した。
ドアの配線を目で追いつつ、ポーチをあさっていると、
「！」
突如鳴り響くサイレン。そして、赤色灯。
「なんだ……？」
鉄機兵団の侵入を仲間に知らせるものかと思ったが、そうではない。
ゴウンゴウン、と、重機のうねりが格納庫に響き……。
なんと、開放されたＬ・Ｊ出撃用の二重ハッチから、大量の水が押し寄せてきたではないか。
ザリ湖の湖水。
そう、ユウが認識する一瞬の間に、Ｌ・Ｊと作業台、クレーンが、怒涛となって、ユウへ襲いかかってきた。

それでも、君は

『……ふ、ぅ』

水の中、ユウは大きくため息をついた。

九死に一生。波濤に呑まれる直前、とっさに呼び出したカラスへ乗りこむことができなければ、どうなっていたことか。

呼吸だけは心配したが、さすがは魔人のＮ・Ｓ。水中でも十分に活動できるようだ。

ユウは水流が弱まったのを感じ取ると、丸めた四肢を伸ばし、身体の上へ折り重なった鉄骨と土砂を押し退けた。

……と。

濁った水中に、例のトカゲ型Ｌ・Ｊが浮いている。

その虚しき姿。

どことないやるせなさと憤りが胸を突き上がり、思わず、舌打ちがもれる。

『くそ……ヒッポめ』

ユウは狭い隙間を這い出し、鉄骨を蹴って、開け放しのハッチへ向かった。

金属扉へすがりつくと、水面からの光が、柱となって湖底へ差していた。

……静かだ。

まるで神殿のようだと、ユウがその美しさから目を離せずにいると、突然。

『！』

水泡を引きながら、水中へ落ちこんできたものがある。

鉄機兵団のＬ・Ｊだ。

上で戦闘がおこなわれている。そう察知したユウは、考えるより

速く、再び壁を蹴り、湖面を目指していた。
がむしゃらに水をかくユウの横を、また一機、先と同型のＬ・Ｊが沈む。
ちらりと、その行く先を見やったユウは、
『あ……！』
ハッとした。
出た扉の、さらに左隣のハッチにグリーンランプが点灯し、開き始めている。
現れたのは、先ほどのものと同じ、トカゲ型Ｌ・Ｊ。だが、赤茶色の機体は、ひと回りも、ふた回りも大きく、その背には翼が生えている。
『ドラゴン……！』
角の下に埋まった機械の目が、ぎょろり、ユウをにらんだ。
『Ｌ・Ｊ……いや、Ｎ・Ｓだと……？』
この声は、
『ヒッポ！』
『貴様……！ハサンの弟子か！』
開いたドラゴンの口から、泡沫が上った。
『おぉ……やっと死んだと思っていたらこれだ。……ハサンもそうだった』
ヒッポの鼻にかかった声は、笑っているようにも聞こえる。
あきれか、怒りか。こうした声が、一番恐ろしい。
翼を羽ばたかせたドラゴンが水中へ滑り出し、カラスの周りを悠然と泳ぎ回った。
『不死身の魔術師。弟子もそうだと言うか？んん？』
水流がカラスを揉み、体勢が崩れる。
同じ翼でも、モチのいない今、カラスのそれは邪魔以外の何者でもない。
ヒッポが不気味に笑ったのは、奴もそれに気づいたのだろう。

ドラゴンが旋回した。
来る。
ユウは、太刀を抜き払った。

その頃、クローゼは、やきもきとしていた。
ハサンの密告により、すべての出入り口の情報を得、水も漏らさぬ配備を敷いていた鉄機兵団に保護されたとき、丁度、その見張り所へはバレンタイン紋章官が巡回に来ていた。
「閣下！ああ、よかった！」
大祭主であるディアナを差し置いてクローゼへ飛びついたのは、それがやはり、生まれたときから可愛がってきた弟だからに他ならない。
大まかな状況を聞き取ったバレンタインは、すぐさま各所で待機している兵たちへ突入を通達し、自身も一軍を率いて乗りこんでいった。
そこでクローゼは、ディアナと共に湖畔の高台へ移動し、連絡所として設けられた天幕の中でユウ救出の報を待っていたのだが、そこへ、シュワブのトカゲ型Ｌ・Ｊが、ザリ湖から続々と現れたのである。
「何故シュワブが！」
さすがに驚いたが、そこは将軍だ。
町で出撃準備を整えていたＬ・Ｊ部隊に出撃を命じ、突入部隊へも伝令を走らせた。
そして今。
数分で到着したＬ・Ｊ部隊は、思った以上の苦戦を強いられていたのであった。
「む、ぅ……」
シュワブのＬ・Ｊは、光炉やコクピットなどの基本構想は同様ながら、帝国のそれとは、まったく異なる進化を遂げている。

動物型というのがそれだ。
丸腰で向かい合った場合、人間は野生動物に劣る。つまり、作業性能を切り捨て、戦闘能力に特化したのがシュワブだ、と、クローゼは国立の上等学校で教わっていた。
教師は明言を避けたが、Ｌ・Ｊの応用開発にかけては、模倣の域を出ない帝国より、シュワブの方が上を行っているのである。
……だが、ここまでとは思わなかった。
爪を噛んだクローゼの元へ、バレンタインが駆け戻ってきた。

「閣下！」
「アルバート！ユウは！」
「まだ見つかりません。探索のため、数名を残してきました」
「む……」
「自力で逃げたとも考えられます。気を落とさず、盗人の捕縛を第一に考えましょう」
バレンタインは、クローゼの肩を叩いた。
「それにしても、シュワブとは……」
「うむ……。三機一組で当たれと命じたが、機動力の差が大きい」
「いえ、結構な采配かと思います。あとは、前線を四〇〇系、周囲を六〇〇系で固めましょう。幸い、相手は飛行能力を持たないようです。網を張っておけば、逃げられはしません」
指示を受け、Ｌ・Ｊ部隊の陣形が変わった。
「アルバート、君はどう思う。この一件、シュワブが関わっていると思うか？」
「いいえ……」
と、バレンタインが口を開きかけた、そのときだった。
ザリ湖の湖面が盛り上がり、赤茶のドラゴンが、ドッと、空へ舞い上がった。
「な、なんだ！ドラゴン？」
叫ぶクローゼにすがりつき、それまで静かに様子を見守っていた

ディアナが、指を差す。
「カウフマン！カウフマン准神官です、将軍！」
「え！」
きりきり舞いするその背には、黒いものがつかまっている。
遠眼鏡をのぞいたバレンタインは、
「Ｎ・Ｓです、閣下！」
「なんだって！」
ドラゴンは湖面へ落下した。
「げ、猊下！本当に……あれが？」
「カウフマンです！私にはわかります！あれは、カウフマンです！」
「なんて、ことだ……」
クローゼは額に手をやった。
「……アルバート、後のことはまかせる。私は『フェグダ』で出るぞ」
「閣下！」
「わかっている。万一のため、全軍、水辺から遠ざけろ！」
「ッ……了解です！」

水面に叩きつけられたユウは、その衝撃で、思わずドラゴンの首に巻きつけた手を離してしまっていた。
カラスの身体が宙に浮き、そこを、まるで水に落ちた昆虫を狙う魚のように、湖底からドラゴンが噛み上げる。
ドラゴンは、牙を立てたカラスの腰を食いちぎろうと、首の力だけで振り回した。
『く、そ……ッ！』
装甲のきしみが、骨に響く。
太刀を、と、思ったが、それは今、ドラゴンの左翼に刺さり、手が届かない。
強靭な上顎に両手をかけると、見た目にたがわず、感触はまさしく皮膚である。

厚い唇からのぞいた牙が、さらに深く、装甲板を噛み破り、
『ぐ、ぅッ！』
ユウの身体が跳ねた。
『引きちぎってやる！』
言い放つヒッポの言葉に合わせ、太い腕がカラスの脚をつかむと、鋭い牙が、ユウの上半身をひねり上げた。
そこへ。
『待て！』
クローゼの駆る将軍機、『フェグダ』が、水中へ飛びこんできた。
上半身は人、下半身は馬。
ランスとシールドを装備した、パールピンクのオリジナルＬ・Ｊである。
『ぬぅっ！』
叫んだドラゴンは、カラスを振り捨て、突き出されたランスの先端をかわした。

『大丈夫か、ユウ！ユウなのだろう？』
『クローゼ……？』
フェグダは、驚くカラスの腕を取り、自身の方へ引き寄せた。
『まったく。君という奴は、とんでもない男だ』
言いながらも、クローゼの声は笑っている。
『そんなものを持っているのなら、そう言ってくれればよかったのに。余計な心配をした』
『……ああ』
『一体、どこに隠し持っていたのだ。……あ、もしや、ヒッポのものを盗んだのか？』
『おしゃべりは後にしていただきたいですな！閣下！』
腹立たしげに振られたドラゴンの尾に弾かれ、盾で防いだフェグダと、それに押されたカラスが、相次いで湖面を飛び出し、大空へ舞った。

『しめた！』
と、素早く体勢を立て直したフェグダの、額の一本角、フィールド発生器へ青白い光が入り、足底にも同じ光が宿る。
そして……。
波紋の広がる湖面を四本足で踏みしめ、まるで、そこが地面であるかのように、フェグダが立った。
落下するカラスの身体を、馬の胴に受け止めながらも、その足は沈まなかった。

『助かった』
クローゼは、大きく息をはいた。
『実は、フェグダは泳げないのだ』
『えぇ？』
この浮遊システムは、周囲に発生させた磁場と足裏の磁場とを反発させ、機体を持ち上げるというもので、帝国に万と存在するＬ・Ｊの中でも、これ専用の光炉を備える、フェグダのみが有する能力である。
だが水中ともなると磁場を形成しにくく、おまけに一切のスラスターを持たないフェグダでは、脱出が難しくなるわけだ。
『ハハ、あまり考えずに飛びこんでしまったものだから』
他人事のように笑うクローゼに、
『どっちが、とんでもない男だ』
ユウは、あきれた。
……と、それを聞きつけたのだろう。ドラゴンが、フェグダの足元から噛みついてきた。
再び水中へ引きずりこもうというのだ。
しかしフェグダは、ひらりと身をかわし、
『君も、飛びこんでくれただろう？』
『え？』
『私とディアナ猊下を助けるために、危険に飛びこんでくれただろ

う？』
『それは……』
逃げるためだ。
『もちろん、恩を返そう、などと言っているのではない。その君だからこそ、私がここにきた理由もわかってくれるはずだと……そういうことだ』
ユウは、クローゼの素直な友情に、胸が痛んだ。
『……クローゼ』
『うん？』
『俺は……』
と、ここでまたしても、牙を剥いたドラゴンの頭が水中より突き出したが、フェグダは華麗なジャンプで、それをあしらう。
『俺は、ララ……、ララ・シュトラウスと旅をしてる』
クローゼが押し黙った。
『そう、か……、ではそれが、ギュンターの追っている、黒いＮ・Ｓか……』
『……すまない』
『いや、謝ることはない。君には君の言い分も、立場もあるのだろう……』
『……』
『……だが、それでも』
『え……？』
『それでも君は……！私の友だ！』
言うや、フェグダのランスが機械音を発し、ユウの目の前で、変形を始めた。
先端、中、根元と、三分割されたパーツの隙間が若干伸び、カバーが収納される。
同時に周囲を走ったのは、白い稲妻。
湖面にそれを突き立てると、根を伸ばすように電光が走り、
『ぐぉぉッ！』

感電したドラゴンが、水中から飛び上がった。
これぞ、光炉内蔵電撃槍。『電雷のフェグダ』の名は、伊達ではない。
『あの男を捕らえる！協力してくれ、ユウ！』
『……ああ！』
カラスとフェグダは拳を合わせ、今、共闘できる喜びを、胸に分け合った。

哀願

バレンタインの指示が機能し始めたか、陸ではヒッポの手下たちが、続々と捕らえられつつある。

ハッチをこじ開けられたのは最初の数機で、多くは投降だ。

その光景をメインモニター越しに眺め、

『ぬうう……話が違う』

コクピットのヒッポは、歯ぎしりした。

それでも尚、言葉の端々に余裕が見られるのは、ドラゴンへ挑むことのできる空戦型Ｌ・Ｊが、この戦域に見当たらないからだろう。

実際、ハイゼンベルグ軍は陸戦を主として構成された軍隊なのである。

水空両用のドラゴンは、ザリ湖上空を大きく旋回し、再び、湖面のフェグダとカラスの眼前へ戻ってきた。

『このまま、おさらば、でもよろしいですが、このヒッポ、殺すと決めた男を逃がしたことがないのが自慢でしてな』

『その言葉、すぐに後悔することになる！』

ヒッポは鼻で笑い、ドラゴンの起こした風が、湖面に波紋を立てた。

『……奴の翼に刺さった剣は、君のものか？』

『ああ』

クローゼとユウは、ささやき合った。

水中で体当たりされた際に刺したもので、柄は、腹側に向いている。

『よし、あれを使おう！』

雄々しく後足で立ち上がったフェグダが、駆け出した。

盾を構え、白く輝く電撃槍を脇にかかえ。

攻撃を察知し、距離を取ろうと舞い上がりかけたドラゴンを追い、

水面を蹴る。
届かない、と見えた、その失速の瞬間。
『まだだ！』
フェグダは足がかりのない大気を踏みしめ、さらにもう一歩、飛んだ。
電磁フィールドの出力を上げることで、短時間ならば、天空さえ駆けることができるのである。
『なに！』
加速度で勝ったフェグダは、一気に距離を詰め、ドラゴンへ迫る。
ユウはフェグダの背を蹴り、ドラゴンの左翼へ、飛びついた。
『貴様……ッ！』
振り落とそうとする、翼の遠心力に体重を乗せ、握った太刀の柄を滑らせる。
音もなく、抵抗もなく、翼膜が裂けた。
『ユウ！』
呼びかけに応え、刃を払ったユウの着地点には、抜群の呼吸で、フェグダが待っていた。

『う、うぉおおぉ！』
ドラゴンの左翼は、今や根元で、かろうじてつながっている状態だ。
川水に揉まれる木の葉のように暴れ、その巨体は、陸地へ向かって滑空を始める。
その、目指す場所は……。
『ア、アルバート！猊下！』
あろうことか、ふたりが待つ、高台の連絡所だった。
『しまった、アルバート！逃げろ！……逃げろ！』
クローゼが無線で呼びかけるが、電磁フィールドの影響で、ノイズがひどい。
クローゼは、フェグダを走らせた。

『急げ！急いでくれ、フェグダ！』
だが、間に合うはずがなかった。
轟音立てて、ドラゴンは高台へ激突。ユウの目にも、ひしゃげた天幕が空を舞うのが見えた。
『兄さん！……あ、ああ……なんてことだ……！』
『クローゼ！まだ、そうと決まったわけじゃない！走れ！』
『！』
『しっかりしろ！走れ！』
『……ッ』
クローゼの手が、操縦桿を握り直す。
陸へ上がったフェグダは、木々を一足飛びに躍り越え、高台へ降り立った。

『ああ……』
クローゼの喉から、絶望のうめきがもれた。
肩や頭を押さえ、うずくまる騎士たち。散乱する金属片。
深くえぐられた地面が、生々しく、現実を突きつける。
巨体を引きずった痕跡の先には、ドラゴンがうつ伏せに倒れ、白煙を上げているのが見えた。
『大祭主様！』
『アルバート、返事をしてくれ！』
ふたりの声が、嘘のように静まり返った戦場に、むなしく響いた。

……と。

『……？』
どこかで、機械音がした。デュアルアイに光が入ったときの、あの音だ。
『起動音？』
『いや、これは……！』

身構えたフェグダとカラスの前で、ドラゴンが鎌首をもたげる。
と、思うと、その首がぐにゃりと曲がり、下から、緑のＬ・Ｊが姿を現した。
『シュッツェンシルト！』
バレンタイン専用機、五〇五式改、『シュッツェンシルト』である。
額の一本角はフェグダと共通だが、こちらは、先がふたつに分かれている。
カブトムシだ。
シュッツェンシルトは、背のフラップブレードを振動させ、瓦礫を払った。
『アルバート！無事だったのだな！』
まだ下半身を挟まれているらしいシュッツェンシルトに駆け寄り、フェグダはドラゴンを持ち上げ、脇へ押しやる。
『さあ、アルバー……』
『クローゼ！』
『あっ！』
フェグダの前脚部が二本、宙を舞った。
シュッツェンシルトに斬り飛ばされたのだ。
『な、何故……！』
ドラゴンの上へ倒れこんだフェグダに向け、さらに振り上げられたシュッツェンシルトの刃を、間に入ったカラスの太刀が止めた。
『ヒッポだな！』
『ふふふ、気づくのが遅すぎる』
ヒッポの乗ったシュッツェンシルトは、バーニアを吹かし、数十メートル、飛びしさった。
『さて、これで私の逃げ道をふさぐ者はいなくなった。愚かな将軍はそのざま。飛べないＮ・Ｓに……人質』
シュッツェンシルトは左手を突き出した。

そこに捕らわれていたのは、ディアナ大祭主と、バレンタイン紋章官。

ふたりは、生きていたのである。

『……よかった……！』

メインモニターにふたりの姿を拡大し、なにかシュッツェンシルトへ叫んでいるバレンタインの様子を確認したクローゼの口から、安堵のため息がもれた。

事態が好転したわけではないが、ユウとクローゼの心に、俄然、気力が沸き出でる。

フェグダの手が、カラスの腕をつかんだのには、なにか秘策があるからだろう。

ユウは、フェグダを見ずに、うなずいた。

『では……』

シュッツェンシルトが人質をちらつかせながら空中へ浮き上がるのへ、

『そうはいくか！』

フェグダは、電撃槍を投げつけた。

今このときに出す攻撃だ。よほど強力ななにかが、隠されているに違いない。

……と、思いきや。

腕の力だけで投げられた槍は、照準も不十分に、あらぬ方向へ飛んでいく。

『ハン！馬鹿め！』

ヒッポは笑った。

だが、

『そうしてすぐ油断をする！悪い癖だな、ヒッポ！』

『なにぃ？』

電撃槍は、シュッツェンシルトのスラスター目がけ、自ら意思を持ったように方向を変えたのである。

『無線誘導か！……ええい、次から次へと、面倒な！』
シュッツェンシルトは剣を振り回し、電撃槍を払ったが、半自動コントロールされたそれは、そう簡単に撃ち落せるものではない。
ふたつある背部スラスターの内一基を破壊され、シュッツェンシルトのバランスが崩れた。
そこへ、すでに間合いへ踏みこんでいるカラスが、
『ヒッポ！』
人質をつかむ左腕を、ひじから切断する。
その腕を柔らかく受け止め、つま先を軸に反転しつつ、もう一閃。
右腕も飛んだ。
『怪我は』
ユウが問いかけると、ディアナの頭を抱きしめるように防御姿勢をとっていたバレンタインは、顔を上げ、
「大丈夫だ！」
巨大な指の中で、手を振って応えた。
その間にも、シュッツェンシルトは、もう一基のスラスターをも破壊されている。
もはやヒッポに、打つ手はなかった。

『観念するのだな』
這いずりながらも、手に戻った電撃槍を突きつけ、クローゼが言う。
『ヒッポ！大祭主誘拐、監禁、ならびに他国Ｌ・Ｊ不法所持の罪で、貴様を逮捕する！残りの罪は、帝都へ戻ってからだ！』
追い詰められたヒッポは、
『ま、待て！……私は、頼まれただけ……』
なにやらモゴモゴと言い逃れを始めた。

その直後だ。

『あ、や、やめろ！やめてくれ！』
ヒッポの懇願する泣き声が聞こえたかと思うと、シュッツェンシルトのコクピットが、ドッ、と爆発を起こし、吹き飛んだ。
分厚いハッチが宙を舞い、ユウの目の前に落ちる。
ぐらりと揺れたシュッツェンシルトは、仰向けに倒れた。
予想だにしなかった展開に、ユウたちは、ただ呆然と、黒煙の上がるコクピットを見つめるしかなかった。

敵として、友として

そこから、かなり離れたザリ湖の対岸に、あの人物がいる。
黒馬にまたがり、漆黒のマントをなびかせた、例の鉄仮面だ。
はるか前方に立ち上る黒煙に、なにを思うのか。
表情のない鉄仮面からは読み取るべくもないが、その手に握られたスイッチが、用済みとばかりに放り投げられ、地面へうつ伏せに倒れた男の手元へ転がった。
全身に傷を負ったその男は、ジョーブレイカーだった。

「……う」
ひと声うなったジョーブレイカーは、腕で身を起こし、
「……私を……黒幕に仕立てるつもりか……」
スイッチを、木立へ投げ捨てた。
「何故、ディアナ大祭主をかどわかした……」
「……」
「狙いは月の聖石か……カジャディール様の失脚か……！」
鉄仮面は、本当に生きているのか疑わしくなるほどの陰気をまとい、黙然と、湖へ視線を向けている。
「皇帝の座か！」
答える代わりに、腰に下がったサーベルが引き抜かれた。
暗澹たる地の底へ引きずりこむかのような威圧感に、周囲の景色さえも歪んで見える。
パッと起き上がり、飛びしさったジョーブレイカーの手から放たれた煙玉が、地面で弾けた。

その頃。
ユウはヒッポに刺された左太股の、応急手当を受けていた。
「可能ならば、しかるべき医者にみてもらった方がいい」

と、丁寧に包帯を巻くのは、バレンタイン紋章官だ。
無論、ここには軍医もいるが、ユウとN・Sのことは極秘裏に処理しようというクローゼの意思を尊重し、余人の手を交えないように、はからってくれたのである。
「ありがとう、ございました」
身支度を整え、立ち上がったユウは、ディアナの元へ向かった。

「大祭主様」
「あ！どうか、そのまま」
ディアナは、ひざまずこうと身をかがめたユウをとどめた。
「あなたには感謝しています、カウフマン准神官」
「いえ。……ですが、ひとつお願いが」
「ええ」
「カジャディール大祭主様に、災いが降りかかることのないように、どうか……」
それと聞き、ディアナは意外そうに目を丸くした。
「カウフマン准神官」
「はい」
小さな両手が、ユウの手を包みこむ。
「心配には及びません」
ディアナは、愛らしい笑顔の中にも威厳のある面持ちで、頼もしく、請け負ってくれた。
「ありがとうございます」
これで、少し心が軽くなった。
「では……」
「あ、准神官」
「は……」
「あなたの、旅の助けとなるかはわかりませんが……」
と、ディアナは、なにを思ったか、ユウの頬に両手を沿え、ふたりの額をふれ合わせる。

「だ、大祭主様……？」
「静かに。目を閉じて」
ユウは言われた通り、固く目を閉じた。
……が。
「あ……！」
すぐさま目蓋を開いた。そこに浮かんだ光景に、思わず驚愕したからである。
「駄目。目を閉じて……集中して……」
「……はい」
ディアナがなにをしようとしているのか、ようやく察しがついたユウは、ひとつ息をはき、心を開け放つ。
砂に水が染みこむように、ふたりの意識が同化した。
……見えるのは、向かい合う、Ｎ・Ｓオオカミ。
サイズが同じところを見ると、こちらも、同サイズのなにかに乗っているらしい。
そう思うや否や、左手から光芒が走り、視界の半分を失った。
斬られた。
ユウの意識にも、その感触が伝わった。
相拮抗するオオカミと『それ』は、その後幾度も斬り結び、離れてはまた、刃を交わす。
一旦、距離を置いた二体は、一足飛びに間合いをせばめ……、
「うッ……！」
互いの胸へ、剣を突き立てた。
初めてＮ・Ｓに乗った、あのときと同じ。痛みのない感触だけが、ユウを貫く。

もう、間違いはない。これは……十五年前の光景。

N・S、カラスの記憶。

だが、ここからがユウの、いや、アレサンドロさえ知らない真実だった。

ユウの憑依したN・Sカラスは、確かにこのとき、オオカミの身にもたれかかるようにして、機能を停止した。

しかしユウは、胸から魂の抜け出る感触を覚え、右側のみとなった視界の端に、光球を見たのである。

光球はみるみる収縮し、人型をなす。

現れたのは、美貌の女性。

清げで、凛とした、大輪の白百合のごとき、

「カラス……！」

死んではいなかったのだ。少なくとも、この時点までは、生きていた。

そうこうしている間にも、カラスは腰の太刀を抜き払い、なにか叫びながら、N・Sの左手へ駆けていく。

左の視界を失っているN・Sカラスは、その目指す先に誰がいたのか、結末がどうであったのか……これ以上の情報を残してはいなかった。

「これが……私の見た、すべてです」

額を離したディアナが言った。

その顔には、先に見せたような疲労はない。声も、意志の強い目も、しっかりと、ユウへ投げかけられている。

「カウフマン」
「は……」
「気をつけて。無事を祈っています」
「はい。カジャディール大祭主様にも……とにかく進みますと、お伝えください」
「わかりました」
ユウは頭を垂れ、きびすを返した。
そこには……。
「ユウ……」
クローゼが立っていた。

「……ユウ、もう一度聞かせてくれ。本当に、その指輪を置いていくことはできないのだな？」
「ああ」
「今ならまだ、君の罪は揉み消せる。それでも……」
「それでもだ」
「……そう、か」
目蓋を閉じ、太く、ため息をはいたクローゼは、
「わかった」
天を仰ぎ、笑顔を作った。
「次に会うときは、戦場だ」
「……ああ」
「戦場のならい、手加減はしない。正々堂々と剣を交えよう」
「ああ」
ふたりは、どちらともなしに、固く、握手を交わした。
「君の大望が、果たされることを祈っている」
「クローゼも……」
と、言いかけたユウだったが、
「……いや。クローゼはきっと、夢をかなえられる」
「夢？」

「いい将軍になれる」
「あ……うむ、そうだろうか。できれば、そうなってから……君とは再会したいな」
「……」

互いに、それ以上の言葉が、続かなかった。
だが、目と目を見交わすだけで、言葉は足りた。
高台へ、幌馬車が走りこんできた。
「迎えが来た」
ディアナへ、バレンタインへ一礼し、ユウは馬車へ向かう。
「ユウ、必ずだ！必ず、また会おう！」
「ああ。……クローゼも、元気で！」
クローゼとディアナは、姿が見えなくなるまで、ずっと、手を振り続けていた。

高台を下った馬車は、一路、パリュを目指し走る。
そこからまたアシビエムの本道へ戻り、西へ進路を取ろうというのが、アレサンドロとハサンが考えた逃走ルートである。
アレサンドロは今、ユウの手当てにかかりきりになっているため、御者台に座っているのはハサンだ。
手綱を台にくくりつけ、なんとも、ものぐさに鞭を入れているが、馬車はそれでも道を外れることなく、一定の速度で走っていた。
そこへ音もなく、幌へ舞い降りた影がひとつ。
「ほぅ」
すぐに気配を察し、振り向いたハサンは、そこに、肩口を押さえたジョーブレイカーが、うずくまっているのを見た。

「運賃は、一キロにつき五十フォンスだ。どこまで行きたい？」
「……お前たちと、共に行く」
「ならば金はいらん」

ハサンは馬の尻に鞭を入れた。
「中に腕のいい医者がいる。見てもらうがいい」

合流

「いいか。これから三つ数える。妙な小細工はなしだぜ」
「ああ」
答えたユウの隣で、ララが、つばを飲みこんだ。
「どいつも手は出すんじゃねえぞ。出しやがったら、ただじゃおかねえ」
「フン、物騒なことだ」
「おい、随分と他人事だな、オッサン。あんたこそ、俺たちを裏切ってやしねえだろうな」
「さて……」
「ッ……てめえ！」
「アレサンドロ、気が立つのはわかります。ですが、ここで争っても仕方ありません」
「そうだ、早く始めよう」
「……チッ」
アレサンドロは、手を後ろに回した。

「よし、いくぜ」
息詰まる緊張が、場を重く支配する。
「イチ……ニ……サン！」

「……」

「……これだけ？」
各自の手から輪の中央に出されたのは、かき集めても片手に乗るほどのキノコ類と、五尾の川魚。
「……メシにしようぜ」
空腹に鳴る腹を押さえ、アレサンドロが、気力なく立ち上がった。

ジョーブレイカーの情報から鉄機兵団の別軍が迫っていることを知り、逃げるように街道を西へ向かったユウたち一行だったが、人里を避けているうちに山道へ迷いこみ、食料が尽きてしまった。
そこで、手分けして探そう、ということになったのだが……、
「ううん、余計おなか減ったかも……」
この通り、それぞれが小魚一尾にキノコひと口という、散々たる結果に終わったわけである。

「ンッフフフ、金は、うなるほどあるというのにな」
「余裕ぶってる場合じゃねえ。とにかく、もう一度だ」
「えー？もういいじゃない。あたし、ユウといるぅ」
ララが駄々をこねたが、
「そのユウが、腹すかしてんだろ」
「う……」
「日が沈む前に、できるだけかき集めておこうぜ」
手を叩いたアレサンドロは、寝ぼけ眼のモチを抱き、また、山へ踏み入っていった。
「……ねぇ」
「うむ？」
「つくす女の子って、男的にどう？」
ハサンの答えは、
「……そそられる」
「あ、じゃあ、行く行く！行ってきまぁす！」
ララは飛び跳ねるように、アレサンドロの後を追った。
「やれやれ、山に放たれた美女を追い回すというのであれば、まだやる気も起きるのだがな」
けしからぬことを口走りつつハサンも続き、怪我人のユウと焚き火だけが、その場に残された。

「……なにが、そそられるだ」
ユウは足を引き引き、焚き火に枝を継ぐと、馬車を見守りつつ、すぐそばの清流へ釣り糸を垂れた。
ヒッポにえぐられた左足の傷は、じっとしている分には、どうということはない。
むしろ冷えからか、痛みよりも重みの方が強かった。
清い流れには魚影がたゆたい、針葉樹のヤニのにおいは、ユウに、家族と暮らしたかつての家を思い出させた。

「……ッ」

まただ。
家族との記憶をたどろうとすると、決まって頭痛が起こる。
ユウからすべてを奪ったあの貴族の顔は、昨日のことのように思い出せるというのに、だ。
「……くそ」
ユウはそれが、なによりもつらく、憎かった。
そして。
思い出すと言えば、あのN・Sの記憶だが、ユウはまだ、アレサンドロに伝えていない。
N・S同士の戦闘では死ななかったにせよ、カラスが今も生きているという証拠は、結局どこにもないのである。
即席の釣竿の鼻先をからかうように跳ねた魚が、水面を走った棒手裏剣に貫かれ、ユウの足下へ刺さった。
驚き、顔を上げると、対岸にジョーブレイカーが立っていた。

「すごいな」
言うユウの目の前で、ジョーブレイカーは、怪我人とは思えぬ身軽さで、川を飛び越えた。
「ジョーに、食糧を買ってきてもらえばよかった」

苦笑したユウは針を引き上げ、餌のミミズがすでに食われているのに、また苦笑した。

ジョーブレイカーは、町へ斥候に出ていたのである。

「みんな、食べ物を探しに行ってる」

「うむ」

「鉄機兵団の様子は？」

「月の聖石が、帝都へ移される」

「え……何故」

ユウは不思議に思った。

北部アルデン領トーエンに建つ、メーテル大神殿。その聖堂に収められた『月の聖石』は、その名の通り、月からもたらされたとされる巨石である。

月女神の神徒にとっては信仰の対象でもあり、帝都とはいえ、むやみに移動していいものではない。

しかも、

「聖石の正体は光鉄（光石の成分を多量に含む合金）だ。良質の武器を鍛えることができる」

こう聞かされては、ユウも、声を荒げずにはいられなかった。

「馬鹿な！神の石だぞ！」

「……シュワブのＬ・Ｊを持つ一団が、大祭主をかどわかした……」

「だからなんだ！シュワブが聖石を狙っているとでも言うのか！だから先手を打って、この国が破壊するのか！横暴だ！無茶苦茶だ！」

覆面の下で、ジョーブレイカーがため息をついたようだ。

「大体……！」

と、尚もユウが続けようとするのへ、

「……そう、思わせようという男がいる」

「……え？」

「その男は聖石を手に入れるため、ヒッポにディアナ大祭主をさらわせた。シュワブのＬ・Ｊを与え、あげく、ヒッポを殺させたのも、奴だ」

「それは？」
「将軍、セロ・クラウディウス」
ユウは、その名をカジャディールの病床で耳にしていた。
ディアナ大祭主捜索に、名を連ねていた将軍である。
「今回も、表向きはシュワブの手から聖石を護るための移動だ。しかし……奴は必ず、次の一手を打つ」
そう。聖石を、武器に変えるための一手。
水面を見つめるジョーブレイカーの目が、ぎらりと光り、

「ディアナ大祭主暗殺」

ユウは息を呑んだ。
確かに、それがもし、シュワブに関わる者の手でおこなわれれば、メーテル神殿の気勢は一気に戦争へ傾く。
「それだけは阻止せねばならん」
「当たり前だ。聖石も、大祭主様もお護りする！」
「だったら、足がいるだろ？」
「！」
瞬時に、棒手裏剣が声の方角へ投げ打たれた。
突き立ったのは木の幹。その後ろから、恐れ気もなく現れたのは女である。
長身の女は、挑発的に髪をかき上げ、
「野蛮だね」
棒手裏剣を引き抜くと、ジョーブレイカーへ投げ返した。
セレン・ノーノだった。

「誰だ……！」
言うまでもなく、ユウとセレンは初対面である。
ベストの上から白衣を羽織り、ズボンとブーツという、いわゆる男装のセレンには、怪しげなものしか感じない。

しかし、対するセレンは、こちらにまったく興味を感じないかのように周囲を見回し、
「ララは？」
と、言った。
「鉄機兵団か」
「違うよ」
「なら……」
何者だ、と、問おうとした声を遮ったのは、
「あ！うっそぉ！」
日暮れ前にと山を降りた、ララ本人だった。
アレサンドロとハサンの様子を見ると、結局、大した収穫はなかったらしい。
ララは砂利に足を取られながら河原を駆け、セレンへ抱きついた。
「なになに、どうしたの？なんでセレンがここにいるわけ？」
「さあ、なんでだろうね」
「アハハッ！相変わらずぅ」
仲よさ気な雰囲気に、男たちはすっかり置いてけぼりだ。
「さあ、行こうか」
「え、どこに？」
「ついてくればわかるよ。行こう」
と、セレンはララの腕を引き、どんどん川下へ歩いていってしまった。
「え、お、おい！……誰だ？あの女」
「さあ、わからない」
とにかく、とユウたちも、馬車の手綱を取り、後を追った。

川幅が十数メートルに広がり、河原の石も、細かに丸みを帯びる場所まで下ってきた一行は、
「う、ぉぉ……！」
唖然とした。

夕日を浴び、赤く染まった岸壁に挟まるように、超巨大戦車が視界を埋め尽くしている。
「わ！すごぉい！なにこれ！」
「マンムート」
「へぇぇ、鉄の城って感じ」
「いいね、それ」
セレンはララの頭をなで、キャタピラに支えられた、マンムートの腹の下へ入っていった。
ヘビィカーゴ・マンムートには、後部にＬ・Ｊとコンテナの搬入用ハッチ、前方と中央の底部二箇所に人間用ハッチがある。
五、六メートル頭上にある、車底部から降ろされたスロープ式の入口を上がり、ユウたちが案内されたのは、清潔感のある食堂だった。
「あ、い、いらっしゃいませ！」
そこにはすでに、メアリー・ミラーが待っていた。
「あれ、メイも一緒？」
「お久しぶりです、シュトラウス機兵長」
「だから、ララでいいっての」
「そ、そうでした」
長机を囲むように座ったユウたちの前に、茶と、菓子が並んだ。
「さて、と……、じゃあララ、紹介して」
「え！あたしが？」
「どっちも知ってるのはララだけだろ？それぞれが自己紹介なんて面倒だよ」
「うぅん、じゃあ……」
と、茶をひと口すすったララは、名に簡単な説明を沿え、全員を紹介した。
いちいち会釈をするメイに対し、セレンは時折、
「ふぅん」

などと言うばかりで、反応が淡白だ。
モチを見ても、
「ふぅん」
だった。
「ね、それで？セレンはなんでここにいるわけ？」
「逃亡ほう助だってさ」
「リドラー将軍が研究所に来て、逮捕するって言い出したんです。それで……」
「逃げたわけ？やるぅ」
「はぁ。で、これからは皆さんと一緒に行かせてもらいたいなぁ、と、思うんですけど……」
と、メイが、おどおど、上目遣いに見る。
全員の視線が、アレサンドロに向いた。
「俺が決めるのかよ」
「だって、リーダーでしょ？」
いっせいに、うなずかれ、
「ハ、リーダーね……」
アレサンドロは困り顔に笑い、頭をかいた。
「じゃあ聞くが、あんたらが信用できるって証拠は？」
「そ、それは……その……」
「あるわけがあるまい」
「別に、あんたには聞いてねえぜ、オッサン」
「では、お前は私を信用しているか？そこのジョーブレイカー君を信用しているか？だとすれば、いつ、何故、それに至った」
「……」
「わかっているのだろう？リーダー君。逃亡生活に必要なのは、信頼関係ではなく、利害関係だ。お友達より、役に立つ人間だ。その点、彼女らは……ンンン、合格。申し分ない」
「……そらみろ。結局、オッサンが決めちまったじゃねえか」
一同失笑である。

「だが、これだけは言っとくぜ。俺らと来るってことは、もう後戻りはできねえってことだ。家族にも、前の仲間にも会えねえ。その辺わかってんだな？」
「わ、わかってます、はい！」
「なら、好きにしな」
「あ、ありがとうございます！よかったですね、セレン様！」
「そうだね」
「……花が増えたな。面白くなりそうだ」
してやったりと右目を細めたハサンが、ユウに耳打ちした。

「ところで、それどころじゃないんだろ？」
セレンに言われ、
「そうだ、それどころじゃない！」
ユウは机を叩き、立ち上がった。
「どうした？」
一同は久しぶりの食事を平らげたところで、ふくれた腹を叩き、思い思いに食後を楽しんでいる。
ユウは、ジョーブレイカーから聞いた話を語り、
「助けたいんだ。力を貸してくれ」
切々と訴えた。
まず言葉を発したのは、自身も月の神徒であるハサンだった。
「月の聖石を、な……」
と、幾度か煙草の煙を吐き出し、
「どうだ？リーダー君」
「……石はともかく、その将軍のやり口は気にいらねえな」
「フフン」
「ユウ、力を貸せっても、一体どうするつもりだ？」
ユウは、全員の顔を見回し、口を開いた。

「……輸送路を狙って、月の聖石を、奪う」

「ンッフフ、これは大物になった。神が泣くぞ」
ハサンは、ひざを打って喜んだ。
「……探りは、私が入れよう」
言ったのは、柱に背を預けた、ジョーブレイカーだ。
「トーエンからの輸送手段、日時、予定路。二日あれば調べられる」
「連絡手段は？」
セレンが問うと、
「無線機を携帯している」
「なら、マンムートで受けるよ。後で合わせよう」
これで、話は決まった。
「ジョーは先発。俺たちは、明日の朝イチで北に向かう。詳しいことは連絡待ちだ。じっくり煮詰めていこうぜ」
この日は、これで解散となった。

告白

「好きに使ってください」
マンムート最上層の居住区へユウたちを案内してきたメイが、誇らしげに言った。
有事には兵士だけでなく、メカニックやクルー、総勢数十人規模で乗り組む戦車だ。それと同じだけの部屋が、ここには用意されている。
ずらりと並んだ扉の中から、ユウたちは各々、好きな場所を選び、陣取った。
そして……。
「アレサンドロ。俺だ」
ユウがその部屋を訪れたのは、まだ、深夜までは間がある時間帯だった。
「おう」
スライド式のドアを開けたアレサンドロは、コートもブーツも脱ぎ、くつろげた襟元から、褐色の胸板がのぞいている。
「なんだ？」
「ああ、さっきは……」
「わがまま言って、すまない……か？」
「ん……」
「ハ、まあ入れよ」
ユウは従った。

この居住区では、部屋の作りはどこも同じだ。
奥行きのある長細い部屋の右側にベッド。左側に机と椅子。収納は壁の中で、奥に、はめ殺しの小さなペアガラス窓がひとつある。
洗面、風呂、トイレは共用だ。
そのどれもこれもが金属製で、正直、ユウには居心地がいいとは

言えなかった。
ハサンが、豪華な指揮官室を選んだ気持ちがよくわかる。
ユウはベッドへ腰を下ろし、改めて、そう思った。

「そんなに、気ぃ使うなよ」
椅子の背もたれを、抱くようにして座ったアレサンドロが、切り出した。
「他の連中はどうだか知らねえが、少なくとも俺は、嫌々付き合うわけじゃねえ。嬉しいぜ？相棒が、腹割って話してくれんのはよ」
「……プ、ハハ」
「ん？……ああ、そうか、俺が言えることじゃねえよな」
気恥ずかしげに、アレサンドロも苦笑した。
「でもよ、俺はあのとき、お前に全部ぶちまけて、よかったと思ってる。でなきゃ今頃……俺はまだ酒場の片隅で、くだを巻いてた。こいつを肴にしてな」
と、指輪を見つめる目は、やはり哀しい。
「なあ、ユウ……」
「ん……？」
「ロストンから、ずっと考えてる。俺は、Ｎ・Ｓでなにがしてえのか。なにをすりゃあ満足なのか」
「……ああ」
「まだ……わからねえ」
アレサンドロは、腕に顔を埋めた。
医者としての道に充実感を抱き始めている自分と、鉄機兵団への恨みを捨てきれない自分。
さらに、自ら背負いこんでしまった、リーダーとしての自分。
その葛藤は、むしろロストンでいだいていた以上に、大きく、深く、ふくらんでいるのかもしれない。
「ハ……、どいつもこいつも、勝手なもんだぜ」
「……」

「一緒に行きてえ、お前がリーダーだ、なんて、簡単に言ってくれるがよ、俺はまだ、なにも決められちゃいねえんだ。行き当たりばったりで……ただ、逃げてただけだ」

それが帝国からなのか、結論からなのかは、ユウにはわからない。だが、アレサンドロの問題だからと、今まで共に悩もうとしなかった自分を、恥じた。

「でもよ……今回の騒ぎで、俺はなにか、つかめそうな気がしてる」

「そう、なのか？」

「ああ」

顔を上げたアレサンドロは、笑っている。

「少なくとも、帝国の邪魔はできる。それだけでも、やる価値はあるだろうぜ」

「……そうか」

「だから、気にすんな」

ユウは、小さくうなずいた。

「アレサンドロ」

「うん？」

「俺にできることなら、なんでもする。遠慮しないで言ってくれ」

「……ああ、頼りにしてるぜ」

嫌味のない言葉だった。

「そういやお前、とうとう神官になれたってな」

「准神官だ」

「ハ、別に茶化しやしねえさ。よかったじゃねえか、親父さんも喜ぶぜ？」

「……だと、いいな」

神殿に詳しくないアレサンドロは、クローゼのように、世襲云々などとは言わない。

窃盗や盗掘に身をおとしめていたユウだ。家族とは、まともな死に別れをしていないだろうと、おもんぱかってのことかもしれない

が、どちらにせよ、ユウにとってはありがたいことだった。
過去の話は、どうしても暗くなる。
「じゃあ」
「ああ、お疲れさん」
ユウは、アレサンドロの部屋を後にした。

もう少し、辺りを回ってこようか。
そう思い立ったユウは、通路を戻り、各居住セクションへの分岐点が集合する中央ホールまで戻った。
ふと視線を移すと、背の高い観葉植物の向こう、展望窓から外を望めるよう設置された長椅子に、ララが、背を向けて腰かけている。
以前ならば、わずらわしさから、そっと逃げているところだが、
「ララ」
ユウは声をかけた。
そうするほどに、ララに対する印象は変化している。
だが、振り向いたララは、機嫌が悪かった。
「どこ行ってたの」
と、発する声にも、どこかトゲがある。
「アレサンドロのところだ」
「ふぅん」
ララは立ち上がり、
「ちょっと付き合って」
振り返りもせずに、階段を下りていってしまった。

ユウの気分は、またか、である。
また、なにか気に障ることをしてしまったらしい。
この上、さらにヘソを曲げられてはたまらない。ユウはため息をはき、急いで後を追った。
ララが向かった先は、屋外であった。

「寒ぅ……」
夜間の、それも山中ともなれば、外気温は氷点下に近い。
ハッチを降りたララは、肩をすくめ、身を震わせた。
だがそのおかげで、天上の星は、まるでスパンコールだ。
ララはユウに背を向けたまま、
「ねぇ、ユウ」
寒風にさらされた、自身の腕をさすった。

「好きなの？」
「え……？」
「だから……その、ディアナって子のこと、好きなの？」
ユウは脱力した。
「どうしてそうなるんだ」
「だって！助けたいって、なんかムキになってるし……あのときだって、勝手に、クローゼと行っちゃうし……」
「大祭主様だぞ？助けたいのが当たり前だ。好きとか嫌いとか、そういう見方をするのは失礼だ」
「だってぇ……」
「だってじゃない。もう、いい加減にしてくれ」
「あ！ま、待ってよぉ！」
ララは、戻ろうとしたユウの腕に取りすがった。
「だったら、ユウは……！」
「……？」
「ユウは、あたしのこと……」
皆まで聞かず、ユウは、ララを冷たい土の上へ押し倒した。

「ユウって……意外に大胆」
腕の中で声を潤ませたララが、目蓋を閉じ、唇を差し出してくる。
「ユウ……ン」
なんとロマンティックな、星空の下でのファーストキス。

すっごい寒いけど、ステキ……。

「馬鹿、そんなんじゃない！」
ユウは地面に転がった、細い、笹の葉状の金属片を取り上げ、その手へさわらせた。
「なにこれ、ナイフ……？」
「今、飛んできた」
「うっそ……！」
「嘘じゃない」
投げ放たれ、倒れたこんだふたりの脇を通過し、マンムートの装甲で跳ね返された、その一部始終の音を、ユウは、はっきりと聞いている。
「あいつらが使ってたのと、同じ形だ」
「あ、あいつらって……」
「バイパーだ」
ララの小さな身体が、強張った。
「逃げなきゃ……！」
「ああ。ララは先に行って、みんなに知らせてくれ。俺は……」
「バカ！格好つけてる場合じゃないって！」
ララが心配するのももっともだ。ユウは太刀を、部屋へ置いてきてしまった。
「いいから行け。行って、ハッチを閉めろ！」

「……バカ！」
背中を押されたララが、ハッチへと走る。
外壁がロックされると、唯一の光源を失った闇が、息詰まるような重苦しさでユウを包みこんだ。

そよりとも風が動かない。
闇の中で、川音だけが絶え間なく耳へ流れこんでくる。
……妙だな。
キャタピラを背にうずくまったユウは、思った。
バイパーたちは当然、ララを逃がすまいと行動を起こす。そう思っていたのだ。
だが、ユウの周囲には今、そのような気配は微塵も感じられない。
と……。
ひょう、と風が鳴り、とっさに身をかがめたユウの頭上で、キャタピラに弾かれた刃が火花を散らした。
さらに右から。
続いて左から。
風鳴りを頼りにかわすうち、ユウは、ここでも違和感を覚えた。
相手がひとりであることもそうだが、なにより、あの男たちに比べ、明らかに技量が劣っている。
先ほど拾ったナイフだけでも、十分対処できそうだ。
「……よし」
ユウは手のひらでナイフの握りを確かめ、慣れ始めた目と耳を、刺客に集中させた。

そこからは、殴り合い同然に行き来する、互いの刃。
元々、太刀よりもナイフの方が手に馴染んでいるせいもあるのだろう。情勢は次第に、ユウへと傾いていく。
その場を、ほとんど動かずに刃を交えていたふたりが、一瞬距離を取った、そのとき。

マンムートの前照灯が点灯した。
狙ってやったことなのか。ユウは丁度、マンムートを背にしており、強烈な光は真正面から刺客を照らし出す。
刺客は顔をそむけ、二、三歩後ずさった。

「女……？」

女性らしい、丸みのあるボディラインが浮き出た、紺のラバースーツ。双剣は手に握るのではなく、手の甲に固定されていたようだ。
松葉色も美しい、内巻きにしたミディアムヘアや、ぽってりとした唇の、磁器人形のような顔立ちは、とても暗殺者のものとも思えなかったが、うろたえる様子もなくユウを見返したその瞳は、あのヒッポのドラゴンを思い起こさせる、無機質で無感情な、まるでガラス玉に見えた。
そうしてしばし、ユウとにらみ合った娘は、静かに後退すると、一散、川の上流へ逃げ出した。

「あ……！」

と、思ったが、ここは追いかけるべきではない。
ユウは、ほ、と息をつく。
そこへ。
後部ハッチから飛び出し、マンムートを飛び越えたサンセットが、ズン、とユウの目の前に着地した。
大地が振動し、眠っていた鳥たちが、いっせいに空へ飛び立った。
『大丈夫？あいつらは？』
鼻息も荒く、ララが言う。
「馬鹿！お前の足の下だ！」
『えぇ？』
「早く足をどけろ！」
叫んだところへ、アレサンドロとハサンが駆けつけてきた。

「ユウ！怪我はねえか！」
「ああ」
「バイパーは？逃げちまったか？」
「いや……」
ユウは、サンセットの足元を指差す。
「……おいおい、マジかよ」
「それに、前の奴らじゃなかった。ひとりだ。若い、女だった」
『うっそ！』
「おお、もったいない」
またしてもけしからぬことを口走ったハサンを、コクピットのララは、にらみつけた。
『とにかく、あ、あたしのせいじゃないからね！こいつが悪いんだから！』
「ああ、わかってる。だから早く足を動かせ」
「賛成だ」
ハサンは誰よりも先に、サンセットの足元へかがみこんだ。
『うぅ、あんまり見たくないかも……』
モニターから目をそらしつつ、ララはサンセットの足を浮かせ、そっと、その場から動かした。

……娘は、岩場に埋まるように倒れている。

近づきかけたユウを制し、
「フフン」
ハサンが、ステッキをコツコツ鳴らした。
「お嬢さん。その身体で、何人の男をたぶらかした？」
すると、うつ伏せになったその腕に、ぐ、と力がこもり、
「そんな……馬鹿な……！」
なんと、娘が立ち上がったのである。

外見的には、怪我ひとつ、骨折ひとつ見られない。
L・Jの中でも重量級のサンセットだ。折れた双剣をぶら下げた表情のない娘は、運がいいのひと言で片づけられる域を超えている。
「これは、可愛らしいお人形さんだ」
ハサンは、ちろり、舌なめずりした。
「名は？」
「……シュナイデ」
「悪くない。次は邪魔のいないところで、しっぽりといきたいものだな」
シュナイデは首をかしげた。
「行くがいい」
「ハサン！」
「我々も彼女も、決め手に欠ける。ここは仕切り直しだ。なぁ？シュナイデ」
やはり、なにを言っているのかわからない。そう言いたげな様子のシュナイデだったが、素人同然に背を見せ、上流へと走り去っていった。

『ねぇ……あいつ、どうなってるわけ？』
「さあな。人間じゃねえ。それだけだ」
「……魔人、でも、ない」
「ああ。魔人は、基本的に人間と変わりねえ。こんなのに踏まれりゃあ、さすがに死んじまう」
『なぁんだ。だったら、もっと踏み潰してやればよかった』
以前、バイパーとの戦いで九死に一生を得たときとは大違いの態度に、ユウとアレサンドロは顔を見合わせ、苦笑した。
「まあ、なにを言っても今更だ。戻ろうぜ。すぐ出発する」
「ああ」
と、アレサンドロに続いて、ユウもきびすを返した。
「痛ッ……ぅ！」

『ユウ！』
「ユウ？どうした！」
突然の激痛に、よろめき倒れたユウを、アレサンドロが抱き上げる。
……そうだった。
「足のこと……忘れてた」
「なに？おいおい、驚かせてくれるなよ」
『あ、ハイハイ！あたしが運んであげる！』
「結構だ。……う、うわっ！」
サンセットにつまみ上げられたユウの叫び声が、夜の森へ響き渡る中、ハサンはひとり、
「アイアン・メイデン……。ンンン、結構結構」
悦に入っていた。

頭痛のたね

明かりの消えた中央ホール。その観葉植物の陰で、なにかが動いている。

急な出発にともない、狩りを中断させられたモチが、止まり木の上で、与えられた牛の生肉をつついているのだ。

と……。

一心不乱に肉をついばんでいたくちばしが、ぴたり、と止まり、モチが、野生の目つきで、通路のひとつをにらみつけた。

「……アレサンドロ」

「ハ、さすが大したもんだな。この状態で見えんのか」

アレサンドロは、どこかおぼつかない足取りで、脇のベンチに腰を下ろした。

その手には、どこからくすねてきたのか、ウイスキーの瓶が握られている。

「ああ、気にしねえで、食ってくれ」

「フム……では、そうさせてもらいます」

モチは再び、肉との格闘を始めた。

薄ぼんやりとした非常灯の下、それからしばらくは、肉を裂く音、酒を飲み下す音が、回転するキャタピラの轟音に紛れ、聞こえるだけだった。

「なんでだ……？」

「ホ？」

「なんでバイパーは、俺たちがアシビエムを通ることを知ってた？なんで、あの山奥にいることがわかった？」

「……ホウ」

そういうことか、と、モチは、くちばしにこびりついた肉脂を、腹羽でぬぐう。

「もう偶然とは言えねえ。つけてやがるのか……、それとも……」
「内通者、ですか」
アレサンドロは激しく舌打ちし、酒をあおった。

「疑いたくはねえが、あいつは……知りすぎてる。バイパーのことも、あの女のことも」
「ですが、狡猾なあの男としては、少々、手口がお粗末では？」
「……」
「もし仮に、あの男がそうならば、おそらく我々の誰からも、毛筋ほどの疑いも持たれないよう、してのけるでしょう」
「だから、その裏をかいてるのかもしれねえ」
「フム、あえてそう思わせることで、追及を逃れようと考えている。確かに否定はできませんが……」
「が……なんだ？」
「あれは、目的のない行動はとらない男です。そして、その達成のために、人の手を借りる男ではない」
「俺たちを殺すつもりなら、自分の手を汚す……」
「私は、そう見ました」
アレサンドロの口から、太い、ため息がもれた。
「だったら……どうしてこう、タイミングよく俺たちを襲える？」
「さ、憶測の域を出ませんが……監視されていることは確かでしょう。なんにせよ、これより先は、監視も内通者も無意味です。この乱暴な乗り物は、嫌でも目立ちます」
「考えるだけ無駄、ってか」
「そうは言いません。ただ、結論を急ぐことはないのです。真実はいずれ明らかになる。今は内ではなく、外を見ましょう」
「……ハ」
行くべき方向が見つからない。ユウにそう打ち明けたのは、つい数時間前のことである。
「耳が痛えな……」

アレサンドロは、味気ない金属の白天井へ、つぶやいた。
「……頭も痛え」

「ですから、アレサンドロ」
「ああ……？」
「仲間内の監視は、私が引き受けました」
「モチ……！そいつは……」
驚いた目の先で、ベンチの背もたれへと飛び移ったモチが、かぶりを振る。
「あなたの背中はふたりで守ろうと、ユウと誓い合いました。これも仕事の内です」
「汚れ役だぜ……？」
「なに、トイレ掃除のようなものでしょう」
「……ハ」
アレサンドロは笑った。
「便所掃除か……」
伸ばした指先で喉をくすぐると、モチは、うっとり目を閉じた。
「……その気持ちだけ、もらっとくぜ」
「ホウ」
「そんなことは、させられねえ」
「……なるほど」
「うん？」
「あなたは、ハサンをも信じたいわけですか」
アレサンドロは、酒瓶を持ち上げかけた手を止め、
「……そりゃあ、な」
苦笑をにじませた。

それから、二日後。
とにかくも北へ向かうユウたちの元へ、予定通り、先発のジョーブレイカーから無線連絡が入った。

『輸送は、ホーキンス軍が担当する』

その報告に、ララとメイは顔を見合わせ、

「うわぁ……いきなり面倒臭さ、上がったかも」

「このマンムートじゃ、正直……大変そうですね」

がっくり、肩を落とす。

「ホーキンス軍てのは、そんなにヤバイのか」

アレサンドロが身を乗り出すと、無線の向こう、ジョーブレイカーが、

『問題は、移送手段だ』

答えた。

「回りくどい言い方はなしだぜ」

「戦艦だよ」

「戦、艦……！」

そう、と、ブリーフィングルームの長机に、指で拍子を打っていたセレンが、話を継いだ。

「高機動飛行戦艦『オルカーン』。ホーキンス軍にはそれがある」

帝国所有の飛行戦艦は三隻。使用される頻度も少なく、離着陸にはそれなりの施設を必要とするため、帝都民はともかくとしても、他の領民がお目にかかることは滅多にない。

だが、それが鉄機兵団と並び、帝国軍の象徴的存在であることは、もちろん、ユウも知っていた。

確かに、安全かつ迅速な空輸は、聖石の輸送手段として最適。ユウたちにとっては最悪と言わざるを得ない。

「バイパー、美しい暗殺者ときて、お次は戦艦か。ンンン、面白くなってきた」

「おい、笑いごとじゃねえぜ。飛んでるもんをどうやって襲う？ユウとモチにまかせんのか？」

すると、
「あ！ほ、補給です！補給ですよ！」
メイが、突然立ち上がった。
「……あ、す、すみません、でしゃばりました……」
「いいよ。説明して」
「は、はい！セレン様！」
セレンを神と呼んで、はばからないメイは、鼻息を荒くした。
「ええと、空中戦艦の浮遊システムは、光炉で動いています。でも前進するためには、推進剤が必要なんです。移動速度にもよりますけど、トーエンから帝都までなら……」
と、指を折り、
「最低でも一回は、補給が必要なはずです！」
「ジョー。その補給場所はつかめてるのか？」
ユウが問うと、
『……トラマルだ』
場に、ため息が広がった。

今でこそ鉄機兵団の軍事基地だが、トラマル城塞は、かつての魔人砦だ。
山岳地帯にあり、容易に近づけないところから、地元の人間は難攻不落を言い表す際に、トラマル、などと言ったりする。
「もうひたすら、お前らに楽させるかって感じ」
ララが、ぶつくさと言った。
「だが、やるしかねえ。そこしか攻め手はねえんだ。……ジョー、戦艦のトラマル到着は？」
『一週間後。補給に二日だ』
「間に合うか？」
「問題なし」
セレンが片眉を上げる。
「確か、トラマルの近くに、でかい町があったな。ジョー、そこで

合流だ。砦の見取り図が手に入るようなら、それも頼む」
『承知した』
通信は、そこで切れた。

「さ、て……」
アレサンドロは向き直り、
「こんなもんでいいか？」
「ん、すまない。全部まかせて」
ユウは頭をかいた。
本来、指揮を取るべきは誰か。
わかっているのだが、こうしたことは、どうも不慣れだ。
情けなくも、アレサンドロがここまで段取りをつけてくれたのは、ありがたかった。
「後は、どうやって盗むか、どこに隠すか、だな」
「ああ」
だが、それについてもまだ、これといった、いい手を思いついていない。
「盗む方法は、トラマルの下調べをしないと……なんとも言えない」
まずは城塞へ忍びこめなければ、話にならないのだ。
さらにその上、直径五メートルの巨石を運ぶ手段。逃げる段取り。
アレサンドロの言う通り、盗んだ聖石の隠し場所。
頭を悩ませるべきことは、山ほどある。
大先輩ハサンへ目をやるも、
「フフン」
小馬鹿にした笑みを返されるのみだ。
「まあ、これから、ひとつひとつ詰めていこうぜ。全員で考えりゃあ、なんとかなるさ」

そのときだった。
ピピピ、と、セレンの手元で、電子音が鳴ったのだ。

「セレン様……！」
「うん」
顔色を変えたメイが、部屋を走り出ていく。
「なんだ？」
「鉄機兵団だよ」
「なに？」
動揺したアレサンドロの指がかすり、コーヒーカップが倒れた。

反目

そこから、十数キロを隔てた地点。
平原を押し進むマンムートへ向け、鉄機兵団のＬ・Ｊ部隊が、まさに進軍中であった。
風をはらみ、勇壮に立つ軍旗。そして、Ｌ・Ｊの肩にほどこされたペイントは、黄と青の二種類。
ギュンター・ヴァイゲル、マリア・レオーネ・リドラーの両軍である。

その隊列の中ほどを併走する、二台の大型装甲車の間に渡された高架橋を、今、相変わらず苛立たしげな様子のマリア・レオーネと、紋章官ササ・メスが渡り始めていた。

「何故、私が出向かねばならないのだ」
と、突如吹きつけた強風にあおられ、バランスを崩したマリア・レオーネの腕を、ササ・メスがつかむ。
「放せ！」
ササ・メスは一歩退いた。
「わかっているのか。貴様がだらしないばかりに、私までが舐められる！」
「……」
「くそ……陛下はなにをお考えなのだ。よりによって、ギュンターとなど……」
「リドラー将軍」
「！」
「お言葉は、慎重に選ばれるべきかと」
「……サリエリ」
いつの間に現れたものか。

ヴァイゲル軍装甲車側のハッチに、冷ややかな目をした、ヴィットリオ・サリエリ紋章官が立っている。
「……貴公に意見される覚えはない。身分をわきまえよ」
しかし、サリエリは表情も変えずにそれを聞き流し、
「ご案内いたします」
ハッチの内へと、姿を消した。
「おのれ……無礼な」
マリア・レオーネは風にふくらんだマントを押さえこみ、ボンヤリとも取れるササ・メスの無表情を、にらみつけた。

この装甲車、文字通り装甲に鎧われてはいるが、マンムートのような戦闘能力はない。ただの指揮官車である。
その欠点を補うべく開発を急がれたのが、かつてユウたちの戦ったカニ、試作一三〇〇式ということになるが、支給されるのは、まだ当分先のことだろう。いまだ、カニ型、というのに嫌悪感を示す騎士も少なくない。
南国シュワブに遅れを取る最大の要因は、この『古き良き騎士道』なのである。

さて。
サリエリを先頭にした三人は、階段を下り、正面の頑丈な鉄扉をくぐった。
司令室のメインシートに、どっかりと腰かけたギュンターは、立ち上がりもせずにマリア・レオーネを迎えた。
「……偉くなったものだな、ギュンター・ヴァイゲル」
「んな嫌味を言うために来たわけじゃねぇだろうが」
ギュンターは顎をしゃくり、脇の椅子を指し示す。
そのぞんざいな態度は、さらに、マリア・レオーネを苛立たせた。
「で？」
「で、だと？貴公、ふざけるのも大概にしろ！先ほどの通信、あれ

は、なんだ！」
　叩かれた机の上で、地図が跳ねる。
「なんだもなにもねぇ。あいつらは俺の獲物だ。二度も言わせんな」
「私は正式な令状を授けられているのだぞ！」
「知るか」
「なっ……！」
「魔人のポンコツと、シュトラウスをまかされたのは俺だ。そうだな、サリエリ」
　サリエリは、いんぎんにうなずいた。
「俺たちが全部片づけてやるって言ってんだ。その後で、その……なんたら言う女の死体でも探しゃいい」
「セレン・ノーノは捕縛せよとのご命令だ」
「なら、死なねぇように祈ってろ」
「く、ぅぅ……ッ！」
　話もなにも、あったものではない。
「サリエリ！これは貴公の入れ知恵か！」
　すると矛先を向けられたサリエリは、
「フ……入れ知恵とは、また……」
　珍しく笑った。
「お仕えする将軍閣下が望まれる形での速やかなる任務遂行のため、知恵をお貸しするのが紋章官と心得ておりましたが……それを入れ知恵と申される。では、こうされてはいかがでしょう」
　つらつらと、おのれの正義に一片の疑いもなし、とばかりに並べ立てるサリエリの指に押し上げられ、銀縁眼鏡が、きらりと光った。
「先陣はリドラー軍。その間、我が軍は後方支援に徹しましょう」
「ふむ……」
「応戦のため、シュトラウス、Ｎ・Ｓが現れたところで……」
「貴公らはそちらへ回る。我々は、あの戦車を制圧する、というわけだな」

「おっしゃる通りです」
「その提案、もっと早い段階で聞きたかった」
マリア・レオーネは、いくばくか納得の面持ちを見せた。
「いいだろう。その提案、受けよう」
「は」
「そうと決まれば、我らはこれで失礼する。おそらく、連中のレーダーはすでに我々を捉えているだろうからな」
これに驚いたのはギュンターだ。
「冗談じゃねぇ！こっちはまだ、なにも映っちゃいねぇんだぞ！」
「おや、あの戦車に関する仕様書は、ササ・メスに届けさせたはずだがな」
「あぁ？」
「もっとも、あちらはセレン・ノーノの最新鋭戦車だ。伝えられずとも、性能はおのずとわかろうというものだが……」
「テ、メェ……！」
拳を握りしめるギュンターを鼻で笑ったマリア・レオーネは、悠然とマントをひるがえし、装甲車を後にした。

「チィッ……あのアマ！わざと黙ってやがった！」
ギュンターの手元で、再び地図が跳ねた。
敵の索敵能力は、生死に関わる重要事項だ。下手をすれば、のこのこと罠へ踏みこんでしまうこともあり得るのである。
それを黙っていたとは、かなり、たちが悪い。
「サリエリ！手柄なんざ、くれてやるこたぁねぇ！構わねぇ、ぶっこむぞ！」
熱くなるギュンターに、サリエリは、
「なにを馬鹿な」
小さな、ため息をもらした。
「リドラー将軍のおっしゃる通り、こちらを上回るレーダーなど予想の範囲内。そもそも、先陣を引き受けてくださるとおっしゃるの

です。罠にかかるとすれば、あちらかと」
「う……そ、そりゃあ……ってか！わかってんなら、なんで俺に黙ってやがった！」
「先陣はリドラー軍。すでに、そのプロットはできておりましたので」
「……あぁ？」
ギュンターは、眉間のしわを深くした。
「無駄な情報に心砕かれる必要はありません。ギュンター様は、ただ敵を粉砕することのみを考えてくだされればよろしいのです」
「……」
「とにかく、ご懸念には及びません。ララ・シュトラウスと黒いＮ・Ｓ。必ずや、御前へ」
「……チッ、けたくそ悪ぃ」
革張りの椅子をのけぞらせ、ギュンターは、机上へ足を投げ出した。
「リドラー軍、先行します！」
モニターをにらむオペレーターが、そう告げた。

策動・出撃

「工作部隊は出ているな」
「はっ！」
「作戦開始を伝えよ」
自軍装甲車司令室へ戻ったマリア・レオーネは、大型モニターに表示された周辺マップを眺め、指示を飛ばした。
めまぐるしく変化するその画面上では、お手並み拝見とばかりに、黄色のマーキングが、青の背後へ回っていく。
「サリエリめ。上手く操ったつもりだろうが、そうはいかん」
マリア・レオーネは眉間にしわを寄せ、腕を振りかざした。
「全機兵長へ電信！先陣は我が軍がつとめる！レーダーで捕捉次第、シミュレーション通り部隊を展開。足止め成功の後、両翼より包囲せよ」
ふたりの通信士の指が、素早く打電する。
「尚、敵Ｌ・Ｊ、及び、Ｎ・Ｓの抵抗も考えられる。工作部隊は足止め工作後、敵戦車Ｌ・Ｊハッチ開放を合図に先手を打て！ギュンター軍到着までに、勝負を決める！」

一方、その動きは、
「リ、リドラー軍、動き出しました！」
マンムートのレーダーでも捉えられていた。
「ヴァイゲル軍は……進行速度変わらず！後方支援のようです！」
と、メイはホッとしたように叫んだが、その後届いた無電に関しては、リドラー軍独自の暗号で組まれており、傍受はできたものの、ララでも解読できなかった。
これは、ギュンターやサリエリにしても同様で、マリア・レオーネはむしろ、彼らに作戦内容を知られることを警戒したと言える。

鋭く舌を打ったアレサンドロは身を乗り出し、
「振り切れるか？」
操縦席で舵を握るセレンに聞いた。
「無理」
「……はっきり言ってくれるぜ」

すると、律儀にもメイが右手を挙げ、
「あ、あの……もぐったら、どうでしょう」
と言う。
「もぐる……？」
「はい！このマンムートは、地中潜行が可能なんです！」
メイは、この手の話題でいつも見せる、『セレン様の発明はすごいのだ』という、誇りと尊敬に満ちた目の輝きをもって、アレサンドロを見返した。
しかし、そうした場合は大抵、
「モニターから目を離さない」
と、『セレン様』からお叱りがくるのが、メイの哀れで、可愛らしいところだ。
「山、検索」
「りょ、了解です」
少し、しょぼくれたメイの指が、キーボードの上を走り始めた。

この地中潜行。マンムートの前方に突き出した、双角を使う。
これ自体はレーダーの集合体なのだが、高速振動させることにより、分厚い岩盤をも砕く破壊力が得られるのである。
ただし、キャタピラの性能上、真下への潜行ができないのが難点で、ある程度の奥行きを持った壁面へぶつけ、地中を水平走行できる深さまで、徐々に深度を下げていく必要がある。
山を検索する、とは、それに適した壁を探す作業を意味するのだ。
「廃坑にヒットしました！」

サブモニターの地図に、赤い光点が表示された。
時間にすると、十分ほどの距離だろう。
「かなり大きな光石採掘所です。マンムートでも、途中までは掘削なしで入れる……と思います」

セレンは、どうする？という視線を、アレサンドロへ投げた。
アレサンドロは顎をさすり、
「奴らとは、やり合わなくても行けそうか？」
「ええと、この距離だと……難しい、ですね。五分後には、こちらの射程域に入ります」
「差し引き五分の逃げ戦、か……」
「それでいこう」
ユウは言った。
「俺が残って時間を稼ぐ。光石鉱に着いたら、先に行ってくれ。カラスなら、空からでも逃げられる」
「あ、じゃあ、あたしも！」
と、手を上げたのはララだ。
「ほら、ギュンターが狙ってるの、あたしだし」
ひと声うなったアレサンドロは、深刻な表情で頭をかいた。
「……オッサンの意見が聞きてえな」
ハサンは、フンと鼻を鳴らした。
「ならばひとつ」
「ああ」
「状況は常に動いている。風のごとく、弾丸のごとく」
言いつつ、空に指を走らせる。
「迷わんことだ。仲間の身を案ずるならば、尚更な」
アレサンドロの眉間に、しわが寄った。
「……なら、あんたにも出てもらうぜ」
「ああ結構。丁度、これを試したいと思っていたところだ」
ハサンは、コウモリの指輪をちらつかせた。

「よし。ユウとモチ、ララは残って、適当に連中をかき回せ。俺とハサンで戦車を守る。セレンと嬢ちゃんは、こいつをすぐに方向転換だ」

セレンとメイをブリッジに残し、五人が格納庫へ飛びこんだのは、それからどれほども経たないうちだった。

すでにマンムートは転進を開始し、窓から差しこむ低い日差しが、徐々に、照らす場所を変えている。

Ｎ・Ｓカラス、オオカミ、コウモリ、そして、Ｌ・Ｊサンセットの四体がそろった格納庫は、マンムートの最大搭載数を満たし、壮観のひと言であった。

その中で、唯一の不安要素といえば、ハサンとコウモリの適合だが、

『素晴らしい。右手が動く』

ハサンはご満悦の様子で、右の手指を動かしている。問題なく乗りこめたようだ。

Ｎ・Ｓは、乗り手の脳を機械の身体に移し変えたようなもので、ハサンのように、後天的に身体の一部を失った者であれば、脳はその動かし方を知っているわけだから、こうして元どおり、機能を取り戻すことができるのである。

本来は陽の光に弱いはずのモチが日盛りでも活動できる、というのも、Ｎ・Ｓによって補完されている一例だ。

『こうなると、ますます欲しくなる』

ハサンは言った。

『Ｎ・Ｓで盗みなんざ、できやしねえだろ』

『そうかな？仕事は道具にさせろというが、いかなる道具をいかにして使うか、それを考えるのはここだ』

コウモリの指が、こめかみをつつく。

『現に、Ｎ・Ｓでもって月の聖石を強奪しようという、勇気ある馬

鹿者もいる』
『なるほどな』
『ア、アレサンドロ！』
ララが、ケタケタと笑った。
と……そこへ。
『開けるよ』
ブリッジのセレンから声がかかった。ハッチは庫内、ブリッジ、どちらからでも開閉できるようになっている。
ハッチ横の黄色灯に灯が入り、外壁を持ち上げるモーターがいっせいに動き始めると、上下に順を追って開いていくハッチの隙間から、照り返した太陽の光と、冷たい風が飛びこんできた。

『きゃ！』
下から突き上げる衝撃と共に、マンムートが大きくかしいだのは、実にそのときである。
『なんだ！』
と言う間に、さらに断続的な爆発が起こり、マンムートはえぐられた地面に右キャタピラを脱輪させ、左のそれを空転させる格好となる。
ユウたち四体は、ななめになった床と壁の間へ滑り落ち、狭い空間に折り重なってしまった。
『痛ッ……なんなんだ、一体……』
ここで最も被害をこうむったのは、コウモリとサンセットの下敷きとなった、Ｎ・Ｓカラスだろう。
だが、マリア・レオーネの策は、これで終わりというわけではない。カラスが這い出てみると、カシカシという、金属の壁面を引っかく、奇妙な音がする。
顔を上げて、ユウは息を呑んだ。
開ききったままのハッチの角に鉤手がかかり、ぬっと現れた真紅のデュアルアイと目が合ったのだ。

『セレン！サソリ！』
ララが、ブリッジへ叫んだ。

一五〇一式。
工作・索敵用、超小型Ｌ・Ｊである。
ララの形容する通り、四対の脚部にクロー、反り上がった尾（作業用サブアーム）と、サソリによく似た形状をしている。
マンムートの進路に爆薬を仕掛け、走行を妨害したのがこれだということは、ユウたちの目にも明らかだった。
その、外壁を這い登ってきたらしい三メートル級のＬ・Ｊは、発光信号を交し合い、続々と、格納庫へ侵入してきた。

『セレン！』
『わかってる。でも、それどころじゃない』
『リドラー軍の索敵範囲に入ります！Ｌ・Ｊ、多数出撃！』
緊張した様子のメイの報告が、スピーカーから走る。
『くそっ！』
アレサンドロは壁を蹴りつけた。
『仕方ねえ！ユウ、ララ！本隊の足止めを頼む！深入りはすんな！手を出してこねえようなら、ヒヨコ頭は放っとけ！』
『わかった！』
『まっかせて！』
『モチ！引き上げのタイミングはお前が決めろ！俺とハサンは、こいつら片した後で、戦車を立て直す！』
『了解です』
バーニアを噴出したサンセットが、一五〇一式の群を蹴散らしつつマンムートを飛び出し、その後に、カラスが続く。
二体は、間近へ迫る土煙に向かい、疾走した。

『ララ』
『なに？』
『リドラー将軍のＬ・Ｊは、どんなのだ』
ホバージェットが舞い上げる粉塵を避け、カラスはサンセットの真上を飛ぶ。
『『アリオト』？うぅんと、青くてねぇ……』
『そうじゃない。ギュンター・ヴァイゲルのＬ・Ｊは火を噴いた。クローゼのは電気だった』
『ああ、うんうん』
ララは、今にも戦闘に入ろうというのに、まったくペースを乱さなかった。
その落ち着きが、ユウには腹立たしくもあり、うらやましくもある。
……生身でおびえてる方が、可愛げがあるな。
ふと、そんな馬鹿げた発想が頭をよぎり、ユウは、あわてて首を振った。
『どうしました？』
『いや……』
身体を共有するモチに悟られたかと思ったが、いらぬ心配だったようだ。
『それで？』
『うん、アリオトはね……』
サンセットのコクピットマイクから、紙をもむ、ガサガサした音がもれ聞こえた。
飴の包装紙を、剥いだらしい。
『アリオトは氷。見た感じ、ミザールに近いかなぁ』
『タンクがついてる？』
『うんうん、背中にね。冷却剤って言うの？』
どうやら、そこが突破口となりそうだ。
『ユウ』

『ああ、わかってる』
モチとユウ。同調したふたりの目が、おびただしい数のＬ・Ｊ部隊を、同時に捉えた。

戦闘に突入したカラスとサンセットは、苦戦した。
リドラー軍の主戦力は、陸戦用一〇〇系、四〇〇系。空戦用三〇〇系。
どれも型式は最新に近いが、オリジナル機であるサンセットと、N・Sカラスから比べれば、そこは、かなりの隔たりがある。
だが、そこが防衛戦の難しいところだ。
幅広く展開するL・Jの大群は、どれだけの力量差があろうと、さばききれるものではない。
『ともかくも、戦車を立て直すまでの辛抱です』
『ああ』
縦横無尽に天を駆け回るカラスの太刀が、迫る三〇六式の腰を分断した。

『ねぇ!』
と、ララが声を上げたのは、そんなときだ。
『これ、将軍狙った方がよくない?』
言いつつ、サンセットのスピナーは、容赦なく一一三式の腹をえぐっている。
八面六臂の大活躍とでも言おうか。上空から見るサンセットの後方は、L・Jの残骸が列となって積み重なり、まるで土嚢のようだ。
『絶対、その方が早いって!あっ、こら!』
大型シールドを振り回し、さらに数体のL・Jを土嚢の一部に加えたその隙を突き、敵の一団が悠々すり抜けていったが、それらはマンムートからの機銃掃射を受け、ことごとくが大破した。
『ナイッス!セレン!』
『うん』
通信口のセレンは落ち着いている。

『そっちはどう？アレサンドロたち、大丈夫？』
『たぶんね。格納庫が散々で、正直へこんでる』
『アハハッ！お気の毒！』
『本当にさ。……ああ、映ったよ』
『映った？』
『アリオトだ』

同時に、サンセットのコントロールパネルでも警告音が鳴った。
カメラの精度を上げると、メインモニターに、きらびやかなコバルトブルーの機体が映りこむ。
ミザールに似ている、と、ララは言ったが、確かにシルエットは近い。だが操縦者の質の違いか、『氷結のアリオト』は、より優雅に見える。
『なぁんだ、あっちから来てくれたんだ』
ララは、ぺろり、上唇を舐めた。

『ユーウー！あたし、行ってくる！』
上空のカラスへスピナーを振ってみせ、サンセットが動いた。
『あっ！待て！ララ！』
『大丈夫ぅ！』
『今は足止めだけだ！勝手をするな！……ララ！』
しかし、ユウの制止も効果なく、サンセットの大型スラスターに火が入る。
ドッと吹き出した陽炎と共に、赤い巨体は青い軍旗をなぎ倒し、敵陣奥深くまで突き進んでいってしまった。
『ララ！』
『……仕方ありません。我々も行きましょう』
『駄目だ。ここを離れるわけにはいかない』
『こうなってしまっては、抑えきれるものではありません』
『だからといって！』

『そう、だからといってです。だからといって、ララをひとり置いていけるものではない』
『……ッ！』
『行きましょう』
『……わかった。頼む』
『了解です』
モチの操る翼は、すぐさま風をつかんだ。
『急ぎましょう。どうもこの戦い、このまま終わるとは思えません』

……そんなモチの心配も知らず。
『貴公と剣を交えるのは、これが初めてだな。シュトラウス機兵長』
数分後。サンセットは、アリオトとの戦闘に突入した。
アリオトの武器は、片刃の細剣。いわゆるサーベルである。
その柄頭に接続したパイプを通してタンクから冷却剤が送られており、斬りつけた相手を瞬時に凍りつかせることができる。そんな代物だ。
まるで氷のように透き通って輝くそれを振りかぶり、
『次代の将軍候補であった貴公が裏切りとは、馬鹿げた真似をしたものだ！』
サンセットのシールドと噛み合った切っ先から、火花の代わりに、氷の粒が舞った。
『ギュンターの冷遇が原因ならば、私の元へ来ればよかった。私は、貴公を買っていた』
『冗ッ談！』
『冗談ではない。私は覚えているぞ。貴公が百機斬りを果たした、あの瞬間の高ぶりを！そうだ、あの百機目が、ギュンターであったのだったな！』

……そう。

ギュンターが、ララを目の敵にする理由が、ここにある。
その百機斬り後、配属の決まっていなかったララを自軍へと引き入れたのも、いつか決着をつけたい、どこか優位に立ちたいという想いが強くあったからに違いない。
そんなギュンターにとってララの逃亡は、一見、望むところのようにも見えるが、同時に勝ち逃げという、いたく自尊心を傷つける行為でもあった。
それが、現在の執着へとつながっているのである。
『勝つんじゃなかったぁ！』
『ハ、ハ！』
ふたりは、幾度目かの剣撃を交わし、飛び退いた。
サンセットのシールドとスピナーの柄には、今や厚い氷が張り、氷柱となって垂れ下がるまでになっていた。

『だがもう遅い。皇帝陛下の剣たる、我ら聖鉄機兵団に背いたこと、このアリオトをもって後悔させてやろう！』
『上ッ等ぉぉ！』
ララの叫びは、そのままバーニアの咆哮となり、サンセットとアリオトが、真正面から衝突した。
吹き飛ばされたのは体格で劣るアリオト。……かと思われたが、
『甘い！』
サーベルのつばをサンセットに弾かせ、その勢いで頭上を飛び越える。
ララもさる者。間髪入れずフットペダルを踏みつけ、振り返りざまにスピナーを突き出した。
強烈な金属音。
ひさしから、左メインカメラを大きく損傷したのは、サンセットだった。
『……さっすが』

ララはコンパネを操作し、モニターをサブカメラの映像に切り替えた。
『将軍だったら、あたし、九十九で終わってたかも』
『……そうではあるまい』
『は？』
『はっきり言おう。その機体、貴公には合っていない。スタイルが違いすぎるのだ』
ララの頬が一瞬、ぴくりと引きつった。
『貴公は大胆さと瞬発力にものを言わせ、一瞬のうちに敵をしとめる戦いを得意としていたはず。それがどうだ。その機体、力はあるが加速は遅い。重量ゆえに小回りも利かん。長所を活かしきれていないのだ。大方、セレン・ノーノが試みに造った機体だろうが、それが、あだとなったな』
『……だから？』
『貴公に勝ち目はない。どれほど、あがこうと』
『プ、ハハ、アハハハッ！なにそれ、バッカじゃない？』
今度は、マリア・レオーネが沈黙した。
『だったら、やってみればいいじゃない。その前に、あたしが、ぶちのめしてやるから！』
『……愚かな』

直後。
直立するアリオトの足首、アンクルユニットから、突如、霧が立ち上った。
液状の冷却剤が放出されたのだ。
地を這う霧は、みるみるその範囲を拡大し、サンセットの足下まで覆い隠す。
危険を感じたララは、すぐさまバーニアを噴出。わずかに浮き上がり、着地した。
そこはすでに、氷原と化していた。

『フン！これで移動できなくなった、なんて思ってるわけ？』
この程度ならば、ホバージェットを使用するのに、なんの支障もない。
だが、マリア・レオーネは氷の笑みを浮かべ、
『やはり甘いな！』
フットペダルを踏みこんだ。

『！』

氷上とは思えない速度で、アリオトが迫る。
突き入れたスピナーは難なくかわされ、サーベルがきらめいた、と感じた瞬間には、サンセットの右ウイングバインダーが数枚、音を立てて、地面へ突き立っている。
『この！』
ララはシールドでの打撃を試みたが、それも空振りだ。
アリオトは、すでにサンセットの背後から、左、逆サイドへと旋回していた。
『どうした！私を叩きのめすのではなかったか！』
『うるっさい！』
ララは苛立った。

このスピードの秘密、実は、アリオトの足底に隠されている。
そこには、先ほどまで収納されていたブレードが、言うなればアイススケートの要領で、せり出していたのである。
これにより、氷上での機動力は格段に向上するのだ。
『なにさ、ちょこまかして！』
『フフ、そうだ、このアリオトの前では誰もが罵る。それしかできないゆえな！』
高らかに笑うアリオトのサーベルが、今一度背後から、腹部光炉を狙いにかかった。

『舐めるのも、いい加減にしなよ！』
サンセットはシールドを捨てた。
いや、ただ捨てたのではない。アリオトへ向け、大きく振りかぶって投げつけた。
『フン、こんなもの』
マリア・レオーネにすれば、悪あがきにもならない幼稚な攻撃であったが、それでも攻撃の手は止まる。
ララはすかさず、回転するスピナーを両手で握りこみ、氷の地面に突き立てた。
『む！』
音を立てて亀裂が走り、溝に足底のブレードを挟まれたアリオトが、バランスを崩して手のひらをつく。
そこを、ホバージェットを盛大に吹かしたサンセットが、殴りかかった。

……が。

サンセットの拳が砕いたのは、
『氷……ッ！』
アリオトは冷却剤噴射の勢いで、氷の壁を生成しつつ、上空へ飛び上がっていたのである。
『さすがだ、シュトラウス機兵長！だが、これで終わりだな！』
逆光の中、青いアリオトが、サーベルを構え降下する。

終わった。

負けん気の強いララでさえ、そう思った。

混戦

こうした、Ｌ・Ｊにおける一対一の戦いの場合。ものを知っている者ならば、まず常識として頭部を狙う。

コクピットや光炉と違い、失ったところで戦闘不能とはならないが、それでも、性能は格段に低下する。意欲も失する。

そうなると、大部分の兵は投降するか、しなくとも、ほぼ百パーセント、捕らえられるのが常だからである。

マリア・レオーネは当初から、ララを捕縛するつもりであった。では、それが友誼心や、仏心から出た行動か、と言われれば、少し違う。

コクピットを狙うことは騎士道精神に反し、光炉を狙うことは、押収機流用の観点から国益に反する、と、上等学校や新兵教習などでは指導されてもいるが、今回の場合、マリア・レオーネは情けをかける余裕を持って勝利することで、おのれの才能を誇示し、生意気なギュンターを黙らせようと、もくろんでいるのである。

『どうだ！』

と、サンセットの眉間目がけ、剣を突き入れたマリア・レオーネの顔は、まさに勝者のそれであった。

しかし。

その剣先が、ふれるかふれないかの、瞬間。

まるで突風のように。いや、トビが、人の手から食物を奪い去っていくように。

羽交い絞めにされたアリオトは、不思議な力によって、再び空中へ引き戻されてしまっている。

Ｎ・Ｓカラスが、間に合ったのだ。

『き、貴様！』
ユウの腕の中、アリオトはもがいた。
『おのれ、今ひと息のところで……！Ｎ・Ｓめ！』
『ユウ、そのまま手を放さないように』
『わかった』
『ふたり？ふたり乗っているのか！……うっ！』
天高く舞い上がったカラスとアリオトは、勢いつけて落下する。
地上寸前、ユウはアリオトを突き放し、
『あぁぁぁッ！』
アリオトは防御姿勢を取ることもかなわぬまま、地表に激突した。

『ユーウー！』
『うっ！』
翼をたたんだカラスを待っていたのは、サンセットの抱擁だった。
『苦しい、放せ……！』
『いーやー』
ひと回りも、ふた回りも体格の違うサンセットに押し潰され、カラスの背骨がメシメシと鳴る。
『殺す気か！』
『ユウとなら死んでもいい！』
『巻き添えはごめんです……』
モチの断末魔か。カラスの翼が、力なく、はためいた。
だが、ユウとしては、どうしてもサンセットを押し退けなければならない。
何故ならば、
『ララ、放せ……！まだ終わってない！』
『え？』
『後ろを見ろ！』
『……あ』

カラスを抱いたまま、方向を変えたサンセットのメインモニターに映し出されたのは、今しも立ち上がろうとしているアリオトだった。

その機体表面には、右のショルダーアーマーがひしゃげている以外、大きな損傷はない。

コクピットのマリア・レオーネもまた、無傷であった。

『しつこぉい』

ララはカラスを解放し、スピナーを、地面から引き抜いた。

『……なるほど、その男が、貴公出奔の原因か』

歯噛みするマリア・レオーネのこめかみには、いつもの青筋が立っている。

『男にたぶらかされるとは、貴公には失望した』

『なに？ひがみ？』

『ひが……ッ！違う！貴公には、騎士としての誇りはないのかということだ！そのような、どこの馬の骨とも知れん男に……！』

『そんなこと言ってるから、行き遅れるんですぅ』

『だ、黙れ！』

……なにやら、話が妙な方向へそれてきた。

遠巻きに取り囲む、リドラー軍のＬ・Ｊ部隊も、どうしていいやら戸惑っているようだ。

ユウは、この機に乗じて、どうにか逃げられないものかと思ったが、それより早く、

『やはり貴様はここで斬る！構えろ！』

『フン！上ッ等！』

アリオトとサンセット。二戦目の火蓋が、切って落とされてしまった。

『ララ！』

と、叫びはしたが、またしても聞く耳持たず、ふたりは距離を詰める。
サーベルとスピナーを振りかぶり、
『覚悟しろ！……む！』
『あ！』
同時に飛びしさった。

二機の中央を通過したのは、リドラー軍もろとも呑みこんだ、炎の奔流。
覚えがある。
これは……。

『ミザール！』
『ギュンターか！』

全員が、視線を転じた。

青の軍旗の向こう、黄の軍旗が迫っている。
その先頭で、いかにも将軍然と軍を率いているのは、金のオリジナルＬ・Ｊ、『火炎のミザール』。
脇には、紋章官サリエリの駆る一〇〇二式改『アルコル』。さらには、マリア・レオーネの紋章官、ササ・メスの六〇五式改『ムソー』も付き従っている。
『ササ・メス……あの役立たずめ……！』
と、眉間にしわを寄せながらも、何故と問わないところを見ると、ササ・メスは、マリア・レオーネ自身の命令によって、ギュンターのそばにいたものらしい。
マリア・レオーネは無線のコールを受け、回線を開いた。
相手は、サリエリであった。

『作戦をお忘れですか、リドラー将軍』
『……いいや』
『でしたら、おわかりでしょう。どうぞ、ご進軍を』
非はこちらにあるとはいえ、マリア・レオーネはさすがにムッとした。
『フン。シュトラウス機兵長と黒いＮ・Ｓは、貴公らが敗れた相手。同じ軍団長のよしみで、私が、けりをつけてやるのもよかろうと思ってな』
『そのようなお気遣いは、無用に願います』
マリア・レオーネは、今一度、フンと鼻を鳴らし、回線を閉じた。
『仕方ない。……全軍転進！陣形を維持しつつ、敵戦車へ！』
統率の取れたリドラー軍は、津波のように、マンムートへ押し寄せていった。
『……シュトラウス機兵長』
『え？』
『勝負はお預けだ。その首、ギュンターなどにはくれてやるな』
『え！ちょ、ちょっと！』
『行くぞ、ササ・メス！後れを取るな！』
ひそかに、ララヘささやきかけたアリオトとムソーも、戦域を移動した。

『俺たちも戻るぞ』
『う、うん！』
と、カラスとサンセットも動いたが、まさか、それが許されるはずもない。
二機は、入れ替わりに陣を張りめぐらせたヴァイゲル軍に阻まれ、再び、陸の孤島へ取り残された格好となってしまった。
『くそっ……！』
『……くそはこっちだぜ』

と、ギュンターの声。
L・Jの海がふたつに割れ、ミザールとアルコルが姿を現した。
こちらが逃げられないと見て、今は悠々としたものだ。
ギュンターは、メインモニター越しに、カラスとサンセットを交互に眺め、
『だから言っただろうが！』
アルコルのすねを蹴った。
『やられてんじゃねぇか！ええ？』
『は……』
『こんな野郎叩きのめしても、勝ったことにゃあなんねぇんだよ、ボケ！』
『申し訳ありません』

このときサリエリは、あくまで神妙に答えたが、内心舌打ちのひとつもしたかったに違いない。
実は、サリエリの計画では、もう少し早く、ヴァイゲル軍は到着する予定だったのだ。
しかし、いざ出発、と勢いこんで出たギュンターの前に、単機立ちふさがった者がいる。
ササ・メスだ。
『さすがに予想外でした』
と、サリエリが言うように、結局、マリア・レオーネの危機を察知したササ・メスが動くまで、ヴァイゲル軍は足止めされてしまったわけである。

『だから、俺が燃してやるって言っただろうが』
『他軍の紋章官に手をかければ問題になる。私も申し上げました』
『先に手ェ出したのは……』
『申し上げました』
ぐ、と言葉に詰まり、それ以上の文句が言えなくなったギュンタ

ーは、
『……チェッ！面倒臭ェ』
頭をかきむしり、負けの見えた言い争いを打ち切った。
『おい、サリエリ』
『は』
『テメェはシュトラウス押さえてろ。俺は鳥野郎とやる』
『はぁ？』
これには無論、ララが食いついた。
『冗ッ談。あんたなんか、このくらいのハンデで丁度いいっての』
『あぁ？』
『怖いんだったら、最初から出てこなきゃいいのに』
『ッなわけねぇだろうが！上等だ！かかってきやがれ！』
ギュンターにすれば、サリエリへの鬱憤もあったのだろうが、それにしても、ここまで単純な喧嘩文句もないものだ。
『サリエリ！』
声を投げかけられたサリエリは、鼻梁へ押しつけるように眼鏡を正し、
『承知しております』
吊りあがったアルコルのデュアルアイで、カラスをにらみつけた。
『どうぞ、ご存分に。こちらはおまかせください』
遠く向こうで、マンムートの機銃音が激しくなったようだ。

死兆星

『抜きたまえ』
サンセットとミザールの新戦場から離れ、カラスは、アルコルと対峙した。
普段はそのようなことをするモチではないが、緊張、もしくは叱咤からか、翼を大きく羽ばたかせ、背を叩く。
ユウは深く息をはき、抜き払った太刀を、正眼に置いた。
いつものように、すっと腹がすわり、相手を観察するだけの余裕が生まれた。

一〇〇二式改、アルコル。
細身のＬ・Ｊである。
ララが当初操縦していた、スズメバチ三〇〇系。あれとよく似た形状をしているが、こちらの羽は、背部スラスター付近からひざ近くまで、垂れ下がるようについている。
正体を明かせば、この羽、いわゆる放熱板であり、姿勢制御や飛行のためのものではない。
一〇〇〇系は、空を飛べない。

『名は？』
『……トビアス・エルマンデルに、デローシス五一二号。それでいいでしょう』
『……なるほど』
アルコルも、腰に下げたサーベルを抜いた。
この剣に関して言えば、アリオトのような特別な細工は見当たらない。ただの剣だ。
アルコルは、それで一度空を斬り、右脇へそばめた。
『では、それでいいだろう』

と、その腰が、それとはわからない程度にかがめられた……次の瞬間。

矢が放たれたように、錆鉄色のＬ・Ｊが、カラスに迫った。

刺し貫こうと、伸びる切っ先が狙うのは、やはり眉間。

ここもまたララと似ているが、アルコルの剣には慢心がない。

身をひねり、かわしたユウが振り向いたときには、すでに、地をすり上げる第二撃が、左喉の寸前まで近づいている。

ユウは、仰向けに倒れこむようにして、これをかわした。

素早く翼を上下させたモチが、二体の距離を取った。

『ひと息つく暇はありません。気をゆるめないように』

そうモチが言うように、アルコルは、もう三撃目のために間を詰めている。

大きく振りかぶった上段からの一撃を受け止めようと、ユウも、太刀を振り上げた。

その、上方に気をとられた、一瞬の死角を縫って。

『！』

アルコルの右足が、カラスの、左足の甲を踏みつけた。

『くっ！』

軸足を固定されたまま、たたみかけられる斬撃の嵐。

右手に太刀を持つユウには、圧倒的に不利な状況だ。

……と、サリエリは思ったのだろうが、そうはいかない。

盗みを生業にしてきたユウは、左右両利き。すぐさま太刀を左手に持ち替え、ふたりは剣を打ち合った。

斬りつけられる、そのひと太刀ひと太刀に隠された殺気が、ユウを圧倒した。

『ッ……何故だ！』

『……なにがだね』

『お前は……俺を憎んでる！』
コクピットの中、サリエリの眉間に刻まれたしわが、一層深みを増した。
『何故だ！』
『君が敵だからだろう』
答えたアルコルの右足から、重心が移る。
ユウは太刀を振り、体勢を整えようと、拘束されていた左足を抜いた。

一歩。

ユウにとっては、逃れるためのその一歩が、勝負の分かれ目となった。
アルコルの手元から、一筋の光芒が走ったかと思うと、
『う……』
なんとも言えぬ感触が、右の腿を滑ったのである。
それでも飛び退いたカラスだったが、着地際にバランスを失い、倒れた。
腿は、切断されていた。

『あ……あぁ、あ、ぁッ！』
ユウは、全身を大地にこすりつけるようにして、身をよじり、悶えた。
痛いのではない。熱い。
身体全体が痙攣し、指一本、動かすこともかなわない。
これが腕であれば、まだ、モチが逃走を図ることもできたかもしれない。
だが、モチにも足はある。
その絶叫とあえぎも、ユウの耳に届いていた。

『……捕らえろ』
サーベルを払ったサリエリは、周囲を取り巻くＬ・Ｊ部隊に命じた。
コンソールを操作し、ギュンターの戦況を確認すると、こちらはまだ戦闘中であるらしい。
サリエリの目元に、薄く微笑が浮かぶ。
『……これでいい』
アルコルはサーベルを収め、カラスの右足を拾い上げた。
『紋章官様！』
『なんだね』
『その……』
アルコルの前へひざをついた、青年機兵長の乗る一一三式は、申し訳なさげにカラスを指差した。
初遭遇の者が多いだけに、コクピットを持たないＮ・Ｓから、どうやって操者を降ろせばよいのか、それがわからないと言う。
『投降の意思もないものと……』
『なら、Ｎ・Ｓごと帝都へ送ればいい』
『は？し、しかし……』
青年機兵長は、捕虜が痛みのうちに死ぬことを恐れた。
『無駄な我慢比べだ。反逆者を捕らえよ、生死は問わぬ。その勅命に忠実でありさえすればいい』
『は……は！』
青年機兵長は、カーゴとワイヤーの手配を命じた。
『ララ・シュトラウスに感づかれるな』
『は！』
そこへ、再び。
『も、紋章官殿！』
『今度は……』
なんだ。

しかし言いかけたサリエリの言葉は、皆まで出なかった。
何故ならば、その瞬間。アルコルの頭部は吹き飛ばされていたからである。

『うっ！』
激しく振動し、モニターのことごとくが黒く染まるコクピット。
感覚のみで、機体を水平に立て直し、
『何事だ！』
サリエリは声を張り上げる。
『うわっ！』
『な、なんだ……！』
外では部下たちの悲鳴に紛れ、小さな爆発が、断続的に起こっているようだ。
『なんだ、なにが起こっている！』
サリエリは、頭部以外のセンサーだけでも、と、コンパネを叩いたが、どういうことか、これらもすべて、使用不能に陥っている。
『かく乱弾？一体誰が！』

その、混乱するヴァイゲル軍の只中を、駆け抜けていった三つの影がある。
ふたつはもちろん、カラスとサンセット。
そして、カラスをかつぎ、機器に誤作動を引き起こすかく乱弾のために、カメラセンサーの利かなくなったサンセットの手を引く残りの一体は、ユウも、ララも、モチも知らないＬ・Ｊだった。
『ねえ！ちょっと待ってよ！ユウがまだ残ってるの！』
ララがコクピットハッチを開け、訴えた。
『うぷっ！えほっ、えほっ！』
埃がひどい。
『……ララ』

『ユウ！』
ここで初めて、ララは、ユウも助け出されていたことに気がついた。
『大丈夫？ね、怪我してるの？』
『ああ……ッ。モチ……頼む』
謎のＬ・Ｊの肩に乗せられたまま、ぐ、とカラスの手が伸ばされる。
腕をつかむＬ・Ｊの指を振りほどき、場所を移動したサンセットのコクピットへ差し出されたその中には、気絶したモチが横たわっていた。
『ユウも、こっち来なよ』
『いや……いい。大丈夫だ』
『……強がり』
ララはモチを抱きかかえ、シートへ戻った。
『で……あんた誰？』
ローラーブレードを軽快に滑らせる、どうも民間機らしいＬ・Ｊは、ララの問いに、ちらりと振り向いた。
かと思うと、いつの間にか奪い返しているカラスの右足を、大仰な動作で小脇にかかえ直し、
『名乗るほどの者ではない』
『……あっそ』
『いやいやいや、そこは雰囲気出すとこでしょ』
テリー・ロックウッドは、誰も見ていないコクピットの中で、わざとらしく、ずっこけた。

『よし。……おい、片づいたぜ！』

アレサンドロの乗るＮ・Ｓオオカミは、最後の一五〇一式をハッチから放り捨て、声を上げた。

その間にも、機銃とミサイルランチャーを上手く回避したリドラー軍のＬ・Ｊが、開いたままのハッチへ猛進をくりかえしているが、こちらは取りつくそばからコウモリのひと突きを受け、転がり落ちていく。

すでにマンムートは脱輪から回復し、廃坑へ動き出していた。

『ユウたちは！まだ戻らねえのか！』

と、アレサンドロが苛立ちを強くするのは、カラスとサンセット、双方の反応がレーダーから消えてしまった、と連絡を受けたためだ。

それは、テリーの放った、かく乱弾の影響によるものなのだが、無論、マンムートではそれとわからない。

ただ、一度に大量の機影をロストした消失点が、円形に広い上に熱反応もなかったことから、ブリッジのセレンは、そんなものではないかとあたりをつけているらしく、

『大丈夫だよ』

平然と言い続けている。

そのセレンが、

『あ』

と、スピーカー越しに声を上げた。

『近づいてるよ。……三体』

『三体……？』

『そら。来たようだぞ』

コウモリの切っ先が示した先を、アレサンドロは見た。

リドラー軍が背後から割れていく。

『セレン！援護だ！』

『了解』
すぐさま、弾幕が展開した。
『お、旦那かな？ほら、あの白い奴。んで……Ｎ・Ｓが、もう一体？ね、ね、ララちゃん、あれ誰よ』
テリーのＬ・Ｊ、『シューティング・スター』は、まるで危機感なしに、薄緑色の機体を走らせている。
『ハサン』
ララが、つっけんどんに答えると、
『おっと、ホントに？そいつは美味しいなぁ』
『美味しい？』
『賞金がまた上がるじゃない。俺としちゃあ、ウハウハ』
テリーはカラカラと笑った。
あれだけの目にあっても、まだ、ハサンに勝てる自信があるらしい。
『さて、と、ララちゃん。サクサク行っちゃう？』
『ユウ落としたら、ぶっ殺すからね』
『愛されてるなぁ、彼氏さん』
三体は、サンセットを先頭に、ひとかたまりとなった。
『オッケー？』
『オッケーよ！』
足を突き出して気絶したモチをシートベルトに挟み、ララは、フットペダルを踏んだ。

『急げ！』
激しい銃撃で泡立つようになっている黒色の大地の向こう、アレサンドロのオオカミが、手を振って呼んでいる。
右へ左へ、Ｌ・Ｊを弾き飛ばしながらも、不思議とララの耳には、必死に痛みを噛み殺すユウの荒い息遣いが、はっきりと聞こえた。
『ねぇユウ、大丈夫？』

急に、心配になった。
『……前』
『え？』
『前……ッ見てろ』
『ッ！なにさ、バカ！……バカぁ』
ララは何故か泣きたくなった。
泣くもんかと鼻をこすっていると、警告音が鳴った。
『しつっこいなぁ！』
マリア・レオーネのアリオト、そしてササ・メスのムソーが、背後から迫ってきたのである。
『よく生きていた、シュトラウス機兵長！さぞやギュンターは悔しい思いをしているだろうな！』
『だったら、ご褒美で見逃してっての！』
『そうはいかん！貴公らは、ここで捕らえる！』
サーベルを振り上げたアリオト、ナギナタを構えたムソーが、高々と跳躍した。
『……ララちゃん、ちょっと彼氏さん持ってて』
『え？』
『ほら、行くよ』
シューティング・スターは、サンセットの肩にカラスとその足を乗せかえると、その手で、背のホルダーに収納されたＬ・Ｊ用ライフルを引き抜いた。
普段使っている愛銃と同様の、単発ボルトアクションライフル。
効率は悪いが、テリーのこだわりだ。
『恩に着てよ？彼氏さん』
と、後ろ向きに走行しながら、左アームカバーのマガジンに納まった弾丸を押しこめ……。
一発。
間髪入れず、もう一発。
天へ向けて、撃った。

『なっ！』
思わぬ逆襲に避けようとして避けきれず、アリオトの右腕は、つけ根から吹き飛ばされる。
きりきり舞いして地上へ落ちたところをキャッチしたのは、ムソー。
こちらは弾丸を斬り払い、無事だった。
『うは、怖い怖い。これだから、あの人は嫌だよ』

そのまま三体は、もつれ合うようにマンムートへ転がりこみ、
『ハッチ閉めろ！』
厚い鉄扉が、ズン……、と口を閉ざした。

「セレン様、坑道に入ります」
「うん」
「追いかけて、こないでしょうか」
「天井を落とすよ。入口を埋める」
「了解です。岩盤チェックします」
「うん。……フフ」
「な、なんですか？」
「面白かったね、戦争。データもたくさん取れたし」
メイは、操縦桿を握る手のひらの汗を、こっそりぬぐった。

こうしてマンムートは離脱に成功し、岩陰に消えるその後ろ姿を、
「……陛下に会わせる顔がない」
マリア・レオーネは、這い出したコクピットハッチの上から、沈痛な面持ちで見送った。
「……ササ・メス。私の指揮に落ち度はあったか」
ササ・メスは答えず、上等なショールをマリア・レオーネに羽織らせる。

「いらん」
拒まれても、ササ・メスはマリア・レオーネを包んだ。
「戦車があったにせよ、たかだか四機。一個大隊で、負けるべくもない相手だった……」
「……」
細く長い腕が、なぐさめるように肩をなでる。
「何故こうなった……」
「……」
「お前は……本当に、ごく潰しだな」
そこへ、ギュンターとサリエリが、幌のない軍用車両で現れた。

「おう、連中は」
「逃げた。七〇〇系も用意するべきだったな」
指し示された坑道が、深く、土砂で埋まっているのを見て、ギュンターは忌々しげにつばを吐いた。
だが、その姿に思ったほどの怒りがこめられていないことを見て取ったマリア・レオーネは、このふたりが、反逆者たちの行き先を知っているらしいことを察した。
「貴公らも、してやられたようだな」
「うるせぇな。邪魔がなけりゃあ、俺が勝ってた」
「邪魔……そう、邪魔だ。サリエリ、あのL・Jは……」
「は。あの射撃の腕、おそらく、間違いはないかと」
「やはり、そうか……」
マリア・レオーネとサリエリは、顔を見合わせ、うなずいた。
「誰だ？」
と、やはりこうしたことにうといのは、ギュンターだ。
「テリー・ロックウッドだ」
と、聞かされても、知らねぇと顔をしかめる。
「ギュンター様が入団される以前に退役した男ですが、元は鉄機兵団の騎士」

サリエリが言う。
「ケンベル将軍の、元、紋章官です」
『いやぁ、俺としてはほら、おたくらに負けてもらっちゃ困るわけよ。現在、賞金は三百万！頑張ればまだまだ上に行けるだろうしさ』
「……」
『待てよ？魔術師の大将が加わったからには、Ｎ・Ｓこみこみで三百五十……いや、四百にはなるかな』
「そうか。そりゃよかったな。もう少し上げてくれ」
『……へぇい』
シューティング・スターに乗ったテリーは、つれないアレサンドロの指示に唇を尖らせながらも、カラスの足を動かした。
トラマルまでに残された時間は少ない。
アレサンドロは修復作業を急ぐ必要があったのだが、いかんせん、格納庫が損傷したため、クレーンが使用できなくなっていた。
そのため、テリーが代わりを務めているのだ。
唯一生き残ったＬ・Ｊベッドでは、メイの手で、サンセットの修理がおこなわれている。

……あのとき。
Ｎ・Ｓから床へ倒れ落ち、右足を抱きかかえて、うめいたユウは今、医務室で眠っている。
Ｎ・Ｓのことで、本人が直接傷つけられたわけではない。感じる痛みも錯覚、一時的なものだ。
しかし、トラウマは残るかもしれない。
それを思うと、縫合針を持つアレサンドロの手も重かった。
『……心配？彼氏さんのことが』
「……」
『だったら、ついててあげたら？』
「……あいつは、責任感の塊だ。今度戦いになったとき、まだカラ

スの足がついてなかったら、余計、俺に申し訳ねえって思うだろ」
『……優しいなぁ、旦那は』
テリーは、感にたえないように、言った。
「そんなことはねえさ。鉄機兵団の連中なら、何万人死んでも構わねえと思ってる」
これもまた、アレサンドロの本心だ。
だがテリーは、
『またまたぁ』
鉄機兵団崩れの自分に対して、牽制しているのだと勘違いしたらしい。
「……優しいなら、お前の方だろ」
『俺？』
「あの、青い将軍機。お前ならコクピットを撃ち抜けた。わざと外したな」
『おっと、さすが、ばれてたか』
コクピットの中、テリーは舌を出した。
『でも、あれは別に優しいとかじゃなくて……なんつうかな、まだ、そのときじゃなかったって言うかね』
「うん？」
『ほら、今はともかく、この戦車が地上に出たら、俺はそこでおさらばするわけじゃない。賞金稼ぎとして上手くやってくためには、鉄機兵団の将軍やっちゃまずいでしょ？』
「……まあ、そういうことにしとくか」
『しといてよ』
ふたりは静かに笑った。

と、突然。

「ッ……と！」
『わ、わっ！』

マンムートが急停車し、ぐらついたカラスの足下で、アレサンドロはひやりとした。
「なんだ？」
鉄機兵団ならばサイレンが鳴るはずだが、そういうわけでもない。サンセットの陰から飛び出したメイも、不安そうにスピーカーを見つめている。
『……ふむ』
艦内放送のマイクをつかんだのは、何故かハサンであった。
『さて、諸君。問題発生だ。進行方向前方に、年寄りが座っているぞ』

ミミズのじいさん

ハッチを出たアレサンドロとテリーが、マンムートの鼻先へ回ってみると、煌々と照らす前照灯の明かりの中、確かに老人がひとり、木枠で補強された坑道の土壁に背をもたれ、座っていた。

脇につるはしを立てかけ、生えるにまかせた髭も、節くれ立った手も、黒く汚れている。まさに、鉱夫のひと休み、といった風である。

老人は間近に迫った巨大戦車にも興味がないようで、驚くでも避けるでもなく、ただまぶしげに、くたびれた、つばのない帽子を、目元までずり下げていた。

「こんちは、おじいちゃん」
「……はァ」
老人の答えは、一拍遅れて返ってきた。
「おじいちゃんは、ここの鉱夫さん?」
「……はァ?」
「鉱夫さん?」
「いや、鉱夫はァ……もう、おらん」

……どうも、話が食い違っているようだ。
耳が悪いのか、それにしても間延びした、もどかしくなるほどの語り口である。
だが、生来気が長く、人のいいテリーは、それを気にすることもなく、若干声のトーンを上げた。

「じゃあ、おじいちゃんはなにしてるわけ」
「……」
「……」

「……はァて」
「……ま、いいや。とりあえず……って、ちょっとちょっと、おじいちゃん！どこ行くの！」
テリーが驚き叫んだのは、よいしょと立ち上がった老人が、これまた、のたりのたりとした足取りで、なんと、マンムートの方向へと歩き始めたからだ。
「おい、じいさん」
アレサンドロは肩をつかんだが、年寄りだけに手荒にはできず、老人もまたそれを気にしない様子で、マンムートの下をくぐっていく。
Ｌ・Ｊハッチから中をのぞきこみ、
「……はや」
老人は、空気の抜けるような声を出した。
その、色素の薄い瞳が見たもの。言うまでもなく、Ｎ・Ｓカラスである。
「足かァ……」
と、つぶやいた老人の目は、またしても帽子に隠れ、
「治しはァ……ジャッカルに頼んだ方がァ、ええ。わしァ……駄目だ」
アレサンドロは、とぼとぼ帰ろうとするその前に滑りこむようにして、進路をふさいだ。
「ジャッカル、ジャッカルと言ったな。あんたも魔人か？」
「……はァて」
「ごまかさなくていい。俺は敵じゃねえんだ。……ほら」
と、左のそでをまくり、赤い三日月の入れ墨を示す。
テリーが、あっ、と声を上げたが、構うものではない。
だが老人は、その上をなで、
「……だから、来なすったんじゃァ、ないのかね」
逆に、聞いた。

「ここじゃァ、ないが……ちょと前までは、よう来た。あんたと同じ、三日月のォ、お人が……」
「……ああ」
「魔人さん、頼む。掘ってくれェ、打ってくれェ、と。あんたも……ほうじゃァ、ないのかね」
そこに、テリーが割りこんできた。
「掘るって、なにを？」
「おい、テリー」
「いいからいいから。ね、おじいちゃん、なにを掘るの」
「……そこにも、転がっとる」
「光石？じゃあ、打つってのは？」
老人は、帽子の中に手を差しこみ、頭をひとしきりかいた後、
「……いろいろォ、打った。巨人の心臓やらァ、なんやら……」
「光炉か！要するに、おじいちゃんは魔人の技術者だったってわけだ」
「……ほうか、なァ」
小さく、首をかしげた。

「そうだ、おじいちゃん。あの戦車の格納庫、ちょっと直せるか見てみてよ」
「テリー、いい加減にしろ」
「なんで？」
「うちにはセレンも嬢ちゃんもいるんだ。まかせとけ」
「でも、穴から出た途端に、ドカン、なんてこともある。今のうちにどうにかできる、なんかいい知恵があったら、貸してもらった方がいいじゃない」
この男は、時折正論を吐くので侮れない。
「ね？おじいちゃん」
「……うん」
うなずいた老人は、歩き出した。

しかし、何故かコクピットハッチを通り過ぎ、キャタピラからマンムートの鼻先に抜け、立ち止まる。
おいでおいで、と手を振ったのは、ブリッジに向けてだ。
そして、また歩き始める。
「……テリー、お前はブリッジに戻って、あのじいさんについていくように言え」
「旦那は？」
「じいさんと歩く」
「……あいよ」
テリーはアレサンドロの肩を二度叩き、マンムートへ戻っていった。

それからしばらくは、じれったいほどの時間がかかった。
老人の歩みは、やはり、のろい。
アレサンドロはともかく、それに合わせるマンムートは、一寸進んでは止まり、一寸進んでは止まりのくりかえし。
さぞやセレンは、苛立ちがつのったことだろう。

……と、思いきや。
セレンは、同じくブリッジにいたハサンと、独自の機械論などをかわしながら、飽きることなく舵を握っていたらしい。
機械好きとは、そういうものだ。

「じいさん、名は？」
「……はァて……知らん」
「知らん？」
「あんたらは、ミミズのじいさんとォ、呼んどった。じゃが、わしァ……知らん。魔人かどうかも、わからん」
アレサンドロは唖然とした。

一般的に魔人は、肉体的に成熟した生物のみが変異する。
そのため、魔人となった時点で、別次元の存在に変化した、と気づくものだと聞かされていたからだ。
「先生……ジャッカルは、なんて？」
「はァて……ミミズの気持ちがわかりゃァ、ほうじゃろうと」
「わかるのか？」
「……わからん」
「うん？」
「あんなもんに、どんだけェ、考える頭がある。考える頭のないもんのォ……考えることが、なんでェ、わかる」
「そりゃあ……まあな」
「じゃが……考える頭がないとォ、わかる。それが……わかっとる、いうこと、らしい」
「……まるで問答だ」
「……ほうじゃァのう」

だが、少なくとも魔人であることは間違いなさそうだ。
さらに話を聞いてみると、ジャッカルの変異の瞬間にも立ち会った、というのである。
アレサンドロが耳にしている中でも、ジャッカルは最も古くから存在する魔人のひとりで、その歳は、ゆうに千を越える。
「……ほうかァ」
ミミズのじいさんは、自分のことに関して、さして興味もなさそうだった。

枝分かれする道を、ミミズのじいさんを先頭に進む。
坑道は徐々に細くなり、窓のすぐそばを通り過ぎていく壁面のそこここには、質は悪いながらも、可視レベルの光を放つ光石の結晶が見られるようになった。
「……きれいだね」
と、つぶやいたララの横には、ベッドに眠るユウと、羽づくろいに精を出すモチ。
ふたりのために医務室の照明を落としていることが、この蛍の群にも、銀河の瞬きにも似た幻想的な光景には、尚よかった。
「あーあ、でもなんで、こんなゆっくり進んでんだろ」
ブリッジからの連絡はない。
「アレサンドロもいることです。なにか考えあってのことでしょう」
「それは、わかってるけどさ……」
ララは窓の外を眺めるのをやめ、淡い光に照らされた、ユウの横顔を見やった。
汗の引いた額には薄く脂が浮き、眉間には、深いしわが刻まれている。
せめてそれだけでも消せないものかと、そっと伸ばした手をやると、
「ッ！」
ユウの目が開いた。
「あ、ご、ごめん……」
「……ここは？あれからどうなった！」
「心配ありません。すべて、事は順調です」
「……そうか」
大きく息をはいたユウは、起こした身体を、再びベッドに沈ませた。

……よかった。

額と胸にふれる。

「……感謝します」

そこで、右足の痛みが、ぶり返してきた。

「……痛ッ……ぅ……！」

疼痛だ。

締めつけられるような、それでいて、動かさずにおれない痛み。

N・Sを降りたとき、腿から下が、氷のように冷たくなっていたことだけは覚えている。

今ふれると、温かい。

ホッとした。

「痛みは徐々に消えるそうです」

「ああ……。モチは、大丈夫なのか？」

「そのことです。私は、あなたに謝らなければなりません」

「え……？」

「私は……すぐに気を失ってしまった」

だから、その分、痛みが残らずにすんだ。先に逃げてしまった。

モチは、そう感じているらしい。

「……いいさ。俺が悪いんだ」

ユウは腕を伸ばし、その腹をなでてやった。

「あの、あたしも……ごめん」

おずおずと、ララも手を上げた。

「でも別に、ユウに怪我させるつもりなんかなくて……将軍来てたし……あたし、ちまちましたの嫌いだし……」

マリア・レオーネへの単身特攻のことを言っているのだろうが、

人差し指を突き合わせながら、十分、ちまちました言い訳をする。
ユウは、出かける笑いを噛み殺し、
「……駄目だ」
わざと冷たく言い放った。
「どうせ、また同じことをするんだろ」
「う……し、しない……と思う……かな」
「どっちだ」
「たぶん……する」
ユウとモチは顔を見合わせ、吹き出した。
「ホ、ホウ」
「ハ、ハハ。なら、いいさ」
あのときは、ララの勝手な振る舞いに腹も立ったが、もう、どうでもよくなってしまった。
三つ子の魂のたとえもある。今思えば、猪突猛進はララの長所でもあるのだ。慎重で臆病なララなど、かえって気持ちが悪い。
「しかしララ、これだけは覚えておいてください」
「う、うん……？」
「我々はチームです。チームとは一心同体、一蓮托生。個々はあっても、そこには必ず、守るべきルールがある。いえ、ルールを守るからこそ、個々が尊重されると言ってもいい」
「え、えぇと……」
「生きて戻る。それが最低限のルールです。もう少し、自分の身を大切に考えてください」
「あ……」
「あなたになにかあれば、私もユウも悲しい」
「……はぁい」

このとき。
青白い光石の光に照らされ、嬉しそうにはにかむララの横顔が、何故だろう、ユウの目には、たとえようもなく美しいもののように

映った。
はかなげで、守ってやらなければ、たちまち折れてしまいそうで。
思わず、その髪にふれていた。

「あ……」
驚いたララが、身を硬くし、
「ユ、ユウ……？」
「いや……すまない」
ユウは、すぐに手を引いた。
「な、なに……？惚れちゃった？」
「馬鹿、妙なこと言うな」
「照れちゃって」
「いい加減にしろ」
「あ！あたし、足さすってあげる！ね！」
「やめろ！痛……ッ！痛い！そっちの足じゃない！……モチ！」
「ホ、これは気が利きませんで……」
「そうじゃない！行くな！」
ヒッポにえぐられた傷へ体重をかけられ、ユウの口から言葉にならない悲鳴が上がった。
だがそれは、ララが故意にしたことではない。
マンムートが停車したのだ。

「どうした？」
ミミズのじいさんが立ち止まったのは、坑道の途中だった。
迷ったという雰囲気でもない。
ここまでの足の運びは、絶対的なものがあった。
と、思うと、ミミズのじいさんは左手の岩壁から平凡な光石の結晶を探り当て、つるはしの先で、それを小突く。
ごうん、と、物音。

すぐそばの岩が、いや、岩のように見えていた場所がスライドし、くぼみの中に、コントロールパネルのようなものが現れた。
「よい、せェ……」
背伸びしたミミズのじいさんが、顔を押しこめるように、それをなにやら操作すると、呆然と見守るアレサンドロの脇の壁が、音もなく開き始め……。
「好きにィ、お使い」
巨大なハッチの向こう側には、熱気を放つ大工房が広がっていた。

「いいね」
声音はいつものままだが、セレンの瞳は輝いている。
尾の生えた、N・Sの骨格らしきものや、武器。組み立て途中の光炉。そんなものが、うず高く積まれているミミズじいさんの工房は、確かに、技術者にとっては宝の山だろう。
造る物が物だけに、工房自体の面積はマンムートの格納庫ほどもあり、奥に溶鉱炉があった。
セレンとメイは修理も忘れたように、その中を歩き回った。
「おい、おふたりさん……」
「アーレサンドロー。それを無粋というのだ」
振り向くと、ステッキを回転させたハサンが、にやりにやりと立っている。
「ハサン……。あんたもわかってんのか。俺たちは急いでるんだぜ」
「あの老人についてこい。そう言ったのは誰だ？ん？」
「そりゃあ……」
俺だけどよ、と、アレサンドロは頭をかいた。
「ンンン、アレサンドロ坊や。魔人大好きは結構。ならば、他人の大好きも尊重してやらんとな」
「……チッ」
しゃくではあるが、返す言葉もない。
ハサンは、くっく、と喉を鳴らした。

「先ほど、彼女と計算してみた」
「うん……？」
「ここからトラマルまで、地盤状況はすこぶるいい。飛ばしていけば三日。ここで修理に使うだけの時間は十分にあるというわけだ」
「……そうか」
「さて……私はその間、のんびりさせてもらうとするかな」
「ユウには、ちょっかい出すなよ」
「ああ、それも面白そうだ」
「おい待て。それなら……テリーにしとけ」
するとハサンは、大いに満足した様子で、
「ンッフフフ、悪い男だ。……テリー！テリー・ロックウッド！どうだ、ひと口一万のカード勝負と洒落こもうではないか！」
アレサンドロの背を叩いた。

さて、テリーはどうしたかというと、あのときの借りを返さんとばかりに当然乗ってきた……のだが、結果は想像の通りである。
ちなみに、余談ではあるが。
テリーはこの工房出発直後にも一度、ハサンへ力づくの勝負を挑んでいる。
誰にも、その詳細を語ろうとはしなかったが、アレサンドロが見つけたときには、とても女子には見せられない格好で、格納庫の手すりにぶら下げられていたそうだ。

トラマルへ

ミミズじいさんの専門は、設計ではなく、鍛冶・板金である。その技術力はさすがに高く、正確な測定器など用いずとも、設計図通り、それこそミリ単位の誤差もなしに、鋼板を造り上げる。

そこに、同じくプロフェッショナルのセレンとメイが加われば、怖いものなどなにもない。

「対価は肉体で」

と、あの後ハサンに一文無しにされたらしいテリーも借り出され、格納庫はみるみる、以前の姿を取り戻していった。

その様子を今、ユウは岩に腰かけ、邪魔にならないよう遠くから眺めている。

時間の経過と共に、右足の鈍痛は痺れに変わり、今はもう、だるさだけとなった。

左足の具合もいい。

欲を言えば、この瞬間にも傷がふさがればいいと思うが、こればかりは仕方がない。

役に立たない無力さや、カラスを損傷した申し訳なさ。そうした思いも、もちろん十二分にあるが、近頃のユウには、それを焦りとしないだけの強さが、心のどこかに生まれていた。

それぐらいなら、今を一生懸命に生きたい。

ひと晩寝て、目が覚めても、自分はやはり、ヒュー・カウフマンなのだから。

「あんたァ……」

「え？あ、ああ……」

いつの間に近づいていたものか。ミミズのじいさんが、すぐ隣に座っている。

「なんだ？」
腰をずらし、じいさんのためにスペースを開けたユウが聞くと、
「……ほい」
太刀を手渡された。
忘れていた。手入れを頼んでいたのだ。
「すまない。ありがとう」
「うん」
ユウは鞘をずらし、刀身をのぞきこんだ。
刃には、心が映る。
磨き上げられた刃に映ったのは、冴えないながらも、まっすぐに、自分を見つめる目だった。

「えェ、太刀じゃァ」
「……そうだな」
「えェ鉄に、えェ鍛冶……はァて、どっかで……」
「きっと、エド・ジャハンだ。東の」
「ああ……ほう、じゃった……かのう」
ミミズのじいさんは、どうも名前についての記憶力には自信がないようだ。
「……あの娘さんもォ……東の出だと、言うとった。あんたも、そうかね」
「娘さん……？」
「ほれェ、あのォ……」
と、じいさんの白くふやけた指が差したのは、横たわるカラスのN・S。
「カラス？魔人のカラスか？」
「うん。……あれの太刀もォ、打った」
「そうなのか」
そこまで言って、ユウは心に、はたと思いつくことがあった。
「彼女とは、よく？」

「はァて。……最近は、会わん」
「十五年前は？最後は、いつ会ったんだ？」
これだけは、確認しておかなければならないと思ったのである。
もし、ディアナ大祭主のビジョン通り、カラスが生きていたとすれば、誰かに会っている可能性もある。
ミミズのじいさんは、たっぷりと時間をかけて頭をかき、
「……忘れた」
ユウは、がっかりした。

「ああ、戦ァ終わったら、北に、行きたい、言うとった」
「北……トラマル」
トラマルに立ち寄ったかもしれない。
「トラマルの……いや、ここから北に、何日か行ったところにあった砦」
「……はァ」
「そこにいた魔人はみんな……その、今、どうしてるか知らないか」
さすがに、みんな死んだのか、と聞くのは、はばかられた。
「……はァて。それも、会わん」
「そう、か……ありがとう」
話は、そこで途切れた。

と……。

「あ」
ミミズのじいさんが、なでるように、ひざを打ち、
「おった……。ちょいと前に、来た」
「いつ！」
「はァて……人間の時代もォ、面白い、言うとったからァ……」
戦後だ。
「その人はどこへ？」

「……確かァ……戻るとォ……」
「トラマル……北に？」
「うんん」
「名前、いや、格好は？どんな人だ？」
「……男のようなァ、女のようなァ……青い髪のォ……」
かなり目立つ人物らしい。
そこまでわかれば、もう十分だ。
「ありがとう」
ユウは、頭をかかえながら、必死に記憶を絞り出してくれたじいさんの手を、強く握った。

出発のときが来た。
アレサンドロは、ここは危険だからと、ミミズのじいさんにも共に来るよう勧めたが、
「……干からびる」
じいさんは、それを嫌がった。
干からびるかどうかはともかく、掘ること打つことの好きなじいさんだ。鉱山で過ごすのが最も幸せなのだろう。
アレサンドロもそれ以上は言わず、
「そうか」
身を案じながらも、それを受け入れた。
「ロストンに、ジャッカルがいる。ヤマカガシも一緒だ」
「あァ……ヤマかァ、懐かしい、のう」
「気が向いたら、顔を見せてやってくれ。きっと、ジャッカルも喜ぶ」
「……ほうか、ありがとうなァ」
遠ざかるマンムートを、ミミズのじいさんは、手を振って見送ってくれた。

そして、数分後。
『突入します！』
メイの放送を合図に、マンムートは、岩盤へ双角を突き入れた。
地中潜行を開始したのだ。
なるほど前後に揺れるが、慣れてしまえば、馬車に乗るのと大して変わらない。
ユウには機械的なことはよくわからないが、科学とはすごいものだと、妙なところで感心をした。
そうして、窓から見えていた光石の結晶が、面白みのない黒土の壁へと代わっていく様を何気なく眺めていたユウは、
「つまんないね」
突然のララの声に驚いた。
振り返るより早く、細い腕が二の腕へからみつき、飴とは違う甘いにおいが、ユウの鼻へ入ってくる。
上目遣いに笑うララは、これから格納庫へ行くつもりらしい。手にはサンセットのスペックシートや、なにかの計算表のようなものを持っていた。

「医務室？」
「……いや。部屋に戻る」
「あ、じゃあ……！」
「結構だ」
「まだなにも言ってないし！」
「言わなくてもわかる」
「もぉ、いっつもそうやって！冷たいの！」
だが、ララは笑って、ついてきた。
ユウも、特に突き放そうとは思わなかった。

「……ララ」
「なに？」

「もしも、ララの大切な人が……」
「ユウのこと？」
「俺じゃなくていい。もっと大事な人だ。家族とか」
「家族なんかいない。ねぇ、ユウじゃダメ？」
……ここで粘られても、話が進まない。
「勝手にしろ」
「エヘヘ」
ララは喜んだ。
「ね、それで？」
「それで……」
ユウは立ち止まった。
「俺が死んだとして、でも生きてるかもしれないとしたら、真実がどうかわかる前に、それを知りたいと思うか？」
「……え？」
「どうだ？」
「よく、わかんない……意味が」
「そうか……」
自分の知ることをすべて、アレサンドロに告げるか否か。
ひょっとすると、なにか答えが得られるかと思ったが、
「なら、いいんだ。忘れてくれ」
「アハッ、変なの」
もうしばらく、カラスのことは黙っていようと、ユウは心に決めた。
それにしても。
ララはシュトラウスの家で、よほど嫌な目にあってきたのだろうか。
家族などいないと言い捨てたときの、ララのひどく冷淡な瞳が気

にかかった。

追う者、追われる者

「……どう思われる」
「フ、フ、さても面白いことがあるものよ。騎士の鑑と称えられるおぬしが、皇帝陛下にたてついた」
「ケンベル殿」
「わかっている」
日当たりのいい帝城内の庭園で、低く交わされる会話。
ひとりは、五十の声を聞きながらも、尚隆々とした体躯を誇る、筆頭将軍ジークベルト・ラッツィンガー。
そして、その筆頭将軍に車椅子を押させる、オットー・ケンベル同帝国将軍である。
開かれた周囲には、部下はおろか、紋章官の姿さえ見えない。
木枯らしの吹く、色あせた芝生の道を、ケンベルの車椅子はゆっくりと進んでいた。

「確かに……」
ケンベルは、うつむき気味の細い顎を、わずかに動かした。
「いささか腑に落ちぬことはある。Ｎ・Ｓはさておき、聖石の移動、シュワブ国境線への偵察部隊派遣。戦艦を含む全戦力の増強。増税」
「まるで、戦を望んでおられるようだ」
「先帝陛下が、まさにそれであった。血は争えぬということか」
ぐ、と黙ったジークベルト・ラッツィンガーの喉から、押し殺した、太い息がもれた。
ケンベルは続ける。
「問題は、その血が突如現れたこと」
「うむ」
「つい数ヶ月前までは、争いを好まれぬお方であったが……」
「Ｎ・Ｓの出現と、時期が符合する」

「それよ」
「ケンベル殿。やはり……」
ラッツィンガーが言いかけるのへ、ケンベルは骨ばった指を一本、立てて見せた。
「言うまい。すべては、先帝陛下の思し召しよ」
「……いかにも」
ラッツィンガーとケンベルは庭を一周し、城へ戻った。
「執務室までお送りしよう」
「すまぬな」
「なんの」
と、ふたりはそのまま、回廊を進む。

「ラッツィンガーよ、これよりは？」
「陛下のおそばに」
「それがよい」
「ケンベル殿はいかがなさる」
問われたケンベルの、しわに隠れた目が、ぎらり光った。
「出ねばなるまい」
「……テリー・ロックウッド。有望な若者でしたがな」
「愚かな男よ」
そう言いながらも、ケンベルはテリー退役後、次の紋章官を置いていない。
帝国唯一のライフル部隊をかかえる、オットー・ケンベル軍。
テリーは、そのナンバーツーとして、ケンベルの全技術を受け継いだ男だ。
「始末を、まかせるわけにもいくまい」
うめくようにつぶやいたケンベルの細い肩を、ラッツィンガーの厚い手のひらが、静かになでた。

その頃。
「うそぉん！」
当のテリー・ロックウッドは、絶叫していた。
潜行深度を浅く取ったマンムートが、一旦、状況確認のために開いた無線回線。原因は、そこに、いの一番に飛びこんできた通信であった。

『N・S一味を、国賊として手配する』

そのメンバーの中に、テリーの名前も含まれていたのである。
「いやいやいや！俺、違うって！ねぇ、違うよねぇ！」
「さあ、なあ……」
「違うって言って！」
あまりの取り乱しように、ブリッジに集まった全員が、こみ上げてくる笑いを押さえきれない。
「ひどい！ああ、ひどい！」
テリーは頭をかきむしった。
「飼い犬に手を噛まれた！違う！後足で泥を……いや！」
「恩をあだで返された？……いや、それもちょいと違うな」
別に、こちらが手配したわけではないのだ。
「わかったから、とにかく落ち着けよ」
アレサンドロに肩を叩かれ、テリーはがっくり、サブシートに腰を落とした。
「これが落ち着いてられますかって。……ああ、ホント、どうしよう……あんなとこで撃つんじゃなかった……」
「それについては感謝してるぜ、なあ、ユウ」
「……ああ」
「旦那ぁ……」
テリーは、泣き真似をした。
「ああ……でも旦那には悪いけど、おたくらに賭けて、ここの位置

情報売るしかないかなぁ……。俺まだ、あっちとはやりたくないよ」
　すると、ララが、
「そんなことしたら、あたしの彼氏さんが、あんたの頭、叩き落としちゃうけど」
「うは！だよねぇ……」
「それとも、サンセットでねじ切る？」
「いやいやいや！」
「でしょ？あきらめて、仲間になっちゃいなよ。ねー、アレサンドロ」
「まあ、な」
　嬉々として言うララに、隣のサブシートへ腰かけたアレサンドロは苦笑した。
「うぅ……だったらせめて、その……大将」
　と、テリーは上目遣いにハサンを見る。
「この前のカードの負けと、あのときの五十万、返してくんない？」
「ほぅ？」
「で、セレンさん。あの話、千五百万で、手を打ってくんないかなぁ」
　テリーとセレンが古くからの付き合いだということは、すでに皆、承知している。シューティング・スターを設計したのも、実はセレンなのだ。
　この千五百万という大金の絡む話も、おそらく以前からのものだろう。
　だが、通信席のセレンは、
「駄目」
　物憂げに斬り捨て、手元のコーヒーカップに口をつけた。
「ああ……だよねぇ」
　と、テリーはうなだれ、
「ちょっと、考えさせてよ」
　フラフラと、ブリッジを出ていってしまった。

「……ね、セレン。あの話って？」
「さあ、こっちの話だよ」
「あ、意地悪。ねぇ、教えてよぉ」
セレンとララがじゃれあう声を耳の端で聞きながら、ユウは、いい気味だ、と思った。
これで少しは、追われる者の気持ちもわかろうというものである。
大体、自分たちを金貨としか考えていない賞金稼ぎに対して、他の皆は何故、あれほど同情的に接することができるのか。あの男はハサンに向けた銃口を、いつ、誰に向けるかもわからないだろうに。
ユウは、はっきりと言える。テリーが嫌いだった。
その後、ジョーブレイカーから入ってきた通信で、デューイ・ホーキンス将軍の飛行戦艦オルカーンが、予定通りのコースと日程で飛行中であると確認が取れたユウたちは、トラマルでの行動を打ち合わせし、解散した。

……その夜のことである。
眠っていたユウは、かすかな物音に、ふと、目を覚ました。
スライド式のドアが閉まる音である。それも、おびえるように、ゆっくりと。
続いて、忍び足の足音が、部屋の前を通過していく。
この居住ブロックには、ハサンを除く全員が部屋を構えているが、
「テリー・ロックウッド……」
すぐにわかった。
「あいつ……」
これがどういうことか。火を見るよりも明らかだ。
押さえきれない激情にかられたユウは、躊躇なく太刀をつかみ、音が遠ざかるのを待って、後を追った。

ここまで、二十四時間休むことなく交代で走らせてきたマンムートも、今日は今後のことを考え、停止した状態で夜を迎えている。
その静寂の中を、静かに、静かに、前方の気配は息を詰め進んでいく。
途中、同じく、テリーの不穏な行動に気づいたモチが、
「どうしました」
中央ホールの止まり木から、ユウに声をかけてきた。
「しっ……あいつが動いた。俺たちを売る気だ」
「ホゥ……では、アレサンドロに連絡を」
「いや、俺が止める。いざというときは……警報を鳴らすから、そのときに」
「……了解です」

……自分のついた嘘に、モチは気づいただろうか。いや、気づいたに違いない。
そう。
いざというとき、ユウは、テリーを斬るつもりでいる。
一歩一歩を追うごとにその憎しみは強くなり、もはや、抜き差しならないところまできていた。

切っ先と銃口と

テリーの足音は、格納庫へと消えた。
扉の隙間からうかがうと、非常灯の明かりの下、新品同様となったＬ・Ｊベッドのリフトが、まさに降りつつある。
そこに収容されているのは、シューティング・スター。
間違いない。
テリーは、逃げようとしている。
ユウはカッとなる頭を押さえきれず、扉を押し開け、つかつかと、リフトの到着を待つテリーへ歩み寄った。

「逃げるのか！」

「！」
驚愕したテリーの怯えた目が、ユウを捉えた。
が、それも一瞬のこと。
すでに、それなりの心構えはしていたのだろう。
テリーは、かかえたライフルケースから銃をつかみ出し、ケースのみを投げつける。
それをかわすため、ユウが一瞬目を離した隙に、テリーはＬ・Ｊベッドの裏へ走りこんでいた。
足音が、ユウの背後へ大きく迂回し、弾丸を押しこむボルトハンドルの冷たい響きが伝わってくる。
やってみろ。
太刀を抜き払い振り向いたユウと、テリーの目が合った。
風が動き、時が止まる、その瞬間。

ピー。

リフトが、フロアに到着した。

「……彼氏さんでよかったよ。旦那やララちゃんは撃ちたくない」

テリーの銃口は、ユウの眉間に押し当てられている。

「……俺もよかった。そのふたりに、殺しはさせたくない」

ユウの切っ先は、テリーの心臓の真上で止まっている。

「ヒュウ、言うね」

ふたりは、身じろぎもせず、にらみ合った。

「どうしたの。俺を斬りにきたんじゃないの？」

「お前こそ、どうして撃たない」

「俺は、できれば撃ちたくない。弾代も馬鹿にならないんでね」

「……」

「ビビって、見なかったことにしてくれるのが一番なんだけどなぁ」

その言葉が、またユウの癇に障った。

売り言葉に買い言葉、

「ビビってるのは、お前だろ」

「俺？」

「鉄機兵団にビビってる」

引き金にかかった指が、ピクリと動いた。

「……そりゃ、ビビるさ。逆に、ビビらない奴がいるなら、お目にかかりたいね」

「俺は怖くない」

「なんで？仲間がいるから？そんな精神論じゃないんだよ！」

突然の、噛みつくような猛りがユウを威嚇した。

しかし同時に、激しい焦燥に我を忘れた、そういった叫びでもある。

「ああそうだ。おたくらみたいに、剣でチンチンやる分には、それでもいいさ。でも俺たちの戦いは違う。俺たちは、見つかった時点で負けなんだ。今、あの人に目をつけられるわけにはいかないんだ

よ！」
「あの人……？」
将軍オットー・ケンベルだ。
だが、もちろんユウは、それを知らない。
「……こうしようよ、彼氏さん」
「？」
「彼氏さんは、俺が出ていくのに目をつぶる。俺は鉄機兵団に、おたくらの居場所は明かさない。元の通り、賞金首と賞金稼ぎだ。どう？」
「……断る」
「なんで」
「俺たちを狙うことに変わりない」
「あきらめろって？そいつは無理だ。大口の賞金だからね」
「そんなに金が大事か」
「大事だよ。魔術師の弟子が言う台詞じゃない」
「だとしても……俺は、お前のように薄汚い稼ぎ方はしてなかった」
「……嫌われたもんだね」
テリーは口元だけの笑みを浮かべ、銃を構え直した。
「じゃあ、ここまでだ。……残念だよ。手配されてまで助けたってのに、今度は俺の手でやらなくちゃならなくなる、なんてね」
「……」
そのとき、テリーの視線が一瞬外れ、こちらの手元に落ちたのを、ユウは見逃さなかった。
何気ない風を装いながら、心臓へのひと突きを警戒しているのだ。
テリーは、まず後ろへ飛ぶ。飛んで、間合いの外から、一発撃ちこむつもりだ。
そのユウの勘は、当たった。
テリーの身体が、後ろへ倒れこむように離れるところへ、同時に、

一歩踏み出す。
銃身を斬り上げつつ、目をむき出したテリーの肩口へ、ユウは、袈裟懸けの一刀を振り下ろした。

「待て！ユウ！」

いっせいに光る照明。
太刀は、ひざまずいたテリーの、鎖骨寸前で止まった。
「……アレサンドロ」
そして、モチの姿もある。
……これまでだ。
ユウは硬く目を閉じ、太刀をおさめた。
緊張の糸が切れたテリーも、尻餅をつき、大きく息をはいた。

「ユウ、勝手なことをしました」
「いや、いいんだ。俺でも、同じことをしてる」
まぶしさに目を潰し、ヨチヨチ近づいてきたモチを、ユウは抱き上げた。
その柔らかさ、心がほぐれるようだ。
「あなたも、自分の身を大切に」
「……そうだった」
「ああ、そうだぜ」
アレサンドロの手も、ユウの頭に乗った。
「斬るつもりだったな」
「ああ」
「……わかった」
アレサンドロは、腰を抜かしたままのテリーへ歩み寄った。
「……旦那。ハハ、こうなっちゃあ、どうしようもない」

ライフルは握っているが、指は引き金から外れている。
「旦那の手で始末をつけてくれるなら、願ったりかなったりだ」
「……」
「旦那？」
「……死にてえのか？」
テリーは大きく肩を震わせ、力なく、首を横に振った。
「……情けないよ」
「それが普通だぜ」
アレサンドロは、完全に降伏したテリーの腕を取り、立ち上がるのを助けてやった。
「ユウ。こいつは牢に入れる、それでいいな？」
そうアレサンドロが尋ねたのは、ユウの顔を立ててのことだ。
しかし、うなずいたユウは剣帯から太刀を抜き、
「俺も入る」
アレサンドロへ差し出した。
「なんでお前が」
「頭を冷やしたい」
思えば、やはりいつもの自分らしからぬ行動だった気がする。
嫌いという感情が先に立ち、始めから斬ることしか頭になかった。
なによりも、それを敬愛するカジャディール大祭主の太刀でしてしまうとは、自分自身に恥を知れと言いたい。
「そうか……」
と、アレサンドロは太刀を受け取り、
「わかった。お前ら、一緒に入れ」
テリーを、ぎょっとさせた。
「い、いやいやいや！俺、殺されちゃうよ！」
「そこまではしねえさ。やられても、せいぜい殴られるぐらいのもんだ」
「そ、それもちょっと！」
「あいつに喧嘩を売ったお前が悪い。あきらめな」

「そんな！……か、彼氏さん、仲良くしよう！ね！ね！」
ユウの腕の中で、モチが笑った。

あの話

「明日の昼にはトラマルに着く。ユウはそれまでだ」
「ああ」
「ゆっくり頭を冷やしな」
そう言い残すと、アレサンドロはマンムート最下層に設けられた独居房へ施錠し、戻っていった。
他にもいくつか独房がある中で、ユウとテリーをあえて同じ部屋に入れたのは、コミュニケーションを取り、少しでも仲よくなれ、ということだろう。それくらいユウでもわかる。
しかし、それが上手くいくかどうかは、また別の話だ。
ベッドがひとつ。それだけの房に残されたふたりは、その端と端とに腰を下ろしたが……。
「……」
「……」
案の定、静かである。
ただ、テリーの目だけは、せわしなくこちらをうかがっており、ユウが立ち上がると、
「ま、待った！」
奇妙な声を出し、後ずさった。
「なんだ」
「いや……な、殴られるかと……」
「おびえすぎだ」
一度牙を折られると、こうなるものなのか。
なんとも複雑な感情をいだきつつ、ユウはかがみこんだ。
ひとつ息を整え、指先で床に大きく円を引き、その中に祭紋を描く。
祭紋とは、神官のみに描くことを許された、ある種の結界のようなもので、その内部は神前と同様とされている。

インクでも、聖砂でもない。ただ指で、見えない線を引いただけの祭紋だが、ユウは満足し、その中心に正座した。
長い、懺悔の祈りを終えて振り向くと、テリーも指を組み、口の中で祈りを唱えていた。
「フーン神か」
「え！な、なに？」
「……いや、なんでもない。邪魔して悪かった」
そんな調子で、時間だけが流れた。

そして、一夜明け。
「ホント、ひっどい！」
朝食を運んできたララは、頬をふくらませていた。
「アレサンドロは、放っとけ、しか言わないし。モチは寝てるし。こいつはともかく、なんでユウが、こんなとこ入らないといけないわけ？……あ、それ、あたしが作ったの。美味しい？」
「……ああ、美味い」
もう少し、塩気がなければ。
ユウは、喉まで出かかった言葉と共に、塩辛いスープをかきこんだ。
その他、プラスチックのトレーに乗っているのは、分厚く切ったベーコンと卵、サラダに雑穀パンという、定番メニュー。
ふたりはそれを床に座って食べた。眺めているララも床だ。
「ユウのために作ったんだからね」
と、言うララに、テリーが、
「俺のは？」
と聞くと、
「あんたはハサン。なんか入れてたよ」
「なんかってなに？ねぇ、なに！」
まだ、ツイてる。ユウは、ヒリヒリと焼けた舌で思った。

「ね、そんなことよりさ、あたし、テリーに聞きたいことあるんだけど」
「俺に？……なんでここに入ったか、なんて、わかるでしょ」
「そうじゃなくって、ほら、あの話って奴。セレンにしてたじゃない」
ああ、とテリーは、パンを口に放った。
「別に、誰かに話すようなことじゃないよ」
「だから知りたぁい。ね、ユウ。ユウも気になるよね」
「……そうだな」
「か、彼氏さんを味方につけるのやめてよ。俺、今、彼氏さん、すごい怖いんだから」
「ふぅん」
と、ララが、ユウの太股をつついてきた。
なんだと目を合わせると、返ってきたのは、ララのウインク。
ユウは仕方なしに頭をかいた。興味があるのは自分も同じである。
「テリー」
「……い、嫌だよ」
「……」
「ダメだよ、そんな目しても」
「そうか」
「あ、いや、ごめんなさい。わかった。話す、話すよ」
テリーはすっかり、頭が上がらない。

「ララちゃんが入る前に辞めちゃったけど、俺が鉄機兵団だったってのは、まぁ皆さん、ご承知の通り」
時にすると三年前。
先代皇帝が亡くなる、少し前になる。
「当時の俺は、その、少し言いにくいんだけど……紋章官でね」
「紋章官……！」
「うっそ！じゃあ、ケンベル将軍の？」

「はぁ、まぁ、ご縁があってね」
テリーは、気恥ずかしげに鼻の頭をかいた。

かつて、聖鉄機兵団の前身である帝国聖騎士団に入団するためには、それなりの戦功と家柄が必要だった。
だが、Ｌ・Ｊでの戦闘が主流となった現在、そうした因習にとらわれず、国中の若者から有望な人材を受け入れる形へと、それも変化してきている。
西部の片田舎で育ったテリーが鉄機兵団へ入団したのも、そうした『入団テスト』がきっかけで、初めて帝都へ上ったのは十六の歳。そのときにはすでに、将軍オットー・ケンベルによって、才能を見出されていた。
それから五年。
紋章官へ抜擢された、その一ヶ月後に、テリーは退役願を出した。

「なんで、もったいない！」
ララが叫ぶのも、もっともだ。
ユウもそう思う。
「それが、なんていうかな。野心に負けたっていうか……」
「野心？」
「そ、身の程知らずな、野心」
自嘲気味に笑いながら、テリーは続けた。

「ララちゃんならわかると思うけど、紋章官ってのは、大きく分けて、ふたパターンあってね」
ひとつは、気心の知れた知恵者を、補佐官としてそばに置く、というもの。
選ばれ方は様々だが、直属の部下や小姓・執事など、それまで長年将軍に仕えてきた者が、鉄機兵団内での経歴に関わらず任命されることが多い。

忠誠心が高く、ギュンター、クローゼ、マリア・レオーネなどは、すべてこれだ。

だが、長年連れ添った紋章官に先立たれてしまった場合や、これと見込んだ若者が現れた場合。別の選択肢をもって、紋章官が決まることがある。

次期将軍の育成である。

「俺、頭も悪いし、こりゃ出世は無理だなぁって思ってたから、そう聞かされたときは、もちろん嬉しかったよ。将軍のことも、ホント好きだったしね」

「うんうん」

「でもね」

と、少しだけ、テリーは語気を強くし、

「俺、思ったわけよ。このまま持ち上がりで将軍になって、それで満足かって」

そして、首を横に振る。

「満足なんかできなかった。俺は、力で、一番になりたかった」

目を閉じ、話に聞き入っていたハサンが、そこで、フ、と笑った。

監視カメラの映像と音声が流れるブリッジには、他にも、メンバー全員がそろっている。

無論それに気づくはずもないテリーは、大きく伸びをして、重くなりかけた調子を改めた。

「そう思ったら、紋章官もつまらなくなっちゃってね、気づいたら辞めてた。……で、次の目標ができた」

「へぇ？」

「将軍の『メラク』を倒して、俺が一番になる。……って、目標」

「わ、でかぁい」

ララは手を打って喜んだ。

「でしょ？それで、あの話って奴だ」
「あ、それそれ、それ本題！」
「俺はセレンさんに、メラクをもう一機作ってくださいってお願いしたの。メラクを倒すためには、メラクが必要だからね」
「……そう？」
「そうだよ。これもう、みんな誤解してるけどさ。俺ひとりのスキルであの人倒そうと思ったら、他のＬ・Ｊじゃダメなの。気合で射程は伸びないし、運で精度は上がらない。でしょ？」
「ふぅん」
「そしたらまぁ、十五億でどう？とか言われて……」
「高ッ！」
「でしょ？高いよねぇ。でも仕方ないわけよ、製作者さんがそう言うんだから……」
テリーは、がっくり肩を落とした。
「それから三年で千五百万まで貯めたけど……ああ、もうこうなったら、おしまいだ。俺の手配書を見たら、きっと、あの人が出てくる！」

真面目は真面目なのだろうが、緊迫感という点で言えば、昨夜のことが夢であったかのような、なさである。
ララの手前おちゃらけているのか、それともこれが、この男なりの観念の形なのか。ユウは、首をかしげるしかなかった。
「ね、だったらさ」
と、クスクス笑ったララは、テリーの顔をのぞきこみ、
「やっぱり、仲間になっちゃいなよ」
「え？」
「将軍が出てくるんなら好都合じゃない。あたしも手伝うからさ。それにほら、セレンの雑用とかやったら安くなるかもだし」
「いやぁ……でも、こういうのは、ひとりで勝つから格好いいんじゃない。一対一の、男の決闘でさ」

「そうかなぁ」
「そう。ああ、でも、ここで牢屋に入ってたら意味ないか……」
そう言ったテリーは、ますます、しおれてしまった。

昼近くなり、マンムートはトラマル近郊へ到着。山間の斜面を突き破り、外界へ顔を出した。
さすが北国。一面の銀世界である。
ここからユウは、最も近いドーザの町へ入り、ジョーブレイカーと落ち合うことになっている。
「アレサンドロ」
独房を出たユウは、再び鍵を閉めかけるアレサンドロの手首を取った。
「あいつも連れて行きたい」
「テリーをか？」
「俺は、使えると思う」
少なくとも、戦力としては認めてもいいと思った。
すると、
「……みてえだな。聞いてたぜ」
「え……？」
ユウも、アレサンドロが会話を盗み聞いていたなどとは思いもしない。
アレサンドロは喉の奥で笑い、
「お前が殺した男だ。好きにするさ」
ユウの肩を叩いた。

何重にも重ね着をして山へ出てみると、わずかに風が出ていた。
時折日差しはあるものの、雲脚が早い。
吹雪になるかもしれない。
そう思っていると、
「彼氏さん」
ホバーバイクにまたがったテリーが、キャノピーの中から手招きをした。
「動かせそうか？」
「さぁ、やってみなくちゃわからない」
これは、トラマル行きが決まってからここまでの間に、セレンが設計し、組み立てたもので、言ってみれば大きな風船に、縦長のシートと荷室、推進力を生み出すプロペラがついている。光炉の小型化は進んでいるものの、それでも一メートル四方にはなるため、このバイクの動力は、Ｌ・Ｊ用推進剤を元にした、内燃エンジンということだった。
ミミズじいさんの工房を経由したおかげで、はじめに考えていた以上のよいものができたらしいが、どちらにせよ、常人離れした技術と早業である。
グリップハンドルを握ったテリーは、
「あああ、冷たい！寒い！」
グローブの上から、両手をこすり合わせた。
「……テリー」
「なに？」
「これ、邪魔だ」
「ああ、ごめんごめん。でも邪魔はないじゃない」
テリーは後部座席にあったライフルケースを荷室へと乗せ替え、頭をかいた。

「ラッキーストライクは、俺の相棒だよ」
「ラッキー……？」
「ラッキーストライク。このライフルの名前」
すかした名前だな。ユウは思った。
「俺がつけたんじゃないよ。ほら、俺の師匠のさ、ケンベル将軍にもらったんだ」
「ああ」
「いい銃でね。ずっと欲しかった」
「……そうか」
この感情は、ユウにも覚えがある。
ハサンにせがみ、初めてもらった錠前外しの道具は、今でも数少ない宝物のひとつだ。
「ねえ、そんなことよりさ。ホントにやるの？」
「なにがだ」
「オルカーンだよ、戦艦の。俺ちょっと、ホークさん……いや、ホーキンス将軍ともご縁があってね。あんまり気乗りしないって言うかさぁ」
「文句なら、クラウディウスって将軍に言え」
「……いけずだなぁ、彼氏さんは」
「うるさい」
……と、そこで、
「準備はできたか？」
声がかかった。
振り向くと、同じく厚着をしたアレサンドロが、寒さに肩をいからせ、立っている。
南部出身者は寒さに弱いというが、アレサンドロもまさしくそうだった。
「最後に、もう一回、確認しとくぜ」
と、アレサンドロは白い息をはき、軽く足踏みをした。

「今回は、お前たちふたりだけだ。まず、仲良くな」
顔を見合わせたユウとテリーを、アレサンドロは笑った。
「でだ、連絡は、そのバイクに無線がついてるから、それでしてくれ。ドーザについたら、白馬亭って酒場でジョーブレイカーと合流」
「打ち合わせが終わったら、トラマルについて、集められるだけの情報を集めて、戻ってくる」
「暗くなる前に、と言いてえところだが、無理かもしれねえな。警戒だけは忘れるな」
「わかった」
「テリーも気をつけろよ」
「旦那だけだよ、そう言ってくれるのは」
「みんな思ってるさ」
「だ、旦那ぁ……」
テリーは鼻をすすった。
「おっと、忘れるところだった」
と、アレサンドロが差し出したのは、あの発光筒だ。
「距離が距離だ。俺たちよりも、互いの連絡用に使ってくれ」
ユウとテリーは、ふたりで一本ずつ持つことにした。
「じゃあ、行ってくる」
ハンドルを握るテリーの後ろへ、ユウは太刀を抱くようにして座った。

雪氷の舞い飛ぶ新雪の野を、バイクは走り抜けていく。
自信がないようなことを言っていたテリーだったが、無難に乗りこなしているのはさすがである。
折よく強くなってきた風雪のおかげで、ホバーバイクの走行痕は、つけるそばから吹き消されていった。
「そのジョーさんって、どんな人？」
テリーの白い息が、後ろへ流れてきた。

「どんな……？」
「なにかあるでしょ。ハンサムだ、とか、気難しいとか」
「……会えばわかる」
「そりゃそうだけどさ。心づもりってのがあるじゃない」
この男でも、そんなデリケートな部分を持ち合わせているのだろうか。
ユウは首をひねり、
「……怪しい」
「あ、怪しい？」
小高く積もった雪山をジャンプ台に、ホバーバイクが跳ねた。
「鉄機兵団の……そういうのかも、ってこと？」
「いや違う。ジョーはきっと、信用できる」
「へぇ。じゃあ？」
「覆面が怪しい」
「おっと、マスクマンか。……待てよ？確か、覆面の手配犯がいたなぁ。ズタ袋をかぶり、手には斧、ひき肉職人の異名をとった……！」
「別人だ」
「なぁんだ」
それから三十分も走らせると、ドーザの町並みが見えてきた。

ドーザは、戦後開かれた比較的新しい町である。
トラマル城塞が魔人から人の手に渡った後、そこに詰める騎士たちの相手にするために生まれた歓楽街が、そのルーツとなっている。
今では街道も引かれ、一般の湯治客も訪れるなど、なかなかの繁昌ぶりだ。
ユウとテリーは、ひと気のない場所にホバーバイクを隠し、徒歩で町に入った。
「ねぇ、それ、本物？」

テリーが言うのは、先ほど門番に見せた神官章のことである。
「当たり前だ」
「へぇ。それくさいとは思ってたけど、ホントの神官さんか。おかげで楽に入れたよ」
「……」
「……な、なに？」
「いや……」
テリーがそう言うということは、神官位を授かった事実は、まだ鉄機兵団へは伝わっていないということだろうか。
そういえば、手配する旨の通信にも、それらしいことはひと言も含まれていなかった。
つまり、ディアナ大祭主だけでなく、クローゼや、バレンタイン紋章官さえも、口をつぐんでくれている……。
「なに？その顔」
「……なんでもない」
「いやいや、なんか嬉しそうじゃない」
「うるさい」
「……へぇい」
テリーは、不満げに首をすくめた。

昼時で、なおかつ雪模様であるせいか、表通りにも人影は少ない。
建物の抱いている煮炊きの暖気が、そこここの戸や窓の隙間から、湯気となって放出されている。
ユウとテリーは、雪に覆われた街路を足早に進み……。
目指す場所は、すぐに見つかった。
軒下に吊るされた看板には、後足で立つ、白馬のレリーフ。
近隣の建造物同様、白く塗られた土壁は堅牢で、はめこまれた木扉も、熱を逃すまいと実に厚い。
もうもうと立ちのぼる煙突の煙から視線を下ろし、ユウは、ドーザ随一の酒場、白馬亭の扉へ手をかけた。

……が。
「……」
「……どうしたの？」
そのまま開けようとしないユウの背に、テリーが聞く。
ユウにもわからない。
わからないが、声なき声に導かれるように、
「……こっちだ」
「え、ちょっと、ちょっと！」
ユウは、右手の路地へ入った。

店で働く者たちの出入りがあるらしい路地の雪は、きれいに開けてある。
裏手へ出ると、感じた通り。腕を組んだジョーブレイカーが、壁に背をもたれ、立っていた。
やはり、ジョーが呼んだのだ。
「ジョー」
「……うむ」
薄く目を開けたジョーブレイカーは、横目でユウを見やり、再び目を閉じた。
以前は黒だった装束が、今は同じ型の、白いものに変わっている。どのような修行を積んだのだろう。覆面越しに吐き出される息には、色がついていなかった。
「えっと……おたくが、ジョーさん？なるほど怪しい」
初めて見るエド・ジャハンの忍者にも、テリーは物怖じせず握手を求めたが、ジョーブレイカーは一瞥もせず、それを無視した。

「聖石は？」
「遅れている」
「天気のせいか？」
「そうだ」

ユウの問いに対するジョーブレイカーの返答は、簡潔を極めている。

「トラマルは？」

「……難しい」

「ジョーでもそうか」

ジョーブレイカーは、うなずいた。

「城塞内部は造作もない。カーゴを利用すれば、聖石の運搬も可能だ。それは確認している」

「なら問題は、やっぱり……」

侵入経路。

だが、もし仮に城塞正門への一本道を避けていくとなると、生身での雪中行軍となるのは間違いない。

このドーザからの生活物資搬入もないではないが、週に一度、それも明日早朝のことで、厳重な警備の中を奇跡的に忍び入れたにしても、尚数日を城塞で隠れ潜まねばならないだろう。

どちらを取っても、自殺行為だ。

ちなみに、マンムートの地中潜行も選択肢としてはあったのだが、振動と傾斜角をクリアできず、すでに廃案となっている。

「困ったな。もう時間もないのに……」

ユウは、全員で特攻、という最後の手段だけは取りたくなかった。やはり頭を下げ、恥をさらしてでも、ハサンに知恵を借りるしかないか……。

「わかった。俺たちも、これから少し当たってみる。他に聞いておくことはないか？」

すると、ふ、と、壁から身を離したジョーブレイカーが、

「ディアナ大祭主。カジャディール大祭主の保護の元にある。ひとまずは心配ないだろう」

これは、ユウにとっても喜ばしいことだった。

月の聖石を奪う前に、ディアナ大祭主の身に危険が及ぶのではな

いか。それだけが心にかかっていたのである。
「じゃあ、門の閉まる頃、外で会おう」
「……承知した」
ジョーブレイカーは、足跡も残さず、姿を消した。

それから小一時間。白馬亭に入ったユウとテリーは、適当に金と酒を振りまきながら情報収集を続けたが、なかなか思うような成果を挙げられなかった。

ほとんどが外地からの湯治客で、城塞に明るくないということもあるが、なによりトラマルの兵は、この地においては重要な資金源なのだ。うかつに城塞の内情まで踏みこんだことを聞けば、すぐさま密告される。そんな空気が、白馬亭のそこかしこに漂っているのである。

「こいつは、もうあきらめた方が無難だなぁ。目をつけられるのは怖いよ」

「そうだな」

ふたりは、この辺りで切り上げることにした。

「じゃ、帰る前にもう一杯」

「いい加減にしろ」

「なら食べていこ。俺、おなか減ったよ」

「ええ……？」

ユウは、むっとする熱気と酒のにおい、煙草の煙に、気分がすっかり滅入ってしまっていた。

待ち合わせ場所を酒場にすると決めた時点で、素直にアレサンドロと交代してもらえばよかった。そう何度思ったことか。

「仕方ないなぁ。後でなんかおごってよ。立てる？」

「当たり前だ」

やっと出られるかと、ユウは浮き立って腰を上げた。

ふと、二階席の吹き抜けから階下を見やり、

「あ……」

一階席の片隅。それも、光石灯の明かりも届かないような奥まったテーブルで、ひとりの人物が杯を傾けているのが目に入ったので

ある。
「……どうしたの？彼氏さん」
「う……」
「彼氏さん？」
「……頼む。ここで、待っていてくれ。すぐに戻る」
階下へ走り降りていくユウの後を、しかし、テリーもついてきた。

「戻れ。待ってろと言っただろ」
「そうもいかないでしょ」
「？」
「ほら、お酒に弱い人って、吐いたまま潰れちゃったりするから」
「違う」
柱の陰に隠れ、こそこそ語り合うふたりの横を、酒場の娘が不審の目を向け、すり抜けていく。
ユウはテリーの腕を引き、別の柱へ移動した。
「俺は用があるんだ」
「それって、あの人に？」
と、首を伸ばして見ようとするテリーの首をつかみ、
「いいから、お前はどこか行ってろ！」
「なに、いいじゃない。帰ってララちゃんに言っちゃうよ？彼氏さんが、酒場で美人とイチャイチャしてたって」
「……テリー」
テリーは震え上がった。
「あ、や、でも、ほら、俺、旦那に彼氏さんのこと、まかされてるからさ。心配なのはホント。……ね？」
「……口出しだけはするな」
「あ、あいあい。了解」

テーブルに近づくと、その人物は待ち構えていたかのように視線

を上げた。
　切れ長の瞳に、この辺りでは珍しい褐色の肌。輝く瑠璃色の長髪は、ゆるく肩口でまとめられ、胸元へ流れている。
　ふ、と目をそらす仕草も、頬に添えられた指も、どれひとつ取っても目がくらむばかりの美しさだが、間違いなく男だ。
　……そう。
『……男のようなァ、女のようなァ……青い髪のォ……』
　ミミズじいさんの言っていた、トラマルを生き残ったという魔人に特徴が酷似していたのである。
　ユウは手元にも目を走らせたが、そこに、Ｎ・Ｓの指輪はなかった。

「俺は、ヒュー・カウフマン」
　ユウは、男と差し向かいに座った。
「一杯おごらせてくれ」
　そう言うと、男の表情に一瞬、意外の色が浮かんだようだが、すぐに手元のグラスを干し、
「受けよう」
　にやりと笑う。
　それが、どことなくハサンに似た笑みで、テリーはともかく、ユウの心は軽くなった。
　新たな水割りが運ばれてきても、男の手は、トランプをシャッフルし続けていた。
「あんたのことは……ミミズのじいさんから聞いた」
「ミミズ？……知らんな」
「あんたが、トラマルにいた魔人だと」
　テリーが驚き酒を噴いたが、男の顔色は平生そのものだ。
「名前を教えてくれ」
「……」
「認めてくれるんだな？」

「腹の探り合いは趣味ではない。用があるなら早く言え」
男は、抑揚のない声で言った。
ここで怒らせるのは得策ではない。
それならば、と、ユウは、すべてぶつけるつもりで口を開いた。

「……いや」
「いや？」

はたで、テリーが聞き耳を立てている。
今、カラスの生死について問えば、当然、アレサンドロの耳にも入るだろう。
それは困る。
「……トラマルへの、入り方……。知っていたら教えて欲しい」
ユウは結局、茶を濁した。

「……カウフマンと言ったな」
「ああ」
「協力してやってもいい」
「じゃあ、入り方を……？」
「知っている。そしてそこは、俺でなければ入れん」
「ヒュウ、やったね、彼氏さん」
ひょうたんから駒。思わぬ幸運だ。
「ただし……」
と、男はテーブルに、伏せたトランプを広げ、
「俺は、自分より運の強い男にしかつかん」
その中から、カードを一枚引いた。
スペードのキング。
「戦場ではなんでも起こりうる。そこで生き残るには、実力だけでなく、運も試されることになる。お前はどうかな」
男の目が、挑戦的に光った。

「さあ引け。エースが出れば、お前の勝ちだ」
ユウはためらいもせず、目についたカードを引き寄せた。
仕込みがあるならばまだしも、ここで迷っても仕方がない。
男から視線を外さぬままに裏返すと、ずばり、クラブのエース。
「フ、フ、面白い」
「名を聞かせてくれ」
「……クジャクだ」

店内は、相変わらずの混雑ぶりが続いている。
窓は結露で外の様子をうかがい知ることはできなかったが、日の入りまでは、まだ時間があるはずだ。
「お姉さぁん！なんか食べるものない？あ、じゃあ、それ。みっつね！」
などと、好きなだけ食い、飲み散らかしたテリーは、店のウェイトレスを口説きに席を立った。
「もういいだろう」
クジャクが言い出したのは、ユウが、本日三杯目のビールを、やっとの思いで腹におさめたときだった。
「何故、俺を探した。なにが知りたい」
……やはり、気づかれていたか。
ユウは口をぬぐい、居住まいを正した。

「魔人、カラスのことだ」
「なに……？」
「彼女が、いつ亡くなったのか、知りたい」
「……」
「たとえば……まだ、生きているということは……」
「……そういうことか」
「え……？」

「お前は聖鉄機兵団、諜報部の者だな」
ユウは飛び上がった。
「ち、違う！俺は……！」
「隠すことはない。そうであったところで、どうする気にもならん」
そう言うクジャクの声は、確かに、楽しげでさえある。
「トラマルへの侵入もそのためか」
「違う……！」
「魔人の残党をおびき寄せ、一網打尽にしようという……」
「だから違う！」
木製のテーブルを打った大音声は、クジャクを驚かせても、喧騒に紛れ、他へは届かなかった。
「俺は鉄機兵団じゃない！」
「……そのようだ」
クジャクの指に弾かれたカードが、空に見事な弧を描き、戻ってきた。

「カラスのN・Sが現れた。その噂は聞いている。しかも、空を飛ぶらしいと」
以前ユウも聞いた通り、人間が、N・Sの翼を操ることはできない。
それだけではなく、同じ鳥類の魔人であろうと、モチいわく情報量の違いから、他人のN・Sには、なかなか搭乗できないものらしい。
とすれば、カラスのN・Sには、カラスが乗っている。そう考えるのが自然だろう。
そこで、カラスの生死を確認するために、鉄機兵団が諜報部を送り込んできた、と、クジャクは錯覚したのである。
N・Sカラスに乗っているのが、自分と、言葉を理解するフクロウだと伝えると、
「人間らしいな。無茶をする」

クジャクは笑った。
「そうか、カラスか……。あれは、いい女だった」
長いまつげに縁取られた黒真珠のような瞳が、ふ、と細められた。
「だが死んだ。裏切った末にな。俺はそう聞いている」
「裏切った？」
「砦の長である、オオカミを殺した。相打ちだ」
「ああ……」
そんな風に伝わっているのか。ユウは、真実はどうであれ、心の内に、なにか哀れみのようなものを覚えずにはいられなかった。
「……オオカミとカラス。はめられたのかもしれん」
「え……？」
「俺たちは、神でも聖人でもない。逃げる者も、裏切る者もいた。誰かが、ふたりを殺し合わせようと画策した……」
「誰が……！」
「さあな。人間かもしれん」
「あ……」
ユウが面を伏せたのは、瞬間的に、アレサンドロの顔が浮かんだためだ。
だが、そんなはずはない。あのアレサンドロが、裏切り者なわけが。
……考えてもみろ。
カラスは、オオカミのことで悩んでいたようだった。そう、アレサンドロは言っていた。
つまり、それ以前から、ふたりの関係を揺るがす、なんらかの策謀が働いていたのではないか。
そして、
『言いたいことがあるなら、伝えておいた方がいい』
アレサンドロのひと言で、矢が放たれた……。
「……駄目だ」
これでは、共犯関係はぬぐえない。

ユウは、強くかぶりを振った。

「お前が、なにをもって生きていると思うか知らんが、答えが知りたければ、俺よりもN・Sに聞いてみることだ」

「……どういうことだ？」

「N・Sと俺たちは、魂が結ばれている。たとえ、遠く離れていても」

「つまり……N・Sに呼びかければ、カラスにも届く……？」

「生きていれば、な」

そこでユウは、さっそく、と指輪へふれた。

……が。

「そうか、カラスは……」

マンムートで回復中だ。

「今度試してみる。ありがとう」

そこへ、頬に手のひらの跡を、くっきりとつけたテリーが、戻ってきた。

フェティシスト

そこからマンムートに到着するまでは、何事もなく過ぎた。
外門の外でジョーブレイカーと合流し、ホバーバイクには、ユウ、テリー、クジャク。忍者ジョーブレイカーは、なんと、それと並走して山を登る。
猛烈な夜の吹雪の中、マンムートの開けた穴は巨大なバルーンでふさがれ見えなくなっていたが、レーダーで帰還を知ったN・Sオオカミが大手を振って迎えてくれたため、迷うこともなかった。
オオカミの押し上げたバルーンの隙間をくぐると、密閉された洞内は、驚くほど温かく感じた。
「あああ、寒かったぁ」
と、ホバーバイクを降りたテリーが、グシグシと鼻をすすると、
「お疲れ様です」
すかさず差し出されたのは、鼻紙と、メイお手製の熱々のココア。
「うわ、気が利くぅ。……ああ、生き返るなぁ」
「あの、鼻、かんだ方が……」
「メイちゃんが取ってぇ」
「す、すみません。自分でお願いします！」
メイは鼻紙を押しつけ、マンムートへ逃げ去ってしまった。
「可ぁ愛いィ」
と、テリーは目尻を下げた。

その、同じココアを盆へ乗せ、ユウへ差し出したのは、もちろんララだ。
「はい、ユウ」
「ああ、すまない」
「ジョーも飲んで。……って、え、え？」
ララは、ユウをもぎょっとさせる勢いで後ずさった。

そこには、あの黒覆面がいると思ったのだろう。
だが、のぞきこんだ最後尾の座席から降り立ったのが現実離れした美男だったのだから、驚くのも無理はない。
フードつきのマントを羽織り、身の丈を越える六角の鉄棍を手にしたクジャクは、呆気に取られ、ぽかんと大口を開けるララの手からマグカップを取ると、
「もらおう」
まるで冷水でも飲むように、湯気の立つそれを、なまめかしく喉へ通した。
「ジョーって、こんな格好よかったっけ……」
「なに言ってる。ジョーはあそこにいるだろ」
「あ、あれ、ホントだ」
ユウがあごで示した先で、白装束の忍者は、ホバーバイクの雪を払っている。
「じゃあ……」
「彼はクジャクだ」
「ク、ジャク……？」
ララは首をかしげた。
南国シュワブに生息するその鳥を、帝国で見る機会はほとんどない。図鑑でならばユウも見たことはあるが、ララはそれさえもなかったらしい。
ララはクジャクをまじまじと見やると、
「鳥？へぇぇ……」
物珍しげな、ため息をもらした。
「食べられる鳥？」
「そういうことを言うな」
外で尾行者の有無を確かめていたアレサンドロが、バルーンの下をもぐるようにして戻ってきたのは、そのときだった。
「よう、お疲れ。ひでえ吹雪だな」

「ああ」
「……こいつは？」
「クジャクだって」
「ク……！マ、マジかよ！」
飛び上がったアレサンドロは、ララを弾き飛ばし、クジャクの手を取った。
「あ、あんたが、トラマルの砦長か！」
「ほぅ……？」
「俺はアレサンドロ。あの、あれだ、オオカミのところにいた、アレサンドロ・バッジョだ。あんたの噂は、いつも聞いてた！」
「どうせ、ろくな噂ではあるまい。あの男は俺を笑ったはずだ」
「まさか、なにを笑うってんだ」
あのアレサンドロが、顔を真っ赤にして興奮している。
「そうか、生きてたのか……生きてたんだな……！でかしたぜ、ユウ！」
と、ユウを抱きしめ、その頬へキスするのも、かつてなかったことだ。
「あんたが協力してくれるなら、これ以上はねえ。さあ入ってくれ。すぐ部屋も用意する。ああ、ジョー！後で報告聞かせてくれ！後でな！」
クジャクの背を押すようにして、さっさとマンムートへ戻っていってしまったその後は、まさしく台風一過という奴だった。
「……魔人好きすぎだね、アレサンドロ」
「……そうだな」
その勢いに圧倒されたユウとララは、しばらくものも言えなかったが、顔を見合わせるとなにやらおかしくなり、ぷっと吹き出し、笑った。
と、さらにそこへ。
「ほぅ、誰だ。あの美形は」

入れ違いに現れたのはハサンである。
ハサンは、暑かろうと寒かろうとスタイルを変えることがない。すなわち、襟付きの夜会風マントに、例の刃を仕込んだステッキだ。
「クジャクだって」
ララが言うと、
「クジャク！なるほど美しい鳥だ。あれなら億でも買い手がつく」
ハサンは目を細め、舐めた指で口髭をなでつけた。
「上等な鳥カゴに押しこめて、力尽きるまで眺めていたい。ンッフフフ、そそられるな」
「あ、変態発言！」
と、ララの手がハサンの胸を小突いたが、
「おお、ラーラー、なにを言っている」
するりとかわしたハサンは、その腰を素早く抱き寄せ、背へ密着する。
「男は、すべからく変態だ。真性のマゾヒストで、サディスト。フェティシズムの塊。そうだろう、ユウ？」
「知るか」
「ンンン、知っているぞ。お前は、女のうなじが大好きだ」
「！」
「そ、そうなの？」
「ああ、そうだとも。今度、髪を結い上げてみるといい。こいつは一発で落ちる」
「う、うっそ！だ、誰か！ゴム紐持ってない？ゴムぅ！」
「ハサン！妙な知恵をつけるな！」
「ンッフフフ、嘘は言っていない。礼はいらんぞ？」
「誰が！」
ユウの振り上げた拳はやはり空を切り、ララは誰かぁ、と叫びつつ、マンムートのハッチへ消えた。
「平和だねぇ」
まだココアをすすっていた猫舌のテリーが、小さくつぶやいた。

さて……。

夜も更け、灯の消えた格納庫。

そこには再び、ユウの姿があった。

中指の指輪を見つめ、横たわるカラスを見上げ。

そっと腕を伸ばし、カラスの手にふれる。

無機質なようでいて、確かに感じる有機的な体液の流れに意識を乗せ、

「……カラス……」

ユウは目を閉じた。

「カラス……」

答えは、なかった。

作戦会議（1）

「ユーウ。ねぇ、ユーウー」
「ん……」
「こんなとこで寝てたら、風邪引いちゃうよぉ」
「……ああ」

ユウは、薄く目を開けた。
母の胎内とは、こういうものをいうのだろうか。
柔らかい光。身体を包む程よい圧力。ため息が出るほどの暖かさ。
身体に受けるすべての刺激が、どれひとつ取っても心地よい。

……もう少し寝かせてくれ。

ユウは、丸めた手足に顔を埋めるようにして、再び眠りへと誘いこまれていった。

……が。
「ユーウー！」
「う……」
ララの声は激しさを増し、どこからか、ドンドンゴンゴン、耳障りな打撃音まで聞こえてくる。
「ね、起きて！……起きて！」
「……」
「ユウ！」
ユウの幸せな時間は、無理やり破られてしまった。

「おっはよ！」
「……ああ」

どうやら昨夜は、あのまま格納庫で寝てしまったらしい。
不思議なことに、ユウはN・Sカラスの握られた手の中におり、ララの顔は、覆いかぶさる巨大な指の間からのぞいている。
「器用だね。どうやって入ったの？」
「……覚えてない」
「ホント？アハハッ、バッカぁ！」
「どいてくれ」
ユウは、カラスの指を押し上げ、外へ這い出した。
「……寒い」
「だから言ったじゃない。風邪引いちゃうよって」
あのぬくもりを返してくれと言いたい。
ため息混じりに頭をかいたユウの視界に、真紅の髪が、ちらりとかすめ、
「あ……」
ここでようやく、ララの変化に気がついた。

「えへへ、どう？」
以前は下ろされていた髪が、ひとつに結い上げられている。
結び目は頭の左横。ユウの左腕にくっつきたがるララが首を見せるには、これ以上ない位置だ。
ませた素振りで指に髪を巻きつけながら、
「ほら、うなじぃ」
と、身を寄せてくるララのそこは、驚くほど白い。
首筋の辺りに、今まで見えなかった小さなホクロを発見して、ユウは正直、どきりとした。
「ね？」
「……ああ」
「それだけ？」
「他に、なにを言うんだ」
「もぉ、ユウのためにしたのに！感想ぉ！」

ララは足を踏み鳴らした。
「ああ」
「ああ、じゃなくて、ほら！ちゃんとこっち見て！」
「……」
「ね？」
「……いいんじゃないか」
「ホント？」
「ん……」
「やったぁ！」
意外にあっさりと満足してくれたようで、ユウの口から、長い安堵のため息がもれた。
これ以上の感想を求められたらどうしようかと思っていたのだ。
「じゃ、行こ！みんな探してるよ？」
「え……？」
「ユウはどこ行った！って、アレサンドロ真っ青」
「馬鹿！そういうことは早く言え！」
「あ、ちょっと待ってよぉ！」

急ぎブリーフィングルームへ駆けつけると、筒に丸めた地図の束を手に、部屋をせわしなく歩き回っていたアレサンドロが、飛び立つようにユウの肩をつかんだ。
あまりに危険な今回の作戦に、皆を巻きこむ。それを申し訳なく思うあまり、カラスさえ残して独断先行したのではないか、そう思っていたというのだ。
それが、
「すまない、寝てた」
と、聞き、
「ッ……自分の部屋で寝ろ！」
ユウは、げんこつを食らってしまった。

「……さて」
全員が集まった、暗いブリーフィングルームのモニターに、トラマルからドーザ一帯の映像が映し出された。
これは、各種平面・地形図を元に描き起こされたもので、三百六十度、どの方向へも視点を変えることができるようになっている。
メイの操作により貼りつけられていたテクスチャが消え、アウトラインのみとなった立体図の内部に、一本の、細いラインが表示された。
「これが、俺たちが通ることになる、道だ」
アレサンドロが立ち上がった。
「まぁ、言ってみりゃあ下水だな。トラマルを出て……」
と、蛍光色の線を指示棒で追いながら、
「山の中を一周。地面の下から……ここだ。ドーザ近くの、この川に合流してる」
「そんな穴じゃあ、Ｌ・Ｊは無理だ。俺たちはお留守番ってことで、ねー、ララちゃん」
「好きにすれば」
「ありゃ」
冷たくあしらわれたテリーだが、さして傷ついた様子もなく、カラカラと笑った。
「でも、Ｌ・Ｊが通れないってのは事実でしょ？どうするの、旦那」
「まあ待てよ。確かにこいつには、それほどの幅も高さもねえ。そこでだ」
アレサンドロは再び、モニターへ向かい合った。
「俺たちは徒歩で、水道をさかのぼる。途中いくつかトラップがあるが、ジョーの話じゃあ、ここ十五年、改修された記録はねえそうだ。クジャクに案内を頼む」
紹介を受けたクジャクは、軽い会釈をした。
次に、とアレサンドロが目配せすると、カメラは視点を変え、城

塞部外観を拡大表示する。
ひらけた山の頂に建つ、巨大ドーム。
敷地内にはそれ以外に、数本のパラボラアンテナ、燃料タンク群が見える。
舗装された滑走路は絶壁へと続き、空戦用Ｌ・Ｊの存在を否応なしに植えつけた。
「予定じゃあ、戦艦が停泊するのも、この絶壁だ」
「ずっと浮いてんの？」
とは、ララ。
「ああ。橋を渡して給油。そうだな？」
ジョーブレイカーがうなずいた。
「待ってください。今、イメージ出します」
メイの言葉と同時に、画面には飛行戦艦オルカーンの映像も追加表示された。

全長四百メートル超の圧倒的な存在感。言ってみれば、海に浮かぶ艦船に翼をつけたような格好だが、いかにもスピードの出そうな、へさきの尖った鋭角的フォルムといい、今このときでなければ、ユウはこう言っていたに違いない。
格好いいな、と。
そうした男心をくすぐるものが、オルカーンにはあった。
映像のオルカーンは主翼を収納し、絶壁に左舷を寄せ、止まった。

「でだ、俺たちはまず、ドーム外の地下処理場から、はしごを使い、外へ出る」
その場所に、赤い光がともった。
「ここからはジョーが先導だ。すぐにオルカーンへ侵入」
光点から伸びる光が、停泊中のオルカーンへ進む。
「二手に別れ、聖石の確保と、カーゴの強奪。合流して……正面から逃げる」

「Ｌ・Ｊのふりして？」
「そうだ。メンバーは、ここにいる男、全員」
「どうもリスクが大きいなぁ」
テリーは頭をかいた。
「見張り云々はいいけどさ、巡回は来るし、きっとセンサーだってついてる。気づかれずに山を降りるなんて、まず無理だ」
「それ以前に、カーゴ一台で単独行動なんてある？」
「あー、ないない」
元鉄機兵団のテリーとララだけに、ユウやアレサンドロでは気づかない部分にも目が届く。その言葉には、十分な重みがあった。
「まぁ、Ｌ・Ｊに見せかけてってのは悪くないかな。その石のダミーと、Ｌ・Ｊのハリボテ、あと命令書をいじったのがあれば、多少運まかせでもいける、かもしれない」
「……なるほどな」
「でも……」
と、口を挟んだのはメイである。
「それをどうやって、山頂まで運ぶんです？」
「おっと、そりゃそうだ。……ねえ、これはやっぱ、やめた方がいいよ。どうしてもって言うなら、ほら、まあ、なんとか考えてさ」
テリーはまだ、オルカーンを襲うことに踏ん切りがつかないらしい。
すると今度はララが、
「じゃあいっそ、全部ぶっ潰しちゃえばいいじゃない。みんなで行ってさ」
「オルカーンごとか？」
「そうそう。クジャクだって増えたんだし」
などと物騒なことを言い、テリーを戦慄させた。
だが、
「俺に期待するな。Ｎ・Ｓは捨てた。十五年前にな」
当のクジャクが言う。

「うっそ！」
「それに、聖石を戦闘に巻きこみたくない」
ユウも、そこだけは譲れなかった。

「……さて、どうしたもんかな」
一旦中座したメイが、新しいコーヒーを運んできた。
脚に車輪のついた、移動できる止まり木に座ったモチは、寝ながらあくびしている。
「……ハサン」
「私に頼るな。お前の盗みだろう」
「わかってる。それでも……知恵を貸して欲しい」
そう深々と頭を下げるユウを横目でみやり、
「フン」
ハサンは煙を吐き出した。
「断る」
「ハサン」
「……と、言いたいところだが」
「え？」
「うなじという名のロマンに免じ、ひとつ、レッスンと行こうか」

作戦会議（2）

「盗みとはディナーだ。食材、味付け、演出。そのどれを欠いても、物足りないものとなる」

そう言いながらモニターの正面へ進み出たハサンは、指揮者のごとく指示棒を振った。

「では今回のディナーはどうか。食材、申し分ない。味付け、これまた結構。だが演出。お粗末としか言いようがない」

棒の先が、宙を行き来する。

「ユウ。かつてお前には一度だけ、盗みの計画を立てさせたことがあったな」

「……ああ」

忘れもしない。それこそ、ハサンが囚われる前日に実行された盗みで、自分が立てた計画の不備によって、ハサンが縄にかかり、命を落としたのではないかと、当時はいたく自分を責めたものだ。

「そのとき私は、なにを教えた」

「それは……」

「言葉に出して言ってみろ」

ユウは、言われるままに頭の引き出しを探った。

「……完璧なのはハサンであって、俺でないことを自覚しろ」

「その通り。そして？」

「……知るべきは相手の情報ではなく、自分の手元になにがあるか」

「そう。お前はまったく、記憶力だけはいい」

「……思考はシンプルに。行動は大胆に」

「結構。だがお前は、その内ひとつとして理解していない」

「そんなことは……」

「ないか？ならば私に助言を求めることもなかった」

すると、黙って聞いていたラとアレサンドロが、

「ちょっとハサン！ぶっ飛ばすよ！」
「ああ、俺も同感だな。俺たちはそんなことを聞きてえわけじゃねえ」
「おお、おお、仲間運もいいようだ。うらやましい限りだな」
指示棒を小脇に挟んだハサンは、ユウの鼻っ柱を、強烈に指で弾いた。

「では、お待ちかね、本題といこうか。この暗黒街の魔術師が、最悪極まるこのディナーをどう演出し直すか」
全員の視線が、待ってました、とばかりに、ハサンへ集まった。
「それは！」
「……」
「……ンンン、いい緊張感だ」
「早く言え！」
「そう急くな。所詮、答えはひとつ」
パチン、指が鳴る。
「落とす！」
「落とす？……この崖を？」
「いかにも」
「ハ、そりゃいかにも馬鹿げてるぜ」
アレサンドロは、お手上げ、とばかりに両手を上げた。
「ウン百メートルって絶壁だ。その衝撃で割れちまったらどうする」
「ていうか俺たちはどうするわけ？大体、すぐバレるって点じゃあ、さっきより悪いと思うけどなぁ」
これにはユウも同意見だった。たとえハサンの言葉だろうと、聖石を叩き落とすなどもってのほかだ。
しかし、
「だからお前たちは、いつまで経っても貧乏人だというのだ」
明らかに小馬鹿にした手振りで、ハサンはせせら笑った。
「では聞こう。数万の敵兵に囲まれた状態で、こちらは年寄り子供、

女、負傷した仲間をかかえているとする。退路は今にも断たれそうだ。武器もない。さあ、まず考えなければならないことはなんだ？」

「え……」

一瞬のうちに、ブリーフィングルームは静まり返った。

「アレサンドロ・バッジョ、お前はどうだ」

「……さあな。俺が言いてえのは、今このときに、なんの関係があるのかってことだけだ」

「フン、想像の放棄は感心せんな。だが……まぁよかろう。私が思うに、これは優先順位の問題だ」

「優先順位……」

「今、我々が第一に成すべきは聖石の奪還だろう？そのための計画だ。ならば敵の存在や退路など、二の次ではないか」

言いつつ、ハサンの指は灰皿を引き寄せている。

「目的はひとつに絞り、その上で頭を使う。……ユウ」

「あ、ああ」

「それを踏まえて答えろ。今回の計画、なにをもって成功とする」

「だから……聖石の、奪還」

「具体的にだ」

「聖石を……マンムートに保護すること」

「それも安全にな。だが、この巨大戦車は山を登れない。ならば考えうる最速、最短の手段は……」

「……聖石を落下させ、マンムートで回収する……？」

「と、なるわけだ」

そこでアレサンドロが、待てよ、と口を挟んだ。

先ほど指摘した、

「安全ってのは、傷ひとつつけずにってことだ。あんたの案は、その辺クリアできてねえ」

というのが理由だ。

「確かに、光鉄の硬度は大したもんだと聞いてるぜ。だが、あんたも知ってるはずだ。ダイヤでも、金づち一本で粉々にできるってな」

「ならばどうすればいい？」
「なに？」
「聖石を傷つけないためには、どうすればいい。そう、次に考えるのはそれだ」
ここでしばし、ハサンがパイプに草を詰め、火をつける間、沈黙が流れた。

「では、始めから整理してみようか」
指揮棒を振ったハサンは、モニターに映し出されたオルカーンを指し示した。
「聖石を落下させること自体は、そう難しいことではない。搬入の際には、当然専用の台車に乗せられ、また今もそれに乗ったままだろう。この右舷搬入ハッチから、それごと落とす」
監視の目をどうするかはともかく、ここまでは、ユウたちにも理解できる。
「問題は、先ほどから話題になっている聖石本体の保護と、その軌道の調整だ。これにはいくつか方法が考えられるが、人間が持ち運びすることを考え合わせると、パラシュートのようなものがベストと思われる。投下と同時に展開し、Ｎ・Ｓカラスが付き添いながら、マンムートまで操作すればいい」
パラシュート、とは、ユウたち市井の人間には耳慣れない言葉だったが、以前アシビエム街道に現れたジョーブレイカーが乗り物としていた『凧』のようなものだと聞き、なるほどと納得した。
「着地点にはクッション材を用意。着地と同時にマンムートへ回収し、地中から戦域を離脱する」
「ま、待ってください！」
と、それまでセレンと共に沈黙を守っていたメイが、悲鳴じみた声を上げた。
「コクピット脱出用のパラシュートならストックがありますし、作

成経験もあります。でもクッション材までは、とても手がまわりません。資材も足りませんし、時間も……」
「お嬢さん」
「は、はい？」
「君は、首を傾けて世界を見たことがあるかね？」
「は？」
「面白いものだ、一度試してみるといい。風は縦に走り、雨は横に降る」

すがるようなメイの視線がユウへ向けられたが、それこそ、首を傾けるより他はない。
脱線するのもいい加減にしろ、と、アレサンドロににらまれながらも、ハサンは白々しく口髭をなでつけ、にやりとした。
「要するに、物事を一義的に捉えるな、ということだ。時にペンは剣となり、靴は盾となる」
「そして、バルーンはクッションになる」
「その通り！さすがはセレン博士」
ハサンは指を鳴らした。
つまり、今まさに洞穴の入口を覆っている、あのカムフラージュ用の迷彩バルーンを利用しようというのだ。
「確かにあれなら、突いたり切ったりしたくらいじゃビクともしないけど……その重さに耐えられるかはわからない」
「フフン、では、そのデータを取るためにも是非」
「おや、口が上手いね。いいよ、好きに使って」
「パラシュートは？」
「間に合わせるよ」
「結構。これで、聖石に関しては解決だ」
言葉を切ったハサンは、ひと口、コーヒーで口を湿らせた。
「では次の問題だ。残された者の退路と、鉄機兵団への対処。先ほ

ど誰だかぬかしたように、ここまでの一連の行動を隠密裏に運ぶことは不可能だ。ハッチを操作した時点で感づかれる。その状況で、どこから脱出するか」

言うまでもなく、来た道、つまり水道を取って返す、という選択肢は存在しない。出口で待ち伏せされる可能性が高いからだ。

「となると……」

「や、やっぱり飛び降り？」

「フン、では、テリー坊やには飛び降りてもらうとしよう」

「い、いやいやいや！冗談！」

「そう、冗談ではない」

我が意を得たりと、ハサンは指を突きつけた。

「何故か。我々には翼がないからだ。ならば奪えばいい」

「ま、まさか……オルカーンを？」

「おお、誰か、この馬鹿をどうにかしてくれ。あれに手を出すくらいなら聖石を落とすか？」

「Ｌ・Ｊか」

アレサンドロの答えに、ハサンはまた指を鳴らした。

「人間が凧を使うには、ある程度の経験が必要だ。それを思えば、はるかに効率がいい。しかも、同時に他のＬ・Ｊを破壊できれば足止めにもなるだろう。今更、奪う物がひとつやふたつ増えたところで大勢にも影響はない」

ただし。

「将軍機、『神速のベネトナシュ』が現れなければ、の話だ」

その頃。

高機動戦艦オルカーンのブリッジでは、キャプテンシートへ鎮座する年寄りが、針金のように尖った髭をかいていた。

いかめしい眉の下からのぞく目は大型メインモニターへと注がれ、

「参った……」

視界の大部分を占める雲海を前に、ほとほと弱り果てた様子だ。
しかし、帝国の誇る空中戦艦が、本当に、これしきの吹雪で足止めを食らうものだろうか……。
「大将から連絡は！」
「依然ありません。機影もキャッチできず」
「もういっぺん呼んでみんか！」
「無理ですよ」
通信士と操舵士は、それがさも当然であるかのように答えた。
「かぁぁ！これ以上は待てんぞ！」
「どうします？」
「どうもこうもあるか！……もうええわい！風がおさまり次第、降下開始！大将は病欠！」
「いつもの手ですね」
操舵士のひと言で、ブリッジは笑いの渦に包まれた。

第一歩

天を刺す、白いサーチライトの中。
薄雲を破り、徐々にその姿を現す、飛行戦艦オルカーン。
映像などとはまったく違う。空の覇者たる貫禄を秘めたそれを目の当たりにして、ユウは武者震いした。
おそらく、今まで入った、どの建物よりも巨大で、どの建物よりも恐ろしい。
あれに忍びこむのか……。
胸を恐怖に縛られるのと同時に、腹の内が、まるで煮えたぎった湯を注がれたかのように熱くなった。
「……楽しみだ」
「え……？」
「そんな顔です」
広場に立つ馬のモニュメントの背に座りこんだモチが、丸々とした目で、ユウを見下ろしている。
「やはり、あなたは、シャー・ハサンの子だ」
「よしてくれ」
ユウは手を振った。
「冗談じゃない」
モチは、ホゥホゥ、と、からかうように鳴き、オルカーンへと視線を戻した。

ユウを含めたオルカーン攻略組は現在、ドーザの宿へ泊まっている。
あの戦艦の正確な降下時刻がつかめず、マンムートではいざ、という瞬間を逃す恐れがあったためだ。
ここならば、例の地下水道へも程近い。
「今夜になりますか」

「ああ」
ユウはモニュメントの台座へ降り積もった雪を払い、腰を下ろした。
「ユウ、ハサンと言えば……」
「ん？」
「彼は何故、我々との同行を言い出したのでしょう」
「……アシビエムでか？」
「そうです」
今回の作戦、ハサンはマンムート待機組に入っている。
「彼が根っからの悪人でないことは、無論承知しています。しかし、我々に無償で協力したいと考えるほどの善人でもなければ、退屈しのぎなどという短絡的な考えで動く凡人でもない」
言いながらもモチの目は、抜かりなくユウの顔色をうかがっている。
「彼は、頭のいい男です」
「……疑ってるのか」
「さ、どうでしょう」
「……」
「ただ……この旅を生き抜く上での、彼の必要性は理解しているつもりです。アレサンドロも、彼を信じている」
「なら……」
「不安なのです」
ユウは、ハッと、モチを見上げた。
モチの口から、まさかそのような言葉を聞こうとは思わなかったのだ。
「私は確信が欲しい。彼を信ずるに足る確信が。あなたのひと言が」
城塞から鳴り響く、サイレンの音が途絶えた。
「教えてください、ユウ。彼の目的はなんです。彼が我々に見出した、利害関係の一致とは？」

ユウは言葉に詰まった。
お前は甘い。そう言われるかもしれないが、ユウの中ではすでに、ハサンはテリーなどよりもずっと信頼できる相手として認識されている。Ｎ・Ｓコウモリの一件はともかくとして、やりたい放題やっているようでも、その行動と思考は常に、仲間の利益のためにあるはずだと。
そしてそれは実際、そうだったはずだ。
しかし、だからといって、
「ハサンが、俺たちについてくる目的……」
「あるはずです」
「ああ……きっと、そうだ」
この一事が否定されるものでもない。
あのハサンに限って、ないわけがないのだ。
「Ｎ・Ｓでしょうか」
「違う」
「では……？」
「わからない」
「フム……」
モチは、首を左右に回した。
「でも、次の獲物を探してる風でもない。なにかを狙ってるなら、当たりはもう、つけてるはずだ」
「それが、物ではないとすれば？」
「え……？」
「つまり、我々の首を……」
「違う」
これも、ユウは即座に否定できた。
「あの人は、そんな人じゃない。誰かにやるくらいなら自分のものにする。物じゃないなら、俺たちの内の誰かを狙ってるんだ」
「フム……なるほど」
「モチ……」

「ええ、わかります。確かに、その方が彼らしい。自分の才能や、たくましさを誇示する、というのも、気を引くために雄がよく使う手です。しかし、そうなると……」

ハサンが狙っている獲物とは……。

「ララ？」

「ホ！まさか、あなたと、さや当てを？ホ、ホホ！ホ、ホ！」

珍しく、モチが馬鹿笑いした。

「いやいや、なるほど。それこそ彼のやりそうなことです。袂を分かった弟子の、恋人にちょっかいを……ホ、ホホ！」

「だから、ララとはそんなんじゃない！」

ユウは、腰をひねって雪玉を投げつけたが、見事に、あらぬ方向へ飛んでいってしまった。

「ホ、ホウ」

「いい加減にしろ！」

と、今度は当たるかと思われた二投目も、ひょいと飛び上がったモチの尾羽をかすめ、遠く、街灯のあたりまで行ってしまう。

「くそ！」

「ホウ、ホウ」

そこへ丁度、白馬亭から出てきたほろ酔いの湯治客らが、大きな白フクロウへ、がむしゃらに雪玉を投げ続ける青年に目をとめ、

「見ろ、馬鹿なことしてらぁ」

笑いながら、宿へ戻っていった。

結局、雪玉は一発も当たらなかった。

「……くそ」

「いや、しかしこれで、わかりました」

息が上がり、降参したユウのそばへ降りてきたモチは、まだ笑い声である。

「真相はどうであれ、あなたが言うのです。ハサンが帝国と通じている可能性は少ない。それで十分です」

「……不安は？」
「ええ、消えることでしょう」
「え？」
「いえ、消えました」
モチは、それまで語った不安や疑問が、すべてアレサンドロのものであった、などと、ユウに言うつもりはない。
「これで、彼も外へ目を向けることができる」
くちばしの中で、そうつぶやくと、
「さ、戻りましょう。今のうちに、少し寝ておいた方がいい」
「……そうだな」
ふたりは帰途に着いた。

ここで整理しておくと……。
オルカーン攻略組は、ユウ、アレサンドロ、モチ、テリー、そしてジョーブレイカーとクジャク。
マンムート待機組は、ハサン、ララ、セレン、メイ。
と、なっている。
それぞれに与えられた役割があり、そこにわずかでも狂いが生じれば、まず、面倒なことが持ち上がるのは間違いない。
深夜を過ぎ、酒場で軽く酒を入れたオルカーン攻略組は、ぶらぶらと酔い覚ましの態を装いながら、ドーザ南北を貫く小さな流れへ近づき、
「よし、行くぜ」
アレサンドロを先頭に、石橋の欄干から飛び降りた。
川面は、すでに硬く凍りついている。
橋げたの陰には、荷物と共に先発したジョーブレイカーが待っており、ユウたちの姿を確認するや、足元のカムフラージュシートを取り去った。
そこに、ぽっかりと開いた横穴こそ、地下水道への侵入口である。

ただし、当初予定していた下水の出口ではなく、大雨や不測の事態により、水が一定量を超えてしまった場合に用いられる、水抜き用の水道管だ。

覆っていた金網はジョーブレイカーによって外され、今はもう、侵入を待つばかりとなっていた。

「ここを抜ければ、下水の天井に出る。だが、抜けたが最後、後戻りはできん。足がかりもなく、真下にはトラップが仕掛けられている」

「それは……？」

「警報器だ。ある程度の圧力を感知し、砦へ通報する。飛び降りる際も真下は避けることだ」

クジャクと交わした、その先夜の打ち合わせ通り。無言のままうなずきあった六人は、順次、身体を押しこむようにして、狭い土管へもぐりこんでいく。

最後は、わずかばかりの縁にぶら下がり、前後へ身体を振って着地すると、むっとする暖気が、身体を押し包んだ。

地下水道の幅は、目測で十メートル弱。トラマル城塞内で処理を施されているため、生臭さはあるが、悪臭というほどでもない。

アーチ状の石組みには等間隔で光石がはめこまれており、薄ぼんやりとした明かりが、ゆるいカーブと傾斜を描きながら、遠く彼方まで続いている。

ユウたち六人は、まず両脇に敷かれた歩道の上へ荷物を広げ、最後の身支度を整えた。

「ユウ、足はどうだ？」

「ああ、いける」

痛み止めが効いている。

「なら、そいつを頼むぜ」

ユウは、パラシュートを固定するための機材など、一式をまかされた。

パラシュート本体はアレサンドロが背負い、
「クジャクの後を、ユウ、俺、テリー。ジョーは、しんがりを頼む」
「承知した」
「テリー」
「わかってるよ。ここまできたらやるしかないでしょ」
と、テリーは銃床を叩いてみせた。
「私はどうしましょう」
モチが言うのへ、
「クジャク、頼めるか」
「いいだろう」
土管を通すため分解していた鉄棍を、慣れた手つきで組み直したクジャクが、その腹羽をくすぐり、抱き上げる。
「恐れ入ります」
「フ、フ」
このふたりはどちらも鳥類だけに、どこか通じ合うところがあるようだ。
「……行くぞ」
鉄棍を振ったクジャクが、トラマル攻略の第一歩目を踏み出した。

そうして、出発から数時間。
「休もうか」
クジャクが言い出したときには、ユウ、アレサンドロ、テリーは疲労困ぱいの域に達していた。
トラマル城塞は、ドーザからの標高差にして、たかだか千メートル程度の高みだが、いかんせん神経のすり減りようが、ただ事ではない。
入口に設置されていたような警報器か、直接こちらへ害を与える罠か。歩道の内外、まったくの無作為に配置されているらしい二種類のトラップを、たとえば一歩一歩、汗の一滴も落とさぬように、身体をくねらせて通らねばならないかと思えば、眠気を覚えるほどなにもなかったり、という具合なのだ。
一度などは、足の踏みどころを誤ったテリーが、うっかり罠を起動させてしまい、
「ひゃ、あ、あぁ！」
突如抜け落ちた穴の底へ落ちかけてしまった。
ジョーブレイカーの投げ打った分銅綱のおかげで事なきを得たが、そうでなければ串刺しになっていたところだ。
必死の態で這い登ったテリーは、
「だ、大丈夫、大丈夫」
と、アレサンドロに手を振ってみせたが、顔面は蒼白。半分べそをかくという情けない有様だった。
「先が思いやられるな」
アレサンドロは乱暴に荷物を放り出し、歩道へ座りこんだ。
「で、あと、どのくらいだ？」
問われたクジャクが鉄棍で示した先には、天井へ続く鉄ばしごが見える。

「あれを上れば処理場へ出る。トラップはここまでだ」
「ありがてえな」
腹から息をついたアレサンドロは、テリーから渡ってきた水筒をぐいぐいとあおり、それをユウへ回した。
打ち合わせで聞いたところでは、ここから地上まで、三十分とかからないはずだ。
「日の出には、少し早い」
ユウが言うと、
「そうだな」
だから休みを取った、と、クジャクはモチの喉をくすぐった。

これからユウたちは、月の聖石をパラシュートで投下するわけだが、その展開や誘導は、日の光がなければ困難な作業である。
計画では、暁闇に紛れてオルカーンへ入り、日の出を合図に、聖石を投下することになっていた。
傍受を恐れ、今は無線封鎖しているふたつのチームをつなぐのは、そのタイミングひとつ。ララたちマンムート組も、当然そのつもりで、トラマル直下へ待機している。
さぞや、こちらも緊張していることだろう。
……と、思いきや。
「……で、あれはなんと言った?」
「いいんじゃないか、って」
「それだけ?」
「うん」
「やれやれ、相も変わらず言葉を知らん男だ」
「いざというとき大物を逃がすタイプ」
「ンッフフフ、違いない。いい見立てだな、セレン博士」
四人はブリッジの床に座り、なんとババ抜きに夢中であった。
金は賭けない、ハサンにすれば、ままごとのような遊びだが、女性陣に囲まれているという事実だけで、至極機嫌がいい。

「もぉ、うるっさい！」
と、むくれてしまったララの頬を、あやすようにつつき、
「だが、君はそれで満足か？」
「え？」
「女性としては、もっと踏みこんだひと言が欲しいだろう」
にやりとした。
するとララは、
「フッフン」
鼻で笑い、薄い胸を張ると、
「ユウはそれでいいの。『うるさい、離れろ、あっちへ行け』。でも、態度はすッごく優しい」
「ほぅ」
「女の子は、そのくらいギャップがあった方が好き。ハサンみたいに優しすぎるのは、かえってよくないよ。ね、メイ？」
「え！は、はぁ……」
メイは、何故か赤面した。
「ン、フ、フ、これは一本取られたな。君は目のつけ所がいい」
「でしょ？」
「ならば私も、たまには君のお尻をつねってやらねばな」
「あ！やっだ、エッチぃ！」
「はいはい、ララの番だよ」
実に、のん気なものである。

日の出が近づいた。
彼方までひらけた濃紺の空が、蒼穹の輝きへと変わろうとしている。
快晴。無風。
ユウたちはその空の変化を、肌がふれれば張りついてしまうほど冷え切った、燃料タンクの外壁へ身を埋めるようにして見守った。

幸運なことに、昨夜は一切の風雪がなかったため、桟橋に停留するオルカーンのハッチは開いたままだ。
先行したジョーブレイカーの手がその奥で振られ、ユウたちは、騎士たちのつけた足跡の上をなぞりつつ、オルカーンへと駆け向かった。

そこは、Ｌ・Ｊ格納庫である。
オルカーンの最大搭載数は、二個分隊の二十四。
横たわった状態で階層式Ｌ・Ｊベッドに積み重ねられたそれが、有事にはコンベヤーを移動し、両舷のハッチからカタパルトで射出される仕組みになっている。無論、すべて空中戦用機だ。
さらに、その奥の空間。Ｌ・Ｊ用推進剤のスペアタンクや、武器、交換パーツのコンテナが整然と並ぶ暗所に、専用の台車へ乗せられ、灰色の保護シートごとロープでがんじがらめにされた、月の聖石があった。
万が一、贋物という可能性もないではなかったが、
「……うむ」
あらためたジョーブレイカーが、しっかりとうなずいたのだから間違いない。
それにしても、さすが超人ジョーブレイカー。十数人からの守衛は、ことごとく気絶している。
「感心してる暇はねえ。始めるぞ」
アレサンドロが小声で号令した。
「ジョー」
と、声を受ける前に、ジョーブレイカーは素早く行動を起こしている。
飛ぶように庫内管制ブースへ駆け上がると、左手甲に装備した、珍しいソーラー発電の無線その他一式の中からジャックのついたコードを手繰り出し、コントロールパネルのスロットへ差しこんだ。

「来ました！」
その、『準備よし』の信号は、すぐさまマンムートのメイへと伝えられた。
コンピュータルームとも言うべき、このセレンの私室兼研究室には、他に家主であるセレンの姿がある。ララとハサンは、格納庫で聖石確保の準備にあたっているはずだ。
「実況」
「はい！」
キーボードを叩くセレンの指は、まるでピアノでも奏でているかのように、優雅に動いた。
「第一ゲートクリア……第二、第三……オールクリア！指揮権、マンムートへ移ります！」

その異変にまず気づいたのは、あくびまじりにモニターを看視していた、オルカーン当直の新米オペレーターだった。
「あれ？」
「……どうした？」
同じく眠たげに答えた航空士は、オペレーターの指差したモニターをのぞきこんだ。
両舷ハッチが稼働中である。
桟橋に面した左舷側が閉じ、逆に、右舷側が開き始めているらしい。
「誰が操作してる。連絡はあったか？」
「いえ」
オペレーターは手元の書類をめくったが、そのような引継ぎ事項はない。
だが経験も浅く、帝国の誇る飛行戦艦がクラッキングされる、などとは夢にも思わなかっただけに、それほどの危機感はいだかなかった。

「寒さで、回線がいかれましたかね」
「そんなわけないだろう。空の上の方が、ずっと寒い」
応じる航空士も、どこか、とぼけた調子である。
「一応、格納庫の連中にコールしてみろ。眠気覚ましに遊んでるのかもしれん」
「了解です」
オペレーターはインターコムを取った。
しかし、コール音を待ちながら、なにげなくモニターへ視線を戻し、
「え？」
「どうした？……あ、ああっ？」
「な、なんだ……これ！」
さすがに青ざめた。

無線・電信禁止。
艦砲使用停止。
Ｌ・Ｊハッチ以外の艦内全電子ロック、強制施錠。

それらの赤色警告が、続々と画面へ現れていたのである。
「う、嘘だろ……！」
と、ふたりはコントロールパネルへ飛びついたが、時すでに遅し。
「警報を……！」
「だ、駄目です！作動しません！」
「グ、グレゴリオ様！誰か、誰か応答してくれ！」
ふたりは、ただオロオロするばかりだった。

直径五メートルにもなる聖石を乗せる台車は、ほぼ正方形に近い形をしている。
その四辺の中点へ貼りつけたのは、鉄環のついた吸盤、とでも言

おうか。レバー一本で内部に真空状態を作り出し、完全密着させることができる代物だ。
「お許しください」
と、額と胸にふれた後、聖石へ駆け上ったユウは、その鉄環に通されたベルトを四方から受け取り、頂点でパラシュートと組み合わせた。
「終わった！」
「よし、お前たちはＮ・Ｓの準備だ！テリーはＬ・Ｊ！クジャクは、こっちに手を貸してくれ！」
「あいよ！」
ひと声、手を打ち鳴らしたテリーは、Ｌ・Ｊベッドのエレベーターへ。アレサンドロとクジャクは台車を操作し、開ききった右舷ハッチへと移動させる。
立ち上がったＮ・Ｓカラスの真正面に見える東の空は、今にも弾けんばかりの勢いをもって、今日最初の輝きを放とうとしていた。

『……ユウ』
『なんだ？』
『私は、このＮ・Ｓというものに出会い、よかったと思えることがふたつあります』
モチの声は、冷静の中にも、押し殺した興奮が見え隠れしている。
『ひとつは、この鳥の身にも戦う手段が与えられたこと。そしてもうひとつは……』
光です。モチは言った。
『太陽は美しい』
ユウは、そのモチの単純な言葉にこそ感動した。
『さ、行きましょう！』
『ああ！』
ふたりは台車の片側を支えつつ、空へ一歩、踏み出した。

ユウはこのときほど、耳を裂く風鳴りを、心楽しく聞いたことはない。

パラシュートが開くまでの、わずか数秒間ではあったが、生まれたばかりの陽光の中、聖石とダンスするように回転し、落下するのは、思わず声を上げたくなるほど愉快だった。

『もう少し、壁から離れましょう』

モチは、ほんの少し翼を傾けただけで見事に理想の場所へ移動し、パラシュートの展開は、無事完了した。

さあ、ここからは地上で待つふたりの出番である。

「おお、おお、うらやましいことだ」

つぶやいたハサンの脇には、例の迷彩バルーンが、八割方ふくらんだ状態で敷き延べられている。

左手の発光筒を天へ向け、隻腕のハサンは、歯を使って紐を引いた。

一発。そして二発。

気づいたカラスが、手を振って応えた。

「フン……さぁ来るぞ！準備はいいか！」

『もっちろん！』

ララのサンセットも、上空のカラスへ手を振った。

一瞬の乱気流にひやりとする場面もあったが、聖石を乗せた台車は、旋回の幅を徐々に縮めながら地上へ近づいてくる。

それはカラスの手を離れると、バルーンの中央へ吸いこまれるように着地し、

『せぇ、のッ！』

今度は力自慢のサンセットが、巨大風船の排気弁から、溜めこんだ空気が抜け切るのも待たず、マンムートの格納庫へと引きずりこんだ。

……さて。

ユウとモチが、まだ空中にあった頃。

オルカーンに残されたアレサンドロたちも、次の行動を開始していた。

脱出である。

Ｌ・Ｊの強奪と破壊は、あっけないほど簡単に達成されたため、むしろ、それしか残されていなかった。

「テリー！お前はクジャクと先に行け！」

アレサンドロは叫んだ。

「回収するまでパラシュートには近づくな！艦砲にも注意しろ！いいな！」

『あい了解！』

脱出用に確保した一二〇一式Ｌ・Ｊ一機に乗りこみ、テリーとクジャクは一足先に、空へ飛び出していった。

「ジョー！俺らも行くぞ！」

しかし、管制ブースのジョーブレイカーは、手元のコントロールパネルを操作し、右へ左へ、絶え間なく視線を走らせている。

「ジョー！」

そこでようやく、スロットへ差しこまれたコードに手をかけた。

これを抜けば、オルカーンの指揮権はセレンの手を離れる。

ジョーブレイカーは、ためらいもせずに抜いた。

直後、警報が鳴り響き、格納庫と通路を閉ざす、電子ロックハッチの施錠ランプが、赤から緑へと変わった。

「急げ！」

ジョーブレイカーは階段を躍りくだり、疾風のごとき速さで、残されたもう一機の一二〇一式へ滑りこむ。

操縦技術のないアレサンドロは、すでにリニアシートの裏側へ入り、待っていた。

「ベネトナシュがない」

「なに？どういうことだ」

「わからん。遊蕩癖のある男だとは聞いている。……行くぞ」
ふたりの乗った一二〇一式は、まるで、どこか故障でもしているかのように、絶壁を急降下して逃走した。
Ｌ・Ｊ回収後、地中潜行直前の外部カメラに、遥か上空を走る三角形の影が映ったが、今更言ってどうなるものでもなかったため、セレンは黙っていた。

決壊

聖石は、ひとまず台車に乗せられたまま、格納庫で保管されることとなった。

預かり手はまだ見つからないが、いずれ、いや今日明日中にでも、知る限りの盗人へつなぎを取ろう。ユウはそう考えている。

蛇の道は蛇。盗品を隠すには、盗人の手を借りるのが一番だろうと考えたからだ。

だが、この点において、ハサンは他の、どの盗人よりも劣っている。

なにより、一度盗んだ品物に対して、長く興味を維持できない。隠れ家はあっても、盗品を大切に扱おうという気がないのだ。錠など使わず、箱にも入れず、盗られれば盗り返せばいい、の精神だ。

自身が言う通り、ハサンにとって盗みとは、ディナーであり、知恵の見せ所であり、すべてを内包したエンターテインメントショーでしかないのである。

と……。

聖石を乗せた台車が小刻みに揺れ、その車体後部に張られた金網が、かちりと落ちた。

奥に見えるのは、わずかな光を放つ小型光炉。

……いや、それだけではない。

まるで亡霊のように黒い物体が、床へ這い出してきた……。

その頃ブリッジでは、

「かんぱーい！」

床に酒食を広げたて、盛大に祝宴が開かれていた。

いまだ地中を逃走中ではあるが、こうした大掛かりな盗みを経験するのは、ほとんど皆、初めてのことで、さらにそれが成功してし

まったとくれば、大騒ぎもしたくなるというものだ。
始めはあれほど参加を渋っていたテリーさえ、
「いや、こんな盗みなら何回してもいい！俺ぁ、これから盗賊になるよ！いや、ホント！大将の弟子になるぅ！」
と、したたかに酔いながら、何度も言った。
「あたしはユウのお嫁さんになるぅ！」
関係ないことを、ララも言った。
そしてついには、
「旦那は？旦那はなににになりたいの！」
「ああ？」
「ほらぁ、なににになるのぉ！」
「そうだぁ！アレサンドロも言えー！」
酔っぱらいふたりは、両側からアレサンドロの肩へしなだれがかり、カカカカと笑った。
このうざったさ、ユウならば殴り飛ばしているところだが、アレサンドロは背をさすってやるように、ふたりを抱き寄せ、
「そうだな……俺は……」
なにか言いかけて、やめた。
「あ、ずるい！ずるいなぁ！」
「いや、思いつかなかった」
「いやいや、俺の勘じゃあ、答えありと見たね」
「そんなことより俺は、奴らが追っかけてこねえかが心配だ」
「またぁ、大丈夫だよ。地面をもぐれるＬ・Ｊなんてそう多くないし、少なくともトラマルにはない！」
「……だといいがな」
アレサンドロはすするように、酒をひと口、口に含んだ。

……と、そのときだ。
突如、電灯の点滅と共に、がくんと、岩に乗り上げたかのような振動が起こり、けたたましく報知器が鳴り始めたのである。

「火事……？」
さすがに素早く行動を起こしたセレンがオペレーターシートへ取りつくと、そこには、いくつかの警告文が表示されている。
さらにもう一度。マンムートが揺れた。

「なにがあった」
「知らないよ」
セレンにすれば正直な言葉だったのだろうが、つっけんどんな返答に、場は、やや騒然となった。
「まぁ待て」
ハサンが手を上げた。
「ジョーブレイカー君も戻りたまえ。まずは落ち着いて状況を知るべきだ。セレン博士、これは内因的なものか？外因的なものか？」
つまり、故障か、破壊活動か、ということである。タイミング的に、これがただ事でないことは誰もが感じている。
「さあ。場所は三番物資貯蔵庫と空調室。外部装甲板に損傷なし」
石に虫がついていたのかもしれない、と、セレンは言った。
「けど、参ったね」
ただでさえマンムートの地中走行には、空気を清浄に保つ、エア・コンディショニングが欠かせない。
そのシステムが破壊されてしまった上、さらに火災が起こっているとなれば、密閉性の高いマンムート内はすぐさま酸素を使い果たし、ユウたちは水揚げされた魚のようになってしまうだろう。
「なるほど、敵もさるものというわけだ」
ハサンはコツコツ、ステッキを鳴らした。
「ではお嬢さん、その狡猾な侵入者の顔を拝んでやろうではないか。現場に近い監視カメラの映像を出してくれ」
「え？は、は、はい！」
正直、そんなことをしている時間があるか、とユウやアレサンドロなどは思ったが、メイの操作でメインモニターの画面が切り替わ

る。
　映し出されたマンムート最下層通路では、黒煙が立ちこめる中、非常灯とスプリンクラーの回転だけが確認できた。
「……なにもねえな」
　アレサンドロはそう見たが、
「……いや、いる」
　ハサンは目を閉じた。
「来るぞ、今、映る」
「あ……ッ！」
　その言葉通り、画面奥から現れたのは、黒いフードを目深にかぶった、黒い肌の男たち。
「バイパー！」
　そして、あの娘、シュナイデの姿もあった。

「くそっ……！」
　こうなると、いよいよ、ぐずぐずしてはいられない。
　ユウとアレサンドロ、ジョーブレイカーにクジャクまでもが剣を取り、通路へ向かう。
　ララも立ち上がりかけたがモチに阻まれ、接近戦に劣るテリーに至っては、どうしようという逡巡は見せたものの、ついに動こうとはしなかった。
　そして、ただひとり。
　ユウたちの前へ立ちふさがったのが、やはりハサンであった。

「私は待てと言ったぞ、アレサンドロ・バッジョ」
　この期に及んで尚、その口元にはシニカルな笑みが張りついている。
「……あんたと話してる暇はねえ。どきな」
　アレサンドロは、ハサンの肩を押し退けるようにして先へ進もうとしたが、ハサンはその腕を払い、拒んだ。

このとき一瞬、間に入ろうとしたユウへ向け、ハサンは視線をくれたのだが……そこに含まれた意味を、どう解釈すればよかったのだろう。

ただ、ハサンがふざけているのではないことだけは、ユウも理解できた。

「アレサンドロよ、頭を使え」

「だから、そんな暇はねえ。奴らはここに向かってる。俺たちを殺そうとしてやがるんだ！」

「そうではない」

「なにが、そうじゃねえんだ！」

アレサンドロの腕が、ハサンの胸倉をつかんだ。

「なんなんだ、てめえは！なんなんだ！」

ついに、懊悩が爆発した。

「いつもいつも物知り顔で、人をコケにしやがって！やっぱり、てめえが……てめえが俺たちを売ったんだ！てめえが、バイパーをここへ呼び寄せやがったんだ！」

「アレサンドロ！」

「止めるなユウ！止めるんじゃねえ！」

「！」

「俺とこいつの、どっちを取るかなんて……そんなくだらねえこと、聞かせてくれるな！」

ユウは、呼吸ごと、言葉を失った。

「……ハサン。今すぐここを出ていくか、俺に殺されるか選べ」

問われたハサンの唇からは、いつの間にか、笑みが抜けている。

「振り回されんのは、もう、うんざりだ。……選べ」

「殺したければ殺すがいい」

今度は、アレサンドロが言葉を失った。

「だが、今は考えろ。何故奴らは、聖石には目もくれず空調などを狙った。我々を殺すつもりならば、何故息をひそめ、ひとりずつ殺

そうとしない。足を止めるつもりならば、何故機関部を狙わない。ブリッジを狙わない」

「な、に……？」

「このまま行けば、我々が取るべき道はひとつ。呼吸の確保ために、地上へ顔を出すしかない。それこそが奴らの狙いだとしたら」

「……ま、さか……」

「そうだ。そこには必ず、オルカーンがいる」

目をむいたアレサンドロの身体が、二、三歩、よろめき下がった。

「こうなってはいずれ避けられんだろうが、知りながら飛びこめば、それは罠ではない」

さあ行け、と、ハサンが言う。

「行って火を消し、適当に蛇どもの相手をしてやれ。地上に出るにふさわしい場所はこちらで選定し、放送をかけてやる。直後の襲撃に備えろ」

業を煮やしたジョーブレイカーとクジャクが、身を引いたハサンの横から、まず飛び出していった。

「ハ、ハサン、俺は……」

「お前も行け、アレサンドロ。それこそ話す時間が惜しい」

「……」

「それとも、この首を取ってからにするか？……フフン、早く行け」

アレサンドロ、そしてユウも、その後を追った。

「さて……」

キャプテンシートへ腰を下ろしたハサンは、珍しく、深いため息をはいた。

「聞いていたな、セレン・ノーノ」

「ああ。らしくないね」

「フ、フ、まったくだ。……で、目ぼしい場所は、見つかったかな」

すでに航法士のサブシートへ移っているセレンは、モニターを見やり、

「いくつか。お好みは？」
「ンッフフ、それはこちらが聞きたい。少なくとも、艦砲の狙いを定めにくい場所。谷底か、山間がベストといったところかな」
「いいね。私も、そう考えてた」
「それは光栄だ」

最下層までの長い階段を駆けながら、ユウたち四人は無言だった。
アレサンドロと、そもそもが無口なジョーブレイカーは仕方ないとして、ユウの真横を走るクジャクさえも口を一文字に引き結び、目を、まるで汚らわしい毒虫でも見るように細く光らせている。
「クジャク」
ユウは、小声で問いかけた。
「どうか、したのか？」
「……」
もとよりユウには、腹の奥底までえぐろうという気があったわけではない。
すぐに、
「いや、いい。忘れてくれ」
と、言いかけたが、それより早く、
「……奴らは」
クジャクが口を開いた。
「奴らはトラマルにいた。十五年前だ」
「え……？」
ユウはとっさに、それがバイパーのことだとは気づかなかった。
「砦が落ち、奴らも死んだとばかり思っていたが……」
どうやら、はめられたのは俺の方だったようだな。そうつぶやいたクジャクの目には、明らかな殺意が宿っている。
十五年前。難攻不落の異名をとったトラマルが、何故陥落したか。
かつて砦長であったクジャクの、その目を見るだけで、ユウには

わかった気がした。

銛（もり）

ユウたちがバイパー部隊と遭遇したのは、やはり監視カメラの映像同様、最下層、貯水タンク付近の通路であった。

ここから考え合わせても、ハサンの推察は的中していると思わざるを得ない。もし仮に、ユウたちを殺す意思があるならば、もっと上層で顔を合わせるはずであるからだ。

だが、ひとつ。

「あの女がいない……？」

映像では確かに行動を共にしていたはずのシュナイデが、忽然と姿を消している。

固形火薬と信管を手にしたバイパーたち三人は、ユウたちに目をとめると、いっせいに抜刀した。

「コブラ！パイソン！アナコンダ！」

バイパーは、ぎょっと立ちすくんだ。

その名を大音声に呼ばわったクジャクが走り出ると、動揺は、ますます大きくなったようだった。

手にした鉄棍を回転させ、猛然と突進したクジャクの憤怒は、その動揺をさらに高めるような、すさまじいものだった。

「この、下衆虫が！」

気迫のこもった鉄棍に打ち払われ、バイパーの双剣が二本、あっという間に宙を舞う。

「むう……」

その戦いぶりに、ひと声うなったジョーブレイカーは、ユウの襟首をつかみ、

「ここはいい。奴と消火へまわれ」

アレサンドロを指し、あごをしゃくってみせた。

「私は、あの娘を追う」

「わかった。行こう、アレサンドロ！」

「あ、ああ……」
ユウは、気力を欠いた様子で戦闘に見入るアレサンドロの腕を引き、大きく迂回して、火災現場に向かった。

炎と煙の量が著しいのは、空調室よりも物資貯蔵庫である。
燃えやすい物が多かったのだろう、もうもうと視界を覆う煙は煤が多く、どこか油くさい。
途中、別の消火設備から簡易マスクを用意してきたユウとアレサンドロは、それを口にあてがい、ちょうつがいの外れかかった扉へと近づいた。
そうして十分も、炎と格闘しただろうか。
通路に設置された消火ホースからの放水と、スプリンクラーの作用によって、物資貯蔵庫が一応の終息を見せた頃になって、
『諸君』
ハサンの艦内放送がかかった。

『これより一分後、地上へ出る。以上だ』

実に簡素で、反復もなにもあったものではなかったが、艦内は、にわかにあわただしくなった。
まず動きを見せたのは、バイパーたち三人である。
かつてのように懐から煙幕を放ち、クジャクの目をくらませたかと思うと、わき目も振らずに底部のクルー用ハッチから艦外へ逃走した。
無論これを追い、クジャクもハッチまで出かかったが、漆黒の土の中、すでに三人の姿はない。
クジャクは舌打ちし、鉄棍を鳴らした。
さらにもうひとり、こちらは、ジョーブレイカーに追われるシュナイデである。
シュナイデは、帝都のマッドサイエンティスト、スダレフの命令

か、セレンの研究室において、データを盗みにかかっているところを発見された。

もし、ここでジョーブレイカーに手落ちがあったとすれば、シュナイデもまた『超人』であることを知らなかったことだろう。

生け捕りにしようと分銅綱を放ったところまではよかったが、サンセットの重量にも耐え得る肉体を持ち、死というものへの恐怖心を持たないシュナイデに真正面から組みつかれ、驚愕のうちに逃げられた。

その後追いつき、無情にも片腕切り落としたが、その手のひらに握られた手投げ弾が炸裂。それ以上追うことがかなわぬままに、シュナイデもまた、顔色ひとつ変えず、落とされた左腕の傷口を押さえようともせず、ハッチを転がり逃げていったのだった。

「……出るよ」

メイに代わり、操縦桿を握ったセレンの言葉に合わせ、マンムートは最後の岩盤を突き破った。

反り立った崖に切り取られた細い隙間から、青天が見える。

丁度、深い氷の裂け目に顔を出したマンムートは、すぐ両側を壁に挟まれ、万全の体制で敵を迎え撃つことができた。

敵とは、もちろん、

「来たぞ……オルカーンだ」

その、ひと握りの空を覆い隠し、巨人がのぞきこむがごとく現れた飛行戦艦だ。

後に、このオルカーンが何故マンムートを追跡し得たかが問題になったが、聖石の台車をくまなく調べることで明らかになった。

発信機が出てきたのである。

言うまでもなく、聖石を搬入した直後、メイの手により発信電波のチェックがおこなわれた。バイパーたちは、そのとき電源を切っておき、行動を開始すると同時に、スイッチを入れたのだ。

「敵、艦尾砲、転回します！」
「このまま走れ、セレン・ノーノ」
「ロックされました！き、来ます！」

……それは実に、砲声のみで装甲板がひしゃげるかと思われるほどの轟音であった。
が、砲弾はこちらの狙い通り、ことごとくが脇にそびえる氷の壁に撃ち当たり、崩れた氷塊もマンムートの後方を埋めるにとどまった。
「テリー・ロックウッド」
「あ、あい？」
キャプテンシートのハサンに呼ばれ、座りこんだままのテリーは身構えた。
なにを言われたわけでもないだろうに、額には、すでに冷や汗が垂れている。
「来い」
「は、はあ」
指でちょいちょいと招かれ、とりあえずは近づいたその首を、ハサンは、ぐいと引き寄せた。
「どうだ。撃ち落せるか」
「は？い、いやいやいや、うっそ！」
「だが、それしか手がない。どうだ、男になるか？なるな。よし行け」
テリーはあんぐりと口を開けたまま、全身で、この無茶苦茶な指令に対し抗議の意を示した。

と、次の瞬間。
「わあッ！」
ドッと、戦車全体が揺さぶられ、メインモニターにノイズが走った。

「どうした。撃たれたか」
「い、いえ！アンカー！アンカーです！」
つまり、停泊時に使用するいかりを、打ちこまれたというのだ。
トラマルでそうであったように、飛行戦艦オルカーンは、空中で補給を受けることもある。そのために、返しのついた銛のようなものを山肌や地面に射出し、艦体を固定するのである。
今、そのアンカーは最上層、丁度、居住区の辺りを、やや前方から貫いた。
そして……。
「ぬ！」
「きゃ、あ！」
なんと、この巨体が、宙に浮き上がったのである。
そう、体格差を考えれば、確かに可能なのだ。だが、戦艦が戦車を釣り上げるなど、誰が考えただろう。
「フ、ハ、ハ、ハ、面白い！誰だ！デューイ・ホーキンスか！紋章官か！」
ハサンは声を立てて笑った。
そうするうちにも、オルカーンはみるみる高度を上げ、それに引きずられるようにして、マンムートも持ち上げられていく。
クレバスを脱した瞬間、激しい横風にあおられ、艦内は大いに揺れた。
「テリー・ロックウッド！」
「あ、あ、あい！」
テリーは、十数本の酒瓶とララ、モチと共に、ブリッジの端まで転げている。
「作戦変更だ！」
「そ、よ、よかったよ！」
「この戦車の上から、奴の機関部のみを破壊しろ！落とさんようにな！」
「え、えええ？無理無理無理！」

ただ撃ち落すよりも、はるかに難しい。
「護衛はつけてやる！」
ハサンはインターコムを取った。
『ユウ！聞こえているな！』

その頃。
ユウもまた、通路の端にアレサンドロと折り重なっていた。
ブリッジの連中ほど状況を理解できているわけではなかったが、マンムートが空を飛んでいるらしいことだけはわかっている。そして、自分が出撃しなければならないこともだ。
『状況はおいおい理解しろ。お前が今なすべきは時間稼ぎだ』
ユウは、ハサンからの指示を、一言一句聞きもらすまいと集中した。
『すぐさま外へ行き、相手の気をそらせ』
ただし、
『後部ハッチは聖石が吸い出される恐れがある。底部ハッチから飛び降り、空中でＮ・Ｓを呼び出せ！』

「そんな……！そんな、馬鹿言ってんじゃねえ！」
アレサンドロが、届くはずのない非難の声を上げた。
一歩間違えれば、ユウは宙へ投げ出され、そのまま地面へ叩きつけられる。
『他の者は格納庫へ向かい、聖石を固定しろ。それが完了次第テリー・ロックウッドに出てもらう。さあ、行動に移れ！』
ユウは、壁を支えに立ち上がった。
「待て、ユウ！行くんじゃねえ！」
と、アレサンドロが腕をつかんだ。
「あんな……あんなのは俺が認めねえ！やばすぎる！」
「ああ、わかってる」
「わかってねえだろ！石を固定して、それからでも……！」

「アレサンドロ」
アレサンドロは、ユウが微笑んでみせたのに驚愕した。
「大丈夫だ。ハサンは、できないことは言わない」
「う……」
「アレサンドロが、ハサンを疑うのはわかる。あの人はあんな性格だし、いつも、人の神経を逆なでする」
でも……、と、ユウは思う。
「あの人は、嘘は言わない」
誰も信用するなとは、おそらく、言葉の真意を見逃すなと言っているのだ。
でなければ、信用していない人間に、命運を背負わせたりなどするものか。
「……俺には、わからねえ……」
と、首を振るアレサンドロに、
「俺だって、わかるのに十年かかった」
ユウは、それが当然であるかのように言ってみせた。
と……。
さらにここで、マンムートが揺れた。
窓の外を走った影に目をやれば、Ｌ・Ｊの姿。その風圧に押されたらしい。
オルカーン搭載のＬ・Ｊは、すべて首を落としてきたはずだが、トラマル常駐部隊のそれと積み替えてきたのだろう。型式が、やや古かった。
「行ってくる！」
「あ……ユウ！」
ユウは足を止め、振り返った。
「その……悪かったな」
「アレサンドロは悪くない。聖石を頼む！」
「ああ……」
残されたアレサンドロは、しかし一歩も動けず、俺はなにをして

いるんだと思いながらも、その場にひざをかかえ、うずくまってしまった。

マンムート最大の幸運は、シュナイデ逃亡の後、ハッチが開け放しになっていたことだろう。

でなければハッチを開けた瞬間、急激な気圧の変化により、マンムートは空中分解していたかもしれない。正直、そんな危険があることなど、ユウは露ほども知らなかった。

とにかく知らず知らずとはいえ、その危機を回避できたユウは、壁の突起を頼りにハッチへ近づき、下をのぞきこんだ。

……N・Sに乗ってでさえ、これほどの高みに昇ったことはない。

地面は遠く、風は、とてつもなく冷たい。

「ユウ」

モチが飛んできた。

「目が覚めてみれば、とんだことになったものです」

「眠いか？」

「少々。ま、もう少し我慢しましょう」

モチはユウの腕に収まり、ふたりは、互いの身体を強く握り合った。

「アレサンドロはどうしました」

「ああ……落ちこんでる」

「そうでしょう。彼の立場が、ハサンを疑わせたのです。もう少し早く、手を打つべきでした」

「……行こう」

「はい、いつでも」

ユウは、ハッチのスロープをくだりながら、何度も、心の中でシミュレーションをくりかえした。

そこへ……。

「待て」

突然の制止がかかった。クジャクである。
「俺も行こう」
「え……？」
ユウは、強風のために言葉を聞き間違えたかと思った。
「あなたは、Ｎ・Ｓを捨てたはずでは？」
モチが問うと、
「そのつもりだったがな……」
と、頬にかかる髪の束を、しなやかな指でかき上げてみせたクジャクの右耳には、鈍色のピアスが光っていた。

「恐れるな。自分をカラスだと思え」
「ああ、わかった」
ユウとモチ、そしてクジャクは、同時に飛んだ。
同じ空を見る、本日二度目の降下。
だが、気分はまったく違う。頬を、耳を、全身を切る風が、まるで刃のようだ。
右腕におさまったモチの柔らかな身体だけが温かく、ユウはその温度を、あたかも自分の心臓であるかのように抱きしめる。
強烈な風圧に、ともすれば押し戻されそうになる左腕を前へ突き出し……。
閃光が走った。
風をつかんだ背の翼が、ぐ、と身体を引き上げるのを感じ、ユウは、ああ成功したか、と、思った。

対して、クジャクはどうか。
クジャクは、N・Sカラスの出現をその視界におさめ、やや感傷的な表情を浮かべるだけの余裕があった。
降伏を促すために放たれたオルカーンの砲弾が、地上で爆風を巻き上げるのにも構わず。静かに伏せた目蓋を、再び開く。
直後。
瑠璃色の装甲も鮮やかに、この世で最も美しいとたたえられたN・Sが、光の中から姿を現した。
その最大の特徴は、なんといってもその長大かつ美麗な飾り尾羽で、短い本物の尾羽の上に、まるで、白い絹糸に金紗を散らしたかのような細羽が、末広がりに重なっている。
さらにその上には、金環を鎖状に連ねた極彩色の飾りが四房、これも長々と風に揺らぎ……もし、クジャクという鳥たちが王を頂く

社会を築いたならば、間違いなくこれこそがその姿だろうと、見る者すべてに思わせた。

クジャクは、手にした金色の六角鉄棍を回転させ、モチと同様、上手く揚力を操ることで高度を上げた。

『クジャク！』

『ああ。……十五年ぶりだ。期待はするな』

モチは、なにがおかしかったのか、ホホ、と笑った。

さて。

マンムートの周囲を旋回する鉄機兵団は、積み替えが間に合わなかったらしく、一個分隊十二機。背部スラスターとウイングブーストバインダーの併用により高高度での戦闘をも自在にこなす、一二〇〇系Ｌ・Ｊである。

が、カラスとクジャクが登場するや否や、それらのＬ・Ｊはくるりと向きを変え、オルカーンへ戻っていってしまった。

何故、と、ユウは思ったが、口に出すまでもない。答えはすぐにわかった。

撤退したＬ・Ｊと入れ替わりに、右舷ハッチから、別の機体が飛び出してくるのが見えたのだ。

白をベースにオレンジのラインを入れた、一種独特な直線的シルエット。腰にも手にも武器を持たず、高速で空を駆けまわるそれこそ、将軍デューイ・ホーキンスの操る、『神速のベネトナシュ』だ。

背に巨大なウイングを背負ったベネトナシュは、足裏に埋めこまれたスラスターの勢いも盛大に、ユウたちの真横へ、ぴたりとつくと、

『よう！』

指を立てて挨拶した。

『俺がデューイ・ホーキンス。スピードスター・ホークだ』

先の大戦でも血と泥を舐めた、三十六歳。将軍としては、最も職

歴の短い男である。
だが、逆に言えば叩き上げで、下級騎士の事情や下情によく通じているところから、民間出身者や、貴族でも若い兵たちの間で人気が高い。飲む打つ買うの遊び癖がいまだ抜けないことも、おおむね好意的に受け取られている庶民派将軍だ。
時折オルカーンを飛び出しては近場の町で遊び倒すため『病欠』が多いのだが、ユウたちが折よく、その病中に遭遇し、聖石を奪えたことを考えると、あながち悪癖でもないのかもしれない。
『やってくれるな』
と、いかにも兵卒上がりらしい気安さで、ホーク将軍は笑った。
親戚の子供と接するような、さっぱりとした笑い声であった。

『よし、とりあえず、そっちの名も聞いておこうか』
『……』
『言えんか。それもそうだ』
と、ここでも、ホークは笑う。
『だがまあ、そいつはちょいと、卑怯じゃあないか』
『え……？』
『お前さん方の仲間は、みんな名前を出して戦ってる。ララも、テリーも、セレンも。なあ、そうだろう？』
ユウは、その通りだ、と思った。
先の手配でも、自分とアレサンドロだけが、偽った名のままで公表されている。
そしてこれは、ユウの長所とも言えるだろうが、一度そういう思いに至ると、敵の前だというのに、申し訳ない気持ちで胸が詰まってしまった。
『……ユウだ。ヒュー・カウフマン』
モチとクジャクも、ユウにならった。
『そうか……どうやら、話の通じる相手らしいな』
ベネトナシュは、ドッとバーニアを吹かし、カラスとクジャクの

前に立ちふさがった。
と、そうなると、頭上を飛ぶオルカーンは低速とはいえ前進を続けているため、宙吊りのマンムート共々、距離が離れていく。
ならどうだい、と、ホークが本題の口火を切った。

『どうだい、お前さん方。ここは素直に、石を返しちゃあもらえんかな』
ベネトナシュが手を合わせた。
『お前さん方の言い分も、そりゃあわかる。N・Sなんてものを手に入れりゃあ、ちょっとした悪ふざけもしたくなるってもんだ。気もでかくなって、いざ人助け！ってな』
ひとり、ウンウンと、うなずく。
『だがなあ、世の中には、やっていいことと悪いことってのがある。お前さん方も子供じゃないんだ、わかるだろう？』
『……じゃあ』
『ん？』
『あんたたちのやってることは、悪じゃないのか』
ユウの言葉に、ホークは押し黙った。
『聖石は、月の神徒にとって、かけがえのないものだ。元の場所から動かして、それは悪じゃないのか』
『……』
『でっち上げて、もみ消して、また同じような戦争を起こそうとする。それは悪じゃないのか』
『随分と、難しいことを言うんだな』
コクピットのホークは操縦桿から手を離し、ユウが思うより、はるかに理知的な眼差しを手元に落とした。
その指先では、顎先にたくわえた髭を、無造作に引き抜くような仕草をしている。
『そうだな……善か悪かで言うなら、そりゃあ善とは言えんだろう。だが、良し悪しで言うなら良い方だ。国ってのは、そういうところ

で動いてる。……戦もな』
　ホウ、とモチがつぶやいた。
『俺は、政治のことはわからん。時には、まあ、嫌な戦もある。だから、こうして頭を下げることもあるが……どちらにせよ、一度こうと決められれば動く。軍人だからだ』
『それが、あなたの正義ということですか』
『いや、仕事だ。それで食ってる以上、やることはやらにゃならんだろう。大義正義を口にして、それで成るなら結構な話だが、そんなもんじゃあない。だったら、やるべきことをまずやる。やってから、道楽で正義をやる。そういうもんじゃあないか？なあ』
『……なるほど』
『ふ、ふ、まあ、なにが言いたいか、よくわからなくなっちまったが、そういうことだ。……で、どうだい。石を置いていってくれる気にはなったかい？』
『……断る』
　ユウには納得できなかった。
『そうか』
　と、ホークは操縦桿を握りこみ、
『それじゃあ……いっちょやるか！』
　フットペダルを踏むと同時に、右手親指で、グリップの先端カバーを開いた。
　現れたのは、スライド式のスイッチ。入れると、ベネトナシュのデュアルアイが、まばゆく光る。
『む……！』
　とっさにカラスの腕を引き、退いたクジャクの目の前で、背のウイングは両肩へ、両脚は九十度回転しつつ、折りたたまれた胴体のその後ろへと、ベネトナシュは、まるで立体パズルでも組み立てるように変化していく。
　時間は一瞬。
　最終的な形態は、人型さえもしていなかった。

『鳥？……いや』

機首と両翼、そして尾翼をして巨大な矢じりのようにも見える神速のベネトナシュは、矢柄との接合部に当たる一辺に、先ほどまでは足裏にあった大型スラスターを四基、横一列に連ねている。

雲を引き、上空高くまで駆けのぼったそれは、メインスラスターのカットとエアブレーキの併用によって減速し……、

『お。こいつは、いい眺めだな』

機首を直下へ返すや否や、ゴウッと、陽炎を噴射した。

それは、実に恐るべき速さであった。

ベネトナシュが、翼を広げたカラスとクジャクの間を通過した、と思う間に、竜巻にも似た猛烈な衝撃波、雷鳴のごとき爆音が続く。

『ム……！』

きりもみするカラスの体勢を、モチはどうにか整えたが、かすりもしなかったはずの右翼の羽根数枚が散り落ちた。

これも、いまだかつてなかったことだ。

『モチ』

『いえ、問題ありません』

モチは、つとめて冷静を装った。

『しかし……なるほど』

ふれれば、五体確実に四散する。それが強烈に印象づいたのは間違いない。

『クジャクは？彼はどうしました』

『ここだ』

クジャクは、ふたりの真上にいた。

一方。

『く、う、う！たまらんぜ！』

スピードスター・ホークの最大の楽しみは、この疾走感、そして、全身をがんじがらめにする重力である。

それは、飲む打つ買うの一時的な喜びはもちろんのこと、空の青さや、この星の美しさなどという一種形骸化した美をも超越した魔力をもってホークを魅了し続けており、これはもう、中毒と言ってよかった。

全身を駆けめぐる強烈なアドレナリンの渦に気を高ぶらせたホークは、同じ遊具に何度も乗りたがる子供のような心境でスポイラーを展開し、ベネトナシュの体勢を整えた。

『大将』

『おう、どうした』

メインモニターに映し出されたのは、オルカーンをまかされた、あの髭面の年寄り、紋章官ヨーゼフ・グレゴリオ。

オルカーン初代艦長である先代将軍の時分から、その右腕、紋章官として仕えてきた人物で、現将軍ホークにあっても、『とっつぁん』などと頼りにされる大黒柱である。

もっとも、それをいいことに将軍が遊びまわるものだから、グレゴリオとしては頭が痛い。

『L・J、いつでも出せます。敵戦車制圧の許可を』

と、型通りの提案をしつつも、はなからホークの性分など承知の上。

『おいおい、つまらんことを言うな』

『……と、言われると思いましたわい』

グレゴリオは苦笑いした。

『ギュンターの坊主から、また通信が入っとりますが、こちらは?』

『なんだって?』

『早く地面に降ろせ。N・Sはこっちでやる、とかなんとか……』

すると、ホークは即座に、

『故障だ!』

『はあ?』

『オルカーンの通信機器は、たった今から故障だ!』

それと聞いたグレゴリオは大いに笑い、威勢のいい敬礼を返して、

通信を切った。

光彩陸離

『テリー・ロックウッド。あの男を出すと言っていたな』
『ああ』
クジャクの、冷静そのものの問いかけに、ユウは、何故か次の行動に移ろうとせず周囲を旋回してばかりいるベネトナシュから、目を切らずに答えた。
音速を超えるベネトナシュの軌道を見切る。こうして言えば、まるで馬鹿げたことのようにも聞こえるが、その速度ゆえ容易に舵を切ることができないだろうことを考えると、決して、無駄な行為ではない。
少なくとも、空中戦をモチに頼り切っているユウにとっては、これがただひとつ残された仕事であった。
『テリー・ロックウッドにはライフルがある』
『ああ。ハサンは、オルカーンを撃たせる気だ』
ユウのこの考えも、あながち間違ってはいない。
ただ、撃つのはオルカーン本体ではなく、心臓部。それひとつでもL・J十数機をまかなえる巨大光炉をさらに五つ連結し、互いに電力を供給し合いながら膨大なエネルギーを発生させる、『五連重光炉』である。
その、最も外側に位置する光炉を狙い撃ち、あくまでも墜落させないよう、出力だけを殺そうというのだ。
『とにかく今は、彼に賭けるしかありません。我々は時間稼ぎ、それだけです』
クジャクは、そうだな、と答えた。
『とはいえ、さ、どうしたものか……』
『モチ』
『はい？』
『将軍機を向こうへ近づけるな。あの風は危険だ』

『……了解です』
『ユウ』
『ああ』
『俺が奴の足を止める。隙を逃さず、斬りつけろ』
ユウは驚愕した。
斬るということにではない。クジャクが、ベネトナシュの足止めをするということにだ。
『できるのか？そんなことが』
『わからん。だが、やってみよう』
『それも期待するな、ですか』
『フ、フ、運次第だ。……さあ来るぞ。行け』
カラスとクジャクは、直後通過した衝撃波の渦に乗り、ふた手に分かれた。

『スピードスター・ホーク！』
『むん？』
再び機首を返したベネトナシュの鼻先へ、鉄棍を振りかざしたクジャクが迫る。
『ほう、加速する前にやってやろうって腹か！』
ホークは機体底面のサブノズルを操り、上手く、西向きの強風へ翼を乗せた。
アクロバットさながらに下降するベネトナシュを、クジャクも同様の動作で追いすがり、
『逃がさん』
顔の前で刀印を結ぶ。
『どうだ……』
誰に問うともなしにつぶやいた言葉は、風に乗って消えてしまったかに思えた……。
……が、次の瞬間。
四房に垂れた鎖状の飾り尾羽が、四方へ分散したのである。

『な、なんだ、ありゃあ？』

飛び散った尾羽は、一枚一枚が薄い円盤状をしており、光炉もモーターも持たないというのに、それぞれが独立して回転している。

それが自在に飛びまわり、ぴたり、空中で止まったときには、まるで本物の尾羽が開いたかのように、見事な幾何学紋様がクジャクの周囲に描き出されていた。

『こ……こいつぁ……』

たなびく細羽の溶けこんだ大気が金の薄霞と化し、感じるはずのない異国の芳香さえ漂ってくるようだ。

コクピットに差しこむ幻光は温かみさえ帯び、言葉を失ったホークは、その神々しいまでの美しさに目を奪われた。

『……将……！』

『う……』

『大将！上じゃあ！』

『！』

ホークは、とっさに上を見た。

キャノピー越しに映る影。

仰角一杯上空から、カラスが、うなりを上げて降下してきている。

ここでまず上を見ず、なにかしらの操作をしていれば、あるいは、この攻撃をかわすことができたかもしれない。

だが、ホークは見てしまった。

見た分だけ行動が遅れた。

『チィッ！』

ホークは、自ら犯した至極基本的な失敗に舌打ちしつつも、ベネトナシュを小まわりの利く人型モードへと変形させる。

しかしそれもまた、次の行動を遅らせる要因となってしまった。

すでにカラスは目の前にあり、クジャクも真横にある。

光鉄と合金を重ね合わせた、ベネトナシュ唯一の武器とも言える背のウイングでクジャクの鉄棍を弾いたが、もう後が続かない。

カラスの刃が閃く。
『……フ』
ホークは観念の眼を閉じ、緊急脱出装置へと指を伸ばした。

と……。

『右舷側砲！てぇぇい！』
ここで、右九十度回頭したオルカーンから放たれた砲弾が、ものすざまじい音を立てて飛びこんできた。
実戦経験には乏しいクルーたちだが、操艦訓練、射撃訓練は、毎日のようにおこなっている。
無論、照準も測距も適当に打ち出したものだから命中はしなかったが、四百六十ミリ徹甲弾は、ユウがひやりとするほどすぐそばを通り抜け、彼方の山に大穴を開けた。
『とっつぁん！』
『とっつぁんじゃあない！ぼうっとしくさってからに！』
と、以前上官だったグレゴリオ紋章官だけに、こうなると容赦ない。
今にも、モニターを突き破って拳が飛んでくるのではないかという剣幕に、ホークは嬉しげな微笑を浮かべ、首をすくめた。
『で、どうするホーク、引くか』
『ハ、ハ、まさか。とっつぁんのくれたチャンス、活かさせてもらうぜ！』
ベネトナシュは再び姿を変え、絶え間ない砲弾の雨の中を飛び出していった。

さて、そうなると困るのが、カラスとクジャクである。
ベネトナシュがチャンスを得たと同時に、こちらは千載一遇のチャンスを逸してしまった。
それどころか今は、オルカーンの援護射撃まで相手にしなければならなくなってしまったのである。

『くそ……どうする』
『どうする必要もない』
クジャクは言った。
俺たちは時間を稼げばいい、と、先のモチの言葉をくりかえし、
『戦艦の目も俺たちに向いている。それこそハサンの望み通りだ。目を開けていれば弾など当たらん』
いまだ光背然とした円盤群を背負いながらの、その泰然とした姿は、納得の砦長ぶりであった。
『……フ、フ』
『クジャク？』
『いや。……十五年とは、短いものだな』

クジャクは、刀印を再び胸元に置き、なにか祈りを捧げるような素振りを見せたかと思うと、す、と伸ばした印の指先で、前方を指し示した。
そこには、軸合わせを完了したベネトナシュと、迫りつつある十数発の砲弾がいる。
ベネトナシュとは比較的距離があったが、砲弾に至っては、その回転が確認できるほど近かった。
『……行け』
と、クジャクの口から、ごく静かな命令が下された、そのとき。
背後に散らばる数十枚の円盤が、ピィィンという、なんともいえない摩擦音を巻きながら、空へ散開した。
この円盤の正体、いわゆる戦輪、チャクラムである。
環の周囲を刃で囲った投てき武器で、本来、指で回転させて投げ打つものだが、クジャクの場合、それは念動力で動く。
四、五枚ずつの編隊を組んだチャクラムが、鉄を穿つ徹甲弾の軌道と交差したとき、小規模な爆発がそこここで起こった。
降り注ぐ鉄片と爆煙のために、ベネトナシュは再び、機首を引かざるを得なくなった。

スナイパー

徹甲弾の軌道とはかなりの距離があったとはいえ、宙吊りのマンムートは、またしても揺れた。

前後左右ならばまだいいが、上下となると具合が悪い。テリーのL・J、シューティング・スターは、ようやくたどりついた甲板の上で、這いつくばるようにして風が通り過ぎるのを待つ。

その間、テリーがしたことといえば、水筒に用意した酔い覚ましの水を飲み、ブリッジから転送されてきたオルカーン内部の見取り図と、目の前の視界を堂々と埋めるオルカーンの後部とをつき合わせる、このふたつであった。

『さ、て……』

揺れがおさまったのを見計らい、シューティング・スターは伏射の姿勢をとった。つまり、腹ばいから上体のみを起こし、ひじでライフルを支える射撃体勢である。

テリーは、シューティング・スターの重心が板面に落ち着き、安定状態に入ったのを確認すると、

『ロック』

低く、つぶやいた。

『スナイパーモード、スタンバイ』

すると、コクピット内に、ウウ、とモーター音が起こった。

動いたのは、テリーの座るリニアシート。それがレール上をスライドし、一メートルほど後方へ移動する。

次に、シート裏のホルダーから、愛銃ラッキーストライクを引き抜いたテリーは、コードのついたスコープを所定の位置へはめこみ、ななめがけした弾帯の、丁度、自身の心臓の位置におさまった弾丸を抜いた。

これだけは、ただの弾丸ではない。薬きょうに関しては他と同じ

金色だが、弾頭が、透き通ったマリンブルーをしている。
テリーはそれにキスを落とし、薬室（チャンバー）へと押し入れた。
これで、準備は完了である。
ライフルを構え、
『リンク』
そのひと言で、テリーのライフルと、シューティング・スターのライフルとが接続した。
今、メインカメラからの外部映像はスコープを通して表示され、代わりに正面モニターには、観測手さながら、風向、風速、距離その他、ひどく角ばったデジタルフォントが並んでいる。
挿入された例の弾丸の内部では、常時、連動用の高精度変位センサーが射出角を割り出しており、これが、テリーの微調整を、寸分たがわずシューティング・スターへ伝えてくれるのである。
ちなみに、スナイパーモード時のみ、排きょう、装填の一連の動作はセミオートでおこなわれ、フットペダルがその役割を担っている。
すべての接続が良好であることを確認したテリーは、唇をすぼめ、細く長く、息をはいた。

いまだ謎の多いジョーブレイカーは別として、テリー・ロックウッドは仲間内で唯一、近代的な軍事訓練を受けた男である。
正々堂々をよしとする騎士道を排し、団体行動などという軍そのものの概念を排し、自分自身さえも念頭から排除するよう教育されたこの男は、ひとたびスナイパーとして戦場に立てば、別人のように心を空しくすることができた。
……いや。あるいはこの性質こそ生来の才能で、そこを将軍ケンベルに見出されたのかもしれない。
テリーは険しい顔ひとつせず、まるで草原に舞う蝶を追うような目つきでスコープの奥を眺め、よく訓練された両腕が、目標である

オルカーン装甲板の継ぎ目に、スコープの十字を合わせてくれるのを待った。
そして、意思がこれといった命令を下す前に指が動き、着弾を確認する前に、当たった、と感じた。
弾丸は狙いあやまたず、五発、同じ場所へ命中した。

「ぬ、おお！な、なんじゃあ！」
「重光炉破損！第一、第二光炉が全壊です！」
「原因は！」
「ま、待ってください！」
赤色灯とサイレンの中、オルカーンブリッジは騒然となった。
背を突き飛ばすような大きな揺れは一度。だが、それ以降は出力が上がらず、高度がみるみる落ちていく。
右舷側砲も射撃を中止し、オルカーンは、走りまわるクルーたちの靴音と喧騒とで、すぐ隣にいる者との会話さえ困難になった。
「ええい、早く火を消さんか！機関長はどうした！」
「も、紋章官殿！狙撃です！狙撃されたようです！」
「なにい？そんなわけあるか！」
と、オルカーンのメインモニターに、艦尾下方カメラの映像が映し出された。
鼻先をなめ上へ向けたマンムートと、その甲板に張りつくシューティング・スターである。
「テリー・ロックウッド？なんちゅう奴じゃ！」
グレゴリオは驚嘆した。
そこへ、
「紋章官殿！閣下より通信です！」
「つなげ！」
画面が変わった。

『とっつぁん、どんな具合だ？』
「はあ、こいつはいけません。第一、第二がやられました」
『飛べるか？』
「今、復旧作業をさせとりますが、難しいですな。出力が半分以下に落ちとります」
『そうか……わかった。アンカーを切り離せ。トラマルに戻る』
「はあ？し、しかし……」
『構わんさ。ギュンターのこともある。だろう？』
「はあ……」
『どこか適当な場所を見つけて、上手く降ろしてやってくれ。俺からのせん別だ』
「……了解です。大将は？」
『もうひと揉みしてくる。こっちはこっちで、面白くなってきたんでな』

後部から黒煙を噴きながら、オルカーンは高度を下げていく。
切り立った山の頂をかすめ、ゆるやかな白い斜面へ、マンムートは滑るように近づいた。
「早いな……」
と、ハサンがつぶやいたのは、物理的な速度に対してか、それとも、スピードスターの決断か。
それがどちらであろうと、現実はハサンにとって好ましくない方向へ進んでいるらしく、その口からは珍しく舌打ちが聞こえ、そしてこれも珍しいことに、はた目にはそれとわからないほど素早く軽く、指が額と胸にふれた。
「ハッチは閉じているな」
「は、はい、でも……！」
「全員衝撃に備えろ」
インターコムを通したその声が、いやに無情に、艦内を響き渡る

か渡らないかのうちに、その滑らかにも見える雪面へとキャタピラが接地し、直後、激しい衝撃がマンムートを襲った。
「きゃッ！」
「くッ……！」
マンムートは、轟々と引きずられながら大量の雪をかき集め、双角も見えなくなるほどに埋もれていく。
その振動は、やもすれば、この鋼鉄の巨体が粉々になってしまうのではないかと思えるほどで、すでにアンカーのロープがオルカーン側から切り離されていたことさえ、誰も気づかなかった。

……そう。
その中では、これは仕方のない事件だったのかもしれない。
衝撃を受け、甲板をバウンドしたテリーのシューティング・スターが大きく空を舞い、氷の斜面をなすすべもなく滑り落ちていったことなど、誰も気づかないのが当然であった。
いや、わかっていたところで、誰にも救うことはできなかっただろうが、オルカーンの機関部を狙うと決めた時点で、こうなる可能性がある程度存在していただろうことを考えると、ハサンによって仕組まれた人災と言えないこともなかった。
『くッ、う、う、うう！』
すでにモード解除していたテリーは、必死に操縦桿を操ろうともがいたが、想像以上に氷が硬い上、命よりも大切なラッキーストライクをかかえたままで、思うようにいかない。
どうにかシューティング・スターの手足を突っ張り、丸太のように転がることだけは阻止したが、はたと気づいたときには……、
『あ……！』
目の前に巨大なクレパスが、黒々とした大口を開けていたのである。
『……ああ……』
これで終わりか。

テリーは操縦桿からも手を離し、奇妙な浮遊感の中、ラッキーストライクを強く抱いた。

思い出すのは師と仰いだ、あのしわの深い、温かい微笑みばかりであった。

勝利の代償

そのとき、神風が吹いた。
実際には、そんな生易しい風ではなかったが、確かに吹いた。
ゴッ、と突き上げるような衝撃を、背後、つまりクレパスの奥底から受けたシューティング・スターの機体は、まばたきする間に天空の高みへと引き上げられている。
言うまでもなく、シューティング・スターに飛行能力はないのだが……不思議なことに、モニターから見えた空は、そこへ張りつけたかのように静止していた。
『よう、生きてるか？』
『……え？』
テリーは呆けた頭で、周囲を見まわした。
『おう、生きてるな』
『ホ……ホークさん』
シューティング・スターは、人型ベネトナシュの腕に、しっかりと支えられていたのである。
『久しぶりだな、テリー』
『……』
『どうした。やっぱり死んだか』
『……そうかも』
『ハ、ハ！』
『ハハ……ホークさんは、変わらないなぁ』

テリーが紋章官であった三年前。ホークは、Ｌ・Ｊ下手な将軍に代わりベネトナシュを乗り回してはいたが、まだ、機兵総長であった。
年齢も入団時期も、昇進速度も違うふたりだが、それでも同じ西部出身で馬が合い、当時は一緒になって、随分と悪さをしたものだ。

そういう意味ではこのふたり、兄貴分・弟分というよりは、歳の離れた親友同士、と言った方がいいかもしれない。

『いよいよ、ジイ様とやる気になったようだな』

嬉しげに言うホークに、

『うん……どうかな』

テリーは力なく笑い、首をかしげた。

『まだ、金がたまらなくてね。自信がないよ』

と、こういう弱音を素直に見せられる間柄、ということである。

『なあに、いざとなれば、メラクなどいらんさ』

『ええ?』

『射程に不安があるのなら、弾が届くところまで近づけばいい。お前は腕を上げたし、仲間がいればできる。要は、土俵を大きくするか、小さくするかの差だろう?なあ?』

『……うぅん』

『おいおい、しっかりしろ。ジイ様に勝って、一番になるんだろう?……そら、お迎えが来たようだぞ』

見ると、遠く足の下から、カラスとクジャクが近づきつつある。

『行くかあ』

『え、ちょ、ちょっと待った!ゆっくりお願いします!ゆっくりぃぃッ!』

テリーの叫びもむなしく、ベネトナシュはブースターをカット。自由落下という、ひどく合理的かつ恐ろしいやり方で、地上へ降りた。

『てなわけで、今日のところは痛みわけだ』

そう言ったベネトナシュは、来たときと同様、指を立てて別れを告げた。

そのときもユウは思ったが、この将軍機は今まで出会ったどのＬ・Ｊよりも、人間らしい動きをする。

『聖石は、お前さん方が預かっておいてくれ。いずれ必ず取りに行

く』

と、わずかに浮いたベネトナシュの足元が、ブースターの高熱で溶解し、大穴となった。

『あと……そうだな。これは軍事機密ってことになるのかもしれんが、お前さん方を追って、全軍が動き始めてる』

『う……』

テリーが、わずかにうめいた。

『ギュンターの一軍もトラマルの辺りまで来てたんだが、まあ、この山ん中だ。ミザールとアルコルが追っついてくるのは、まだ先のことだろう』

上手く逃げろよ、ホークは笑った。

『テリー』

『う、あ、あい』

ベネトナシュが、機械の胸を親指でつつき、そのまま立ててみせる。

『……ん』

テリーも同じ動作で返した。

『じゃあな、あばよう！』

蒼天高く舞い上がったベネトナシュは、オルカーンの引いた黒煙を追って、南の空へ飛び去っていった。

……さて。

前半分を雪に埋もれさせたマンムートは、幸運なことに、落下による損傷をそれほど受けてはいなかった。

これはもちろん、走行に必要な部分が、という意味であり、オルカーンのアンカーは依然突き立ったままワイヤーを垂らし、その亀裂と、開かれたＬ・Ｊハッチからは、わずかながら黒煙が上がっている。

この煙を見たとき、ユウはまだ火が残っていたかと慌てたが、貯

蔵庫と空調室から出た残留煙だとわかり、ひとまず胸をなで下ろした。

聖石も、無事だった。

『とりあえずは、我々の勝利といったところですか』

『ああ……たぶん』

『しかし、これからまた忙しくなりそうです』

一足先にN・Sを降りたモチが、格納庫の床へ舞い降りた。

その後を追ったユウが、カラスを指輪へ戻したところで、

「ユーウー！」

駆けてきたのは、大きめのコートを着こみ、シルエットがペンギンのようになったララである。

「ユウ、おっ帰り！」

「ああ」

「テリーもお帰り！やるじゃない！」

と、ララは、L・Jをベッドに固定し終えたテリーを褒めそやしたが、

「うん、あんがと」

本人は、どうも気のない返事をした。

あるいは、ただ単に疲れているだけかもしれないが、やはり動き始めた鉄機兵団、いや、オットー・ケンベルの存在が気になるのか、先ほどから極端に口数が減っている。

「なにさ、みんなして変なの」

ララは、硬く目を閉じ、フラフラと右往左往するモチを抱き上げ、頭をなでた。

「皆が変、ですか。やはり、アレサンドロはまだ……」

「うん。ていうか、ジョーも変だし、ハサンも変だし」

「ホウ？」

「……クジャクも変？」

モチは、フム、と頭をまわした。

これは由々しき事態である。
帰る道すがら、クジャクとユウのやり取りを耳にしていたモチは、十五年前、トラマルで起こった事変については聞くともなしに聞いている。
ゆえに、クジャクやテリーの心中は察して余りあるが、あのジョーブレイカーが『変』とはどうしたことか。
さらには、アレサンドロから伝播したであろうハサンの変化。
やり方はどうあれ、常に俯瞰の視点を持ってメンバーを救ってきたそのふたりに混乱をきたされては、鉄機兵団の襲撃を待たずして内部崩壊する恐れがある。
これからを考えなければならない今この時期において、それは、どうあっても避けたい。
隣で話を聞いていたユウも、モチと同様の思いであったが、もうひとつ、思うところがあった。
「ユウ。あなたはジョーをお願いします。私はハサンと話してみましょう」
「いや……俺はアレサンドロが先だと思う。嫌な予感がするんだ」
「フム……」
モチは、一瞬の沈黙の後、うなずいた。
「しかし、彼に必要なのは時間です。あなたにまかせますが、無理押しは避けてください」
「ああ、わかってる」
「ね、あたしは？」
「女性陣に変わりはありませんか？」
「うん、ダイジョブ」
「ならば、あなた方はいつも通り、上手い食事でも用意してください。女性の手料理は、気落ちした男にとってなによりの薬です。そうでしょう、ユウ」
「だから、知るか」

……しかし、その後。

ユウの予感は的中することとなる。

どれほど手を尽くしても、マンムートの中に、アレサンドロの姿を見出すことができなかったのだ。

「しまった……！」

どうにもならない胸騒ぎを覚え、ユウは、Ｌ・Ｊハッチを飛び出した。

砂のような氷の粒が、痛いほどに頬を打つ。
憎らしいほど青い空の下。マンムートを見下ろす、せり出した岩盤の上に座るのは、アレサンドロ。
「こんなところにいたのか」
「……ユウか」
アレサンドロは、背を向けたまま答えた。
あの、ジャッカルと出会ったロストンの町でもそうだったが、こうしたとき、アレサンドロは顔を見られることを恐れるかのように人目を避け、ひとりの殻に閉じこもる。
今回のユウは隣に座ろうとせず、少し距離を置いて、アレサンドロの背へ語りかけた。

「アレサンドロ。下に戻ろう」
「……」
「アレサンドロ」
「なあ……ユウ」
「ん……？」
「お前……指輪を返してくれるか」
抑揚なく、しかし、はっきりとつぶやかれたその言葉に、ユウは言葉を詰まらせた。
「別に、今ってわけじゃねえ。戦車で、とりあえず近間の町に出て……そこでいい」
「……」
「そこで別れようぜ。……俺は、ひとりでアルケイディアに行く」
「……死ぬのか？」
それは、確信に近かった。
「あんたは、そこで死ぬのか？」

アレサンドロは、泣いているのではないかと思える声で、笑った。
「お前だって、わかってるはずだぜ。俺はもう駄目だ。これ以上、あいつらを引っ張っていくことなんかできやしねえ」
ユウが、首を振る気配がする。
「俺は、オオカミにも、クジャクにもなれねえんだ。普段はどうにかなっても、ちょっとしたことで、すぐ頭が駄目になっちまう。勝手に疑って、勝手にへたれて……こんな奴が、リーダー張るわけにはいかねえだろ？」
「……別に、ハサンは気にしてない」
「いや、ハサンだけのことじゃねえ。あいつが白だとわかっても、次になにかあれば、俺は別の誰かを疑う。それは、ジョーかもしれねえし、お前かもしれねえ。そんな自分が、もう、嫌になっちまったんだ」
「だからって、あんたひとりがアルケイディアに行って、死んで、それで解決になるのか？みんなもう、ここまで来たんだ」
「だったら、テリーに頼んで俺の首を持っていってもらえ。全部俺ひとりがしたことにして、お前らは、また元の鞘におさまりゃいい。カラスとオオカミは、お前とクジャクにまかせる」
「……」
「……ハ、わかっただろ。俺はもう、駄目なんだ……」
「おお、まったくだな」
「！」
アレサンドロは、飛び上がるほどに驚いた。
突如切り替わった声に、まさかと思い振り向くと、
「ハ、ハサン……！」
憮然とした顔つきで立っていたのは、その男。
「ユ……ユウはどうした！ここにいたんじゃねえのか」
と、その姿を探したが……ハサンは、フンと鼻で笑い、
「ユウ？ユウとは、『俺のことか』？」
アレサンドロは、驚愕を通り越し、唖然となった。

ハサンの喉から出された声が、ユウそのものであったのだ。
「……だましたな」
「フン、声帯模写など馬鹿でもできる。ユウはしてみせなかったか？ん？」
「ユウは、てめえみてえな悪趣味は持ち合わせてねえ」
「それは失礼」
ハサンは、マントの内から取り出したパイプへ、キザったらしい手つきで草を詰めた。

「で……今の話、本心だろうな」
煙が漂う。
「だったらなんだ。もう少し頑張れとでも言ってくれんのか」
「フフン、そう言ってもらいたいか、坊や？」
「……帰れ。もう、あんたとは話したくねえ」
「まあ、待て待て。今のは私が悪かった。これでも私は、お前をなぐさめにきてやったのだ」
……なにを白々しい。アレサンドロは思った。
どう取り繕おうと、結局は、人の泣きっ面を拝みにきただけではないのか。
「帰ってくれ。もうひとりにしてくれ」
アレサンドロは顔をそむけた。
しかし。
「アーレサンドロー」
相手は、元々が他人の心情や都合をしん酌する男ではない。ハサンは堂々と隣へ腰かけ、絶壁に足をブラブラとさせ始める。
「……あんた」
「ンーン？」
「誰も信用しねえってのは、ダチが少ねえのをひがんでるだけじゃねえのか」
「ンッフフフ」

ハサンは煙を含んだまま、さもおかしげに笑った。
「私は、百人の友より、ひとりの親友を選ぶたちでな」
「それがユウか」
「おお、私は親友と言ったぞ、アレサンドロ。あれはただの拾い物だ。おまけに今は、持ち主が代わった」
そう言う視線の向こうでは、丁度、マンムートがかぶった雪を振り落とし、半分埋もれた状態から回復したところである。
「さて、アレサンドロ。なぐさめてやろうか。……なに、聞きたくなければ聞き流してくれて結構」
ハサンは、勝手に話し始めた。
「まず、私の率直な意見だ。確かにお前は経験も浅く、少々被害者意識が強い。頭はまわるが、それゆえに混乱も多く、仲間を大事にしすぎるがゆえに決断も遅い。目は曇りがちで、ペシミスト」
「……」
「だが、そう、平たく言えば、人望がある」
「ねえよ、そんなもの」
アレサンドロの考える人望とは、カリスマ性に近い。
人を集め、導き、応える存在。つまりオオカミであり、クジャクであり、カラスである。
魔人と自分をはかりにかけようとさえ思ったことのないアレサンドロにとって、それは絶対的な自己評価だった。
「大体、今の連中だって、俺に期待して集まってきたわけじゃねえ。……あんただってそうだろ」
「そら、そこが目が曇っているというのだ」
「……？」
「他の連中はさておき、このシャー・ハサン・アル・ファルドの目的は、お前だ。アレサンドロ・バッジョ」
「なに？」

ハサンは、アレサンドロの鼻先へ、ぐいと顔を近づけた。
「お前は前に言ったな。いかなダイヤモンドでも、金づち一本で粉々になると。そう、お前はまさにダイヤの原石だ。最高の輝きを内に秘めながら、傷つけられようもないものに、いとも簡単に傷つけられてしまう」
「……見え透いた世辞だぜ、ハサン」
「別に褒めてはいない」
所詮今は、ただの石だと言っているのだ。
「しかしだからこそ、お前を磨いてやりたい」
「……それが人望か？」
「フフン、痛いところを突くな。だが少なくとも、私の興味は引いている。それだけでも自信を持っていい」
「俺に……なにを期待してる」
するとハサンは、にやりと笑い、
「それは、お前がダイヤになってからのお楽しみだ」
顔を離した。
「なあ、アレサンドロよ。一度や二度の失敗を悔やむことはない。いくらでも開き直れ。いくらでも私のせいにするがいい。どの道へ進もうと、この魔術師が、お前の望みをすべてかなえてやる」
だから……、
「もう少し頑張れ」

「……プ、フ、ハハ、ハ」
アレサンドロは、思わず吹き出してしまった。
「ずるいぜ、あんた」
「ンッフフフ」
世に、なぐさめ方は様々だが、どれも最終的には、笑いを引き出す、ということに行き着くだろう。
そうした意味では、ハサンの勝利だった。
「さて、あとは自分で考えろ。生きるもよし、死ぬもよし」

ハサンが立ち上がる。
「だが、お前が死んだところで、世界はなにも変わりはしない。私ならば、生きて世界を変える」
そのための力も才能も、すでにそろっているのだと、ハサンは元来た道を戻り始めた。
「ハサン！」
「んん？」
「……あんたを、信じてもいいのか……？」
「フッフ」
ハサンはパイプを振り、白い斜面を下っていった。

「アレサンドロ・バッジョ」
「ッ！……ジョー、見てたのか」
アレサンドロは、またしても誰かに驚愕させられてしまったことを憎らしく思いながら、大きく息をはいた。
すぐ隣、亡霊のように直立するのは、まさに白装束のジョーブレイカーである。
神出鬼没というが、いつ、どのようにしてこの距離まで近づいたのか。
「勘弁してくれ」
それが、正直な感想だった。
「ジョー。今のは……ユウたちには黙っててくれ。まだ、どうなるかわからねえんだ」
ジョーブレイカーは答えず、ただ、座るアレサンドロに視線を合わせるべく、ひざをつく。
「お前までやめてくれ。もう少し時間……」
と、言いかけた言葉をさえぎり、懐から差し出されたのは、細長い布包みである。
「……これは？」

「見ろ」
意外にずしりとした布包みを開くと、現れたのは、白々とした女の左腕だった。
一瞬ぎょっとしたが、すぐに、あのシュナイデのものであると気づき、
「……そうだな。お前はそういう奴だったよな」
なぐさめの言葉を想像した自分が馬鹿だった、と、アレサンドロは苦笑した。

「ひとついいか、ジョー」
「なんだ」
「お前は……俺がリーダーにふさわしいと思うか？」
ジョーブレイカーの深緑の瞳が、ふ、と、アレサンドロを見返した。
期待も、哀れみも、絶望もない。
この目ならば、客観的な評価を下すことができる。そう確信させる目だ。
アレサンドロは、どのような辛らつな言葉にも気を乱すまいと、固唾を呑んで次の言葉を待った。
「私が主と仰ぐのはただひとり。お前ではない」
「主……？」
「メイサ神殿大祭主、カジャディール様」
「じゃ……お前はユウを守るために……！」
「いや」
ジョーブレイカーは首を振った。
「私は見届けるだけだ」
それが、カジャディールより受けた命令だからである。
「だが……」
「うん？」
「仲間のために戦うということはあるだろう。お前も、そのひとり

だ」

……まさか、である。

アレサンドロの脳は、このらしからぬジョーブレイカーの言葉をどのように捉えればいいのか、その収拾をつけるのに難儀した。

しかし同時に、

「そうか……それでいいんだな」

と、自分の魂ともいえる部分が、妙に納得したのも事実だ。

アレサンドロは事ここに至って、ようやく目の開ける思いがした。

さて、腕である。

ジョーブレイカーの切り落としたそれは、ひじから先。逃走の際、自ら爆発させた手投げ弾による爆炎を浴びたはずだが、例によって焦げ跡ひとつついていない。

その切断面からのぞく美しすぎる筋繊維と、鋼のような骨組織をひと目見て、

「……ん？」

アレサンドロの頭に、疑問符が浮かんだ。

どこかで見た覚えが、などというものではない。Ｎ・Ｓのつくりに酷似していたのである。

「いや、でも、そんなわけはねえ。人間サイズのＮ・Ｓなんて……ありえねえ」

もし仮に、シュナイデがＮ・Ｓと同じ体構造を持っているとしてだ。

まず指摘される不可能要素は光炉だ。心臓サイズの光炉など、少なくとも常識の範囲では存在しない。

そして脳、命令中枢はどうなっているのだろう。

Ｎ・Ｓこそ、腹部に存在する核により、乗り手を情報として取りこむことを可能としているが、シュナイデもそうなのだろうか。

いや、核を形成する、あの虹色の液体を作り出せる科学者が人間の中にいること自体、ありえないことのように、アレサンドロには思われた。
「N・Sを参考にして、筋肉と骨を強化した人間……それでも夢みてえな話だが、まだ現実的かもしれねえな」
「うむ」
ジョーブレイカーは、再びその腕を懐におさめた。
「この娘について、少し調べたい。戦車を離れるぞ」
「ああ、そいつは俺も気になる。なにかわかったら教えてくれ。ついでに、鉄機兵団の動きもな」
「うむ」
「こっちも、行き先が決まったら連絡する」
「承知した」
「ユウに、その、大祭主のことは？」
「必要ならば話せ。これ以上の混乱は無用だ」
「ああ。……悪かった」
気をつけろ、と、言ったそばから、ジョーブレイカーは崖下へ飛び降りていった。

「俺が死んでも、なにも変わらねえ、か」
本当だな。アレサンドロは思った。
小さいことを言えば、自分がいなくとも、ジョーブレイカーはシュナイデの謎を追っただろう。
セレンとメイはマンムートの修理をするであろうし、テリーは恩師との対決を迎えるはずだ。
ハサンの扮したユウは言った。みんなもう、ここまで来たのだ、と……。
アレサンドロは、ここでふと、身体の芯が冷え切っていることに気がついた。

崖の縁に立ち、両腕で肩をこするうち、抜けるような空の青さにも、太陽の白さにも気がついた。

胸に吸いこんだ透き通った冷気が、肺の細胞、ひと粒ひと粒を目覚めさせるような感覚を覚え、何度も何度も息をする。

「……戻るか」

アレサンドロがそうつぶやくのに、時間はかからなかった。

「アレサンドロ……！」

山頂へ続く足跡をたどり、ここまで息を切らせて駆け上ってきたユウは、遠く雪の陰にアレサンドロの姿を認め、思わず、足元がふらついた。

胸が苦しいのは、気圧のせいだけでも、山登りのせいだけでもない。

「おい、どうした。大丈夫か？」

と、ひざまで積もった雪を重たげにかき分け、斜面を下ってくるアレサンドロの胸へ、ユウは飛びついていた。

「よかった……アレサンドロ、よかった」

「ユウ……？」

「心配したんだ。急にいなくなって、どうにかなるんじゃないかって……」

「……死ぬと思ったか？」

「言うな！そんなのは絶対嫌だ！」

駄々っ子のように泣き声を出すユウを、アレサンドロは、ふ、と笑い、抱き返した。

その手のひらは、厚手のコート越しにも力強く、ユウの背を叩く。

「ああ、生きてるぜ。死んでる場合じゃねえよな」

ユウは驚いた。

「……なんだ？」

「いや、あんたこそ……どうしたんだ」

言葉も、目も、晴れ晴れと澄んでいる。まるで別人だ。

「なにがあったんだ」

アレサンドロは、さあな、と微笑した。

「まわりに合わせて、ちょいと顔を上げただけさ」

「え……？」

「ハ、まあ、いいじゃねえか。戻ろうぜ、俺はもう寒い」
頭をくしゃくしゃとなでられ、ユウは、アレサンドロを開放した。
と、突然。
「い、痛ッ！なんだ！」
なんの前ぶれもなく、ユウは何故か、鼻をねじまげられてしまったのである。
その痛さときたら強烈で、今度こそ本当に涙が出る。
鼻を押さえ、にらみつけたユウに、
「ああ、悪ぃ」
「悪いで済むか！」
「いや、あいつなら、変装だってしかねねえと思ってな」
「は？」
「いや、なんでもねえ。行こうぜ。……ほら、そんな顔すんな、悪かった！」
アレサンドロは、茶目っ気たっぷりにウインクしてみせた。

そうして、数十分後。
途中、左足の傷がうずき出したユウとアレサンドロが、ゆっくり時間をかけて戻ると、双角を山頂へ向けたマンムートでは、すでに破損部位の確認作業が終わっていた。
それによると、メインダクトやフィルター、管理システムなど、室内のおよそ三割の機械・部品に被害をこうむった空調室が、状況的に最もひどい。本来ならば全交換されてしかるべき状況であるという。
しかし、今はそれほどの資材も、人手も、時間もなく、かといって地上だけを走り、修理のできる場所へ向かう、などということも難しいために、
「とにかく、その……どこに向かうかだけでも決めてもらえませんか？応急処置のしようもありますから」

と、メイがおどおど、ハサンへ陳情しているところであった。
「ハサン」
「おお、いいところに戻ってきたな、リーダー君」
「チッ、やっぱりそれか。嫌味な野郎だぜ」
舌打ちしたアレサンドロが空調室をのぞくと、作業のため髪を結わえたセレンが、あごに手を当て、なにか考えこんでいる。
その隣ではララが、ナットをどこまで積み上げられるか、ひとり遊びに熱中していた。

「話は聞いていたな」
「ああ」
「意見は？」
「あんたはどう思う。鉄機兵団はここに来ると思うか？」
……やはり、アレサンドロは変わった、と、ユウは思った。
以前、特にマンムートに乗り始めた辺りから、アレサンドロはハサンに意見を求めても、どこか一線を置いた目をしていたものだ。
それが今は険の取れた、言ってみれば、普段の顔に戻っている。
「フフン」
と、髭をなでつけたハサンもまた、にやりとした。
「本隊は来ない。せいぜい様子見の二、三機だろう」
「理由は」
「オルカーンはトラマルへ戻ったが、そこで重光炉の修理ができるかと言われれば……どうかな、お嬢さん」
「む、無理……だと思います」
「よって、ホークの軍は除外していい。残るギュンターに関しても、炎と雪は相性最悪だ。私が紋章官ならば無理はせず、次に現れるだろう場所で張りこみをする」
「どこだ、そこは？」
「ンッフフフ、それは私が決めることではない。連中とて、いくつか候補を絞っている最中だろう」

「そりゃそうだな」
アレサンドロは頭をかき、苦笑した。

「で、これからどうするか、だが……俺は、まず戦車の修理を優先させるべきじゃねえかと思ってる」
「ンン、結構だな」
意見を求められたユウも、同意した。
「嬢ちゃん、この辺りに修理できそうな場所は？」
「え、あ、あの……ないこともないですけど、みんな一応、国の研究所ですから……」
「協力は望めねえ、か。ハサン、あんたはどうだ。最近はＬ・Ｊを使う盗人もいるみてえじゃねえか」
「生憎、私の友人は正統派ばかりでな」
「ふうん」
「だが、心当たりがないでもない」
ハサンは指を振った。
「海にいる女でな。なかなか、いい船を持っている」
「あ……！」
ここでようやく、ユウにもその相手の顔が見えた。
ユウがその女性と出会ったのは、家族と死別し、拾われた十五年前。ハサンに連れられ初めて引き合わされた盗賊が、当時まだ若く、ミラーダを名乗っていたその人だった。
『暗黒街の魔術師』、『北の魔術師』と異名をとったハサンに対し、こちらは『西海の悪魔』。
泣く子も黙る、海の悪女。血の嵐を呼ぶ女。
それが、女海賊ソブリンである。

「あのドックならば、設備も十分」
「行った途端に身ぐるみはがされる、なんてことはねえだろうな」
「それはソブリンの懐具合次第だ。海女神に祈っておけ」

「ハ！」
アレサンドロは笑った。
「おい、セレン！」
「いいよ、そこで！」
セレンも賛同し、決定である。
「場所は？」
「まあ待て、まずは海だ。少々距離はあるが、西海へ出る」
かくまわれる者の礼儀として、アポイントメントを取るのは常識だ。
「つなぎをつけ、その後、相手の指示に従って行動する。なに、肝の太い女だ。喜んで受け入れてくれるだろう」
「よし、セレンと嬢ちゃんは、とりあえずそのつもりで応急処置にかかってくれ。準備ができたら出発だ」
「りょ、了解です！」
修理は、足まわりや光炉のチェックも含め、三昼夜かかった。

さて。
その間、起こったことといえば、鉄機兵団の一個分隊が上空を飛んだ以外に、寝る場所が変わった。
理由は言うまでもない。オルカーンのアンカーに貫かれ、最上層居住区そのものが閉鎖されてしまったからだ。
しかし、マットレスを敷き延べた食堂での雑魚寝は面白みがあり、頭をつき合わせトランプをしたり、他愛もない話をしたりで、別段、文句を言う者はいなかった。
そんな、ある晩のことだ。
就寝前のトランプ大会をゴロゴロと眺めていたアレサンドロが、
「あんたは、これからどうする？」
マットレスの上に座禅を組み、瞑想しているクジャクに聞いた。
生身では物質を動かすほどの念動力など生じないが、こうするこ

とで集中力が高まり、チャクラムの反応、速度が上昇するのだという。
「俺は奴らを追う」
「奴ら？」
クジャクは柳眉をひそめ、バイパーたちが、かつてトラマル砦にいたことを語った。
「あの日、俺はカラスに呼び出され、砦を留守にしていた」
「カラスに？」
「そうだ。だが何故呼び出されたのか、いまだにわからん。俺になにか伝えたがっていたようだが、くだらん世間話に終始した。戻ると、火の海だ」
「……カラスは、裏切り者なんかじゃねえ」
「フ、わかっている」
微笑んだクジャクの目が、薄く開いた。
「蛇どもの片棒をかついだのは、カラスではなく、俺だ」
「……なに？」
「オオカミはお前たちを愛し、お前たちのために戦を勝利へ導こうとしていた。だが俺は違う。俺は勝ち負けなどどうでもよかった。俺にとってトラマルは、人間たちの避難小屋にすぎなかった」
「……」
「その、俺の性根が砦を落とした……騎士団ではなく、俺がな。……フ、フ、奴らを追うのも、ただ罪をなすりつけているだけかもしれん」
そう言ってクジャクは、右耳にさわるような仕草をした。

しかし、アレサンドロにはわかっていた。
それでもクジャクは、オオカミや他の魔人たちと同じように、入れ墨の仲間たちのことを想ってくれていたのだと。
責任転嫁などではない、だからこそ、バイパーを追うのだと。
アレサンドロは、自責の念をかかえながら、晴らすべき恨みをも

負うクジャクの姿に、まるで自分を見るようだった。
「……クジャク。これからも、俺たちに力を貸してくれねえか」
「……」
「バイパーは俺たちを追って、きっとまた出てくる。あんたの力が必要だ」
すると、しばし口を閉ざしたクジャクが、ふ、と、ため息をつき、
「お前たちは、なにをするつもりだ。なにをしようとしている」
鋭い眼差しで、アレサンドロを見据えた。
「目的もなく、闇雲に火の粉を払うだけならば、俺は協力できん」
「いや、俺は……」
「なにか目当てがあるのか」

……と、つい先ごろまでのアレサンドロならば、ここで話は終わっていたはずだ。
それが今、アレサンドロの心には、自分の行くべき道について、ひとつの答があった。
ユウにもハサンにも明かしていない、まさにこの瞬間、芽生えた答である。
「聞いてくれるか、クジャク」
「む……？」
アレサンドロは起き上がり、クジャクの耳へ口を寄せた。
二言三言つぶやくと、
「……なに」
クジャクが目を丸くする。
「その覚悟はあるのか」
「ああ。あんたや、ユウたちがいれば俺は戦える。だから力を貸してくれ」
「……後悔するな。俺はツキのない男だ」
アレサンドロの差し出した手を、クジャクは、しっかりと握り返した。

海賊と魔術師

東方は自由区エド・ジャハンに接する以外、三方を海に囲まれたグライセン帝国では、それを大きく北海、西海、南海と呼び、それぞれに直属の執政官と鉄機兵団籍の軍を置いている。

Ｌ・Ｊ用の換気フィルターとオイルチューブを駆使して、どうにか短時間の潜行能力を取り戻したマンムートが、およそ三百六十キロ離れた海岸線へ到達するのに、やや二日。

西海と北海の境。黒い冬の海は白波が立っていたが、風少なく、おおむね凪いでいた。

「諸君、つなぎが取れたぞ」

と、長い打電を終えたハサンが言うところでは、女海賊ソブリンは今、ひと稼ぎの後、北上中らしい。

「不景気だな。南海近くまで行っていたようだ。先にドックへ入り、自分の到着を待てと言ってきた」

「場所は？」

「このまま南だ。深い入り江がある」

セレンはすぐさま、マンムートの舵を取った。

ここでさらに、そのソブリンの入り江について語っておくと。

そこは天然の良港を利用した、はた目には、ひとつの漁師町である。

少し違うのは、険しい山々に囲まれ、抜け道を知らなければ陸からの侵入が非常に困難だということだろう。ユウが幼い頃は頻繁に、それなりの歳になっても年に一度は訪れていたものだが、一度たりとも、騎士やＬ・Ｊの気配を感じたことはなかった。

ただしこれには西海執政官との裏取引もあるようで、ある程度の金を上納しておけば、執政官の保護を得た商船以外、多少の強奪は目こぼしされる。また、保護を願う商船側からも執政官は金を取る、

というわけで、互いの立場を利用した奇妙な持ちつ持たれつが、ここにはあるのである。

山間をえぐって顔を出したマンムートに留守居の者たちは驚いたが、すぐに現れたハサンの顔を見て、

「ああ、やっぱり」

という顔をした。

連絡を受けていたのはもちろんだが、ハサンの派手好きは周知の事実であった。

「こいつか、直してえって車は」

「おや、チャノム君。まだ生きていたか」

右足を引き引き現れたのは、この港をまかされた船工の棟梁、バン・チャノム。ひざから下をサメに食われたとかで、鉄の棒を義足代わりにしているエド・ジャハン出の年寄りだ。

とはいえ、七十を越えたとも思えぬほどチャノム爺は血色がよく、すり切れたシャツからのぞく筋肉などは、いまだユウでも驚くほどの若々しさを保っている。

「べーろぃ、おめえのがよっぽどだ」

と、丈の低いチャノム爺は、背伸びするようにハサンの腰を蹴りつけた。

「北の魔術師はもう死んだって、こっちじゃもっぱらの噂だぜ」

「ほう、君が心配してくれるとは思わなかった」

「俺じゃねぇ、ソブリンだ」

「……フフン」

ハサンは、無味乾燥な笑い方をした。

「ケッ！おめえも義理のねぇ野郎だぜ。先代が生きてりゃ、そのツラ、三倍になるまで殴られてる」

「代わりに君が殴るか？」

「このレンチでやってよけりゃあな」

ユウとアレサンドロが外へ出たのはそのときで、このふたりのやり取りは、他の誰の耳にも入らなかった。

と、そこへ。

「チャノム爺、戻ってきた！」

やぐらに乗った、海賊の子らしい少年が叫んだ。

まだ十やそこらだろうに、潮で洗われたボーダーのバンダナなど、いっぱしの海賊気取りだ。

ユウが沖へ目をやると、深く切り出した港口の岩陰から、まさにソブリンの双胴艦『ブラック・クール・ハーマン』が、分かれたふたつのへさきを立てて現れたところだった。

「……前と違う」

「あぁ？……ほ、こりゃまあ、でかくなったもんだ」

「ん……そう、かな」

ユウは昔から、この小さなチャノム爺が好きだった。

なにより、会うたびにこう言ってくれるのがいい。

この歳まで成長期らしい成長期を迎えず、自分の背丈に少し物足りなさを感じているユウとしては、この言葉はとても嬉しいものなのだ。

そしてチャノム爺も、事々にひざに乗せて可愛がり、よくなついたユウを相手にすると、決まって目尻が垂れた。

「おめえはまったく、こいつに似なくてよかった」

ハサンは、明らかに馬鹿にした態度で指を振り、フンと鼻を鳴らした。

そうして、どれほど経っただろうか。

黒い鋼船ブラック・クール・ハーマンが、見事な操船で、ぴたり接岸した。

全長およそ百メートルと、Ｌ・Ｊ搭載の帝国軍用艦から比べると子どものようなクール・ハーマンだが、速度は四十ノット。帝国最高速の呼び声も高い。

逃げ足が速く、獲物を逃がすこともないために、この目立つフォルムも、むき出しの大砲も問題ないのである。
そして今。素早く渡されたタラップを大股に降りてきた船長もまた、この船にふさわしい、むき出しの海賊らしさを持っていた。
つまり、三角の羽根つき帽に、大きく襟が立った濃緑のオーバーコート。腰には大振りのカトラスといった具合だ。
「フン」
と、わき目も振らずにハサンへ歩み寄ったその人、キャプテン・ソブリンは、ユウが瞬間的に、
「殴った……！」
と思うほどの速さでマントの合わせ目に手を差しこみ、中身のないハサンの右そでをつかみ出した。
「……しばらく見ない間に、随分と風通しがよくなったじゃないか」
長身で、半分は南部の血が混じっているという彫りの深い顔立ちのソブリンに、こうも挑戦的な眼差しでのぞきこまれると、大抵の者はたじたじとなる。
「バングに聞いたよ。あいつのところに転がりこんだんだって？」
「フフン」
「痛くてピイピイ泣きわめいたそうじゃないか」
「ああ、始めの三日間は本当にひどかった。ナニが三センチは縮んだ」
「アハッ！」
ソブリンは、その大きな目をさらに大きくした。
「ハ、ハ、ハ、ハ！そいつはご愁傷様！」
と、喉の奥まで見せて豪快に笑い、そでをつき返すと、
「それだけ減らず口が叩けりゃあ大丈夫だ。言いたかないが、よく戻ったねえ、ハサン」
静まり返っていた港のあちらこちらで、ほ、と息をつく音が聞こ

え、町は一気に、日常の騒がしさを取り戻したのだった。

その頃。

「……暇だなぁ」

「ホント」

マンムートのブリッジでつぶやいたのは、他のメンバーと共に留守番中の、テリーとララである。

窓から下へ目をやると、それまで距離を置いて船長の出方をうかがっていた海賊たちが、ハサンの前に長い行列を作っている。

凱旋した英雄を、ひと目見ようとするかのように集まってきた子どもらに囲まれ、老いも若きも、すべての海賊に敬意を持って頭を下げられるハサンは、まるで、この港の王に見えた。

「……奴の元へ行ったらどうだ」

「いやいや、クーさん」

クジャクのことである。

「さっきも言ったじゃない。俺は賞金稼ぎなの。下に降りたら、あの人たちみんな捕まえたくなっちゃうでしょ？」

「要するに、袋叩きにされたくないよ俺、ってこと？」

「ララちゃん、それを言っちゃあおしまいよ」

セレンとメイが、クスクスと笑った。

「ほら、あんたたち、仕事はもう終わりかい。とっとと持ち場に戻んな！」

あらかたの挨拶が終わり、蹴り飛ばすようにして子どもらを散らしたソブリンは、

「おや、いたのかい」

そこでようやく、ユウに気がついた。

チャノム爺ともそうだが、三、四年ぶりの再会となる。

ユウはなにか言わなければと思ったが、どうも気恥ずかしく、上手く言葉が出てこない。
「そっちは」
「あ、ああ、アレサンドロ。アレサンドロ・バッジョだ」
そうかい、と、さも興味深げにアレサンドロをねめまわしたソブリンは、ユウと肩を組むようにして自らも名乗った。
「あ……」
ソブリンの、懐かしいにおいがする。
そういえば、昔はよく一緒に寝たな、などと、その陽に焼けた横顔を眺めやると、ふと視界の下、はちきれんばかりにふくらんだ胸元が目に入り、ユウは自分でも顔が赤くなるのがわかった。
「しかし、あんたもけなげだねえ。こんな奴にいつまで義理立てするつもりだい」
「え……な、なにが」
「ハサンだよ。あんたが、『トビアス・エルマンデル』なんだろう？」
ユウは、どきりとした。
「おやおや、これが魔術師の弟子かねえ、情けない。手配書を見るのは、なにも賞金稼ぎばかりじゃないだろうさ」
「う……あ、ああ」
「ああじゃない、しゃんとしな」

ソブリンという人は、いつもこうだった。
決して強い言葉ではないが、ぴしぴしと叱り、びしびしと励ます。心地よい劣等感とでも言えばいいだろうか。いつだったか、ユウはソブリンのことを、
「姉さん」
と、誤って呼んだことがある。
そのときはとても恥ずかしい思いをしたが、それこそひとつベッドで寝たこともあり、姉セイラに年頃も近いソブリンは、久しぶり

に会った今も、それに近い存在のように思えた。
「なんだい、その顔は」
ユウは、柔らかく頬を叩かれた。
「確か、レッドアンバーには最初、ハサンは入っていなかった。あたしが言いたいのはそれさ。あんたが、隠居を決めこんでるこいつを参謀に引き入れたんじゃないのかい？」
「隠居！ンッフフ、これはいい。私は、これの情けで第二の人生を歩き始めたわけだ」
ハサンは積みあがった酒樽の下一段に腰かけ、楽しげに煙草の煙を吐き出した。
「違うのかい」
「さぁて」
「あんたはもう、この世界に張りをなくしたんだと思ってたんだけどねえ」
「フフン。では、その私の張りとやらについては、この後じっくり語り合うことにしよう。今は戦車だ」
ソブリンはわずかに顔をしかめたが、こうなったときのハサンが、てこでも話を戻そうとしないことは知っている。
ひとつ短く息をはき、
「まあいいさ」
視線をマンムートへと移した。

「ドックを借りたいって？」
「人手もあれば尚いい」
「金は」
「ない」
「ないだあ？」
と、上げて当然の声を上げたのはチャノム爺だ。
「おめえ、それもなしに来やがったのか」
「いかにも」

ハサンは悪びれもせず、うなずいた。
「……おい、ソブリン。俺なら叩きのめして放り出すぜ」
「まあ待ちなよ、チャノム爺。いいじゃないか」
「いいや、よくねえ。ウチだって左うちわってわけじぇねえんだ」
「そういうことは他人様の前で言うんじゃない」
「う……むう」

どうも、不景気というのは本当らしい。
しかし、このような旅を続けるからには、ユウたちもいつどこで金が必要になるかわからない。手持ちの金は使わずに済むよう交渉しよう、とは、あらかじめ皆で相談しあって決めたことだった。
とはいえ、もう少し頼み方がありそうなものだと、ユウは内心、嫌な気分である。

「なんだったら、爺さん、別の物を置いていってもらえばいいのさ」
「なんだって？」
「あれさ」
「おう、ユウか。そりゃあいい！」
「……あんたも、もうろくしたねえ。そこじゃない。その後ろだ」
「ああ？」
ユウも振り返った。
「クール・ハーマンの飾りに、いいと思わないかい？」
「……違ぇねえ」
それは、マンムートの百二十ミリ機関砲だった。
「どうだいハサン。あれを二丁、こっちに寄こすってのは」
「ン、ン、ン、設計図では？」
「弾のサンプルつき」
「いいだろう」
「よし決まりだ。ドックは勝手に使っとくれ。あとはチャノム爺にまかせるよ」

ソブリンが手を打った。
「おっと待て。もうひとつ頼みがある」
「頼み？アッハハ、これは珍しいことを言う。当ててやろうか。月の聖石を預かれ、どうだい？」
「さすが西海の悪魔」
これにも、ユウはどきりとした。
それは、ソブリンが月の聖石について知っていたからではない。海賊にとって最も危険な相手は飛行戦艦であり、その情報収集に抜かりがないのは当然だ。
その聖石をソブリンに預けようということが、寝耳に水だった。
「でも、確かに……」
これは最適な相手かもしれない。
天候に左右されやすい海賊は、どちらかといえば戦利品をためこむ者が多いと聞いたことがある。
つまりその分、倉庫も守りが堅く、広い。
そしてなにより、ソブリンというのが安心できる。
「いいのか？」
アレサンドロがさりげなく耳打ちしてきたが、
「ああ」
ユウは、このままハサンに任せようと思った。
「それで、どうだ？」
「そうさねえ……これもタダだろう？」
「なんなら、身体で払おうか？ん？」
「ああそうかい、だったらそうしてもらおうか。ちょいと誰か、昨日のあれ持っておいでよ」
おや、という顔のハサンの前へ、ソブリンの手下が重そうに運んできたもの。それは、およそ五十センチ四方の木箱だった。
「昨日の獲物で、ちょいと面倒なものがあってねえ」
と、ソブリンがふたを取ると、ワラの緩衝材に埋もれ、黒い鉄製

の小箱が頭をのぞかせている。
「近頃はサルベージ船なんてのもウロウロするようになってねえ。ほら、昔、魔人の浮島があった辺りにさ」
「ほう」
ハサンとアレサンドロの視線がかすかに交わったようだが、また、すぐに離れた。
「こいつもそれがらみじゃないかと期待してるんだけど、どうも鍵が開かなくて困ってる。あんたなら外せるんじゃないかい？」
「フフン、いいだろう」
「だったら石も預かろうじゃないか」
それから十分も経たないうちに、マンムートはひと際巨大なドックへ、聖石は地下倉庫へと移された。

『ソブリン』
『信用できる人だ。ご安心くださいと、ディアナ大祭主様に伝えて欲しい』
『承知した』
『乱暴な手段を、お許しくださいとも』
『それはカジャディール様にか』

ユウの、打信号を書き留める手が、しばし止まった。
そうだった。
ディアナは今、カジャディール大祭主の庇護の元にある。
ペン先を眺め、コンコン、と通信台を叩いたユウは、
『ふたりに』
と、返信して、ヘッドフォンを外した。
打電の相手は、言うまでもなくジョーブレイカーである。
あの後、アレサンドロの口からカジャディールの私兵であることを伝え聞かされたユウは、もちろん驚いた。
すぐに今と同様、打電で交信したが、
『大祭主様に申し訳ない』
と言うユウに対して、ジョーブレイカーの答えは……、
『それは、あの方が決められることだ』
ユウの信頼は、いやが上にも増した。
「あの……？」
「ああ、すまない」
ユウは暗号表とヘッドフォンをメイに返し、やりとりを書き留めたメモを丸めてポケットへ押しこんだ。
装甲板の張替えのために壁を叩く音が、ブリッジにいても、かなり響く。

「修理は、かなりかかるのか？」
「え？じ、時間ですか？ええと、空調はそんなにかかりません。居住区と装甲の方が、ちょっと。あと、サンセットも」
「サンセット？」
「はい、ちょっと改造を……」
マリア・レオーネに敗れてからのララが、時折セレンの研究室や格納庫に出入りしているらしいことは、ユウも知っている。
「コンセプトからの見直しで、ブーストノズルの追加と、スラスターの位置を大幅に変えることになりそうなんです。機体の重量も削らなくちゃならないし、ほとんど新型ですよ。大変です」
などと言いながら、メイはとても楽しそうだ。
「チャノム爺に、話を通そうか？」
「え！」
「そっちも人手がいるだろ」
「は、はい！実は足りない部品もあって……そうしてもらえると助かります！」
「わかった。手を貸してくれるように、頼んでおく」
「あ、ありがとうございます！あの、本当に！」
「いや、俺にも、関係あることだから」
「わかります、ララさんのＬ・Ｊですからね！」
いや、別にそういうわけではないのだが……。
「あ、それじゃあ、あたし、セレン様に知らせてきます！喜びますよ！」
メイは、スキップするようにブリッジを飛び出していってしまった。

「Ｌ・Ｊだあ？」
「ああ、少し手を入れたいらしいんだ」
「おりゃあ、そっちにゃ明るくねえぜ」

「わかってる。人手と、部品の調達を手伝って欲しい」
「ふむう……まあ、おめえの頼みだ。嫌とは言えねえ」
「ありがとう」
「なあに。ここまでくりゃあ、おんなじよ」
アンカーに貫かれた居住区の修理にかかっているチャノム爺は、こうして、いとも簡単にそれを請け負ってくれた。
結果、百人からなる船工は、それぞれ空調室、居住区、外装甲の修理に分かれ、サンセットには、ブラック・クール・ハーマンの機関士。ドックは、いよいよ活気づいてきた。
「俺にできることは？」
「あー、ねえな。暇なら、あいつんとこ行ってこい」
チャノム爺は、両の人差し指を鼻の下にあてがってみせた。その意味するところは、ハサンの口髭だ。
「おめえに言うのも今更だがよ、鍵開けってのは大層な仕事だ。片手でできるもんじゃねえ」
「あ……！」
「あいつがほえ面かこうが知ったこっちゃねえが、箱が開かねえのは困る」
「い、行ってくる！」
ユウは弾かれるようにドッグを飛び出し、係留中のブラック・クール・ハーマンへ駆けていった。
「……ソブリンの言う通りだぜ。けなげすぎて涙が出らあ」
「チャノム爺！」
「おう、今行く！」

俺はなんて馬鹿なんだ。
ユウは、相変わらず血のめぐりの悪い自分の頭に、腹が立った。
ハサンの錠前外しが失敗するはずがない、とは、別れる以前までの話だ。片腕を失った今もそうであるはずがない。それをすっかり失念していた。

おまけにあれは聖石を預かる代償で、本来は、自分の仕事ではないのか。

……だが、どうだろう。

自分が手伝いにきましたと言って、あのハサンが素直に受けるだろうか。

わからない。

わからないが、とにかく行こう。

ユウはタラップを駆け上がり、ハサンが錠前外しの場所に選んだ船長室の前で、一旦足を止めた。

呼吸を整え、ノックしようと手をかざすと……、

「？」

中で話し声がする。

「……節操なしに、目につくものを手当たり次第に盗む。それもいいさ。でも、それだって最初の一年だ。最近は、そんなつまらない盗みの噂さえ聞かなかった」

「……」

「見かねたバングが、あんたに仕事をまわしたって言うじゃないか」

「フフン、『帝都の吸血鬼』も口が軽くなったものだ」

「それだけ、あんたを心配してんのさ」

「おお、涙が出るな」

「……ハサン、あたしはねえ、あんたのことを、よおく知ってる。あんたは盗みが好きでしょうがないって顔をしながら、いつもどこかで呑まれないようにしてた。人生じゃなく手段なんだって、あたしはいつも思ってたよ」

「……」

「だから、あんたが隠居するのもいいと思ってたのさ。ねえ、それがどうして、あの子たちといるんだい？」

「フフ、さあて……」

「どうも、ユウ可愛さ、ってわけでもなさそうじゃないか」

「……それは勝手な思いこみという奴だ。私とてあれは可愛い。私の技も、言葉も、よく覚えた。できれば手放したくはなかった」
「おや」
「たとえ盗み聞きが趣味であってもな」

冷たい金属の扉に、耳を押し当てるようにして話を聞いていたユウは、そこでハッと身を離した。
直後、中から扉が開き、
「おーや、本当だ」
ソブリンのたくましい腕が、襟首を捕まえる。
ユウは、部屋に引きずりこまれてしまった。

鉄鋼船であるブラック・クール・ハーマンは、いまだ木造帆船の多い帝国海域においては、数少ない近代船舶のひとつである。
ただ、キャプテンも含め、乗員の大半は古き良き木造時代からの乗り組みで、内装や空気は、大部分でそれを踏襲していた。
たとえば今、ユウが連れこまれたこの船長室も、床壁天井こそ白いツヤ消しの鋼板だが、その上にカーペットを敷き、調度品は木製。天井の明かりも電気ではなく光石を使っている。
戦利品らしい船のプレートや、先代キャプテン愛用のアイパッチ、三角帽、魚を突くモリ、海図、中にはガラスの浮き玉までもが、それでもすっきりと部屋の壁を飾っているところも、シンプルすぎるマンムートの部屋から比べると、いかにも生きている匂いがするのだ。
ハサンはその中央、ソブリンが古くから愛用しているベルベットのソファに身を投げ出し、ひどくぞんざいな態度で、例の箱についたダイヤルをまわしていた。
「おお、ソーブリーン、連れてくることはなかった」
「どうしてさ。ユウはあんたを手伝いに来たんだ、そうだろう？」
「ん……」

さすが、ソブリン。すべてお見通しだ。
だが、ダイヤル式の鍵という事実が、多少なりともユウを拍子抜けさせたのも確かだろう。これならば、片手でも開けられる。
「でもまぁ、せっかく来たんだ。ここで話し相手にでもなってやりな。あたしは向こうに帰るから」
「え！」
「えっ、てなんだい。十年も一緒にいた仲だ。今更じゃないか」
「いや、それは……」
「とにかく、あたしだって仕事があるんだ。箱は、あんたたちふたりにまかせるよ。いいね」
ユウは、ハサンとふたり、部屋に残されてしまった。

さて、それからの気まずさを、どう表現すればいいのだろう。
始めから、ふたりになるとわかってここへ来たのだが、さあどうぞと言われると、かえって言葉に困ってしまう。
当のハサンは胸に乗せた箱をいじり、ユウを見ようともしない。
「あの……ハサン」
「……」
「それ、俺が……」
「自信はあるのか」
「え……？」
「私より早く開ける自信だ」
「う……」
ハサンは眼球をぐるぐると動かし、手を振った。
「私の退屈しのぎなら、裸踊りでもしてみせろ」
「で、できるか！」
「ならば去れ。……ああ待て、行くな」
「どっちだ！」
「やはり寂しい。なにか話をしてくれ」
「……なにを」

「まずは座れ」
ユウは、指示された椅子をハサンの頭元まで動かし、座った。
ここまで寄ると、箱の装飾がよく見える。
四十年ほど前まで西部一帯を治めていた、ロンドランドの伝統紋様だ。
「いくらつける」
「……七万五千」
「ンンン、妥当な線だが、魔人の持ち物ならば桁が違う」
「そう、か」
素直にうなずいたユウを、ハサンは鼻で笑った。
「さて語ってもらおうか。題目は、私と別れた後の生活について」
「別に、特別なことはしてない」
「それはわかっている。特別でないなりに、なにをしていた」
「俺は……」
ユウはダイヤルをまわすハサンの指先を眺めながら、時計の針をあの日へと巻き戻していった。

決意の日

以前、少し話に出たことがあるが、かつてユウは一度だけ、ハサンに盗みの計画をまかされたことがある。

それはとても小さな盗みで、皇帝のひざ元である帝都でおこなう以外、これといったリスクもない……そう、言ってみれば卒業試験のようなものだった。

しかし、盗みが成功し、帝都中央の宿へ戻った、その翌早朝のこと。

どこで情報が漏れたのか。目が覚めると鉄機兵団の騎士が大挙押し寄せ、ハサンとユウは袋のネズミとなってしまっていたのである。

ドアの外はもちろん、窓の下までが騎士で埋まり、万事休すとあきらめかけた、そのとき。

「足跡を散らせ。北へは戻るな」

ハサンは単身、窓から屋根へ飛び移り、自らが騎士を引きつけることで、ユウを逃がしてくれたのだった。

さあ……話は、それからだ。

ひとり逃げおおせたユウは、それでも、ハサンの生還を信じて疑わなかった。

どこかで鉄機兵団をまき、再び自分を見つけてくれる。それだけを信じて逃げ続けた。

ソブリンや、他の盗賊たちを頼ることも考えたが、万一、追っ手がかかった場合の迷惑を考えると、それもできず。

ある日……ハサンが捕らわれたことを知った。

今思えば確かに愚かなことだが、当時のユウにとって、手錠と吊るし台は同義だった。

ハサンが死んでしまった。自分のために死んでしまった。

自分を責め、失意に打ちのめされたユウは、それ以降どうやって、どの道を通って逃げたものか覚えていない。

気づけば、とあるメイサ神殿の片隅で、目覚めれば祈り、眠り、また祈る生活を送っていた。

土に座り続けた両足が冷えで感覚を失い、身も心もボロ布のようになり、ついには手を持ち上げることさえできなくなった末に……ユウの心の糸は、ぷっつりと切れた。

「死ぬって、身体がどんどん冷たくなって、地面に沈んでいく感じなんだ。でも怖くはなくて、ああ死ぬんだな、死んでもいいかと、そう思った。神の前で死ねるなら……」

「私よりは、ましな死に方だと？」

「ん……それも、思った」

「ンッフフフ」

「でも、目が覚めたら、ベッドの上にいた」

メイサ神殿の神官たちが、助けてくれたのである。

「俺は、あのとき受けた恩を、一生忘れない」

神官たちはなにも言わず、なにも聞かず、暖かいベッドと温かい食事を与えてくれた。

まだ二十歳前で、すぐに健康を取り戻したユウを、神殿の菜園で働かせてくれたりもした。

そして労働の汗は、どのような言葉よりも、ユウの心を前向きにさせてくれた。

「それで思ったんだ。俺はいつまでも、ここで甘えていちゃいけない。外で働こうって。働いて、金を稼いで、それで恩返しと……罪滅ぼしを、しようって」

「フフン」

「でも……表の仕事は怖かった」

ただでさえ、陽の当たる道を歩くのには勇気がいった。

たとえ職を得ることができたとしても、いざなにかあれば、受け

入れてくれた人々に対して連帯責任を背負わせてしまうのではないか。その思いもあったのだ。
「だから盗掘か」
「ああ。あの町が盗掘の拠点になってたのは知ってたし、まだ金になりそうだって噂も聞いてたから……」
「盗みで稼ごうとは？」
ユウは、かぶりを振った。
「盗んだ金を寄進するわけにはいかない」
「自信もなかった」
「……ああ」
「盗掘は盗みではないのか」
ユウは、ぐ、と言葉に詰まり、
「それは……もう、持ち主のいない品物だから……」
「売っても罪にならんか。……ン、フ、フ、フ。あの男が聞いたらなんと言うかな」
「ハ、ハサン！」
それがアレサンドロのことを指すのだと、ユウにはすぐにわかった。
「おお、安心しろ。私は口が堅い」
「う、嘘だ！言う気だ！」
「言わん言わん」
「そんなことを言って、あのときもつげ口した！」
「ほう、私がなにを言った」
「む、昔……その……」
恥ずかしい過去だ。
ハサンはにやりとした。
「フフン、では、お前にチャンスをやろう」
「え？」
「アレサンドロ・バッジョをどう思っている」
「ど、どういう意味だ」

「そのままの意味だ。思ったことを言ってみろ。謝罪をこめてな」
ユウは、うらめしい気持ちでハサンをにらみつけた。

「アレサンドロは……俺の、相棒だ」
「フン、馬鹿のひとつ覚えだな」
「頼りにしてる。俺より、まとめるのが上手いし、剣も使える」
「おお、確かに」
「……」
「終わりか？」
「ん、その……」
「もっとあるだろう。背も高く、お前よりずっと男前だ。男気もある。馬鹿にも優しい。医者としての腕はどうだ？」
「ああ、いい」
「そうだろう。ならば、アレサンドロを愛していると言え」
「え、ええ？」
「言え。言えば黙っていてやる。さあ言え」
……これは、やるまで解放しない顔だ。
ユウは、嫌がる舌をどうにか動かし、
「……ア、アレ……アレ、サンドロ……」
「聞こえんぞ」
「アレサンドロを……てる」
「ユーウー」
「アレサンドロを愛してる！」
「……だそうだ。よかったな、アレサンドロ」

がつん。
金属の扉を叩く音がした。
振り向いたユウの目の前で、ゆっくりと開いたそこから顔を見せたのは……。
「ア、アレサンドロ！」

ユウは、あまりの出来事に卒倒しそうになった。
顔から火が出るとはこのことだ。穴があったら入りたい。
アレサンドロは困ったような顔をしながらも、立ち上がった勢いで椅子を蹴倒したまま、パクパクと口を開け閉めするユウの頭をなで、
「俺も愛してるぜ」
軽く、ウインクしてみせた。
「いつから気づいてやがった」
「始めからだ。甲板でソブリンに会ったな。それも聞こえていた」
「……それが、あんたの秘密か」
アシビエムではナイフの風切り音を察知し、サンセットがシュナイデを踏みつけた際には、おそらくその足の下で、生物のものではない、なにか別の活動音を聞いた。
最近では、黒煙のみを映し出す監視カメラの映像に、バイパーの存在を感じている。
「フフン、耳だけではない。魔術師の五感は特別製だ。こうして話している間にも、そら」
軽い音を立て、小箱の鍵が外れた。
「さて、なにが入っている」
ハサンは、嬉々として箱を開けた。
「……ほう。面白い」
「なんだ?」
「鍵だ」
アレサンドロがのぞきこむと、確かに朱のサテンを張った上げ底の中に、銀色をした、十センチほどの鍵が埋まっている。
ただし、アレサンドロがよく見る鍵は、棒に凹凸の板をつけただけのようなタイプが多かったが、これは切りこみが芸術の域にまで達している、見事なウォード錠だった。
「見覚えは?」
「ねえな」

「それは残念。しかし、魔人の持ち物でないと決まったわけでもない」
「少なくとも、あんたのもんじゃねえがな」
「ンンン、そう言うな。興味を持つのは自由だ」
ハサンはその鍵を、ためつすがめつ眺めまわした。

「それで？お前は何故ここへ来た」
「さすがの魔術師様でも、それはわからねえか」
「ほう、当ててやろうか」
「結構だ」
アレサンドロは倒れた椅子を起こし、いまだ立ったまま、視線を合わせられもしないユウを座らせた。
「あの、アレサンドロ……すまない」
「盗掘のことか？」
「ああ」
やはり、そこも聞いていたのだ。
「別に気にしてねえさ。俺だって、ものによっちゃあ売りさばくことだってあった。それが寄進の金になったってんなら、あいつらの、いい供養になったさ」
「おお、お前は本当にいい男だ、アレサンドロ。まるで聖アレサンドロ様だ」
「あんたは黙ってな」
アレサンドロは、横になったハサンのひざ辺りへ無理に座る素振りをしてみせ、足をどかせた。

「さて、俺は決めたぜ」
「次の目的地か」
「ああ。あんたにも話したことがあったな、俺たちはアルケイディアに行くってよ」
「だが行かんのだろう？」

「行かねえ」
それと聞き、ユウは思わず身を乗り出した。
とうとう決まったのだ、アレサンドロの心が。
「ならば聞こう。お前の選んだ道は？」
「……ホーガンだ」

「さあ、キスをしろ。長生きしたければ、誰が主人か知ることだ」
ビンセント・ラムゼーは、ひざまずいた男の面前へ靴を突き出した。
男はどこかの職人だろうか。骨ばった身体つきではあるが、その引き裂かれた上着から見える筋肉は、顔から得られる印象よりもずっと若いものがある。
背後には、同じく手錠に拘束された妻と子。
しかし男は、臆することなく骨の浮いたあごを振り、ギラギラとした力強い瞳をラムゼーへ向けると、こう言い放った。
「万歳！魔人万歳！」
「……ハン！」
ビンセント・ラムゼーの腰から走った光芒が男の心臓を貫くのに、まばたきほどの時間もかからなかった。
「お前たちはどうだ？」
妻は夫の魂のために小さく祈りを捧げ、おびえる我が子の顔を光り輝くブーツに押しつけると、自らも服従のキスをした。
夫の名誉と、子の命を守ろうという気高い行為であったが、ラムゼーは露骨に、馬鹿な奴、という顔をした。
「お前たち、あれを踏んでいけ」
「そんな……お慈悲を……！」
「駄目だ、踏め」
妻と子は逆らえず、夫であり父であった亡骸のすそを、抱き合い、涙しながら踏んだ。
「もっとだ」
「おお……」
「もっと踏め」
「ああ……神よ！」

「そうだ、俺が神だ！さあ、踏め！こう踏め！」
まるで虫に対するかのようなラムゼーの狂気に、妻は我が子の目をふさぎ、かぶりを振り続ける。
「……フゥン」
ひとときの暴力で満足したラムゼーは、その興奮を抑えるように詰襟を正し、
「よろしい。ようこそ、ホーガンへ！」
大きく両手を開いて、ふたりを抱きしめた。
海へ投げ捨てられた男の亡骸は、腰に彫られた赤い月の入れ墨を水面に浮かべながら、遠く、波間を漂っていった。

……ホーガン監獄島。
現存する、帝国唯一の奴隷収容所である。
収容人数は明らかにされていないが、三百人とも四百人とも言われ、およそ半数が、実際に『魔人の奴隷』として十五年前の戦争を戦った者、残り半数が、その家族であるとされている。
西海に浮かぶ絶海の孤島を、高さ五メートルの壁と鉄条網によって囲った天然の牢獄で、囚人の収容棟四棟の他、管理棟、労働棟、物見やぐら、サーチライト施設、騎士の宿舎、Ｌ・Ｊ格納庫・補給庫など、広さは、ちょっとした町ほどもあった。

朝五時起床。
朝食と朝礼の後、島の各所に散り、Ｌ・Ｊや戦艦の部品を作る作業に従事。
夕食。就寝。

今でも月に二度は新しい囚人が送られてくるが、それだけが、この島で起こり得る、ただひとつの変化と言っていい。所長、ビンセント・ラムゼーによっておこなわれる理不尽な虐殺など、もはやニ

ュースにもならないほど日常的な光景のひとつとなっていた。
そんな、ひとたび足を踏み入れれば、与えられる安息は死のみ。出ることはかなわず。という、墓場のような、悪夢のようなこの島に。
今日もまたひとり。奴隷を乗せた戦艦が、桟橋に寄せられたのであった。

「ほう、でかいな。何センチある。一九〇か？二メートルか？」
その奴隷をひと目見て、ラムゼーは興味をそそられた。
赤い月の入れ墨は、荒縄に拘束された左の前腕。蔑みと敵意は奴隷に共通しているが、その男の目には他に、もうお前に逃げ場はないぞ、という、むしろこちらを脅しつけるような気迫が見え隠れしていることに、すぐに気がついた。
仲間がいるのか、と、視線を走らせたが、男を連れてきた騎士は西海執政官の手の者で、疑うべくもない。
「……名は？」
「アレサンドロ・バッジョ」
「アレサンドロ・バッジョ！」
ラムゼーは手を叩いてみせた。
「なるほど、いい名だ」

そう、あのときアレサンドロの言った『ホーガン』とは、このホーガン監獄島を襲撃し、かつての仲間たちを解放しよう、ということだったのだ。
しかし、こうしてアレサンドロ自身が単身ホーガンへ潜入することに、ユウは反対だった。
四方を海に囲まれ、遮るもののなにもない孤島を、それも人質を取られた状態で襲撃することがどれほど困難か。わからないユウではなかったが、なにより危険すぎる。
せめてジョーブレイカーを呼び戻し、代わりに潜入してもらって

はどうかと訴えたが、アレサンドロは自分の務めだからと、笑ってユウの肩を叩いた。ユウが宙吊りのマンムートから飛び降りた、あのときと同じだろ、と。

「俺は、十五年前のことを、どこかでつぐなわなきゃならねえんだ」

「……アレサンドロ……」

「だから、生きて帰るぜ。あいつらとな」

ユウは今、人の目の届かない空の彼方から、カラスの目で、アレサンドロを見守っている。

なにかあれば、すぐに飛び出すつもりだったが、ラムゼーは、にっと口元だけの笑みを浮かべてみせ、

「よろしい。ようこそ、ホーガンへ！」

お決まりの歓迎台詞の後、アレサンドロの背を押すようにして、先に門をくぐらせた。

そうして潜入に成功したアレサンドロだが、これからホーガンで果たすべき役割は、ふたつある。

ひとつは、ホーガン内部の情報を探り出し、外へ伝えること。そして、作戦開始のタイミングを計ることだ。

そのための連絡手段もすでに手はずはついており、実際アレサンドロは、この日のうちに第一報を送ることに成功している。葉のついた枝をくわえて訪れた海鳥に、手紙を託したのだ。

ハサンは、この潜入役にアレサンドロが名乗り出たことをいたく喜び、

「それがお前のためだ」

と言ったが、そんなことは知ったことではない。

ハサンが自分になにを期待していようが、今のアレサンドロは、ホーガン解放以外のことに頭を悩ませるつもりはなかった。

……まずは溶けこむことだ。

管理棟での尋問と身体検査を終え、囚人服にそでを通す間も、ア

レサンドロはそれだけを考えた。
目に入った左腕の入れ墨が、この収容所では、なによりも心強い味方だった。
と……。
「おうおうおう、アレサンドロ。今迎えに行こうと思っていた」
前後左右を騎士に囲まれた形で部屋を出たところを、アレサンドロは、踊るように近づいてきたラムゼーに呼び止められた。なにやら、不気味に機嫌がいい。
「準備はできたか？」
という問いに、うなずいてみせると、
「なら出発だ」
ラムゼーはアレサンドロの手錠を外すように命じ、まるで友人との散歩を楽しんでいるかのように、密着して歩き始めた。

「お前にぴったりの仕事がある。おっと、殺しじゃあないぞ。殺しは俺の仕事だ」
つばのひとつでも吐きかけてやりたかったが、ここは我慢と、アレサンドロは奥歯を噛みしめた。
「お前は、外で医者をしていたそうだな」
「……ああ」
「ここでもしてくれ。丁度、医者の空きが出た」
と、外に向けて差された指先を追って目を移すと、白い布をかけられた担架が、門の外へ運ばれていく。
アレサンドロは、す、と血の気が引く思いがした。
「安心しろ。あれは奴隷じゃない。本土の医者だ」
「……殺したのか」
「ああ。だが気にするな、お前のせいじゃない。もともと生意気な医者だった。ふた言目には、奴隷をもっと大事にしろだ。俺ほど奴隷を大事にしている奴がいるか？なあ？」
数メートル離れてついてきている騎士たちが、にやにやとした。

「で、どうだ。やってくれるか？」
アレサンドロの首は、無意識のうちに横に振られていた。この男の言うままになることを、心が否定したのだ。
「そうか、フン、ならそれもいい。面白くもない部品作りをしてもらうだけだ。……だが、人数が増えるのは困るな」
「！」
「おいお前。ちょっと、この男の分を空けてこい」
「待て、わかった！……やる。なんでもやる」
「フゥン、よろしい」
怒りと屈辱。優しく肩をなでられ、きつく握ったアレサンドロの手のひらに、爪が食いこんだ。
「いいか、アレサンドロ。お前たちは皇帝陛下からの大切な預かり物だ。悪い子にはおしおきし、気に入らん奴は殴ることもあるが……できれば、お前たちには老衰で死んでもらいたい」
「く……ッ！」
「誰ひとり死なせるなよ。仲間と、俺のために。それができるのは、お前だけだ。……いいな？」

これが俺たちの世界

アレサンドロのまかされた診療所は、管理棟と渡り廊下によって結ばれた、木造平屋建ての寒々しい建物であった。

そこにあるのは二十床の大部屋と薬品庫、以前の勤務医が本土からの出向だったために用意されたらしい、簡素な私室。その三部屋だけ。

とはいえアレサンドロは、質は他の囚人たちと同じながらも、この私室での食事と寝起きが許され、肉体労働も、悪夢と呼ばれた朝礼も免除された。

医者なのだから、当然と言えば当然である。

しかし、この囚人服を着ながら特例を持つ男を、打撲や骨折、極度の疲労、時には火傷や刺創・切創で運ばれてくるかつての仲間たちが、はたして快く受け入れてくれたかと言えば、答えは否だ。

十五年前の、あの一時代の感情をすべて分かち合ったからこそ、裏切り者などといった言葉での非難はなかったが、皆一様に冷ややかな目つきでアレサンドロを見やり、中には治療を拒み、容態を悪化させる者までいた。

そうじゃない、そうじゃないんだ。

思いながらも、騎士の監視下にあったアレサンドロは沈黙を守らざるを得ず、一週間と経たないうちに、自身にも頭痛薬を処方するようになった。

もしこれが、危険なにおいのするアレサンドロと奴隷たちの間を裂くビンセント・ラムゼーの策略だとすれば、恐ろしいことである。

だが……十日ほど経った頃だろうか。

そのラムゼーさえも予想しなかっただろうことが起こった。

ホーガンで毎朝おこなわれる『悪夢の朝礼』では、アレサンドロは見たことがないが、奴隷たちの公開懲罰がおこなわれている。

軽い者でも棒打ち三十回。重ければ絞首刑。
毎朝診療所へ送られてくる、その朝礼の被害者の中に、なんと、オオカミの砦の生き残りがいたのである。
始めこそ、そうだとは気づかなかったアレサンドロだが、ベッドの上で、うつぶせになって歯を食いしばる男の、ずたずたに裂けた衣服を脱がせているうち、
「あ……」
と思った。
「ブルーノ……」
「ゥ、あ？」
「あんた……ブルーノ・ボンバルディじゃねえのか？」
右腕に走った大きな傷跡が目印の、当時の若者たちの間では、リーダー的存在で鳴らしていた男だ。
喧嘩っ早いが情に厚く、確か歳は、アレサンドロより五つ六つ上。
ジャッカルやヤマカガシといった、古い魔人に可愛がられている冴えないアレサンドロを、
「気に入らねえ」
と言って、はばからなかったかつてのガキ大将は、今や顔の下半分を髭で覆いつくし、筋肉ではちきれんばかりだった身体にも、歳相応に肉をつけていた。
「う、つつ、誰だ……？」
アレサンドロは、看守役の騎士に気づかれぬようこっそりと、包帯を取り落としたふりをして、枕元へ顔を寄せてやった。
「……誰だ？」
「俺だ。アレサンドロ・バッジョ」
「アレ？……ア！て、てて、て！」
「おい、なにを話している！」
騎士が飛んできた。
「うるせえなぁ。こいつが傷にさわりやがるんだ！」
「当然だ。黙って治療を受けろ！」

「ああダメだ。痛くて声が出ちまう。先生頼むぜ、なんとか言ってくれ」
ブルーノが、あまりにも大げさに暴れ、泣いてみせるので、アレサンドロはおかしいどころか、このままさらに打ち据えられてしまうのではないかと気が気でない。
案の定振り上げられた懲罰棒と、ブルーノの間に入り、
「待ってくれ。これ以上は命に関わる。殺しはあいつの仕事のはずだ」
と言ってやると、騎士はしぶしぶ傷のない太股をひと打ちし、持ち場に戻っていった。
「おお、痛ぇ」
「大丈夫か？」
「なぁに、棒打ちは今のでウン百回目だ。慣れちまったよ」
この豪胆さは、以前と少しも変わらない。
アレサンドロは、すぐに治療するからと服をはさみで切り開き、皮の裂けた背に、消毒液を染みこませた更布を当てていった。
「つ……おい、もっと派手にやってくれ」
「なに？馬鹿言ってんじゃねえ」
「いや、こんなもんじゃ話もできねえじゃねえか。どうせ、あいつらは俺の悲鳴が聞きたくて、うずうずしてやがるんだ。お前にとがめはねえよ」
「……あんた、本当に変わらねえな」
「へ……お前は変わった。見違えたぜ」
意を決したアレサンドロは、容赦なく、更布を傷口に揉みこむように押しつけた。
「あ、い！い！」
ブルーノは、両腕をベッドのパイプへ叩きつけながら悲鳴を上げ、器用にも、その合間合間に小声で会話をした。
「まずはお互い、生きててなによりだったな」

「ああ。……あんたはいつ？」
「五年前だ。下のガキが、まだ女房の腹ん中にいてな。逃げ切れなかった」
「ガキがいんのか？」
「へ、悪いかよ。これでも二児のパパって奴だ。前いた医者は、まだ人間くせえ野郎でな。なんとか産ませてくれたぜ」
「……そうか」
男と女・子どもが、それぞれ別の場所で作業させられていることは、アレサンドロも知っている。
そして両者は収容棟も分けられ、子どもにいたっては朝礼の際も、人質として別所に留め置かれるのだ。
「俺はよ、まだ下のガキの顔も知らねえし、抱いてやったこともねえんだ」
「……」
「毎朝、朝礼のたびに女房を探してよ、あいつがうなずくのを見るんだ。それで、ああ、まだ生きてる、まだ無事だってよ、それだけが楽しみになっちまった。……へへ。まぁ、あいつらがひとり立ちできるころには、あの腐れ野郎もあの世にいっちまってるさ。それまでは、なんとか俺も生きててやらねえとな」
明るい言葉で語られる悲愴な希望に、アレサンドロは言葉が出なかった。
だが、これが、この世界の現実だ。
捕らわれの仲間を救うだけではない。仲間の味わわされてきた、このやるせない感情を肌身で知ることも、アレサンドロの望んだ贖罪のひとつであった。
「お前はどうなんだ、女房は」
「……いや」
「まだ女神様か」
「ブ……ブルーノ！」

カラスへの恋心、アレサンドロ自身は一切表に出したことはない……と、思っていたのだが、それはとんでもない勘違いだったようだ。

「ハッハ、みんな知ってたぜ。お前は身の程知らずだってな」

「マ、マジかよ……」

「おう、大マジだ」

髪をかきむしるアレサンドロを、ブルーノは、にやにやと冷やかしの目で見た。

「なあ、アレサンドロ……お前、外で聞いてねえか？」

「うん？」

「オオカミとカラスが、生きてるって話だ」

「！」

アレサンドロは、心臓が止まるかと思った。

「い……生きてる……？」

「ああ、わからねえが、Ｎ・Ｓが出たって噂だ」

「あ、ああ……そうか」

「どうした？」

「いや、なんでもねえ……知らねえな」

「そうか……」

なにも知らないブルーノは、ベッドの足をきしませ、身じろぎした。

「いや、その実、俺も胡散臭ぇ話だとは思ってたんだ。あのふたりが生きてんなら、もっと早いうちから堂々と顔を見せると思わねえか？」

「……そうだな」

「よしんばＮ・Ｓがマジだとしてもだ、乗ってるのは人間じゃねえかと思うぜ。期待してる奴らの手前、大声では言えねえがな」

「……」

「おい？」

「ああ……今日は、ここまでにしようぜ」

治療は、すでに終わっていた。

「おい、どうした。さっきから変だぜ」

道具を片づけ始めたアレサンドロの顔を、ブルーノが、いぶかしげに見た。

「……お前、本当にアレサンドロ・バッジョか？」

「ハ、なに言ってんだ」

「いいや、変だと思ったぜ。俺の知ってるあいつは、もっとチビで、へたれた野郎だった」

「だったら普通、そういう奴を替え玉に仕立てるんじゃねえか？」

「……どうだかな」

ブルーノの目は、いよいよ疑いの色が濃い。

アレサンドロはただ、これ以上の会話は、言ってはならないことまで言ってしまいそうで恐ろしかっただけなのだが、その説明は難しい。

「おい、ブルーノ。今更こういうのはなしだぜ。どうすりゃ信じてもらえるんだ？」

と、正直に、そう言った。

すると、ブルーノは唐突に、

「……ジェイソンの妹の名は？」

「なに？ああ、待てよ……リリーだ」

「あの頃、俺たちの間で流行ったゲームがあった」

「指抜きだろ、覚えてるぜ。あんたは弱かった」

「あのとき……お前に、嫌なところを見られたな」

「あんたがアリソンにふられて大泣きしてた、あれか？」

おう、と、ブルーノは、悔しげに硬い枕へ顔を埋めた。

「畜生、本物だ。思い出したくもねえことを思い出させやがって」

「プ、クク、だから言っただろ」

「……すまねえ」

「気にすんな」

ふたりはベッドの陰で、固く手を握り合った。
「ブルーノ、規則だ。あんたを、明日の朝には戻さなけりゃならねえ」
「おう、わかってる。へへ、すぐにまた来るぜ」
「やめとけ。生きなきゃならねえんだろ？」
「まあな。……なら、男連中には言うだけ言っとくぜ。今度の医者は敵じゃねえってな」
「目をつけられるような真似だけはしてくれるなよ」
「ああ、お前もな。互いに長生きしようぜ」
「年寄りくせえな」
「ハッハ、違いねえ」

アレサンドロはこの潜入に先立ち、ハサンからいくつかの指示を受けている。
ホーガン解放のため、そして、自分の命を守るための指示だ。
ひとつは、出身をオオカミではなく、クジャクの砦、つまりトラマルということにしておくこと。
ふたつに、たとえ気心の知れた者であっても、計画を明かさないこと。
みっつに、アレサンドロ自身が策を弄しないこと。

アレサンドロはこの指示を忠実に守り、この後、幾度ブルーノが運ばれてきても、
「実は……」
などということは言わなかった。

言葉と裏腹、そういうところ

「ユーウ」
「……なんだ」
「あ、冷たいの。そんなに心配？」
「ララは心配じゃないのか」
「別に、そういうわけじゃないけどさ」
気もそぞろに夜の修練を終え、太刀を片手に海を眺めていたユウ。
その顔を、ひょいとのぞきこんできたララは、こう言っていつものように、左腕へ巻きついてきた。
肝心の首にはファーを巻いているが、あれ以来、ララは髪を上げるスタイルを貫いている。吹きつける潮風に散らされ、ドックからもれる電灯の光を受けたその髪は、まるで金色の吹流しだ。
「ねぇ、寒くない？ここ温泉あるんだって、一緒に入ろっか！」
「……」
「冗談だって」
ララは邪気のない顔で笑い、ひとつ、くしゃみをした。
「やっぱ寒いね」
ユウは、笑う気になれなかった。

「……ねぇ、アレサンドロってさぁ」
「ああ」
「ユウのなんなの？」
「なに？」
予想外の問いだ。
「だから、あるじゃない。兄弟分とかさ」
「ああ……相棒だ」
なにやら、つい最近も、同じような答え方をした気がする。確かに、馬鹿のひとつ覚えだ。

「なんか、劇的な会い方したとか？」
「いや、別に」
「ふぅん」
ララは、よくわからない、といった顔つきで、首をかしげた。
「相棒ってさ、なんて言うか、もっと、お金とかそういうのでつながってるイメージじゃない？」
「そうか？」
そんな解釈は初めて聞いた。
「そんなに心配したり、あいつのためなら死ねる、とかって相棒？」
「そうだろ」
少なくとも、ユウにとってはそうだ。
絶対的な信頼で結ばれた仲間。
いや、わざわざ信頼などという言葉を使わなくともそれがわかる、同胞だ。
「じゃあ、あたしたちは？」
「え？」
「ねぇ、あたしたちはぁ？」
ユウは、ううん、と喉の奥でうなった。
わからない。
ララやモチも、無論信頼しているが、相棒とは違う。
そもそも相棒とは、複数の人間に対して使われる言葉ではないはずだ。
皆は仲間で、ハサンは元相棒。アレサンドロが相棒。その差はなんだ？
ユウに答えは出せなかったが、ララにやりこめられるのかと思うと、妙に悔しかった。
「……怒った？」
「別に」
ユウは言ってから、しまった、と思った。
つい、自分でも気がとがめるような冷たい声が出てしまったのだ。

またヒステリーでも起こされるのではないかと不安になったが、ララは、エヘヘ、と身体をすり寄せてきて、
「ユウって、そういうところだよね」
「え？」
「そういうところ」
またわけのわからないことを言い出した。
「あ、どういうことか教えろって顔」
「……いや、いい」
ハサンならば、また、聞きたければあれをしろ、これをしろ、と言うところだ。
ここは下手なやぶ蛇をする前に部屋へ戻るのが賢明だと、ユウはきびすを返した。
ちなみに今は、ソブリンのドックに仮住まい中である。
「あれ、もう帰っちゃうの？」
「ああ」
「えー。せっかく久しぶりにふたりきりなんだから、もっと話そうよぉ」
「寒いんだろ」
「あ、意地悪。ユウとならアツアツだからいいんですぅ」
「……俺が寒い」
「あ、さらに意地悪！」
ララは冗談めかして腕をつねったが、コートの上からでは、まったく痛くなかった。
「そんなに話したいなら、ララが話せばいいだろ」
「あたし？」
「俺は聞いてる」
「うぅん……たとえば、なに？」
「そうだな……」
足を止め、天の星空を見上げたユウの脳裏に浮かんだのは、あのときの疑問。

「ララは、その……」
「うん」
見合わせたララの大きな目にも、同じだけの星が映っている。
「……いや、いい」
「なにそれ。言いかけてやめるのはなし」
「ん……」
「ほら、言った言った」
仕方なく、ユウはララから視線を外し、口を開いた。

「ララは……」
「うんうん」
「今の家には、もらわれていったんだろ？」
「うん。だから？」
「だから？」
「やだ、ユウが聞きたいんでしょ？」
ユウは、ララが意外にもあっさりと、家の話題についてきたことに驚いた。
ミミズじいさんの坑道で、家族などいない、そう言い切ったときのララは、確かに深入りされたくない様子だったのにだ。
「ね、だからなに？」
と、かえってこちらがペースを乱されてしまい、ユウは、次の言葉を考えるのに苦労した。
「いや、その……家族とは、上手くやってるのかと思って……」
「そんなわけないじゃない」
「え？」
「あの人たちは、別にあたしが可愛いわけじゃないしさ。今頃は失敗したぁって思ってるって」
「……そんなわけないだろ」
たとえ、なさぬ仲であっても、親は親、子は子のはずだ。
「ユウにはわかんないよ」

そっぽを向いたララは、コートのポケットから飴を探り出し、舐め始めた。

「……ユウにだけ言うとね」

「ああ……？」

「あたし、ずっと、迎えに来てくれる家族が欲しかった」

ユウの鼻に、潮風に混じって甘い匂いが運ばれてくる。

「お金なんかいらないの。立派な家だって、きれいな服だって、ないんだったら、ご飯だって我慢したっていい。ただ迎えにきて、手をつないで帰ってくれれば、それでよかったの」

「……ああ」

「でも、あの人たちも、そんな感じじゃなかった。……だから、もういいの」

「そうか」

ユウは、ララにこう思わせるきっかけを作った本当の家族についても聞いてみたかったが、やめた。

ララの年頃を境にして、十五年前の戦争を越えてきた世代にとっては、家族との思い出は大なり小なりつらさをともなう。他ならぬユウもそうだ。

焦らなくとも、いずれすべてを話し、話されるときがくるだろう。そこに思い至り、ふとユウは、ララと自分との距離が思っていた以上に近づいていることを感じて、参ったな、と思った。

「ね、ユウ。だからあたし、あのときユウが迎えに来てくれて、すっごく嬉しかった。ほら、あのカニとやったときね」

振り向いたララは、太陽のような笑顔だった。

「すっごい感動して、ちょっと泣いちゃったんだから」

と、改めて言われると、かなり気恥ずかしいものがある。

「リドラー将軍とやったときも来てくれたし……ほら、最初ハサン

に連れていかれたときも来てくれた」
「俺じゃなくて……みんなだろ。アレサンドロだってモチだって、ララを迎えにいった」
「でも、いっつも守ってくれたのはユウ、でしょ？」
「それは……ララがいつも、俺の近くにいるからだ」
「……アハ！」
ララは笑った。
「なんだ」
「うぅん。だったら、これからもユウのそばにいるぅ」
と、ララは再びユウの腕に絡みつき、薄緑と白の飴をねじった長いキャンディ・バーへ、可愛らしく小さなキスをした。
「ね？」
「……嫌だ」
「えー、ひどい」
「当たり前だろ。俺は、ララのお守りなんてごめんだ」
ユウはこう言ったが、半分が本音で、半分は偽りである。
以前ほどは嫌でもなく、あきらめきっているところもある。
「じゃあこれからは、あたしがユウを守ってあげる。それならいいよね」
……なんだそれは。
ユウはそう口にしかけたが、自分に向けられた、思いのほか真剣な眼差しに引きこまれ、機を逃してしまった。
「あたし、もう置いていかれるのはイヤ。だからＬ・Ｊに乗ったの。大好きな人を、いつまでも捕まえていられるようにって」
「置いていかれた……？」
反問されたララの瞳が、一瞬揺らいだ。
「ほら、もうすぐサンセットも新しくなるし……そしたら、ギュンターだってなんだって一発じゃない。ユウひとりくらい守れちゃうんだから」
「ララ……」

「あ、なんだったら、養うとこまで面倒見ちゃう。そしたらユウだって、これから泥棒しなくてすむもんね」
「ララ、いい。昔のことは、もう聞かない」
ララは、押し黙った。
「……もう戻ろう。本当に、寒くなってきた」
「……ウン」
「行こう」
言いながらユウは、一歩遅れてついてきたララに、手袋を外した左手を差し出した。
「……なに？」
「……なにじゃないだろ」
「あ……う、うっそ……！」
「早くしろ、寒い」
「うん、うん！」
ララは飛びつくようにユウの手を握り、ふたりは、肩を並べて帰途に着いた。

「ユウの手って、あったかいね」
「……」
「あったかいね！」
「うるさいな、聞こえてる」
「アハハッ、やっぱり怒ったぁ」
「……」
「……ありがと、ユウ……」

響く泣き声

監獄島ホーガンの朝礼は、その日も早朝五時半から始まった。
まだ太陽の昇らぬ闇の中。身を斬るような寒気にも関わらず、哨戒灯に照らされた奴隷たちは、誰もが薄い麻の囚人服一枚で整列している。
ひそかに自らの手足をこすり合わせ、少しでも暖を取ろうというその姿は皆一様に疲れ、前方に組まれた絞首台を見る目は、まるでそう決められてでもいるかのように哀しげだ。
それもこれも、今日その絞首台に立った、あまりにも幼い少年のため。
アレサンドロより先にこの島へ流され、父を殺されたあの少年であった。

「おはよう、奴隷諸君」
ステージとも言える絞首台へ上がった、所長ビンセント・ラムゼーが、ほがらかに言った。
「今日もいい天気になりそうだ」
無論、答える者はいない。
「さて、今日は久しぶりの首吊りだ。この少年は俺を殺そうとした。この、フォークでだ」
猿ぐつわされた少年は、銀のフォークをちらつかせるラムゼーを激しい憎悪の眼差しでにらんだが、できることといえばその程度。両側から騎士に押さえられ、悔しげに脚を踏み鳴らすしかない。
「親の質が低いとガキまでこれだ。……まあ、長話もなんだ。さっそくやろうか」
ラムゼーはフォークを胸ポケットへしまいこみ、自ら首吊り縄の先を、少年の細い首へかけまわした。
「怖いか」

少年はけなげにも首を振ったが、いよいよ恐怖が迫ってきたのだろう。ひざが大きく震え、今にもくずおれそうだ。

あざけるように笑ったラムゼーは、少年の乗せられた台にかかとを置き、わざとじんわり力をかけた。

絞首台にかかった縄が、ぎし、ときしんだ。

「待ちな」

「うぅん？」

静まり返った広場に響いた、澄んだ声。

場の奴隷たち全員が驚愕したのは、その声を出した人物が、堂々と絞首台へ上がったことだ。

それがあまりに唐突で、あまりに自然であったため、同じ壇上の騎士たちさえも、茫然と、棒のように立ち尽くしている。

ラムゼーが、にやりとした。

「アレサンドロ・バッジョ。お前の仕事はここにはない。こいつは、医者のいらん世界に行く！」

と、ラムゼーが台座を蹴りつけるのと、アレサンドロが騎士の剣を奪い、竜巻さながらに縄を斬るのとは同時だった。

支えを失った小さな身体は、首を支点に一瞬宙へ跳ね上がったが……転がり落ちた絞首台の下、受け止めたブルーノのはいた安堵のため息が、その無事を皆に伝えた。

「……ハン。どうしたアレサンドロ。随分遅かったな」

「なに……？」

「俺はお前が、もう少し早く行動を起こすと思っていた。仲間とのつなぎが上手く取れなかったか？動きやすいように、随分目こぼししてやったんだがな」

なにもかも知っているという口ぶりで、いやしい目つきが、アレサンドロの手にある剣を見た。

「おい、なんだその顔は。お前は本当に、自分が一囚人になりすませていると思ったか？だとすれば大きな間違いだ。俺は生憎この仕

事が長くてな。目を見れば、そいつが犬か、虫かくらいはわかる。……お前は犬だったよ、アレサンドロ。あっちこっちに小便を引っかけ、隙を見せれば喉に噛みついてやろうって、しつけの悪い犬だ」

「ハ……よくしゃべるな、ラムゼー」

「ああ、お前みたいな奴は別に珍しくもなんともない。年にひとりは出る。そして俺は、そのたびに教訓を授けてきた。ここのボスは誰かという教訓をな。……見ろ」

ラムゼーがあごをしゃくってみせた先。すえつけられた大型モニターに電源が入る。

時間を置いて浮かび上がった映像には、わずかな光石の明かりの下、狭く窓もない空間で身を寄せ合う、数十人の子どもたちの姿があった。

どよめきとなって広がったのは、恐怖。

アレサンドロも少なからず動揺したが、ひとつ深呼吸し、剣の柄を握り直した。

「ハァン、いい覚悟だな、アレサンドロ。大概の奴は、ここで剣を捨てる」

ラムゼーは拍手した。

「だが、独り身の寂しさだな。親心ってものがわかってない。お前がどれほど、希望を捨てるなと叫んだところで……」

「……？」

「こいつらの耳に入るのは、泣き声だけだ」

途端、モニターに映る子どもたちの頭上から、大量の水が噴き出した。

後から後から止めどもなく降り注ぐ水に、子どもたちは言葉にならない絶叫を上げ、逃げまどう。

ひどいノイズに混じって広場へこだまするその叫びに、我が子の名を呼ぶ親の声が重なり、広場はさながら、阿鼻叫喚の地獄と化した。

「ラムゼー……！」
「ああ、どうした。俺はここにいる。さあ、望み通り首をはねてみろ！俺が憎いんだろう？」
「く……」
「お前は医者だ。言うまでもないだろうが、ガキは死ぬのが早い。お前の首を差し出せば助けてやると言ったら、何人の奴が従うかな」
「アレサンドロ！」
ブルーノが、足首へすがりついてきた。
「頼む！頼む、剣を捨ててくれ！俺のガキがいるんだ！あそこにいるんだよ！」
「ブルーノ……！」
「なあ頼む！アレサンドロ！」
「おい、お前。説得なら手早くやれ。遊んでる間に、ガキが浮くぞ」
「アレサンドロ！」
ブルーノだけではない。いつの間にか壇上に立つアレサンドロの足元には、多くの仲間たちが恨めしげに、また憎々しげに集まり、口々に怒号を発しては石つぶてを投げつけてくる。
アレサンドロは唇を噛みながら、それでも尚、剣は捨てなかった。
「そこまでくると、お前が味方に見えてくる。どうだ、俺の下で働くか？」
「……冗談じゃねえ」
「なら、死ぬだけだ。ガキ共々な。……そら、もう二、三人浮いている頃だぞ」
ラムゼーが、ひょいとモニターへ目を移すだけで、女たちの口からは悲鳴が起こった。
轟々と止まることを知らない水音に、子どもたちの泣き声がかき消された……。
「……く、そ！」
ついに、アレサンドロは刃を振るった。

ラムゼーにではない。切っ先はその首筋をかすめて走り、絞首台の柱へ深々と食いこんだ後、折れた。
「水を止めろ……！」
「んん、なに？」
「早く水を止めろ！」
「嫌だ」
「ラムゼー！」
襟首を絞られながら、にぃっと笑ったラムゼーは、のんびりとした手つきで、腰に下がったリモコンを操作した。
……ようやく、水の流れが止まった。

「みじめだな、アレサンドロ。レッドアンバーだかなんだか知らんが、お前は本当にみじめで、お粗末だ」
モニターからは、先ほどにも増して激しい泣き声が聞こえる。
これは、単に水音がおさまったから、というだけではないはずだ。
それまで涙を必死にこらえてきた子、恐怖に声の出なかった子、共に泣き始めたに違いない。
「もう少し、頭のいいところを期待していたんだがな……お前たちは、やり方を間違えた」
「ぐっ……！」
モニターに注意を奪われていたアレサンドロは、みぞおちを突き上げられ、その場にひざを折った。
「おい、お前たち。そんな目で見るんじゃない。こいつはこれでも、お前たちを助けるためにここに来た。勇敢じゃないか。涙が出るな！」
広場はちらりとざわついたが、やはりこの状況では、余計なことをして、という空気が濃い。すでに誰ひとりとして期待をかけようという者もいない。
「だからなんだその目は。もっと尊敬してやれ。拍手だ！」
ラムゼーの声は、むなしく響いた。

「なんとも薄情じゃないか、アレサンドロ。騒がん代わりに、お前を助けようという奴もいない」
「……うるせえ」
「いいや、俺は悲しい。お前はもっと尊敬されてしかるべきだ。ああ、俺がさせてやる」
ラムゼーは注目を集めるように、三度、手を叩いた。
「いいか、お前たち。俺は今から、こいつを殴り殺す！」
「ま、待ってくれ……所長！」
「なら、お前が代わりになるか？」
「う、う……！」
金縛りにあったように身体を強張らせたブルーノを、アレサンドロはかぶりを振って下がらせた。
「ああ……畜生」
顔を覆ったその指の隙間から、ざん愧のうめきがもれる。
「さて、なにを言おうとしてた……ああ、そうだ。あの牢には、ガキが三十人から入っている。こいつが一分生き延びるごとにひとり、あそこから出る権利を与えてやろう。つまり、三十分こいつが生きていられれば、とりあえず今日は、ガキの死体が出ないというわけだ」
だが逆に、途中で力尽きれば、それだけの子どもの命が水泡に消える。
そんな。無理だ。
広場は、ざわめき立った。
「だったら応援してやれ！歌でも歌って、こいつが早々にくたばらんようにな！」

そうして、虐待は始まった。
蹴られては殴られ、殴られては蹴られ。
始めはどうにか打撃を受け流せていた手足も、時を追うごとに重

く、緩慢な動作しかできなくなる。
そして、台の端までよろめいて行こうものなら、周囲を取り囲んだ騎士たちが、にやにやと元の場所へ押し返すのだ。
「この、薄汚い犬野郎め！」
口汚い罵倒と共に、厚く硬いブーツの底が、アレサンドロの腎臓の辺りをしたたかに蹴りつけた。
拳に打ち抜かれた目蓋が、深く裂けた。
全身の骨が、きしみを上げた。
「ああ……」
誰かが神に祈っている。
「まだだ」
それが、小さな悲鳴に変わる。
「まだだ」
東の水平線から、太陽が顔を見せた。
「……おい、まだ時間はあるぞ」
ラムゼーがようやく一息ついた頃には、すでに絞首台の床板は、裏面まで染みとおるほど、吐き出した血を吸っていた。

「……なぁ、アレサンドロ。気づいているか？」
「う……」
髪をつかまれ、無理に頭を引き起こされたアレサンドロは、どうにか薄く目を開けた。すぐ近くに、その憎い顔がある。
「気づいてるんだろう？」
「……なにを、だ」
「とぼけるな。俺が手加減してやってるってことをだ」
アレサンドロは反応こそ見せなかったが、確かに、それに気づいていた。
今の自分は鮮血をまき散らし、はた目には瀕死の重症に見える。
しかし、死ぬほどのものではない。
「理由がわかるか？……おっと、俺は同情しているわけじゃないぞ。

ガキに対してもだ」
「……」
「そうだ、ガキはいつでも殺せる。今、俺がやってることは、ただの気晴らしだ」
ラムゼーは喉を震わせ、ククと笑った。
「さあ、英雄。そろそろ時間だ。なにか言いたいことがあるなら聞いておいてやろう。ああ、こいつらにでも、外の連中にでもいい。好きなことを言え。俺が許す」
なんなら、つばを吐きかけてもいいと、この小さな世界の神は、憎らしく頬まで突きつけてきた。

「……えねえ」

「なに？」
ラムゼーは、血に汚れたアレサンドロの口元へ、耳を差し寄せた。
「……泣き声が、聞こえねえ」

一瞬の沈黙を置いて、ラムゼーの顔色が、さっと変わった。

十五年後の空

「どういうことだ、これは……？」

ラムゼーが、うめくように言った。

その、薄暗い円筒形の房内に見えるのは、黒々と横たわる水、そして光石灯の明かりだけ。モニターを抱くように、それこそ鼻がふれるほどの距離で凝視するその目には、そこにいるはずの子どもたちの姿が、ひとりとして映らない。

カメラの死角にいるのか。いや、そんな場所はない。

「……逃げた」

「ハ……」

「逃げた！」

真っ青になった騎士たちが確認のために飛び出していくのを、広場のブルーノたちは茫然と見送った。

そう、ブルーノたちは状況をつかみきれないのではない。混乱しているのだ。もうこの世界では、『逃げた』という言葉から、実感やリアルさというものが抜け落ちてしまっていたのだ。

しかし、腹を押さえて座りこんだアレサンドロの胸倉を、ぐ、とつかみ上げたラムゼーにしてみれば、これほど恐れ、日々聞かないことを祈り続けた言葉はないだろう。

「アレサンドロ、こいつはどうしたことだ」

ささやくようなその声には、苛立ちと焦燥、憎しみが、混沌としているようだった。

「さっきまでは確かにいたな」

「……ああ」

「それが、今はいない」

「みてえだな」

「何故だ」

「……てめえが、目を離したせいだ」

アレサンドロは、口にたまった血の塊を、つばと共にはき出した。
「感謝してるぜ……てめえは、俺たちに三十分もくれた」
「チッ……生意気を、抜かすな！」
ラムゼーの強烈な右拳を頬に受けながらも、アレサンドロの気分は当然よかった。
時間を稼げと、海鳥を介したハサンの指令を受け取っただけで、実際この『盗み』がどのようにおこなわれたのかについては、さっぱりとわからない。わからないが、そんなことはどうでもいいことだ。
現実に子どもは消えた。助かったのだ。
「ハ、ハ」
思わずもれた笑いと共に自然と振り上がった拳が、今度はラムゼーの鼻っ柱にめりこみ、
「げう」
つぶれたカエルのような声を出して、その身体は壇の下へ転げ落ちた。

「……さあ、行こうぜ」
ブルーノたちは、まだ動こうとしない。
「今度は、俺たちがここを出る番だ」
と、言葉優しく語りかけるアレサンドロを、快晴の空の下、数百の瞳がまぶしげに見つめている。
「俺たちは今まで、奴隷だ、人間を裏切ったクズだと言われてきた。……故郷（くに）を捨て、ようやくたどりついた場所まで壊されて、今はもう、この世界に俺たちの居場所はねえのかもしれねえ」
誰かの喉が、ごくりと鳴る音まではっきりと聞こえる。
「……でもよ、死んだ気になるのはまだ早ぇ。俺たちにはまだ……」
と、ふとかげった光と、力強い羽ばたきに振り返ると、そこには、十五年前の輝き。
Ｎ・Ｓカラス。Ｎ・Ｓクジャク。

「そうだ……まだ、行ける空があるはずだ」

わぁっと、津波のような歓声が沸き起こった。

抱き合う者。諸手を上げ涙する者。広場は歓喜に包まれ、全員でその感動を分かち合う。

「アレサンドロ」

「……ああ」

壇上へ這い上がったブルーノもまた、汚れた顔に涙の筋をつけ、まだ立ち上がれずにいるアレサンドロを、その太い腕で抱きしめてきた。

「お前って奴は、本当によ……」

と、丸まった広い背が震えている。

「俺は……俺は臆病もんだったよな」

「いや……そんなことはねえさ」

「あいつらのことは、責めねえでやってくれ。悪気はねえんだ。俺たちは、もうあきらめてた」

「ああ……わかってる」

「ア、アレサンドロ……！」

ふたりはそのまま、想いを声にするのを惜しむかのように口をつぐみ、抱き合う腕に力をこめあった。

と、そのときだ。

「危ない！」

女の叫びに振り向いたブルーノが、あっと小さく叫んで、アレサンドロを突き飛ばした。

「ううッ！」

「ブルーノ！」

肉づきのいい巨体が尻餅をつき、とっさに差し出したアレサンドロの腕へ倒れかかってくる。

左の腹から出血。刺されたのだ。

「ラムゼー、てめえ！」

「ハン！同じ言葉を返してやる。貴様が目を離したせいだ！」
鼻血を顔にこびりつけ、醜いまでに形相の変わったラムゼーは剣を振りまわし、目についた、あの絞首刑にされかかった少年をかつぎ上げると、身をひるがえして逃げた。
「ラムゼー！」
アレサンドロはこれを追おうとして、追えなかった。

「ブルーノ、しっかりしろ。いいか、横にするぜ」
「う、く、うう、う……」
遠くで、Ｌ・Ｊの出撃音が聞こえる。
いや、むしろ、このときまで聞こえなかったのが奇跡といってもいいくらいだろう。クジャクが、全員桟橋へ向かうよう指示している。
ブルーノの傷は思ったよりも浅く、血を出し続けさえしなければ問題ないとアレサンドロは見た。
先ほど叫んだらしい女が走り寄り、まだ二十代も前半に見える、細く優しげな顔を真っ青にして、ブルーノの手を取った。
「奥さんか？」
「はい……はい！」
「おいブルーノ、美人だな」
「へ、へ……」
「よし、ここを押さえてろ、しっかりだ」
アレサンドロは薄い白衣のすそを裂き、傷口に押し当てた。
「おい、誰か手を貸してくれ！」
と、呼びかけると、すぐに若い男四人が壇上へ駆け上がり、ブルーノの身体を、まるでみこしのようにかつぎ上げる。
「あまり揺らさねえように運んでやってくれ。俺が行くまで無理はさせるな。いいな？」
「お、お前は……？」
「さっきのチビを助けに行く。なに心配すんな、必ず戻る。……さ

あ、ガキが待ってるぜ！」
　ブルーノたちはひとかたまりとなって、桟橋へ続く道を小走りに駆けていった。
『アレサンドロ、お前も行け。桟橋へ船が来る』
「いや、俺はまだ行かなきゃならねえ。クジャク、あんたは診療所に行ってくれ」
　ベッドには、まだ八人の傷病者がいる。だが、どれも動かして差しつかえないように手を尽くしてきた。
『……わかった。死ぬなよ』
　Ｎ・Ｓクジャクもまた、滑るように診療所へ飛んでいった。

「……よし」
　ひと息ついたアレサンドロは、走り出した。
　身体は痛み、喉も渇くが、こうなれば百人力だ。自然と足は軽くなる。
　ひとつ疑問が残ったのは、一足先に桟橋へ向かったらしいＮ・Ｓカラスが、先ほど、ひと言も口をきかなかったこと。普段のユウやモチならば、大丈夫か、のひと言くらいかけてきそうなものである。
　カラスを演じるためか……その方がいいかもしれねえ。
　アレサンドロは、漠然とそう思った。
　今の自分を見てもわかる。赤い月の入れ墨を入れた者にとって、Ｎ・Ｓと魔人から受ける影響は、それが良いものであれ悪いものであれ、計り知れないものがある。
　カラス本人でないと知られたところで、今更、残りたいと言い出す者はいないだろうが、いざというときのひと押しができるか、どうか。
　それを考えると、ここを無事に出るまでは、カラスはあの頃のままのカラスでいた方がいいはずだ。
　見上げた空を飛ぶＬ・Ｊが突如爆発を起こして墜落したのは、テリーのＬ・Ｊ、シューティング・スターの仕業だと、アレサンドロ

にはすぐにわかった。

ラムゼーと子どもの姿は見えなかったが、薄く降り積もった雪に残る足跡は、島の南へ続いている。

南といえば、このホーガン島においても特になにもない場所で、海との境は切り立った崖が続く。

なだらかな斜面を登りきると、ぽつんとひとつ監視塔を兼ねた灯台があり、そこからは、遠く北の桟橋に群れ集まったL・Jが、接岸した巨大な船を取り囲んでいるのがよく見えた。

「来たな、英雄」

ラムゼーは灯台の入口にもたれ、幽鬼のごとく立っていた。

「まったく、お前は最高の野郎だ。最高にハッピーで、最高にムカつかせてくれる」

「……あのチビはどうした」

「ハァン、わかりきったことを聞くな、この中だよ。ついでに言えば、ちょっと細工をしてきた」

「細工……？」

「爆弾だ」

ラムゼーの顔の血はぬぐわれていたが、目の光が尋常でない。手には、ふた振りの剣が握られている。

ラムゼーは、その内一本を放って寄こすと、残りの一本を抜いた。

「決着をつけようじゃないか、アレサンドロ。お前もそのつもりで来たんだろう？」

「その前に、ガキを逃がしな」

「駄目だ。言っただろう。俺は爆薬を仕掛けてきた。こんな灯台ぐらい粉々に吹っ飛ぶ量だ」

「……それで」

「爆弾は時限式。気絶したガキは、手錠でつながれている。鍵は、これだ。……もうわかるな？」

「時間以内に、その鍵を奪えば俺の勝ち……」
「違ぁう。時間以内に俺を殺せば、お前の勝ちだ。俺は、お前と殺し合いがしたいんだよ、アレサンドロ。お前にはその価値がある」
と、なんとラムゼーは、その小さな鍵を舌に乗せ、ぺろり、口に含んだのである。
「……冗談だ。出すときのことを考えるとぞっとする。ほら、ここに入れておくぞ」
ラムゼーは吐き出したそれを、左の胸ポケットへ落としこんだ。
「さあ。俺かお前か、生き残るのはふたりにひとりだ」
「チッ……」
アレサンドロも、ゆっくりと剣を抜いた。

白野の闘い

タイムリミットは三十分。

こう聞くと余裕がありそうだが、ラムゼーは当然ながら、確かな腕を持っていた。

よくある貴族が教養で身につける型通りの剣ではなく、実戦で鍛えられた剣だ。一刀一刀が重く、あしらう腕にも衝撃が響く。

幾度かの力まかせの打ち合いの後、左目へ突きこまれかけた切っ先をかわしたアレサンドロは、負けじと地をするように剣を振るったが、ラムゼーもまた思った以上に俊敏な動きでこれを払った。

海から吹きつける北風に、呼気を浴びた髪は凍りついていた。

「フゥン……少しは使えるが、お前はどうも、田舎医者がお似合いのようだな」

ラムゼーは、あごに入った薄い刀痕をなで、その指先をこすり合わせた。

「どうも、俺を殺そうって気が足りない」

「……そうかよ」

「いいのか？お前が戻らなけりゃあ、あの船は沈むぞ」

「なに……」

「この辺りの海には、最近、妙なものがうろうろしていてな。知らずにぶつかれば、アウトだ。今頃はここのことも……っと、おいおい待て。あのガキを置いていくか？んん？」

アレサンドロは、つい動きかけた足を、舌打ちと共に戻した。

「……その、妙なものってのは」

「さあ。見た奴の話じゃあ……バケモノだ」

ぱっと、懐へ飛びこんだラムゼーの刃が、アレサンドロの左の肩口を斬り割った。

「く……」

とっさに身を引いた傷口はそう深くないが、白雪の野に鮮血が飛ぶ。

数歩退いたアレサンドロは、不敵とも見える大様さで近づくラムゼーの脳天へ剣を振り下ろしたが、柄を握った腕を取られ、逆に、足払いに投げ飛ばされてしまった。

こいつ……！

カラスに剣の手ほどきを受け、戦後すぐは無頼の徒との喧嘩に明け暮れていた時期もあるアレサンドロも、こうした戦い方をする男は初めてだ。剣術と体術を同時に使う。

しかし、続けざまに手首をひねろうとした手をさらにつかみ返し、体重を乗せて体を入れ替えたアレサンドロの目は、その驚きとは裏腹に、ぎらりと光ったに違いない。

ラムゼーの身体を両足で固定し、腹に密着させた右のひじ関節を逆方向へ締め上げると、

「づあぁい！」

ラムゼーの口からは、なんとも言えぬ悲鳴が上がった。

じん帯が、関節が、どちらの向きへ、どれほど曲がるか。わずかな力で人体を操るには、どのようにすればいいか。アレサンドロに医術を教えた魔人ジャッカルは、実験台ではないがアレサンドロの身体を使い、よく調べていた。

それは治療だけでなく、横たわった病人の向きを変えることなどにも応用されたものだが、結果、かなりの痛い思いと引き換えに、アレサンドロにもその知識は宿った。

この戦法は自分の方が使いこなせる。その自負が、アレサンドロの目を輝かせたのだ。

「チ……こ、の……！」

ラムゼーはもがいたが、腕の力のみで外すには筋力が足りない。剣も、すでに取り落としている。

「生意気な、野郎だ……！」

にやり、うめくと、今度は足で反動をつけ、腕を軸に後転した。

そこは経験不足か。剣を持ったままのアレサンドロだっただけに、手首の決めが甘かったのだろう。仰向けからうつぶせに体勢を変えられ、するりと腕の中から逃げられてしまう。

さらに間合いを離すか、と、アレサンドロは思ったが、とんでもない。ラムゼーは攻勢に転じた。

間髪入れず、アレサンドロの右足首へつかみかかり、

「ふん！」

足首とひざにそれぞれ手足を絡め、ねじ曲げようと力をこめた。

……まずい。

これが決まれば、ひざを砕かれる。

思うが早いかアレサンドロは、ひねりと同じ方向へ身体を回転させ、ラムゼーの尻を蹴って脱出した。

「う……！」

アレサンドロが反動で転げた先は、斜面であった。

わずかではあるがそれを滑り落ち、足元に気を取られたアレサンドロが、頭上の気配に、ハッと顔を上げる。

ラムゼーが目の前にいた。

ラムゼーの指が、ボキボキと鳴った。

まだ手にあった剣をそのすねへ振るったが、柄を蹴り上げられ、遠く彼方へ飛ばしてしまう。

十本の指が、アレサンドロの喉へ爪を立て、

「死ね」

言ったラムゼーの唇が、耳までつり上がった。

丁度その頃。

くしくも、こちらも爆弾を目の前に目蓋を閉じる、ひとりの男がいた。

深々と椅子に腰かけ、ひじ掛けに置いた左腕は指でこめかみを支

え。
まるで眠っているかのように見えながらも、
『大将』
と、呼びかけられると、うっすらと目を開けた。
ハサンである。
ここは、クジャクの言っていた、迎えに来たという船のブリッジだった。
ただしこの船、女海賊ソブリンの双胴艦、ブラック・クール・ハーマン号ではない。無論マンムートでもない。
聖鉄機兵団所有の、軍艦である。
なんとユウたちは、救出に先立ち、この船を乗組員ごと盗み出していたのだ。
ブリッジのいたるところに、火薬を満載した樽爆弾を配しているのはそのためで、肩書きこそ鉄機兵団所属とはなっていても海兵には騎士の家柄が少なく、したがって、命を天秤にかけられれば弱い。
「通信士君、回線を開いてくれ」
ハサンが、つまらなさげにつま先で樽をつつくと、通信士は何度も操作を誤りながら、指示に従った。
「なんだ」
『旦那が、まだ来ないって』
甲板に立つテリーのシューティング・スターは、解放と再会の喜びに沸く囚人たちに囲まれ身動きもままならない様子だ。この大人数を乗せるため、この船の乗組員は必要最低限を除いて、ここで降ろす手はずになっている。
「残っているのは奴だけか」
『あと、子どもがひとり』
「他は乗ったな」
『うん、まあ、そうみたい』
「ならば結構。予定通り出港する。外の連中にもそう伝えろ」
モニターに映るテリーは、一瞬なにか言いかけたが、

『……大丈夫かなぁ』
通信を切った。

……ぽたり、ぽたりと。
雪に血が落ちる。
元をたどると、それは冷たい刃を伝っており、さらにその刃は、腹の中へと続く。
不思議そうに首をかしげたラムゼーは、前かがみの姿勢からやおら立ち上がり、自身の腹へ突き立った剣へ手をかけた。
誰が刺した。
アレサンドロだ。
どこから出した。
それが自身の取り落とした剣だということに、ラムゼーはなかなか思い至らなかった。
格闘のうちに雪に埋もれたそれが、まさか、アレサンドロの手元へ滑り落ちていったなど……。
ずるずると、背まで貫通した刃が引き抜かれると、ひと呼吸置いて、パッと血がしぶき、
「くそ」
ラムゼーは仰ぐように両手を広げて、そのまま、雪の中へ、倒れた。

「……はっ……はっ……」
喉を押さえたアレサンドロは、その様を見届け、ようやく立ち上がった。
一応の終止符が打たれ、ほとんど精も根も尽き果てたと言っていい状況だが、こうしてはいられない。これで終わりではないのだ。
大の字で横たわるラムゼーのかたわらへ近づき、崩れるも同然に座りこんだアレサンドロは、その左胸のポケットをあさった。

と……。
「うん？」
なにか硬い物にふれた。
騎士と思われるラムゼーだが、その身には胴鎧さえ帯びていない。
だが、仕立てのいい上着の合わせの下、胸筋の辺りに、金属質の円盤のようなものがある。
嫌な予感を覚えたアレサンドロは、すぐさまラムゼーの衣服を引きはがし、
「う……！」
息を呑んだ。
背にかけまわした皮ベルトで固定されたそれは確かに金属の円盤だったが、その中央で、なんとデジタル表示のカウントダウンがなされていたのである。
「まさか……」
「ああ爆弾だよ」
「！」
驚愕したアレサンドロの手首が、骨ばった細い指につかまった。
「ラムゼー……ッ！」
口からおびただしい血を吐きながら、にぃっと笑ったラムゼーの力は、瀕死の重症を負ったとは思えないほどに強い。
と思うと、突如手を離され、勢いあまってのけぞり倒れたところを、今度はのしかかるように、胸元へ抱きつかれた。
「く、そっ！」
きつく肋骨を締め上げる腕へ、腕を差しこもうとして差しこめず、頭部への打撃も、距離が近すぎるためか決定打とならない。
「ク、ククク、アレサンドロぉ。つれないことをするな」
ぎょろりと、上目遣いにこちらを見やったラムゼーの眼光に、アレサンドロはぞっとした。
「それぐらいならいっそ、こいつごと心臓を突き刺してくれりゃあよかった。そうすりゃなにも考えず、一発で行けたのになぁ」

「くッ……！」
「さあ、もう時間だ。一緒に行こうぜ、アレサンドロ！きっと楽しいパーティになる！」
「うる、せえッ！」
と、そのときだ。
身をよじるように密着してくる動きに合わせ、ラムゼーの胸元から、なにかきらりと輝くものが顔をのぞかせた。
あれだ。アレサンドロは瞬間的に察知した。
あの少年の、フォークだ。
アレサンドロは、ためらうことなく手を差し入れると、五センチほど頭を出したそれを引き抜き、ラムゼーの右肩へ突き刺した。
「ぎゃあ！」
耳をつんざく叫びを発し、ラムゼーの手がゆるむ。
すぐにその身体を突き放したアレサンドロは、まわりこんだ背後から襟首とベルトをつかみ、
「パーティには、ひとりで行きやがれ！」
助走をつけて、崖下へ投げ飛ばした。
「あああっぁぁぁぁ！」
ラムゼーが空をかきむしる。
「ア、レ、サンドロォォォッ！」
呼ぶ声が遠くなり、直後、巨大な火柱が、灯台を越える高さまで噴き上がった。

悪夢を越えて

両開きの重い扉をくぐると、自然光のみの薄暗い円筒建築の中を、螺旋階段が続く。

その床の端に、鉄の手すりへ片輪を拘束された手錠の少年が、ぐったりと身を横たえていた。

「おい、坊主」

手で怪我の有無を確かめながら周囲を見まわすも、爆弾らしきものはどこにもない。時間はとうに過ぎている。

そういえばラムゼーは、仕掛けてきた、とは言ったが、灯台の中に、とはひと言も言わなかった。

たとえ敗北しても、灯台の中を探しまわっている間にすべてを吹き飛ばす。そんな言葉のトラップだったわけか。

……ハサンの使いそうな手だな。

アレサンドロは、思わず苦笑した。

「おい、大丈夫か？」

「う……うう」

うめいた少年は眉をしかめ、ゆっくりと目蓋を開けた。

「あ……！」

「大丈夫だ。あいつはもういねえ。……さ、こっちを見てくれるか。そうだ、じっとして」

できるだけの笑顔を作り、頬に手を添えてやると、小さな肩から力が抜ける。

「痛いところはねえか？」

問いかけつつ瞳の様子を見、脈を取る間も、少年は大きな瞳を潤ませることもなく、茫然といった面持ちでアレサンドロを見つめていた。

「お前、名は？」

「……ジャン」

「ジャンには、おふくろさんがいるよな」
小さく、うなずいた。
「おふくろさん、どこにいるか知ってるか？」
「……お医者の、先生のところ」
「そうだ。胸が痛くなったんだよな」
「うん……」

アレサンドロは、そのいじらしい様子に胸を突かれる想いがした。
実のところこの少年に関しては、昨夕、ひとりの年増が医務室にかつぎこまれてくるまでは、なにも知らなかったアレサンドロなのである。同じく数日前から医務室で病を養っていたジャンの母親が、その年増から息子の危機を知らされて、病状を悪化させた。そこで初めて、こちらの耳にも入ったのである。
それがなければ、今日この日に、誰が、なんの罪で懲罰を受けるかなど、診療所まで届かない。アレサンドロが行動開始の予定時刻として設定していた明日早朝には、この小さな手も冷たくなっていたはずだ。
今は、処刑の情報が自分に届き、ハサンに届き、どうにか準備が間に合ったことに、ただただ胸をなでおろす他ない。
そして、
「お願いします……あの子を、あの子を……！」
と、胸を押さえ、血を吐くように訴えてきた母親のあの目、あの骨の浮いた指を、アレサンドロは生涯忘れることはないだろう。
……だが。
アレサンドロの見立てでは、ジャンの母親の病は、そう深刻なものではない。
心労に過酷な労働と寒さが重なり、心の臓へ負担をかけたのだ。
安静が一番の薬といえる。
「治る？」
「ああ、治るさ」

ようやく、ジャンの瞳に生気がよみがえった。
「ジャンは親父さんをやられて、あいつのせいで、おふくろさんまでなくしちまうと思ったんだよな。だから、刺そうとした」
「……うん」
「生憎、あいつはもう死んじまったが……そら」
と、アレサンドロが握らせたのは、あの銀のフォークだ。
「これが、あいつを倒した剣だ。お前は仇を討ったんだぜ、ジャン」
言われたジャンの目から、みるみる大粒の涙がこぼれ出てきた。
「でもよ、おふくろさん泣いてたぜ。後で会ったら、ちゃんと謝らねえとな」
「……うっ……う、うっ」
「謝れるか？」
「え、え……」
「よしよし、さ、起きてもいいぜ。手錠を外さねえとな」
アレサンドロは小さなジャンをひざの上に乗せ、手錠の錠外しに取りかかった。
実は、手錠の鍵がラムゼーと共に吹き飛んでしまった、などと、この子には言えない。
「……ユウがいりゃあな」
と、頭をかいた途端に、扉の外を影が走った。
「……おいおい、まさか……」
『アレサンドロ、どこだ！』
「マジかよ。おい、ユウ、こっちだ！手を貸してくれ！」

カラスの手に乗り、西海沖に浮かんだ略奪艦へ帰還を果たしたアレサンドロとジャン少年は、喝采で迎えられた。
口々に感謝の言葉を述べ、英雄にふれようと皆が手を伸ばす中、アレサンドロはまず、血の気のない顔で待つ母親にジャンを返した。
「ああ、感謝します！感謝します！」

飛びついた母の腕の中で、ジャンは、あんあんと泣いた。
「ここは冷える。あんたは、中であったまった方がいい」
「はい……ああ、この通り……この通りです……！」
「いや、別に大したことはしてねえさ。おい、誰か、できればベッドのあるところに連れていってやってくれ」
抱かれたまま母から離れようとしないジャンの手には、銀色のフォークが大事そうに握られていた。
「ブルーノはどうした」
「ここです！ここです！」
人垣の向こうで、飛び跳ねながら手を上げたのは、その妻、ディディだ。
「どいてくれ」
と、人をかき分けて進むと、薄い毛布の上に、腹を押さえたブルーノが長くなっている。
「おう」
「よう」
がっちりと組んだ手のひらは温かく、力強い。血色もいいようだ。
「医務室に行けと言ったのに聞かなくて……」
と、ディディが眉をひそめたが、
「馬鹿野郎。ここの医者に見せるぐらいなら死んだ方がましだ！」
ブルーノは、ひどい剣幕でしかりつけた。
「おいブルーノ、やめねえか。馬鹿はお前だ。ほら、傷を見るぜ」
「あ、つつ……くそ、お前こそ、身体の方はいいのかよ」
「ああ。……ガキには会えたか？」
「お、おう、まあな……ほれ、この坊主がエリオ。八歳だ。で、こっちが、カリーナ……へ、へへ」
「目尻が垂れてるぜ、お父さん」
「へ、へ、いくらお前でも嫁にはやらねえ。絶対にやらねえ」
「ハ」
「……本当にやらねえぞ」

「わかったわかった。あとは医務室だ。わがまま言わねえで連れていってもらえ、いいな？」
「う……わかった」

そうして再び、みこしとなってかつぎ上げられていくブルーノを見送ったアレサンドロは、立ち上がろうとして、もう一歩も動けない自分に気がついた。
そう。死ぬほどではなかったにせよ、ラムゼーの暴力がダメージを与えていないはずがなかったのだ。
「あなたこそ、医務室へ行ってください」
と、抱きかかえるように声をかけられたが、
「いや……まだ、やらなきゃならねえことがある」
と、無理やり一歩踏み出し、やはり、ひざから崩れ落ちる。
「くそ……」
「無茶です、アレサンドロさん」
「あなたになにかあっては申し訳ない」
アレサンドロは、かぶりを振った。
そこへ、
「あ、こ、これは……！」
前方の人垣を割って現れたのは、
「クジャク……」
伝説の砦長、生身での登場に、周囲は静かな興奮に包まれた。
「アレサンドロ、お前はもう休め。ここからは俺たちが引き受ける」
「いや、そうはいかねえ。ハサンに……」
「アレサンドロ」
クジャクの声は有無を言わさぬようでありながらも、不思議な温かさに満ちている。
ゆったりと、顔を覆うように伸ばされた手のひらに鼻筋をひとなでされ、あ……と思う間もなく、アレサンドロはその腕へ倒れこんでいた。

「クジャク……なにを……」
身を起こそうともがいたが、身体はすでに、手足をどこへやっているかもわからない。心地よさと浮遊感に包まれ、目蓋が重い。
「今は眠れ」
「待ってくれ、頼む、ハサンに……」
と、絞り出した言葉は、伝わったかどうか。
「頼、む……」
首筋にふれた、柔らかい肌の感触を最後に、アレサンドロは気を失った。
「クジャク様……」
「心配ない。医務室へ連れていく」
言いつつ、クジャクはアレサンドロの長身を肩にかつぎ上げている。
細身ながらさすがによく鍛えられたクジャクの身体は、この程度ではビクともしない。
「お前たちも中に入るがいい。だが、ベッドも食事も十分ではない。不便はあるだろうが、陸に上がるまでは耐えて欲しい。なにかあれば俺に言ってくれ」
人々は、皆粛々と行動を始め……次にアレサンドロの目蓋が開いたときには、艦は以前からそうであったように、平和なひとつの集落、そのものとなっていた。

「バケモノ……」
「そうだ。この海にバケモノがいる。お前に伝えてくれと、アレサンドロが」
「そうか」
ハサンは、艦尾側の甲板をぐるりと囲む手すりにもたれ、アレサンドロが必死の想いで伝えたこの情報を、特に感情を動かされた様子もなく聞いた。

ここから艦橋を挟んで船首側の甲板にはシューティング・スターがおり、代わりにブリッジを監視している。外からライフルを突きつけられ、むしろハサンがにらみをきかせるよりも、戦々恐々としていることだろう。

ユウとモチは、艦内に問題はないか巡回中……と、ここまでくると、姿の見えないセレン、メイ、ララ、そしてジョーブレイカーの居場所が気になるところだ。

ジョーブレイカーは、いまだシュナイデ調査で所在不明だが、女性陣三人はマンムートで陸路を北上。七日後には合流することになっていた。

「バケモノか。君はなんだと思う」

「L・Jだ」

「ンッフフフ、簡単明瞭、結構だな」

ハサンのくゆらせた煙は、風に流され、たちまち消えた。

「だが、まさかただのL・Jでもあるまい。試作機か、オリジナルか。いずれにせよ水中戦は避けられまい」

「ああ」

「さりとて、今は打つ手もなし」

それがどのような敵か、どこにいるか、情報が少なすぎるのだ。下手に騒ぎ立て、無用な混乱を招きたくもない。

あたり構わずかぎまわり、寝た子を起こすなどもってのほかだ。

「とりあえずは、君とあれとで、少々範囲を広げてまわってみてくれ。君が海の友達を紹介してくれるというのなら……」

と、ハサンはクジャクの顔をのぞきこみ、

「最も都合がいいのだがな」

「フ、フ」

「おや、なにかおかしなことを言ったかな?」

「いや。西海の魔人か……む?」

クジャクの涼やかな目元から、す、と笑顔が消え、遠くの一点へ向けられた。

「……船か」
「ソブリンだ。クジャク君」
「なに……？」
その豆粒にも満たない船影から、なにがわかるというのか。
しかし、ざんざんと波を割って近づくその船がようやく形を成したとき、確かにそれはブラック・クール・ハーマンであった。
「よく見えるものだな」
「フフン、これはこれで生きにくい」
右舷前方を南下してくるブラック・クール・ハーマンは、北上するこの船とは互い違いに進んでいることになる。
数百メートルを隔てた距離をすれ違おうとしたその甲板に立つのは、ソブリンと、普段は海に出るはずのないチャノム爺だった。
ふたりは、二言三言、言葉を交わし合い、チャノム爺の手元で光がまたたいた。発光信号である。
「なんと言っている」
「さて……」
空とぼけたハサンは、にやりとしたのみで、海に背を向けてしまった。

「ケッ、あの野郎。だから見送りなんざいらねえと言ったんだぜ、ソブリン」
「なに、あいつがああいう男なのはわかった話じゃないか」
遠ざかっていく巨大な後ろ姿を見送りながら、ソブリンはむしろ喜ばしい様子で、潮風に痛みつくした髪をかき流した。
そのとき、ふわりとチャノム爺の鼻へ入ったのは、さわやかな花の香り。
普段、まったく化粧の気のないソブリンから匂っているのである。
「なあ、ソブリンよ……」
「なんだい」

「……いや、なんでもねえ。早えとこ、波でもかぶりに行こうや」
「そうさねえ……まあ、せっかくここまできたんだ。適当な船を見つけて、かっぱいでやるのも悪くない」
「おう、それよ。やっつけようぜ」
「ああ、やっつけよう」
ソブリンは三角帽をかぶり直し、西海の悪魔の顔で笑ってみせた。

遭遇

その、ソブリンのブラック・クール・ハーマンが隠れ家を出航する、三十分ほど前。

修理の終わったマンムートが、同じく改修を終えたサンセットを積みこみ、予定通り、北へ向けて出発している。

食料、水、生活用品その他。様々な物を、それも数百人分詰めこんだマンムートの光炉に火が入り、

「気をつけて行くんだよ」

「うん、ありがと」

すっかり打ち解けたソブリンとララは、抱き合って別れを惜しんだのだった。

「意外に、あんたみたいな子が、ユウとはしっくりくるのかもしれないね」

「ホント？ホントにそう思う？」

「ああ、しっかりやんな。一押し二押し、三に押しだ」

「……だって！」

「ふうん」

「あ、セレン冷たぁい」

「そうかい。じゃあ、おめでとう」

「ねぇ、話聞いてたぁ？」

今、地中を走るマンムートのブリッジでは、相変わらず、のんびりとした空気が流れている。

舵を取るセレンに、飲み物と菓子の用意をするメイ。それを、つまみ食いするララ。

チョコレートのついた指を舐めたララは、セレンの座るメインシートの背もたれにあごを乗せ、

「ねぇ、セレン」

「なんだい」
「あたし……早くユウに会いたい」
「……」
「なんてね！」
「……ふうん」
これは、いよいよ本物だ。
セレンは、ブラックコーヒーをひと口すすった。
「メイ、そろそろ出ようか」
「は、はい！ええと……大丈夫です。障害物ありません！」
「上がるよ」
マンムートが顔を出したのは、雪吹きすさぶ山間の雪原だった。
「レーダー展開します」
「うん」
「すごい雪ですね……」
メイが、ため息をはくように言った。

こうした、山の変わりやすい天候を考えれば、合流場所まで地の底を這っていく方が安全なのは言うまでもない。そこをあえて曲げたのは、曲げなければならない理由があるからだ。
それがなにか。マンムートの後方を見れば、すぐにわかる。
穴の中から全身を現したマンムートは、もう一台、それはもう自身と同じか、それ以上に巨大なキャタピラつきの箱を牽引しているのだ。
ブルーノを始めとする、数百人からいる仲間たちのための、宿舎として作られた荷車であった。
さて、荷車というからには、この車に自走能力がないことがわかるだろう。
さらに、ブラック・クール・ハーマンと同質の船材を組み上げてあるとはいえ、専門機関の粋をこらして建造されたマンムートに比べれば、若干強度が落ちる。密閉性にも不安がある。

となると、なにかと障害物に当たりやすく、圧力のかかる地中よりも、地上を進むのがこの荷車にとってはいい。マンムートがそれに合わせる、ということになるのであった。

ここまではソブリンの隠れ家へ義理立てして、足取りをつかまれないように地中を走ってきたが、できる限り地上を進む予定のマンムートなのである。

「二号車も、問題なさそうです」

「うん、熱感知もしておいて」

「は、はい、そうでした！」

メイは慌てふためいて、熱感知センサーも作動させた。

「ね、これなに？」

ララが指差したのは、メイの手元、黒いモニターに映し出された、いくつかの点だ。

距離感はよくわからなかったが、緑色のそれが、もぞもぞと動いている。

「ああ、近くに、人が住んでいるみたいですね。村です」

「ふぅん。Ｌ・Ｊじゃないんだ」

「違いますよ。Ｌ・Ｊなら、ほら、こんな警報が……」

「……って！」

「け、警報？警報が鳴ってます、セレン様！」

「そうだね」

「え、あ、ど、どうしましょう！」

「あ、あたし出るね！」

「わ、私はぁ……ええと……あのぉ……」

「待った」

わたわたとブリッジを走りまわるララとメイを、セレンのひと声が押しとどめた。

「深呼吸」

言われたふたりは、すう、はあ、と息をする。

「向こうのレーダーに、まだこっちは映ってない。止まって様子を

見よう」
「あ、そ、そうですね。さすがセレン様！」
「でも、ララは一応出て」
「うん、わかった。さっすがセレン様！」
「そういう冗談はいらないよ」
ララがブリッジを駆け出ていった後、セレンはメイに、Ｌ・Ｊ用ハッチの開閉準備をさせた。
先に述べたように、マンムートはもう一台、二号車を牽引している。困ったことに、この状態では後部Ｌ・Ｊ用ハッチが開かないのだ。
マンムートは速度を落とし、連結部の継ぎ手を延長。走りながら、マンムート本体と二号車との間に、数十メートルの間隔を空ける。
ひと気も、他のＬ・Ｊの姿もない、がらんどうな格納庫から、サンセットが一歩、雪面に足を踏み出したところで、マンムートも停車した。
『どう？』
セレンが聞く。
『最ッ高』
ララは答えた。

ほとんど新型ですよ、と、メイに言わしめたサンセット？（ツヴァイ）は、その言葉通り、以前のそれから、がらりと趣を変えている。
真紅の装甲、スピナー、そして、多少薄身になりながらも大型シールドは引き継がれているが、無骨だった全体のシルエットは、すっと引き締まり、ひと皮もふた皮もむけたように見える。
背にあった四基のスラスターは取り外され、代わりにバックパック式の独立可動スラスターが二基。同じく巨大なテイルバインダーが二基。また、脚部サブスラスターと、新設された胸部サブスラスターも噴射領域が広く取られており、機動性と安定性が増した。

逆に、重量を削り、さらに足底もホバージェットからブーストノズルに変更したことで、防御力、突進力は共に低下している。
ララは、感触を確かめるように操縦桿を握りこみ、ぺろり、上唇を舐めた。
先ほどまでの恋する乙女の顔は、もうそこにはなかった。
『L・Jは一機。さっきの村とは逆方向の、マンムートから見て左側になります』
『鉄機兵団？』
『そう、ですね。所属と型番の照合はできませんでした』
『……どういうこと？』
『ええと、試作機の可能性があります。車両の反応もありますし、雪中テストの最中かもしれません』
『ふぅん……で、どうする？』
『そ、そうですね……どうしましょう、セレン様』
言われたセレンが、通信口に出た。
『相手は、こっちに近づいてる。行けるかい、ララ』
『もっちろん』
『じゃあやろう。サンセットのデータも欲しいし……』
『試作機も気になる』
『正解』
『アハハッ、了ッ解！』

一方。
「ほぉう、これはこれは……」
広域レーダーやモニターカメラを搭載した、寒冷地仕様のコマンド・カーゴ内部には、しわだらけの手を揉み合わせる、あのスダレフの姿があった。
車内には他に、数名の技術助手と騎士がいるが、どれも皆無表情で、上機嫌のスダレフとは対照的に陰鬱な空気が漂っている。

帝都の研究所で飼い殺しにされているはずのスダレフが、軍用車両に乗り、騎士の護衛をつけているのはなんとも奇妙な話だが、実はこの老博士、数週間前正式に、宮廷博士としての地位に返り咲いているのである。

『シュナイデ』

マイクを引き寄せたスダレフが呼びかけると、

『はい、博士』

小鳥のさえずりのような、美しい声が返ってきた。

『これはまったく運がいい。お前のテスト中に、目指す相手とぶつかるとはな』

『はい、博士』

『よしよし、いいかシュナイデよ。命令を変更する』

『なんなりと』

『セレン・ノーノ……いや、ララ・シュトラウスを殺せ。その『ナーデルバウム』で、コクピットごと刺し貫いてやれ！』

『……了解しました』

遠く離れた二体のＬ・Ｊが顔を合わせたのは、それから十数分後のことだった。

針の木

『なにあれ』

ララの第一印象はそれだった。

吹きつける風雪の向こうに見えた機体はアイスブルー。それがなんとも奇妙な形をしている。

上背、四肢のつき方などは尋常なのだが、その手足の先が、刃のように平たく尖っているのである。

つまり、歩く際なども地面を突き刺すように歩く。指がないため作業性も悪そうだ。

『セレン、見えてる？』

『ああ、随分シンプルだね。スラスターも少ない』

セレンは特別顔色を変えなかったが、興味半分、失望半分といった様子で眉を上げた。

『どこの研究所か聞いてみて』

『え、相手に？うっそ！』

『答えなければそれでもいいから』

『う、うん、オッケイ』

ララは、サクサクと雪を踏みしめ近づいてくるＬ・Ｊに向け、声を張り上げた。

『あんた、どこの奴！』

『……』

『……ノーコメントだって』

『ふうん、じゃあいい』

セレンは手を振った。

すると……。

『スダレフ研、シュナイデです』

『う、うっそ！』

シュナイデが答えた。素直なことである。

まさか、相手が素直に名乗るとは思ってもいなかっただけにララは驚いたが、それが、あのロマンティックな夜の襲撃者とわかり、
『なにさ、またあたしをやりにきたってわけ？』
『……』
『いい度胸じゃない』
強気に、フンと鼻を鳴らした。
このとき、両者の距離は、およそ五十メートル。
互いに飛びこめば、まばたきする間に詰められる距離である。
いつ相手が飛び出してくるかとジリジリとするサンセット？と、構えも取らず、まるでカカシのように立つ、シュナイデの『ナーデルバウム』。
折からの雪をかぶり、さも重そうに頭を垂れていた樹上から、ひとかたまりの雪が、どさりと落ちた。
次の瞬間。
ナーデルバウムの右腕と、サンセット？のシールドが噛み合った。
場所は、先ほどまでナーデルバウムがいた位置に近い。機動力はサンセット？が勝っているということか。
シールドを返しつつ刃を払ったスピナーが、後頭部の張り出したナーデルバウムの頭部を狙って突き出されたが、ナーデルバウムはバック転でそれをかわす。蹴り上げた足先の刃がサンセットの胸元をかすめ、二機は再び、距離を取った。

『……ふぅん』
ララは二、三度、操縦桿を握り直した。
『ララ？』
『うん、ちょっと軽いかも』
ある程度の調整は済ませてきたとはいえ、戦時と平時では、感覚・反応・筋力の働きに大きな違いが生じる。たとえその辺りの量産Ｌ・Ｊであっても、乗り手は幾度かの試運転をこなし、自分に合わせて種々の微調整を重ねていくものなのである。

そういう意味でサンセット?は、まさにジャジャ馬そのものだった。
『セレン、今、コンピュータ室?』
『そうだよ』
『そっちから見て、どう?』
『……数字は悪くない。スラスターを上手く使って』
『アハッ、要するに慣れってわけね』
『いや、腕だよ。ララの腕』
『上ッ等』
ララは結わえた髪を払い上げ、その手でつまみ出した飴の包み紙を、歯で引き破った。
『イチゴ』
『……なに?』
『ううん、ついてるって話!』

そのとき、再びシュナイデが動いた。
先ほどの斬り合いで見えたスラスターは、背に一基のみ。それも使わず、走って間を詰めてくる。
手にした飴を歯に挟んだララは、
『……フン』
サンセット?を、押し出した。
両機の足にえぐられた雪が舞い、ふたつのL・Jが真正面からぶつかり合う。
大きく振りかぶった一刀が叩きつけられる、その瞬間。身を突き入れるようにして懐へ飛びこんだサンセット?は、そのままくるりと回転して、ナーデルバウムの背後へすり抜けた。
シュナイデは、すかさずまわし蹴りを放ったが、すでに、サンセット?の姿はどこにもない。ナーデルバウムの頭上を飛び越えている。
『アッハ!』

サンセット？は華麗に宙返りしてみせ、着地した。
実はここまで、ララは独立可動スラスターとテイルバインダーの働きのみで立ちまわっている。足底を雪面につけなかったのだ。
先ほどまで感じていたグリップの軽さも、
『なあんだ』
と、思えるほどに、感覚とマッチできている。
特に才能を見せつけてやる、と意気込んだわけでもないのに、こうもたやすくジャジャ馬の手綱を取れてしまうことが、ララには愉快でたまらなかった。
『ウ、フフフ、あたしって、やっぱり天才じゃない？』
『……』
『なんとか言いな、って、の！』
ララは、コマのように回転しながら攻撃を仕掛けてくるナーデルバウムの腕を弾き上げ、がら空きとなった胸部へと、スピナーを突き出した。

そこでひと声うなったのは、コマンド・カーゴのスダレフである。
椅子から身を乗り出し、こぼれ落ちんばかりにむき出された目玉をモニターに注ぎながら、
「フム、フム……」
しきりに、変色した爪を噛んでいる。
『シュナイデ』
『……はい、博士』
シュナイデは、ややしばらくの間を置いて応答した。
『動け』
『……』
おそらく、いつもするように、コクピットの中で首をかしげているのだろう。シュナイデは答えない。
『動け。わしの言う通りに動け』
『はい、博士』

『そしてな、やはり、ララ・シュトラウスは殺すな。ヒ、ヒ、ヒヒヒ……』

『あ！この！』

ララは、突如身を返して走り始めたナーデルバウムの後を追うべく、フットペダルを踏みこんだ。

サンセット？ならば、もののひと呼吸で追いつけたはずだが、そこはそれ、ララの悪い癖だ。優越感からくる慢心で、真剣に捕まえようとはしない。ともすれば風雪に紛れ見えなくなってしまいそうな淡色のナーデルバウムは、刃の腕をぴんと伸ばした格好で、マンムートの鼻先を堂々と駆け抜けていく。

『どこまで逃げようっての？』

『あ、ララさん！そっちは……！』

『え？……あッ！』

サンセット？は、なにかにけつまづいて転びかけた。

『な、にさ！』

と、手をついて体勢を立て直すと……そこは。

『……うっそ』

十数軒の民家と神殿。小屋を蹴り飛ばされ、たてがみを振りたてて駆けていく数頭の馬。

なんと、先ほどマンムートから確認した、あの、小さな山村の只中だったのである。

『あ、ん、た……ァ』

ララは下目蓋を引きつらせながら、神殿のすぐそばに立つナーデルバウムをにらみつけた。

こんなことってあり？

赤く光るモノアイが、ララをあざ笑うかのように動きまわった。

『バカにして！』

『ララ』

カッとなるララをいさめるように、セレンから通信が入った。

『ララ、マンムートのそばまで戻った方がいい』
『イヤ！』
都合が悪いからといって、背を向けて逃げることなどできない。
それは負けだ。
『そこじゃスラスターは使えないよ』
『わかってる。使わないであいつをぶっ飛ばせばいいんでしょ』
『まあ、ね……』
『黙って見てて！』
言ったそばから、ナーデルバウムが背にしていた月女神の神殿が、スピナーの一撃で屋根を吹き飛ばされた。
『……』
『文句ならあいつに言ってよ！』
『なにも言ってないだろ？』
幸い純白の布を掲げたその建物は石造りであったため、それでも形を保って建ち続けたが、中から数人の神官・神徒が駆け出てくる。
他にも、ただならぬ物音に驚き、家から顔を出した村人が数人、
『ジャマ！』
ララに言われ、固く戸口を閉じた。
『もぉ！』
ララとしては、どこか遠くへ行けと言いたかったのだが、こうなれば戦いが終わるまで、誰ひとり外へ出ようとはしないだろう。内だろうと外だろうと、Ｌ・Ｊの戦闘に巻きこまれれば同じことだというのにだ。
おまけに神官はどこへも行こうとせず、吹雪の中を、まだ天を仰いだり、祈ったりしている。
『……バカ！』
ララは操縦桿を繰りながら、心底、もう知るかと思った。
『あんたもあんた！いっつも卑怯なことばっかりしてさ！』
『……』
『ズルッ子！卑怯者！』

『……』

『だから、なんとか言えっての！』

サンセット？とナーデルバウムは、会話……というよりは、ララの一方的な罵りの中でも、互いに武器を振り続け、装甲を削り合った。

紙に包まれた繊細な飴細工を握ったままでするような、そんな神経をすり減らす戦いだったが、ララはよく辛抱した。他の家々には傷ひとつつけなかった。

そして、叩きつけるように振り下ろされたナーデルバウムの両腕をシールドで弾き上げたとき、

『あっ……！』

ララはハッとした。

いいだけかき混ぜられ、踏み固められた雪の地面。

足を取られたナーデルバウムが、ぐらりとかしいだ機体を立て直すため、地に腕を刺そうとした、まさにその場所に、あの神官がいたのである。

「あ、ああ……！」

と、身をすくませた神官は、逃げることも祈ることも忘れ、ただ茫然と、巨大な刃が頭上に降ってくるのを待っている。

『バカ！』

ララは、それがどういう結果を生むか知りながら、スピナーの腹で、思い切りナーデルバウムのわき腹を打った。

細身のナーデルバウムは勢いで吹き飛び、想像通り、住宅ひと棟の上へ覆いかぶさるように倒れた。

『く……ぅ』

やってしまった瞬間だった。

ひとつの馬鹿な命を救うために、ひとつの家をつぶした。そこに何人いたかもわからない家をだ。

自分のせいではないと思いながらも、ララは奥歯を噛みしめざる

を得ない。
と……。
どこか、ギアを傷めたような音。ナーデルバウムが、妙な格好で身を起こした。
妙というのは、そのままの意味だ。まるで腕立て伏せでもするように、地に刺した両腕に力をこめて、ひざを支点に起き上がる……。
『えっ……！』
ララは目を疑った。
なんと、つぶされたはずの家が、そのままの形で残っているではないか。
切妻屋根に積もった雪には、丸みを帯びた胸部装甲を押しつけた跡が残っていたが、少なくとも倒壊の心配はなさそうだ。
『なんで？』
やはり、シュナイデは答えない。
『……フン、今更いい人ぶってさ』
ララはマイクに拾われないよう、静かに、安堵のため息をついた。

一方。

スダレフもまた、シュナイデの行動に驚きを隠せずにいた。

「どうしたことだ、これは……？」

と、様々な数値・波形が表示されるディスプレイに向かい、どこか不機嫌めいた指さばきでキーボードを叩く。

ジジジと吐き出された紙へ目を走らせ、やはり納得いかない面持ちで、それを丸め潰した。

「……おかしい」

その様子に首をかしげ合ったのは、技術士たちである。

それもそのはず。得られているナーデルバウムの戦闘データは、どれもスダレフの想定通りの数値を示しているはずなのだ。

口にこそしないものの、誰もが、『あの』セレン・ノーノの造り上げたオリジナル機に対して、試作機が太刀打ちできるとは思っていない。あくまでこれは、テストの一環であった。

人家を倒壊から救ったことにしても、自らの心身を守ろうという、ある種の回避行動だろう。

「違う、違う、違う！」

スダレフは骨のような指をわななかせ、嘘を映すなとばかりに、ディスプレイへ向かって声を荒らげた。

「あれが人間を助けた！それが当然のように、『人間』のように！見ろ！倒れる瞬間、脳波まで乱れた！何故！」

「それは、ですから……」

「あの娘が、人間だからだ」

ひょう、と、分厚いカーゴハッチから流れこんだ風雪が、手元の紙をすべて、天井まで巻き上げた。

と、同時に、

「う！」
「ぐっ！」
くぐもったうめき声が聞こえ、視界の利かなくなった車内に、なにか重量のあるものが五つ、落ちる音がする。
金属同士が噛み合う音を最後に風がゆるみ、スダレフが顔を覆った腕を下ろすと……。
「むう？」
はらはらと舞い落ちる紙吹雪の中、床には重なり合い気絶した、技術士たちの身体。
ハッチのそばには、見知らぬ白装束の男が直立していたのである。
「なんだ、お前は」
その白装束の男は、深緑の瞳の奥底に、なんとも言葉では言い表せない燐火のようなものを宿している。
「ジョーブレイカー」
「ジョーブレイカー？さて、どこかで……あーあ、奴らの仲間か」
ようやく食指を動かされたらしいスダレフの視線を全身に受け、ジョーブレイカーは珍しく、その唯一のぞく目元に嫌悪感を表した。
「お前がスダレフだな」
「ふん、そんなことはどうでもいい。それよりも……ふぅむ、なかなかいい身体をしている」
「……」
「多少は持ちがよさそうだわい」
スダレフは、にたりと笑った。
「さて、お前はどんな情報をくれる？」
「……」
「ヒヒ、好きなだけ口を閉じておけ。その舌、嫌でも動くようになるわ！」
言うが早いか、天井の四隅に仕掛けられた鉄製の管が、ジョーブレイカーへ向け、なにかを発射した。

投網。捕り縄。いや、それは噴出した直後こそ直径三、四センチのロープ状をしていたが、ジョーブレイカーが背にした忍刀を引き抜くや否や、幾億条にも分裂し、その五体へと襲いかかってきた。

「む……」

まず封じられたのは刀。そして腕、足、頭部。

見れば髪の毛よりも細く、一切の重さを感じさせないそれだが、まるで何本もの鋼糸をより合わせたかのような頑強さと、恐るべき粘着性で絡みつき、ものの数秒のうちに五感と自由を奪っていく。

ぐらりと揺れ、折り重なった騎士たちの上へ倒れこんだ塊は、もはやジョーブレイカーではなく、ひとつの巨大な繭だった。

そう、剣を握ったこともない年寄りが、得体の知れない侵入者を前にしながら、護衛の状態を気にするどころか懇願や虚勢を張る様子さえ見せなかった理由は、この万全の備えがあったからなのである。

「ヒ、ヒヒヒヒヒ」

スダレフは、ぴくりともしないジョーブレイカーの前へかがみこみ、肩を震わせて笑った。

「愚かな奴。おかげで、いい土産ができたわ」

「……」

「さぁあ、どうしてくれようか」

スダレフは、いそいそとした手つきで、デスクの下から、くたびれたカバンを引き出した。

取り出したのは、黄色い液体を満たした、細く長い針を持つ注射器だ。

「情報を漏らすたび、身もとろけるほどの快楽が走る薬がいいか。それとも……そうだ、あいつに足先から食わせてみせようか。麻酔を打って、少しずつな。ヒヒ、そうだ、それがいい。こりこり、こりこり……ヒッヒヒヒ」

その情景を思い描いたスダレフの、身の毛もよだつ笑い声が響き渡る中。針の先が、す、と白い繊維の隙間へ吸いこまれた。

するすると、哀れな獲物目がけて進む針先。
ジョーブレイカーは、やはり身じろぎひとつせず、その強力な昏睡剤を受け入れようとしている。
……が。
それがぴたり、動きを止めたとき、針はまだ、半分ほど外に出たままだった。
「おや？」
スダレフははじめ、針が衣服の金具か、忍刀にでも当たってしまったのかと思った。
いや、それにしては感触がなかったようだったが……。
そこで、とにかくも針先をねじってすり抜けようとしたが、これまたどうにも上手くいかない。
「むう」
ひと声うなり、スダレフは一度、注射器を抜くことにした。
「……や？」
今度は抜けない。
繭にまたがり両手でぐいぐいと引いたが、老骨が痛むばかりでびくともしない。
「なんだ……？」
スダレフはここにきて、なにか異様な、背筋の寒くなるものを感じた。
注射器から手を離して額に手をやると、そこはべったり、脂汗に濡れていた。
「む……うう」
これは、どうしたものか。
この力の正体を確かめてみたかったが、中をのぞいてみる勇気はない。
いや、この蜘蛛の糸の数倍の強度を誇る『スダレフウェブ』に包んだまま帝都に運べば……と、ひとりうなずいたのも束の間。スダ

レフの目の前で、さらに驚愕の出来事が起こった。
なんと、そのスダレフウェブが、ぼこぼこと形を変え始めたのである。
「あ、あ……！」
スダレフは驚きに目をむき出し、またがった繭から身を引こうとした。
が、それより早く、
「ヒィッ！」
繭を押し破って現れた手のひらが、スダレフの左腕を捕らえる。
その裂け目を力ずくで押し広げ、注射針の先端を左手の指二本で挟みこんだジョーブレイカーが上体を見せたとき、スダレフは死人さながらの顔色となり、なかば意識を失いかけた。
「……ジン博士を知っているな」
「ヒェ……！」
「知っているようだな」
「し、知らん……知らん！」
狼狽するスダレフの目が、激しく揺れ動いた。
「……そうか。これでわかった」
「な、なな……」
「お前の罪、いずれその身へ返ると思え……！」
「ぎゃ、あああ！」
耳をつんざく絶叫と共に、肉のない細腕が、ジョーブレイカーのたくましい指のひと握りで、だらりと垂れ下がった。
いや、おそらくそれだけでは済まされないだろう怒りと憎しみを感じ取り、スダレフは尚も震え上がった。
「貴様……貴様一体、何者……！」
口走るスダレフの腕を放り捨て、ジョーブレイカーは、ディスプレイへと向かう。
「やめろ！さわるなぁ……！」
スダレフは足首にすがりついて叫んだが、コトコトという、小気

味よいタッチ音ののちに引き出されたデータを、ジョーブレイカーは左手甲の端末へと転送し始めた。

「う、うぅ……痛い、痛いィ……う、う？」

ここでふと、スダレフは、遠い記憶を呼び覚まされる思いがした。はるか上に見る、淡い光に照らされた緑の目。その、力強さにあふれた鼻筋……。

どこかで見た覚えがある。

いくつもの面影がその横顔に重なっては消え、あるひとつのイメージが、ぼんやりと浮かび上がったとき。

気配に反応したジョーブレイカーが、スダレフを見返した。

「あ！」

瞬間、スダレフは思い出した。

あいつだ。

自分が殺したはずの、あの男だ！

「いや、馬鹿な……そんなはずはない！」

「……」

「お前は……お前はあのとき……うぅ！」

砕かれた腕に激痛が走り、スダレフは床へ突っ伏した。

うなり声を上げ、床をかきむしるその頬へ、ふわ、と冷気が吹きかかり、驚き慌てて顔を上げたときには……もう、そこにはなにもない。

ハッチだけが、いかにもここから出たぞ、とばかりに、十センチほど開いている。

「馬鹿な……あれは……」

スダレフは、視点の定まらぬ目でつぶやいた。

「あれは……」

ナーデルバウムの開けた奇妙な足跡を縫うようにして、ジョーブ

レイカーは雪原を疾走している。
何故だろう。覆面に隠されたその表情をうかがい知ることはできないが、細められた目は、必死に感情を押さえつけているようにも見える。
と……。
驚異的な速さで躍動するジョーブレイカーの足が止まった。
雪にかすむ視線のかなたから、なにか巨体が駆けてきたのである。
「シュナイデ……」
おそらく帰還命令を受けたのだろう。シュナイデの乗るナーデルバウムは、その遂行の代償か、両腕を失っている。
雪景に紛れた白装束のジョーブレイカーに気づかぬまま、水色のL・Jは、そのすぐ脇を走り抜けていった。
「……シュナイデ」
『……？』
コマンド・カーゴに収集されたシュナイデの脳波グラフに、このとき、わずかな揺れが記録された。

ドーナツと海の目

その、さらに数時間後。あの劇的なトラマル脱出から半日ほど後になるだろうか。

陽は沈みかけているが、海上は内陸山間部の暴風が嘘のような、おだやかな小春日和が続いていた。

外部との接触が少ないホーガン島の無線を出がけに破壊し、航海が始まってからも『遠洋哨戒中』という連絡を随時入れさせてきたことが功を奏してか、ここまで幸運にも、鉄機兵団の姿は見ていない。時折無線をつないでも、西海執政官や守備の鉄機兵団からもたらされる情報は、異常なし、というお決まりの文句である。

だが。それでこの船の者たちが、もうひと安心と息をついたかというと、それは違う。

十五年もの長い間、人の目から逃れ、疑心暗鬼にもまれ続けた生活を送ってきたブルーノたちは、外見的には平静を保ち、ようやく取り戻した自由を謳歌しているようでありながらも、いつ襲われてもいい心構え、警戒心を忘れるものではなかった。

男たちが談笑し、女たちが走りまわる子どもらに手を焼きつつ、精のつく食事と、暖かな上着をこしらえる。そんな日常の中でも、自然と班が作られ、役が割り振られ、そして、剣が研がれていくのはそのためだ。

中には土木作業などの経験からＬ・Ｊの操縦をどうにかこなせる者もいて、上がりすぎた喫水線の回復のため戦艦に搭載された余分なＬ・Ｊを海中に投棄した後は、交代でブリッジの監視に当たるようにもなった。

「いや、でも実際ありがたいなぁ」

医務室で身体を養うアレサンドロを見舞いに来たテリーは、厨房からくすねてきたらしいドーナツをほおばりながら言った。

「なにがいいって、ご飯だよ。俺、こういう家庭料理大好き。あ、

旦那の分ももらってこようか」
「いや、俺はいい。それより、外はどうなってる」
「……旦那は、もう少し休みなよ」
身を乗り出して尋ねるアレサンドロの肩を押さえ、テリーは苦笑をこぼした。
「大丈夫、今のとこは上手くいってるよ。奴隷の、とと……ええ、なんて言うかな、旦那の、昔のお仲間さんたちとも、仲よくやってるしね」
「ハ……そうか」
「やっぱり、ほら、俺が一番やばい立場じゃない。だから、すごい心配してたんだけどさ」
「クジャクが、上手く口きいてくれたか」
「うんうん、それそれ。ホント、魔人様様だよ。あ、これ別に嫌味じゃなくてね」
「ああ、わかってる」
にこやかに笑ったテリーは、紙で包んだふたつめのドーナツをポケットから引っ張り出した。
この香ばしい油の匂いは、いかにも揚げたて作りたてだ。また今度のはそこに、たっぷりと、砂糖とシナモンが振りかけられている。
ひと口かぶりつき、
「うま」
テリーはさらに、目を細めた。
「ねぇ……これは、俺の勘、ていうか経験談なんだけどさ、旦那」
「ああ？」
「そのバケモノってのがホントにいるんなら、襲ってくるのは夜だと思う」
アレサンドロは、ついまた身を乗り出して、テリーの顔をのぞきこんだ。
「お前も、それがＬ・Ｊだと思うか？」
「そりゃあね。Ｎ・Ｓってことはないでしょ。幻の海竜でもいるな

ら話は別だけど」
「情報は？」
テリーは、首を横に振った。
「テスト中なのか、シークレットなのかはわからないけどね。どっちにしても、まだ、人目にはつきたくないんだと思う。海は、シュワブなんかも目を光らせてるから……」
「動かすなら夜、ってわけか」
「うん。昔は、そういう警護の仕事もまかされたりしたからね」
アレサンドロと視線を合わせないようにして、テリーは砂糖のついた指先を舐めた。
「まぁ、要するに俺が言いたいのは……今回は、逃げた方がいいってことだよ。足止めをさ、第一にして」
「……そうだな」
もちろんアレサンドロも、それについては異論はない。ハサンではないが、これは優先順位だ。
ひとりも傷つけず、全員を、必ず陸へ上げる。
アレサンドロは再びベッドに身体を沈め、やや錆びかけた天井を仰いだ。
すると。
なにを思ったか、テリーが、てはは、と困ったように頭をかき、
「その顔は、わかってないなぁ」
「うん？」
「俺が心配してるのは旦那だよ」
アレサンドロの胸元にあった毛布の端を、その肩口まで引き上げた。
「敵が出た、みんなを逃がさなきゃならない。旦那は真っ先に海に飛びこむでしょ、俺がやるってさ。それをやめて欲しくて言ってるの、逃げようって」
「……でもよ」
「いや、ダメだよ。Ｌ・Ｊ乗りとして言わせてもらうけど、機体に

はやっぱり向き不向きってのがある。いくらN・Sでも、旦那のは、しんがりに向いてない。海も向いてない」
「だったら……また、お前らにまかせろってのか」
「そうだよ」
テリーは、事もなげに言い切った。
「戦いってのは回数じゃないし、この前お前が出たから、今度は俺が出るってもんでもないでしょ？第一、それを言うならホーガンで一番頑張ってたの旦那だし、ここの人たちをまとめてもらわなきゃ」
「ッ……」
「俺はね、別に、旦那と喧嘩したいんじゃないの。でも、これだけは言っとく」
と、ライフルを抱き上げ、腰を伸ばすようにして立ち上がったテリーは、
「もし、旦那がN・Sで海に飛びこんだら、俺はその足を撃つよ。絶対に外さない」
「テリー……」
「うん、覚えといて」
笑顔で、医務室を後にした。

さて、その足でテリーが向かったのは、例の化け物対策に忙しい甲板であった。
船外灯の下で動きまわっているのは、若者を中心に十二、三人。ある者はL・Jで周囲を哨戒し、ある者はブリッジから移動させてきた火薬樽を船べりに並べている。
その、年齢的には自分と大差ないだろう若者たちの必死な面持ちに、テリーは、昔は自分もああだったかも、などと、少々感傷的な想いで微笑まずにはいられなかった。
鉄機兵団に入りたての頃は、ああして先輩騎士たちの雑用や、射撃訓練のセッティングに追われたものだ。

「……ダメだなぁ」
ついつい思い出しては、ひたってしまう。
今の生活が面白くないわけではないが、最もつらかったはずのあの頃が、よかった、と思えるのは何故だろう。
……ああ、そうか。
この人たちもそうなんだ。
艦尾側甲板にひざまずいたシューティング・スターが、船の揺れを受けて、うなずいたように見えた。

「なにやってるんだ」
「うわぁ！」
「な、なんだ！」
「なんだじゃないよ、もぉ、びっくりしたなぁ」
「それはこっちの台詞だ！」
テリーとユウは互いに心臓を押さえ、肩を小突き合った。
以前よりは多少距離が近づいたふたりだが、やはりまだ、仲良く、とまではいかない。
「あんねぇ、人がセンチメンタルなときは話しかけちゃダメだよ」
「なにがセンチメンタルだ」
「あ、そんな顔されるのは心外だなぁ。彼氏さんと違って、俺は繊細で、あったかい心の持ち主なの」
「どこが」
「どこがって……ホント、失礼しちゃうなぁ」
近くで作業していた若者たちが、そこでクスクスと笑った。
「だからいつも言ってるじゃない。こういうことは、お酒でも飲んで話し合おうって。そうすれば俺のよさも……」
「……しっ」
突然、声を制するために突き出されたユウの手のひらを、テリーは払った。
「いやいや、そいつは卑怯だよ、彼氏さん。お酒の話題になると…

…」
「うるさい、静かにしろ！」
「う……」
「……」
「あの……彼氏さん？」
「……なにかいる」
「え……なにが」
「知るか！」
ユウは手すりから身を乗り出して、海底をのぞきこんだ。
確かに聞こえた。握っていた手すりを通して、船底をノックする音が。
引っかくような音が。
「明かりをくれ！」
言うより早く、光石サーチライトをかついだ若者が、ユウののぞく海底へと光を差し入れる。
喫水線の限界を表すラインが、波の下に見えた。
「な、なにあれ……」
いくつもの赤い光点が見える。
揺れ動きながら近づいてくる。
「下がれ！みんな下がれ！」
全員が、なかば転がるように船べりから離れ……ゆっくりと盛り上がった海面から、それが現れた。

「う……」
「か、海竜……」
そう。誰かが口走った言葉。海竜、シーサーペント。
確かに近い。だが違う。
それは、間違いなく機械だった。
赤い光点の正体は、長細い、馬のような頭部にうがたれた左右四つずつの目。Ｎ・Ｓ二体でようやく囲めるか、という太い首には灰

色の鋼板が張られ、そこを滴り落ちる雫が、サーチライトを跳ね返してキラキラと光っている。

恐るべきことに、海中に続く首の先、本来あるはずの胴体は、完全に陽の落ちた暗い水底に紛れ、影も形も見えなかった。

それにしても、これは、なんという醜さだろう。

N・Sの持つ生物的な美しさも、サンセットや将軍機の持つ、作り手のこだわりが結晶化した創造物の美しさもない。ただただ組み上げただけといういびつさ、冷たさ。

ヒッポの乗っていたシュワブ製のドラゴンや、ジラルドの一三〇〇式の方がまだましだ。

「テリー！」

「あいよ！」

ふたりは、パッと駆け出した。

ユウは、茫然とする若者たちを追い立てるようにハッチへ、テリーはシューティング・スターへ。

「中に入れ！全員だ、早く！」

叫んだユウは振り返り、ポーチから引き抜いた発光筒を、今しも鼻先のサーチライトを点灯させたサーペントの目の前で炸裂させた。

ギュギュギュ、と悲鳴らしき声を上げてのけぞったサーペントの動きは、まるで生きた大蛇だった。

そこでちらりとシューティング・スターを見ると、テリーはまだケーブル式の昇降機につかまり、コクピットまでたどり着いていない。

まさかこの程度で、とは思っていたが案の定、サーペントの八つ目がユウをにらみつける。

大量の水を吐き出しながら開いたその口内には、喉の内側へ向けて生える数多くの列歯……。

ユウはハッチへ走りこむ最後の若者の背を突き飛ばし、自分は逆の方向へ飛んだ。

頭上から降ってきたサーペントの首によって、鋼鉄製の扉は、見

る影もなくスクラップとされてしまった。
「彼氏さん！」
呼ばれる声に目をやると、コクピットハッチのアンダーカバーに伏せたテリーが、なにか手振りで指示している。
わかる？
問いかけられた目にうなずき返すと、ユウは、甲板上を這うように追いかけてくるサーペントの頭部を引き連れて、ある一点まで走った。
走って、再び大きく飛び退いた。
勢いあまってサーペントの頭部が噛みついたのは、積み置かれた、作業前の火薬樽。
「伏せろ！」
銃声が轟く。
爆発の大音声と共にくちばしを吹き飛ばされたサーペントは、ぐねぐねと、まるで巻き戻しの映像のように、海へ引き戻されていった。

「やった？」
「わからない」
ユウはテリーにうながされるまま、手すりに耳を押し当てて、海中の様子を探ってみた。
なにかをこするような音は、絶えず続いている。
ただ、それがサーペントのものなのか、どうか。
……嫌な感じだ。
ユウは胸騒ぎしか感じなかった。
そこに聞こえたのは、やや焦り気味の足音。騒ぎを聞きつけたハサン、クジャク、モチのものである。
そして、これは誰もが恐れていたことではあったが、少し遅れて、アレサンドロも駆けつけてきた。
「アレサンドロ……」
本当に、どうして来てしまったんだと言いたい。
大きな怪我はしていないとはいえ、人は張り詰めていた糸がゆるんだとき、緊張時に蓄積させた疲労を、一気に感じるものだ。
見ろ。足元がふらついてるじゃないか。
しかし、アレサンドロはもの言いたげなユウよりも、ライフルをかついだテリーの方を眺めやり、ひどく決まりの悪そうな顔をした。
「敵は」
ハサンが言った。
「大きな、蛇みたいなＬ・Ｊが、一体」
「それをどうした」
「火薬樽で潰した」
「とどめは」
「いや」
「死体は」

「見てない」
ハサンはユウへ質問をぶつけながら、いちいち指を鳴らした。
そして最後に指を立て、
「では、もう手遅れだな」
「手遅れ？」
「そう。つまり……こういうことだ」

突如、大きく船が揺れた。
力ずくでねじ曲げられるような不愉快な金属音は、艦尾からだ。
砲弾でも、爆発物でもない、なにか別の力でスクリューを破壊されたのである。
推進力を失った船は進路を東寄りへ変え、ただの浮かぶ箱と成り果てた。
「やれやれ」
ハサンは手すりにもたれて身体を支えながら、この状況の中でも、おどけ調子に髭をなでつけた。
「だから馬鹿は困る。後先構わず手を出してこのざまだ」
「い、いやいやいや、俺も彼氏さんも頑張ったんだけどなぁ！」
「頑張って危機を招くな」
「あ、あんねぇ！俺は前言の撤回を求めるよ、断固！」
「……とにかくクジャク君」
「無視！」
「N・S二機で、この船を動かしてくれ。テリーロックウッドは甲板に待機。我らがリーダー君は……」
「中で、待機か……」
「わかっていればいい」
ハサンは、慌てて羽織ってきたらしい、乱れたアレサンドロのコートの襟を正し、幼い子にするように、その頬を優しくなでた。
「待ってくれ、ハサン。俺だって戦える。N・Sに乗りゃあ、傷は治る！」

「おお、アーレサンドロー」
手を焼かせるな。その声が聞こえるようだ。
「お前の想いは察して余りあるが、生憎今は時間がない。警告、足止め、実力行使、捕縛。奴らの行動は、すでに三段階目に入っている」
目配せされたクジャクは、ユウとモチをうながし、甲板最後尾へ向かった。
テリーも、アレサンドロへ鋭い視線をくれたまま、シューティング・スターの昇降機をつかんでいる。
俺の言ったことを覚えているか、という、強い意思のこもった目だ。
アレサンドロはそれに気づいていたがゆえに、テリーを見ることができなかった。
「……でもよ。逃げるにしても、奴らを足止めしなきゃならねえはずだ」
「いかにもな」
「だから、それを俺がやる。やらせてくれ、ハサン」
「そして死ぬのか」
「もうユウの真似はいい。俺はマジで言ってるんだ！」
「……何故だ」
「なに？」
「だから、何故だ」

アレサンドロはうろたえた。
なにが何故なのか、などということにではない。
自分を見上げる黒い瞳。スナイパーのそれよりはるかに恐ろしい、魔術師の目にだ。
それはかつて見たのと同じ、心の奥底まで突き通る針のようで、
「う……」
思わず腰の引けたアレサンドロは、よろめいた。

いや、よろめいたと思ったのは、船が揺れたのだ。くだんのサーペントか、もしくはそれを操っていた鉄機兵団が、ハサンの言う三段階目の行動を始めたに違いない。

先ほどまでは凪いでいた黒い海面が、今はかき混ぜたように波立っている。

「アレサンドロよ。お前には、もっと重要な仕事がある」

「……？」

「生きることだ。……おお、冗談冗談。生きるために生きるほど馬鹿なことはない。そう、お前の仕事はブリッジに行き、この船を押すクジャクとカラスに進路を指示することだ。用済みの操縦士たちは皆、倉庫にでもぶちこんでおけ」

「……」

「坊や、お返事は？」

「……わかった。あんたは……？」

「決まっている。お前がやろうとしていたことをする」

待て。アレサンドロが言う前に、甲板に光が走った。

立ち上がったのは、暗血色のＮ・Ｓコウモリ。

『アレサンドロ、ここからはお前が指示を出せ。私を待つな』

「ハサン！」

『テリー・ロックウッド！いつでも撃てるようにしておけ！』

『……あいよ』

ハサンの乗ったコウモリは、ひらり、海中へ飛びこんでいった。

そのやり取りを知らないユウとモチ、クジャクは、艦尾へたどり着くや否や、こちらもＮ・Ｓを呼び出していた。

これからこの巨大戦艦を、たった二体で押していくわけだが、なんと言っても水に浮かんだものだ。やってやれないことはないだろうと、モチは自らを奮い立たせるように言う。

右舷と左舷、ふた手に分かれたカラスとクジャクは、その中央よ

りやや艦尾側に突き出した側砲へ手をかけ、
「ム……！」
と、押し出した。
打ちつける波にも負けず。モチの力強い羽ばたきが、カラスを通してユウの背を叩く。
推進力を得られないながらもそれまでの惰性で流されていた戦艦は、どうにか止まることなく、カラスとクジャクの誘導に従った。
と、そのときだ。
ザン、と波を割るような音がしたかと思うと、海中から飛び出したなにかが、すぐ近くの船べりへ取りついた。
敵Ｌ・Ｊかと思ったが、そうではない。それはコウモリだった。
『ハサン？』
『おお、ご名答』
コウモリは腕に巻きついたマント、いや翼膜を振りほどき、水滴を払った。
『どうして海に』
『どうして？私が、この極寒の海に貝でも取りに入ったと？』
『別に、そういうことじゃない』
『そうだろう。ならば、その小うるさい口を閉じていろ。お前が逃がした、その大蛇とやらを見てきた』
『え？』
『なるほど、あれは化け物だ。見えただけでも極太の首が二十本』
だが、ハサンはその根元をひとつと見た。
何故ならば、
『それぞれの首が秩序を持って動いている。複雑怪奇に動きまわりながらも、互いが絡まり合わんようにな』
『ホウ。しかし、考えようによっては、話は簡単です。本体を足止めできれば……』
『簡単？君は本当に簡単だと思っているのか』
『ホウ？』

『二十匹の竜が、実に統率の取れた動きで宝を守っている。それが本当に簡単だと思っているのか』
『ムウ……！』
モチは息を呑み、その羽ばたきを乱れさせた。
『だが、まあ、そう絶望するものでもない。……ユウ』
『ああ』
『腰の剣を貸せ』
言うより早く、両腕で船体を支えるカラスの腰から、それはするりと奪われている。
船外灯のせいかもしれないが、コウモリの手に握られた太刀は、黒く、血色によどんで見えた。
『ハサン、まさか、ひとりで……！』
『フフン』
コウモリは、再び海中に消えた。
『ハサン！』
『ユウ、手を離しては……！』
『ハサン！』

蝙蝠と海鼠のワルツ

コウモリの中でも、特に肉食性で小型のものは、超音波を発して障害物との距離を感知する。これはよく知られていることだろう。さらに音波に関して言えば、水の中でもよく響く。つまりソナーだ。

暗夜の海、前後不明の黒水の中に沈みつつあるハサンも、左手の指を弾き続けるという、まさにそれに近い感覚で、二十本の首が近づきつつあることを察知した。

乗れはしてもＮ・Ｓの能力を百パーセント引き出しきれない人間が多い中で、コウモリの鋭敏なそれと見事に合致した、ハサンの超人的な聴覚のみがなし得た業だと言っていい。

『ふむ』

満足げに鼻を鳴らしたハサンは、カラスから奪い取ってきた右手の太刀を、す、と、ひと振りした。

すると……どうしたことだろう。

コウモリのすぐ脇を通り抜けた水流が、泡と砕けた感覚が広がった。

ハサンが太刀で探ってみると、返ってきたのは、なにか硬いものにふれた感触と、金属の反響音。

『フフン』

もしこの場をライトで照らしたならば、上あごと下あごとを切り離されたサーペントの死体が、その金属の断面をさらしながら海中を漂う姿が見えたに違いない。

そしてそこには、操縦席のようなものが一切見当たらないはずだ。

本体はひとつ。そう言ったハサンの読み通りに……。

ひと呼吸の後。甲板に現れたものと同様、その首もリールを巻くように引き戻されていった。

『ンーンンーンーン』

す、す、すす、と。
鼻歌まじりに、ハサンの刃が再び振るわれた。
飛びかかってきたのは、同時に三本。
しかし、切り落とされたパーツの一部を残したまま、それらもまた戻っていく。
……おや。
どうも当初の予想より、首の数は多かったようだ。
『まあ、構わん』
今更、二十が三十になったところで大差ない。
サーペントたちは、いよいよコウモリを目下の標的と定めたか。
戦艦を追うのをやめ、その周囲を取り囲み始める。
『フン』
海中のそこここに灯し出される、無数の赤い点。サーペントの目。
『まるで火の粉だな』
と、つぶやいたコウモリの身体が、水の中で、まるで風のように動いた。

三十対一。
それがすぐに、二十対一。十対一。
嘘のようだが、ハサンは確かに、ひとりでそれをやった。
なんのことはない。この多頭竜は、それこそ千頭の象は食い散らせるだろうが、一匹の戦い慣れした賢いコウモリを相手にするには、巨大で、脳が鈍すぎたのである。
そう、なまじ機械であるがゆえに、互いが絡まり合わないように、接触しないように、などとプログラミングされていては、このような状況で力を発揮しきれないのは当然であった。
その点、ハサンは嫌味なまでにしたたかで。
サーペントの動きが手動操作ではないと確信するや否や、常に首の一本と密着する。危険と見ると、すぐにその密集地帯へ逃げる。
というようなことを臆面もなくやった。

結果、ほぼすべてのサーペントが一対一の状況に持ちこまれ、壊滅の憂き目を見ることになったのである。

『さて』

どれほどの愚か者であろうと、そろそろプログラムを解除しての無差別破壊に持ちこみそうだと踏んだハサンは、このつまらない遊びを切り上げることにした。

目の前に迫ったサーペントのくちばしを切り払い、間髪入れず、その首筋へ太刀を突き立てる。

『さあ、連れて行ってもらおうか』

機械の肌を持つサーペントは首に張りついたコウモリの存在に気づかぬまま、ものすさまじい勢いで水中を走り始めた。

泡を引き、滑るように水深を下げていくサーペントの首。

もし、生身の人間がこれだけの距離を一気にもぐれば、肺臓は押しつぶされ、ふた目と見られない有様となったことだろう。そうならなかったのは、やはりＮ・Ｓという超高性能な鎧あればこそだ。

しかしそれでも、全身を締めつける圧力が少々わずらわしく思えるようになり、海水の冷たさも肌を刺すようになった、そのとき。

『……フフン』

サーペントの本体が、姿を現した。

暗い水底に、ぼんやりとした光を放ちながら、重々しく横たわる巨体。

百メートルをゆうに超えようかという楕円形のその機体の縁には、海亀のそれのようなヒレが、それこそ何十と水をかいている。

ハサンから見て右側に首が固まっているところをみると、そちらが『前』に違いない。損傷した首が寄り集まってうごめく様は、まるでミミズを団子にしたようだ。

『醜いな』

ハサンはそこへ加わろうとする首から太刀を抜き、後は惰性で、海底へと沈んでいった。

それにしても、サーペントの乗組員は、ハサンを仕留めたと思っているのだろうか。辺りは驚くほど静かだ。

ゆっくりと降下していくコウモリの周囲には、わずかな海流の動きさえもない。

市場では見ることのできない深海の珍魚たちが、巨大な目玉とあごを振りかざして、悠々と脇を通り抜けていく……。

『ああ……素晴らしい』

N・Sの機械じみたフェイスマスクのために表には出なかったが、ハサンは十分な時間をかけてサーペントを観察する一方、滅多に見ることのできない深海世界をも堪能し、少年のように目を輝かせた。

まだまだ、この世には自分の知らない世界がある。

数多くの物事を見聞きし、知識として取りこんできたハサンだからこそ、それに気づかされた瞬間の喜び、興奮も、人一倍大きい。

ハサンは陶然となった。未知でありすぎて、見慣れたはずの闇にさえ恐怖心を覚える。それがまた新鮮だった。

と……。

その感動を邪魔するがごとく。

ズ、と。大きな水の塊が動く気配がした。

やっと来たかと目をやると、サーペント本体がこちらへ正対し、様々な箇所を損傷した首が三十本、束となってコウモリを見上げている。

それらの鼻先で、破壊をまぬがれたサーチライトが、一斉に点灯した。

『やれやれ、無粋なことだ』

並のL・J操縦者であれば慌てふためくところだろうが、もちろんハサンはびくともしない。むしろ両手を広げ、スポットライトの輝きの中、旧時代の宮廷風に、優雅な礼をしてみせる。

それがまた、貴族的な外観のN・Sコウモリによく似合った。

すると。

サーペントの首一本一本が、ゆっくりと、百合の花弁のように開き始め……ついに、この巨大Ｌ・Ｊが本性をあらわにしたのである。
円形に配置された首の中心に隠されていたのは、巨大な吸いこみ口。
ミキサーのような、ミルのような。獲物を粉砕するためのスクリューを何重にも備えた、まさに化け物の大口だったのである。
『ンッフフ、竜の髭を持つナマコか。センスを疑うが、サロンのネタにはいい』
ハサンが太刀を収めるのと同時に、スクリューの回転が始まった。始めはゆっくりと。そして徐々に速く。目にも留まらぬ速さまで。吸引も始まった。
こちらは逃げて逃げられないこともなさそうではあったが、無様な抵抗は主義に反する。ハサンはリズムよく指を打ち鳴らしながら、されるがままに引き寄せられていった。
『ンーフッフー、ンーフッフー……』
と、鼻歌はワルツのリズム。
先に呑みこまれた岩が、一瞬のうちに砂となる。
『ンーンンーンーンー……』
最も手前のスクリューは右回転。
コウモリの翼膜が、ひらり、ひるがえった。
砕かれた。いや、通り抜けたのだ。
直後の左回転。
これも抜けた。
コウモリは、くるりくるりと目にも美しいターンで、なんと七重のスクリューをすべてくぐり抜けた。かすり傷ひとつ負わずに。
そして、最後にたどり着いた集積場の床へ手を広げて降り立つと、再び、深々と礼をした。
そこに観客はいなかったが、床に並んだ、水と残骸を排出するためのスリットが、拍手するように弁の上下をくりかえした。
『ありがとう、諸君』

幾度もアンコールに応えるハサン。
弁の喝采はやまない。
『おや、サイン？いいとも』
ハサンは、姿の見えない淑女相手に気前よくうなずき、適当な壁に向かって、カラスの太刀を大きく振りまわした。
シャー、ハサン、アル、ファルド。
『ンンン、上手く書けた』

その、はるか上方。
サーペントとの遭遇地点から約一キロ北の海上では、ユウの葛藤が続いている。
『……モチ』
『はい』
『やっぱり、ハサンを置いていけない』
モチは答えなかった。答えなかったが、カラスを介して身体を同じくするユウには、モチの肯定が伝わった。
言葉にしなかったのは、迷いがあるのだ。
鉄機兵団からは逃げなければならない。しかし、ハサンも救いたい。
ならば助けに行けばいいのか。この船はどうするのか。
『私には、わかりません』
今度はユウの肯定を、モチが感じ取った。
『ひとつ言えるのは、それを決められるのがアレサンドロだけだということです。ただ……』
選択をゆだねることが、アレサンドロの精神に負担をかける。
どちらの仲間の命を取るか、など、ユウもモチも問いたくはなかった。
『皮肉なものです。こうしたときこそ、ハサンの力が欲しい』
『……ああ』

『せめて私に、彼の万分の一でも知恵があれば……』
「船を止めろ！」
『ホ……！』
モチは口をつぐんだ。
「クジャク、モチ、ユウ！船を止めろ！」
『この声は……』
『アレサンドロだ！』
船体の側面にへばりついていたＮ・Ｓカラスは、すぐに、声のする甲板へと上がった。
そこには、ブリッジにいたはずのアレサンドロと、光石サーチライトをかついで、せわしなく動きまわる男たちの姿があった。
『旦那ぁ、なにやってんの』
あきれたように言うシューティング・スターの足元から、格納庫と直結したエレベーターがせり上がってくる。乗っているのは、二機のＬ・Ｊだ。
『大将も言ったじゃない。自分を待つなって』
アレサンドロは、テリーを無視した。
そうだ。そんなことはわかっているのだ。
この結論に至るまで、アレサンドロも悩んだ。ユウやモチと同じように。
だが、背を押してくれたのは、ブリッジで進路や通信の管理を手伝ってくれた、男たちの言葉。
あの人を助けに戻りましょう。
みんなで戦いましょう。
……撃たれても構うものか。アレサンドロは、その意気で立ち上がったのだ。
「ユウ、モチ。ハサンを迎えにいけ。その蛇が追いかけてくるようなら、構わねえ。こっちで相手をするから連れてこい」
『ああ！』
『了解です。私は、あなたの選択を支持します』

ユウとモチは、飛び上がるほど嬉しかった。
「クジャク！」
『ああ』
答えたN・Sクジャクは、甲板のすぐ上を飛んでいる。おそらく、なにがあってもいいようにとの心構えだろう。
「これから俺たちで、どうにかスクリューを直せねえかやってみる。あんたはそれまで、この船を守ってくれ」
クジャクも、フフ、と笑い、快諾した。
「私は？」
「うん？」
「私はなにをすればいい？」

アレサンドロは、ぎょっとした。
いや、全員がそうなった。
恐る恐る、とでも言おうか。まるで幽霊の気配を確かめるように、その一点を見る。
「ハ、ハサン……！」
なんということだろう。
サーペントと死闘を演じているはずのハサンが、甲板の上で手すりにもたれ、悠々とパイプをくゆらせているではないか。
「あんた、なんで……！」
「なんで？妙なことを聞くものだな」
「いや、でも、その蛇って奴は……」
「……フフン」
嫌な笑いだった。
言葉にするならば、待ってました、だ。
思わせぶりに持ち上がった左手がアレサンドロの目の前に止まり、ぱちんとひとつ、鳴らされる。
直後。
水平線の彼方、ドォッと、天を突くばかりに噴き上がった水柱が、

顔を見せたばかりの月を覆い隠した。
　オベリスク、あるいは水に浮かぶ城のようにも見えるそれが崩れ、余波が船を揺らすのに、尚数十秒の時がかかった。
「す、すげえ……」
　サーペントの、他に類を見ない異様な姿と、凶悪なまでの力を見せつけられていた若者たちが絶句する。
　だが、もしも彼らがサーペント本体を目撃していれば、驚きはこの程度では済まされなかっただろう。それが、ハサンにとっては残念であった。
「お前たちは幸運だ。このシャー・ハサン・アル・ファルドが、同じ船に乗っていたのだからな」
『で、でも、どうやって……』
　ハサンは、ちらりとカラスを見た。
「古人いわく、大は小を兼ねると言うが、大きなネズミは、小さな穴には入れない」
『え、な、なに……？』
「フフン。……お前の太刀は、船の腹に刺してきた。さっさと回収しに行け」

皇帝の剣

時は少しさかのぼり、真昼の帝都クリスベンに眼を移す。

メイドや侍従、文官が行き交う帝城の回廊を、誰からも敬意を持って礼を捧げられる漆黒の騎士が、従者をともなって歩いていた。

堂々たる体躯を全身甲冑で固め、マントを羽織ったその背には、長大かつ、並の三倍は身の厚いグレートソード。数十キロにも及ぶだろう、それら鉄の塊に覆われながら、歩は悠然として揺らがない。

顔を見れば、いかにも武人らしい顎髭と太い眉。しかし、優しげな瞳をしたこの男。

そう、ジークベルト・ラッツィンガー帝国筆頭将軍である。

「将軍」

呼びかける声に振り向いたそこには、あの『スピードスター・ホーク』、デューイ・ホーキンスの姿があった。

「ホーキンスか。いつ戻った」

「さっきです。冷や汗ものでしたが、どうにか大事な戦艦を落とさずに済みました」

「陛下には？」

「今、ご報告に。随分と、にらまれましてね」

今日は、パーソナルカラーである白と橙の甲冑に身を固めたホークが、頭をかきかき苦笑した。

聖石を奪われた上に、帝国軍の象徴たる飛行戦艦オルカーンまで傷つけられ、これはもう面目丸つぶれといったところだろう。

ラッツィンガーは静かにうなずき、

「ご苦労だったな」

ホークの労をねぎらった。

「将軍も、これから出陣ですか」

「うむ……」

「奴ら、ホーガンを襲ったとか。本来なら俺たちが出るところでし

ょうが……申し訳ない」
「いや、お前ばかりを責められまい。……ときに、黒の魔女とは会ったか」
「ええ。中身は、ヒュー・カウフマンという別人でしたが、確かに」
「ヒュー・カウフマン……」
「まっすぐで、ちょいと見所のありそうな……あ、こいつは失敬。将軍にとっては息子さんの……」
「いや……ジラルドのことはもういいのだ」
「では、他になにか」
問われたラッツィンガーは薄笑いで言葉を流し、これ以上は聞くなと言うように、ホークの肩を軽く叩いた。
「それはそうとホーキンス、少し話せるか」
「ええ、構いませんが」
「ならば……コッセル」
「はい、ここはおまかせください」
ラッツィンガーが赤子であった時分から、そのかたわらに付き従って半世紀。背後に控えていた老紋章官エルンスト・コッセルは、品のいい白髪頭を下げ、広大な中庭へ出て行くラッツィンガーとホークの後ろ姿を見送った。
会話が耳に入らぬ距離から主の身辺を見守りつつ、さりげなく人払いをする。無駄な言葉を交わさなくとも、コッセルは心得ているのである。
ラッツィンガーとホークは、昨夜からの雪が薄く降り積もった石畳の上を進み、今は水の止まった噴水の縁へと腰を下ろした。
目の前に立てかけられたグレートソードの迫力に、見慣れているホークでさえ、ひゅう、と口笛を鳴らした。
「しかし、しばらく見ない間に、帝都もすっかり冬らしくなりましたな」
「今年は特に冷えこむようだ。この歳になると、夏も冬もつらい」
「ハ、ハ、また、そんな心細いことを。将軍には、あと二十年は前

線に立ってもらわにゃなりません」
「ふふ、とてもそこまでは持たん」
「……で、話とは？」
「うむ」
ラッツィンガーはひざを進めた。

「私はこれから、メイサ大神殿へ行かねばならん」
「メイサ……カジャディール大祭主に、なにか」
「いや、そうではないのだが、猊下は今、ディアナ大祭主猊下を神殿に招いておられてな」
「なるほど、それを連れてこいと」
「うむ。メーテルの月例祭も近い。メイサの神徒である私ならば、カジャディール猊下もわがままは申されまいということだろう」
「ハ、ハ、わがままはいいですな！……と、失敬。メイサよ、お許しください」
慌てて額と胸にふれるホークに、ラッツィンガーは微笑した。
「しかし、無礼を承知で言わせてもらいますが、自分は、陛下が将軍の忠義を試しておられるように思えてなりません。最近の陛下は、自分の目から見ても……」
「ホーキンス」
「は……？」
「だとしても、それはやはり、私の不徳の致すところだ。主君に忠義を疑われる、それだけで騎士にとっては恥ずべきこと。……違うか？」
「これは……失言でした」
ホークは、パッと立ち上がり、深々と頭を垂れた。
「聖騎士団が聖鉄機兵団と名を変えて、もう十年にもなる。Ｌ・Ｊに親しみ、自らを軍人と呼ぶお前の心もわかるが、忠誠心を忘れ、愛国心のみに心傾ければどうなる。この国の礎を揺るがすことにもなりかねん」

「は……まったく、赤面の至りです」
「説教は柄ではないが、お前だからこそ言っておくぞ、次期筆頭将軍」
「と、とと、とんでもない！自分には無理です！」
「ふふ、私もかつては、同じことを言った」
「い、いや……参りましたな」
直立不動のまま、ホークは冷や汗にまみれた襟足をぬぐった。
「ま、座れ」
「は、で、では……」
「そう硬くなるな。話が少々それてしまったが、私が頼みたいのも、その、陛下のことだ」
「……と、言いますと？」
「私が留守の間、陛下のそばから離れずにいてもらいたい。いや、何故とは聞くな。すべては……陛下の御身をお守りするためだ」

……それだけで、ホークにはすべてが呑みこめた。
ここ数ヶ月で、別人のごとく人を変えた、幼い皇帝。それが人為的な操作によるものならば、忠義にあつい筆頭将軍が帝都を離れることで、その影にいる何者かが行動を起こすかもしれない。
あるいは、ラッツィンガーの前では決して見せないようなミスを犯すことも。
「幸い、と言っていいかわからんが、オルカーンの修理は……」
「早くて二週間。それまで本隊の出撃もできません。たとえご命令があっても、断る理由になります」
「うむ。いかに遅くとも、それまでには私も戻る」
と……ここで、ふと顔をゆがませたラッツィンガーの歯が、ぎりりと鳴った。
「わかってくれるな、ホーキンス。たとえどのようなお心の働きがあられたにせよ、陛下ご自身の発せられたお言葉は絶対だ。……いや。今でも私は、そのご下命のすべてが、陛下ご自身のご決断によ

るものだったと信じたい。だからこそ、私を不忠者と仰るならば、いくらでもこの首叩き落して、心中に反意なしと示してご覧に入れよう。シュワブとの戦を望まれるならば、喜んで前線にも立とう。しかし……しかしな……」

「ええ、わかります。自分も……騎士の端くれです」

もし、主君が何者かにたぶらかされているならば。

もし、望まぬ形で道を踏み外そうとしているならば、自らが、その足元に身を投げ出してでも救わねばならない。

他国に汚名を流そうとも、救わねばならない。

そして、その結果がどのようなものになろうと……ラッツィンガーは命をもってあがなうのだろうと、このときホークは確信した。

疑ってはならぬ忠誠心が、一方で主君を疑わせる。その狭間で胸を痛めているのは、誰あろう、この不器用な筆頭将軍なのだ。

「……どうしてですかね、将軍」

「む……？」

「今の陛下は先帝様にそっくりだと、もっぱらの噂です。自分もそう思いますが……どこか違う」

「……うむ」

ラッツィンガーは、深くうなずいた。

「確かに先帝陛下は、そのご生涯の多くを戦場で過ごされた。今と同様、軍備へ続々と資金を投入され、この国の中には、いまだに悪帝、暴帝とささやく者もいる」

「ええ。自分の田舎も、正直昔はそうでした」

「しかし、先帝陛下は、我々に夢を見せてくださった。それまで誰もなし得なかった半島の平定、統一国家という夢だ」

「……なるほど」

「先帝陛下にしても、お父君から引き継がれたご宿願ではあられたが、あの一時代の熱狂……この歳になっても忘れられん」

「その夢が、シュワブ攻略には見えない」

「……ふ」
再び言葉を濁したラッツィンガーは、グレートソードを手元に引き寄せた。
その無骨な鉄の塊は、灰色の陽光を鈍く反射した。
「行きますか」
「うむ。陛下のこと、頼む」
「まかせてください。陛下のために、全力を尽くします」
「……うむ」
このとき、ラッツィンガーが見せた笑顔。
それは、どこか哀しげな影を宿しながらも誇らしげな笑みで、不意にホークは、亡き父の姿を思い出した。
「将軍！……お気をつけて」
ふたりはどちらからともなく敬礼を交わし、何事もなかったかのように別れた。

雪中行

再び、海。

数ヶ月後には流氷に覆われるだろう冷たい海面に、スクリューを根元から失った戦艦が漂っている。

微弱な救難信号を受けて横付けした同型の戦艦から、騎士数十人が救助に入ったが、中にはひと気も暖気もなく、まさに閑散といった様相である。

布という布、食料という食料が持ち去られた、その海賊の仕業とも思えぬ有様を目にした騎士たちは皆、口々に、海の魔物にやられたのではないかとささやき合った。

……しかし。

人がいた。食堂に拘束された騎士たちがいたのだ。

騎士たちは、自分たちがこの船の乗員であることや、この船を奪い逃走した犯人が、『レッドアンバー』一行と奴隷の集団であることを語り、その一行はすでに、飛行型Ｎ・Ｓによって本土へ上陸したらしいことを語った。

そこですぐに周辺の捜索がおこなわれたが、残念、それらしきものの発見には至らず、この情報はすぐに、帝都へともたらされた。

ところで。

この戦艦が見つかった場所というのは、地図上では北海に当たる。

結局スクリューの修理を断念せざるを得なかった戦艦が、西海のホーガン近郊から、いかにしてここまでたどり着いたのか。それはまさしく牽引役を引き受けたＮ・Ｓカラスとクジャクの手柄に違いないが、むしろ、クジャクの存在が大きかった。

数環の念動チャクラムの輪に、船と連結させたとも綱を巻きつけて引かせるという、言ってみれば人海戦術のような格好で、体力的な負担を補ってくれたのである。

しかし、その航海は当初の予定を大幅に超えて五日を数え、そのために精神を疲弊させたクジャクは、銀嶺の山すそを行軍中の今このときも担架に乗せられ、立ち上がれずにいる。

いや、クジャクだけではない。

道なき道、それも腰まで積もった新雪をかきわけ進む四百人弱。その中でも特に、年寄り子ども、傷病者は時を追うごとに口数が減り、全体の歩みは遅々として進まなくなっていた。

……そろそろ、休ませねえといけねえな。

振り返り見たアレサンドロは、背負ったジャン少年をかつぎ直し、先鋒を務める若者ふたりに、もう少し歩をゆるめるように伝えた。

ちなみにジャンの手は、隣で別の青年に背負われている母親の手へ、しっかりと伸ばされている。

「モチ」

「はい？」

モチは、さらに後ろを進む年寄りの腕の中で、目をしばたたかせた。

「飛べるか？」

「さ、どうでしょう」

「悪ぃが、ハサンを呼んできてくれ」

「了解です」

モチは薄曇の空へ一旦飛び立ったが、まぶしかったのかすぐにあきらめ、人々の頭の上を、まるで飛び石を渡るように跳ねながら、列の最後尾にいるハサンの元へ向かった。

ハサンはすぐに、アレサンドロに追いついてきた。

「野営かな、リーダー君？」

「ああ、あんたはどう思う。この辺で場所はあるか？」

「ふむ……」

ハサンがぐるりと周囲を見回す間、その小脇にかかえられたモチは、やり場なく首を回している。

どこかかゆかったのか、ハサンのマントへ顔をこすりつける様子

が妙に可愛らしく、アレサンドロの耳元でジャンが小さな笑い声を立てた。
「……あの木が見えるか？」
「ああ、ちょいとこっちに、かしいでる奴だな」
「そうだ。あの奥に平地がある。上空からは少々目立つが仕方あるまい」
……ハサンは、この辺りの地形に詳しかった。
何故と聞いても、まともに答えるわけがないとアレサンドロは黙っていたが、以前この辺りに根城を構えていたか、あるいは……と、思っている。
戦艦の中でおこなった進路確認の際にも、地図にはない目印、たとえば今のような木や山の稜線が進行方向からどのように見えるかを克明に語り、先頭を進むアレサンドロの助けとなっていた。
しかし、それならばハサンが先導を務めればよさそうなものだが、
「私が？腰まで埋まって道を作って行けと？ンッフフ、悪い冗談だな」
と、言ってしまうのもハサンであった。
「なんだ、なにか言いたげだな、リーダー君」
「いや、別に。あんたはここで、クジャクの担架を待ってくれ。どんな調子か心配だ」
「ンンン、いいだろう」

ハサンの言った平地とは、三方を小山に囲まれた、運動場ほどの土地であった。
なるほど、上空からの目を遮るものはなにもないが、入りこむ風も弱く、ここならばとアレサンドロにも納得できる。
皆をひと集めに待機させ、積もった雪をオオカミで掘り起こすと、現れた土は見事に凍っていた。
『……チッ、やっぱりな』
これでは、濡れた服も身体も乾かすことはできない。

女たちはシーツやテーブルクロスに至るまで、すべての布を着物や靴下に変えて準備してきていたが、それも満足ではないのだ。

『仕方ねえ』

アレサンドロは当初の予定通り、ユウとクジャクを呼んだ。

『悪いな。あんたやユウに、頼ってばっかりだ』

疲労による陰を宿したことで一層なまめかしさを増したように見えるクジャクは、オオカミを見上げ、フフ、と笑った。

さて、それから気力を奮い立たせてN・Sに乗りこんだクジャクとユウがしたこと。それは、その凍った土の上に、N・Sの羽根をむしりかぶせることだった。

N・Sが人工とはいえ実物と同等の体組織を持っていることは前にもふれたが、他ならぬ羽根もそうなのだ。中空の繊維で構成されたそれは、最も大きなものでも風に舞うほど軽く、重なることで生まれる空気の層は、上等な羽毛布団並みに暖かさを放さない。

しかも、ひと晩もすれば生え変わる。

最後に、テリーのシューティング・スターとN・Sコウモリを加えた五体が、スクラムを組んでその『巣』を取り囲み、これで、野営の準備は完了である。

人々は皆、飛びこむようにして暖かな即席ドームへ入り、羽毛をかぶって裸になった。

濡れた服を羽根の上に重ねることで、時間が経つほどに、内部はより暖かくなった。

「今日は、ここで泊まりだな」

「ああ、それがいい」

「問題は、明日からどうするかだ」

同じく裸になったアレサンドロ、ハサン、ユウ、クジャク。それにモチと、唯一コクピットでぬくまっていたために脱ぐ必要がないテリーの六人は、少し離れた場所で車座を組んだ。

こうなると、ララたち女性陣が別行動でよかった、とユウは思わ

ざるを得ない。もしいれば、とても冷静な話し合いなどできなかっただろう。

この状態で、いつものようにララが密着してきたら……などと、むつまじく肌を寄せ合う夫婦、親子に自らを重ね合わせ、危うい妄想を次から次へと生み出してしまうことに、ユウは自己嫌悪した。

だが、その妄想の矛先が、すべてララに向いていることには気づかなかった。

「俺は、やっぱりどうも無理がありすぎるような気がしてならねえな。今更だが、こんなに体力を使うとは思わなかった」

アレサンドロが言った。

「……」

「ハサン？」

「ああ、聞いているとも。つまり、お前はこの山道を行く以外に、なにか方法があると言いたいわけだ」

「いや……あるとしても、クジャクとカラスに運んでもらうしかねえ。それは無理だ」

それをすれば、今いるこの場所とマンムートの位置、両方知られてしまう可能性が高い。

一度で運べるならばそれもいいだろうが、四百人ともなれば不可能だ。

「じゃあ、今更だけど、セレンさんたちをこっちに呼んじゃえば」

と、ひどく投げやりな態度でテリーが言う。

「せっかく携帯無線機をいただいてきたんだしね」

「そうだな……最悪の場合それしかねえか」

「俺は、反対だ」

クジャクが手を上げた。

「ここへ呼ぶには、地中を走らせる必要がある。地中を走れば振動が起きる。振動が起きれば……雪崩が起きる」

ユウも同感だった。

それに近い現象を、実は目の当たりにしたことがある。

そのときは春先の、このような道なき道ではなく大街道であったが、にわかに起こった地響きにより、目の前を進んでいた隊商が、一瞬にして雪崩に押し流されてしまった。

流れ聞いた話によれば、その地響きの原因こそ、今の七〇〇系Ｌ・Ｊ、つまり地中工作用Ｌ・Ｊの試験走行だったのである。

北部生まれのユウならばまだしも、南国シュワブの鳥であるクジャクがこうして雪に対して慎重であるのも、トラマル砦長であったがゆえのことなのだろう。アレサンドロもこれに逆らおうとせず、じゃあ今のもなしだ、と眉間を揉んだ。

「ひとつ確認しておこうか、アレサンドロ」

「ああ？」

「お前の、優先順位だ」

ハサンはパイプに草を詰めようとして、やめた。草が湿っていたらしい。

「お前は、ひとりの脱落者もなく戦車へたどり着きたい、そうだな？」

「ああ、もちろんだ」

「そしてそのためならば、他へのリスクは、ある程度目をつぶる」

「他へのリスク……？」

「たとえば、進路上にある村を戦場に変える、といったことだ」

アレサンドロは、無論言葉に詰まった。

実際、ララたちがその状況に陥ったとは思ってもいないが、可能性としては、アレサンドロの中に常に葛藤として存在したものだ。

帝国と鉄機兵団は憎いが、帝国民に直接的な恨みはない。

「……避けては、いきてえ」

「ンッフフフ」

ハサンは、さも愉快そうに笑った。

「結構。そういうことならば少し考えがある。明日の先導は私がやろう」

「どうする気だ？」

「明日になればわかる。おっと、食事がまわってきたぞ。なにをしている、早くよこせ」
ローストビーフと硬いチーズを挟んだ雑穀パンは、冷えていたが美味かった。

翌朝、一行は陽が昇りきるまでドームの中に隠れひそみ、野営跡の始末を終えたのは昼過ぎだった。
山の昼は短い。冬となると、尚短い。
それでも、アレサンドロと共に先頭を進むこととなったハサンは焦る様子も見せず、ゆるい傾斜をジグザグに、ゆっくりと登っていく。昨日までは山のふもとを沿うように東進していた進路を、若干北寄りに変更した形だ。
そうして一時間も足を動かし続け、そそり立つむき出しの岩壁を左手でなでながら進んでいたハサンが、ふと、足を止めた。
「どうした？」
「……フフン」
まあ見ていろ、と言わんばかりに微笑んだハサンは、なにを思ったか岩壁へ抱きつく。
女にするように狂おしく、情熱的に頬を寄せ、胸を寄せ、指先を這わせるその光景を、アレサンドロとその背のジャンは、ポカンと眺めるしかなかった。
「ンー……」
「おい、ハサン……」
「わかっている、黙っていろ」
構わず全身をこすりつけるように岩壁を這い続けるハサンが、ほう、と、短いため息をはいた。
薄く開いた視線にひとなでされ、ジャンは身をすくませた。
「フフン、少年には刺激が強すぎたかな」
「おい、冗談もそこまでにしろ。いくらなんでも、今のあんたはお

かしいぜ」
「治療が必要か？」
「場合によっちゃあな」
「ンッフフ……ならば、中で頼む」
「あ！」

アレサンドロは、危うくジャンを落としてしまうところだった。
なんと、なんの変哲もないように思われた岩壁の一部が、ハサンに押され、丁度、人ひとり分ほどくぼんだのである。
そして、ハサンは尚もその動く壁を押し続け、ついにその姿までもが穴の中へ消えてしまったのだ。
これには、ジャンやその母親、それを背負った青年、後に続く老夫婦などなど、列の前方にいた者たちも全員、呆気に取られて言葉も出ない。
「ちょ、ちょっと待ってろ」
アレサンドロはジャンを降ろし、穴の口から中をのぞきこんだ。
意外にもしっかり整地された足元と壁に、レールのような溝が引かれている。
夜よりも暗い闇の中を、ずりずりと岩を転がす音だけが聞こえ、その音もすぐに絶えた。
「ハサン……？」
ただの洞窟にしては、声が響きすぎる気もする。
「ハサン？」
「そう妙な声を出すな」
ハサンは、湿ったマントにこびりついた泥をこすりながら現れた。
「ハサン、こりゃ一体なんだ」
「それは、今どうのと話し合う話題ではない。まず全員を中に入れろ。少し進めば広場がある、そこで身支度を整えさせるといいだろう。火をたいても構わん」
「……」

「おお、アーレサンドロー。お前はリーダーだ、多少のことに動じるな。海があれば波もある。山があれば穴もある」

『……あれ』

シューティング・スターのテリーが、つぶやいた。

『止まっちゃったね。着いたのかな』

『ああ……みたいだな』

『みたいだなって、彼氏さんにも心当たりなし?……あーあ、ホント行き当たりばったりでやんなっちゃうよ。雪山を漕いでくなんてのはわかりきってたことじゃない、ねえ?』

テリーがぐずるのはいつものことだが、最近は特に文句が多い。表立ってやりあうことはないまでも、例の海上での一件以来、一番の理解者であったアレサンドロとの関係にゆがみが生じ、不満が鬱積しているのだ。

とはいえ、その原因となる医務室でのやり取りを知らないユウにしてみれば、わがままを言っているのはお前だろ、と言いたいところではある。

『ねぇ、彼氏さん。俺さぁ……』

と、隊列が進まないのをいいことに本気で愚痴を言う気になったのか。テリーはシューティング・スターのコクピットハッチを開け、N・Sに乗ったユウへ手招きした。

普段ならばこれに応じるはずもないが、敵影もなく、退屈する気持ちがどこかにあったのだろう。ユウはハッチのアンダーカバーへ降り立つ自分をイメージし、上手く、そこへ瞬間移動した。

「……つッ」

「どうしたの」

「いや……」

ユウはこめかみを押さえた。

眼下に続く人の列を目にした途端、かすかなデジャブと軽い頭痛を覚えたのだ。

「さっきまでは、なんでもなかったのに……」
この、冷たい風のせいだろうか。
「ま、座ろうよ」
テリーが敷き延べた抱き枕のような長クッションに、ふたりは並んで腰かけた。
「大丈夫？」
「ああ」
「いっつもこんな顔してるから頭痛くなるんだよ。……あ、ララちゃんにしばらく会ってないからか」
「うるさいな。そうじゃない」
「ララちゃん嫌い？」
その言葉は、ユウの心臓を、ぎゅとつかんだ。
「へぇ……変わったね、彼氏さん」
「そういう意味じゃない」
「俺は、男女間の友情なんてありえない派」
ユウは、テリーの差し出してきた布製のきんちゃく袋に首をかしげた。
片手で持てるサイズながら、パンパンにふくれたそこから転がり出てきたものを受け取ると、半透明で四角い、オレンジ色の塊だ。
「ゼリー？」
「そ、甘いのはいけるでしょ？」
「ん……」
ユウは口の中に入れてから、目の前の人々が皆、こういった嗜好品を今まで口にできなかったことを思い出した。
「もういい」
手に残った二粒は、そのままテリーに返した。
「……俺さぁ、彼氏さん、よくわからなくなっちゃったよ」
「え……？」
「旦那と大将だよ。助けたいとか戦いたいとか、言いたいことはわ

かるけど……なんだろう、リーダーって、もっとクールにいかなきゃ。大将も言ってたみたいに、ある程度のリスクは目をつぶらなきゃダメなんだよ。ほら、二匹のウサギがなんとかってね」

テリーは似合わぬ大真面目な顔で、視線を列の先へと飛ばしている。

「でも、その大将にしても、紋章官としてはどうかなぁ。あの人、旦那をいい方向に持っていこうって気がないよ。なんて言うか、イエスマンだ」

「そんなことないだろ」

「いや、あるね。大将は、旦那の意見に引っ張られすぎだ」

「じゃあテリーならどうするんだ」

「俺？俺なら、戦艦をどこかの港に入れた。セレンさんもその近くに呼んでおいて、すぐに地下を通って逃げたよ」

「それは言うほど簡単じゃない。どこの町にも騎士はいるし、大体あのときは、Ｎ・Ｓで船を引っ張ってたんだ。港に入れるわけがない」

「ソブリンさんの港がある」

「あそこを巻きこむわけにいかない」

「なに言ってんの。聖石のこととかで、もうとっくに巻きこんでるよ」

「でも鉄機兵団がそれに気づかなければ、あそこは今まで通り暮らせる。だから必要以上に近づくわけにいかないんだろ」

「じゃあ優先順位はどうなるのさ。この人たちみんなを助けるってのが一番じゃないの？」

「ああ、一番さ」

「でも今の状況はまるっきり逆じゃない。町とか無関係の人を助けるために、みんなを危険にさらしてるじゃない」

「それは……」

「旦那と大将のしてることってのは、結局そうなんだよ」

ユウは、二の句が継げなかった。

「……俺ね、大将はあれだけど、旦那は大好きだよ。最後まで力になりたいし、見届けてあげたいと思ってる。だから心配なんだよ。今のまま行けば、いつか絶対、いろんなものを無くして傷つくことになるんだろうなぁって」

テリーは指先でつまんだゼリーを口に運ぶことも忘れ、それをこねまわしている。

「でもね、正直に言えば、どうすればいいのかわかんないの。俺の好きな旦那は、きっとそういうのも全部ひっくるめた旦那だし、そのままでいて欲しいなぁって気もあるわけ。……それに、人の出した結果を見て、あのときああすればよかったのに、なんて言うのは簡単だけど、お前のやり方で丸々上手くいくのかって言われたら、やっぱり自信ないしね」

「……」

「ねぇ、彼氏さん。俺、どうすればいいかなぁ。このままじゃまずいってことはわかってるのに、どうすればいいのかわかんないよ」

沈黙を続けるユウは、答えを見つける以前に、この隣に座る男が意外なまでにいい男だったことに驚いていた。

はからずも『レッドアンバー』の一味となり、仕方なくついてきたはずのテリーが、ここまで親身になってアレサンドロのことを考えているとは。

……今まで、悪いことをしたな。

頭の片隅で、そう思った。

「……なに？」

「いや……」

「いや、じゃ困るよ」

テリーは、やっとゼリーを口に放りこんだ。

「彼氏さんはどうなのさ。旦那や大将の決めたことなら、全部正しいと思ってついてく？」

「ああ」

「ご立派だね。さすが神官様」
「そうじゃない。昔、ハサンが言ってた」
「へ？」
「この世には、正しくないことなどないって」
「へぇ？」
「たとえば……」
と、ユウは、テリーの持ったゼリーの袋を指差した。
「ここには子どもだっている。それを全部、テリーが独り占めするのは正しいのか」
「う……た、食べにくくなること言うなぁ」
「でも、それも正しいんだ。ゼリーがなければ、テリーは上手くライフルを撃てないのかもしれない。だったらそれは、仕事をする人間として正しい」
「いやぁ、別に、ただのオヤツなんだけどね」
「なら、空気の読めない人間として正しい」
「うは、ひどい！」
「俺だったら、もちろん全部、あの人たちに配る。それは、メイサの神官として正しい」
「もし、全部ララちゃんにあげたら？」
「それは……」
「彼氏さんの恋がたきとして正しい？」
「勝手にしろ」
「アッハハ、可愛いね、彼氏さん」
そうカラカラと笑ったテリーは、ゼリーを袋ごと、ユウの手につかませた。
「え？」
「ご報謝。好きに使ってよ」
「あ、ああ……」
「俺って、いい奴でしょ」
「自分で言うな」

「ハハッ、それが俺のいいトコよ」
テリーは、ウインクしてみせた。
「でもそうかぁ、正しくないことなんかない、かぁ……なんだか、大将お得意の煙に巻く言い方であれだなぁ。キレイすぎるよ」
「でも、きっとそうなんだ。アレサンドロが悩んで、悩んで、悩み抜いて出した答えなら、それはアレサンドロにとって正しい。やり方がどうこうじゃない。途中で間違いに気づいたっていい。俺は、その答えについていく」
いつか傷つくかもしれないなどと心配するくらいなら、絶対に傷つかせないと誓えばいいのだ。
「その答えが、自分の意見と全然違っても？」
テリーが念を押すように言ったが、
「もし自分の意見があるなら、アレサンドロが答えを出す前に言うべきだ。俺はいつでもアレサンドロの相談に乗るし、アレサンドロだって相談してくれる。後から言うのは、それこそ無責任だ」
「……彼氏さんは最強のイエスマンだね」
「ああ、そう言われてもいいさ」
「でも、まぁ、無理ないか」
「え？」
「大将との生活が長いと、嫌でもそうなりそうだよ」
「……かもしれない」
「プッ……ハ、ハハハハッ！」

ふたりは、顔を見合わせて笑った。
その声はいかにも楽しげに響き、シューティング・スターの足元に並ぶ人々が、皆顔を上げてふたりを見た。
「アッハハハハ、やっほう」
テリーが手を振って応えると、誰もが笑顔になった。
……と、そこへ。
「ユウ、テリー！」

「うん？」
呼ぶ声に目をやると、人々の頭の上を転がるようにしてモチが近づいてくる。
コクピットハッチまで飛び上がったモチは、まぶしさに目をつぶっていたために、アンダーカバーへ頭を打ちつけるところだった。
「おっとと、大丈夫？」
「え、なんとか」
「どうしたんだ？」
「伝令です」
カバー外装板の縁へどうにか降り立ったモチは、何事もなかったかのように姿勢を改めた。
まるで本物の伝令だ、と、テリーはくすくす笑った。
「テリー」
「あ、あい、俺？」
「ええ。ここから先、私たちは洞窟を進みます。あなたはこのまま地上を進み、ひと足先に戦車と合流してください」
「……ひとりで？」
「はい。不安なようなら、私たちも行きますが」
「いや、いいよ。こういうことは身軽な方がいいからね」
「……ホウ」
「ホウ？ハハッ、俺が彼氏さんに泣きつくと思ってた？」
「いえ……」
モチは、図星を突かれたのをごまかすかのように首を回した。
いや、実際ユウもそう思ったのだ。
「あら、ひどいなぁ。俺たちスナイパーは隠密の単独行動が普通なの。シューティング・スターもレーダーに引っかかりにくくできてるんだけど……その顔は知らなかった顔だなぁ」
「恐れ入ります」
「いーえ、こちらも恐れ入ります」
モチをなでたテリーはすぐに腰を上げ、長クッションと共にコク

ピットへ戻った。
「あと聞いておくことは？」
「無線の感度が悪いようです。戦車に合流地点の変更を伝えてください。ヘスの裂け谷、南端です」
「あい、了解」
「アレサンドロからは、気をつけて行け、との伝言です。マンムートに着いたら一杯やろう、と」
「え……？」
サイドモニターに映し出した地図で、これからの道のりと裂け谷の場所とを確認していたテリーは、目を丸くしてモチを見た。
「……てはは。これだから参っちゃうよ。ねぇ、彼氏さん」
「なんだ？」
「さっきの話、少し考えてみる。俺も……俺が正しいと思うことをするよ」
「ああ」
「旦那をお願い」
「わかった」
「おモチさんは、旦那にわかったって伝えといて！楽しみにしてるって！」
ユウはモチをかついでＮ・Ｓへ飛び移り、元来た道を戻っていく薄緑色の機体を、その姿が見えなくなるまで見送った。

嫉妬

岩壁にふれた背や尻から、じんわり、冷気が這い登ってくる。
それを感じて、ユウはようやく顔を上げた。
洞窟に入ったことを悟られないよう、数人の若者と山頂近くまで足跡をつけるところから始まり、まるで山越えをしたかのように偽装した後は、薪になりそうな枝を探しつつ降りる。
帰ってみれば再びＮ・Ｓの羽根をむしり、ハサンの押し開けた、例の扉役の岩を元の場所へ戻す仕事まで仰せつかり……。
ごとん、と、それをはめ終えた頃には体力も限界。それが一連の動作であるように、そのまま地べたへ座りこんでしまっていたのである。
「はあ……」
許されるなら、このまま寝てしまいたい。
しかし、そうもいかない。
かじかむ指先に吐息を当てて、強く太ももとふくらはぎをこすると、氷のように冷たかった足が、わずかにぬくもりを取り戻す。
この機を逃すまいと勢いつけて立ち上がったユウは、遠く通路の先に見える明かりと暖気に向かい、のろのろと一歩を踏み出した。
「ユウ？」
「ああ、今、行く」
いつまでも戻ってこないユウを心配したのだろう。アレサンドロが顔を見せた。
逆光に浮かんだその姿は、昨日と同様、裸の下半身に羽根の繊維を揉みほぐしたものを巻きつけている。
「大丈夫か？」
「ああ……来なくていい。歩ける」
「そういうわけにはいかねえだろ、相棒」
アレサンドロは肌寒さに肩をさすりながら足早に近づき、ユウを

抱きかかえるようにして、その脇へ腕を通した。
ユウは、アレサンドロの口から出た相棒という言葉が妙に嬉しく、むずがゆかった。
「……こうしてると、あのときに戻ったみてえだな」
「あのとき？」
「忘れちまったか？俺たちが会った、あのときだ」
「ああ」
思い出した。
「今とは、逆だった」
「そうだったな。俺も服を着てた」
「ハハ」

……もう、数十年も昔のことのようだ。
オオカミの砦へ日ごとに忍びこみ、ユウは金を稼ぐために、アレサンドロはかつての仲間たちが残した品々を回収するために生きていた、あの頃が。
あの日のユウは、何故だったか普段行かない場所へ足を伸ばしてみようと思い立ち、そこで、ぬかるみに足を取られて動けなくなっているアレサンドロと出会ったのだ。
盗掘者同士はライバルでもあるが、ユウは、慈悲の心を重んじるメイサの神徒でもある。
当然、町まで肩を貸し、そこからつき合いが始まった。
「ここは、あの砦によく似てるぜ。見た目やそういうもんじゃなく……空気がな」
顔の大半に濃い影を落としたアレサンドロの目も、心なしか、あの当時の拒絶感を宿しているように見える。
「ここにはきっと、思いを残して死んだ奴がゴロゴロしてるに違いねえ。まるで、墓場だ」
ユウは、壁に残されたノミの彫跡が、一瞬、恨めしげに叫ぶ人々の顔に見え、思わず背筋が寒くなった。

「……ハ。なあ、ユウ。お前は、ここがどんな場所か知らねえのか？」
「ああ。ハサンはなんて？」
「いや、聞いてねえ。聞いても、答えねえんじゃねえかと思ってな」
「そうか……」
それはそうかもしれない。
だが、ユウはその言葉の裏に、アレサンドロの恐怖も透けて見えた気がした。
ハサンは、転んでもただでは起きない。こちらが一枚秘密のベールを剥ごうとすれば、十枚剥ごうとする。
それが恐ろしいのだ。
「でも……きっと、アレサンドロは大丈夫だ」
「うん？」
「ハサンは、もうアレサンドロを傷つけない。からかうことはあっても、望まないことはしない。わかるんだ。ふたりの間でなにがあったかはわからないけれど、トラマルから……いや、もしかしたらずっと前から、ハサンはアレサンドロを特別な目で見てる」
「……」
「だから、少し、うらやましい」
言った途端に、アレサンドロの驚いたような視線が降りかかってきた。
「いや、違うんだ。俺がそう見られたいんじゃない。でも、あの人は……ずっと俺に背中を見せて、前を走ってた」
追いかけても、追いかけても遠かった背中。
決して立ち止まってはくれなかった背中。
「だから……だから……ハハ、なんだろう」
ユウは、にわかに目頭が熱くなった。
これは、きっと嫉妬だ。
弟か妹ができ、親を取られたと思う、そんな感覚だ。
しかしだからといって、弟や妹を責められるか？

責められるわけがない。
「わかってる」
そう言うように、脇腹へまわされたアレサンドロの腕に、ぐ、と力がこめられた。
「……ハサンには」
ユウはさりげなく鼻をすすった。
「ハサンには、変に言葉を繕うよりも、真正面から当たった方がいい」
「ああ……そうだろうな。後で聞いてみるぜ」
「ん……」
「今は、お前の身体をあったためるのが先だ」

ふわ、と春の暖かさが、ユウの頬を包んだ。
天井の低い、メイサ大神殿の管轄する『ガイネッケンの洞窟聖堂』を彷彿とさせるその空間では、人の手による幾本もの石柱の間にロープが通され、かけられた衣服が数百枚と雫を落としている。
その下。岩盤を荒く削り出した地面には思い思いの形で羽毛をまとった人々が座り、いくつかのグループに分かれて焚き火を囲んでいた。
絶え間なく起こる笑い声。明るい未来を展望する言葉。巨大な羽根を手に跳ねまわる子どもたち。
すぐそばにある闇も、アレサンドロの言った墓場の空気もすべてなりをひそめ、そこには、幸せだけがあった。
「……う」
また頭痛だ。
そして、また嫉妬だ。
「どうした？」
「なんでもない。少し、思い出した」
「なにを」

「……家族を」
アレサンドロはなにも言わず、ひと際高く燃え盛る中央の焚き火近くへと、ユウを引いていった。
「脱げるか？」
「ああ」
かじかむ指でどうにか服を脱ぎ、アレサンドロ同様に腰を覆ったユウの手から、パッと服が取り去られる。
「あ……すまない」
「いや」
アレサンドロはそれをロープの物干しへ、やや乱雑に吊るし並べた。
さらに続けて、
「そら」
「あ、いい、できる」
「いいから、そっち向け」
凍えたユウはされるがままに、アレサンドロの大きく暖かい手で背中をこすられた。
すかさず、ブルーノの妻ディディから雪を沸かした白湯を手渡され、
「至れり尽くせりだ」
「ハ、たまには、ゲスト扱いもいいだろうぜ」
「もったいないな」
ユウは太股から足先までを、自力でこすり、温めた。

そうして、しばし無心になって肌を温めていると、不意に、アレサンドロが言い出したことがある。
兄弟についてだ。
「お前、いた、って言ってたか？」
「え……？」
「いや、親父さんのことは聞いたがよ、兄弟までは、どうだったか

忘れちまった。言いたくねえならいいぜ、無理に聞こうとは思わねえ」

ユウは、何故このときにと思いながらも、姉と兄がいたと告げた。もうここまでくれば、隠し立てすることはなにもない。望まれるなら、すべてを失ったあの日のことを語っても構わないのだ。

だがアレサンドロは、そこまで深く聞こうとはしなかった。

「そうか」

と、ひと言つぶやいたきり、なにか言い出しかねる様子で沈黙した。

「アレサンドロ？」

「……俺にも、弟がいてな」

「え？」

「もしかすると、お前と俺とは、そういう惹かれ方をしてるのかもしれねえ」

「……」

「こんな家族も、悪くねえよな」

「……ああ」

止まっていたアレサンドロの手が、かすかな笑いと共に、再び動き出した。

と、そこへ。

「あ、戻ってきた！」

眠りこけるモチを興味深げに眺め、くすぐったり、羽根を少し抜いてみたりなどしていた、いたずらっ子たちの一団が声を上げた。

目をやると、四方の壁にいくつも開いた通路のひとつから、光石灯を下げたハサンとクジャクが顔を出したところである。アレサンドロが言うには、この先の様子を確かめにいっていたのだそうだ。

ふたりはまとわりついてくる子どもらの頭を適当になでてやりながら、ユウとアレサンドロのいる中央の焚き火へと近づいてきた。

「やれやれ」

「よう、どんな具合だ？」
「まず問題あるまい。おお、少年たち、帝都なら五万フォンスはするマントだぞ。水っぱなをかむには少々高すぎる鼻紙だな」
「あ……！」
そこでユウが思い出したのは、ポーチにしまいこんだ例の布袋。テリーがつかませてくれた、あのオレンジゼリーである。
「これを、みんなで分けるといい。テリーが、そう言って置いていったんだ」
「へえ……おい、あのＬ・Ｊの兄ちゃんがくれたってよ。よかったな」
「うおー！」
中を見た子どもたちは雄たけびを上げた。金塊を見つけたように飛び跳ねて喜び、手足を振りまわしながら、皆で手を叩き合った。
「喧嘩すんなよ！」
「すげー！」
「おい、返事は！」
「はーい」
なおざりな返事を残して駆けていった子どもたちは、来いよ来いよと全員を呼び集め、たちまち広場には、ひとつ、ふたつ、と、にぎやかに数を数える声が響き始めた。

「……さあ、話してもらおうか」
「そう焦るな、クジャク君。まずは脱ぐ。そして温め合おうではないか」
言いながらハサンは、隻腕とは思えない速さで服を脱ぎ、当然のように、それをユウへと押しつけた。
「なにを話すって？」
アレサンドロが尋ねると、クジャクは、この洞窟のことだ、と言う。
「この男は、お前の前でなければ話せんらしい」

「フフン、それは少々悪意があるな。私は二度手間が嫌だと言ったつもりだった」
「同じことだ」
クジャクの目が、非難の光を帯びてハサンを見た。
そして、こちらも同様に身につけているものを脱いだのだが、クジャクはそれを、自ら干しに立った。
ゆらゆらと揺らめく、艶然とした炎に照らされた褐色の裸身。その、神々の祝福を受けた究極の造形。
誰もがそこに最上の美を見い出し、熱いため息をはいた。
「ん、まあ、そう、もめてくれるな。今の口ぶりじゃあ、話したくねえってわけでもなさそうだ」
「ンン、いかにもな」
「なら聞かせてくれ。この洞窟はなんだ?どうしてあんたは、こうなるまでここのことを黙ってた?」
ハサンはフンと鼻を鳴らし、身体を、幾層にも積み重ねられた羽根の隙間へと滑りこませた。

リスクの判断

「さて。では、嘘を交えて話そうか」
「う、嘘？」
「そう、嘘だ」
ごろりと寝転んだハサンは、左手のみで、器用にパイプのカーボンをかき出しながら言った。
断手刑となる以前から、衣服や髭までユウに手入れさせてはばからなかったハサンだが、この作業だけは他人にまかせたことがない。
ああ、草を買うように言づけるのだった、とつぶやき、事務的にナイフを動かすその視線は、いかにもいとおしげに飴色の木目を見つめている。
対してアレサンドロは、不満げになにか言いかけたが、
「もういい、さっさと話しな」
と、危うく、やぶから出かけた蛇を追い払った。
脱線を招くどころか、痛くもない腹を探られた上に、うやむやにされてしまうのはごめんなのだ。
「ンンン、学習するのは結構だが、面白みにかけるな」
「俺はあんたを喜ばせるためにいるんじゃねえ」
「そう言われると、かえって、もてあそんでやりたくなる」
「ハサン」
「ンッフフフ」
ハサンは唇をすぼめ、ふっ、とパイプに付着したカスを払った。

「かつて……そう、滅び去ってすでに三十年ほどになるが、この北部地方のさらに北端、北方アルデン聖王国という名の国が存在した。半島統一を掲げるグライセン帝国の猛攻に、五百日耐えたと言われる、『最後の騎士の国』。この迷宮を北へ行けば、その都、トーエンに出る」

「ああ……なるほどな。ここは、王族かなにかを逃がすための道だったってわけだ」

天井が低いのは、敵騎兵を馬から降ろさせるため。柱が多いのは、大群の一斉侵攻を阻止するため。

アルデンの戦上手は、その世代ではないアレサンドロさえも耳にしているところである。

「何故、この洞窟について口をつぐんでいたのかとお前は言ったな。トーエンに通じている、それこそが答えだ。……よく考えろ。帝国はトーエンから、あるものを持ち出した。そして我々は、それをかすめ取った」

「聖石か……！」

月の聖石は、そもそもトーエンのメーテル大神殿におさめられていたものだ。

この洞窟を使うことによって、どれほど鈍い者であろうと、N・Sの一団とトーエン、さらにはメーテル神殿を結びつけずにはいられないだろう。

そうなれば……その先は想像に難くない。

「私は言ったはずだ、他へのリスクは、ある程度目をつぶるかと。突き詰めれば、いまだ帝国への反感根強い、旧アルデンの民を粛清する格好の機会を与えることにもなりかねん。……お前たち、魔人の奴隷のようにな」

「……！」

眉をひそめ、視線を泳がせたアレサンドロの手が、自身の入れ墨をつかんだのをユウは見た。

「ハサン、それこそどうして……」

「そのリスクの内容を伏せていたか。ユーウー、話は最後まで聞くものだ」

「ッ……」

「私は、その場に応じた最も適切な判断をしている。今回の事例で言うならば、この洞窟を使うことによって生じるリスクが、積雪の

ある山道を通るリスクを下まわったということだ。つまり、外を行けば確実に死人が出たが、内を行けば、トーエンの民も含め死人を出さずに済む可能性が残ると判断した」

「それは、この洞窟を通ったと悟られなければ……ということか」

と、クジャク。

「その通りだ。聖石を奪った時点で、ある程度の疑いは持たれているだろうが、それだけでは大神殿をかかえる町を破壊する理由には弱い」

「だから、なにもかも伏せて、既成事実を作っちまってから俺に話したってわけか。自分の、その適切な判断って奴を突き通すために」

「そうだ。だが私は提案する前に、お前の意見も聞いた。お前は無理だと答えた」

「……ああ。くそ、その通りだな」

「私は確かにリスクを伏せ、既成事実を作ったが、他に道はない。これが、お前の望む結果を生む、最良にして唯一の手段だった」

「もういい、もうわかった」

アレサンドロは、手にした扇大の瑠璃羽根を、力まかせに投げつけた。

軽い羽根は踊るように、ハサンの頭へ乗った。

「あんたが正しい。明日からはこの中を進む、それでいいな」

「ンンン、それでこそリーダー君。柔軟だな」

「チッ」

何度も何度も、ハサンの上に羽根が降った。

……と、そこへ、

「ハサン。俺はまだ聞きたいことがある」

「ほう、なにかな、クジャク君」

羽根をつかんだアレサンドロの手が、止まった。

「お前と、この洞窟との関係だ」

「フン……君にそれを話す必要が？」

「ない。ただの興味だ」

「フフン」
ハサンは、吸い口を元の位置へとはめ直し、パイプを置いた。
「君とセレン・ノーノは、どうも扱いにくい。大粒のダイヤをキャビネットの上にさらしたまま、戸に鍵もかけずに外出する。盗人も魔術師も、さながら道化師がごとしだ」
「……なにが言いたい」
「ンッフフフ、悪い男だな、クジャク君」

そのときだ。
ようやくゼリーを味わえたらしい子どもたちの大歓声が、わっ、と洞内に響き渡り、話を一時中断させた。
キャンディ・バー同様、様々な味のバリエーションを持つ粒ゼリーは、露店で売られる最もポピュラーな駄菓子のひとつだが、その安さからは想像もつかないほどの笑顔に、ハサンでさえも思わず笑顔となる。
そのハサンが、ふとユウを見た。
「……お前に、菓子を買ってやったことなどなかったな」
「え……？」
「駄々ひとつこねたこともない。手のかからん子だった」
「そうだった、かな……」
確かに、そうであったかもしれない。
拾ってくれたこの人に、迷惑をかけてはいけない。その想いは常にあった。
だからこそ、自分の金で初めて菓子を買ったとき、やはり泣きたくなるほど美味かったことを覚えている。
「今の方がよっぽど手がかかる」
「悪かったな」
今度は、ユウが羽根を投げつけた。
「いいから、話の続きをしろ。こんなところがあるなんて、今まで一回も言ってなかったじゃないか」

「お前の知らん隠れ家など、帝国中に掃いて捨てるほどある。ここはその中でも、特に重要な場所だった」
「てえと、どういうことだ？ハサン」
ハサンは、なかばうんざりとした様子でため息をついた。
「ここは私が駆け出しの頃……そう、当時の相棒と共に二年ほど住んだ、少々思い出深い場所だ。それから後も共有の隠れ家という認識でやってきたものを、私の一存で何者かに引き継げるわけがあるまい」
「相棒？」
「アーレサンドロー、お前が聞いてわかるのか」
「俺ならわかるか？」
「ああ、お前もよく知っている男だ。だがもう、私はこの話に飽きた。後は勝手に推測するがいい」
そう言い捨て、そそくさと羽根にもぐりこんでしまったハサンは、余程痛いところを突かれたらしい。
アレサンドロは、いい気味だ、とばかりに拳を振り上げ、大いに喜んでみせた。
ユウは、相棒とは誰だろうということに思いをめぐらせ、クジャクは、どこまでが『嘘』かを考えた。
そしてモチだけが、薪の小山の上で、ひとつ大きなあくびをした。

そこから先の道程も、ハサンを先頭にして進められた。
洞窟の中は大小様々な広場と、その壁に開いた幾本もの通路からなっており、通路を抜ければ似たような広場、そこからまた一本を選び……というように、道を知らないものが入ろうものなら行き着く先は死のみであることがすぐに察せられる造りである。
幸い足元は平坦で、年寄り子どもでも難なく進むことができたが、人数分には程遠い光石灯とハサンのつけた目印、そしてなにより前を歩む人間とつないだ手を頼りに行く道のりは、外の方がましだっ

たと思えるほど人々の心を憂鬱にした。
まさに今、アレサンドロの言う墓場の空気が、明確な負の形を持って人々の後ろ髪をなで始めたのである。
……しかし。
だからこそ人々は、休息のたびに童謡を歌い、明るい言葉しか口にしなかった。
その前向きであろうとする姿に、助ける側であるはずのユウたちも、随分と救われた。
そうして、昼も夜もない暗闇を、三日も歩き続けただろうか。
突如行進の足が止まり、最後尾にいたユウとクジャクは、ハサンに呼び寄せられた。
「どうした？」
先頭の集団は、とても四百人は入れないだろう小さな広場に踏みこんでいる。
ハサンとアレサンドロ、モチは、通路のひとつを前にしてしゃがみこみ、地図を広げて待っていた。
「着いたぜ。ここが、ヘスの裂け谷の谷底だ」
アレサンドロが光石灯で照らし出してみせた床には、確かに薄く、先日見たのと同じレールが走っている。おそらくこの通路の奥にも、行き止まりに見せかけた隠し扉が眠っているに違いない。
「テリーがヘマをしてなきゃあ、セレンたちもこの近くまで来てるはずだ。とりあえず無線で連絡して、この近くまで呼ぶ。そこでだ、ユウ」
「ああ？」
「ここじゃ無線は使えねえ。俺と外に出てくれ。ハサンとクジャク、モチはここに残る。あっちの場所によっちゃあ、ここでもう一泊だ」
五人はうなずき合った。
さて、ここヘスの裂け谷南端は、それほど深い絶壁の底、というわけでもない。

垂直にそそり立った崖が見る者を圧倒するのは北端から中央部にかけてで、この辺りは、なだらかな斜面が続く。
凍りついた岩戸を協力して引き開けたふたりが、吹きつける寒風に身をすくめつつ顔を出すと、出口付近こそ巨石によって守られていたが、そこはやはり、驚くほどの雪に覆われた世界だった。
「やれやれ、なえるぜ」
「ハハ、無線機を取ってくる」
「ああ」
引き返していくユウの背を見送り、アレサンドロは、少し周囲を見ておこうかと一歩踏み出した。
「うん？」
思ったよりも、足が沈まない。
ひざが雪の上に出る。
「下は凍ってんのか。こりゃいいぜ」
アレサンドロは思いがけない幸運に気をよくし、そのまま谷の中央へと進んでいった。
「アレサンドロ？」
「おう、こっちだ。この辺のが電波もいいだろうぜ」
「ああ」
「これならガキでも歩ける。後、は……？」
「アレサンドロ？……アレサンドロ！」

ユウの目の先で、音もなくアレサンドロが倒れ伏す。
その周囲に広がった、鮮烈な赤。
ユウは無線機を放り出し、雪原へ飛び出した。
「アレサンドロォッ！」

急がばまわれ

「待て」
焦りから雪に足を取られ、無様に這いずったユウの足首を、誰かがつかんだ。
「ハ、ハサン？離せ！離してくれ！アレサンドロが！」
「いいから戻れ」
「なにがいいんだ！アレサンドロが……ッ！」
「奴は餌だ。今行けば、お前こそ死体になるぞ」
「え？」
「まったく手のかかる……クジャク君、手伝ってくれ！」
ユウは、ハサンとクジャクの手によって引きずり戻されてしまった。
「ハサン！」
「そうわめくな。見ろ」
「なにを！」
「見ろと言えばひとつしかあるまい」
「……くッ」
ユウはアレサンドロを見た。
見たが……状況は先ほどと変わらない。
ひざを抱くようにして倒れた身体は微動だにせず、雪に埋もれた顔からは表情はうかがえない。ただただ、白い雪が赤く染まっていく。
「……やっぱり行く」
「ユーウー」
「アレサンドロは動けないんだ。助けに行かないと！」
「そこを否定するつもりはない。だが、あれは様子をうかがっているのだ。……そら、動いたぞ」
「え……？」

ユウは振り返った。
すると、今度こそ確かに、アレサンドロはもぞもぞと動き始め、なにかをしようとしている。
ユウからは見えなかったが、血止めをしているのだ。
「チッ……テリーに、言われるはずだぜ……」
おのれの浅はかすぎた行動に舌打ちしながら太股の傷所を確かめ、腰のベルトを抜く。それを左足の付け根に巻きつけ、間に差し挟んだ剣の鞘でねじり、締め上げる。
さすがに医学の心得があるだけに、アレサンドロの処置に一分の無駄もなかった。
しかし、
「こいつは……」
アレサンドロにとって、初めて見る傷ではない。
以前一度、ハサンの右肩に同じものを見たことがある。
銃創である。
わずかに顔を上げ、目の合ったハサンに、指で引き金を引くジェスチャーをしてみせると、うなずきが返ってきた。
アレサンドロは、わけもなくホッとした。
「……やはりな」
「なにが」
「スナイパーがいるらしい」
「スナイパー？」
クジャクが眉をひそめた。
「まさか、あの男が……」
「そうではない」
「だが……」
「クジャク君、今は現実を処理してからだ。ユウ、無線をマンムートへまわせ」
「アレサンドロは……！」
「救いたければ口をつぐめ」

ユウは、このときにおいてさえ眉ひとつ動かすことのないハサンを、頼もしく思うどころか憎くさえ思った。
たとえ少しでも、心配する心はないのか。
出かけた言葉を呑みこみ、ユウは携帯無線機の発電用ハンドルへ、その憤りをぶつけた。
『……い。こちら、マンム、ト』
「つながった！」
「よこせ」
ハサンは無線機を受け取り、洞窟と外との境界寸前で、アンテナを調整した。

『お嬢さん、緊急だ。テリー・ロックウッドを頼む』
『テ、テリーさんですか？ちょっと待ってください』
これで、テリーが犯人である可能性は消えた。
『……あい。なに？』
『スナイパーの狙撃を受けている』
テリーの、息を呑む気配がした。
『それ……ホント？』
『アレサンドロが撃たれた』
『旦那が？それで？』
ハサンは現在地点を含め、状況を余すことなく伝えた。
凶弾はアレサンドロの左大腿を貫通。今すぐどうこうということはないが、出血次第では長く持たないということ。
凍った氷層上にザラメ状の雪。雪崩が起きるには好条件だということ。
そして、自分の耳目には、スナイパーの気配が一切感じられないということ。
『大したものだ、身動きひとつせずに我々を見ている』
『……』
『奴らはネイラーズだな、テリー・ロックウッド。釘打ちするがご

とく、容赦なく銃弾を打ちこみ、その精度は千メートル離れた場所からコインの中心を射抜くことができる、別名コインシューター。選りすぐりの精鋭部隊だ』

『さすが大将……よく知ってるね』

『奴らの人数。今、隠れひそむ場所が知りたい』

『無理だよ。おモチさんを飛ばしたら？』

『それはできん。狙い撃ちされる』

『Ｎ・Ｓは』

『出したのち救いに行くのと、奴のこめかみに弾丸が撃ちこまれるのとではどちらが早いかな』

テリーは沈黙した。

『テリー・ロックウッド。お前は世界屈指のシューター、オットー・ケンベルに最も近い男だ。足のなえたあの男も、お前と同じく地図の前にいる』

『……』

『どこだ。あの男なら、どこに配置する』

「……くそっ」

テリーは、のんびりと腰かけていたキャプテンシートの踏み板を蹴りつけ、立ち上がった。

間接的ながら初めて迎えた恩師との対決に、心臓が胸の内側から殴りつけてくるようだ。ブリッジを歩き回る靴底にまで、鼓動が響いてくる。

「テリー」

「わかってる。わかってるよ、セレンさん。……地図を出してよ」

「もう出てる」

「えぇ？……クールだなぁ」

苦笑いしたテリーは、手のひらで一度顔を覆い、メインモニターに表示された立体図と向かい合った。

「もっとアップになる？……そう、そのくらい」

南から見下ろす形で表示されたそこには、地表線だけでなく、樹木や岩の様子も立体化されている。

こういった、地図上に仮想敵を配置したシミュレーション訓練を、テリーは嫌というほど受けてきた。

今でも地図を見れば、自然と、そういった理想的な攻撃ポジションが目に入る。

それが正しいかは、もう考えまい。

「撃ち下ろしのできる、見晴らしのいい場所……互いの射線が交差しない場所……身を隠せる遮蔽物のある場所……」

テリーの目が、三点に吸い寄せられた。

『大将！』

『いいぞ、テリー。いいスピードだ！』

『うは、気持ち悪いこと言わないでよ。いい？俺なら三ヶ所だ。場所は……』

『うむ……うむ』

ハサンは相槌を打ちながら、洞窟の出口から見えるそのポイントのひとつを、ちらりちらりと見やった。

『わかった』

『あ、大将。きっとあいつらは、お互いに連絡を取り合ってる。ひとりが襲われたら、他の奴が旦那をヤるよ』

『ンン、ご忠告どうも。切るぞ』

ハサンは、投げ捨てるように無線を切った。

「よしクジャク君、ビショフという年寄りがいたな。年寄り仲間二、三人と連れてきてくれ。フクロウ君、そら目を覚ませ」

「ホ……？」

「寝ている暇はないぞ。君にも仕事をしてもらう」

すぐにクジャクが手を引いてきたビショフは、中部出身の七十男。十五年前の戦においても老骨に鞭打って戦ったという剛の者だが、現在は陽だまりで猫を抱いているような好々爺である。

他に連れてきたふたりの老人も、広場で気炎を上げる若者たちを、あんな時代もあった、と微笑ましい目で見るような、そんな角の取れた年寄りたちだった。

「おお、ビショフ君。ここは少々冷えるが、まあ座ってくれ」

「はい、では失礼を」

どこか気品を感じさせるビショフとふたりの年寄りは、丁寧に頭を下げ、地面へ静々と座った。

「さて、君たちを呼んだのは他でもない。あれを見てくれ」

ハサンの指差した先を、三人とモチは、ぐっと首を伸ばし、糸のように目を細めて見た。

「あ……」

「なんと……」

四人は同時に言った。

「騎士団ですか」

「そうだ。罠を張られていた」

「……我々は、なにを」

「あの方の盾になれというなら、なりましょう」

「なります、なります」

「ンッフフフ、さすが老人は肝が太い。が、そうではない。その罠を排除する間、血の気の多い連中が余計な手出しをせんよう出口をふさいでいて欲しい」

「なるほど……」

ビショフの手が、ぽん、と自らの胸を叩いた。

「わかりました。お引き受けいたします」

「フクロウ君もここに残ってくれ。不測の事態が起こったときは、すぐに発光筒を」

「了解です。……武運を祈ります」

「結構。では行くぞ」

ハサン、ユウ、クジャクは太陽に背を向け、大勢の待機する広場、さらにその奥深くへと、地中の道を駆け出した。

D

「じいちゃんたち、なにしてるんだい」
「なにって、見張りだよ。お前さんたちが勝手に外へ出ないよう見張っているのさ」
「なにかあったのかい。クジャク様たちも、さっき奥の方へ行かれたようだがね」
「ああ、あの方たちは、もっと見晴らしのいい場所から外の様子を見に行ってくださったのさ。ありがたいことだ」
「アレサンドロさんは」
「ここから、先の道を見に行かれたよ」
「へえ……ひとりで、大丈夫かね」
四十を越えているだろうその男は、首を伸ばして外を見ようとした。
「ほらほら、だから私たちがここにいるんだ。こう陽気がいいと、お前さんたちはすぐあとを追っかけたがるだろうからな」
「う、むう……」
「危ない危ない。まあ、今は皆さんを待とうじゃないか。すぐに戻ってこられるさ。なあ、フクロウさん」
「はい」
「……そうか、そうだな。じいちゃん、ここは寒いだろ。代わろうか」
「ありがとう、大丈夫だよ」
「毛布いるかい」
「なあに、それも子どもらにやっておくれ」
「酒は？」
「それはいただこうか」
「つまみもあるかい」
「トランプもおくれ」

「……いいのか。年寄りたちでは、いざというとき支えられん」
「それは違うぞ、クジャク君。歳を取るとは枯れ果てていくことではない」
「む……？」
「人は肉体的に衰えようと、それを補って余りあるなにかを身につけていく。それに気づかんのは、役に立たんと決めつけて使ってやらんせいだ。仕事を得た年寄りほど恐ろしいものはない」
変わりばえのしない、自然洞窟の一部にも見える通路を先頭に立って駆けるハサンは、そう力説した。
「だからこそ、オットー・ケンベルは恐ろしい。……もっとも、私は奴が今まさに雪に埋もれ、小銃を構えていたとしても驚かんだろうがな」
「その可能性は」
「ないとは言えん。よく訓練された兵士ほど肉体をコントロールできる。さあ、着いたぞ」
ハサンが足を止めたのは、通路に直接開いた横穴だった。
この数日が、広場と通路を交互にくり返しながらの道のりだっただけに、ユウは若干の違和感を覚えたが、実はこの辺り、北方アルデン聖王国から続く避難路の末端に当たるのである。
つまり、敵を迷わせるためのものではなく、脱出口を選択するための道なのだ。
横穴へ突き入れられたユウは、ここからの一本道をとにかく進むよう指示された。
「いいか、ユウ。相手が誰であろうとためらうな。テリー・ロックウッドの忠告、あれは真実だ」
常に引き金に指をかけ、連絡を取り合うスナイパーたち。ひとりが襲われたと知れればアレサンドロの命がない。
「無線だけは使わせるな。それが最低限の仕事と思え」
「わかった」

「よし行け。敵は木立の中にいる。支え合う巨石を目印にしろ」
「ああ！」

ユウは駆け出した。
とにかく、気ばかり急いた。
ハサンもクジャクも、あの年寄りたちでさえも平静を保っているが、アレサンドロの倒れる瞬間を目にしてからというもの、ユウの心臓は早鐘のように鳴り続けている。喉もカラカラで、気分が悪い。
まだ着かない、まだ見えないと、一分を十倍にも百倍にも感じながら、徐々に険しくなっていく傾斜と自然味を増していく通路を四つん這いに登っていく指先は、知らないうちにいくつものすり傷をこしらえ、にじみ出した血で赤く染まっていく。
それでもただひたすら、ユウは道なりに駆け続けた。
「あ……！」
光だ。
遠くに、外の明かりが見える。
口にくわえた光石灯をポーチへしまい、細かな雪氷が頬に当たるのを感じながら、ユウは、若干速度を落とした。
白く、矢のように降り注ぐ光に、目の奥が痛んだ。

……フン。
三人の中で最も早く獲物を見つけたのは、やはりハサンだった。
どれほど訓練を積もうと隠しようのない、呼吸音。におい。
街中ならばまだしも、これほど清浄な世界に存在する生物の気配を、しかもこの距離で逃すことはない。時に呪わしくさえ思えるバケモノじみた五感に、ハサン自身が絶対の自信を持っている。
わずかに口元を上げ、姿勢も低く、雪に沈めた身体をゆっくりと移動させ始めたその動作は、まさにネコ科の猛獣が狩りに出かける様子そのままと言っていい。

アレサンドロの姿も、洞窟の入口もすべて見通すことのできる高台で、伏射姿勢を一切乱すことなくスコープをのぞきこむそのスナイパーは、防水加工を施したキルト地の雪中迷彩服に身を包み、静謐の世界で、その時を待っていた。

……なるほど、スナイパーとはこうしたものか。

戦場の只中に身を置きながら、おのれを捨て、待ち続ける狩人。

弓兵ならば幾人も知っているハサンだが、似て非なるものであると、今こそ断言できる。

ハサンは、手を伸ばせばふれられるほどの距離で足を止め、それから五分も、最新型の小型通信機を背負った相手のうしろ姿を凝視した。

そうして、柔らかな光沢を放つ漆黒のマントが一陣の風と共にひるがえったとき……若いスナイパーは首筋の急所を断ち切られ、静かに、孤独な戦いを終えた。

クジャクの目指す相手は、木立の中にいた。

巨木の根元にひざをつき、肩と腕とでライフルを支えている。

その姿もまた兵士として美しいものだったが、クジャクにはなんの感慨も与えなかった。

目の前にいるのは、ただの敵。ただ、特殊部隊の一員である、というだけの敵なのだ。

顔の前で刀印を結んだクジャクは、それを自らの首筋へ持っていき、ひとつ、腹の底から息を抜く。

そして、指先一本、髪先一本に至るまで、余すところなく生命の気を送りこむように呼吸をくり返したかと思うと、その口からはき出される空気の流れが、す、と止まった。

うっすらと開かれた黒真珠の瞳に映るのは、先ほどと変わらぬ体勢で銃を構える、男の背中。

クジャクの身体は雪や風のように動き、すり上げられた六角の鉄

棍が、男の開いた脇腹を打った。
「うっ……！」
思わぬ強襲に、男の口から驚きの入り混じったうめきがもれる。
さらに、勢い振り返ったその喉仏に間髪入れず痛烈な一撃が打ちこまれ、男は木の幹をかきむしるようにして、ついには息絶えた。
「む……」
男の手には、それでもライフルが握られている。
再び肺に新鮮な酸素を取り入れたクジャクは、ここでようやく、大したものだと兵士の死を悼んだ。

さて、ユウはどうしただろうか。
ユウは、最も早く地上に出ることができたが、敵を見つけたのは誰よりも遅かった。
雪中迷彩のスナイパーは見事に擬態している上に、こちらの存在を先に感づかれるわけにはいかない。
その事実が、ユウの行動へ、躊躇と過剰な慎重さを与えていたのである。
こうしたときに、実戦経験がどれほどものを言うか。ユウは身をもって理解することとなったのだ。
……とはいえ。
雪というものは、敵にも味方にも、等しくチャンスを与えてくれる。
ユウは散々疲れ果てた末に、ついに真新しい人間の足跡を発見し、それを追跡することを得た。
酷使され、痛む肺を押さえて斜面を這い上ると……いた。
スナイパーだ。
ユウは腰をかがめ、静かに太刀を抜いた。
しかし。
なんということだろう。ユウにはこの日、運もなかったのだ。

なにをしたわけでもないのに、背後の木が突然、枝に乗せた雪をどさりと落とした、というのは、そうであったと言う他にない。
張り出した岩に乗り、色白の頬を見せて銃口を傾けていたスナイパーが、意識をわずかにこちらへ動かし……、
「う……！」
ついに、三メートルの距離にまで近づいていたユウと、スナイパーの目が合ってしまった。
まずい、と思う瞬間にも、ユウが身を固めているのに対して、スナイパーの手は素早く、分厚い襟元に留められた小型マイクへと伸ばされている。
「こちら『ドーラ』！襲撃を受けている！撃て、撃て、撃て！」
「くそっ！」
ユウは抜き身の刃を振りまわし、スナイパーへ踊りかかった。
鋼をも断つといわれるエド・ジャハン刀に、左肩から右の腰までを切り裂かれたスナイパーは、血しぶきを上げて倒れた。
「はぁ……は……ドーラ？」
どこかで聞いた覚えがある。
アントン、ベルタ、ケーザル、ドーラ……。
ドーラは四番目を示す暗号だ！
「アレ……ッ！」
弾かれるように振り向いたユウが、崖下へ叫ぶより早く、
『タン』
人の命を奪うにはあまりにも軽い銃声が、澄んだ雪山の空気を振るわせる。
ユウは、ひざの力が一気に抜けるのを感じ、
「あ、ああ……ああ！わあああッ！」
目と耳を固くふさいで、絶叫した。
号泣した。

すべて、風に乗せて

殺した。
俺がアレサンドロを殺した。
言ってくれたんだ。俺を弟だと言ってくれたんだ。
それが嬉しくて、俺もアレサンドロを、ずっと兄さんみたいに思ってたと伝えたかった。
それなのに、どうしてこうなった。
どうしてこうなった！

……ザザと、倒れたスナイパーの襟元から、無線のノイズが広がった。
『こちらアントン、応答せよ』
「……」
『……ベルタ？ドーラ？』
『……ベルタだ』
『ドーラ、応答しろ、ドーラ』
ユウの耳は、呼びかける声を拾ってはいた。拾ってはいたが、その音が、はっきりとした意味を成さなかった。
わかるのは、その誰だかを名乗る声の主が、ハサンとクジャクらしいということのみ。
責めるなら、いっそ俺を殺してくれ。
そう思うだけで、ユウは無線を取ろうとはしなかった。
『……まあいい。仕事は終わりだ。戻るぞ』
『いいのか？』
『構わん。大方、頭をかかえて泣きわめいているのだろう。奴が死んだと思いこんでな』
……思いこむ？

『俺はN・Sで降りる』
『雪を刺激せんように……とは、君に言うまでもなかったな』
『フ、フ』

なんだ、なにを言っている。
なにがおかしい。
アレサンドロが死んだというのに、なにがおかしい。
……いや。
ハサンはなんと言った。
思いこみ？
思いこみとは……どういう意味だった……。

「あ……！」
ユウは、ハッと顔を上げた。
「まさか！」
と、崖に走り寄り、危険もかえりみず身を乗り出す。
丁度そのとき、谷を挟んだ対面の雪影からN・Sクジャクが現れ、
「アレサンドロ！」
その向かう先に、あの老人たちに囲まれたアレサンドロの姿があったのだ。
笑っている。
生きている。
ユウは神に感謝することも忘れ、転がるように、元来た道を駆け出した。

……さて。
そのユウの姿が遠ざかったところで、身をひそめていた木の裏から音もなく歩み出た男がいる。
もし誰かが目撃していたとしたら、なんと思っただろう。
それは、ハサンだった。

ハサンといえば、先ほどクジャクと通信を交わしていたようだったが、

「……フン」

と、わずかに口元をゆるめたその背には、白いケースに包まれたスナイパーの通信機が負われている。

とすると、先ほどの会話も、この場所でおこなわれていたということか。

その、ただのいたずら心とも思えない行動の意味は……おそらく、ひとつしかないだろう。

いざというとき、ユウを、自決という愚かな結末から救うため。

ハサンは、ユウの身を案じたのだ。

ただ、それがユウのためなのか、アレサンドロのためなのか、はたまた自分自身のためなのか。答えは誰にもわからない。

ハサンは満足げに髪をなでつけ、ユウのあとを追って、ゆるゆると坂を下り始めた。

「アレサンドロ！」

「おう、怪我はねえか？」

「そんなことはどうでもいい。そっちは」

「ああ、なんとかな」

アレサンドロは、地上に差し出されたN・Sクジャクの手のひらに腰かけ、自らの手で止血を続けていた。

ユウに銃創の程度はわからないが、血に濡れた手を握らせてもらうと、温かい。

ようやく、アレサンドロの無事が現実味を帯びて感じられた。

「もう……駄目かと思った」

「ああ、俺もだ。あの音のあと、あいつが降ってきてな」

「あいつ……？」

あごをしゃくってみせるアレサンドロにつられて視点を動かすと、

「あ……！」
十メートルほど先に、最後のスナイパーが倒れ伏している。
「どうも、テリーがやったみてえだな。肝が縮んだぜ」
アレサンドロは傷の痛みに耐えながら、苦笑いした。
「俺が……俺が悪いんだ。俺が失敗して……！」
「いや、そういう意味じゃねえ。お前がなにをしたか知らねえが、俺のために人ひとり斬ってきた、それはわかってるぜ」
大きな指が、ユウの頬に飛んだ返り血をぬぐう。
「ああ、でも……」
と、ユウが尚も言いかけるのへ、
「ユウ」
「？」
「お互い無事だったら、なんて言うんだった？」
「え……？」
「もう、よしとしようぜ」
「……」
「な？」
「……すまない」
「俺こそな。おかげで助かった」
ふたりは拳を突き合わせ、互いの生還を心から喜んだ。

と、そのときだ。
「おーい」
響いてきたのは軽快なモーター音と声。
見ると、谷の切れ間からホバーバイクが滑ってくる。
「テリーだ！」
そしてハンドルを握っているのは、あれ以来、マンムートと行動を共にしていたジョーブレイカーである。
ホバーバイクは幾度かバウンドをくりかえしながらＮ・Ｓの脇へ寄ると、勢いよく転回して、止まった。

「テリー！」
「おっと待った、彼氏さん。まずは旦那だよ。旦那、大丈夫？」
「今のとこはな」
「また無茶したんでしょ」
「いや、馬鹿やった感じだ」
「どう違うのさ」
苦笑したテリーは、木箱に詰めこんだ医療用具をトランクスペースから降ろし、それをアレサンドロの手元で開いてみせた。
その動作の中には一切の慌てた様子もなく、テリーがもし、珍しく負い革とスコープを装着したライフルを肩に吊っていなければ、まるで日常のひとコマのように見えただろう。
「あいつは、やっぱり、お前の仕業か」
「まぁ、ね……でも別に、感謝されることじゃないよ。俺は、自分のミスを穴埋めしただけ」
「ミス？」
「大将には三人って言ったんだけど、そうじゃなかったからね。ホント、気づいたときにはどうしようかと思ったよ。……ね、これで足りる？」
「十分だ」
「手伝うよ。銃の傷なら何回か見てる」
「頼む。とりあえず応急処置でいい」
「了解」
さすが言うだけあって、テリーは手際よくアレサンドロの太股を消毒し、ラップを巻いてみせた。
そのテリーに、ユウはどれほど感謝しても、し足りない。
本人はミスの穴埋め、などと言っているが、『四人目』は、どうあがいてもテリーでなければ処理できなかったのだ。
いや、そもそも仲間にいなければ……そう考えると、ゾッとする。
「俺のこと見直した？」
「え？」

「そんな顔してたよ」
「……だから」
「そういうことは自分で言うな」
「う……」
「アッハハハ、そういうところがララちゃんのお気に召すんだろうなぁ、彼氏さんって」
これには、アレサンドロまでが声を上げて笑った。

さて、ユウに遅れること数分。
こちらも谷底へ戻ったハサンは、くだんのスナイパーの遺体を改め、ジョーブレイカーに二、三質問を投げかけたのち、感嘆のため息をはいた。
「どうした」
と、クジャクがのぞきこむと、目に入ったスナイパーの首元に、直径三センチほどの、なにか円形をしたものが下がっている。
クジャクの顔色が、サッと変わった。
「千五百メートルだそうだ」
「なんだと……？」
「まったく、恐るべき業だな」

ハサンにそう言わしめたもの、それはコインである。
エリートスナイパーのみが許された、ネイラーズ、そしてコインシューターの称号。
所属する者は、皆それに一方ならぬ誇りを持ち、任官された際に授けられる通称ケンベルコインを、名誉の象徴、勝利のジンクスとして持ち歩く。
その、ケンベルコインである。
本来ならばその裏表には、グライセン帝国章とスナイパーの守護神、風神フーンを表す木の枝とが浮き彫りにされているはずだが、今、倒れ伏した若きスナイパーの首にかけられたコインの中心には、

えぐるような弾痕が開けられていた。
それがテリーの狙撃によるものであることは、今更言うまでもないだろう。
「それほどの距離から……これを」
「フフン。奴もまた、コインシューターだったわけだ」
ハサンは、どこか厳かな手つきで、それをスナイパーの懐中へ落としこんでやると、静かに立ち上がった。
「止血は終わったか？」
「ああ、行けるぜ」
「結構。ではリーダー君は、ホバーバイクで皆を先導してくれ。操縦は……」
「俺はちょっと残るよ」
テリーが言った。
「あ、別に変なことしようってんじゃないよ。でも……祈ったりぐらいは、してあげたいじゃない」
誰もが、その想いに異を唱えようとはしなかった。
そうなのだ。
敵味方に分かれ、いともたやすく命を賭け合ったかのように見えるスナイパーたちだが、どれもかつては同部隊、テリーの戦友であったのだ。
それぐらいは、かける情があってもいい。
「俺も残る。手を貸したい」
ユウも名乗り出た。
「いいだろう、ではフクロウ君にも残ってもらえ。用が済み次第カラスで戻ればいい。バイクの操縦はジョーブレイカー君。私とクジャク君でしんがりを務める。……どうかな、リーダー君？」
「ああ、それでいい」
人々の大移動が始まった。

ユウとテリーは、再び出口のバリケード役へと戻っていた年寄りたちからモチを受け取り、しばし、その列を無言で見送った。

太陽と新雪の照り返しとで、遠近感を狂わせるほどの白に染め上げられた世界。やはり、暗闇を脱したばかりの人々はまぶしげに目を覆い、しかし嬉しげに、坂を下っていく。

ここからマンムートまでは、約二キロ。

スナイパーの弔いをゆっくりと済ませても、カラスの翼ならばすぐに追いつけるはずだ。

「行こう」

列が見えなくなったところで、ユウはN・Sを呼び出した。

すると、どうしたことだろう。

当のテリーはライフルを構えると、一発、おもむろに天へ向かって弾丸を放ったのである。

ダン。

銃声が、鋭いこだまとなって響き渡る中、テリーはボルトハンドルを操作し、空の薬きょうを捨てた。

「テリー？」

「俺たちの流儀でね、魂が、空に飛んでいくように」

ダン。

再び、弾が飛んでいく。

当然、遺体を集め、埋葬するものだとばかり思っていたユウは驚いた。驚いたが……こういう供養があってもいい。それらしいのが一番だ。

ユウの口からは自然と風神の神文がつむぎ出され、音も想いも弾丸も、すべてが蒼空を渡る風にすくい取られていった。

三日月を胸に

そうしてマンムートに、再び全員が顔をそろえた。
この旅を始めた、ユウとアレサンドロ。
縁あって同じ道を歩むこととなった、モチ、ララ、ハサン、ジョーブレイカー。
セレン、メイ、テリー、クジャク。
当初は頭をよぎりさえもしなかった『ホーガン解放』という大仕事を成し遂げた仲間たちは、皆誇らしげな微笑を浮かべ、キャプテンシートのアレサンドロを見上げている。
ここにひとりも欠けることなくそろったことが、そしてなにより出会えたことが、奇跡だ、とアレサンドロは思う。
神々の恩寵だ、とユウは思う。
そして必然だ、とハサンは思った。
「いいぜ、嬢ちゃん。つないでくれ」
「は、はい！」
メイの操作で、メインモニターの画像が切り替わった。

今、マンムートは山間に息をひそめている。
アレサンドロの治療や、人々の収容とその落ち着きを待ったことで陽が落ちたこともあるが、これから、自分たちの行く末を決定する重要な会議がおこなわれるのである。
マンムートと二号車の間は数台のカメラとマイクによってつながれ、食堂や休憩所、計四ヶ所に集まった人々の顔が、分割されたモニターの中に、はっきりと映し出される。
男たちだけでも、と思っていたアレサンドロは、その数にまず驚いた。
ほぼ全員、年寄り子どもまでもが白い電灯の照る生活感のない空

間に集い、椅子だけでなく、床にまで座って、聞き耳を立てていたのだ。

これらの人々がマンムートへ到着したときの喜びようは、ここでくどくど説明するまでもないだろう。それはもう、新年と収穫祭が同時に来たようなものだった。

「テスト、テストです。映像と音声を確認して、マイクで応答願います」

とりあえずマイクの近くにいた人物から、以上なしの報告が入った。

「さて……」

アレサンドロがマイクを取った。

「知らねえ人間がほとんどだ、まずは自己紹介しておくぜ。俺はアレサンドロ・バッジョ、オオカミの砦にいた。こいつらは……」

と、アレサンドロは、ユウたちについても簡単に紹介した。

中でも、ララとテリーについては鉄機兵団出身であることを隠すことなく告げ、

「こいつらはもう敵じゃねえ。少なくとも、俺は信用してる」

と付け加える。

それと聞いて顔を見合わせたのは、当のふたりだった。

「へへ、信用してる、だって」

「いやぁ、泣けるね」

「ユウも信じてくれる？」

「信じてくれる？彼氏さん」

「うるさいな、静かにしろ」

何故か戻ってからこちら、ララのみならずテリーにまでべったりとつきまとわれて、閉口しているユウである。

いや、今このときだけを比較すれば、テリーはララよりもなれなれしくなっているかもしれない。ララは、ユウと久々に顔を合わせたときから妙だった。

では、なにが妙か。
いつもならば、ユウが帰ってきたと知るや真っ先に現れ、間髪入れず首へかじりついてくるところが、ララは駆け寄ってきたものの不意に足を止め、目を合わせるのもはばかられるように頬を赤らめた。もじもじとした。
そして、意を決してようやく、
「あの……おかえり」
と、いつもの左腕の定位置へ納まったのだ。
視線を下げてみると、遠慮がちにふれる指はどことなくやり場ないようで、目が合うと、やはりハッとした様子で顔を背ける。
ユウは、胸にもやもやとしたものを感じずにはいられなかった。
「……こういう場を作ったのは」
アレサンドロの声で、ユウは我に返った。
そうだ、こちらに集中しなければ。

「こういう場を作ったのは他でもねえ。俺たちの、これからの身の振り方について、全員で考えるためだ」
人々はざわめき立った。
無理もない。この中の多くは、アレサンドロがすでに行く先を決定し、そこへ全員を避難させてくれるものと思っていたはずだ。
かつての魔人たちと同じ絶対的なカリスマ性を、期待として、希望として、願望として、アレサンドロの中に見ていたに違いないのだ。
「意見のある奴は前に出て、ひとりずつ、思うところを聞かせてくれ。誰でもいいぜ。誰に気兼ねすることもねえ」
そう言って、アレサンドロはマイクを置いた。

……沈黙の時が流れた。
どうすればいいかわからず、辺りを見回す者。

どこか考えを口に出しかねている者。
このままひとつの意見も出ず、いたずらに時だけが過ぎていくかと思われた、そのとき。静かに手が上がった。
あの、ビショフ老人の手である。
「よろしいですか」
「ああ」
ビショフは白髪頭を幾度も下げながら、マイクの前へ進んだ。
「ビショフと申します。本来なら私のような年寄りは、ただ邪魔にならぬことのみを考えておればよろしいのですが……まあ子どものためにも、ひとつ、言わせていただきたい」
「ああ」
「どのように気力振り絞ろうと、私には、もう戦う力はありません。わずかな土地でも耕して、せめて心静かに大地へ帰りたいのです」
「……」
「私は……自由区エド・ジャハンへ出ることを提案いたします」
「なにを言ってる！」
激しくヤジが飛んだ。
「こうなれば、どこで死のうと同じことだ！」
「N・Sがある！帝国と戦争だ！」
「なにを馬鹿な。今更勝てるものか」
「なら皇帝だ！皇帝を討て！」
「将軍もだ！俺は父さんと母さんを殺された！」
「俺は兄弟もだ！」

喧々ごうごうとする議場を、議長ならば鎮めなければならない。
しかし、それら魂からはき出される真実の声を、アレサンドロは口を横一文字に引き結んだまま、ただ黙然と耳に受け続けた。
人々の意見は、大きく分けて二種類。
ひとつはビショフ老人の言う『国外逃亡論』で、多くは老人や、幼子を持つ女が支持をする。

もうひとつは『皇帝討伐論』で、若者や、働き盛りの男たちが支持をした。

「あなたはどうなんだ！」

「そうだ、あんたの意見が聞きたい！」

「アレサンドロさん！」

「アレサンドロさん！」

声を受けたアレサンドロがわずかに姿勢を正しただけで、場は、水を打ったように静まり返った。

「その前に、ひとつ断っておきてえ」

「……？」

「これから俺がなにを言おうが、最後はここにいる全員の票で決める。そのつもりで聞いてくれ」

アレサンドロは縫合したばかりの傷を、包帯の上から軽くなでた。

「まず、皇帝をヤるって話だが……俺には、賛成できねえ。何故と言ってくれるな。俺たちを今の目に合わせたのは先代で、今の皇帝じゃねえからだ。言いたかねえが野郎が死んで、この国はもう、戦の歴史にひと区切りつけちまった。やっと落ち着いた世の中を今更引っかきまわすな、そう思われても仕方がねえ」

「で、でも……！」

「よしんば皇帝をヤれたとして、そのあとはどうする」

男たちは、顔を見合わせた。

「俺たちが跡を継ぐか？」

「そ、それは……」

「奴らはすぐに次の皇帝を立てる。それもヤるか？皇帝の血を絶やし、貴族を絶やし、鉄機兵団を根絶やしにするまでやるか？それはつまり……第二第三の俺たちを作ることになるんじゃねえのか」

「だったら、あんたも外に逃げると言うのか！」

場は、にわかに殺気立った。

口を閉ざせば正論に潰される。それを恐れるかのように、男たち

はアレサンドロを悪し様に罵った。
子どもじみた抵抗といえばそれまでだが、そこには、たとえ正論であろうと認められない十五年分の意地がある。
意地はそのまま声量となって、アレサンドロを責めた。
「あの戦を忘れるな！」
「そうだ、俺たちはなんのために生かされた！」
「あの戦を忘れるな！」
「……忘れちゃいねえ。俺だって、あの戦でいろんなものをなくした。あの戦さえなけりゃあ……そう、なんべん思ったか知れねえ」
「だったら……！」
「なくした命より、これから生まれてくる命のために、この力を使いてえ」
「……？」
「俺たちの国を作るんだ」

……まるで。
そうまるで、この世から音というものが消え去ってしまったかのような瞬間だった。
「誰にも侵されねえ、俺たちの国だ。人間と魔人が共存する国だ」
そう語るアレサンドロの声が、非現実的な、伝説や神話の響きをもって人々へ届く。
アレサンドロは、左腕の入れ墨を見た。
「……そうだ、俺は信じねえ。住む世界が違うなんて、たとえ先生の言葉でも信じねえ」
つぶやくその目に浮かぶのは、かつて小さな胸を焦がして見た、大空をはためく赤い三日月の旗。
その旗の下で、人間魔人が入り混じり、ひとつのパンを分け合った。いくつもの喜びを得た。
あの日々こそ、忘れてはならない。
「俺たちは……いつだってひとつになれたはずだ。いつだって……

！」

「どこに作る」

アレサンドロは夢から覚めたような顔つきとなり、声の主、ハサンを見た。

だが、そのハサンでさえも、アレサンドロの言葉に驚愕の眼をむいたことを、隣のジョーブレイカーは知っている。

「……この国の中だ」

「エド・ジャハンではなく」

「ああ。エド・ジャハンに国を作るのは簡単だろうが、それでいいと思えるほど俺はできちゃいねえ。俺たちの作った国を、この国の皇帝に認めさせる、それが俺の復讐だ」

人々はうなり、ハサンは満足げに鼻を鳴らした。

「もちろん、ここにいる全員に賛成してくれとは言えねえ。こいつはエゴだ。命がいくつあっても足りやねえ、矛盾だらけの、ひとりよがりな俺の夢だ」

もしこの案が通っても、望む者はエド・ジャハンへ送り届けると、アレサンドロは確約した。

「……さあ」

ひと呼吸する。

「決を採ろうぜ」

選ぶのは、戦いか、亡命か。

国を勝ち取る無謀な賭けに出るかの内、ひとつ。

「俺は、お前に乗るぜ！」

それは、ブルーノだった。

ホーガン島で腹を刺された、アレサンドロにとっては同郷の仲間と言ってもいいこの男もまた、傷を押して参加していたのである。

「決を採る必要なんかねえ。矛盾だかなんだか知らねえが、ガキにいろんなものを残してやりてえのは俺も同じだ！」

ブルーノの座った丸椅子は、乗せた巨体をもてあますようにガタガタと鳴った。

「それによ、まだ、乳くせえ皇帝の首を肴にするより、そっちの祝い酒のがずっと美味そうじゃねえか。恨みは、こっからの戦いで、鉄機兵団のクソ野郎どもにぶちまけてやろうぜ！」

このひと言は、人々の心を大いに揺さぶった。

特に、現皇帝が十二歳の少年であることを思い出させたことで、皇帝討伐派の勢いは急速に弱まった。

そうだ、そうだ、とブルーノに同調する動きもそこここで見られ、そこでさらに声を上げたのが、

「私も行きます！」

ブルーノの妻、ディディである。

「馬鹿、なんでお前まで。ガキはどうするんだよ」

「あら、女手がなくて、誰があなたの下着を洗ってくれるんです」

「えっ！ば、馬鹿野郎！そんなのはあれだ……なんとでもなるだろうよ」

「なりません。私も行きます。子どもたちも行きます！」

こうなると女は強い。

子どもを味方につけられると、尚更、夫が逆らえるはずもない。

結局ブルーノは押し切られ、その姿に感化された、家族ある者を中心に手が上がり始めると、たちまち満場一致の大拍手が、アレサンドロへと降り注いだ。

アレサンドロは、思わず目頭が熱くなった。

その後、当然の流れで正式にリーダーへと選出されたアレサンドロは、共同生活をする上でのいくつか細かいルールを決定し、この日の会議を終えた。

その終わり際、

「これだけは言っておかなきゃならねえ」

と、切り出したことがある。

「この先、俺になにがあっても、恨みを増やしてくれるな。俺はや

りたいことをやって、満足して死んでいった、そう笑ってやってくれ」

ユウの肩にまわされたテリーの手が、ぐ、と肩口の布をつかんだ。

「もしそうなったときは、あとをどうするか、今みてえに全員で決めるんだ。そのときの世話を……ハサン、あんたにまかせる」

指名を受けたハサンは、さすが毛筋ほどの動揺も見せず、フフン、と肩をすくませた。

「どうした。あんたは俺の望みをすべてかなえてやると言ったぜ」

「ンン、いかにもな」

「だったら頼む。あんたが、俺の紋章官だ。今度こそ、俺はあんたを信じる」

「フフン……泣かせてくれる」

ハサンは、仰々しくも美しく頭を垂れた。

「仰せの通りに、我が君」

と、言った。

影と闇

「さあ、これからが忙しい」
絵柄のない、白磁のティーカップへ口をつけたハサンの横顔に、隣接する厨房から差す光が、濃い影を落としている。
今は静まり返ったマンムートの食堂だが、明日になれば数十人の男女がこちらへ移り、昼も夜もないにぎやかさで埋め尽くされることだろう。
その、最後の安息日を楽しむかのように、ハサンはゆっくりと紅茶を味わった。
「ン、ン、ン」
安物の茶葉ながら、ハサンは値段にこだわるだけの自称美食家ではない。入れ方によって十分に楽しむすべを知っている。
長机を挟んで対面する席にクジャクがいるが、こちらはただその表面に揺れる波紋を見つめるのみで、カップに手をつけようとはしなかった。
「……君は知っていたな。今回の建国話を」
「ああ。デューイ・ホーキンス、あの男を退けたあとだ」
「では、その上で同行を決めた……フフン、酔狂なことだ」
カップを置いたハサンの手が、そのまま、机に乗った菓子皿に伸びた。
といっても、それはソーサーに紙を敷いただけのもので、数粒のゼリーが形よく盛られている。
子どもがいるという情報を聞きつけた女海賊ソブリンが、せめてものこころざし、と山のように持たせてよこした菓子だった。
「ふむ、なるほど悪くない」
と鼻を鳴らすハサンに対して、
「アルデン聖王国とやらには、その菓子はなかったようだな」
クジャクは、そっぽを向いて言った。

「ンッフフ、機嫌が悪いな、クジャク君。それほど気になるか。何故奴らが、我々の正確な位置をつかめていたか……」
「お前は気にならんと言うのか」
「ならんな。大方の目星はついている」
「なに……ならば何故黙っていた」
先ほど、医務室へ戻るアレサンドロから同様の質問を受けたハサンは、あの地下洞窟の存在を知られている可能性をにおわせながらも、
「いかに私の目でも、帝都は遠すぎる」
などと、回答を先送りにしていたのだ。
「俺たちをコケにしているのか……」
「そうではない。現に、君にだけは打ち明けておこうと、こうして場を設けた」
「何故、俺に」
本来ならば、アレサンドロにこそ筋というものではないのか。
「奴には少々刺激が強すぎる」
「なに……？」
「いや……聞けばわかるということだ」
ハサンは口を湿らせるように、今一度、カップを唇へと運んだ。

「さて、まずこれだけは確実に言える。ここにいる者たちの中には、裏切り者はいない」
何故ならば、追跡されているのは助けられたブルーノたちではなく、助けたこちら側であると考えられるからだ。
今まで幾度もあった、バイパーやシュナイデの襲撃しかり。ホーガン島にしても、いつ起こるとも知れない襲撃に備え、出ることのかなわぬ永久監獄に間者をひそませるとはなかなか考えづらい。
加えてハサンは本人が知らない間に『運び屋』となっていることも考慮し、四百人すべてに対して発信機探知をおこなわせたが、
「結果は全員が白」

「そんなことはわかっている。はじめからな」
「そう、では何故奴らは、正確すぎる時と場所とで我々を襲い得たか。答えは……これではないかな」
ハサンは、苛立ちを隠しきれない様子でにらみつけるクジャクへ、左手の甲を立てて見せた。
そこに輝くのは、
「指輪……？」
「Ｎ・Ｓと、正式な持ち主である君たちとは魂がつながっている……そうだな？」
クジャクの美貌から、血の気が引いた。
「もうひとつの身体、たとえば君ならばどうだ。君のＮ・Ｓを、そう、仮にそのピアスの状態でシュワブへ運んだとしよう。なにが、どこまでわかる」
「それは……」
「正確な場所と、Ｎ・Ｓの状態。そのくらいは感じられるのではないかな？」
「だが……だが、そんな馬鹿な。では、お前は誰がそうだと言うのだ」
「さてな。だが私の経験上、『歴史から姿を消したと思われている人物』ほど怪しい。その消し方が劇的であればあるほど、正しいと思われていればいるほどな」
「馬鹿な……！」
「聞けばカラスとオオカミ、二体のＮ・Ｓを拾った数日後。すでに砦跡の発掘作業をあきらめ、事務的な巡回のみをおこなっていたはずの鉄機兵団が、突如飛行型Ｌ・Ｊで現れたそうだ。そのとき連中の言った言葉が、『おい、ここじゃないか』。一体、誰に指示を受けてきた？」
クジャクの眉が、ふるふると震えている。
「当時、目も当てられぬほど損傷していたというＮ・Ｓが、アレサンドロの修理によって息を吹き返した。つまり仮死状態から目覚め

たわけだ。持ち主である魔人は、当然それを感じ取った……。だがいいか、クジャク君」

ハサンは、やや興奮した面持ちで拳を握りしめた。

「重要視すべきは『何故そのような行為に至ったか』ではない。『どこから事件は始まったか』だ」

……ああ。

声にならない叫びが、浅い呼吸をくりかえす唇から絞り出される。

なにを見せているのか、目には内部映写式の無骨なゴーグルを装着し、ぴくりぴくりと痙攣をくりかえす手足は、鋼のかせによって椅子に拘束されている。

いや、そればかりではない。

うなだれた後頭部、盆の窪の辺りには、なんと直接、プラグにも似た突起が挿入されているようだ。

誰もが視線を注がずにいられない、甘い芳香さえ漂うような娘の白い首筋から、玉の汗がひとすじ、薄水色の実験着へ吸いこまれていった。

「手を入れすぎては使い物にならなくなるぞ」

「……」

「フフ、ただの人形になるも一興か」

血眼になってモニターを凝視する老博士を捨て置き、黒い鎧の鉄仮面は、脇の椅子へと腰を下ろした。

ゆったりと周囲を見渡しつつ、ため息ひとつ。

雑然と言おうか、混沌と言おうか。

すでに一時間にも渡って処置を受け続けているシュナイデと、その周囲はまだよし。絡まり合うコードや機器、モニター、書籍が所狭しと積み上げられ、壁さえも見えない部屋である。

そこは、帝都の地下研究室。宮廷博士スダレフの研究室だった。

「スダレフ」
楽しげな鉄仮面の声に引かれ、痛々しく片腕を吊ったスダレフは、わずかに不機嫌な顔を動かした。
「生きた脳に一度芽生えた自我。それこそ丸ごと取り替えるでもない限り、消し去ることはなかなか難しい。複雑怪奇な人間の脳に勝る機械など、そうないのだからな」
言いながら鉄仮面は、悠々と座席のリクライニングを倒している。
「ならば、その大容量の器を上手く使えばいい。幸いその娘、お前の命令には忠実だ。人間を救ったと言うが、殺せとも命令を受けていなかっただけのこと」
「はあ……」
「わからんか？記憶媒体だ。お前が唯一のぞいてみたいデータはここにある」
「あ……あーあ、なるほど……ううむ、なるほど」
スダレフはひと声うなり、ようやく、にたりと笑ってみせた。
「これはまったく、私としたことが。脳の替えがきかんなら、どうせ廃棄は決まったようなもの。損はなしというわけで、ヒ、ヒヒ」
「フフフ」
「さて、そうと決まれば……」
言うが早いかスダレフの手が、シュナイデのゴーグルをむしり取った。
現れた半眼の瞳は視点定まらず、上下左右と、ひどく機械的な動きで揺れている。
「シュナイデ」
「はい、博士」
その、明らかに尋常ではない様子からは想像もできないほど明瞭に、シュナイデは答えた。
「お茶を入れて差し上げろ。今すぐにだ」
「はい」
「急げ」

拘束を解かれたシュナイデは、先ほど耳に入れただろう廃棄という言葉も意に介さぬ顔で、平然と研究室をあとにした。
「持たざる娘か……。フ、フフ、まあ、なまじな感情を持つよりはいい。こちらも尻ぬぐいをさせられずに済む」
「ほぉう、またですか」
「まただ。今度はケンベルに位置情報をもらしたらしい」
「それはそれは」
「まったくどうにも困ったものだ。今、彼を失っては、すべてが振り出しに戻ってしまうというのにな」
「では……あちらも調整を？」
問われた鉄仮面は、わずかに沈黙した。
「……いや、あいつはあれでいい。身体に虫が這っていれば、誰でも潰したくなる。起き抜けならば尚更な」
「さようで……」
「あちらはいずれ落ち着くとして、お前もしばらくは、帝都でなりをひそめていることだ。データの収集を続け、おとなしくな。さもなくば……次は腕だけでは済まされんぞ？」
「う……」
「ハ、ハ、ハハハハ！」

「……笑い事ではないぞ、ハサン」
「ンッフフフ、いかにもな。だが悩んだところで、事実は常に明快な形をもってそこに存在する。丸が四角になることはない。四角に見えるとすれば、それは目が曇っているせいだ」
「俺が、奴を信じすぎたせいだと？」
「そう思わせようとした奴の手腕が、君を上回っていただけのことだ」
「……く」
「だが……そう、これは我々にとっても好都合な事実かもしれん。

いや、八割方そうであると私は見ている」
「……俺たちの戦いに、大義を持たせるためにか」
「そうではない。国取りの後押しするのは、なにも武力だけではないということだ」
にやり笑ったハサンの指が、自身のこめかみを、とんとんと叩いた。

「しかし、ラッツィンガーめはどうされますので。なんでも他の将軍ばかりか、元老院にまで手をまわし始めたとか……」
「案ずるな。所詮、崇敬する皇帝陛下のひと言で片はつく。奴らがどれほど吠えようと、すべての切り札は我々の手の中だ」
「ふむ……」
「あとは時を待てばいい」
「お待たせしました」
実験着のままのシュナイデが、カートを押して戻ってきた。
ティーコジーをかぶせたポット。そしてカップ、ミルク、砂糖壷。
「ミルクと砂糖は」
「結構だ」
「はい」
シュナイデは、絵画の貴婦人のような慎ましやかな手つきで、カップに紅茶を注いだ。
「ふむ……」
ふわりと立った華やかな香りに、鉄仮面の、甲冑に鎧われた胸が上下する。
こちらは、至極上等な茶葉であるようだ。
「どうぞ」
「ああ、待て」
差し出されたカップを制した手が、ついに、仮面にかかった。
次の瞬間広がり落ちたのは、絹糸のようになめらかで、月光をつ

むぎ出したかのような輝き。
薄汚れた天井の蛍光灯などではなく、こちらが部屋を照らしているのではないか。そう思えるほど美しい、ゆるくウェーブのかかった白銀の髪であった。
青灰色の眼をしたその男は、長い髪を首を揺すって払い、よく通る声でこう言った。
「フフ、そうだ……あとは彼らの働きにかかっている」

赤いゼリーを厨房の光に透かし、ハサンは言った。
「奴の弄した策の数々が、いずれ、我ら建国の道となるだろう」

『そう……ここが、我々の夢の始まりだ』

新たな旅立ち

翌朝。

数え切れぬ志願者の中から経験と実績によって選ばれた三十人の男女が、マンムートへと引き移ってきた。

内訳としては、クルーや整備士が半数。残り半数が、こまごまとした身のまわりの世話をするために乗りこんだ、主に、先の乗員たちの身内である。

これがひとつのチームとなり、二号車にいる第二チームと数週間単位で交代をする。

「いつか走ってる最中でも、あっちと行き来できるようになりゃいいがな」

と、心づくしの朝食を口へ運びながらアレサンドロは言ったが、さすがにそれは、遠い先の話だろう。

マンムートと二号車を、たとえば通路のようなもので連結するには、後部のＬ・Ｊ格納庫とハッチからして大規模な改修を迫られる。

「いや、言っときゃあ、うちの博士さんのことだ。寝てる間にどうにかしてくれる気がしねえか？」

「……確かに」

「わかるわかる」

ユウとアレサンドロ、ララは、顔を見合わせて笑った。

「さて……」

「あ、いい、俺がやる」

ユウは、アレサンドロと自分の食器をひとつのトレーにまとめ合わせ、立ち上がった。

食堂の食事は、すべてセルフである。

「あたしのはぁ？」

「自分で持て」

「ぶー」

ララは唇を尖らせた。
「あ、ね、ね、じゃあ、ジャンケン！」
「ええ？」
「ジャンケン、ポイ！」
ユウはつい乗せられて勝負に参加してしまったが、その結果は、
「あ、ずるい、もう一回。……ポイ！あ、三回勝負！」
……きりがない。
結局、盛大なため息と共に三人分のトレーを重ねたユウが、それを返却台へ返しにいった。
アレサンドロが、お気の毒、とでも言うように笑ってよこした。

「ハ、それにしてもまあ、随分と仲良くなったじゃねえか」
「そう？」
「それらしくなったぜ、お前も、あいつもな」
「だと、いいけどさ……」
何故かしょんぼりと答えたララは、アレサンドロが引き寄せようとして倒してしまった松葉杖を、わざわざ席を立って拾い上げた。
悪いな、と受け取ろうとしたアレサンドロだが、ララはそれを胸に抱いたまま、なにかに見入っている。
ユウの背だ。
「ねぇ、あたしがいない間にさ……ユウ、なんか言ってなかった？」
「うん？」
「だから、嫌いだ、とか……うざい、とか……」
アレサンドロはその複雑な質問に、つい苦笑せずにはいられなかった。
なんとなれば、十五年前の自分、カラスを見つめ続けていた自分もまた、同じ質問を誰かにぶつけたくて仕方がなかったように思えるのだ。
「ハ、いや、そういうのは聞いてねえな」
「ふぅん」

「ただ、物足りねえような顔はしてたぜ。お前がいなくてな」
「え！」
「うるせえのがいなくて、せいせいしてるって感じでもなかった」
「う、うるっさい！バッカ！」
そう言いながらも、やはりまんざらでもない顔つきを見せたララは、アレサンドロの隣、先ほどまでユウの座っていた席へ、すとんと腰を下ろした。
「でもさぁ、もしそうだとしても、あたしがいなくて寂しかったぁ、ってわけでもないじゃない？」
ままごとでもするように、ララは松葉杖に話しかける。
「どうしたらわかってくれるんだろ。……ねぇ、アレサンドロ。あたし、どうすればいいかなぁ」
「……」
「アレサンドロ？」
「悪ぃが俺は、その手の相談には乗らねえことにしてるんだ」
「え、なんで」
「聞いてくれるなよ。とにかく俺はもう、月影はごめんだ」
「月？……あ！」
途端に、ララの頭に閃くものがあった。
あの日聞いた、飴売りの手まわしオルガン。そこから流れていた童謡のタイトルだ。
「そうそう、えと、『月のおはなし』！あ、なんかスッキリぃ」
ララは喉をくすぐるような仕草をして、笑った。
「月のおはなし？」
「あれ、その話じゃないの？ほら、水の国のお姫様がぁ太陽の王子様に恋をしたぁ、とかってヤツ」
「ああ、まあ、間違っちゃいねえ……のかな」
「すっごい有名な歌じゃない。知らないなんてオジサぁン」
「お前こそ、今まで忘れてましたって顔だったぜ」
「あ、あたしは名前、度忘れしてただけだもん。言っとくけど、全

部空で歌えるんだからね！すっごい、いい歌なんだから。知らないなんて人生の半分損してるんだから！」

「へえ」

あの暗いだけの童話が、いい話などになり得るのか。

アレサンドロは、少し興味を引かれた。

「どんな歌だ？」

「ここで歌うの？冗ッ談」

「なら、あらすじでいいぜ」

「あらすじ？うぅん、どうしよっかなぁ」

ララは意地悪く考えこむような素振りを見せたが、アレサンドロが少々拝み倒すと、

「仕方ないなぁ」

いともあっさりと、小憎らしい笑顔を返してきた。

こちらはこちらで、話したかったに違いない。

「あのね、昔々のおはなしです、ってトコから始まるの」

「ああ」

「海の中に水の国ってのがあって、お姫様がいたの。で、ある日、空を見てたら、太陽の国の王子様が、馬車でひゅーって。それ見て恋しちゃうわけ」

そこまでは、原典と大差ない。

「お姫様は、もうどうにかしてそれを伝えようとするんだけど、結局、上しか見てない王子様は気づいてくれなくてさ。それが悲しくて、毎日毎日、海の水が増えるまで泣くの。そしたら月がね、じゃあ私が、もう少し明るくなるまで空にいてあげるから、太陽が通ったら引き上げてあげるって」

「……それで？」

「太陽と月が一緒に出た朝に、約束通り月に手を取られて飛んだお姫様は、無事に、王子様と会うことができました！」

「めでたし、めでたしか？」

「そ。昼でも月が見えるときあるじゃない？そんなときは、王子様とお姫様が会ってるんだって。ロマンティックぅ」
「ふぅん……ところ変わればって奴だな」
「だからほら、女の子は、あたし水のお姫様なの、あんた月になってぇ、なんて友達に言ったりして、手紙の橋渡ししてもらったりね。アレサンドロも月になってよぉ」
ララは、アレサンドロのそでをぶんぶんと揺さぶった。
「だからやらねえよ」
「ケチ」
「ああ、ケチ上等だ。大体お前の王子様は、結構低いところを飛んでるみてえじゃねえか」
「え？」
「がっつかねえでいれば、すぐに降りてくるぜ、きっとな」
「……ウソ」
「今まで通り、あんまり気にしねえことさ」
そこに、ユウが戻ってきた。
「どうした？」
「いや、なんでもねえ。行くか」
「あ、これ！」
「おう」
ララの差し出した松葉杖につかまり、アレサンドロは立ち上がった。

これからまた、会議である。
ユウたち十人と二号車の代表十人とで、向かうべき場所、最終的に国を建てる場所を決定しなければならない。
しかし、これがまた大変に頭を悩ませる作業で、実際その日の会議も、かなりの時間を費やすこととなった。
まず国として自立するには、自給自足を考えなくてはならない。となれば、ある程度肥沃な土地を持つことが不可欠となるが、も

ちろんそのような土地がおいそれと残っているわけがない。
リーダー、アレサンドロの意向としては、今ある一般市民の生活をおびやかしたくはなく、では隣接する都市との交易に頼るかと言われれば、それもまた難しい。
さらには、二号車から呼ばれた東西南北中央部それぞれの代表が、やはり各々の出身地を推薦する、というわけで、
「……頭が痛ぇ」
「フフン、しっかりしろ、リーダー君」
アレサンドロ個人としては、なかなか決めるところまで至らなかった。
「まあ、どこも住めば都ってとこだろうが、いっそ皇帝直轄領を狙うんでもなけりゃあ、でけえ領主のいる土地は避けてくのが無難だろうな」
「となると……」
ハサンの持った指示棒が、ブリーフィングルームの机に広げられた地図の上を、七度叩いた。
「七将軍の所領」
「ああ」
「デルカストロ大公爵領」
これは、元老院議長を務める、国家重鎮中の重鎮である。
「あとは、七つの大神殿領を除外した土地、ということになる。さて、そうなると……」
残った土地は、多いように見えて少ない。
先に出た皇帝直轄領や、既存の町との兼ね合い。自然環境。
ユウたちは、椅子から身を乗り出して地図を眺め、
「南西部」
と、うなずき合った。
正確には、中部、西部、南部の境界に位置するジーナス山周辺。
「ここしかねえな」
「ああ」

「おい、嬢ちゃん。この辺りの地図頼む」
「は、はい、すぐに！」
メイは五分もしないうちに、プリントアウトした巨大な地図をかかえて戻ってきた。
「……ふうん」
地勢は悪くない。
特に山麓南側の広大な扇状地ならば、比較的温暖な気候とあいまって、米なと麦なと果物なと、それなりの収穫が期待できるだろう。
周辺には二、三、鉄機兵団の出城があるが、その程度は問題にもならない。
ただ、いざというときの避難地である自由区エド・ジャハンが遠い以外は、
「いいな。よすぎる」
これが、全員の一致した意見だった。
「しかし、よくもこのような土地が手つかずで残っていたものだな」
と、クジャクがいぶかしげに言った。
「この川は毒なのではないか？」
「ンッフフフ、まさか！」
ハサンが机を叩いた。
「ここは……いや、これは准神官殿にうかがおうか」
「え？」
「ここには何故、住人がいない」
「そんなこと……」
自分で言えばいい、とユウは思ったが、同じく理由を知らないらしいアレサンドロやララの視線にうながされ、反抗の口を閉じた。
「ここは……もともと、トガの大神殿があった場所なんだ」
「トガ……？」
「獣神トガ」
十五年前、激化する戦争の中で糾弾と迫害を受け、最終的に信仰を禁じられた神である。

その弾圧の根拠にあったもの。それはなんと、『魔人を生み出したのはトガの神徒ではないか』、という、根も葉もない噂だった。

殉教か、改宗か、または国外へ逃げるかの道をたどったトガの神徒たちは、いずれにしても姿を消し、今現在も係わり合いを恐れてか、入植者も入らない、というわけなのだ。

「ああ、確か、そんなこともあったな」

アレサンドロは、苦い顔であごをかいた。

「しかし、獣の神様のところに魔人さんと住む国を建てるんだから、まぁ面白いっちゃあ面白いよね」

「アハッ、ホンット！」

「ねぇ、旦那、いいんじゃないの？ここまできたら縛り首は確実。俺たちにタブーなしってね」

ユウの左右を占めるテリーとララにあおられ、アレサンドロもそうだなと、やっと笑顔を見せた。

「よし、決まりだ」

場にいる全員が、不思議と姿勢を改めた。

「俺たちの目的地は、帝国南西部領アンザスの、ジーナス山。二号車の十人は、戻ってそれを伝えてくれ。問題ねえようなら出発だ」

「おお！」

「セレンと嬢ちゃんはコースの割り出し。ハサンと話し合って、いくつか候補を絞ってくれ」

「了解」

「ジョーは、そのあとで斥候に出てもらうかもしれねえ。マンムートで待機。クジャクは二号車の世話を頼む」

「承知した」

「ね、あたしたちは？」

「ああ、お前とテリーも、Ｌ・Ｊと一緒にこっちで待機だ。ユウとモチは……」

「もちろんこっちだよ、ねぇ彼氏さん」

「……だってよ」
ユウは、やや釈然としないながらもうなずいた。
「よし、行動開始だ。全員、腹をくくっていこうぜ！」

人々の重み、いや、それ以上の希望を乗せたマンムートは、それから一時間と経たずに動き始めた。
進路は南。
新たな楽園ジーナスは、まだ遠い。

淡い未来、確固たる現実

この頃からアレサンドロは、好んで白衣を着るようになった。自分はリーダーだが、それだけではない。ここに生きるすべての者たちのために存在しているのだと、そう言いたげな白だ。

夜ごと停車するマンムートと二号車の間を行き来し、怪我を押して人々の治療や相談に乗るその姿は、実際、誰の目から見てもそう映ったに違いない。

誰ひとりとして、アレサンドロをリーダーとかついで後悔する者はいなかった。

そしてこの頃からまた、ユウもなにかと忙しくなった。

理由は簡単、神官として呼ばれることが多くなったのである。最も位の低い准神官にできることはたかが知れていたが、土女神のみならず、他の七柱すべての神文をかじっているユウは、どの神徒からも、よくものを頼まれた。

たとえば、初めて使い始める器具や工具のたぐいに祝福をし、母が子のため仕立てた衣服には、長持ちするようにとまじないをかける。

さらには医務室の傷病者を見舞い、要望の多かった『仮聖堂』の設計と準備を進める、といった具合にだ。

おかげでここ数日間、マンムート待機どころか二号車に寝泊りをし、忙しさにかまけて剣の鍛錬までおろそかにしてしまったが、ユウの心は満ち足りていた。

何故ならば、そう、見えるのだ。

決して大きくはない、ささやかな願いのすぐそばに、同じく神官であった父の姿が見える。

父が、どのような思いでそういった人々に手を差し伸べていたか、今ならば少し判る気がする。

ユウは、すべてが終わったあかつきには神殿に上がろう、神に仕

えようとまで、真剣に考え始めていた。

「カウフマン」

「あ……ジョーか」

少し遅めの昼食を終えて二号車の大食堂を出たユウは、背後から名を呼ばれ、足を止めた。

ほんの数秒前には誰もいなかったはずの通路。しかしジョーブレイカーは、まるで一時間も待たされていたかのような雰囲気で壁にもたれている。

この超人の場合、走っているマンムートからどうやってここに、などという言葉は無用だ。

「どうした？」

と、問いかけると、今日は黒装束に包まれたその腕が、無言で布包みを差し出してきた。

「ああ、わざわざ、持ってきてくれたのか」

ヘスの裂け谷で人を斬り、血脂をつけた太刀。それを、同じくエド・ジャハン刀を持つこのジョーブレイカーが手入れしてくれるというので預けてあったのだ。

「すまない」

その仕上がりが気になったというのではないが、それを両手で押しいただいたユウは、鞘から刃を引き出してみた。

……小さな丸窓から差しこむ陽光を受け、刀身が白く輝いている。心なしか、殺風景な広い通路の隅々までが明るくなったようだ。

「きれいだ」

ユウは素直に、そう思った。

「そうだ、カジャディール大祭主様はどうされてる？ご迷惑をおかけしてないか？」

「問題ない」

「ん……そうか。もう一度、お会いしたいな。会って……」

今の心境を、ありのままに打ち明けたかった。

神殿に上がりたい、などと伝えたら、どんな顔をするだろう。
それはいいと喜んでくれるだろうか。もっと修行を積めと叱られるだろうか……。
「ジョー」
「……」
「いや、なんでもない」
どちらにしても、
「全部、終わってからだ」
最後までつき合うと決めたアレサンドロの旅は、ここからが本番と言っていい。
まだまだ目の前にあるこの太刀で、鉄機兵団の騎士を斬らなければならない。
それでもこの刃が曇らず、自分が本当に悔いのない戦いをしてきたと胸を張って報告できなければ、そもそも顔を出す資格さえないのだ。
「刃には、心が映る」
これまで、幾度となく反芻してきたその言葉。
自分は今、どんな顔をしている……？
ユウは、しばし食い入るように刃を見つめた。

「……ジョー、今度、空いてるときでいいんだ。剣の使い方を教えてくれないか？」
静かに、視線の動きのみでユウの挙動に眼を光らせていたジョーブレイカーが、わずかに首を動かした。
「あと、剣の、手入れの仕方も」
「……」
やはり、太刀がなにかを映してくれるほどに、自分の心は形を成してはいなかった。
ごめん、父さん。もう少し時間をください。
考えるのではなく、行動する時間を。

太刀を収めたユウを見るジョーブレイカーの目が、ふ、とまぶしげに細められた。

と、そのときだ。

「む……」

ひと声うなったジョーブレイカーが、壁から背を離し、右耳を押さえた。

「どうした?」

再び尋ねるも、ジョーブレイカーは手でそれを制し、なにかに聞き入っている。

……ああ。

それが無線通信であると気づくのに、大して時間はかからなかった。

おそらくマンムートか、それこそカジャディール大祭主からの連絡に違いない。

それにしても……。

今になってみるとよくわかる。ジョーブレイカーが左腕の手甲に仕込んだ機器は、スナイパー部隊の携帯していた帝国最新型のものをはるかに超える性能を持っている。サイズもひとまわり以上小さい。

当初は、あのセレンが見せて欲しいとせがむこともあったと聞いたが、なるほど。

どこで手に入れたのだろうと、ユウは、そこに興味が沸いた。

「……承知した」

「誰からだ?」

「マンムートだ。進路を変える」

「え……どうして」

「ギュンター・ヴァイゲルが動いた」

その連絡をさかのぼること数十分。とある無線が、マンムートのブリッジで傍受されている。

発信元はヴァイゲル軍紋章官、サリエリ。

西方およそ五十キロの地点からと推測されたが、誰に向けて打ち出されたものか定かではない。

だが、

『魔人を捕らえた』

旨の内容は、少なからず、アレサンドロやブリッジに詰める若者の心を動揺させた。

無論、これは罠であろう。

この場所、このタイミングで、暗号化もされずに飛び交う無線が罠でないはずがない。

ただ考慮すべきは、それが事実かどうかであった。

「五分五分だな」

ハサンは言った。

キャプテンシートはアレサンドロに譲り、自身は紋章官らしく、その脇を占めている。

「仮にジョーブレイカー君を出し、牢内に何者かの姿を確認できたとしよう。魔人と人間では外見的な差異が存在しない以上、捕らわれた相手がどちらであるかの判断は非常に難しい。つまり、自己申告がすべてだ。仕込まれた人間をつかまされる可能性も十分に考えられるが……さて、そのリスクを犯してでも行くか？」

「ああ、行くぜ」

アレサンドロは、ぎり、と爪を噛んだ。

今、その心を満たすのは、魔人に対する心配と不安。

それも、ただの魔人ではない。行き倒れの身を拾い上げ、自分を形作るすべてのきっかけを与えてくれた魔人ジャッカルへの想いが、大渦となって胸をかき乱していた。

ない話ではない。

ロストンで別れたジャッカルとヤマカガシは、のちにヴァイゲル

軍から尋問を受けている。
その際は、あくまで巻きこまれただけの一般人として解放されているが、魔人と知られたか、鎌をかけられている可能性もある。
「俺は行くぜ。あんたが止めてもな」
ハサンは、フフ、と笑った。
「止めはせん。それならばそれで結構。異議のある者は？」
誰も手を上げなかった。それどころか、アレサンドロとハサンを見る目は、どれもギラギラと照っていた。
「ンン、では決定だ」
おお、と、ブリッジに、小さなときの声が上がった。

「まずはどうすりゃいい」
「戦は第一に情報だ。セレン・ノーノとジョーブレイカー君に相手の懐を探ってもらう。更なる精査ののちに最終決定をおこない、二号車へ通達。進路の確保ができ次第、針路変更する」
「よし。セレン、分析に入ってくれ。嬢ちゃんはジョーに連絡。二号車にいるはずだ」
「り、了解です！」
操艦の監督に当たっていたセレンとメイがまず動き、その後、時を置かずして連絡を受けたジョーブレイカーがマンムートを離脱。日没の停車と共に、二号車への状況説明と、主要メンバーの招集がおこなわれた。

頭脳戦

「第一観測部隊から連絡が入りました。すべて予定通りです」
「おう、いつ来る」
「日中の可能性が高いと思われます。おそらく、明朝かと」
「チェッ、つまらねぇ。妙な頭を使うなってんだ」
言いながらギュンターは、肉汁したたる極厚のステーキにかぶりついた。
ここは、三方を雪と山とに囲まれた、すり鉢状の谷の底である。
一見すれば狭く、退路もなく、まったくそれにはふさわしくないように思えるが、ギュンター・ヴァイゲルの軍が戦いの場として選んだのは、事実そのような場所だった。
いくつかの簡易トーチカを仮設し、Ｌ・Ｊカーゴ、補給車、メンテナンス用クレーン車、そしてもちろん多数のＬ・Ｊが所狭しと立ち並ぶその中央に、ギュンターのいる大型指令装甲車がとめられている。
……いや。
よく見ればその装甲車の隣には、同型のものがもう一台並んでいることがわかるだろう。
それと同様に、各車両に掲げられた軍旗の色も、二色。
飾り立てられた車内で、現在は優雅な夕食の真っ最中であるギュンターの向かいに目をやれば、
「行儀が悪いぞ、ギュンター」
同じく帝国将軍、カール・クローゼ・ハイゼンベルグの姿もあった。
クローゼといえば、以前ユウと友情を育み、協力して、メーテル神殿ディアナ大祭主を救出した経緯があるが、無論その全容を知るものは少ない。
首謀者と思われる盗賊の首魁を死なせてしまったこと以外は大き

な叱責も受けず、こうして、その後も変わらず将軍としての職務にはげんでいるのである。
「まったく、それではサリエリにまで迷惑をかけるだろう」
「うるせぇな。お兄ちゃんに給仕してもらってる奴が言うことかよ、ええ？」
ふたりの背後で、カチャンと音が鳴った。
下げられた食器を重ねていた、ハイゼンベルグ軍紋章官アルバート・バレンタインが、皿を取り落としたのだ。
「ギュンター様」
「ああ、いいのだサリエリ。事実なのだから」
「いえ、そういうわけには……」
「いいのだ。いつものことだ」
眉間にしわを寄せつつも平静を保ち、苦笑まじりに淡々とナイフを動かすクローゼを、サリエリは感心したように眺めた。
「……では、説教はのちほど」
「う、えっ！」
耳元で下された宣告に、ギュンターは震え上がった。

「それはそうとサリエリ」
「は……？」
「先ほどの人物。魔人であることは間違いないのだろうか」
「それは、なんとも申せません。自らそう名乗るからには、その確率が極めて高い、としか」
「ふむ」
「しかし、鉄機兵団を前にしてのあの落ち着きよう、只者とも思えず……」
「ありゃ、ただのバカだぜ」
「かもしれません。どちらにせよ、レッドアンバーが食いついた。その一事のみでも及第点の働きでしょう」
「彼はどうなる？」

サリエリの銀縁眼鏡が、きらりと光った。
「いずれ、法にのっとった処分がなされます」
「ううむ、やはり、そうか……」
クローゼは、デザートとして出されたリンゴのタルトを、物憂げにフォークの先で転がした。
「なんだ。なにか問題でもあんのかよ」
「うむ……私はやはり、どうかと思う」
「あぁ？」
「人質を取るなど、騎士がすべきことではない」
「……チッ、そこかよ」
「騎士の戦いは、常に正々堂々とあるべきだろう。しかもその人質さえ、役目を終えれば用なしとばかりに切り捨てようという……」
「そんなだから、テメェはいつまでもなめられんだ、ボケ！」
「ギュンター様」
サリエリにたしなめられ、ギュンターは一時口を閉じた。
危ういところである。
ここでサリエリが入らなければ、今しも抗議の意を口にしかけたバレンタインによって、両者の間に取り返しのつかない事態が発生していたところだ。
……まったく、いつまでも手のかかる。
サリエリはひとつため息をはき、眼鏡を押し上げた。
「クローゼ様、人質を取ることには意味があるのです」
「なんだって？」
「ご存知の通り、先日、本件の事項に関しまして、陛下から命令のご変更がございました」
「うむ、彼らの命を奪ってはならぬとのことだな」
「無論、魔人の処分は避けられないところではありますが、人間に関しましては寛大なるご処置が下されるものと確信しております。しかしだからと申しまして、彼らが素直に投降に応じるとは考えにくく、多くの人命を救うためにも、このような手段を取るに至った

のです」
「う、む……なるほど」
「よって本作戦におきましては、ギュンター様にも、ララ・シュトラウスとの決闘をあきらめていただくようお願いするつもりでおりました」
「なに？冗談じゃねぇ！」
それができないのなら、なんのために北部くんだりまで追跡を続けてきたのか。
ギュンターは、ほおばったタルトを口から飛ばしながら叫んだが、もちろんサリエリはびくともしなかった。
「ララ・シュトラウスのことは、帝都に戻りました折に、直接陛下へ決闘のお許しを願い出られるとよろしいでしょう。私の剣にかけて、大闘技場を押さえさせていただきます」
「大闘技場？」
帝国最大の建造物であるそれは、数万の観衆を収容できる。
「……まぁ、悪か、ねぇな」
「では、そのように？」
「あいつが突っかかってこなけりゃな」
「結構です。それではこの場を借りまして、私とバレンタインが練り上げました作戦をご説明いたします」
バレンタインが胸元に広げた地図に向かい、サリエリは銀の指示棒を、サッと伸ばした。

さあ、それから数時間が経過した。
ほの白い夜明けの空を映すモニターを、アレサンドロ、ハサン、クジャク、セレン、メイが注視している。
ほんの十数分前からだろうか。多くは山影に隠れた鉄機兵団の動きが、どことなくせわしない。
こちらの存在を知られていることなど百も承知のマンムートブリ

ッジであるだけに、鉄機兵団のこの変化は戦の始まりを告げているのだと、誰もが感じ取った。
「うん？……見ろ、あいつらだ」
ギュンターの将軍機、火炎のミザール。同じくクローゼの、電雷のフェグダ。
さらには、サリエリの一〇〇二式改アルコルに、バレンタインの五〇五式改シュッツェンシルトが、まるでこちらを挑発するかのように、狭い谷の入口から現れる。
その中でも、アルコルの左腕が前方に突き出されているのは何故だろうか。
「おい、寄ってくれ」
「は、はい！」
シートから身を乗り出すアレサンドロの前で、アルコルに照準を合わせたカメラの倍率が、徐々に上げられていった。
「む？」
「こ、こいつは……！」
なんということだ。
アルコルの手に、人が握られている。
「もっとだ。顔が見てえ！」
マンムートのカメラは、さらに、その人物へと寄せられた。
距離があるため画像が荒く、なかなか焦点も定まらないが……、
「あ！」
「あれは……マンタか……！」
「間違いねえ、あの、馬鹿みてえな髭！」
アレサンドロとクジャクは、顔を見合わせた。
それにしてもなんともひどい言われようだが、百人見れば百人がそう思うほど、その猿ぐつわを噛まされた人物の口髭は珍妙だった。
太く左右に分かれたそれは天を突くほどにピンと立ち上がり、その長さたるや、先端が目尻の上にある。なかなか見られる髭ではない。

「ンッフフ、あれほど目立つチャームポイントがあれば、まさか人違いということもあるまい。……よし、作戦を変更するぞ！」

ハサンは地図の表示されたサイドモニター前に、アレサンドロとクジャクを呼びつけた。

『サリエリ様、ご報告いたします』

『なんだね』

『敵戦車、ご指示通り、姿を消しました』

『ふむ。……もう一台は？』

『同様におりません。振動を感知し現場に向かったところ、参考データにありましたバルーンを北方山壁に発見。地中潜行の痕跡を隠すためのものと思われます』

『了解だ。観測部隊には、引き続き十分に距離を取った上で観察を続けるよう通達を』

『は』

『特に、テリー・ロックウッドへの警戒は怠らぬように』

『了解いたしました』

数日前から、前線と本部の中継地として、各所にコマンドカーゴが出ている。

その内一台との通信を終えたサリエリは、それからもいくつか、関連部署へと通達を飛ばした。

画面に現れる機兵長たちは皆、特段焦ることもなく、命令を受け入れた。

『ケッ、全部予定通りってわけか』

『……今のところは。あとは、彼らが愚かでないことを祈るばかりです』

『あぁ？』

サリエリの目が、刻々と変化するメインモニター上の数値へ向いた。

『私は彼らに期待しているのです、ギュンター様。セレン・ノーノほどの才能があれば、あの巨大戦車で針の穴に糸を通すことができる。彼らの戦闘能力を持ってすれば、わずかな壊乱につけこみ、人質を取り返すことができる……』

賢く、才能のある人間ほど、その仕事振りは正確。誤差が少ないものなのだ。

しかしだからこそ読みやすく、つけ入る隙も生じやすいと言える。

サリエリの読みでは、地中にもぐったマンムートは大きく迂回し、すり鉢の中心、すなわち電信機器や指揮系統の集合する本陣を突き上げる格好で現れるはずであった。

その混乱に乗じて人質を奪い、逃走する、というわけだ。

では、それに対するサリエリの策はどうか。

サリエリは軍を大きくふた手に分け、一方を地上に、一方を、すり鉢を構成する周囲の山頂へひそませた。

そして、マンムートが顔をのぞかせた瞬間、人為的に起こした雪崩によって、すべてを埋めてしまおうと考えているのである。

キャタピラ走行で、なおかつ重心のやや高いマンムートは、なるほど縦の突破力はすさまじいが、横からの大圧力には抗うすべを持たない。それを見越した上での作戦なのである。

しかも、頼みの綱であるはずのその突破力も、二号車という自走能力を持たない荷車を引くことで半減、いやそれ以下に低下している可能性が高い。

今やサリエリの不安は、上手く第一波を側面に当てられるかどうか、一撃で転覆まで持っていけるか、というところにのみあった。

第二の囮ともいえる本陣がすでにもぬけの殻であることは、今更言うまでもない。

『サリエリ、くれぐれも慎重にな』

『了解いたしております。では、クローゼ様もギュンター様も、少々お下がりください。……来たようです』

アルコルのメインモニターに表示された振動計の数値が、にわか

に上昇した。
『各機兵長へ告ぐ。雪面爆破のタイミングはこちらで指示する。一言一句聞きもらさず、遅れず、早まらず、最良の結果を残すように』
『……アントン、了解』
『ベルタ、了解』
ケーザル、ドーラ、エミール……と、全九部隊の長が、それぞれ感情を押し殺した声で応じた。

……長い、数秒。
胸打つ鼓動と、コクピットまで響く、かすかな振動。
計画成就のためには、姿が見えてから雪崩を起こしたのでは遅い。
眼を細め、食い入るようにモニターを見つめるサリエリの目の前で、震度計の値が、想定値に迫る勢いで跳ね上がった。
来た！
『アントン、ベルタ、ケーザル、爆破！』
『爆破、了解』
局地的に噴き上がった爆炎と共に、ごっそりと浮いた山の頂三ヶ所の雪が、猛烈な雪崩となって下へ下へと駆け下っていく。
それがグラウンドラインへ到達するや否や、第二波、第三波が押し寄せる。
『うおおおッ！すげぇ！』
行き場を失い、狭い開口部をこじ開けるように轟々と吹き出してくる大量の雪波に、ギュンターは思わずコクピットにいることも忘れ、防御姿勢を取ってしまった。
周囲に立ちこめた雪煙が晴れ、取り囲む全Ｌ・Ｊのモニターカメラが機能を回復するのには、さらに三十秒ほどの時間がかかった。
『おい、どうだ。やったか！』
『お待ちください、すぐに確認いたします。バレンタイン、君はＬ・Ｊの陣形を』
『わかっている』

『そこの、そうだ一一〇式の君。この魔人を連れ、私のあとをついてきてくれ』

『了解であります！』

サリエリは、壮年の騎士が乗るＬ・Ｊに、なにやら興奮気味な魔人を託し、すぐさまフットペダルを踏んだ。

先ほどからアルコルには、画像音声入り混じり、山頂、地上の両班から絶え間なく報告が入ってきている。

だが今はそれどころではない。Ｌ・Ｊに乗っている限りは、たとえ雪崩に呑まれようと深刻な被害が出ようはずもないのだ。

……だからこそ、急がねば。

機械の身体は向こうも同じ。

頼む、倒れていてくれよ。

サリエリは拝む気持ちで、雪山と化したすり鉢の底へと、アルコルを走らせた。

『……む？』

『どうされました？』

『いや……』

サリエリはその雪山に、違和感を覚えた。

データ上では、マンムートの全長はおよそ百メートル。体積もそれに見合った分だけあるはずだ。

しかし、それが埋まっているにしては……。

『サリエリ様！』

『！』

沈思黙考中であったサリエリは、突如思考に割りこんできた伝令官の声に、ハッと息を呑んだ。

『なんだね』

モニターに映し出されているのは、観測部隊との連絡役を担っていた、あの青年伝令官である。

それも、ひどく取り乱した様子で、

『う、うしろ！敵戦車が向かってきます！バルーンの奥から！』
『なに！』
『コマンドカーゴ、離脱します！……急げ！急げ！』
その後はモニターも立ち消え、雑音のみが残った。
『待ちたまえ、どういうことだ！では、あの振動は一体！』
通信網はまだ乱れている。
と……そのときだ。
アルコルと、隣の一一〇式Ｌ・Ｊの足元から、天へ向けて、なにかが走った。
風？
サリエリが思う間もなく、両機の腕が切断されて空を飛んでいる。
その指の中で笑う、猿ぐつわの魔人の顔。
そういうことか！
サリエリは、すべてを悟った。

行くと決めたなら

種明かしをすると、こうだ。

ハサンが作戦の変更を伝えたのち、マンムートは確かに、山へもぐった。

しかし、二号車まで完全に中へ収まったところで停車し、バルーンを展開したまま息をひそめたのだ。

と同時に、スピナーを持つサンセット?を先頭として、N・Sカラス、クジャクの三体が、地中から敵陣深くまで進軍する。

その振動と出現に惑わされ、敵の罠が発動したところで、マンムートが元の穴から姿を現した……と、こういうことであった。

先行した三機は雪崩を避けられようもなかったが、体勢を崩されたのは束の間。先ほどサリエリが風と誤認したのは、雪の中放たれた、クジャクの念動チャクラムだったのである。

先に陣を張りながら、わざわざ不利な地形を選ぶ不自然さ。守るべき将軍を本部から出させる、奇妙で見え透いた挑発。

「実践不足だ。策に溺れたな、小僧」

猛然と突き進むマンムートのブリッジで、ハサンはにやりと笑った。

「前方、N・Sクジャク、カラス、サンセット?の離脱を確認しました!」

「ジョーからは!」

「連絡なしです!」

「よし、予定通りだ。このまま突っこめ!」

「全速前進、了解」

常に低体温と言えるセレンの、とてもそうは見えない力強い操艦によって、鋼鉄の巨大戦車がさらに速度を増す。

L・Jを追い散らし、コマンドカーゴを弾き飛ばし。マンムートが向かうのは雪山の中心、それでも多くのL・Jが集まっている、

かつての鉄機兵団本陣だ。
その勢いたるや、まるで戦艦の大口径砲弾。
『全軍撤退！退避だ！』
クローゼが声を張り上げた。
……そんな中。
サリエリのアルコルは、目と鼻の距離まで近づいたマンムートを前に、なすすべもなく座りこんでいる。
クジャクのチャクラムはその腕のみならず、その後、右足をも奪っていたのである。
『先にお逃げください、ギュンター様！』
『なに格好つけてやがる、このボケ！……うっ、わ！』
ギュンターの乗るミザールの横を、轟音けたたましくマンムートが通過した。
『サリエリ！』
……まったく、なんという体たらくだ。
作戦に予想外はつきもの。こうなるのならば、自機を空中戦対応機から選んでおくのだった。
そんな紋章官らしからぬ発想が頭をよぎり、サリエリは苦笑した。
だが、サリエリは生きることをあきらめたわけではない。まだ手はある。
迫り来るマンムートの腹の下へもぐり、やりすごすのだ。
どうにか、あと二十メートル。いや、十五メートル向こうへ行けば、キャタピラを回避できる。
間に合え。
サリエリはひどく緩慢にも見える動作で、しかし教本に乗るほど正確に、アルコルに残された四肢を操っていった。
『サリエリ！』
『……バレンタイン？なにをしている、クローゼ様の元へ戻らないか！』

『いいから来い！』
『馬鹿な！』
アルコルのそばへ降り立ったバレンタインのシュッツェンシルトが、細身のアルコルを軽々とかかえ上げた。
そうして二機が飛び立った、直後。
あわや、その足の下をマンムートの双角がかすめ、
『うっ！』
上部装甲版の一部に、シュッツェンシルトの足が接触した。
きりもみしながら跳ね飛ばされる二機。
しかし、機動力重視の一〇〇〇系と違い、頑丈さに定評のある五〇〇系シュッツェンシルトだ。すぐに体勢を立て直し、アルコルと共に岩壁へ取りつく。
マンムートはそのまま山の斜面へと突入し、魔獣の襲来とも思える被害と余韻を残して、姿を消した。
『……君の言う通りだったな、バレンタイン。相手の出方に依存する策など、策として不適当だ』
『いや……。今回はどうも、相手が悪すぎたような気がしてならない』
『彼らも紋章官を得たな』
『ああ』
『だが……真に賢い相手か？』
サリエリがメインモニター越しに見上げる空には、青を背景に、N・Sカラス、クジャク、サンセット？が浮かんでいた……。

『クジャクは、その人を連れて先に行ってくれ』
ユウは言った。
その人とは、斬り飛ばされた一〇〇系L・Jの左腕ごと、クジャクの腕に納まった魔人、マンタのことである。
どうもその魔人はカラスから発せられた声が男のものであること

に驚いたらしく、立派な髭をもぐもぐとさせている。
『俺たちは、もう少し足止めをしていく』
『……わかった。無理はするな』
『ああ』
『まっかせて！』
クジャクは美麗な尾羽を振り、念動チャクラムを引き連れて、マンムートとの連絡場所へと飛び去っていった。
『ケッ、なァにが、まっかせて！だ。そいつぁつまり、この俺をぶっ殺していくってこった。わかってんだろうな』
『ギュンター様』
シュッツェンシルトに抱きかかえられたアルコルから、サリエリが一応の制止に入った。
だが、アルコルは誰の目から見ても戦闘の継続困難であり、
『死にぞこないは黙ってろ』
ギュンターは、いつもの仕返しとばかりに、その言葉を一蹴する。
ただ、口では悪態をつきながらもギュンターはサリエリの無事を喜んでいるようであったし、サリエリも、この状況を冷静に理解できていたがゆえに、ここは、潔く引き下がった。
そもそも、ララが現れた際には戦闘もやむなし。そう暗黙のうちに了承したのは、サリエリ自身なのである。
『で、どうすんだ？やんのか、やらねぇのか！』
『そ、それはもちろん……』
問われたサンセット？は、カラスを見た。
眼下に居並んだ四機の将軍機・紋章官機。
カラスはミザールを、そして、フェグダを見ていた。
『……ララ』
『な、なに？』
『あいつ、まかせてもいいか？』
『も、もっちろん！あんなの一発だっての』
ララは、ユウの言葉や態度に『らしくなさ』を感じながらも、コ

クピットの中で胸を張ってみせた。
猪突猛進が売りのララだが、そこはやはり、勝手な真似をして嫌われたくない恋心が、戦闘意欲にある程度の歯止めをかけるようになってきている。
それが許された、いや、頼られたとなれば、もう天にも昇る気持ちという奴だ。
『まっかせて！もう笑えるぐらいボッコボコにしてやるから』
ララは、ときめきと興奮とで鼻息を荒くした。
もちろん、自分の強みを全面的に強化したサンセット？ならばできる、その自信は十二分にあった。
さて……。
そうなると、ユウの相手はおのずと決まったようなものだが、
『カール・クローゼ・ハイゼンベルグ。あなたは彼と戦えますか』
突如投げかけられたモチの声に、ユウはどきりとした。
なんとなればその言葉は、ユウの煮え切らない心の内を、的確に言い当てていたのである。
そうだ。
戦えるのか、クローゼと。
背中を押してくれた、友人と。
『……ああ。それが、約束だから』
ユウは、迷いを振り切るように、それだけ答えた。
背を向けて逃げることもできたが、友だからこそ、卑怯者と罵られたくはなかった。
戦場にあっては正々堂々、剣を交えると誓い合ったのだ。
『……わかりました。彼もまた同じ心であることを祈りましょう。ララ、絶対に無理はしないように』
『わかってるって。生きて帰ること、でしょ？』
ララは一切の躊躇なくフットペダルを踏みこむと、百メートルほど空を走り、そのまま滑るように着地した。
モチは、ホウ、と小さくため息をはき、

『行きましょう』
フェグダの元へと向かった。
当然ユウが来るものと信じ、待っているクローゼの元へ。

『閣下』
『うむ。アルバートは、サリエリと軍をまとめてくれ。準備ができ次第、戦車の追跡をおこなうように』
『しかし……！』
『心配ない。ここは私が食い止める。サリエリもそれで構わないな？』
『は……ギュンター様を、お願いいたします』
『ハハ、私の方が助けを求めることになるかもしれない。……さあ、行ってくれ』
『ご武運を』
アルコルをかついだシュッツェンシルトが、カラスと入れ違いに飛んでいく。
そうして一対一で対峙したカラスとフェグダ、いや、ユウとクローゼは、しばし数十メートルを隔て、無言で見つめ合った。
ユウにとってそれは敵ではなく、やはり、友だった。
『久しぶりだな、ユウ』
『……ああ』
『まさか、こんなにも早く、君と戦う日が来るとは思わなかった』
言うクローゼの声が、心なしか弾んでいる。
『……どうして』
『うん？』
『どうして、そんな風に笑えるんだ。俺はまだ、準備ができてない。本当は……』
戦いたくなどないのだ。
騎士の世界のことなど知らない。男の面子などくそくらえだ。

とにかく、自分はクローゼとは戦えない。今こそ、それがわかった。

『戦いたくない……！』

『ユウ……』

フェグダの外部スピーカーから、クローゼの、嬉しげでありながら、なんとも言えない困惑を含んだ声が返ってきた。

『それでも私は、君と戦う』

『クローゼ！』

『いや、君がなんと言おうと、私が君を捕らえる。そうすれば、陛下の下されるご処分に、いくらかなりと物申すことができるはずだ。君の仇討ちにも、あるいは直接協力できるかもしれない』

『……ッ』

『だが、それでもまだ、君の心がＮ・Ｓを捨てられないと言うのなら……抗ってくれ。私を斬り伏せて、先へ行ってくれ！』

驚くユウの目の前で、人馬一体のフェグダが、雄々しく後脚で立ち上がった。

その神々しさ。思わず胸が熱くなる。

『私は引かない。君も引くな！』

『クローゼ……！』

ユウはついに、太刀を抜いた。

クローゼの言う通りだ。これでもまだ逃げたいなどと思うなら、自分は心底腐り果てた、最低の卑怯者だ。

『行くぞ、ユウ！いざ尋常に、勝負！』

『ああ！』

共に間合いを詰めたカラスとフェグダが真っ向から激突し、白い雷が、天空高く立ち上がる。

それは、すでに遠い空にあるクジャクの目にも、まばゆい光となって映りこんだ。

赤い大地と金色の炎（1）

二合、三合と鋼がかち合うたびに、火花が散る。
『ハ、ハハッ、ハ、ハ、ハ、ハ！』
と、ギュンターの高笑いが響く戦場は、地上も空もすべてのＬ・Ｊに対して規制線が敷かれ、あたかもこの地には、ミザールとサンセット?、二機しか存在していないかのようであった。
『こうだ！こうでなくちゃいけねぇ！いいＬ・Ｊになったじゃねぇか、ええ?』
ミザールが双鞭を振りまわすと、
『別にあんたのためじゃないっての！』
『だったら、あの鳥野郎かよ！安心しろ、あとであの野郎も丸焼きにして、同じところに送ってやるよ！』
『アッハハハッ！』
今度は、ララが笑い出した。
『バカは、あたしをヤってから言えっての！』

以前、刃を交えた際は、サンセットが先代機であったこともそうだが、将軍マリア・レオーネからの連戦で一部破損をしていた。
だが、今は違う。
今はサンセットも完調。しかも二号機。調整も完璧。
おまけに、気力も充実ときている。
負ける気がしない。
『あんたには、百年かかっても無理だろうけど、ね！』
高機動にものを言わせて一足飛びに踏みこんだサンセット?は、轟々とうなるスピナーを、至近距離から突き出した。
『ハッハァ！』
実はこの戦いに先駆けて、ギュンターはひとつ、不安をいだいていたことがある。

それは、自分と同じく本能に獣を住まわせるララが、外の生活の中で牙を折られてしまったのではないかということだ。

くだらないヒューマニズムほど伝染する。つまらない馴れ合いほど腕を鈍らせる。

『いらねぇ心配だったな！えげつねぇ！』

容赦なく顔面をえぐりにかかるスピナーの先端から逃れながら、ギュンターは身震いする思いがした。

『これなら、散々お預け食らった甲斐もあったぜ』

『え？なに？』

『今日こそテメェをぶっ殺せるってこった！』

『きゃっ！』

モニターの死角、シールドの裏側から蹴りつけられ、サンセット？の巨体が数歩後ずさった。

走った影にハッと顔を上げると、しなる二条の鞭が頭上に迫っている。

考えるより先に、ララはフットペダルを操り、サンセット？を後退させていた。

ミザールの鞭は金属製でありながら、柔軟性にも伸縮性にも、操作性にも優れている。一時は直線的に見える攻撃でも、操縦桿のひと引きでたちどころに進行ベクトルを変え、あらゆる角度から敵へ襲いかかることができると知っているのである。

案の定、鞭の先は雪面を叩く直前に向きを変え、サンセット？のいた場所に、まるで槍のように突き刺さった。

『チィッ』

『しっかりしなよ、ギュンター！』

『うッせぇ！』

再び振るわれた鞭はシールドに弾かれ、激しい火花を生んだ。

『あんたなに、今日は燃料積み忘れてきたわけ？』

『あぁ？うるせぇな。こいつで一発引っぱたいてやらにゃ収まらね

ぇんだよ！』
『あ、じゃあ、一発殴らせてあげよっか』
『な、めんじゃねぇぇッ！』
ついに、ミザールの肩口にそびえ立つ、二門の火炎放射砲が火を噴いた。
その、ギュンターの憤まんを映したかのような炎。零下の環境下でも衰えることのないその豪炎の奔流は、渦を巻き、雪さえも焦がしてサンセット？へ迫る。
無論、なんの工夫もせずに放った直線的な炎など、ララの前では屁のつっぱりにもならないだろうことはギュンター自身よくわかっていた。
これは威嚇だった。
……のだが。
『あ？』
何故だろう。
サンセット？はシールドを構え、なすすべもなくといった様子で炎に呑みこまれてしまったのである。
空を飛ぶこともできたはず。ほんの少しフットペダルを踏むだけで、左右に回避もできたはずのサンセット？が、何故。
もしこれがシミュレーション訓練であったならば、
『あ、悪ぃ』
とでも言ってやればいいが、
『どっか、傷めてやがったのか……？』
かえって、ギュンターの方が愕然としてしまった。
目の前にいたサンセット？の姿は、すでにどこにもない……。
『……いや、んなわけあるかよ、シュトラウス！』
ギュンターは、もうもうと立ちこめる水蒸気の向こうへ声を張り上げた。
『テメェが、こんなんでどうにかなる玉か！』
叫ぶ声を乗せ、風が泣く。

『ハァン、さてはその赤いの、こんなんでどうにかなっちまうわけじゃねぇな？そこで隠れてやがる、ええ、そうだろ！』

やはり、返事はなかった。

『畜生、マジかよ……』

ギュンターは、ミザールを走らせた。

そもそもが強度のあるＬ・Ｊは、ミザールの火炎をもってしても完全に融解するわけではない。関節部の配線や計器類が熱によって機能を失い、それによって戦闘不能となるのである。

しかし、これはあくまでも運が悪ければの話だが、コクピットで蒸し焼き、という事例もないではなかった。

『……冗談じゃねぇ』

十五年前のジャンクならばいざ知らず、最新型だ。

それも、将軍機と戦うために生まれたオリジナル。

『冗談じゃねぇぞ、シュトラウス！』

雪が蒸発し、土がむき出しになった地面を駆けるギュンターの目に、赤いものが飛びこんできた。

『こいつは……シールドか？』

取り上げてみると、さすが、修理も必要ないほど形状を保っている。

この分ならば本体にも損傷は少ないだろうと胸をなでおろしたが、その、肝心の本体はどこだ。

『どこだと思う？』

『！』

『正解は、こ、こ！』

『チィッ！』

ギュンターはとっさに、ミザールを退かせた。

足元を揺らす不気味な振動を感じたことは確かだが、それ以上に勘が働いたのだ。

ここにいては危ない。
その勘は、正しかった。
つい数瞬前まで足元にあった地面が、破裂したように爆ぜ飛んだ。
『あちゃ、失敗！』
『テメェ……シュトラウス！』
なんと、サンセット?は土中に隠れひそんでいたのである。
失敗とはつまり、ミザールがあのまま動かずにいれば、今この時点でスピナーの餌食となっていた、ということなのである。
実際、スピナーの穂先はミザールの胸部装甲板をかすめ、すべてのL・J乗りが恐怖を感じる、集音マイク越しではない、低く近い金属音を立てつつ空へ走った。
『声なんかかけるんじゃなかったぁ』
勢いで二十メートルも飛び上がったサンセット?は、青い空を背に笑った。

『テ、メェ……』
『なに、勝てる気なくなっちゃった?』
『んなわけあるか！要するに……そいつが、そのオリジナルの力ってわけだろ』
『はァ?』
『とぼけてんじゃねぇ。大方、『大地の』なんてふたつ名をつけてんだろうよ。そいつが将軍機候補だってんならなぁ！』
『ぷ』
ララは吹き出した。
『なにそれ、『大地のサンセット』？ダッサ！』
言われてみれば他の将軍機同様、このサンセットにもなにかしらのコンセプトがあるのだろう。
しかしララは、いまだかつて一度も、それを気にしたことはなかった。
?への改造にしても、自分のリクエストをかなえてもらった、と

いうだけ。炎に呑まれたふりをして地中にもぐろうと考えたのも、現にマンムートからここまで来れたのだからできるだろう、という思いつきだ。

やってみたらできた。万歳。

戦いなどというものは、それでいいのだ。

『あんたもそうでしょ？』

『う……』

ギュンターは、とっさに返答できなかった。

『あ、そっか。あんたはそういうことないもんね』

『あ、あぁ？』

『ギュンター様、こちらがミザールでございます。スペックはこれこれ、装備はこれこれ。相手のデータだって全部わかってる』

『……チッ』

『でもあたしは、今までずっと、自分の乗りたいＬ・Ｊになんて乗れなかった。スペックも武器も、まともに動くかどうかもわからないようなのに乗せられてさ、わけわからない、性能差がバカみたいにある相手と、毎日毎日』

『？』

『だからもう、それに慣れちゃった。考えたって意味ないし、それくらいなら自由にやって、とりあえず勝てればいいじゃない？』

『おい、さっきから、なに言ってやがる』

『……さぁね』

ララは、意味深な含み笑いをした。

『とにかく、この子がなにかなんてどうでもいいじゃない。ただ……』

空のサンセット？が、スラスターの炎を微妙に調節した。

『ただ、地面にもぐれるってだけでさ！』

この次の一手を、ギュンターはすでに察していた。

『さ、せ、るかぁぁッ！』

と、勢いバーニアを吹かし、身をひるがえしたサンセット?が猛禽のように地面へ突き立とうとするところへ、渾身のタックルを食らわせる。

『うっぷ!』

思いもよらぬ一撃を受けたサンセット?は、突入をはかった地面の上を大いに転がった。

『ハッ、ざまぁみろ!』

『うぅ、信じらんない。こういうときは、わかってても必殺技を受けるのが悪役ってもんじゃないの?』

『なにが悪役だよ。この国じゃあ、テメェらこそだろうが』

『犬!国家権力の犬!』

『おお、吠えろ吠えろ、負け犬が!』

『アッタマきたぁ!』

ララはサンセット?を立たせると、スピナーと、ミザールが恩情とばかりに放ってよこしたシールドとを構え、闘牛のごとく足を踏み鳴らした。

『いつまでもテメェの天下だと思うなよ、シュトラウス』

そう言い放ったギュンターは、両手の鞭をしごき、操縦桿に用意されたスイッチのひとつを操作した。

すると、握りを持つミザールの手のひら辺りから、ぽ、と小さな炎が立ったようだ。

みるみる勢いを増した炎は螺旋を描くように走り、次の瞬間には、鞭の表面を覆いつくしている。

燃える身体をうねらせて人を食らうという、物語に聞いた火蛇。

ララはふと、そんなものを思い出した。

『さぁ、前座はここまでだぜ、なぁ?』

『……フン』

『死ぬのはテメェか俺……いや、やっぱテメェだ!』

『上ッ等!』

赤い大地と金色の炎（2）

サンセット？とミザール。互いがこれを、最後の激突だと感じた。
これで決着をつける。きっと、つける。
『ぶっ殺してやる！』
『あんたをね！』
先手を取ったのはララだった。
くり出すのは、得意の突貫戦法。相手が鞭を振り下ろすより先にその懐へ飛びこみ、頭を穿つ。
ただし、
『阿呆が！』
目指すその場所は、火炎放射砲二門の間だ。
照準もそこそこに吐き出された炎が、何千匹ものうねくる火蛇となって、サンセット？へ押しかぶさってきた。
『フン！』
これは別に、一か八かの、捨て身の攻撃ではない。
先ほども言ったが、火炎放射砲は頭部を挟むように突き出ている。逆に言えば、炎の噴出方向には必ず、頭部があるということだ。
そこさえ押さえれば、あとはガードを固め突き進めばよし。シールドを持つサンセット？ならば、たかだか数十メートル炎にさらされたところで問題はない。
ララは、カメラや装甲に絡みついてくる白炎にもひるむことなく、ここぞというところで操縦桿を押しこんだ。
『ッ……外れた？』
『ったりめぇだ、ボケ！』
『あっ！』
突如炎が切れ、スピナーの下へもぐりこむように回避したミザールの姿が、モニターへ映りこんできた。
『ボケ！』

再び言い捨てたミザールは、スピナーごとサンセット?の腕を取り、一本背負いに投げ倒す。
サンセット?は、突進の勢いもあいまって軽々と宙を舞い、背部バックパックから地面に叩きつけられてしまった。
『くぅぅ、な、に、さ!』
こんなことでへこたれてなるものか。
並のL・J乗りならば、しまった、と、ひと呼吸手を止めるところだろうが、反射さながら、脳が命令を出すか出さずかという刹那で行動できるのがララの強みだ。
その証拠に、サンセット?のスラスターが火を噴いたのは、地面に接するや否やというタイミングだった。
その噴射圧に地面がえぐれ、取られた腕を軸に身をひねったサンセット?は、間髪入れず、ミザールの腰部へ組みついていった。
もちろんこれを、ミザールがかわせるはずもない。
『く、そッ!』
『フン、バッカ!』
『るせぇ!』
二機は、もつれ合うようにして倒れた。

さあ、こうなると、どちらにも利はない。
ミザールは鞭を容易には振れず、長物であるサンセット?のスピナーも突くことができない。
組み合った体勢では、火炎放射の効果もどれほどのものか。
『ケッ、泥仕合かよ。冗談じゃねぇ!』
ギュンターは思うように運ばないこの状況に歯噛みしつつも、どこか楽しげに、操縦桿を動かした。
そうして、地面を転がりまわる二機の間でめまぐるしく上下が入れ替わり、サンセット?が上位を獲得したところで、
『うおらぁ!』
『え、わ、わ!』

片足を両機の隙間に突き入れたミザールによって、気合一発、言ってみれば巴投げの格好で、サンセット?は跳ね飛ばされたのである。

『なにさ、このくらい』

と、ララはスラスターを操り、まったく危なげなく着地したが……そのときだ。

金属同士をはたき合わせるような音がしたかと思うと、サンセット?の首には、ミザールの炎の鞭が絡みついていた。

『……くっ!』

油断ではない。死角と、着地際というタイミングの妙を突かれた。

ララはスピナーをもって鞭を叩き切ろうとしたが、それより早く、もう一条の鞭が右手首を襲う。

スピナーは高く宙を舞い、遠く背後に落ちる振動のみが、コクピットへ届いた。

『ク……クク……ハ、ハ、ハ、ハ、ハ!』

ギュンターは狂喜した。

『ハ、ハハ、ハ、ハ!おい、見たかよ。俺が勝ったんだ、俺が!』

おそらくこれは、誰が見てもそう感じたことだろう。

燃えさかる鞭に絡め取られたサンセット?の頭部は、ビシン、バシンと、頚部を中心に回路を弾けさせ、溶けた被覆から発生した異臭が、周囲に流れ始めている。

なにより、デュアルアイの光が消えた。これは決定的だった。

L・Jの胸部や背部にはサブカメラが搭載されているが、あくまで補助的なものに過ぎず。一度こうなっては戦闘の続行は不可能。

それが、L・J乗りの常識だった。

……しかし。

『……あぁ?』

ゆっくりと持ち上がったその右腕が、わずかに空をさまよいなが

らも鞭をつかむのを見て、ギュンターの喜色は一変、渋面へと変わった。

『どういうつもりだよ』

『……どうって？』

答えるサンセット？の音声には、ノイズも混じっている。

『まだやる気かって聞いてんだ！』

『他にどう見えるわけ？バカギュンター』

『テメ……う、あ！』

ギュンターは、思わず声を裏返してしまうほど驚いた。

何故ならば、サンセット？のたかが腕一本に引かれ、しっかりと地面を踏みしめていたはずのミザールが前のめりによろめいてしまったのである。

『チ、ク、ショウ！』

と、そこはさすがのギュンター、どうにかこらえたが、いつの間にやら目の前に、シールドを押し出したサンセット？が迫っている。

『う、おおおぉぉッ！』

焦りにまかせて振るわれた鞭が、バシン、音を立てて弾き飛ばしたのはシールドのみで、サンセット？はもういない。

『は、ぁッ……！』

右脇をすり抜け、背後にまわっている。

目では追えたものの反応の遅れたミザールの背中から、鎖骨にシートベルトが食いこむほどの、強烈な衝撃が打ち当たり、コクピット内部が赤色灯に染められた。

……光炉破損。全機能、強制停止します。

茫然とするギュンターの目の前で、モニターというモニター、照明という照明が消え落ちた。

『……ふぅ』

密着したサンセット?が離れると、ミザールはモーター音を響かせながら片ひざを地に下ろし、活動を止めた。

光炉の損傷などでエネルギーを得られなくなった場合、Ｌ・Ｊは一切の操作を受けつけなくなると同時に、この体勢を取るようプログラミングされているのだ。

さらにミザールの場合、暴発を防ぐために燃料タンクのバルブも閉められるのだろう。鞭の炎も消えていた。

『いい気味』

ララは歪んだモニター画像に閉口しながらも、操縦桿を操り、シールドとスピナーを拾いに向かった。

さて……。

そのサンセット?の手には、刃渡り三メートルほどの、Ｌ・Ｊと比較すれば大きいとは言いがたい片刃のナイフが握られている。

実はこれがミザールの光炉を刺し貫いた武器であり、サンセットが『?』になって初めて搭載されたサブウェポン、高周波ナイフであった。

試作品であるために、セレンに言わせればまだ改良の余地あり、ということだが、目にも止まらぬ速さで振動し、通常のナイフ以上の切れ味を持つ、と、それだけの観点から見れば、間違いなく合格点。

『さっすがセレン』

ララは拾い上げたシールドの裏にそれを戻した。ここに鞘が仕込まれているのである。

「シュトラウス!」

『ん?』

見ると、手動でハッチをこじ開けたらしいギュンターが、地上で飛び跳ね、猛り狂っている。

こりない奴、と、ララはわざと聞こえるように、ため息をはいて

やった。
『悪いけど、あたし、あんたと殴り合いするほどヒマじゃないんだよね』
「うるせぇ！だったら、とどめを刺していけよ！」
『はァ？』
「妙な情けをかけやがって。今のやり口なら、コクピットを潰せたじゃねぇか！」
『……ふぅん』
そういえばそうだったかもしれない、ララは他人ごとのようにそう思った。
確かに、普段の戦いで頭部を狙うのは、単に優位を見せつけたいというだけで、コクピットへの攻撃が卑怯だなどと感じているわけではない。
むしろ、戦場に出たからには死ぬのも死なせるのも覚悟の上。どうなっても文句を言うなとさえ思っている。
でありながら、最後のひと突きを外した理由……。
『うぅん……なんとなく』
「あぁ？」
『だってそうなんだもん』
これもまた、自分の本能がそうさせたとしか言いようがないのだ。だが、意識はともかく、その本能自体が大きく変わりつつあることに、当のララ自身が気づいているだろうか。
ギュンターの不安ではないが、ララは、Ｌ・Ｊでの戦いの他にも楽しめるものが見つかった。
寝ても楽しい。食事をしても楽しい。他愛ないおしゃべりも、不慣れな洗濯も、苦手な料理もすべて楽しい。
「明日はなにをしよう」
「今日の晩御飯なにかな」
そんな普通の毎日が、今はとても楽しい。
そして、日々が充実している人間というものは、自然と行動に丸

みが生まれてくる。
『あんたなんかしつっこいし、相手にするのも面倒なんだけど、まぁ、それでもいないと物足りなくなっちゃうしね。だからじゃない？』
「あ、あぁあ？」
『……言っとくけど、照れ隠しとか、そんなんじゃないからね』
「た、たりめぇだ！気味悪ぃこと言うな！」
『アッハハ！じゃ、まったね、ギュンター！』
「あ、ま、待ちやがれ！待て！」

……これが、牙を折られた、と言うのならばそうなのだろう。
ララはただ、恋をしただけなのだ。

閃燦震鳴

その、サンセット?とミザールの対決が、まだ決着を迎えずにいた頃。

もう一方の戦いも、勝負の行方が見えぬままに激しさのみを増していた。

N・Sカラスが、断てぬものなしを自負する太刀を振るえば、『電雷』のふたつ名を持つフェグダの防御網がそれを阻む。

逆に、電撃槍から放たれた雷は、カラスの機動力の前に決定的なダメージを与えきれない。

ユウとクローゼは互いに遠慮をしていたわけではないが、戦いは、長期戦の様相を呈していた。

『やるな、ユウ!』

電撃槍を払ったフェグダのまわりに、幾本もの光が立った。

『これは私も、なまじの覚悟ではいけないな』

『覚悟……?』

『たとえ、このフェグダの寿命を縮めても、君を止める!』

……このときユウが受けた感覚を、言葉で表現するのは難しい。

だが、そう、たとえて言うならば、シルクのハンカチで全身の産毛をなでられたような、そんな心地いいとはとても言いがたい空気の流れを肌に感じた。

『ユウ、あれは?』

と、ここまでふたりの感情をおもんぱかり、戦闘の一切をユウに託していたモチが聞く。

フェグダの一本角が、白く輝いているのだ。

『あれは確か、フィールドを作るとか……』

『ホウ?』

『空を飛ぶための装置だったはずだ』

『では空中戦を？』
ユウにはわからなかった。
『とにかく、油断は禁物です』
『行くぞ！』
自らを鼓舞するように叫んだクローゼの声に呼応し、電撃槍の先端から、白い稲光がほとばしった。

すると、どうだろう。
直線軌道か、もしくは金属に対して進むはずの電光が、パッ、と枝分かれしたかと思うと、次の瞬間にはカラスを取り巻く全方向から、矢のごとく降り注いできたのである。
それはまるで、ガラスの欠片を散らしたところに幾筋もの光を放ったかのようで、いかにカラスとて避けられるものではなかった。
『ム！』
『ぐ……うッ！』
全身に突き刺さる電光は、半分は金属、半分は有機体であるＮ・Ｓの装甲を打ち、一瞬のうちに、その奥深くまで激痛を浸透させる。
特にカラスの太刀は多くの雷を集め、ユウが持っていられなくなるほどの、焼けつくような、強烈な痛みを、両の手のひらに与えた。
そして、おそらくは数秒の照射であったのだろうが、
『ぁ……う……』
カラスは太刀を取り落とし、シュウシュウと水蒸気様の白煙を上げながら、受身も取れずに崩れ落ちた。
『……う』
これが、電雷のフェグダか。
痺れが、身体の隅々まで広がっていく。指先さえも動かせない。
この、思う通りにならない身体への、どうしようもない無力感と苛立ち。
それを感じているのは、自分なのか、モチなのか。
『モチ……』

なんとか答えようとするモチの、小さく短い呼吸音だけが聞こえた。

『ユウ』

『ク、ローゼ……』

すぐ目の先に、パールピンクをした、馬のひづめが現れる。

しかし、それ以上は顔が上がらず、ユウはされるがまま、ひざを折ったフェグダによって抱き起こされていた。

『すまない』

『く……』

『君の……いや、君たちの助命は、必ず陛下にお願い申し上げる。この国とて、君たちが憎いわけではないのだ』

『……』

『さあ、行こう。あの戦車へは、君の口から投降を促してくれ』

ユウは、そう言って立たせようとするフェグダの腕を、尚も払いのけた。

『ユウ、もう、戦うのは無理だ』

クローゼは、フェグダの雷に打たれたＬ・Ｊが、たとえわずかにでも戦闘に復帰できた例を聞いたことがない。

ミザールの炎以上に、電気はＬ・Ｊの大敵。それは無論、ユウもわかっている。

しかし、あくまでＬ・Ｊの話だ。

『う……ま、まさか！』

Ｎ・Ｓカラスは立った。

人造物とはいえ、切断された傷さえも数日でつなぎ合わせる自然治癒力を持ったＮ・Ｓは、この一分にも満たないわずかな時間の内に、完全にではないがそこまで回復していたのである。

『クローゼ』

『ユ、ユウ……』

クローゼは、断固たる意思を持ったユウの声に、ごくり、生唾を

飲みこんだ。
『もう一度、仕切り直そう』
『え……？』
『頼む』
『……わかった』
暗然と言葉を返したフェグダもまた立ち上がり、二機は再び距離を取った。
投降という言葉は、Ｎ・Ｓを降りたときに。
それが、ここからのルールとなるであろうことを、クローゼは暗黙のうちに理解した。

『モチ、大丈夫か？』
『え、なんとか。……次は、わかりませんが』
『それは、つまり』
『あなたと同じ考え、ということです』
ユウは、頼もしいその言葉に背を押され、雪原に横たわった太刀を取った。
『痛みますか』
とは、手のひらのことだ。
『少し。でも、大丈夫だ』
『でしたら結構』
モチの声は、どこまでも落ち着き払っていた。
『さ……』
数十メートル離れた向こうで、フェグダが戦闘態勢に入っている。
ユウは、太刀を脇にそばめ、
『行こう！』
雪面を、蹴った。

二機が距離を縮めるまで、ほんの数秒である。
真正面から突き進むカラスに対して、フェグダは動かない。

あと十歩、いや、五歩で届くというその瞬間。ユウはまたしても、あの嫌な感覚を覚えた。

やはり、そうだ。

あの光る一本角が磁場のようなものを作り、雷を拡散、操っているのだ。

ユウはそれを確信するが早いか、つかみ直した太刀を、フェグダへと投げつけていた。

『あっ！』

まさか、唯一の武器である太刀を投げ捨てるとは夢にも思わなかったクローゼだけに、これはかなりの驚きだった。

操縦桿を引き、頭部目がけて迫る切っ先をのけぞるようにかわしたものの、さすがに、次の行動までにタイムラグが生じてしまう。

だがそれでも、

『なんの……まだだ！』

クローゼは、雷を放射した。

隙を逃さず接近戦に持ちこもうとするカラスとは見当違いの方向であったが、どうせ狙いはつけなくとも調整は利く。

渦を巻いて散った電気の筋は、まさにその通り、再びカラスの身体へと吸い寄せられていった。

『う、く、ううッ！』

熱い。

焼けた針金で全身を突き刺されているかのように、熱い。

ユウは歯を食いしばる。

『……だから』

『む……？』

『だから、どうした！』

カラスの、一度は止まりかけた足が、前へ前へ動いた。

『うおおおぉぉッ！』

カラスは、両腕を広げてフェグダへつかみかかり、くるりと身を返して、その馬の胴体へまたがった。

ここならば雷も降ってこない。
いや違う。ここならば、目的のものを狙いやすい。
ユウは腕を伸ばし、フェグダの一本角をわしづかみにした。
『ユウ、ま、まさか！』
『く、う、あぁぁぁッ！』
『ユ……あ、ああっ！』
カラスの手の中で、力づくにへし折られようとしている一本角が白い雷をほとばしらせ、コクピットでは、ショートしたコントロールパネルが火花を上げた。
これはいけない、そう判断したクローゼは、フィールド発生器と専用第二光炉の接続を断ち切ったが、ユウの手は止まらない。メリメリと、まるで生きた血管や筋のように見えるコード類が、角の根元に現れ始める。
振り落とそうと暴れるフェグダにもひるまず、ユウは最後のひと引きで、ついに、角をねじ切った。
よし。
これで、たとえば誘爆などを引き起こされては困るが、少なくともこちらの知る最大の脅威は排除できたはずだ。現に、あの肌をなでる感触は、いつの間にやら消えている。
『モチ！』
『了解です』
ユウはフェグダの胴を蹴って飛び上がり、モチの操る翼に乗って、一足飛びに後ずさった。
さらに腰を落とし、雪壁に突き立った太刀を引き抜きざま取って返すと、
『クローゼ！』
『ユウ！』
二機は飛び違い、幾度も場所を入れ替わりながら、一閃、二閃。
得物をきらめかせた。
雷も走る。カラスの羽根が幾枚も舞い飛ぶ。

そうして、次に両機が、パッと距離を取ったとき……。
『……さすがだ』
と、足元を乱れさせたのは、フェグダであった。
ユウ必殺の一刀が、左の前足、うしろ足共に、すっぱりと切断したのである。
フェグダはそのまま、雪煙を上げて倒れた。

『クローゼ……』
『ああ、聞こえている』
『怪我は？』
『ハハ、そんな心配はしなくていい』
『……』
『強いな、ユウ』
『そんなことないさ』
『いや強い。君は、強い』
微笑を含んだクローゼの声は、どこか胸のつかえが取れたように、さっぱりとしていた。
『さあ。私を倒したからには、行くと決めたのだろう？』
『ああ』
『なら行ってくれ。君が進む限り、また会える』
『次も……俺は、負けない』
『ハハ、私だって、次こそは負けない』
『ユーウー！』
『……む？』
それは、空を駆けてくるサンセット？だった。
『シュトラウス機兵長か。では、ギュンターも負けたのだな』
『大丈夫か？』
『なに、我々の立場は心配ない。そう簡単にすげかえられる程度の首なら、そもそも将軍になどなれはしないのだ』

『……そうか』
『さあ、行ってくれ』
『ああ』
『絶対に、また追いついてみせるぞ』
『ああ……』
『……行きましょう』
コクピットから這い出したクローゼは、そうして飛んでいくカラスとサンセット?を、うらやましげに見送った。

「……痛!ギュ、ギュンター?」
「ハッ、ぼけっとしやがって」
「ひどいな」
苦笑したクローゼは、後頭部に直撃した雪玉を払い落とした。
よく見ると、供も連れずに現れたギュンターはここまで徒歩で来たらしく、豪華な金色のファーをあしらった黒い防寒着を着こんでいる。
それが、おや、という顔をしたのは、クローゼの美しい金髪がひと房、血に濡れているのを見たからに違いない。
「なんだよ、怪我してんのか」
「ああ、コンパネが割れてな。だがもう、乾いている」
「ふぅん」
ギュンターは、手に持った二発目の雪玉を、つまらなさそうに投げ捨てた。
「なんだ、意外に平気そうだな、ギュンター」
「あぁ?」
「もっと悔しがっているかと思った」
「別に」
「わざと負けたのか?」
「違ェよ」

ギュンターは、露骨に嫌な顔をした。
それはそうだろう。もしそれが真実であれば、どれほど気が楽か。だが、あの、ララが見せた最後のひと突き。そしてそこに至るまでの操縦の上手さ。
勝ちを確信し油断していたのだろうと人は言うだろうが、おそらく、そんなものがあろうとなかろうと、結果は変わらなかったはずだ。
「チッ……けたくそ悪ぃ」
事ここにきてギュンターは、なんとも言いようのない突き上げるような焦りを感じ、すでに動力の落ちたフェグダを、何度も何度も蹴りつけた。
「なにをするんだ。八つ当たりはやめてくれ」
「うるせぇな」
「いや、気持ちはわかる。想いをかけた女性に負けてしまうというのは、やはり男としてはつらい」
「は……はァ？」
「しかも、こう言っては悪いが、彼女の心はユウに向いている。ああ……つらいな。つらすぎる」
「いや、ちょっと待て。テメェ、なに言ってやがる」
「だから、君は、シュトラウス機兵長が……」
「違ェよ！」
ギュンターは、力いっぱい否定した。
「勝手なこと言ってんじゃねぇ！誰が、んなこと」
「誰……そう、確かサリエリが」
「ハァ？」
「相性がとてもいいようだから、いずれはその、契りの相手に、と……」
「ハァ？」
「ああ、もちろん、この事件が起きる前だが」
「たりめぇだ！てか……ハァ？」

「ハァハァうるさいな」
「あ、ありえねぇ……」
ふらふらとよろめいたギュンターは、フェグダの装甲へ倒れかかった。
「冗談だろ……」
「そんな顔をするなギュンター。世界の半分は女性だと言うぞ」
「テメェは、まだ言うかよ」
「うん？」
「……一応、聞いとくがよ。まさかそんな噂、ベラベラしゃべくっちゃいねぇよな」
「いや、ラッツィンガー将軍に……」
「テメ、ぶっ殺す！」
「待て待て、将軍も、それは似合いだなと……」
「うっせぇ、この、ボケ！……ボケ！」

「がははははは」

と、野太い笑い声が食堂中に響いている。

声の主は、先刻救出された魔人、マンタ。

かつての戦では剣こそ取らなかったものの、西海の楽園『アルケイディア』や、今は滅びた幻の都、伝説の王、そんな夢物語を語り聞かせながら、各砦を経めぐり歩いていた男である。

ゆえに、アレサンドロやクジャクのみならず、当時戦に参加していた全員が知っている有名人中の有名人で、

「そう、あれは我輩が……」

と、この口調も、子どもたちの間で大流行したものだ。

マンタは、先のふたりとハサンを相手に、事情聴取ではないが、こうなるに至った詳しい経緯を語ろうとしているところであった。

「そう、あれは我輩が、デローシスという東の都へ行ったときのことだ。皇帝の居城に勝るとも劣らない巨大な建造物に、世界中の英知を収めたといわれる、数千、数万、いや数億の本が眠っているという噂を聞きつけ、そこへ向かった。我輩はひと月と十三日をそこで過ごし、立ち並ぶ本という本を、ちぎっては投げ、ちぎっては投げ……」

つまり、要約するとこうだ。

デローシスの中央図書館へふらりと立ち寄った『自称冒険家』マンタは、所蔵されているすべての書籍を読み尽くすという途方もない挑戦を思い立ち、その最中、一冊の本と出会った。

それは、魔人についての記録書のようなものであったと思われるが、マンタの記憶が曖昧で詳しくはわからない。

とにかくそれを読み、仲間が恋しくなったマンタは、即座に、挑

戦を新たなものへと切り替えたというのだ。
すなわち、『かつての魔人砦をめぐる旅』、である。
「東から始まり、南、西と……我輩はときに走り、ときに歩き、ときに片足で飛び跳ねながら各地をまわった」
冗談のようだが、マンタは実に真剣そのもの。片足飛びも事実である。
「そして、いよいよ北も制覇せんとしたところ、なんとトラマル近郊に、イワシの群れのごとき鉄機兵団の大軍勢が！」
こうしてマンタは、ギュンター・ヴァイゲル軍に捕らわれてしまった、というわけであった。
「それにしても……彼はいつもこの調子か？」
ハサンがクジャクに耳打ちした。
「四六時中な」
「ンッフフフ」
「時折訪ねてくる分にはいいが……」
「三日もすれば邪魔になる」
「フ、フ」
「ク、フフ、フ」
マンタはその特徴的な口髭をピコピコとさせながら、その後、牢獄でいかに過ごしてきたかを、ややげんなりとしかけているアレサンドロの前で、一大叙事詩さながらに語り始めたのであった。

そうして。
どれほどの時間が経っただろう。
「いやぁ、愉快愉快。さすが我輩」
「ああ、そうだな。その通りだ」
「よしよし。ではここからは、恒例のマンタ・ルーレットの時間だ。この指に差された子が、我輩の次の行き先を決めるのだぞ。我輩の新しい冒険を決めるのだ！」
そう言うとマンタは、ドラムロールも軽快に、ドン、とアレサン

ドロを指差した。
　といっても、クジャクとハサンは別の話に夢中で、すでに話の聞き手はアレサンドロしかいなかったのだから当然である。
「君！名は！」
「……アレサンドロだ」
「よし、アレサンドロ君。我輩の、次の目的地はどこだ！」
　アレサンドロは、初めてマンタ・ルーレットの当選者となったことに多少どぎまぎとしつつも、さあらぬ態で、あごの無精ひげをさすった。
「そうだな……南西はどうだ？」
　マンムートは南西へ向かっている。
「南西！」
　マンタは、ひとつ大きく手を打ち鳴らした。
「そうか、我輩がなし得なかった九つの冒険のひとつ、『ザンゲッタ火山の噴火口に飛びこむ』を達成せよというのだな！あれは我輩が……」
「待て待て、聞かなくても大体わかる」
「馬鹿な……これは我輩が隠匿する、三十の秘密のひとつだぞ……！」
「そりゃ悪かったな。今度ゆっくり聞く」
「では、そうか、Ｎ・Ｓ！我輩のＮ・Ｓを掘り起こしに行こうという……」
「Ｎ・Ｓだと……？」
　それまで、耳の端に会話を受け流していたクジャクが、身を乗り出して問い返してきた。
「お前がＮ・Ｓを持っているとは初耳だな」
「うむ、あれは我輩が……」
「捨てたのか」
「がははは、では話して聞かせよう。我輩のＮ・Ｓをめぐる、聞くも涙、語るも涙の物語！」

……さて。

ミザールとフェグダ敗北の一報を受けてか、結局、鉄機兵団の追撃部隊は姿を見せず、数時間後には、カラスとサンセット?が無事帰還した。

格納庫において、ユウから、おおよその出来事を聞き取ったアレサンドロは、

「無茶したな」

と、やはり足止めとは言いがたい深入りに苦笑いを見せたが、将軍機二機の破壊は大殊勲と言ってもいい働きである。サンセット?の修理用機材を運び出していた男たちも、それと聞きつけて喜びをあらわにしている。

仕方がねえなと頭をかきつつも、

「これからは勘弁してくれよ」

アレサンドロは三人の頭を、ぽんぽんぽんと一度ずつ叩いた。

「さ、今日はもうなにもねえんじゃねえかとハサンも言ってる。ゆっくり休んでくれ」

「さっきの、マンタは?」

「ああ、とりあえず部屋をやった。今頃は、ありがてえことに高いびきって奴だ」

「ありがたい?」

「まあ……お前らも気をつけろ。昔はそうとも思わなかったが、かなりやべえ」

「?」

「ハ、そのうちわかるさ。とにかく、道中、ちょいと寄り道をすることになるかもしれねえ」

アレサンドロは苦笑まじりに肩をすくめ、その理由を語り出した。

それによると、今をさかのぼること二百年前。マンタは『どこまで川をさかのぼれるか』という冒険に、単身N・Sで挑んだらしい。

マンタのN・Sというだけに水中を道とし、西海から始まり、今も生命の源とされる大河『聖ドルフ』を進み、南部にかかるかかからないかという地点で、なんと、大地震に見舞われてしまった。

両岸から押し寄せる大量の土砂。マンタに言わせると、

「大いなる黒き魔物が覆いかぶさってきたかのような……」

という土石流に巻きこまれ、N・Sは川底深くに埋めこまれてしまったという。

そこでマンタは仕方なくN・Sを見捨て、生身の身体で水中を脱出。今に至るのであった。

これまで、それも一興とばかりに放っておかれたN・Sだが、

「それを掘り出しに行くのか？」

「まあ、放っとくわけにもいかねえしな。協力できるかどうかはそのときの状況を見てみねえとわからねえが、どうせこっちも近くを通るんだ。そこまでは乗せていくって話になってよ」

「ああ」

「戦いには出られねえが、子守には最適だ。二号車でブラブラしてもらうことになるだろうぜ」

と、これには、クジャクとハサンも大賛成であったようだ。

「ま、とりあえずこういうわけだ。仲良くやってくれ。……カラスの方はどうだ？」

「ああ。修理は、いらないと思う」

「よし。じゃ、行こうぜ」

アレサンドロは、サンセット？整備のために動きまわる男たちへも、頼むぜ、と声をかけた。

「あ、あたし、サンセットの修理手伝うから」

「おう、じゃ、あとでな」

「オヤツは絶対呼んでよね！」

「その前に昼飯だろ」

「あ、そっか」

ララの弾けるような笑い声に送られて、ユウとアレサンドロ、モ

チは、格納庫をあとにした。

「さってと……」

まずは着替えようか。

残ったララは、壁に吊られた作業衣から最も小さなものを選び、あると聞かされなければ気づかないような、奥まった場所にある扉を開けた。

工具室である。

ただ、今は更衣室になっている。

以前は出入りする人間も少なかったため格納庫の真ん中で着替えていたりもしたのだが、Ｌ・Ｊ整備要員に鍛冶屋の娘などが加わったこともあり、それでは困るということで、急遽そういうことになったのだ。

「フンフン……」

と鼻歌まじりにそでを通していると、

「ララ、入るよ」

セレンがやってきた。

こちらもここで着替えるつもりらしく、手にはそろいの、橙色のつなぎを持っていた。

「派手にやったね」

「ごめん」

「いいよ。壊さないように戦われる方が嫌だ」

「直せる？」

セレンは答えず、ただ口元に微笑を浮かべた。

その、わずかに乱れた肌着からのぞく肌が、いかにも柔白い。インドア志向の肌だ。

「だよね」

と、ララはつなぎのすそを調節し、幾度か屈伸運動をした。

「それよりも、面白いことを言ってたね」

「面白い？」
「ほら、『大地のサンセット』」
「ああ」
ララは脱いだ衣服をくしゅくしゅと丸め、申し訳程度に置かれた衣類棚へ投げ入れた。
「面白いって、なんかダサくない？」
「そう？」
「セレンは好き？」
「興味はある」
「ふうん……」
「ララもそうだと思ったけど」
「なんで」
「大地はメイサだろ。メイサと言えば……」
「ユウ！」
「そういうこと」
……どうして今まで気づかなかったのだろう。
これは、かなり大きな共通点だ。
「……ん、でも、あれ？ユウとは直接関係ないよね」
「そうでもない。神官は誰でも、神に近づこうとする」
「へ、へぇ……？」
「だからこれ」
間髪入れず目の前に突きつけられた紙を、ララは一瞬ぎょっとしながらも受け取っていた。
「えと……」
それは、設計図というよりも、覚え書きといったものである。
思いつくままにペンを走らせたらしい図入りのそれは、どうもサンセット？の改造案のようだ。
「まさか、本格的に、土の中で戦えるようにするとか……？」
「というより、今は、問題なく戦える範囲に持っていくだけ」
「今は、ね」

なるほど、そう見れば確かに、換気口へのエアフィルター追加や関節内部の保護など、マンムートの予備材でどうにかできそうな微改造であった。

「重くなったりしない？」

「上手く調整するよ」

「じゃあ、オッケイ」

「よかった。すぐに図面に下ろすよ」

普段は無味乾燥なセレンだが、こうしたときだけは目を細め、早速、とばかりに更衣室を出て行く。

ひとり取り残されたララは、まさかずっと待っているわけにもいかず、すでに作業を開始していたメイと、損傷した頭部の修復に取りかかることにした。

それにしても、先ほどのセレン。

まわりが見えなくなったときの自分はあんな感じかなぁ、と、ララはなにやら面白い気分で、格納庫への扉を開けた。

アービング

吹きこんできた粉雪が、床に風紋を描いている。
マンムートがその町、西部領アールシティ近郊へ停車したのは、新年祭も間近に迫った、雪の日のことだった。
ジョーブレイカーの調達してきた、毛足の長い、ずんぐりとした荷馬にそりを引かせ、
「気をつけて行けよ」
と、送り出したのは、行商経験のある、ひと組の親子である。
父親と息子。ふたりはこのあと何食わぬ顔でアールシティへ入り、食料や生活物資を買い集めてくる予定でいる。
すでにこの組で六組目の派遣となり、開け放しにされた格納庫は、塊肉の燻製やチーズ、根菜類、織物や糸で、さながら市場のようになっていた。
「アレサンドロ」
「うん？」
呼ばれて目をやると、そこには、大きめのコートをぶかぶかと着こんだララが、えらそうに立っている。
「あのさ、あたしも、ちょっと買い物行きたいんだけど」
と言うその手には、なにやらびっしりと書きこまれた、メモのようなものを持っていた。
「なんだ、早く言やあ、今のふたりに言づけたのによ」
「あのねぇ、女の子には女の子の買い物があるの。でしょ？」
「う、あ、まあ、そうかもしれねえな」
アレサンドロは、柄にもなく頬が熱くなるのを感じた。
こうしたところは、我ながら幼い。
「で……なんだ、ひとりで行く気か？」
「うん、ほら、今の人たちにもジョーがついていったんでしょ？だったら、それでもいいかなぁって」

「ユウをつけるか？」
「バ、バッカ！こんな買い物に連れていけるわけないし！」
「だよな。しかし、それにしてもひとりってのは感心しねえぜ。デ
ィディにでも……」
「ま、待って！」
「うん？」
「や、やっぱり、その……ユウと……」
そのとき、うつむきがちに視線を泳がせ、人差し指を揉むように
して、もじもじとしたララのいじらしさ。
これはアレサンドロでなくとも、
「ユウの野郎……」
と思わずにはいられない。
それとはわからぬ程度に苦笑したアレサンドロは、ひとつため息
をはき、
「わかった。ユウには、俺から声をかけておく」
「え、あ、あの、でも……」
「わかってる。これは、お前から言い出たことじゃねえ。俺が決め
た。それでいいな」
「う、うんうんうん！」
ララは、まだ松葉杖を手放せないアレサンドロの胸へ飛びつき、
嬉しげに足を踏み鳴らした。
「アレサンドロ大好き！」

そうして、ユウとララがマンムートを出発した頃には、陽は南中
を過ぎ、雪は小降りになっていた。
防寒のしっかりとしたコートではなく、あえて古い布をつぎ合わ
せたフード付きのローブを羽織り、ふたりが乗る馬そりにも、先ほ
どまではなかった、土鈴をつけている。
はたから見れば、いかにも近くの地方神殿から買出しに来た兄妹。

ララとしては不本意だろうが、そういった雰囲気に見えただろう。
「出るぞ」
「あ、うん。了解」
ララは、いやが上にも目立つ、その赤髪の上からフードを目深にかぶり、
「どう？」
「ああ、大丈夫だ」
そりは斜面を滑り降り、丁度、人通りの途絶えた本街道へと走り出た。
ユウが鞭を打つたびに鈴がゴロンゴロンと鳴り、疲れ果てた馬は湿っぽい息をはいた。
「それで、なに買うんだ？」
「あれ、聞いてない？」
「ああ」
「じゃあ秘密」
「なんでだ」
「いいじゃない。ユウはお店の前で待っててくれればいいし」
「……嫌な予感がする」
「アハッ、大丈夫だって。ちょっとアレなだけだから」
「なに？」
「なんでもなぁい」
ララはいつものように、アハハと笑った。

……それにしても。
こうして話していても不思議だが、ユウはアレサンドロに今回のこと、つまりララの買い物に付き合えと言われても、特別不快感を感じなかった。
むしろ当然のように、す、と胸に収まり、その気持ちは、今この瞬間にも変わらない。
ララは鼻歌を歌っている。

目が合うと、今度は照れくさそうに、笑った。
「寒いね」
「……寒いな」
馬そりは、もう一台と余裕を持ってすれ違えるほどの街道道を、旅人や巡礼者を追い越しながら走った。
小山をひとつ、まわりこむようにすぎると、すぐに、背後の山を支えるようにして建つ、場違いなほど巨大なアールシティの外門と市壁が見えてきた。

「わぁ！」
この季節限定の絶景。
頑強な鋼鉄製の門も壁も、新年祭用の飾りつけで、目もくらむばかりに輝いている。
しかも来年は太陽神の年であるだけに、その象徴とされる光石の採掘で潤うこの街は、祝賀ムード並々ならぬところがあるようだ。
ちなみに。
その翌年は土女神。さらに火神、月女神、風神、海女神、鋼神と続き、『太陽神の馬車』の年を経て、太陽神へと戻る。この、太陽神の馬車年こそが、かつては獣神トガの年であったものだ。
信ずることをやめ、その名を書物から消したとしても、神が消えることはない。
それを誰もが理解しているわけではないが、誰もが、実はわかっている。
ユウが敬愛してやまない、メイサ神殿大祭主カジャディールは、そう説いて、ユウを感服させたものだ。
ふたりを乗せた馬そりは、東西の街道から合流した人々の流れに乗り、大都市ならばどこにでもあるＬ・Ｊ駐機場を抜け、そうした巨大兵器もたやすく通ることができるだろう跳ね上げ門をくぐり、街へ入った。
メインストリートに立ち並ぶ商店は、どこもかしこも新年の祝い

菓子や飾りであふれ、ララの目をさらに輝かせた。
「ね、ね、あれも買っていこ！マンムート飾りつけるの！」
「しっ……名前を出すな」
「いいから買ってぇ」
「……そうだな。太陽神殿に寄って、御札をいただいてこよう。そのあとで」
「約束だからね」
「ああ。まずは買い物しよう」
「あ、じゃあ、あたし場所聞いてくる！」
ララはそりを飛び降りると、黄色い砂糖で色づけされた、丸い揚げ菓子を積み並べた店へ、跳ねるように駆けていった。

さあ、それから、やや日が暮れかけるまで。
ふたりは街のあちこちをまわり、こまごまと必要品を買い集めていった。
『女の子の買い物』とララが言ったように、男のユウにしてみれば、
「こんなものまで？」
という品物まで荷ぞりへ乗せられていく。中には、思わず赤面してしまうようなものまでだ。
「あ、変なこと考えてたでしょ」
「か、考えてないさ」
「ホント？」
「あ、ああ。袋の中も、見てないし……」
「ユウのエッチ」
「ち、違う！」
「あ、神殿あったよ」
「え……！」
ユウは、どこか、親にやましいものを見つけられてしまった気分になった。

「じゃ、じゃあ、御札、もらってくる」
「あ、ユウ！」
「荷物、頼む！」
そそくさと駆けていくユウの背を、ララは笑い声を立てて見送った。

「……はぁ」
そして出るのは、熱いため息である。
なんと素晴らしい一日だったのだろう。
ふたりで買い物をして、目についた砂糖たっぷりの焼き菓子を、ふたりで分け合って。
身体は寒いはずなのに、心はこんなにも、ぽかぽかと温かい。
本当は、ゆっくりと見つめ合い、互いの手と手をぬくめ合わせるような出来事が起こると尚いいのだが……、
「きゃっ、無理ぃ」
ララは顔を覆って、にやけた口元をローブに隠した。
何故ということはない。
以前のように目を合わせても、こちらの方が恥ずかしくて、いたたまれなくなってしまう。
以前は軽く言えた、
「好き」
の言葉が、胸につかえて出てこない。
それどころか、普段の会話さえ、無駄におどけてしまったり、はしゃいでしまったり……。
この上、手など握られたら、自分は蒸発してなくなってしまうのではないだろうか。
「ユウ……」
ララは、御者席に残ったユウのぬくもりにふれ、再び、幸せな胸の痛みを抱きしめた。

……と、そのときだ。
足音をひそませて、そりに忍び寄った男がひとり。ララの背に向けてこう言った。
「アービング」
ララの、驚愕にむき出された目が男を見た。
「ジョッシュ……！」
「久しぶりだなあ、おい」
「あんた……どうしてここに」
「俺は今も昔もおんなじさ。ただちょっと、えらくなった」
「あ、そ。……じゃあ、そのえらい人に悪いけど、帰ってよ。あたし……か、彼氏を、待ってるんだから」
「そう言うなよ。ちょっと、お前に相談したいことがあるんだ」
「あんたとあたしは、もう他人同士でしょ」
「おいおい、今の男の前で話してもいいんだぜ」
「……ッ」
「便所だなんだと理由をつけて、東裏通り三番地、小熊亭って酒場の裏に来な。なに、時間はとらせないさ」
「ジョッシュ！」
「シィー、静かに。いいな、待ってるぜ」
そう言い残すと男は、コートのすそをひるがえして、人々の笑顔の中に消えていった。
手すりを、指先が白くなるほど握りしめたララの手に、ぽつんとひとつ、冷たさが広がる。
また少し、雪が降り始めたようだ。

秘密

マンムートはこの日、アールシティ近郊から動かなかった。
できればここで、積めるだけの食料を積んでおきたい。
大きな街ほど備蓄量も多く、多少買い占めたとしても、見とがめられるリスクが少ないからだ。
そのため、荷物の一時保管場所となった格納庫の整理も明日に見送られ、日没と同時に作業は終了。人々は、自室へと引き取っていった。
それが……。
しばらく経った、今この時刻になって、その荷箱の隙間を、そろりそろりと進む人影があるのはどうしたわけだろう。
その人影は、格納庫の端に追いやられたホバーバイクのカバーシートを、これまたそろりそろりと外し始めた。
「ララ」
「！」
「なにしてる」
「ユ、ユウ……」
おびえた目でユウを見返した人影、ララは、唇までもが青ざめている。
と、思うと、それをぎゅっと噛みしめ、
「う、ううう……！」
閉じられたハッチへと、一散駆け出した。
「ララ」
「いや、放して！放してよ！」
「いいから落ち着け」
「いやいやいや！」
「ララ！」
「ッ……！」

ララは、その場にくたくたと座りこんでしまった。

……実は。

どうしてこうなってしまったのか、ユウにもわからない。

ただ、太陽神殿で札をもらい、その後、別行動した間に、ララの身になにか起こったらしいことだけは気づいていた。

帰り道にしても今のように青ざめ、こちらから話しかけても生返事さえしない。

一度は馬を止め、なにがあったのか聞きただしてもみたが、

「なんでもないの……ホント。なんでもないから」

と、くり返すばかりだったのだ。

だからこそこうして、その動きから目を離さずにいたのだが、今再び同じ質問を投げかけてみても、ララは強くかぶりを振るばかりで答えようとはしなかった。

「ララ」

ユウはひざをつき、ララの顔を真正面から見据えた。

「俺以外になら言えるのか？」

ララはやはり、首を横に振った。

「ララ」

辛抱強く問いかける。

「誰かに会ったのか？」

ララの目がじわりと潤みかかり、ついには、大粒の涙がこぼれ落ちてきた。

「う……う、う……」

「いいんだ、別に責めてるわけじゃない。詳しいことは……その、言わなくてもいいんだ」

「う、う」

「ただ、どこに行きたかったのか、それだけ教えてくれないか」

「う、ううう……」

ララは、それでもやはり、子どものように両目をこすり続ける。

その、いかにも弱々しい可憐な姿がなんとも胸にこたえ、ユウは我知らず、ララの頭を強く、胸に抱き寄せていた。
「ララ……」
「ユ、ユウぅ……？」
「なにを言われても、嫌いになんかならないから」
「ホ……ホント……？」
「ああ。ララのことが知りたい。全部知りたい」
「う……うあ、あぁ……ユウのバカぁ」
ララの泣き声は、ユウの胸の中で、じんじんと響いた。

そうして……。
「……ごえん」
ユウが荷箱の中から探し出してきた鼻紙を目いっぱい使い果たしたララは、鼻詰まりのおかしな声で、小さく謝った。
「いいさ」
その紙を片づけるユウの胸にも、大きなシミができている。
「落ち着いたか？」
「うん……なんとか」
「じゃあ」
「うん……話す」
ララはもう一度、鼻をかんだ。

「あのね……今日、ユウを待ってるとき、ジョッシュに会ったの」
「ジョッシュ……？」
「あたしの、相棒、だった奴」
そういえば、ララからは一度、相棒について聞いたことがある。
そのときは確か、相棒というものは金でつながっているイメージだと、そう言っていたはずだ。
「そいつが、また、もう一回だけ俺と組んで、やってみないかって。

今日の客は特別だからって」
「……なにを？」
「……」
「なにを、するんだ？」
「……Ｌ・Ｊ」
「え？」
「Ｌ・Ｊでね、戦うの」

ユウの口から、思わず、深いため息がもれた。
なんとも言えぬ安堵感。そして脱力感。
感謝します、と、額と胸にふれる。
ララは怪訝な顔をした。
「なに？」
「いや……そんなことかと思って」
「そんなことって……だって、お金を賭けてやるんだよ？相手の子だって何人も、その、ヤったことあるし。あたしその分け前で、贅沢して……あたし、絶対ユウに嫌われると思ってぇ……え、えッ……」
「ララ」
またしても声を上げて泣き始めたその肩を、ユウは軽くなでてやった。
しかし、ララはわかっているのだろうか。
若い娘と男が組んで客を取る、と聞けば、百人が百人『Ｌ・Ｊで戦う』とは思わない。
『色を売っている』、と思う。
たとえ、誰もが想像するその答えが返ってきたとしても、すべてを受け止めてやるつもりでユウは聞いたのだ。
それが違った。
Ｌ・Ｊで戦っていたと言った。
「ララ、嫌いになんてならないさ。言っただろ？」

「うん……うん」
「今夜だって、ララが行きたくないなら行かなければいい。もし、そいつが俺の前に現れたって怖くない。もう俺は、全部知ってる」
「でも……」
ララはすがりつくような目で、泣きはらした顔をユウへ向けた。
「あいつ……あたしが行かないと、鉄機兵団に、マンムートのことバラすって」
「え……？」
「シュトラウスの家に、あたしを売ったのあいつなの。だから、あいつは知ってるの、あたしがレッドアンバーだって」
「そうか……」
「だから、あたし行かなきゃ。一回だけって言ってるし、朝までには、絶対帰ってこれるから」
「……」
「ユウ？」
「……わかった。俺も行く」
「え……！」
「俺が話をつける。そんな奴を、口止めもしないで放ってはおけない」
「く、口封じ、とか？」
そこでユウは、わざと悪ぶって、こう言ってやった。
「さあ。もしかしたら、するかもしれない」
「……ぷ、ふふ、ウフフフ」
効果はてきめんだ。
「アハ、ハハ、似合わないの」
「ハハ」
「アハハハハッ」
ふたりは鼻紙を投げ合って、憂さを、無理やりすべて吹き飛ばすように笑い転げた。
「さ、行こう」

「あ、でも、誰かに言わないと、ユウが……」
「ハサンが知ってる」
「え、なんで」
「たぶん、カメラで見てる」
「ウ、ウッソ！」
　このとき、マンムートのブリッジには他にも数名の当直担当者がいたが、ふたりの会話を聞くどころか、キャプテンシートのハサンがにわかに舌打ちしたことさえ、気づいた者はいなかったようだ。
　マンムートと二号車、合わせて数十台の監視カメラがある。異常がなければ、音声は常に、最小値まで落とされているのだ。
「ララ、手伝ってくれ」
「う、うん！」
　ふたりはホバーバイクのカバーを剥ぎ取り、シートにまたがった。
「あ、ハッチ開けないと」
「いい、ハサンが開けてくれる」
　そう言ったそばから、ハッチが持ち上がっていく。
「さっすがぁ」
「よし、行こう」
「……うん」
　操縦席のララは、もう一度、目をごしごしとこすり、テリーよりもやや荒っぽい運転で、ホバーバイクを発進させた。
　以前ふたりで見たよりもさらに美しい星空が、冴え冴えとした夜空に広がっていた。

「……いいなぁ、デートかぁ。俺もメリッサちゃんとデートがしてぇ」
「無理無理」
「ハハハハ」
　ハッチを開けてしまえば、これはもう隠しようがない。ブリッジ

当直の間では、ユウとララは『デートに出た』、ということになってしまったようだ。
　すると、機械を扱う持ち場だけに若者が多い、ということもあいまって、
「あの子がいい」
「あの子は、あの男に気がある」
　そんな話が飛び交うようになる。
　皆、男女分けられたホーガン監獄島ではさびしい青春を送らざるを得なかっただけに、『恋人』という言葉には敏感すぎるほど敏感なのである。
「俺はセリカだ」
「俺はクラリス」
「あの子はまだ十三だぞ？」
「いや、三年も待てばいい女になる！」
「俺はジョアニー」
「おい待て、卑怯な奴だな。お前もあの話を聞いたんだろう」
「ああ、聞いた聞いた。だが、最初から目をつけてたんだ」
「え、なんの話だ？」
　総勢九人の若者は、生唾を飲みこんで額をつき合わせた。
　無論、ハサンの耳も臨戦態勢である。
「……どうもジョアニーは、アレサンドロさんに告白して、フラれたらしい」
「え！」
「本当かよ！」
「ああ、女連中が話してるのを聞いちまったんだ。フリ方も格好よかったらしいぜ。聞いた女たちが悶えてた」
「くぅぅ、あやかりてぇ！」
「あ、じゃあお前、傷心のジョアニーにつけこもうってわけか！」
「ち、違う！」
「ずるいぞ！」

「男の風上にも置けない奴だ！」
「ジョアニーに言いつけてやれ！」
「やめろやめろ！」
槍玉に挙げられた若者は、転がるように持ち場に戻った。
「あ……ま、待った！」
「なんだ、自業自得だぞ」
「ち、違う。Ｌ・Ｊの反応！」
驚愕した別の男が、通信装置のマニュアルを、床にまき散らした。
そして全員の目がハサンに向けられたのは、至極当然のことだったと言えるだろう。
「鉄機兵団か？」
「う、うす。ええと、ナーデル、バウム……」
若者は、人差し指のみでたどたどしくコンパネを操作し、答えた。
「あの娘か。一機だな」
「うす」
「距離は」
「ええと……」
「目標は」
「え、あ、あ……」
マンムート全体の士気や識字率は高いが、それだけではどうしようもないこともある。
特に機器類の扱い、計算分析においての未熟さは歴然で、若者は必死に応えようとしているのだが、これ以上はうなり声を上げるのみで、手が動かない様子だ。
しかしハサンは、それを別段責めようとはせず、
「フン」
と、ただ微笑した。
「なにをしている、アレサンドロを呼べ。メアリー・ミラーもだ」
「り、了解！」
「なに、焦ることはない。どこにでも転がっている、ただのアクシ

デントだ」
「外のふたりには？」
ハサンは悠々とパイプを唇に挟み、こう言った。
「ジョーブレイカー君がついていったはずだ。彼に連絡を取るといいだろう」

さて……。
ジョッシュがララに指定してきたのは、市壁の北端、ということであった。
今はもう日没後。外門は当然のごとく閉まっている時間なのだが、どこにでも『抜け道』というものは存在する。
門を守る守衛にいくらかの金をつかませる、というのが最もポピュラーなやり口で、日の入りまでに町へ到着できなかった場合、一般人でもこの手を使う。
さらに、人目につきたくない人間が多く生息する街には、文字通り、それ以外の出入り口があるのであった。
ここも大方そうだろうと思っていると、案の定、ぐるりとまわりこんだ市壁の向こうに、ぼんやりと光る明かりがひとつ。
「あれか」
「うん、たぶん」
「ここで止めよう。見られたくない」
ふたりはホバーバイクを木立の中に隠し、ザラメ状の雪を踏み固めながら、なだらかな坂道を登っていった。
明かりの正体は、寒そうに足踏みをする、若い男の光石灯であった。

「……あんたがアービングか？」
「アービング……？」
「あたしのこと。ほら、あたし……もらわれっ子だから」

「ああ」
縁組以前の名は、ララ・アービングというらしい。
「で、あんた誰？」
「ジョッシュさんから、あんたを連れてくるように言われた」
「あいつはどこ？」
「俺は、あんたを連れてこいと言われただけだ」
ララは、どうしよう、という目でユウを見た。
こうなっては仕方がない。
ユウとしてもここで話をつけるつもりだったのだが、それを手下分のこの男に言い聞かせたところで、時間を浪費するだけということはわかっている。
「入ろう」
ララに耳打ちをした。
「おい、男は駄目だ。アービングだけついてこい」
「そう言われたのか」
ユウは、ララと男の間に身体を割りこませた。
見れば、この防寒マントを羽織った迎えの男はララと同年代のまだ少年で、身につけている衣服もどこか汚れ、古ぼけている。
「おい、なに見てるんだ。帰れ！仲間を呼んでもいいんだぞ！」
後ろ盾を振りかざし虚勢を張るさまも板についておらず、先ほどのユウではないが、無理に悪ぶっているような、若い痛々しさがあった。
「聞いてるのか！」
「ああ。俺も入らせてもらう」
「駄目だ！」
「なら、彼女と帰る」
「う……」
「痛い目を見るのはお前だ」
「ま、待て！」
少年が、戻ろうとするユウの前へ立ちふさがった。

「こ、困る。待ってくれ」
「なら入れてくれるのか」
「それは、聞いてみないと……」
「俺たちには時間がない」
「う、そ、その……」

……実のところ、ユウも胸が痛んだ。
この少年に罪はない。ただ自分と同じように、ふとしたきっかけで裏の道へ入ってしまっただけなのだ。
しかし、世の無情を説く前に、今はやるべきことがある。
ユウは少年の肩を抱くようにして、その耳元へ口を寄せた。
「お前はアービングを連れてこいと言われたんだろ」
「あ、ああ」
「男を入れるなとは言われていない」
「それは……まあ……」
「だったら問題ない。お前は彼女を連れていけばいい。そこに俺がついていっても、命令を破ったことにはならない」
「そんなの屁理屈だ！」
少年は、腕を振り回して抗議した。
この少年が初めて見せた、少年らしい顔だった。
「言っただろ、俺たちには時間がないんだ。それでも駄目だと言うのなら、帰る」
「そ、そんな……！」
「どうする。行くのか、行かないのか」
「う、ううう……わ、わかった。どうなっても知らないからな」
「ありがとう」
少年は、まさか礼を言われると思わなかったのか、ユウになでられた肩を不思議そうにさわり、きょとん、とした。

狗と女王

昼間であればわかるのかもしれないが、闇に塗りつぶされた市壁は、どこに『裏口』があるものか見当もつかない。

その、鉄で補強された壁を四回、そして間を置いて三回少年が叩くと、五メートルほど離れた場所から、サッと明かりがもれた。

「……客が来たのかい」

顔を出したのは門番だろう。デッキブラシのような髭を蓄えた小男である。

少年が、おどおどとうなずくと、ユウ、そしてララに一瞥をくれた男は、

「……入んなぁ」

身体をずらして、三人を招き入れた。

「う……」

猛烈に、酒のにおいがこもっている。

テーブルと椅子の他には、薪ストーブと酒樽しかないその小屋の隅で、四人の男が陶製のジョッキを傾け、賭けポーカーに興じているのだ。

これはジョッシュの手下、というよりも、この街の裏ギルドによって雇われた連中に違いない。用心棒と言えば聞こえはいいが、要は、ひとり頭片道千フォンスという、やや高価な通行料を取る門番の監視役というわけだ。

「お、へへ、女か」

泥酔した男たちのひそやかな声が耳に入り、ララは知らず、ユウの陰へ身を隠していた。

「大丈夫だ」

「え？」

「大丈夫」

ララが、思わず見惚れてしまうほどの微笑みである。

「あいつらにはなにもできない。なにかあれば、ギルドの信用が落ちるから」
「……」
「ララ？」
あまりに答えが理論的すぎたために、ある意味がっかりであった。
ここで、
「俺がいるから大丈夫」
などという気の利いた台詞を期待するのは、わがままなのだろうか。
……あたしのバカ。前は、こういうところが好きだって言ってたじゃない……。
「ララ？」
「うん……」
「俺もついてる」
「！」
「だから心配ない」
「うん……うん！」
ララは、数秒前に考えていた恨み言や自戒の念など、すっかり忘れてしまった。

東裏通り三番地、小熊亭。
今日の昼間、ララがジョッシュに呼び出された酒場である。
今夜もまたここに導かれたので、ああ、ここはジョッシュの持ち物だったのか、と、ララはひとり納得した。
かつてふたりで組んでいた頃は、ただのマネージャー。確かに、えらくなったようだ。
その、巨大で、きらびやかな正面扉を素通りし、裏口へ続く道に入りかけたとき、
「待て」

ユウは、重い足取りで先を行く少年を呼び止めた。
「この先にジョッシュがいるんだな」
「あ、ああ」
少年は、もうすっかり参っている。またなにか無理を突きつけられるのかと、視線すら合わせられない様子だ。
「ここでいい」
「え……」
「ここから先は俺たちだけで行く。帰っていい」
少年は、やはりきょとんとした。
「で、でも……」
「叱られるだろ？」
「あ……」
「行け」
「う……うう」
どこか苦しげに顔を歪めた少年は、振り返りもせずに駆けていった。
「お礼ぐらい言ってけばいいのに」
「いいさ。礼を言うのはこっちだ」
「……えへへ」
「？」
「今日のユウって、なんか……できる感じ」
「まったくだ。とんだ女殺しだよなあ」
「……ジョッシュ！」

ユウは、ひとつ深呼吸をして、裏口から現れたのだろうその男を見た。
……なるほど。
上等な上着に、上質なコート。曇りひとつない革靴。
身につけているものは非の打ち所がない最上級の品ばかりだが、そのくせ、目はどこか卑しげで、口髭は成金へのコンプレックスを

そのまま塗り固めたように見える。
　年の頃は三十五、六といったところか。ちぐはぐな印象を与える外見同様、おそらく内面も、虚勢と虚飾にまみれているに違いない。
　ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべたジョッシュは、用心棒らしい男のひとりに目配せをし、逃げた少年のあとを追わせた。
「あんなゴミでも元手がかかってるんでね。このままトンズラされちゃ困るのさ」
「それで、捕まえたらボコボコにするってわけ？」
「そりゃそうだ。そうやって、男は強くなっていくもんだぜ？」
「……あんた、ホントに変わってない」
「お前は変わったなあ、アービング。昔は誰を半殺しにしようが、される方が悪いって顔してたのによ」
「……やめてよ」
「相手が誰だろうと、容赦なくコクピットをえぐり潰す！それが、レッドデビル！」
「やめてってば！」
「あんたにも見せたかったな、こいつの残虐非道ぶりを。そりゃもう一番人気だっ……たはぁ！」
「ユ、ユウ……！」
　電光のごとく走ったユウの左手が、ジョッシュの喉輪に食いこんでいた。
「ま、待て待て、待て、よ……」
　脅しではない、今ここで殺してやるという意思を持った指先が、頸動脈を締め上げていく。
　ふと、目をそらし、もうひとりいる用心棒に対して目顔で武器を捨てるよう指示したユウの、その落ち着きぶりに、
「こいつ、今まで何人殺してる……？」
　ジョッシュは内心戦慄した。
　用心棒が剣を捨てると、ユウの指はゆるんだ。
　ジョッシュも、うわべだけの笑いを浮かべてみせた。

「俺が、彼女とここに来た理由、わかるな」
「さあ……とと、待った待った！そいつを今日の興行に出すなと言うんだろ！」
「そうだ」
「しかし、そいつはこっちとしても困る。今日の客の前で、メインイベントをおじゃんにするわけにはいかないんでね」
「そんなのは知ったことじゃない」
「おいおい、裏には裏の事情があるんだ。お前らだってそうだろうぜ、ヒュー・カウフマン」
「……」
やはり、この男は鎌をかけていたわけではないらしい。噂ではなく、情報としてララのことを知り、手配書にも目を通している。
「わかったら、手を、離せ！」
ジョッシュは身をひねるように、ユウの手から逃れた。
「さ、来な、アービング。客がお待ちかねだぜ」
「い、嫌だったら！」
「なら、このまま騎士団の詰め所に駆けこむか？え、どうなんだ！」
「やってみろ……死ぬのはお前だ」
「は、はは、ここで俺を殺すか？」
「いや、お前が一番恐れてる、裏社会に殺される」
「え……？」
「裏社会は、狗（いぬ）の存在を許さない」
ジョッシュの口元が、一瞬引きつった。

と……そこに。
「ちょっと、随分と退屈させるのではなくて？」
「あ、ああ、あ、あ、これは……！」
「さっきのが、最高のイベント？」
「いや、ちょ、ちょっとお待ちを。はは、裏口なぞから出てこられては困りますね。ほら、お召し物が汚れてしまう」

……このジョッシュのうろたえぶり。これが噂の、『特別な客』に違いない。

開け放しにされた裏口からの逆光で、顔かたちは判然としないが、女だ。

百八十センチはあろうかという長身と、その首まわりに揺れる長い羽根飾りが、一種独特な、そう、まるで女王のような威厳をかもし出している。

女は、首の長い女物のパイプを指先で一回転させ、トン、とジョッシュの首元を叩いた。

「無駄口は結構」

「は、はは……いや、丁度、今日の対戦相手が来たところです。ほら、この通り」

「ジョッシュ！」

「いや、本当困ってしまいますよ。ご覧の通り鼻息だけは荒いんですが、どうも、この大舞台を前に怖気づいたようで……」

「ふぅん」

女はのぞきこむように、ララの顔を見た。そして、ユウの顔を。

光がようやく、女の、細面の横顔を照らし出す。

「あ！」

「んん？……ああ、は、は、は」

「スコルピア！」

「ユーウー」

細くしなやかな女の腕が、ユウの腰を抱き寄せた。

少しこけた頬、垂れた目、泣きぼくろ、黒々と塗られた唇。ユウにとっては、よく見知った顔である。

そして、気に入った者だけにする独特の挨拶。首筋に、スコルピアの吸いつくようなキスが落とされると、ジョッシュとララが同時に固まった。

「ああ、このにおい。思い出すわ。身体が熱くなる」

「ス、スコルピア？」
と、さらに、しっとりとした唇は首筋をまさぐり、鎖骨まで下りようとする。
ぐいと突き放すと、スコルピアの口からは悩ましげなため息がもれた。
「またじらすのね。あなたたちはいつもそう。あたしの喜ばせ方を知ってるわ」
「う、ちょっ……」
「やめなって、の！」
「ああッ！」
ララの突き上げるような体当たりを受け、ドレス姿のスコルピアは、もんどりうって雪山へ倒れた。
「ヒィッ、なんてことを！」
ジョッシュは、泡を食って助け起こしにかかった。
「だ、大丈夫ですか。さ、つかまって」
「ああ……」
「……レディ？」
「たまらないわ……この、痛み。ぞくぞくする」
「へ？」
「へ、変態！」
「ああ、若いのに、なじることまで知っているのね。好きよ」
「ちょ、ユウ、なにこいつ！」
「ああ、彼女はスコルピア」
「そういうことじゃなくって！」

帝国裏歴史

スコルピアは、『帝都の吸血鬼』、ザ・バングの片腕と言われる人物である。

この吸血鬼と、『西海の悪魔』こと女海賊ソブリン、そして『北の魔術師』ハサンが盟友であり、かつて大連合を組織して帝国の半分を思うがままにしていたことは、裏社会に生きる者ならば誰もが知っている。

そして、ユウがのちに聞いた話では、なんと、あの雪山の地下道で話題にのぼった、ハサン若かりし日の相棒というのが、このバングであったのだ。

……と、そうなると、ハサンの弟子であるユウとこのスコルピアが、一体どのようにして知り合ったか、など、今更説明する必要もないだろう。

ユウはもう十年も前から、スコルピアを知っていた。

ちなみに……。

話は少々脱線するがこのスコルピアという人物、この十年の間に、一切外見が変わっていない。

化粧のせいだろうか。いや、魔人かもしれない。

プライバシーへの介入は最大のご法度、とされる盗賊界では、七不思議のひとつなのである。

いや、むしろ、

「……ユウ、首、口紅ついてる」

「え、そうか」

「なにさ、鼻の下伸ばしちゃって」

「まさか。彼女は男だし」

「え、え！」

その七不思議は、スコルピアが独占しているようなものなのであった。

なにはともあれ、スコルピアがここにいるということは、バングもいるということだ。
ユウは、これも旧知の大盗賊に挨拶もせず行くわけにはいかないから、とララに頭を下げ、スコルピアに取次ぎを頼み、面会することにした。
ジョッシュもスコルピアと共に中へ戻ったが、さて、今頃はどんな顔をしているだろうか。
バングの迎えは、すぐに現れた。
「どうぞ」
ふたりは、言われても盗人とはわからない、その穏やかな容貌の男に続いて、裏口をくぐった。
「ね、あたしも一緒で、大丈夫？」
「ああ」
「そのバングって、どんな人？」
「……ひと言では難しい」
「やっぱり、変態、とか」
「名前の売れた頭領は……みんな、クセが強い」
案内役の男が、そこで、ぷ、と吹き出した。
「あ、階段」
「下に行くみたいだな」
これは、くだんの闘技場へと向かっているのだ。
それもそうか、と、ふたりは顔を見合わせ、互いの目に、緊張が色濃く映っているのを見てとった。
ララは、昔の自分を見られるのが怖い。
ユウは、ハサンなしで大盗賊に会うのが怖い。
そこからは言葉数も少なく、ふたりは階段をくだっていった。

わぁっ……。
鉄の扉が開けられると、そこは熱狂で沸き立っていた。

すり鉢上のコロシアムに、観客は一万人か、それ以上もいるだろうか。男も女も、年寄りも若者も、すべてが大きなうねりとなって、ひとつの巨大な生き物のように波立っている。

刺激を求めて。

自らの鬱屈した欲望を満たすために。

怖いもの見たさ。

人々は、持て余した退屈のはけ口を闇の中に見出し、麻薬のように溺れていく。

だからこそ、この世界はなくならない。

ここに集った実に九割は、たまたまこの街に立ち寄った旅人や商人、そして貴族なのである。

電光表示されたオッズの下。スポットライトに照らされたその中央では、今まさに、改造Ｌ・Ｊによる殺し合いがくり広げられていた。

「殺せ！」

「今だ！」

素手のＬ・Ｊが相手の腕をへし折ると、観客席からは歓喜の声が上がった。

「こちらです」

「……ああ」

顔をしかめたユウとララは一般席の裏をまわりこみ、今度は階段をのぼって、最上層に出た。

立ちふさがった四人の用心棒にコートと太刀を奪われ、ビロードのカーテンをくぐると、そこは、黒いカーペットのＶＩＰ席。

「ユウ」

男の胸にしなだれがかったスコルピアが、手招きをして呼んでいる。

「いらっしゃいな」

ユウはひとつ深呼吸をして、ソファに座るその男の前へ立った。

「……ハァン、スウィーティ」

帝都の吸血鬼、ザ・バングである。

このバングについて語る前に、少し、帝国裏社会の歴史というものにふれておこう。

古今東西どこの土地でもそうだが、国の形態いかんを問わず、盗賊・山賊・海賊のたぐいは現れる。

しかし、黎明期のそれというものは、規模の差はあれ、ほとんどが白刃を突きつけて強奪するだけのならず者集団。この帝国内においても、ほんの数十年前までは、盗人も留守宅を狙う、けちなコソ泥程度しかいなかったようである。

そんなあるとき、新風が吹いた。

多くの手下と巧妙緻密な計画によって、一夜のうちに大金を盗み取っていくバング。

奇術にも似た仕込みと大胆不敵な方法によって、宝飾品や巨大彫像までをも消し去ってしまうハサン。

ふたりの登場は盗賊業界に衝撃を与え、それならばと、売り出し中の若い盗人を中心に、技や知能を競い合う風潮が生まれた。つまりふたりは、カリスマとなったのだ。

過去を語ることの少ないハサンでも、このときの大モテぶりは、

「悪くなかった」

と、のちに、ユウへ語っている。

さて。

それからしばらくは、盗賊の技術向上と、錠前や金庫の発展がイタチごっこにくり返されたのだが……あの十五年前の戦争が、盗賊界にも影響を及ぼすことになる。

言ってみれば、後退期だ。

なにしろ、かの戦争では帝国側も大打撃を受けた。

町もいくつか消え、領内の隅々にまで目が届かなくなった領主も

多い。
その隙に乗じて盗みを働く者が増えたのは当然で、盗人の中では下の下とされる火事場泥棒も、石を投げれば必ず当たるほどに増えた。
では盗賊界の発展期ではないか、と言われそうなものだが、たいした技量や知恵がなくとも儲かるので、盗人の質は落ちた。
ルールも、品位も、遊び心も失った小悪党がはびこり、日々くり返されるのは小さな縄張り争いばかり。帝国のそれと共に、裏社会の秩序も崩壊したのである。
「ああ……」
ハサンはため息をつき、こうも言った。
「あれほど馬鹿げた時代もない。あれほど……愉快な時代もな」
かつての相棒同士であるハサンとバングがもう一度手を組み、ソブリンまでをも巻きこんで大連合を結成したのは、この頃であった。
目的は、盗賊界の再生……などではない。
恐ろしいことにこの三人、その乱れた表社会、裏社会を利用し、ひと儲け企んだのである。

方法としてはこうだ。
まず、『いつものように』ひと稼ぎする。
その金で、どこぞ大都市の裏に、酒場のような、つまり盛り場をつくる。
盛り場が興れば、おこぼれを頂戴しようという有象無象が集まってくる。治安が悪くなる。
しかし、それを管理監督する力は、混乱の続く世の中にはない。
どうする。
弱り果てたところに、大連合からの使者が現れる。
用件はこうだ。
『年にいくらかの上納金と、地域の安定を保証する。盛り場一帯の権利を買い取らせてはもらえまいか』

領主にしてみれば、そもそもがゴミためのような場所だ。金が入る上に、そこを整備し、裏の人間同士が適当に治安維持してくれるのならば言うことはない。

交渉はまとまる。

大連合は土地の顔となり、所場代や、これも下からの上納金で潤う。

……というわけだ。

こうした方法で大連合が手に入れた土地は、百を越える。

盗人らしからぬことだ、と、ねたみ半分陰口を叩く者もいたが、

「悪人が金を稼ぐのに、らしいもらしくないもあるか」

と、三人は取り合わなかった。

無論、三人はそれぞれの本職も抜け目なくおこない、ハサンなどは気に入ったものがあれば、大連合そっちのけで盗みに行った。

ユウも、そんなハサンの元で修行を積んだのであった。

それから十余年。その大連合も今はない。

ハサンが『隠居』したことで三つ巴の一角が崩れ、自然消滅してしまった。

大連合の支配下にあった利権の内、西海港湾にあった一割ほどはソブリンの手へ。

残りはすべて、バングの懐に入っている。

有り余るほどの権力と財力。

今やバングは押しも押されぬ存在となり、裏表問わず、なんとか近づきになろうとする人々の貢ぎ物で、行く先々には小山ができるということだ。

おそらく望めば、この帝国さえも動かし得るに違いない。

ユウの目の前にいるバングという男は、つまり、そういう男であった。

「スウィーティ」

バングは、墨で書いたような美しいあご髭を、くい、としゃくり、

自分の左側へ座るよう指示をした。
ユウはもちろん、それに従った。
「これなら飲めて？」
「ああ、ありがとう」
「あなたもどうぞ」
「あ、う、うん……」
すかさず供されたのは、カップに霜が降りるほどよく冷えた、桃のスムージーだ。
熱気で陽炎まで見えようかという闘技場内では、この上ないごちそうと言える。
カップを渡す瞬間、スコルピアは気圧され気味のララの腕を怪しげにひとなでし、その身震いするさまを舌なめずりして喜んだが、バングはこちらを一瞥もしなかった。
おそらく、ララには興味がないのである。
このバング、何故か黒に異常な執着心を持っており、好む姿は黒のレザーパンツとレザーコート。昼夜を分かたず色の濃いサングラスをかけ、アクセサリーも黒しか身につけない。黒髪の女しか抱かず、黒以外の花は、すべて首を落とさせる。
それゆえにスコルピアを含む一家の者たちまでも、寵愛を得んがために黒一色なのだ。
黒い髪、黒い目のハサンとユウを溺愛し、スウィーティ、つまり『可愛い人』などと呼ぶのも、多くはそこに起因している……と、ユウは勝手に思いこんでいる。真実は謎だ。
だが、もしもバングへ貢ぎ物をしたければ、最低限、黒いものを選ぶといいだろう。
とりあえず挨拶を、と開きかけたユウの唇を軽く押さえたバングは、
「あいつは？」
と、妙に抑揚のついた甘声で、舐めるように聞いた。
「あいつ？あ、ああ、ハサンは今、外にいるんだ。俺たちは用事が

あって、ここに」
「彼、ここのオーナーに脅されていたみたいよ」
と、スコルピアが余計なくちばしをいれる。
「ハァン？」
「おまけに、この退屈なパーティ……」
「……フゥン」
「ちょっと、オーナーをここへ」
「ヒ、ヒィッ……！」
カーテンの向こうから、情けない声がした。
ばたばたともみ合う物音が聞こえ、すぐに、用心棒に両腕をかかえられた、泣き顔のジョッシュが引きずられてきた。
「あ、あの、はは、は……これは、その……」
「だから、言い訳は結構」
「へ……」
「あなたのミスは、もう救いようがない」
「そ、そんな……！」
「ねえ、バング？」
「ハア、ハア、ハア」
奇妙な声で笑ったバングは、親指を、喉の前で一直線に引いた。
ジョッシュの顔から愛想笑いが消え、
「やれ」
「ヒィッ！」
「ま、待ってよ！」
「待ってくれ！」
ユウとララは、同時に声を上げていた。
そして。
闘技場を風のように駆け抜けてきた人影が、ふわり、ユウたちの前へ降り立ったのも、このときであった。
「ジョー……！」
「……ハァン」

ジョーブレイカーの黒装束を、バングはひと目で気に入ったようである。

吸血鬼

「カウフマン、シュナイデが来る」
「え……？」
「ナーデルバウム、あの娘のＬ・Ｊだ」
「それが、ここに来るのか？」
「そうだ。……お前がオーナーだな」
「……ハァン」
「すぐに全員を避難させることだ」
「ハア、ハア、ハア」
バングはひと声笑い、立ち上がった。
身体にフィットした衣服のためだろうか。無駄をそぎ落としたその肉体は、数字で聞くよりもはるかに長身に見える。
そのまま、すでに死人同然のオーナー・ジョッシュにかわり、人々に避難を指示するのかと思いきや。バングはゆっくりとジョーブレイカーへ近づき、
「む……！」
その胸倉をつかみ上げた。
これには、ユウも驚きである。
何故ならばジョーブレイカーは、確かに身をかわす動作を見せたのだ。
見せたのに、逃げられなかった。
あのジョーブレイカーが、である。
バングは、その細長い身体を黒装束に揉みこむようにして、
「ハァン、惜しいな」
「……」
「目の色が悪い」
と、口元からのぞく異様に長い犬歯を、舌の先で転がした。
これが『吸血鬼』の由来。そしてバングの癖であった。

「髪はどうだ？」
「……」
「ハァン、これは、まあまあだ」
と……忍者刀の鯉口が切られた気配に、バングは一歩飛びしさる。
「ハア、ハア、ハア」
これも、余裕しゃくしゃくである。
「……カウフマン」
「あ、ああ。とにかく、彼女の目的は俺たちだ。こちらから外に出よう」
「あら」
「バング、明日もここにいられるようなら、必ず挨拶に来る。そのときはハサンも……」

言いかけて、ユウは息を呑んだ。
いつの間にかバングの骨ばった指が、こちらの腕をがっちりとつかんでいる。
いや、その指からはたいした力を感じなかったのだが、身体は、わずか一ミリも動かせなくなってしまっていた。
黒々としたサングラスの奥から突き通してくる視線。なんという威圧感か。
その眼光は、忍刀を抜いたジョーブレイカーをも空間へ貼りつけ、低くうならせた。
「バ、バング……」
「スウィーティ、まだ、駄目だ」
「でも……鉄機兵団のＬ・Ｊが、ここに向かってるんだ」
「駄目だ」
「ユウ！」
そこでいつものごとく、ララが、バングの背後から飛びかからんとした。
しかし、こちらはスコルピアが邪魔をする。

「ちょっ、離してよ！」
「駄目よ。彼が駄目と言ったら駄目なの。それが決まりよ、イチゴちゃん？」
「う、うるさいっての！」
「ああ、甘い香りがするわ。若い、女の子のにおい……」
「この、変態！」
「あ、は、は、そうよ。だから暴れる子をもてあそぶのが大好き」
「う……」
「あら、もう暴れてはくれないのかしら？あ、は、は、は」
ララの、どうしようもなく困惑しきった目が、ユウに向けられた。
「バング、頼む。せめて、観客を逃がしてやってくれ」
「ハァン？どうして」
「どうしてって……」
「お前は観客もなしに戦わせる気か？スウィーティ」
「……ま、さか……！」

ド、ドンッ、と、Ｌ・Ｊ入場扉が打ち叩かれる音がした。
これは、格納庫から外部搬入口まで通じている、Ｌ・Ｊ用のものでは唯一の出口だ。
かなり大きな扉、そして音だというのに、熱闘に心奪われている観客は気づかない。
再び、音。
扉が、外から加えられる圧力に耐え切れず変形したことに、わずかばかりの人間がざわめいた。
さらに、音。
今度は鉄扉を突き破って現れた水色の刃に、観客の大半が異変を悟った。
水を打ったように静まり返る闘技場。刃はのこぎりの要領で、扉を切り開いていく。
力づくで扉を押し開き現れたのは、モノアイを赤々と燃やした異

形のＬ・Ｊ、ナーデルバウム。
わぁっ、と声が起こった。
悲鳴。いや違う、歓声だ。
観客は皆、シュナイデを新たな闘士だと思っている。
これはすべて演出だと、そう思っている。
きょろきょろとあたりを見まわしたナーデルバウムは、戦いの手を一時止めた闘技場中央のＬ・Ｊに目をとめ、邪魔者は失せろ、とばかりに、猛然と踊りかかっていった。

「くそっ」
ユウにとっては初見のナーデルバウムだが、力があるにせよないにせよ、放っておくわけにはいかない。
闘技場へ出てＮ・Ｓを、と走り出しかけたその腕は、しかし、まだバングの指に押さえられている。
「バング！」
「お前が行けば、すべてを知られる。それでも使うか？Ｎ・Ｓを」
「ここには、鉄機兵団の騎士も多く来ていてよ？」
「あれだって鉄機兵団だ！」
「……違う」
「ジョー？」
「あれは鉄機兵団籍には入っていない。あくまでスダレフの私兵……実験体だ」
「……くっ」
「だからイチゴちゃん、あなたが行くの」
「あ、あたし……？」
「そう、あなたがあのＬ・Ｊを倒すのよ。ここにある、改造Ｌ・Ｊを使ってね」
ララは目をむいて、小刻みにかぶりを振った。
「どうしたの？知っていてよ、あなたが百人斬りのレッドアンバーだって」

「ララ、行かなくていい！俺が行く！」
「そうね。彼のためにもなるのではなくて？」
「……行く」
「ララ！」
「あたし、行く」
「そう、いい子ね。あなたは本当にいい子。そうと決まれば……オーナー！」
「は、ははは、はい！」
「この子にＬ・Ｊを。くれぐれも、最高の機体をね」
「は、は、はい！」
九死に一生を得たジョッシュは、転がるようにＶＩＰ席を出ていった。
「ララ……」
「うん、大丈夫。だってほら、いつもやってること、やるわけだしね」
「……すまない」
なんと謝ったらいいか。上手く言葉が出てこない。
「あ、いいのいいの。待ってて、すぐにやっつけてくるから」
と、無理に取り繕ったララの明るさが、とにかく胸に刺さった。

「……あら、彼がいないわ？」
「ハァン？」
「余計な手出しをしてくれなければいいけれど」
「フゥン……スコルピア」
「はいはい、わかっていてよ。鉄機兵団への手まわしでしょう？」
「行け」
「んん、いけずね」
スコルピアはバングのあごをひとなでし、しなを作って姿を消した。

ユウとバングのふたりだけが、広すぎる空間に残された。
「座れ」
「……」
「座れ」
かきむしるほど苛立っているというのに、言うことを聞いてしまう自分が情けない。
「さぁて、スウィーティ。お前はどちらに、いくら賭ける」
「え？」
「ここはそういう場所だろう？」
「……」
「俺は、そうだな、青いＬ・Ｊに百万」
「……俺は、ララに賭ける」
「いくら」
「俺の命」
「ハア、ハア、ハア」
思った通りの反応だった。
「スウィーティ、お前の命は百万じゃ安い」
「だったら、バングも命を賭ければいい」
「ハァン、俺とお前の命じゃあ、それこそ吊り合わないな」
「だったら……」
「やめておけ、お前に駆け引きは無理だ」
「ッ……」
「あいつの真似事は、誰にもできない」
そう言って持ち上がった唇の奥で、ライトに照らされた犬歯が、てらてらと光った。
その上を這いまわる舌先の、なんとも不気味な紅色。
……と、次の瞬間。
「あ、あ……ッ」
ソファへ押さえつけられ、のけぞったユウの喉に、なんと、バン

グの犬歯が食らいついていた。
「バ、バン、グ……ッ！」
吸血鬼のそれと言うよりも、獣が優位性を見せつけるさまに似ている。
喉仏を挟むように刺さった牙は、深く、血流を止めるほど入りこみ、ぷつ、ぷつ、と皮膚を裂いて、すぐに離れた。
ユウは、恐怖した。
「ハァン、俺は六億賭けるぞ、スウィーティ。お前の、命の値段だ！」
「はっ……はぁっ……」
「この血は、その契約書がわり。ハア、ハア、ハア、楽しいファイトになりそうだ」

武闘遊技

「これ？」
「ああ。うちで一番性能のいいやつだ」
「趣味悪ぅ……こんなのでちゃんと動くわけ？」
「当たり前だ、俺だって死にたくない。さ、早く乗れよ。武器はその辺のを適当に取れ。許す」
ベラベラとまくし立てたジョッシュは、その、胸にふくらみまで持たせた女性型Ｌ・Ｊへ、ララを押しやった。
どうやら元は、サリエリ機アルコルと同型の一〇〇〇系Ｌ・Ｊであるらしいが、鉄板で金髪らしきものを演出し、腰には、宮廷で貴族令嬢が着るようなスカートを巻いている。シルエットがプリンに似ているため、ララがひそかに『プリンスカート』と呼んでいる、布地の裏に骨が入ったあれだ。
もちろんＬ・Ｊ用のために骨はなく、こちらも、可動域を確保できるよう細かく分割された鉄板で組まれている。
では、このような、とても実用的とは言いがたいＬ・Ｊをどのように使用するのかというと、ララと同年代の少女を乗せるのだ。
そして見た目だけでなく、ダメージを受けた際の、生身の叫びやうめき、罵り声までもを楽しもうという、とにかく趣味の悪い用途に当てられるのである。
「最近はこういうのが流行りなんだ。戦が遠のいて、ただＬ・Ｊがやり合うだけじゃつまらないってんでな」
「……ふぅん」
「コクピットを狙うのも禁止」
「え……」
「お前みたいなガキが二束三文で手に入った時代とは違うんだよ。殺しちゃ出費がかさむ、一から育てるのも面倒だろ？ま、こいつはもちろん、観客たちには秘密だけどな」

「……」

「あああ、やばい。いいから早く乗れ！乗れよ！」

ララは、あれよあれよという間に昇降機へ乗せられ、そのコクピットに押しこめられていた。

改造Ｌ・Ｊ『アロニカ・？』。

なんの操作もしていないというのにハッチが閉まり、それは、起動した。

「お、また来たぞ！」

ララを迎えた観客たちの盛り上がりは、今や、最高潮に達していた。

突如乱入した水色のＬ・Ｊによって、先に対戦中であった二機がことごとく倒された。それだけでも面白い。

そこにまた挑戦者が現れた。女だ。

満場の殺せコール。

「ララ……！」

コクピットのララは、ふと、ユウに呼ばれた気がして顔を上げた。

「……ユウ」

切なかった。

この会場の空気は、自分が『レッドデビル』などともてはやされていた頃と、なんら変わらない。

しかし、当時はどちらかが死ぬまで、などというルールが日常のように適用されていたものだ。

もちろん、それのない今をうらやんでいるのではない。

今の連中は苦労をしていないと、愚にもつかない先輩風を吹かせたいわけでもない。

ただ、自分のしてきたこと、そして、それをユウに見せまいと今日流した涙は、一体なんだったのか。

それを思うと、心に穴が開いたようになった。

気づくと目の前に、シュナイデのナーデルバウムが立っていた。
『ウ……ア、ア……』
『？』
なんだろう。以前のシュナイデとは様子が違う。
マイクを通して聞こえるのは、荒い呼吸とうめき声。
棒立ち、という印象だったナーデルバウムも、どこか獣じみた様子で背を丸めている。
『ちょっと……』
『……ョー……』
『え、なに？』
『ジョー……ジョー……ブレイカー』
『ジョー？』
『ジョー、ブレイカーを……ア、あ、アア！』
一歩二歩、先の尖った足でよろめいたナーデルバウムの腕が、大きく遠心力をつけて、アロニカ・？をなぎ払った。
「やった！」
観客のひとりが声を上げたが、気落ちしていようとララはララだ。まさか、こんなものでどうにかなるはずもない。
アロニカ・？は片足を軸にくるりと回転したかと思うと、まったく危なげなく間合いをはずしている。
スカート、いや、腰の鉄板がひるがえり、大歓声が上がった。
『ジョーブレイカーは……敵！』
『……』
『あ、あぁ、敵……敵！』
ララはここにきて、むらむらとわき起こる怒りをどうすることもできなくなった。
そうだ、こんなことがあるか。
今日は人生最高の日になるはずだった。
それをジョッシュがぶち壊し、変態がぶち壊し、シュナイデがぶ

ち壊した。
おまけに、シュナイデの狙いはジョーブレイカー。いいとばっちりだ。
『なにさ、なにさなにさ！』
『ジョー、ブレイカー！』
『うるさいっての！』
得物を握りしめたアロニカ・?の両腕が、ものすさまじい風鳴りを立てて振り抜かれた。
激しい衝撃音。
それをまともに受けてしまったナーデルバウムの機体が、くの字に折れ曲がる。
そして、
『あ、あ、あ?』
アロニカ・?もまた、武器の重さに耐え切れず、振りまわされる形で体勢を崩してしまった。
『ちょ、なんで！』
……実はこのときまで、ララは自分の武器がどのようなものか知らなかったのだ。
アロニカ・?の武器、というより、切なさに心を奪われ、ぼんやりとしていた自分が知らず知らずのうちに選び取っていた武器。
それは、バネの反動で杭を打ちこむ『パイルクラッシャー』。力に欠けるＬ・Ｊでも、一撃で敵を葬り去ることができる必殺兵器であった。
しかし、その最大の欠点とも言えるのが重量で、サンセット?ならばまだしも、アロニカ・?ではどうしても両手持ちになってしまう。
『く……ううう、上ッ等ぉぉッ！』
ララは気合一声、アロニカ・?を踏みとどまらせると、Ｌ・Ｊでも丸太をかかえているかのように見えるそれを抱き直し、装填ハンドルを、ガチン、と引いた。

こんなハンデも、昔は星の数ほど経験した。
そして、そのたびに勝ってきた。
『どいつもこいつも、舐めんじゃないっての！』
闘技場は、この日一番の歓声に包まれた。
『ウ、ウウ、ウ……』
闘技場の端まで飛ばされたナーデルバウムが、生まれたての子馬のように、四肢を立てて立ち上がる。
そしてにらみ合うこと、数秒……。
『あ、ああ、ア、ア、アアアッ！』
ナーデルバウムが叫ぶ。
『あああああッ！』
ララもまた、雄たけびを上げた。
普段の戦闘では滅多に上げることはないが、シュナイデのそれに押しかぶせ、自分でも驚くほどの声が出た。
足先の刃をきらめかせ、スライディング同然に飛びこんできたナーデルバウム。
アロニカ・？はその延長線上に自ら居場所を定め、腰を落としてトリガーを引く。
なんとも形容しがたい音は、バネによって打ち出された杭がナーデルバウムを貫いたそれではない。ただの発射音だ。
その先端は、早くも危険を悟ったナーデルバウムの足元を抜け、なにもない空間を突いている。
ナーデルバウムは、アロニカ・？の頭上を飛び越えていた。
『フン』
こんなものは、たいした芸当ではない。
それなりの機体に乗れば自分でもできるであろうし、ギュンターやN・Sでも可能なはずだ。
たとえ、そこから流れるように攻撃へ転じたとしても、
『見え見え！』
ララは、すかさずパイルクラッシャーの先端を地面に突き立て、

砲身そのものを盾とした。
実はここに、ララの計算がある。
無意識の計算だ。
これならば地面で支えている分、振りかぶって攻撃を弾くよりも、はるかにアロニカ・？への負担が少ない。さらには、パイルクラッシャー自身の重みを杭にかけることで、それを引き戻す作業、いわゆる再装填までも容易におこなうことができるのである。
数撃を受ける間にもパイルクラッシャーは装填完了し、アロニカ・？は砲身を蹴り上げて、ナーデルバウムに砲口を向けた。
ナーデルバウムは華麗にバック転を決め、その射程から逃れた。

「すげぇ！」
「こんなの見たことない！」
観客は大喜びである。
「俺はアロニカに賭けるぜ！」
「青いほうだ！青いほうに五百！」
と、すぐさま、天井にぶら下がる掲示板にオッズが表示される。
倍率は、『青いＬ・Ｊ』ナーデルバウムがやや高い。つまり、アロニカ・？のほうが人気があるということだ。
「……心配するな。俺たちの賭けに、オッズは関係ない」
そう耳元でささやいたバングは、手すりから身を乗り出して勝負の行方を見守るユウの肩を、ゆっくりとなでまわした。
「別に、そんなことは心配してない」
「ハァン」
「取り分がどうなろうと、きっとララが勝つ」
「……お前は、そんなところまで、あいつそっくりだ」
「……」
「やけるな」
「放してくれ」
ユウは、首の噛み跡へ伸びかけた指を、あえて強く振り払った。

「……ハァン、スウィーティ、見ろ」
「え？」
「これは、決まるな」
見ると、場内のボルテージも、ちょうど跳ね上がったところである。
滅多やたらに、なんの計算もなく暴れまわるシュナイデ。それを持て余し始めたララが、闘技場の端へと追い詰められたのだ。
野生の猛獣相手では、どのような剣の達人でも苦戦する。まさに、そのような状況と言っていいだろう。
それでもララは、ただのＬ・Ｊ乗りではない。
『天才』Ｌ・Ｊ乗りだ。
ジョーブレイカーの名を口走りつつ、幾万もの敵と戦っているかのような狂態を示すシュナイデの好きにさせておきながら、ここぞという瞬間を待っていた。
『あ、ああ……ッ！』
『え？』

……おそらく観客のほとんどは、ララがなにかをしたのだと思っただろう。
だが違う。
ナーデルバウムは諸手を振りかぶり、それをアロニカ・？の頭上へ振り下ろさんとしたかと思うと、突如小さく声を上げ、勝手にのけぞったのだ。
あれ、と思ったが、これしきのことで手を止めてやるほど、今のララは甘くない。
『フン、バッカ！』
杭の先を、よろめいたナーデルバウムのコクピットへ押し当てた。
『命令……受信、できません』
と、苦しそうにつぶやかれたその声が、歓声によってドラを打ち鳴らしたようになっている闘技場内で、一体誰の耳に届いただろう

か。

『さよなら！』

ララの指が、躊躇なくトリガーを引いた。

そのときである。

いや、正確には、ララがトリガーを引く数秒前のことだ。

それこそ誰の目にも止まらぬ速度で、丸天井近くにある整備用の足場から降下してきた人影が、杭の先とナーデルバウムの間に、身体を差し挟んできた。

『ジョー！』

ここで、たとえわずかにせよ、すでに打ち出されつつあった杭を上方へ傾けられたのは、乗り手がララであればこそだ。

パイルクラッシャーに比べれば、ジョーブレイカーなど砂粒も同然。直撃すればどのようなことになるかなど、火を見るより明らかだ。

激しい火花を上げた杭の先は、装甲板をえぐりながらもコクピットハッチを避け、ナーデルバウムの首を跳ね飛ばした。

……『勝者、アロニカ・？』。

電光表示が輝くと、悲喜こもごもの叫びが、場内を揺るがした。

夢のエピローグ

まだ歓声はやまない。
「ララ！」
格納庫へ戻ってきたララを迎えたのは、ユウの抱擁だった。
「よかった……」
「……うん」
硬く、たくましい胸に抱かれ、ララの口からため息がもれる。
背中にまわされた手のひらから、じんわりと、心臓のあたりへ、ぬくもりが広がってくるような気がした。

「……ごめんね」
「なにが」
「あたし……コクピットをつぶすのなんて、全然なんでもないの」
「……」
「お金がかかってても、かかってなくてもそうなの」
ジョッシュから、今はコクピット狙いが禁止だと聞いたときは確かに気が抜けたが、別にそれも、自分にとっては意味のないルールだったのだ。
ユウに見られたくなかったのは、おそらく、戦争や制約という裏づけがなくても、人を殺せてしまう自分。
「わかったの。あたしきっと、そういう風にできてるの。だから……」
「俺もわかってた」
「え？」
「初めて会ったときから、ララは容赦なかった」
「う……」
「だから、今さらだ。そんな風に縮こまることない。これからだって、気に入らないならすぐに手を出せばいい」

「ううん、なんか、複雑」
「でも、そうだ。命がけの戦いをしてるのに、コクピットを狙うなんて俺には言えない」
「ユウ……」
「そんなララだから、俺たちも頼りにしてるんだ」
ララはひとつ鼻をすすり、ユウの胸板へ顔をこすりつけた。
「なんかあたし……なに悩んでたのか、わからなくなっちゃった」
「人の悩みなんてそんなものさ。誰かに話したら、八割方は解決するんだ」
「ユウも、そういう悩みあるの？」
ユウはただ、微笑みで返した。

そこへ……。
「カウフマン」
「ジョー、怪我をしたのか！」
場内清掃車に引かれて、ナーデルバウムが戻ってきた。
なんともひどい扱われようだが、これが闘技場の流儀だ。好試合を見せても、負ければゴミ同然。嫌ならば勝てということだろう。
ナーデルバウムに付き添うジョーブレイカーは、パイルクラッシャーにかすめたかどうかして、左肩を押さえていた。
「誰か医者を……！」
「問題ない」
「なに言ってるんだ、一応みてもらったほうがいい」
「構うな」
決して荒げたわけではない静かな声であったが、有無を言わさぬその迫力に、ユウはそれ以上なにも言えなくなってしまった。
ジョーブレイカーは、四肢を折り曲げ、死体のごとく横たわるナーデルバウムを見やり、
「手を貸せ」
「え……？」

「シュナイデを降ろす」
その胸部装甲板をのぼり始めた。
「ま、待ってくれ」
これは当然、追いすがらざるを得ない。
「今の彼女は危険だ。様子がおかしかった」
「もうその心配はない」
「どうしてそう言える」
「送信機を破壊してきた」
「送信機？」
「絶えず命令を送っていた。私を殺すようにと」
「だ、誰が、いや、どこから……」
「……上だ」
「ジョ、ジョー！」
取りつくしまもなく答えたジョーブレイカーは、コクピットハッチわきにしゃがみこみ、外部開閉装置のハンドルを九十度、回転させた。
シュッ、という排気音。
ひとりでに、ゆっくりと持ち上がったハッチのその内部を見て、ユウは驚愕した。
「こ、これは……？」
普通コクピットと聞いて想像するのは、モニターに囲まれたシートと操縦桿、フットペダルである。
しかしナーデルバウムにはそれら、映像機器も、入力機器さえも存在しなかった。
シュナイデはただ、巨大なゴーグル付きのヘルメットを装着した状態で、背もたれを深く倒したリクライニングシートに横たわっていただけだったのである。
「シュナイデ」
さして驚いた様子もなくコクピットに入りこんだジョーブレイカーが、そのヘルメットを脱がせ、まるで妹を呼ぶかのようにささや

きかける。
「シュナイデ」
紺のラバースーツに包まれた細い腕が、静かに持ち上がった。
「……ジョー、ブレイカー……？」
「そうだ」
「……命令を」
「その必要はない」
「ああ、博士……命令を……」
そう言ってシュナイデは、再び、がくりと首を垂れた。

「大丈夫なのか？」
「うむ」
「俺は、どうすればいい」
「そこで待て」
ジョーブレイカーは、痛むはずの左腕をシュナイデの首下へ差し入れ、その上半身を抱き起こした。
艶やかな松葉色の髪がかき分けられ、そのうなじがあらわになると、
「あ……！」
またしても衝撃の事実だ。
シュナイデの盆の窪に、極太のケーブルが接続されている。
しかも、ジョーブレイカーがそのつけ根をねじり、ぐいと引くと、プラグのようなものが五センチも刺さっていたことが見て取れた。
シュナイデが並の人間でないことはわかっていたが、これはどうも、理解の範疇を超えている。
盆の窪に開いた『差しこみ口』は、すぐにせり上がってきた金属のふたによって、ふさがれた。
「彼女は、一体……」
「いずれ話す」
「連れて行くのか？」

「……」
「わかった」
戸惑いながらも、ユウはジョーブレイカーの持ち上げたシュナイデの身体を、ハッチの外から引き上げた。
と……。
「う……」
ラバースーツ越しにも感じる、若々しい張りに満ちた乙女のふくらみ。柔らかな腰まわり。
目を伏せたあどけない顔と、わずかに開いた唇は口づけを待っているようで、ユウは思わず顔をそむけた。
これは困る。
こうした不意打ちが、一番困る。
「カウフマン」
「あ……や、やっぱり、ジョーが連れて行ってくれ。頼む」
ジョーブレイカーは眉ひとすじも動かさずにシュナイデをかつぎ直し、五メートルほどの高さを、軽々と飛び降りていった。

「あれ。ユウ、大丈夫？」
「え、な、なにが」
「顔赤いよ」
「あ、ああ、暑いから」
「そっか、そういえばそうかも」
「ああ、早く帰ろう」
「うん」
ララは飛びつくようにして、ユウの左腕へしがみついてきた。
「幸せなふたり。いいわね、ぶち壊してやりたくなる」
「あ、変態」
「あ、は、は」
それは、しゃなりしゃなりと、用心棒をひとり連れて現れたスコ

ルピアであった。
もはやララの中では『変態』という位置づけで確定してしまったようだが、当の本人はもちろん、そんなものは気にしていない様子だ。
「なんか用？」
警戒心もあらわにララが聞くと、
「可愛い子」
と、顔を寄せ、ちろり、その鼻頭を舐める。
「気持ち悪ッ！」
ララは力いっぱい突き飛ばしたが、それも、スコルピアを喜ばせただけだった。
「スコルピア」
「ええ、ええ、わかっていてよ。まずはこれ」
ふたりのコートと太刀が、連れの用心棒から返された。
「そしてこれ」
と、キャスター付きの荷台に乗せて運ばれてきたのは、積み重ねられた木製の金箱六ケース。
中身は、
「とりあえず、半金の三億」
「さっ、三億ぅ？」
ララは、飛び上がって驚いた。
「こ、こ、これ、なんのお金？」
「それは……」
まさか、自分の命の値段だとは言えない。
「バングのこころざし。そんなところかしらね」
「へ、へぇぇ、太っ腹ぁ」
「とりあえず確認してちょうだい」
「あ、見る見る！」
美しく敷き詰められた大金貨の列を目のあたりにして、ララは笑ったり驚いたり、ころころと表情を変えてはしゃぎまわった。

「まだ、このあたりにいるんでしょう？明日には、もう半金も用意しておくわ」
「わかった。それじゃあ……」
「あら、お土産はこれだけじゃなくてよ」
「え？」
「他に必要なものがあれば、なんでも言ってちょうだい」
「いや、それは……」
「いいのよ」
スコルピアは、ユウの耳元へ唇を寄せた。
「これは、あなたが自力で手に入れたお金。あたしたちは、本当のこころざしをあげたいの」
「……バングが、そう言ったのか？」
「ええ。あの人は、『スウィーティ』のためならなんでもしてよ」
「その割に……」
「その割に？」
「今日は、意地が悪かった」
「あ、は、は、は。退屈していたんでしょうね」
「む……」
ユウは憮然となった。
その退屈しのぎのお遊びに、命を賭けてしまったのか。
「惜しかったわ。いいおもちゃが手に入るところだったのに」
「……」
「さあ、なんでも言ってちょうだい」
ジョーブレイカーが、一歩進み出た。
「カーゴが一台欲しい」
「ジョー？」
「このＬ・Ｊも連れていく」
「結構よ。すぐに手配しましょう」
「あたしは飴！」
「ああん、いやらしいのね、イチゴちゃん」

「なんで？」
「俺は……」
「そうよ、あなたはなにが欲しい？ユウ」
しばし首をひねったユウは、はたとひざを打った。
「新年の飾りだ」
「ええ？」
「今日、買い忘れたんだ。山ほど欲しい。荷車いっぱいだ」
ララの目も輝く。
「ううん、荷車ふたつ……みっつ分！」
「祝い菓子も欲しい」
「これもいっぱいね！」
ユウとララは顔を見合わせ、あははと笑った。
「どうだ？」
「ええ、まあ、それがお望みならね。でも……あ、は、は。まさか、吸血鬼一家がそんなものを買いに行かされるなんて、とんだ笑い話だわ」

この日はこれで別れることにし、ユウとララはジョッシュの案内で、再び市壁の裏口から外へ出た。
もう深夜も深夜。夏ならば、あと一時間もすれば薄明るくなろうかという時間帯である。
「あああ、まったく散々な一日だったぜ」
「それはこっちの台詞だっての！」
ララは、ジョッシュのすねをしたたかに蹴り上げた。
「痛ぇッ！」
「あんたが声なんかかけてくるから、こんなことになるんだから！」
「やめッ、やめろ！この、ガキ！」
負けじとジョッシュも腕を振り上げたが、こちらは、ユウのひとにらみで動きが止まる。

「へ、へへへ……」
裏社会の帝王たる吸血鬼のお気に入り。それにたてつく勇気は、この男にはない。
マンムートを鉄機兵団に売るなどもってのほか、ということも、今ならば理解できるはずだ。
「わかってる、わかってるよ」
と、愛想笑いを浮かべ、わざとらしく、ララの頭をなでた。
「あんたとは、もうこれきりだからね」
「当然だ」
「せいぜい、長生きしなよ」
「ああ、お前もな。ほら、さっさと行け。行っちまえ」
「ちょっ、なにさ！」
「俺はまだ、仕事が残ってるんだ」
「どうせ金勘定でしょ」
「ああ、それのなにが悪い。俺はいつか、帝都に闘技場を持つんだ」
「あ、そ」
「いいか、絶対来るなよ」
「誰が」
「絶対だぞ。絶対、その面見せるな」
「はいはい、さよなら！」
こんな調子でそびらを返したジョッシュは、ララと、べえ、と舌を出し合い、戸口の奥に消えた。
あとには、嘘のような静寂と、暗闇のみが残った。

……ふぅ。
小さな小さな、ララのため息が聞こえる。
そうだ。その気持ちはよくわかる。まるで、今夜のことすべてが夢だったようだ。
ララの涙。ララの相棒。
スコルピア。吸血鬼。そしてシュナイデ。

立て続けに事が起こり、そして消えていった。
左腕に視線を落としても、目の慣れていない闇の中で、ララの表情はまったく見えない。
ただ、腕を抱かれている感触だけがある。
かぎなれた、ララのにおい。
今は泣いていないだろうか。
今は、元気が出ただろうか。
「ユウ……？」
ユウは自分でもわからぬまま、見えない力に引かれるように、顔を差し寄せていった。
心臓が高鳴っている。
もうすぐ、ふれる……。

「！」
そこでユウが、パッと身を離したのは、近くで光石灯が光ったためだ。
眼下のララも光の出所を向き、身を硬くしている。
「ジョー……？」
「いや」
Ｌ・Ｊカーゴのジョーブレイカーとは、正門前で合流することになっている。
「誰だ！」
「あ、あの……」
「あ！あんた、さっきの……」
まさに、この場所でララを待っていた、ジョッシュの手下。あの少年であった。
「あんた、ここでなにしてるわけ？」
と言うララは、ユウが先ほどまでしかけていたことに、まったく気づいていない様子である。
ユウは胸をなで下ろし、少年に、もっと近づくよう言った。

少年は、素直に従った。
「……殴られたのか」
「あ……はい、その……」
少年は、赤く腫れ上がった顔をぬぐうような仕草をした。
その指先が小刻みに震えているのは、随分と前から、ここで待ち受けていた証拠に他ならない。
「用はなんだ？」
ユウが聞くと、少年はうつむいて、口を閉ざしてしまった。
「名前は？」
「……ロビン、です」
「俺はユウだ」
「……」
「なにか、用があるんだろ」
「あの……」
「ああ？」
「俺も……俺も、連れてってもらえませんか！」

ユウは、目の前の少年をまじまじと眺めた。
ここを出て行くために全財産かついできたのだろう。先とは違う厚手のコートを着こみ、腰には短剣、パンパンにふくらんだ古い布カバンを肩から下げている。
ぐっと、指先が白くなるほど握りしめた手はあかぎれで血がにじみ、目は、言ってやったぞという高揚感で光っていた。
こちらの正体をどこで知ったか、など、問う必要もないだろう。
もう下部まで、噂は広がっているのだ。
「俺、Ｌ・Ｊも、ちょっとだけなら操れます。掃除でも、洗濯でも、なんでもやります。俺もう、ここにいるのは嫌なんです！」
「……」
「お願いします。お願いします！」
少年、ロビンはついに、雪に手をついて頭を下げた。

「ユウ……」
「……ああ」
ユウもまた片ひざをつき、ロビンの冷え切った手を取り上げた。
「歳は？」
「十八……です」
「正直に」
「十……五」
「戦争で、家族を？」
「たぶん。わかりません」
「そうか」
「あの……」
「連れてはいけない」
「え、ど、どうして！」
「マンムートは避難所じゃない」
目をむいた少年を、ユウは、力をこめて見据えた。
「仮に俺たちについてきたとして、ロビンはなにをする」
「なにって……」
「俺たちには目標がある。ロビンにはあるのか。炊事洗濯がそれなのか」
「う……」
「そんな半端な考えでも、一度マンムートに乗せれば、俺たちのリーダーは守らなければならなくなる。俺は、彼に余計な命を背負わせたくない」
「じゃあ！」
あふれ出した熱い涙をぬぐいもせず、ロビンの腕が、ユウの襟をつかんだ。
「じゃあ、俺はどうすればいいんですか！もう戻れないのに、どうすれば！」
こうして荷物をまとめて出てきてしまったからには、裏切り者と

して追っ手がかかる。
捕まれば、待っているのは血の制裁だ。運良く命を長らえても、一生を奴隷のように過ごさなければならないだろう。
それが、暗黒街の掟。
ユウもよくわかっていた。
……しかし。
「その気があるなら、俺が口を利いてもいい」
「え……」
「俺がバングに一筆書く。そうすれば、ロビンは自由だ」
ロビンの目が、聞きなれない自由という言葉に戸惑い、泳いだ。
「そのかわり、ここから先は自分の足で歩くしかない。この街を出て、自分自身の力で、住む場所と仕事を見つけるんだ」
「俺、無理です。今さら……」
「できるさ、まだ若いんだ。目を開いて、いろんな町の、いろんなものを見て歩くといい。レンガひとつでも、きっと発見がある」
「でも……」
「ロビン」
「は……はい」
「行くんだ」

襟元をつかむロビンの手から、震えが消えた。
お前ならできる。その想いを乗せてうなずくと、ユウを見上げるその目の中に、みるみる、先ほどの勇気がわいて出て、
「行きます」
はっきりと、答えが返ってきた。
「俺、行きます。だから、手紙、書いてください！」
「ああ」
ユウは喜んで、ロビンがカバンから引っ張り出したノートに、バングへの手紙を書いてやった。
「この一ページ目を、必ず、バングの身内に見せるんだ。そうすれ

ば、きっと上手くはからってくれる」
「はい！」
「ジョッシュの手下に捕まったときは、構わないからこう言うんだ。俺は、レッドアンバーのヒュー・カウフマンから、バングへの手紙を預かってきた。俺に手を出せば、ただじゃ済まないぞ」
「はい」
「そして、これを見せる」
ユウは、自身の財布から大金貨を一枚取り出し、ロビンの手のひらへ握らせた。
一万フォンス。ただの使い走りが得るにしては、破格すぎる報酬である。
もちろん、ロビンのような子どもがおいそれと蓄えられる金額でもなく、だからこそ、ユウのものだという真実味が増す。
これは、この旅が始まったときから緊急時用に持ち歩いていた、ユウのへそくりとも言えるものだった。
「これは、返さなくていい」
「え、でも……！」
「いいんだ。これだけあれば、ゆっくり、仕事が選べる」
「あ……」
「それに……今は金持ちだからいいんだ」
手のひらの金貨を見つめ、それを、ぐ、と握りこんだロビンは、同じ腕で顔をこすり、深々と頭を下げた。
「メイサのご加護を」
「は、はい、あの……ユウさんも！」
そうしてロビンはもう一度、遠ざかっていく光石灯の明かりに向かい、頭を下げた。
そして金貨を握りしめ、胸を張って、裏口へと歩き始めた。

「なあ、ララ」

「なに？」
「俺、昔、彫金師になりたかったんだ」
「え、なに、突然？」
「いや、もしかしたら、そんな道もあったのかもしれないな、と思って」
「そっか……うん、あたしはねぇ、魔法使い！」
「ハハ、ララらしいな」
「今なるなら、お菓子屋さんかなぁ」
「俺は、錠前も作ってみたい」
「先生とかもいいかもよ」
「ララは盗人も向いてる」
「ええ？なにそれ」
笑い合うふたりの手は、互いにまったく知らぬ間に、固く、結び合っていた。

父の心臓

翌日は、よく晴れた。
白い太陽。澄んだ空。
きりりと冷えた大気は、雪かきの習慣が染みついた北部出身者をベッドから起き出させ、南部出身者をベッドに縛りつける。
おはよう、と言い交わされる声が、いただきますに変わり、明るい笑い声を立て始めた人々がふと外を見て、
「今日は、いい一日になりそうだ」
そう思えるような、素晴らしい日和であった。
日の光を浴びた氷化粧の樹木が、きらきらとその身を輝かせているのを、クジャクは目を細めて眺めやった。
「クジャク様」
「……ああ」
この日も、マンムートは昨日と同様、様々に姿かたちを変えた買い出し班が、アールシティへくり出す予定でいる。
それに先立ち、遊山中の貴族の従者、といった風に扮装した男ふたりが、例の三億フォンスの一部を馬そりに積み、マンムートを出発した。使いやすくするために、両替しに行くのである。
クジャクはその警護役として、ついていくことになっていたのであった。

さて、それからしばらくして。
ユウとララは昨夜の睡眠不足を補うためにそれぞれの部屋へ戻り、アレサンドロ、ハサン、セレン、ジョーブレイカー、そしてシュナイデが、ブリーフィングルームに集まった。
常のとおりコーヒーが出され、その目の前でスクリーンに映し出されたのは、かつてジョーブレイカーが堂々と奪い出した、シュナイデの身体データだ。

「なに……」
身を乗り出したアレサンドロとセレンの、目の色が変わった。
「こいつは、真面目な話だろうな」
「うむ」
「信じられねえ……」
「心臓サイズの……光炉」
先にもふれたが、現在の技術力で可能な光炉の大きさは、最低でも一メートル立方。人の胸に収まるサイズではない。
それがデータ上は、シュナイデの心臓として埋めこまれているという。
おまけにアレサンドロは、シュナイデの骨組織、筋組織が、N・Sのそれに酷似していることを知っている。
「つまりなにか。こいつは……生きた人間の脳を使った、小型N・Sだってのか」
「そうだ」
「ありえねえ。あるわけがねえ！」
アレサンドロの手が、激しく机を打った。
「こんなものを帝国が作ったってんなら、今頃小型L・Jがうようよしてるはずじゃねえか！」
「アーレサンドロー」
「うるせえ！間違っちゃいねえはずだ！」
「だが、事実だ」
静かに、しかし断定的に告げられたジョーブレイカーのひと言に、アレサンドロは、ぐっと言葉を詰まらせた。
「だがよ……」
「そうだ。これを作り上げたのは、宮廷博士スダレフではない」
「なに……？」
「東方の博士、ジン・バルザール。……私の、父だ」

ジョーブレイカーの告白は、その後、昼前に目覚めたユウへも伝えられた。
「ジン・バルザール？」
「ああ」
ユウを、パーソナルスペースとも言える医務室併設の薬品庫へ連れこんだアレサンドロは、椅子をすすめつつ、うなずいた。
「俺もまだ、全部を納得できたわけじゃねえが、聞いたままを話すぜ」
「ああ」
「あいつの親父、ジン・バルザールは、確かに、小型Ｎ・Ｓの研究をしてたそうだ。十五年前、あの戦が始まるずっと前からな」
「その頃から、Ｎ・Ｓは……？」
「あったぜ。数自体は少なかったって話だが、歴史は古い。そう、聞いたことがある。ほら、マンタがよ……」
「ああ」
そういえば、二百年前に、Ｎ・Ｓで川をのぼろうとした、と言っていたのだったか。
ただ、それをどうして『小型』にする必要があったのか。
息子であり、武芸を磨くかたわら手伝いをすることもあったジョーブレイカーでさえ、その目的はわからなかったという。
研究者としての興味か、不死の命への憧れか。
とにかく事実として存在しているのは、博士がそうした研究をしていた、という一事のみであった。
しかし……。
夢の実現に目鼻がつき始めた頃から、父のふさぎこむ姿をよく見るようになったとも、ジョーブレイカーは語った。
原因は、先駆者ならば誰もが経験する、倫理と追求の板ばさみ。
特に、超小型光炉は人類の発展にもつながる大発明ではあるが、同時に、最悪の兵器をも生み出しかねない。その想いに、博士は足を取られたのだ。

結局、博士はもがき、苦しみながらもN・Sの組成構造を解明し、そして、光炉を完成させた。
「それが、シュナイデの……」
「いや……まあ、最後まで聞いてくれ」
アレサンドロは、渋い顔を崩さずに、あごをかいた。

それは、三日と空けずに通っていた、剣術道場からの帰り道。ジョーブレイカーが父の研究所へ立ち寄ったときのことだ。
乾燥帯のエド・ジャハンではなによりも大切にされる裏の井戸で行水を使い、母屋の隠し扉から地下研究室へ下りると、むっと、生臭いにおいがこもっている。
「ち、父上！」
当時はこれも貴重だった大光炉の前に、赤く染まった父がうずくまっていた。
「父上、お怪我を！」
駆け寄ったジョーブレイカーが胸に抱き起こすと、まだ息がある。
「お気を確かに！父上！」
そこで、ハッとした。
そこは剣術を習っているだけに、父の衣服に残った刺し跡が、刃物によるものだとすぐにわかったのだ。
ひと声うめいたジン博士は、苦しげに目蓋を開け、
「あ、あ……」
必死の形相で、息子の肩をつかんだ。
「あ、あれが……あれが、奪われた……ッ！」
「あれ？まさか……光炉が？」
この日をさかのぼること三日前。超小型光炉の改良型が完成している。
今日はそのテストをすると、無論、ジョーブレイカーは知っていた。

「いかん、あれを……あれを……う、うう！」
「どうかそのまま。今、医者を呼びます」
ジョーブレイカーは手早く衣を裂き、腹の傷所へ押し当てた。
そうして、立ち上がりかけたところで……、
「うッ……！」
背から腹にかけて、熱い金棒を突き入れられたかのような感触を覚え、視線を落とした。
それは、エド・ジャハンのものではない、手入れの悪い西方の剣だった。
「何者……だ」
と、言ったものの振り向くことかなわず、ジョーブレイカーは目をむいて驚愕する父の胸へ、そのまま崩れ落ちた。

「……次に目覚めたとき、私は別のものになっていた」
ジョーブレイカーは言った。
どこがどう、ということではない。
作業台らしきものに乗せられた身体が硬くこわばり、指先一本も思うように動かせなかったことは事実だ。しかし、そんなことではない。
「死にながら生きている」
そう感じたと、ジョーブレイカーは語った。
そして。
その後に気づいた、全身の縫合跡。
ふれただけで鋼鉄をねじ曲げる、制御不能の力。
台の下に倒れ伏した、父の亡骸。
血で書かれた、謝罪の言葉。
「私は知った。この身体こそが、父の研究成果、そのものなのだと」
ジン博士が、それこそかきむしる想いで作り上げた超小型光炉の初号機は今、ジョーブレイカーの胸に収められているのであった。

それから……およそ二十年。
歳を取ることを忘れたジョーブレイカーが、遠まわりに遠まわりを重ねてたどり着いた父の仇こそスダレフであり、奪われた改良光炉は、疑いようもなく、シュナイデの心臓となっている。
「仇は取る」
そう、きっぱりと宣言したジョーブレイカーだが、シュナイデの身の振り方へ話が及ぶと、わずかに、思い惑うそぶりを見せた。
「……この娘に罪はない」
「それは、君の手元に置きたいということか」
「そうだ」
問うたハサンは、フフンと笑った。
何事もまかせます、といった様子で身じろぎもしないシュナイデを、ジョーブレイカーの目はどこまでも優しく、どこまでも哀しく見つめていたそうだ。

「あいつも、魔人と同じなのかもしれねえな」
「え……？」
「先生が言ってたぜ。好きや嫌いは別として、『自分と同じもの』は特別なんだ、ってな」
「……そうか」
「その、スダレフって野郎をヤるのは簡単だろうが、そのあとのことを考えると……あいつにはやっぱり、あの女が必要だぜ」
「ああ、俺もそう思う」
ユウにはもちろん、否やはなかった。
「今は一応、Ｌ・Ｊ込みで発信機やらのチェックをさせてるが、それが問題ねえようなら、あとは全部ジョーにまかせる」
「他のメンバーには？」
「まあ、モチやクジャクはともかく、それ以外の連中には、わざわざ聞かせてやる必要はねえんじゃねえか？もちろん、お前が話してえって言うなら、そりゃ構わねえけどな」

「俺は、別に……」
失言だったな、と、ユウは頭をかいた。
「お前、また街に行くんだろ？」
「え、あ、ああ」
「今日は楽しんでこいよ」
「ア、アレサンドロ！」

除夜

成り立ちは違えど、起源を同じくするジョーブレイカーとシュナイデ。

ふたりが人ならざるものである、という事実に一番興味を示したのは、やはりセレンだった。

なにより、身体構造は似かよっているというのに、攻撃と防御、ふたりの性質が両極端であることに食指を動かされたらしく、その後も研究室に呼びつけては様々な質問をぶつけたようだ。

「彼女は面白いね」

コピーをしない、という条件つきで借り受けたシュナイデのデータを、研究室で、飽くこともなく読みあさっていたセレンが、久方ぶりに姿を見せたシャワー室でこう言った。

「彼女の筋肉はとてもいい。硬さもそうだけど弾力があるんだ。水平方向だけじゃなく、垂直方向にもね」

「ふぅん」

水石けんを頭に振りかけたララは、気のない返事で泡を立て始めた。

「あれなら、剣で切られても表面しか切れない。内臓もそう。骨もN・S並み」

「ボコ殴りにしてもダメってこと？」

「あのボディスーツも、衝撃を吸収するようにできてる」

「あれは？ほら、テリーの」

「ライフル？殺すのは難しいだろうね。肉が弾けないから」

「うわ、気持ち悪い言い方ぁ」

「エド・ジャハン刀なら切れるよ」

「……ふぅん」

ララは、ユウがほめられているようで嬉しくなった。

「でも……」

「なに？」
「いや」
セレンは、ララがジョーブレイカーについてはなにも聞かされていないようだと悟り、口を閉ざした。
「シュナイデに比べると、彼のほうが生きにくい身体をしているね」
そう言いたかったのだ。
シュナイデには及ばないまでも、人並み外れた堅固な肉体を与えられたジョーブレイカー。
しかし、くどいようだが、特化されたのは攻撃能力だ。
たとえば、呼び止めるために肩を叩く、というその行動だけでも、相手の肩を粉々に砕いてしまうほどの力がある。蚊を潰すために、壁にまで大穴を開けてしまうだろう。
無論、その制御には多大な労力と時間がかかっただろうし、これからも感情的になることなど許されないはずだ。
ジョーブレイカーが今のように人目を避け、人との交わりを絶って暮らすようになったのも、それが原因であるに違いないのだ。
「あいた！」
「ララ？」
「石けん、目に入ったぁ」
「……ふうん」
「イタタタ、セレぇン」
「そういわれても困るよ。よく洗うんだね」
「うぅ、意地悪ぅ」
ついたての向こうで、ぱちゃぱちゃと水を当てる音が聞こえ、セレンは苦笑した。
「ララはよかったよ。ホレた相手が、普通の人間で」
「なに？聞こえなぁい」
「なんでもないよ」
セレンは、手にしたスポンジを台の上に放り投げ、肌を覆う泡を洗い流した。

そうして体中の垢を落とし、さっぱりとしたところで、ふたりは着替えもそこそこに、またどちらからともなくおしゃべりを始めた。

「ね、あのＬ・Ｊはどう？」

「珍しいね」

「それだけ？」

長椅子に腰かけたララは、備えつけのウォーターサーバーから汲み取ってきた水を、ひと口飲んだ。

「あれはスダレフのオリジナルだと思うけど、たいしたものだね。感心した」

「でも、全然使えないっていうかさ」

「すごいのは、あのシステムだよ。ララも見ただろ？あれは、脳とＬ・Ｊを直接つなげて動かしてる」

「そりゃ見たけど……」

「いつか脳手術の成功率が上がって、倫理の壁も全部なくなる日が来たら、Ｌ・Ｊの操縦は、あれがスタンダードになるかもしれない。なにしろ、面倒な操作を覚えなくてもいいんだからね」

「Ｎ・Ｓだってそうじゃない」

「いや、戦争に必要なのは、痛みを感じないＮ・Ｓさ」

「……ふぅん」

「ただ、その時代が来たとしても長くは続かない。賭けてもいいよ」

「なんで？」

セレンは、コップを持ち上げかけた手を止め、にやりとした。

「人にできないことをするのが機械だからさ」

「ふぅん」

ララはよくわからなかったので、とりあえず生返事をした。

「じゃあ、そういうことで」

「え！セレンも手伝いに行くんじゃないの？」

「冗談じゃないよ」

アールシティを出発してからこの方、マンムートも二号車も、新

年祭の準備で忙しい。
太陽をかたどった、黄色い紙の飾りがいたるところにぶら下がり、誰もがうきうきと指折り数えている。
セレンは、そんなものはくだらない、と言うほど大人気ないわけではないが、年が明けた瞬間の酒を飲むだけで十分、と考える程度の無関心なのであった。
「ただでさえ格納庫があの有様で困ってるってのに、付き合ってられないよ。鉄機兵団が来たらどうするんだい」
「新年祭には戦争しないって決まってるじゃない」
「そういうことは詳しいね」
「あ、バカにして」
「してないよ。とにかく、私はパス。彼女を誘えばいい」
「シュナイデ？うぅん、あたし、あの子苦手。なに考えてるかわかんないんだもん」
「そういうところで人を区別しないのが、ララの長所だよ」
結局セレンは、なんだかんだと理由をつけて研究室に引きこもってしまい、無情にも鍵をかけられてしまったその扉の前で、ララはひとり、肩を落とした。
「あーあ」
冷たいの、と思うそのうしろを、普段マンムートにはいないはずの子どもたちが、騒ぎ立てながら駆けていく。おそらく紐を通した祝い菓子を、居住区中の部屋へ吊るしに行くのだろう。
「ひとつ貸しだからね！」
ララは、誰に見せるでもなく大げさに肩を怒らせ、その場をあとにした。

さて……。
そこからララが向かったのは、二号車の食堂であった。
これは別に食事をしにきたわけではなく、これから女連中で新年のごちそうを作る、その集まりに参加しに来たのだ。

大量一挙四百人分ともなると、一日二日でどうにかできるものではない。また、それでなくとも女には、日々たくさんの仕事があるというので、ララやセレンにも召集がかかったのである。

そして、

「花嫁修業になるよ」

という、セレンの捨て台詞を思い返してニヤニヤとしたララが、すでに、にぎわい始めている厨房の扉を開けると、

「あ……！」

そこには誰が呼んだのか、シュナイデの姿もあったのであった。

「なぁんだ、あんたもいたの」

先輩風を吹かせて言うと、シュナイデは、いかにもおとなしやかにうなずいた。

今日はさすがにラバースーツではなく、アールシティで仕入れてきた、まるでマッチ売りのような格好の上に、白いエプロンを巻いている。

それが見るからに清楚な風で、ララはわずかに嫉妬した。

「ジョーに言われて来たわけ？」

「いいえ」

「じゃあなに」

「呼ばれました」

「ふぅん……」

なにを聞いても、にこりともしないのだが、そこがいいと言う男も多いに違いない。

「なにさ、カマトトぶって」

ララからすれば、そんなところだが。

「いいけど、あんた、料理なんかできんの？」

「はい」

「邪魔したら承知しないからね」

「はい」

しかし結局、シュナイデはララの三倍も早くジャガイモを洗い、

五倍も早く、皮をむくことができた。
「う、ううう……い、言っとくけど、Ｌ・Ｊで勝ったのは、あたしだからね」
ララがナイフを振り回して言うと、シュナイデは黙々と動かし続ける手を止め、小首をかしげて、
「はい」
と、答えた。

それから、二日が経った。
いわゆる大晦日の日である。
この日ばかりは、いつも騒がしげなマンムートもしんと静まり返り、子どもたちの足声さえ聞こえない。人々の多くが普段より早めに仕事を納め、入れかわり立ちかわり仮聖堂を訪れては、今年一年の感謝をささげ、深く深く頭を垂れていく。
そこに、身なりを整え、無精ひげにかみそりを当てたアレサンドロと、珍しくマントを脱いだハサンとが現れ、礼儀作法を守った、げにも美しい立ち居振る舞いでぬかづいたときには、ユウのみならず周囲の誰もが、深い感動を覚えずにはいられなかった。
その、長い祈りの中で、ふたりはなにを想うのか。
ようやく開いたアレサンドロの目が、ふとユウへ向き、その足先から頭のてっぺんまでを眺めまわして、にこりと微笑んだ。
ユウは、頬が熱くなった。
実は、今日のユウは人生で初めて、神官衣にそでを通しているのである。
これはアールシティへ買い出しに出た、とあるメイサの神徒が譲り受けてきたもので、今でも、その神殿で使われていた香の匂いが、かすかに残っている。
「似合ってる」
アレサンドロの目は、ユウにそう語りかけ、再び祭壇へと向いた。

くり返される長い祈りののち、アレサンドロは、またハサンと連れ立って、仮聖堂を去っていった。

……こーん、こーん、と。

間断なく、鐘の音が鳴り響く。

神文を唱えながら、静かに撞木（しゅもく）を打つユウの手を、姿を、扉の陰から、ララがうっとりと見つめている。

こーん、とひとつ、大きく鐘が鳴り。

新しい年が、今、明けた。

新年の朝に

さあ、夜が明ければ新年祭である。
皆で、今年の守護神である太陽に向かって祈りを捧げ、酒樽が開かれた。
音楽が始まった。
ユウも、神官衣を脱いだ。
「おめでとう！」
「おめでとう！」
様々な地方の、様々なステップが、マンムートと二号車の中を跳ねまわる。
自分の部屋に吊るされていた、硬い祝い菓子をひと口かじったララは、
「あ、馬！」
中に隠された、小さな油紙片を開いて歓声を上げた。
「飛躍の年！ね、ね、ユウはなに書いてあった？」
「金貨だ」
「アハッ、またお金もらえるのかもね」
「俺にも聞いてよ、ララちゃん」
「あ、テリー、いたの」
「ひどい！ねぇ、ひどくない、彼氏さぁん」
ここのところ誰からも構ってもらえなかったテリーは、甘えるように、ユウへもたれかかってきた。
「もう飲んでるのか」
「そりゃそうだよ。いま飲まないで、いつ飲むの」
「む……」
それはそうだ。
「大体、こんなのは飲んでるうちに入らないよ。旦那見た？もう来る人来る人、みんなの酒を受けてるもんだから、ガバガバ」

「うわぁ、アレサンドロって、お酒大丈夫な人だっけ」
「まぁ、俺が見たときはケロッとしてたけどね」
「へぇぇ」
「だからほら、彼氏さんも飲もう！」
「なんで。飲めないの知ってるだろ」
「昨日は飲めなくても、今日は飲めるかもしれないじゃない」
「どういう理屈だ」
「それに酔っ払って倒れても、今日なら誰もバカにしないよ。大丈夫大丈夫」
「別にそういうことじゃない」
「じゃあ……」
と、テリーはユウの首を抱き寄せ、
「酔った勢いで、普段できないこともできちゃうかも、って言ったら？」
「え？」
「ララちゃんとキス、とかさ」
「テ……！」
「いや、もしかしたら、もっと深ぁい仲になれるかも」
「テリー！」
「ほら、男としちゃあ、女の子に飲ませて、ってのは嫌じゃない。だから飲んじゃいなよ、彼氏さん。男になるのはいまだよ、いま！」
「うるさい！」
ユウはテリーを押し退けて、熱気むんむんたる二号車の食堂を、足早に出て行った。
「……あちゃあ、真面目だなぁ」
「バカ！なに言ったのさ！」
「うぅん、この機会に、ララちゃんともっと仲良くなれって言っただけ」
「え、バ、バカ、余計なお世話だっての」
「そう？そりゃ、ごめんなさい」

「べ、別に、謝らなくても、いいけどさ……」
ララはもじもじと、指をつき合わせる。
「……早く追っかけなよ」
「う、うるっさい！言われなくたって！」
「うんうん、まぁ楽しくやってよ。俺もう、ちょっかい出さないから」
「だったら、最初から黙ってろっての！」
「あ、そっか、アハハハハ」
「バカ！」
ひとつ小突いて、ララも食堂を飛び出した。

「くそ……」
なにが、酔った勢いだ。
ユウは、ひと気のない仮聖堂へ滑りこむと、うしろ手に閉めたドアへ寄りかかり、ため息をもらした。
やけに心がむかむかとする。
祭壇の中央に祭られた光石の明かりが、ひどくわずらわしく思えるほどだ。
……人の気も知らないで。
ユウは光から目をそらし、再び、ため息をはいた。
「ユウ？そこにいる？」
「……ララ？」
「あ、やっぱりいた。開けてもいい？」
「ああ……」
ユウがドアの前から身体を離すと、すぐに、ララの頭がひょいと現れた。
「……怒ってる？」
「いや、別に」
「ユウがそう言うのは、怒ってるとき」
「……」

「ね、テリーの言うことなんかほっといてさ、お菓子食べにいこ？あたしも作るの手伝ったんだから」
ユウは、首を横に振った。
「なんで？」
「そんな気分じゃ、ないんだ」
「別に、お酒なんか飲めなくたっていいじゃない。気にすることないって」
「そうじゃない」
「じゃあ……テリーに言われたこと、気にしてるの？」
「だから……」
「あたしと仲良くしろって言われたんでしょ？」
「あ……」
「ほら、やっぱり」
ララはしょぼんとした様子で仮聖堂へ入り、静かに、扉を閉めた。
「ユウは、あたしといると、迷惑？」
「……いや」
これは、ユウの本心だ。
「ユウはあたしのこと……嫌いなの？」
「……俺は……」
「あたしは、好き」
「！」
「あたしはユウのこと好き。大好き」

そこでようやく、ふたりの目が合った。
ララの目は強く、必死な覚悟で光っている。
ユウの目はどこかおびえたように震え、ララには、いまにも泣き出しそうに見えた。
「あたし、ユウのためならなんだってできる。もうＬ・Ｊに乗るなって言うなら、乗らなくたっていい。スカートだってはく。料理の勉強だってする。あたし……あたし……！」

ララは、止めどなくわき起こる熱い想いをどうしていいかわからなくなり、ついに、飛びついたユウの腕の中で、ぐ、と目をつむり、唇を差し出した。

想いは、ユウも同じはず。

アールシティでは、あんなに心が通い合った。

ついつい飾りがちな言葉など捨てて、ただ、いまは顔を近づけて欲しい。

ララは、おずおずと動き出したユウの腕が、肩へかかり、背中へまわるのを感じた。

そっと抱き寄せられ、あとは、ひとつになるだけだった……。

「……すまない」

唇に吹きかかるはずの吐息が、ララの左耳に残酷な言葉を落とした。

「どう、して……？」

「俺は、まだ……」

「あたしのこと嫌いなの？」

「そうじゃない。今はまだ……この旅のこと以外、考えたくないんだ」

「……ひどい」

「でも、そのときが来たら、きっと、答えを出すから」

「ひどい、ひどいひどい！」

ララは半狂乱になって、ユウの胸を殴りつけた。

「なんで、なんでそういうこと言うの？」

「ララ……」

「バカ！バカバカバカ！ユウのそういうところ大ッ嫌い！嫌いなら、嫌いって言ってよ！」

「違うんだ。だから……」

「バカ！バカ！」

「……すまない」

「もういい！もう……あっち行ってよ！」

大好きだったぬくもりが、それ以上なんの言葉も出さずに離れていき、ララは、顔を覆って泣き叫んだ。

馬鹿にしてる。

散々思わせぶりをしておいて、そんなつもりじゃなかった、なんて。

それどころか曖昧にぼやかして、自分も相手も傷つかないように、なんて。

こんな世界、全部消えてなくなればいい。

ララは、髪に結わえたゴム紐を振りほどき、祭壇へ向かって投げつけた。

ゴムは祭壇にかすりもせず、悔しさばかりが増した。

「わぁあぁぁぁ！」

床に突っ伏したララの、その小さな背を、ふと、温かいなにかがなでた。

「……なにさ。ほっといてよ」

「そうもいかねえさ」

アレサンドロである。

新年を迎えたこのよき日に、一杯でも酒を酌み交わそうかとユウを探していたところで、この場面に出くわしたのだ。

「嘘つき」

「うん？」

「あたしの王子様は、低いところを飛んでるって、言ったじゃない」

「そうだったな」

「でも、全然違った」

「いや……俺が悪ぃんだ」

アレサンドロの差し出した布切れを、ララは面を伏せたまま、はねつけた。

「そうやって、いっつもふたりで、かばい合って。だから……だから……！」

「別に、かばうつもりはねえさ。あいつは大馬鹿野郎だ」

「いい、もう聞きたくない！」

「でもよ、こいつは本当に、俺が悪ぃんだ」

アレサンドロは、うずくまるララの頭元に腰を下ろし、ため息をはいた。

その身体からは、染みついた酒のにおいがぷんぷんとしていたが、不思議と、ララの鼻は不快を感じなかった。

「俺もな……いまのお前と同じように、かきむしるほど、好きな女がいたぜ」

「……」

「きっと相手にしてみりゃあ、俺なんか、その他大勢のひとりだったんだろうな。それでも……俺は好きだった」

ぐずりと、ララの鼻が鳴った。

「でもよ、死んじまった。俺が死なせちまった」

「え……？」

「だからあいつは、俺に気ぃ使ってんだ。俺の前で、相棒の自分が女をつくるわけにはいかねえ。浮かれてる姿を見せるわけにはいかねえ、ってな。俺を傷つけねえために、自分と、お前を傷つけたんだ。……馬鹿な野郎だぜ」

ララには、言葉もなかった。

真っ赤になった目で見上げるアレサンドロの顔は、その話が真実であることを微塵も疑わせない苦しさで満ち満ちている。

その、ララの視線に気づいたアレサンドロは、すぐさま、ふ、と苦笑いを返した。

「なあ、ララ。もう一度、やり直してやれねえか」

「え？」

「俺たちが出会った、あの日とは言わねえ。ほんの一時間前に戻って、あいつの出す答えを、待ってやってくれねえか」
「……いつ出るかもわからないのに？」
「そう遠い話じゃねえさ。国を作るか……俺が、女をつくるまでだ」
「つくるつもりもないくせに」
「そいつは、お前も同じだろ」
「……いじわる」
アレサンドロの喉から、乾いた笑いがもれた。
「……戻れるかなぁ」
「ああ、賭けてもいいぜ」
「こんなになるなら……あんなに、優しくしてくれなきゃよかったのに……」
「そうはいかねえさ。あいつだって、お前のことが好きで好きでたまらねえんだ」
「……」
「お前だって、わかってたはずだぜ」
「……う、うう、う、う」

翌朝……。
仮聖堂での務めを終え、逃げるように二号車を出たユウを、ララが呼び止めた。ちょうど二号車の前方、キャタピラの陰である。
新年祭は三日続けておこなわれるのが常であるため、二日も動かずにいたそこには、高い吹きだまりで死角ができている。そこに隠れていたのだ。
「あ……」
うろたえたユウは一瞬身をすくませたが、すぐに観念したようにうなだれ、うつろな視線を縦横に泳がせた。
ララは、そんなユウを、なにも言わずに凝視した。
昨日、アレサンドロが予言したとおり、髪はボサボサで、目蓋は

はれぼったく、心なしか目のまわりが青黒くくすんでいる。
「俺はどうして、あんなことを言ってしまったのだろう」
そう一日中、後悔にさいなまれた顔だ。間違いない。
……バカ。
ララは口の中でつぶやき、ひとつ、深呼吸をした。

「ユウ、あたしのこと、好き？」
「え……？」
「あ、待って待って、いまのなし。忘れて」
「……ん」
「えと、要するに……今回のことが全部終わったら、あたしとのこと、本気で考えてくれる？って、こと」
「あ、ああ……ああ！」
ユウは何度も、首を縦に振った。
「ん……じゃあ、リセットしよ」
「リセット？」
「そ。昨日のあたしたちに、リセット。こうやって腕組んでても、あたしたちは恋人同士じゃないし、一緒にご飯食べたり、お菓子を食べたり、いろんなこと話して、結局一緒にいるけど、やっぱり恋人同士じゃない」
それが、昨日までのユウとララ。
「そこに、リセット」
「……リセット」
ユウは、いまさらながら愕然とした。
ただ立場がどうこう言っていただけで、してきたことは恋人同然じゃないか。
自分は一体、なにを悩んでいた？
「ね？」
「……ああ」
「じゃあ、リセット」

「リセット」
ふたりは手のひらを指で押し合い、ひと声笑って……さらに、笑った。
「アハッ、なんか、変な関係」
「そうだな」
「でも、答えはちゃんと聞かせてくれなきゃダメだからね」
「わかってる」
「ご飯食べに行く？」
「行こう」
ふたりは、いつものように腕を組んで、二号車の食堂へと歩き出した。
昨日一日、ろくにものを食べなかったふたりの腹の虫が、ぐうぐうと、仲良く鳴いている。

凧を上げよう

「わぁ！」

聞こえた歓声に目をやると、窓の下に、色とりどりの帽子が見えた。

新年祭は、酒を飲まない子どもたちにとっても、待ちかねた『お祭り』だ。

いつもより豪華なごちそうあり、お菓子あり、おもちゃあり。

あの六億という巨額の金は、見るものから見れば『汚い金』ということになるのだろうが、こうしてなに不自由のない、幸福な新年祭を迎える手助けとなったのだから、むしろ『天の助け』であったと呼ぶべきだろう。

……バングに、感謝しないとな。

ユウは、騎士の盾を模した伝統的な六角凧を手に、身を切るような冷たい風の中を元気に駆けていく子どもたちを眺め、そう思った。

「あ、凧！いいなぁ」

隣で、ドライフルーツのパウンドケーキをほおばっていたララが、窓をのぞきこむようにして身を乗り出した。

いつでも好きなときに食べ、飲み、寝るのが、庶民の新年祭だ。

ふたりのいる二号車の食堂にも、多くの人々が集い、歌っている。

中には、ララと同様、子どもたちの凧に気づいた者もいて、

「俺も子どものときは……」

などという思い出話が、笑い声に混じって流れ聞こえてきた。

「ね、あたしも凧上げしたい！」

「ええ？」

「あたし昔から、一回やってみたかったんだよね。ユウもやったことあるでしょ？」

「まあ、チャノム爺が、よく作ってくれたから」

「それって、あの、ソブリンのとこのおじいちゃん？」

「ああ。それがすごいんだ。犬でも猫でも、なんでも好きな絵を描いてくれて」
「へぇぇ」
「海は風が強いから、手を放すだけで上がっていくんだ」
「へぇ、いいなぁ……」
「行こうか」
「え？……うん、行く行く！」
「よし、行こう」
ララは飛び跳ねるように、席を立ったユウを追いかけてきた。

さて、言うまでもなくこの二号車にも、当然いくつかの出入り口がある。
その中でもメイン昇降口は、いかにも戦闘用車両という雰囲気にはしたくない、というアレサンドロの意向を受けて、まるで、上等な宿屋のようなつくりだ。
その、例にもれず新年祭用の飾りに彩られた玄関ホールは、いまや男子も女子も集まって、さながら工作室となっていた。
笑いさざめく声と、クレヨンのにおい。のりのにおい。
床を机がわりに絵を描いていた少年が、
「できた！」
と、完成したそれを持っていった先にはマンタがおり、
「がははは。おお、これはよく描けている。アンコウだな！」
「戦車だよ」
「がははは」
などと言う間に、立派な凧に組み上げられていく。
筋肉質で、指先も太いマンタだが、なかなか器用な手さばきだ。
「よし、上げてくるがいいぞ。手袋を忘れずにな！」
「はーい」
「そして、帰ってきたら！」

「レモネード！」
「うがい、手洗い！」
「レモネード！」
「よし行け！」
なにやら、マンタと妙な合言葉を交わした少年は、先に完成して待っていたらしい仲間ふたりと、外へ駆け出て行った。

「マーンタ」
「おお、確か……待てよ、待て待て、いま思い出すぞ。そら、いまさに思い出すところ……そう、リンダとトム！」
「ぶー」
「おお！なんという悲劇！」
顔を覆ったマンタは、身悶えして悔しがった。
「あたしはララで、こっちはユウ」
「む、そうか、よし！」
「あたしたちも凧作りたいんだけど、いい？」
「もちろんだとも。三角、四角、ひし形、六角。我輩のおすすめは、無論三角。耳をつければマンタに早がわり！」
「あたしは六角形！ユウは？」
「もちろん三角だろう、少年！」
「……四角で」
「おお！またしても悲劇！」
まわりの子どもたちから、わっと笑い声が起こった。
「仕方ない。さあ、持っていくがいい。画材は好きなものを使ってよし。原色で派手に、が基本だぞ」
「はぁい。行こ、ユウ」
「ああ」
ふたりは真っ白な紙を受け取って、十分ほどで、そこに簡単な絵を描いた。
ララは真っ赤なハートマーク。

ユウは、メイサの祭紋だった。
「ぬ、これはカワハギとワカメか！」
ふたりの絵は、すぐに凧となった。
「おっと、待て待て。帰ってきたら！」
「えと……レモネード？」
「声が小さい！帰ってきたら！」
「レモネード！」
「うがい、手洗い！」
「レモネード！」
「よし、忘れるなよ！あの机に準備はできているぞ」
「はい、マンタ先生、質問！」
「なにかな、ララ君」
「レモネードが嫌いだったらどうすればいいんですか」
「ぬふふ、そのときはココアだ。ホットミルクも可。我輩は柔軟だぞ」
「わかりました！行ってきまぁす！」
ふたりは、脇のコートかけに用意された共用の上着にそでを通し、ハッチをくぐった。

「わ……！」
先ほどまでの薄曇りが嘘のような、快晴である。
澄み切った空の下端は白く霞み、その下に、銀色に輝く山並みが見える。
そして、谷から吹き上げる風を受けて舞う、いくつもの凧。光るダイヤモンドダスト。
「キレイ……」
窓越しには決して見られなかっただろう絶景が、目の前に広がっていた。
「うう、でも寒い」
鼻の奥が、キンとする。

「早く上げよう」
「うん、うん」
まずはユウがハート凧を持ち、風下にあたる、山側のゆるい斜面を少しのぼった。
「俺が手を放したら、紐を引くんだ！」
「わかった！」
「行くぞ！」
ちょうど、絶好の風が吹き、素人のララでも、凧は天高く舞い上がった。
「上がった上がった！」
ユウは自分の凧を引きながら山を駆けくだり、ララと肩を並べて、凧上げを楽しんだ。
「どうだ？」
「うん！あ、お、落ちちゃう！」
「もっと、こうやって引くんだ」
「え、え、どう？」
「こう、手首を使って」
「こう？あ、なるほどね……って、あれ、あれ？」
ララの凧が、ひょいひょいと動きながら、こちらへちょっかいをかけてくる。
「わ、そっち、ダメダメ！あ、あ！」
動きがララそっくりだな。ユウはおかしかった。
凧は結局、からまって落ちてしまった。
「……ね、これって、もっと大きくなる？」
「え？」
「ほら、Ｌ・Ｊぐらい、おっきい凧。上げたら面白そうじゃない？」
「ハハ、どうかな。材料によると思う」
「マンタ先生に相談してみよっか」
「そうだな」
「よし、行こ」

そこでふたりは、再びマンタの元に戻った。
「おお。まずはうがい、手洗い、そしてレモネード。ついでに、我輩にも一杯作ってくれると嬉しい」
「それよりも先生。ものすごぉく、おっきな凧が作りたいです！」
「む？」
「ここが、いっぱいになるくらい大きいやつ」
「ほおう、なかなかの冒険心だな、ララ君。しかし、作ってどうする！」
「どうって……えと、上げます！」
「駄目だ！想像が弾けていない！」
「ええ？」
「我輩ならば乗る！ううむ、乗りたい！」
「じゃあ、それは先生におまかせで！」
「よし、作ろう！」
顔を見合わせ、がははと笑い合ったふたりは、まるで親子だった。

「さあて、ではでは……」
まずは、なにが必要だろうか。
とにもかくにも紙と骨。しっぽとなるリボン、紐。
紙は、いま残っているものを継ぎ合わせ、ロープはマンムートの倉庫をあされば見つかるだろうが、リボンと骨はどうする。
「うむ、ひらめいた！」
マンタが手を打った。
「シーツを集めてくるのだ。五枚もあれば尻尾に足りる」
「骨は」
「ユウ君、カラスがあるではないか」
「カラス？」
「そう、羽根だ。羽根には、うむ、なんという名前か知らんが、真ん中に軸があるではないか。あの部分を切り出してだな……」

「つなぎ合わせる！」
「そのとおり。さすが我輩！」
そこでユウは、とりあえずも表でＮ・Ｓカラスを呼び出し、その風切羽を一枚、引き抜いてみた。
なるほど。
こうして、改めてふれてみるとわかるが、中空の軸は意外にも硬く、弾力性がある。
「どう？」
『ああ、いいかもしれない』
「持たせて持たせて！」
『ああ』
「わっ、おっきい！軽ぅい！これだけで飛べそう！」
あの地下洞窟を通っていないララは、初めて見るカラスの羽根を、きゃっきゃ、きゃっきゃと振りまわした。実は五メートルもあるものなのだが、つまりそれだけ軽いのだ。
それに気づいた子どもたちも、あれよあれよと集まって、皆で強風の中、それを振って笑った。
「よっし、みんなも手伝いなよ？おっきい凧を作るんだから」
わぁっ、と、子どもたちはそれぞれの凧を手に、玄関ホールへと飛びこんでいった。
ユウも、両翼の風切羽を、五枚ずつ十枚引き抜いて、ホールに戻った。
「静かに！静かに！では、班分けをするぞ！」
第一班は、凧の紙。何十枚もある小さなそれを張り合わせ、絵を描く。
第二班は、凧の骨。風切羽の羽軸から羽枝、つまり羽毛の部分を切り取り、一本の棒にする。
第三班は、凧のしっぽ。シーツを縫い合わせ、一枚の帯にする。
班分けは、基本的に子どもたちの希望に沿っておこなわれたが、第一班は年少の子たち、二班は少年たち、三班は少女たち、と、お

およそこのようになった。
「ようし、一班の班長さんは我輩だ。二班はユウ君。三班はララ君。班長さんの言葉は絶対だぞ！」
「はーい」
「では、始めぇい！」

興奮しきったマンタの裏声は子どもたちの笑いを誘い、緊張感の欠けた雰囲気のまま、巨大凧づくりが始まった。
第一班は、作業スペース確保のために、玄関ホールの掃除。第三班は、シーツを探しに駆け出て行く。
ユウの担当する第二班は、まず、ホールと共用区とを結ぶ通路に作業の場を移し、例の羽根十枚を運びこんだ。
そこでユウを感心させたのは、少年たちの間に、すでに高い社会性、協調性というものが形成されている、という事実だった。
これから切り出そうという羽軸は実に、大人の腕ほどもあろうかという太さだったが、そこから生える何千、何万という羽枝は、ペンよりもやや細い。
しかし、力まかせに折ろうとしても曲げた跡さえつかず、
「のこぎりで切ろう」
ということになったのだ。
こうなると普通、血気盛んな少年たちならば、少なからず俺が俺がとそれを奪い合うようなことになるはずだが、マンムートの少年たちは違う。
子どもの手で、羽枝一本につき十秒程度かかるその作業を、
「自分の年齢の数だけ」
と決め、順番にのこぎりを引くことにした。
しかも、のこぎりの数と同じ、みっつの小班に分かれる際も、自分たちだけで年齢と腕力の差を考え、上手くメンバーを調整した。
「神官様は、僕のグループに入ってください」
「あ、ああ」

班の最年長、十三歳のエリック少年に言われ、ユウは苦笑した。

この歳の頃の自分は、ここまでできただろうか。

ユウは思う。

おそらく、できなかったに違いない。そう思う。

自分は文字を覚える前から、ハサンという保護者の下にあった。

盗人という性質上、同じ年頃の子どもと遊ぶこともなく、当然、ハサンがものを決めさせることもない。

その分、『大人』たちとの付き合いは多く、この子たちとは別の意味で経験豊富であることは間違いないが、自立という点ではいまも怪しいものだ。

そして、そのせいだろうか。

「神官様の番ですよ」

「ああ」

『大人』の腕力を発揮して、子どもの何倍もの速さで羽枝を切り取る。そうして子どもたちに、すごいすごいとほめそやされるのが、なんとも嬉しかった。

「俺も、まだまだ子どもだな」

「え？」

「いや、なんでもない。次は誰だ？」

「はい！」

「よし、頑張れ。手を切らないように」

「はい！」

亜麻色の髪の可愛らしい少年が、二順目ののこぎりを手に、羽軸へまたがった。

と……そこに。

「おいおい、なにしてんだ」

「あ、アレサンドロ様だ！」

通路の向こうから現れた英雄の姿に、少年たちの手がいっせいに

止まった。
いや、それだけではない。
声を聞きつけたホールの少年少女たちが、きゃあ、と上げた歓声も、ユウの耳には届いた。さすがの人気ぶりである。
アレサンドロは、駆け集まってきた少年たち、ひとりひとりの頭をなでてやりながら、坊主になりかけているカラスの羽根を、興味深げにのぞきこんだ。
「さっき、カラスが見えたんでな。なにに使うんだ？」
「ああ、これは……大きな凧を作ろうと思って」
「凧？ハ、そりゃまた愉快だな」
「アレサンドロ様は、凧を上げたことがありますか」
「あるぜ。俺のいたオオカミの砦でも、新年には凧を上げた」
「わぁ！」
「エリオ、お前の親父さんのブルーノが、砦じゃ一番だったぜ」
名指しされたエリオは、仲間たちに肩で小突かれるのをわずらわしげに押し退けつつも、嬉しそうにはにかんだ。
「さ、作業に戻れよ。俺も、早く飛ぶところが見てみてえ」
子どもたちは我先にと、のこぎりを引きに戻っていった。
「仲良くやってるみてえだな」
「ああ。やっぱり、ホーガンでの経験が大きいみたいだ」
「危ねえ橋だったがな……守れてよかった」
「ん、本当に」
「お前はどうなんだ？」
「え？」
「仲良くやってんのか」
「な、仲良くって……だ、誰と」
「はあん、まあ、大体わかった」
「別に、そういうことじゃ……」
「わかってるさ」
どうやら、やり直すことができたらしい。

アレサンドロが顔に浮かべたのは安堵の微笑だったが、ユウはそれを、からかわれたのだと勘違いした。

「それはそうと、ちょいと効率が悪ぃんじゃねえか？格納庫には、電動のでかい金のこがあったじゃねえか」

「セレンに聞いたら、刃の替えが少ないそうなんだ。なかなか手に入るものじゃないし……」

「できれば使って欲しくねえ、か。それなら仕方ねえな」

「ああ」

「なら、お前の太刀は……いや、そうだ、いっそカラスの太刀でやってみちゃどうだ。あれを寝かせてよ、刃の上をこう、滑らせる感じで」

つまり、近頃世に出始めた、玉ねぎなどを薄切りにする、スライサーの要領だ。

なるほど、と、ユウはさっそく試してみることにした。

「俺は、ホールのほうもブラブラしてくるぜ」

と言うアレサンドロと別れ、ユウと十三人の少年たちは、羽根を一枚かついで外へ出た。

「みんなを並ばせてくれ」

副班長エリック少年は、実に鮮やかな指示で、少年たちを歳の順に並ばせる。

ユウがカラスを呼び出すと、お定まりの大歓声。

巨大な太刀を雪面に横たえ、いったん、カラスを指輪に戻し、

「よし」

刃側にユウ、峰側に少年たちが並んだ。

こうして互いに羽根をつかんで持つと、さながら綱引きをするかのようだ。

「エリック、背の順がいいかもしれない」

子どもたちの配置が変わる。

「いいか！最初はゆっくり！」

「はーい」
「せぇの！」
ぷつん、ぷつん、ぷつん。
羽枝は、面白いように切れた。
「これで行こう」
ユウは、先ほど分けた三グループのリーダーを呼び寄せ、
「失敗しても構わないから、無理だと思えば手を放すこと」
などを言い含め、役割を託した。
はじめこそ、おっかなびっくりだった少年たちもすぐに要領をつかみ、十枚の羽根は瞬く間に、十本の棒となった。

時を同じくして仕上がった紙と尻尾、そして骨が集められ、組み立てが始まった。
どれどれとのぞいてみると、およそ十二、三メートル四方はあろうかという紙の表には、年少の子どもたちが心おもむくままに描いた絵や文字が、まるで統一感なく躍っている。しかし、それがかえって面白い。
ララを含む、少女たちの縫い上げた尻尾も、ところどころに血がにじむ苦心の作だ。
ユウとマンタは、ホールへ集めた子どもたちに、ふうふう、と熱いレモネードをすすらせておき、紙の形を整え、骨の長さを調整し、上げるためのロープを探しに格納庫へ走った。
そしてすべての準備が整ったとき、時刻は、正午を少し過ぎていた。
「ようし、全員ロープを持てぃ！」
半笑いの子どもたちが、期待と不安を胸に、ロープをつかむ。
「ユウ君もスタンバイだ！」
『……本当にやるのか？』
「おお、やるとも。さあ！」

ユウの乗ったN・Sカラスは、中央に身体を縛りつけたマンタごと、完成した巨大凧を持ち上げた。
「乗りたい！」
と言い出したのはマンタだが、本当に大丈夫なのだろうか。
魔人の身体は人間と同じ、落ちればひとたまりもないはずだ。
「ユウ君、心配は無用。そう、あれは我輩が、シャンパニ渓谷の大ジャンプに挑んだときのことだ。足を滑らせた我輩を待っていたのは、底の見えない奈落の穴。我輩はイカのごとく泳ぎ、あきらめ、また泳いだ。よぎる数々の思い出、飛び散る汗と涙。ああ、我輩の運命やいかに。……と、そのとき……」
「おおい、まだか！」
子どもたちのそばから、アレサンドロの絶妙な茶々が入った。
このときすでに、多くの大人も見物に出ている。
「む、さあ、ユウ君。やるぞ！」
気力満々と拳を振り上げるマンタの勢いに、ユウも、うなずかざるを得なかった。
「子どもたち。手だけは放してはいかんぞ！」
「はーい！」
「よぅし。……引けぇい！」
「わぁぁぁ！」
「おお、風が、風がすさまじい！」

大人たちの間から、どよめくような歓声と、拍手が起こった。
巨大な凧は右へ左へ傾きながら、みるみる高度を上げていく。
成功だ。
「やったやった！」
喜びにわく子どもたちの気がゆるみ、その手の中をロープがすると抜けていったが、焦った大人たちが飛びつくより先に、それはジョーブレイカーとシュナイデによって、しっかりと引き止められていた。

「……むうう、やはり空はいい」
マンタは髭の先につららを垂らしながら、痛みを感じるほどの冷気を、胸いっぱいに吸いこんでいる。
「寒い。しかし、空はいい！……む？」
マンタは大声で、ユウを呼んだ。
「凧だ！向こうにも凧が上がっているぞ！」
『凧？』
「しかしこちらのほうがでかい！我々の勝利だ。がはははは！」
ユウはすぐさま、その、凧が上がっているという方角を見た。
確かに、雪をかぶった針葉樹林の隙間から、小さな凧が顔をのぞかせている。
並の人間ならば、米粒ほどのそれに対して、
「どこかの子どもが上げているのだろう」
程度の感情しか覚えなかっただろうが、Ｎ・Ｓに乗ることで強化されているユウの目は、それを見て、ハッとした。
『アレサンドロ！』
「おう、どうした？」
『あれを』
「あれ？……凧か？」
『模様がついてる。白地に、赤い三日月』
「なに……？」
『誰だろう』
「……ジョー、マンタを降ろせ！他は全員、中に入るんだ！ユウ、お前はジョーを手伝ってやれ」
『わかった』

赤い三日月戦線

知ってのとおり、赤い三日月は魔人の旗印。単純なモチーフではあるが、子どもが描くのを許す親はいない。

では、いったい誰が凧を上げたのか。

考えられるのは味方か。

敵か。

そのヒントは、すぐに相手側から与えられた。

マンムートのブリッジに、通信が入ったのだ。

『こちらは、『赤い三日月戦線』。志を同じくする者として、一度話し合いの場を持ちたい』

この、『赤い三日月戦線』なるものの名は、ハサンでさえ耳にしたことがないという。

しかし、その名も含め、志を同じくすると言うからには、同じ入れ墨を持つ、かつての仲間である可能性が高い。無論、完全に信用するわけにはいかないが。

アレサンドロは、ハサン、クジャクと共に熟考を重ね、

「会うぜ」

という旨の返信をした。

そしてその上で、鉄機兵団出身者であるララとテリー、さらにセレンをもブリッジに詰めさせ、訪れる相手の面通しをさせることにした。

「ね、セレンは鉄機兵団だと思う？」

「さあね。とりあえず、ファイアーウォールは多いほどいいってことだろ」

「そんな単純な手を使うわけない、なぁんて、たかをくくってると、思わぬ痛手を食うもんよ、ララちゃん」

「テリーに言われると、なんか微妙」
「あんねぇ、俺一応、元紋章官よ？」
「ほら、来たよ」
セレンの声に引かれ、ララとテリーが監視カメラの映像をのぞきこむと、雪木立の向こうから幌付きの馬車が一台、ゆっくりと近づいてくる。
「あら。あれ、鉄機兵団の軍用馬車だよね」
「盗んだのかもしれない」
「まあ、あれと身分証があれば、かなり動きやすくなるのは間違いないけどさ。しっかし、いよいよわからないなぁ」
「判断するのはハサンとリーダーだよ。私たちは、知ってる顔かどうかだけ見ればいい」
「やっぱりカッコいいなぁ、セレンさん。俺、ホレちゃいそう」
「テリーには興味ない」
「ひどい！」
身体の大きな北部馬に引かせた幌馬車は、一列に並んだ、ハサン、アレサンドロ、クジャクの前で停止した。
後部の垂れが持ち上がり、姿を見せたのは、これも、三人の男たちだった。
「ふぅん……」
互いの目が、値踏みするように走りまわる。
三人のうち、ひとりは騎士のような面構えで軽鎧。残るふたりは一枚布の中心に頭の通る穴を開け、それをそのままかぶっただけという身軽な防寒着を身にまとっている。
とはいえ、内側に鎧を着ているものか、武器を身につけているものかさえ読み取らせないその姿勢を、ジョーブレイカーと共にマンムートの陰へ身をひそめていたユウは、
「いけ好かない」
と感じた。
「……失礼しました」

防寒着のひとり、中央の男が、一歩前に進み出た。
「エディン・ナイデルです」
これがその、赤い三日月戦線のリーダーなのだろうか。
色白で、目は青く、顔立ちは美しく。三十前に見える。
そして、エディン・ナイデルはおもむろに防寒着をめくり上げ、防具らしいものはなにひとつ身につけていない上着の前を、はだけて見せた。
目を引いたのは、喉元から右のわき腹にかけて広がった、ケロイドらしき皮膚の盛り上がり。そのすぐ横、ちょうど心臓の位置に、三日月の入れ墨が入っている。
「かつてはオオカミの砦にいました。お会いできて光栄です、クジャク様」
微笑むエディンはまったく逡巡なく、アレサンドロとハサンを無視してみせた。
「……俺よりも、誰がリーダーかを問うのが先ではないのか」
「十五年前もいまも、あなた方の上に立つ者などいません」
「ならば帰れ。お前たちの飼い主である魔人を連れ、出直すがいい」
「これは、失礼いたしました」
エディンはにやりと笑い、形ばかりの、心無い礼をした。
「こちらのリーダーは私です。……ですが、おわかりください。あなた方は決して、人間などに使われてはいけない。それが、私の誠です」
「いらん世話だ」
「……そうですか。失礼いたしました」
頭を上げたエディンの目は妙になまめかしく、今度は、ハサンを見やった。
「あなたがレッドアンバー？……ああ失礼、こちらの方でしたか」
「アレサンドロ・バッジョだ」
アレサンドロは平然と、こちらも左腕の入れ墨を見せた。

「確かに」
「俺も、オオカミの砦にいた」
「へぇ……ああ、あの」
このときエディンが見せた、わずかな目の光。
これだけでユウは、この男が嫌いになれた。
それは完全に、アレサンドロを序列の下とみなした目だ。
その小憎らしい笑顔の裏で、どのような過去を思い出したのか知らないが、この男は、アレサンドロに見切りをつけたのだ。
「追い返せ、アレサンドロ。そんなやつは追い返してしまえばいい！」
ユウは念をこめた視線をアレサンドロの背へ送ったが、ちらりと見えたその横顔には、余裕のある苦笑が浮かんでいた。

「俺も、お前を覚えてるぜ、エディン」
「……へぇ」
「親衛隊の、エディン・ナイデル隊長」
アレサンドロの記憶にあるエディン・ナイデルは、常に赤い三日月の腕章をつけ、オオカミのうしろをついてまわっていた、不気味な凄烈さを秘めた少年であった。
ある噂では、オオカミの衣服にシミをつけた仲間を、骨が折れるまで、こっぴどく痛めつけたという。
そしてまたある噂では、オオカミへ意見したネコ科の魔人の部屋に、ネコの死体を置き捨てたという。
大人びた冷笑を人形のような顔に貼りつけ、オオカミのみを救世主、いや、神と信じきっていた十五年前の姿が、そのまま、目の前の青年に投影されていたのだった。
「まあ、昔のことはいいだろうぜ。話ってやつを聞こうか」
「……ここで？」
「当然だ。少なくとも俺らは、鉄機兵団に目をつけられてる。手の内を見せるのは、話を持ちかけてきたそっちから、ってのが筋じゃ

ねえのか」
「確かに。では、単刀直入に言いましょう。このグライセン帝国を滅ぼすのに協力していただきたい」
「滅ぼす……？」
「ええ」
エディン・ナイデルは、特になんでもないことのように微笑んだ。
「そちらには、鉄機兵団の将軍機にも対抗し得る力、言ってしまえばＮ・ＳとＬ・Ｊがあると聞きました。それは真実ですね」
「……ああ」
「でしたら、協力していただきたい。あなた方が立ち上がれば、泥の中に身を沈め、砂にまみれたパンを食み続けてきた我々の、これ以上ない励みになる。入れ墨の戦士たちは皆、その時を待っているのです」
「そして最後は、エディン王が輝かしい歴史の幕開けを告げる、ってわけか」
「それはわかりません。そんなものはあとで決めればいいことです。そう、民主的に」
「ハ」
「わかりますか、民主主義？」
「ああ、おかげ様でな」
アレサンドロは、わざと、深くは逆らわずに話しているようだった。
「とにかく、こうは言っても、目下のところ血を流すのがあなた方だけでは、うなずけないのも道理。そこで我々は、ここから二十キロほど東にある鉄機兵団の出城を、これから襲撃します」
「なに？」
「と言うよりも、襲撃の途中であなた方の凧を見た、と言ったほうが正しいかもしれませんが」
エディンの背後で、連れのふたりがひそやかに笑った。
「その出城に、Ｎ・Ｓが運びこまれたという情報があるのです。そ

れといくらかのL・Jが奪えれば、あなた方と作戦を共有することができる」
「……」
「折よく、いまは新年祭の真っ只中。騎士にも酒がふるまわれます。……おっと、ここから先は、また、次の機会に」
「……わかった。武運を祈ってるぜ」
「ええ。そのときには、そちらの手の内も見せてもらえることを期待します。そして、色よい返事を」
「ああ」
「では、いずれまた、こちらから……」
エディンとふたりの男たちは、来た道をまた、馬車でくだっていった。

「ジョー、いまのやつらに張りつけ。シュナイデのことは心配いらねえ！」
「承知した」
ジョーブレイカーが、疾風のごとく駆け出ていく。
そうしてやっと、アレサンドロは大きなため息をはいた。
「ンッフフフ、上出来だったぞ、アレサンドロ」
と、ハサンは笑ったが、
「冗談じゃねえ。ユウ、杖をくれ！」
「ああ、いま行く！」
「まったく……面倒なことになっちまったな」
アレサンドロは、さも困り果てたように頭をかきむしった。
どうするもこうするもない。マンムートの行き先は、もう決まっている。
しかし、どうもそれだけではすまされないような気がするのだ。
「ハサン」
「ンン、あるいは、火種の始末が必要になるかもしれんな」

「あんたなら、次の手はどう打つ」
「さて。マンムート全体に、いまのやり取りを包み隠さず明かしてやることだ」
　これには、クジャクが反対した。
「混乱を広げるだけだ。やつらを支持する者が、必ず現れる」
「しかし、クジャク君。エディン・ナイデルはＮ・Ｓ奪還に成功しようとしまいと、必ず、全国へ檄文を発するだろう。マンムートに続け、我々に続け、立ち上がれとな」
　そうなれば、自然とブリッジ詰めの誰かの耳に入る。
　そうして噂と憶測が広まりきってから、
「実は……」
　などと説明しても、アレサンドロの真意は伝わらないだろう。
　混乱の上に失望と猜疑心とが加わり、収拾がつかなくなる恐れもある。
「反対されることはいい。ただ、いまは事実を伝え、お前の意思が揺らがぬところを明らかにしておくべきだ」
「待て。なぜ、やつが檄文を出すと言える」
「やつは、自らが王となることを否定しなかった」
「なに……？」
「一度上げた旗は容易には降ろせん。出城を攻めれば、やつの退路は完全に閉ざされる。その上で王になる、最後まで生き残ると言うからには……そう、鉄機兵団のターゲットを散らす必要がある。それが我々であり、『入れ墨の戦士たち』だ」
「む……」
「事実、やつがどう動くかは数日もすればわかることだが、アレサンドロ」
「ああ、わかった。あんたの言うとおり、これから放送をかける」
「それは結構」
　ハサンは満足げに眉を上げ、にやりとした。
　マンムートへ向かうアレサンドロの松葉杖がふと止まり、天を仰

いだその喉から、
「……俺たちの国が、また遠くなっちまったな」
と、つぶやきがもれた。

そうしてマンムートの人々はアレサンドロからすべてを聞かされたわけだが、その反応は、おおむね冷静だった。
男たちの間では、不満とまではいかないまでも小さな落胆の声が上がったというが、家族を残し、ようやく得た我が家を飛び出してまで戦場に向かおうという気にさせるには、少々不安要素が多すぎたらしい。
しかし、これが『とりあえず』の反応であることは、他ならぬアレサンドロ自身がよくわかっていた。
エディン・ナイデルの出城襲撃が成功すれば、
「俺たちにもできる」
という自信が広がるであろうし、たとえ自分たちが立たなくとも、檄文に背を押された入れ墨の仲間が近くで戦闘を起こせば、助けに行かざるを得なくなる。
「やつがこのまま死んでくれるのが最もいい」
ハサンは、クジャクに連れこまれた機関室の一角で、パイプに火を差しながら言った。
「いっそ、ジョーブレイカー君に働いてもらおうか。木の葉を隠すには森の中。戦場の死体など、誰も改めん」
「ハサン、口が過ぎるぞ」
「フフン。君は優しいな。それでよく、砦長などできたものだ」
「だからやつにもだまされる、そう言いたいのか」
「かもしれん。君もそう思うからこそ、私をこんなところへ連れ出したのだろう？」
クジャクは沈黙した。
「まったく、秘密の共有は美形とに限る」

ハサンは、くっくと喉を鳴らして笑った。
……そう。
クジャクがハサンを呼び出した理由。
それは、その後の打ち合わせにおいて、エディン・ナイデルの根幹にあの魔人が深く入りこんでいる、と知ったからに他ならない。
エディンがもし、いまだにその男を信奉し、陰で寵愛を受けているのだとしたら……。
「今回のことはすべて、奴隷の掃討に乗り出したやつの策かもしれない、と、君は言いたいわけだ」
「……そうだ」
「確かに、可能性としてはないでもない。……だが」
「だが？」
「さて……わからん」
「なに」
「可能性を上げればきりがない。いくつかのパターンに分けることはできるが……」
それを検証するだけの情報がない。現実に起こった事変がない。
「推理と憶測は違うのだ、クジャク君」
ハサンは、ふ、と煙をはいた。
「いま我々にできるのは、目を開き、耳を研ぎ澄まし、鼻を利かせること」
「……」
「ただ、先ほどの意見について私の考えを言うならば、いまの時点で、エディンとやつが組んでいる可能性は低いのではないかな」
扉一枚を隔てて、子どもたちが通路を走りまわる音が聞こえた。
「エディンにとってやつは神であり、アレサンドロは虫けらだ。その虫けらが神の器であるN・Sを持っていることを、信者ならば許すだろうか。いや、許せまい」
「しかし……」
「そう、やつがN・Sの存在を明かしていないとも考えられる。そ

の場合、こちらの手の内をエディンが知れば、怒りを層倍させてアレサンドロを憎むだろう」
「エディン・ナイデルを、刺客として利用している、ということか」
「さらにもうひとつ、やつがすでにN・Sの存在を明かし、その上で知らぬふりをしていろと命じているとすればどうだ。その場合、やつはまだ、我々になんらかの利用価値を見出していることになる。つまり……」
「俺たちの命が、目的では、ない……」
「わかるだろう、クジャク君。いまはまだ情報が足りん。まったく足りんのだ。私の読みでは、今回の黒幕は間違いなくやつだ。しかし、それも真実か？」
「……俺は」
「ん？」
「俺は……あの男がそうであると、いまならば信じられる」
「ほう……」
「今日見たエディン・ナイデルの目は、俺を見るやつの目、そのままだった」

狂言まわし

『……エディン・ナイデル。私はオオカミの遺志を継ぐ者。赤い三日月戦線の、エディン・ナイデルです』

広域電波に乗せたエディン・ナイデルの『檄文』は、このような一文から始まった。

すでに、先の接触から五日。

この二日前には『襲撃成功』の報が、ジョーブレイカーよりもたらされている。

その出城にＮ・Ｓが、という情報はいわゆるガセネタであり、エディン・ナイデルの元にはいま、奪い取った三機のＬ・Ｊがあるのみだそうだ。

魔人と帝国、かつての戦がどのようにして始まり、どのようにして終結したか。

いや、真実終結したのか、まだ終わっていないのではないか。

そう話が進むほどにエディンの論調は強くなり、

『いまの、我々の生活はどうだ！』

声を荒ぶらせたときには、全艦放送に耳を傾けるマンムートの誰もが、息を詰まらせた。

変わりはしなかっただろうか。昨日までは家族同然の付き合いをしていた隣人の目が、入れ墨の存在を知ったとたんに、汚らわしい密告者のそれへ！

責めはしなかっただろうか。医者にみせることをためらい、愛するものを死なせてしまった自らを！

戦争が終わったと言うのなら、なぜ、いまだに鉄機兵団の目を恐れなければならないのか。ホーガン監獄島を恐れなければならないのか！

なぜ、なぜ、なぜ！

エディンはくり返した。
『……しかし、ホーガン監獄島は、すでに解放されました。我々の同志、N・Sを持つ同志によって』
「……チッ」
『我々は、ホーガンを復活させてはいけない。いまこそ、立ち上がるべき時です。我々を愛してくれた魔人たちが、いったいなんのために戦ったのか、それをもう一度、思い出すべき時です。……あの一時代、魔人との絆こそが、我々の誇りなのだから！』

「……どう思う」
「それは私にではなく、おのれの胸に問うことだ」
「……」
「揺れたか」
「……そりゃあな」
キャプテンシートをきしませたアレサンドロは、顔色を読まれることを恐れるかのように、ハサンから顔をそむけた。
「見事なもんだぜ。俺なんかよりも、ずっとリーダー向きだ」
「フフン、そう卑下するものでもない」
「いや……見ろよ」
しゃくってみせるあごの先では、ブリッジクルーの誰もが苦い涙を噛みしめ、様々にわき起こる感情を抑えつけている。
直接的には戦争を知らないはずの若者たちでさえこうなのだ。二号車ではいま、どれほどの想いがあふれていることか。
「なあ、ハサン。あんたは……」
「お前の紋章官だ。お前の望むところへ、お前を導こう」
「……好きにしろ、ってことか」
「無論、場合にもよるがな」
「あ、アレサンドロさん、通信が……」
「誰だ？」

「いまの、エディン・ナイデル、さん、です」
虚を突かれたアレサンドロは、ハッと、ハサンを見た。
「なるほど。お前に猶予を与えん気か」
「どうすりゃいい」
「なに、構わん。やつの面を見れば、おのずと答えは出る。思うところを伝えてやればいい」
「……つないでくれ」
ブリッジの大画面に、あの、妖物をも惑わすような笑顔が映し出された。
背景は、戦利品のＬ・Ｊであった。

『聞いてもらえましたか』
「ああ」
『これが、私の想いです』
と、今日のエディンは人目を気にしてか、妙に神妙な声音だ。
「聞いたぜ、確かに」
『では、先日の返事を聞かせてもらえますか』
「返事？」
『とぼけてもらっては困ります。帝国を滅ぼすために、ぜひとも協力していただきたいとお願いしたはずです』
「……」
『さあ、答えを』
「……断る」
『断る！へぇ』
ブリッジがざわめき、エディンは、心底あきれた顔でアレサンドロを見た。
『それは、あなた方全員の意見ですか？いや、違うはずです。うしろの彼などは、心から驚いている』
「だったらなんだ」

『ひとりよがりですよ、それは』
「ハ、余計なお世話だぜ。とにかく俺は、てめえの面が気に入らねえ」
　このひと言が、ブリッジの混乱をさらに大きくしたと言っていい。
　個人の主観にまみれていることもそうだが、マンムートのことは自分が決める、それでなにが悪いという、ある意味これは、四百人の意思をないがしろにする発言である。
　信頼していたリーダーへの失望。青年たちの視線に、そんなものが含まれ始めていることに、エディンはにやりとした。
『では、こうしましょう。あと一日待ちます。今度こそ、全員で決めてください』
「俺は、くつがえすつもりはねえ」
『いえ、そうはいきません。あなたが思うほど、状況はあなたに味方しない。ねえ、そうでしょう、うしろの人』
「私か？」
『ええ、あなたがそちらの紋章官、違いますか』
「いや」
『あなたの目から見てどうです。彼は勝てますか』
「ふむ……」
　ハサンは思わせぶりに、ふたりのリーダーの顔を見比べた。
「確かに、勝利は君の手にあるようだな、エディン君」
「ハサン……！」
『う、ふふふ』
　エディンは、ますます喜んだ。
『さすがです。冷静な判断力をお持ちだ』
「それが、私の仕事でな」
『これは失礼しました』
「ンッフフフ」
　アレサンドロは言葉もない。

「……ところでどうだろう、エディン君。私の出す条件を呑んでくれるのならば、全面的に協力してもいいが」
『へぇ、やはり話がわかる。どんな条件です』
「なに、簡単にして当然のことだ。Ｎ・Ｓクジャクは言わずもがな、こちらの所有する、オオカミ、カラス、コウモリに関するすべての権限を、いままでどおり、我々に一任してもらいたい」
『……え？』
とたんに、エディンの顔色が変わった。
「知ってのとおり、我々は大所帯、非戦闘員も多い。守るためには、それなりの備えが必要なのだ」
『……オ、オオ、カミが……そこに』
「つまり、我々のリーダーであるこの男が君を拒むのも、そういうところに理由があるのではないかな。幸い、これとオオカミをはじめ、当方の乗り手は適合率が高い。我々としては……」
『待った』
「ンン？」
『待ってください、紋章官の人』
手を突き出したエディンは、大きく目をむき出して、アレサンドロを見た。
それもにらんだのではなく、死人でもこうはなるまいというほど感情の抜け落ちた目で、ただ見た。
そして……、
『本当ですね、いまの話』
「私が嘘をついてどうなる？」
『そうですか』
エディンは、抑揚のない声でそう言った。
道化師の面をかぶったかのような不気味な笑顔。機械音かと思うほど、冷たい声だった。
『残念ですが、その条件は受けられません。では、さようなら。次は戦場で』

と、それだけで、通信は一方的に断ち切られた。

「無礼な若造だ」

茫然一色に包まれていたブリッジは、このハサンのひと言で、我に返った。

なにしろ、わけがわからない。

ハサンの突きつけた条件は、特別理不尽なわけでも、相手の足元を見たものでもなかったはずだ。

それがどうして、突然の交渉決裂となったのか。

「あの男、はなから、我々のN・Sを奪うつもりだったのではないか？」

ハサンが、うそぶいてそう言った。

「なにしろあれだけ口が立てば、後々、我々の上位に立つことも可能だ。そこを先んじられたために、次は力づくで奪おうという……」

「な、なるほど……」

若者たちがうなずく。

「それにしても、お前の慧眼（けいがん）には恐れ入ったな、アレサンドロ。お前は先日のやつの態度から、いち早くそれを見抜いた。しかし、かつての仲間である以上、衆人環視の中を責め立てることも心苦しく、おのれひとりが悪役となったのだ」

「あ……！」

「ほ、本当ですか、アレサンドロさん！」

「う……」

「そうだろう？アレサンドロ」

「あ、ああ……」

期待に満ちた、若者たちの視線に押されるように、アレサンドロは、首を縦に振った。

「あいつの気持ちも、わからねえではねえし、な……」

「おお」

「やっぱり……！」
「さすがだ。さすがアレサンドロさんだ」
若者たちは、口々に賞賛した。
しかし無論、これは嘘である。
これは、エディンの内にひそむ、オオカミへの信仰心を逆手に取った誘導術。エディンにわざと敵意を抱かせ、自ら手を引かせることで、アレサンドロの意思どおりに事を運び、さらにはその名誉まで守ろうというハサンの魔術だ。
それがいま、このような形で完結したのである。
「こうなればもう油断はできん。やつは我々からＮ・Ｓを奪うため、様々な手段を講じてくるはずだ。なまじ、軍隊などを持たんがゆえにな」
そう説くハサンの、頼もしさと恐ろしさ。
「これからはこのブリッジ、いや、我々ひとりひとりの耳目が、マンムートを支えていくことになる。それを忘れず、わずかな変化も見逃すな。Ｎ・Ｓがなければ、我々など一日と持たず、鉄機兵団の餌食だぞ！」
アレサンドロは改めて、深い感服の念を持った。

「ンッフフフ、アーレサンドロー」
「うん？」
「お前はもう少し誇りに思え。私を紋章官に選んだのは、お前の手柄だぞ」
「ハ」
「だがいいか、私は確かにできることはやった。しかしその見返りに、エディン・ナイデルの憎悪を、お前がすべて引きかぶってしまうことになった」
「ああ、上等だぜ」
「やつの誘いを断ったお前に、いまさら聞くまでもないだろうが…

…」
「ああ？」
「お前はこの……これから先も数多の命を救うだろうこの手で、あの男を絞め殺す覚悟があるな？」
アレサンドロは強く、うなずいた。
「結構」
ハサンはひそめていた声量を、わずかに高めた。
「ではアレサンドロ。やむなく表へ出る場合は、私かクジャク君のどちらかを、必ずそばに置くこと。これだけは一瞬たりとも違えるな。お前の命も危ういが、やつはこの指切り落としてでもオオカミを奪っていく。指の一本など、あっけないほどたやすく落とせるぞ」
「あいつは、この指輪がオオカミだと？」
「知っているかどうかは問題ではない。我々が対処できているかどうかだ」
「わかった」
「アレサンドロさん、通信です。二号車から」
「どうするのかという問い合わせならば、いまから説明すると伝えておけ」
「了解です」
「さあ、リーダー君、仕事だぞ」
「ああ。……つないでくれ」

紋章官会議

「……これだけですか？」
「いまの時点では」
「これでは、なんとも判断のしようがありませんね」
帝城の一室に集った、六人の紋章官のひとり、ハイゼンベルグ軍アルバート・バレンタインは、薄いレジュメの裏側まで確かめて、ため息をついた。
そこに記されているのは、昨夜、鉄機兵団宿舎において起こった、ボヤ騒ぎについての報告。
夜間であったことに加え、比較的警備が手薄であったことから、犯人、及び動機についてはいまだ不明であること。そして、高さ三メートルの塀の向こう側から、手製と思われる爆発物が投げこまれたらしい、と、それだけであった。
「奴隷の一派でしょうか」
「例の『赤い三日月戦線』か？」
と、ホーキンス軍、ヨーゼフ・グレゴリオが髭をかく。
「それはどうでしょう」
と、ヴァイゲル軍ヴィットリオ・サリエリが、議長へ発言の許可を求めた。
議長は、最年長のエルンスト・コッセル。ラッツィンガー軍紋章官であった。
「私は、そう決めつけるのは早計であると考えます」
「なぜ、そう思いますか？」
コッセルは、その温顔にふさわしい所作で、サリエリに起立をうながした。
「は。私は、赤い三日月戦線のリーダー、エディン・ナイデルという男に、強い自己顕示欲を感じました。それでなくとも、帝都中心部への攻撃は、外部への格好のアピール材料。それを、犯行声明文

ひとつ出さずにおこなうとは考えられません」
「なるほど」
「これは、彼に触発された奴隷か、もしくは帝国への不満を持つ者、すなわち、旧ロンドランドやアルデン、その他地域の残党勢力の仕業ではないかと考えます」
「他に意見は？」
「コッセル紋章官」
「どうぞ、バレンタイン紋章官」
「自分は、旧国家の残党勢力、という意見には反対です」
「その理由は？」
「先帝、ユルブレヒト三世陛下が平定宣言をされて、すでに三十年です。つまり、残党勢力には三十年の猶予があった」
「ふむ」
「しかし、それにしてはやり方も、標的も、結果も小規模すぎます。まるで訓練を受けていない者が、昨日今日思いついたような……」
「なるほど、わかりました。では、他の意見を……」
「いや、わしはありませんな」
「シックザール紋章官、あなたはどうですか」
指名を受けたハインツ・シックザールは、わずかに背もたれから身を起こし、首のこりをほぐすような動きをした。
この人物、ここではシックザールと言うよりも、『鉄仮面』と呼んだほうがわかりやすいかもしれない。
この黒甲冑の鉄仮面こそが、セロ・クラウディウス軍の紋章官だったのである。
「なにか意見は？」
「……ひとつ」
「聞かせてください」
鉄仮面は、音もなく立ち上がった。
「無駄ではないだろうか」

「無駄？」
「このような話し合いも、不毛な犯人探しも、すべて」
「失礼だが、シックザール紋章官！それは……！」
「バレンタイン君。冷静に」
「く……失礼、しました」
「それでその、理由は？」
「貴公がわからぬはずはない」
「それが理由にならぬことも、あなたならばわかりますね」
「……」
「シックザール紋章官？」
鉄仮面が深く息をはき出す、くぐもった音が響いた。
「……もし仮に。いまの流れで奴隷を犯人と断じたとしても、なにができる。見境のない粛清は火に油を注ぐようなもの。生かさず殺さず、それこそが安定世界の条件であったはず」
「ふむ……」
「だからこそ、適度に捕らえてはホーガンへ送りこみ、恐怖を根づかせてきた。ネズミのように言葉を持たず、隠れひそんで生きるならば、生き長らえるだけの自由は与えてやろうと」
「……そのとおりです」
「それを貴公、いや、貴公の主、ラッツィンガーは、あえて排除するというのか」
「いいえ。……確かに、それは不可能でしょう」
「それこそが理由だ。コッセル紋章官殿」
鉄仮面は、また、闇が降りるかのように着席した。
……そのとき、ふと。
窓際のササ・メス、リドラー軍紋章官が外を眺めやったことで、全員の目が、その視線を追いかけた。
雪が降り出している。
「今年は、よく降ることです」
コッセルは、手元の資料をトンとそろえ、脇へ押しやった。

「さて……これは、いまだからこそ言える話ですが。陛下は、ホーガン解放を、政策のひとつとして考えておられるようでした」
　これには、打ちそろった紋章官全員が、驚愕をあらわにした。
「それは、陛下ご自身が？」
「ええ。今年、いえ、去年の春のことです。私を呼び止められ、そのような選択肢はないのだろうかとお尋ねになりました」
「それで、なんと」
「陛下が望まれるならばと、お答えしました」
「ううむ、いかにも。いかにもですな」
「……しかし、ホーガンはすでにない」
「そのとおりです、シックザール紋章官。正確には、機能を停止している。あなたに言わせれば、これも無駄な情報でしょう」
「……」
「しかし、陛下が奴隷の立場を見直そうと考えておられたことは確か。現在帝国内で起こっている一連の事件は、それを考えるいい機会になるのではないか、私はそう思っているのです」
　と、コッセルは机上に置いた手を、祈るように組み合わせた。
「そのためにも、我々には正確な情報が必要です。その情報を共有する、ネットワークの体制も。こうして話し合いの場を持ち、結論は出せないまでも可能性を探っていく。それは決して、無駄なことではないと思いますよ」
「……ふん」
　鉄仮面は、四度、手を打ち鳴らし、自身の負けを認めた。
「とはいえ状況は、あまりかんばしくありませんね。このままでは本当に……」
　奴隷の粛清が始まり、十五年前の戦が、再びくり返される。
「コッセル紋章官、彼らはどう出るとお思いですか」
「レッドアンバー、ですか」
「はい」

サリエリの眼鏡が、今日は謙虚に輝いた。
「仮に私ならば、おそらく非戦闘員をかかえている分、極端な攻撃行動は避けるかと。しかし、黙っているとも思えません」
「ええ。その判断は正しいと思いますよ」
「では」
「彼らは拠点となる場所を探しているのでしょう」
サリエリは、わが意を得たりとうなずいた。
「我々の知らない魔人砦があるのかもしれません。魔人の長い歴史において、そういったものが一切存在しなかった、と考えることのほうが不自然です。……ただ、拠点を得たところで、彼らが戦いに出るか、どうか」
「では、篭城を？」
「彼らが生き延びるためには、おそらく」
「そこに他の奴隷も集まれば脅威です」
「そう……脅威ですね」
そこでふと、コッセルは口をつぐんだ。
「ふふ……どうせならば、そこが『陸のホーガン』になってくれればよい、などと考えていては、和解などとてもとても」
それは、自嘲の笑みだった。
「ひとりの人間でさえこうなのです。十五年に渡って積み重ねられてきた集団感情は、なまなかのことでは払拭できない。それはもちろん、奴隷にとってもそうでしょう」
「……」
「先の長い戦いになりそうですね」

マンムートブリッジに、それら一連の情報がもたらされたのは、やはりジョーブレイカーの報告によってであった。
『……それで、鉄機兵団はどう動いた』
『ハイゼンベルグ、ヴァイゲル両軍が帝都の警備に』

『将軍機の修理待ちだな』
『そうだ』
『そしてオルカーンが帝都を出た。違うかな？』
『……そうだ』
『ンッフフフ』
無論、この超人とて紋章官会議を盗み聞いたわけではないのだが、例の檄文に対する帝都の反応を探っている間に、こうした鉄機兵団に関する現況情報も入ってきた、ということだ。
『エディンはどうしている』
『手下を三人、使いに出した』
『行き先は君でも無理か』
『……』
『なに、手が足りんものは仕方がない。監視を続けてくれ』
『承知した』
おおよそこのような打電を交わし、ハサンは伝え聞いたそのとおりの事実を、ブリッジキャプテンシートのアレサンドロと、その隣のクジャクへと告げた。
なにもこの程度の仕事はハサンでなくとも事足りるのだが、暗号表もなしに打電をやり取りできるのは、マンムートの中でもハサンとジョーブレイカー、そして意外にも、テリーの三人だけなのである。
「そうか」
あごをかいたアレサンドロは、帝国全図をサブモニター上に表示するよう指示をした。

「整理してみようぜ。ギュンター・ヴァイゲルと、カール・クローゼが帝都だな。そして、スピードスターのオルカーンが、こっちへ向かってる」
「エディン・ナイデルは、そう、ここからおよそ三十キロ」
「他のやつらはどうだ？」

「今現在は帝都だ。オットー・ケンベル以外はな」
「ケンベル……例の、スナイパー軍団か」
「新年祭にも戻らなかったというが、はてさて、どのあたりにいるのやら」
するとクジャクが、
「帝都とはやり取りをしているはずだ。それを追えんのか」
「並の軍ならばともかく、相手はスナイパーだ。そうやすやすと足取りをつかませるとは思えんな」
「む……」
「とはいえ、こちらが先に居場所を特定できなければ命取りだ。開発にたずさわった我らがセレン・ノーノ博士によると、やつの将軍機『メラク』の射程は、七キロ」
「な……ッ！」
「たとえレーダーの網にかかったとしても……」
ハサンは、パッと、手を開いた。
「どうする？」
「そう、そこだ。単純にして最も難解な質問。どうすればいいか」
「手はあるのか」
「ふむ、ないでもない。つまり我々が求めているのは、なにはなくともケンベルの居場所だ。そのために、まずは、ジョーブレイカー君の情報網を利用する」
それは、鉄機兵団をもしのぐ、神殿内のネットワークだ。
「ただし、我々が信用できるのは、土女神と月女神のみ。となると、それら神殿の少ない、この西部領近辺では少々分が悪い。メイサの眷属である海女神も味方にできれば、もう言うことはないがな」
「他には」
「オルカーンが出たというのがポイントだ。たかだかＬ・Ｊ三機程度の戦力しか持たん赤い三日月戦線相手に、帝国の誇る飛行戦艦を投入するだろうか。いや、しまい。やつの目的もまた、我々だ」
「……だろうな」

「ならば、強大な力を持つもの同士、いずれどこかの場所で合流、もしくは連絡を取ると考えられる。そこをキャッチする」
「ふうむ」
「無論、隙があるならば先手を取るのもいいだろうが、最低限、奇襲を回避し、対応を練る時間は得られるはずだ」
「それもジョーにやらせんのか？」
「そうだ。それに加え、もうひとつのルートを使う」
「もうひとつ？」
「フフン」
「おい、もったいぶるな」
「いや、お前もどこかで聞いた覚えはないかな？飛行戦艦を天敵と位置づけ、その情報収集に抜かりない組織のことを……」
「海賊か！」
「そのとおり。言うまでもなくオルカーンは我々を警戒しているだろうが、いまこのときに、海賊は眼中にあるまい。ソブリンならば裏切る心配もなし」
「……へぇ」
「おや、リーダー君、エディン・ナイデルの真似かな？」
「まあ、な」
にやりにやりとするアレサンドロに、ハサンは、わざとらしい閉口顔を見せた。
誰も信用するなと言ったのは、あんたじゃなかったか？
うるさい。
そんなやり取りが聞こえるようだ。
「とにかくも、使えるものは馬糞（まぐそ）でも使う。でなければこの戦、到底乗り越えられんぞ」
そうしてすぐさま、ジョーブレイカーとソブリンに、電信が打たれた。

下衆

マンムートの進行速度は、例の檄文あたりから格段にのろくなった。

オットー・ケンベルの銃弾が、そしてオルカーンの砲弾が、いまにも飛びかかってくるかもしれない。

それがわかっていながら、地中や山陰に隠れ進むこともしなかった。

つまり、そうしなければ、凧やのろし、時にはマンムートの鼻先にまで飛び出してくる元奴隷たちの合図を、見逃してしまうからである。

エディン・ナイデルの檄文は、たとえば鉄機兵団宿舎へ爆弾を投げ入れた者のような、いまだ戦う気力、体力のある同志を奮い立たせ、もう一方では、マンムートという『駆けこみ寺』の存在を、世に知らしめた。多くは、土地の有力者や行商人を介しての噂、という形でだ。

戦いには参じないと決め、その旨をマンムート全体に通達したアレサンドロだが、必死の思いで救いを求めてくる者は見過ごせない。

なにか、気になる目印を見つけた場合にはすぐに停車させ、それが十五年に渡って息をひそめ続けていた仲間であった場合は、一も二もなく受け入れた。

ここ数日の間に、二号車収容の人数は、三十人ほど増えていた。

そして、この日も……。

「アレサンドロさん！」

「どうした」

「煙です。右手のほうに」

「右？」

このマンムートでは、耳になじみのない時針表現は使わない。

アレサンドロが右を見ると、サブモニターに、細くたなびく黒煙

が映っている。
　マンムートはすぐさま停車し、子どもを含む十二人という大人数を、簡単な聞き取り調査ののちに受け入れた。
　続々と底部ハッチを駆け上がってくる笑顔を、多くの笑顔が歓迎する。その喜びの中で、
「待て」
　その事件は起こったのだった。
　なんと、すらり、レイピアを引き抜いたハサンが、最後尾についてスロープを上がってきた男の首元に、切っ先を突きつけたのである。
　ぎょっと目をむいたその中年男は足を止め、同じく迎えに出ていたクジャクへ、助けを求めるような視線を送った。
「どうした、ハサン」
「におうな」
「なに」
「油だ」
　息を呑んだ中年男は、視線を泳がせた。
「逃亡者には不似合いな持ち物だな」
「し、知らない……」
「ではこれはなんだ？」
　レイピアの先が、防寒着のすそをめくり上げる。
　そこには、厳重にパッキングされた水筒がぶら下がっていた。
「こ、これは……」
「バーベキューパーティでもするつもりだったか？ん？」
「ま、待て」
「おお、待ってやる。あの子らがこの場を去るまではな」
　……こんなこともあった。
　その日は、大きく旗を振る男の姿がカメラに捉えられ停車したのだが、事情を聞き取りに行った若者のひとりが、息を切らせて駆け

戻ってきた。
「ア、アレサンドロさん。こ、子どものほうが、死にそうで！」
「なに？」
「ま、真っ青で、とにかくきてください！」
そこでアレサンドロは、近頃では、ほとんど体重を預けることがなくなった松葉杖を小わきにかかえ、飛び跳ねるように外へ出た。
「ア、アレサンドロさん、こっちです、早く！」
と、手招きで呼ばれたそこには、マンムートの若者三人の他に、夫婦らしい若い男女と、その腕に抱かれた赤ん坊がいる。
小さな小さな手足は哀れなほど痩せ細り、いまにも消え入りそうなほどの浅い呼吸をくり返していた。
「貸せ」
アレサンドロは、赤ん坊を奪うように取り上げると、体温を下げないよう留意しながら、その拍動を確かめた。
「た、助かりますか」
男が言う。
「……ちゃんと治療してやればな」
「ああ、よかった。早く中に入れてください」
「早く、この子を暖かい場所に！」
「ああ……」
アレサンドロは、赤ん坊を若者のひとりに預け、ひと言ふた言指示したのちに、マンムートへと走らせた。
その青年と入れ違いに、クジャクが駆けて来るのが見えた。
「わ、私たちも……！」
と、夫婦者が言うのへ、
「いや……お前らは、どこへなりと失せな」
「え？な、なにを言ってるんです」
「あの子は、私たちの子どもですよ！」
「冗談じゃねえ！」
ふたりは目を見開き、びくりと身体を震わせた。

「いまのを見たか？餓死寸前だ。かさかさに干からびた口で、乳を欲しがってる。なのにどうして、てめえらの服は、垢のひとつも浮いちゃいねえんだ！」

「う、うっ！」

「……体よく取り繕っちゃいるが、てめえらは飢えてねえ。親であるわけがねえだろ」

「く、くそっ！」

激昂した男の手元に、ナイフが光った。女の手にはカミソリだ。ふたりは呼吸もぴったりと、アレサンドロ目がけ刃を振り下ろす。しかし……。

「う、ぐぅッ！」

「ぎゃあぁ！」

女は、クジャクの鉄棍に腹部を打たれてうずくまり、男は、アレサンドロに腕を取られたその瞬間、叫び声を上げてのたうちまわった。骨を外されたのだ。

「……行こうぜ、クジャク」

「いいのか」

「ああ、放っとけ」

アレサンドロは、もう、このふたりの顔さえ見たくはなかった。たとえこのふたりが、真実あの子の両親であったとしても、その関係を断ち切るだけの理由があると、アレサンドロは信じて疑わなかった。

そして、その後……。

幸い、赤ん坊はもらい乳をすることを得て、命を長らえた。

そして目が離せる程度に回復したところで、乳のやり手であり、ホーガン投獄直後に初めての子を死産させてしまったというカルロとベラの若夫婦に預けられ、『アレサンドロ』という名をもらった。

小さな、茶色い目のアレサンドロは、いつも力いっぱいミルクを飲み、

「おっぱいがちぎれそう」

と、ベラを喜ばせた。

「……く、そ！」

「まあ、落ち着け落ち着け」

「あんたは腹が立たねえってのか！」

「なに立つとも。ここにやつの面があれば、泣きわめくまで殴りつけている」

「……チッ」

「さあ入れ。ここは目立つ」

ブリーフィングルームに突き入れられたアレサンドロは、この数日間の怒りに燃えていた。まったく、その怒りは、とどまるところを知らなかった。

無関係の、それもかつての仲間まで巻きこもうかという焼き討ち。赤ん坊に対する、人の道にもとるおこない。

その他にも、人為的と思われる工作とその痕跡は、あとを絶たない。

「エディン・ナイデル！あの、下衆野郎が！」

ハサンは苦笑した。

ちなみにこのとき、まだ小アレサンドロは危険を脱したばかりで、予断を許さぬ域にいる。

「……ハサン。あんた、手はねえのか」

「手？フフン、手か」

「そういうことを言ってるんじゃねえ」

「おお、わかっているとも。しょうもない駄洒落だ」

隻腕のハサンはおどけ調子に、中身のない右そでを振り回した。

「しかし、手とひと口に言っても、目的によってやりようが変わる。お前が望むのは工作の妨害か？それとも……やつの死か」

「そいつは……」

「ンン、そいつは？」

「わからねえ」
アレサンドロは、心底くたびれ果てた身体を、椅子へ落とした。
「あいつをヤれば……うちの連中に示しがつかねえ」
それだけは、はっきりとわかる。
と言うよりも、全国の、元奴隷たちに対してそうだろう。
エディン・ナイデルがマンムートを狙うことに関しては、ある程度の大義立て、つまり、
「マンムートの者たちはN・Sを独り占めにし、自らのためだけに、その力を行使しようとしている」
などと言うことができるだろうが、こちらには、それがなかなか難しい。
しかも兵力的に見れは、圧倒的にこちらが上だ。
もし仮に、これといった理由もなしに力ある者がない者を押しつぶせば、それは虐殺と言う。
「上出来だ。いい考察だな、アレサンドロ」
「チッ、茶化してんじゃねえ」
「なにを茶化す。まったくそのとおりだ」
「だったら、こっから先の上手い進め方を考えてくれ」
もはや怒りと気疲れとで、アレサンドロには冷静な結論を出せる自信がなかった。
「では私の意見を」
と、ハサンの手が、アレサンドロの肩に置かれた。
「エディン・ナイデルは放っておけ」
「なに？」
アレサンドロは、思わず身を乗り出した。
「あいつの好きにさせておけってのか」
「そうだ。監視についているジョーブレイカー君も引き上げさせる」
「ジョーまで？」
「なに、どうせ、いまのままでもカバーしきれんのだ。彼本来の才能を生かし、ここはマンムート周辺の目を強化する」

「そいつは……どうだかな」
「だがいいかアレサンドロ。そうして一時期耐えしのげば、必ず、やつの名が落ちる。旗をかかげた張本人が、なぜ仲間割ればかりしている。早く鉄機兵団と戦え、とな」
「うう……む」
「大衆というものは、一時の熱狂が過ぎれば冷静になり、期待が満足されんとわかるや、冷淡に、そして冷酷になっていく。やつを仕留めるのはそのときだ。……だが」
と、ハサンはひと息、言葉を区切って、
「ひとつ、先の読み切れん不安要素がある」
「珍しいな。なんだ？」
「魔人の参戦だ」
アレサンドロは、息を呑んだ。
「これをやられれば、もうどうにもならん。再び、あの時代へと針が戻る」
「止められねえのか」
「我々には無理だ」
「じゃあどうすりゃいい」
「魔人の聡明さに期待するしかあるまい」
「……」
「フフン、そうみっともない顔をするな。可能性としてはそう高くない」
そう言ってハサンは、ここでようやく椅子を引き寄せ、座った。
「とはいえ、さて、どうしたものかな」
オルカーンとメラクに関する情報は、いまだもたらされていない。放っておくと言っても、エディン・ナイデルの存在までもを無視できるわけではない。
「そうだ、もうひとつ防御網を張ろうか」
「もうひとつ？神殿と海賊の他にか？」
「ンン。だが……こちらもどうかな」

目を伏せたハサンは、自身に問いかけるようにつぶやいた。
そして……。
「明日の朝まで、少々時間をもらえるかな、リーダー君」
と、結論を先送りにした。
「らしくねえな。今日はどうした」
「フフン」
「やばい作戦ならごめんだぜ。いまは心配を広げたくねえ」
「いかにももっともだ。まあ、私のすることと思い、まかせてみることだな」

翌早朝。
アレサンドロは、医務室のドアをひそやかに叩く物音で、目を覚ました。
窓の外は、まだ薄暗い。
椅子に腰かけたまま、うんと伸びをし、立ち上がりぎわに赤ん坊の様子を見ると、添い寝するベラの指を握り、なんともかわいらしく、唇をもぐもぐとさせている。
ノックの主は、ブリッジ詰めであるはずの若者であった。
「どうした？」
「すみません。ハサンさんが呼んでます」
「ああ。どこにいる？」
「外です。山側の森の近くに」
「わかった。他に異常はねえな」
「はい。あ、あの赤ちゃん、大丈夫ですか」
「ああ、そろそろ、二号車にやってもいいみてえだな」
「そうですか。よかった」
「あとは頼むぜ」
「はい」
アレサンドロは若者の手からコートを受け取り、外へ出た。

「う、ふう、寒ィな……」
あわてて首のあわせを握りしめ、アレサンドロは、左足をかばいながら小走りに駆ける。
車体下から、マンムートの作った深いわだちを避けて鼻先へ出ると、空は藍色と桃色の見事なグラデーションだ。
その右手。
黒い小山のようなモミの木立を前にして、大小ふたつの影が並んでいた。
「おはよう、リーダー君」
と、この声は、もちろんハサン。
そしてもうひとりは、
「おはようございます」
「おう、久しぶりだな、モチ」
「え、まったく」
雪に負けず劣らず真っ白な、モチであった。
実はこのモチ、新年祭数日前から、左舷後方百二十ミリ機関砲の隙間に住まいを移し、自然環境に近い中で、フクロウらしい生活を送っていたのである。
「おかげで随分と、寝不足が解消されました」
「そりゃ結構な新年休みだったな」
アレサンドロは、ひょこひょこ近づいてきたモチを抱き上げた。
するとこれだけで、格段に温かくなった。
「しかし今度は、あなたの睡眠が足りていないようです」
「なあに、たいしたほどじゃねえさ」
「なら、いいのですが」
モチの黒々とした瞳が、ふと、森の奥へ向いた。
「来たな」
「え、来たようです」
「なにが来た？」
アレサンドロもまた、ふたりの視線を追いかけた。

……アー。
「なんだ？」
耳をそばだてる。
目をこらす。
アー、アー。
「……カラス？」
と、思う間に、木立の内包する闇が溶け出したかのような一羽のカラスが、どことなく上品な足取りで現れた。
アー。
立ち止まり、カラスが鳴く。
ボウ、ボウ。
アレサンドロの腕の中で、モチが答える。
アー。
再び鳴く。
モチは、パッと地面へ飛び降り、その、自分よりもひとまわり小さいカラスの鼻先で、大きく翼を広げて見せた。
カラスは二、三歩後ずさったが、すぐにこちらも翼を広げ、一際高く鳴いた。
と……そのときである。
目の前の木立全体がざわめき始め、何十、何百というカラスの群れが、いっせいに、空へと飛び立ったのである。
荒々しく鳴き散らすカラスの大群は、それ全体が一羽のカラスのように編隊を組み、頭上を黒く染め上げる。
女子どもならば、悲鳴を上げて逃げ出すところだが、
「フークローウ君」
ハサンは悠然と、ステッキを振りまわした。
「怒らせてはいかんな。交渉の基本は友好的にだ」
「とんでもない。私は友好的です。それをこの、生意気な若者が」
「だとしてもだ」

「ム……」
「それにしても、見事にカラスばかりだな。君は彼らだけに声をかけたのか？」
「まさか。これだけカラスが集まれば、来るものも来ない。それだけのことです」
「フフン、嫌われ者だな」
「おい、ちょっと待ってくれ。交渉ってのはなんなんだ」
アレサンドロは、カラスの群れが、どんどんとその数を増やしていることに恐怖を覚えたが、それを表に出さないよう、つとめて冷静に尋ねた。
「ハサン、あんたが呼んだのか」
「まあ、そうだ。彼らにも協力願おうと思ってな」
「カラスに？なにをさせようってんだ」
「とりあえずは見張りだ。マンムートを生活圏の一部に取りこんでもらい、怪しげな人間がテリトリーを侵した場合は、威嚇し、攻撃してもらう」
「生活を、なんだって？」
激しい羽音と鳴き声で、周囲は騒々しいことこの上ない。
「フクロウ君。とにかく、彼らを落ち着かせてくれ。このままでは憤激どころか、『フン撃』をくらうぞ」
「……わかりました」
モチはトコトコと、一羽残った先ほどのカラスの前へ進み出て、今度はいかにも丁重な態度で、低く鳴いた。

アー、アー。
「……ホウ？それは、どういう？」
アー、アー。
「それは、むごいことを……」
アー。
「フム、そうでしたか」

アー。
「え、わかりました」
モチが振り向いた。
「ひどい話です」
「ふむ。……そのカラス君は、人の言葉が理解できるのかな」
「ホ、ホウ、これは、確かに。しかし、ま、そういったこともあるでしょう。カラスは特に、賢い鳥です」
カラスは、こころなしか得意げに、小さな胸を張った。
「で、そいつはなんて？」
「エディン・ナイデルです」
「なに？」
「おそらくそうでしょう。彼が言うには、線の細い、嫌な目つきの男です」
「それがどうした」
「……カラスを、殺すのだそうです」
突如、カラスのけたたましい鳴き声が、空へと響き渡った。
その沈痛なる叫びは声を継いで伝播し、まるで冬の潮騒のように、荒々しく渦を巻く。
「その男は言うそうです。あの女が、あの方を殺した。お前たちが憎い、憎い、と。ナイフを片手に、彼らの仲間を裂きながら、そう言うそうです」
「それで、我々の誘いに乗ったか」
「はい。彼らは、復讐を望んでいます」
「……チッ」
アレサンドロには、いまこそ、カラスたちの声が、はっきりと聞こえた気がした。

盾

アー。
アー。
朝日の中、カラスたちが催促している。
ユウはかついだ麻の布袋を降ろし、その口を縛る縄をほどいた。
中身を手探りにあさり、指にふれた冷たいカップを掘り出しざま、パッと、雪面にまいたのは、粒のままの乾燥とうもろこしだ。
マンムートの一防衛線となったカラスたちへの、これが報酬というわけである。
実際、その活躍は目覚ましく、この小さな戦士たちがマンムート周辺をテリトリーとしてからというもの、赤い三日月戦線による工作活動は、目に見えて減少している。
カラスたちは飛び跳ね飛び跳ね、さも美味そうに、硬い粒をついばんだ。
「ユウ」
「アレサンドロ、ひとりで出てもいいのか？」
ユウは、アレサンドロが、クジャクもハサンも連れずに現れたことに、わずかながら戸惑った。
先のスナイパーたちの例もある。
自分だけでは荷が重い。そう、感じたのかもしれない。
「おう。なにかありゃあ、こいつらが騒いでくれるさ」
「でも……」
「なあに、構わねえさ。ほら、貸してみな」
「あ、ああ」
カップを取ったアレサンドロは、一心不乱に首を動かす群れのうしろへも、とうもろこしの粒を放ってやった。
ユウは、カラスたちの様子が、まったく変わらないのを見て、ようやく、ここは安全なのだと思えた。

「そういや、お前、知ってるか？」
アレサンドロが、微笑を浮かべて言った。
「こいつらの中には、俺たちの言葉がわかるやつもいるんだぜ」
「へえ、いや、そうじゃないかと思ってた。頭がいいんだ」
それと言うのも、ユウは、昨日も同じようにこの場へ立ったのだが、そのことをカラスたちは、忘れずにいてくれたのだ。
こうして直接手に乗せて差し出しても、まったく警戒をしない。頭を突き合わせてつついてくる。
「可愛いな」
一羽の頭をなでてやると、そのユウの指先も、カラスはくちばしの先で甘くくわえてきた。
ユウはなぜだかどきりとし、思わず、手を引いていた。
「あいつが焼きもちを焼くぜ。カラス相手になにさ、ってな」
「べ、別に、それこそ、カラスじゃないか」
「まあ、そいつだって男かもしれねえしな」
くっくと笑ったアレサンドロもまた、ひとすくいのとうもろこしを手のひらに乗せ、腰をかがめた。
カラスたちは、すぐについばみ始めたが、ユウのものほど、すぐに飲みこみはしなかった。
「ん？悪ぃな、薬くせえか」
粒を雪にこすりつけるような動作をしていた一羽が、アー、と鳴く。
「手を洗えってか」
苦笑したアレサンドロは、結局、すべてを雪上にばらまいた。
「しかしよく食うな、お前ら」
……。
「冬だからな。普段はなに食ってんだ？」
……。
「俺の知ってるカラスは、そんなに無愛想でも、大食いでもなかっ

たぜ」
……。
「うるせえ、邪魔すんな、ってところか」
それまで楽しげに細められていた目が、ふ、と、かげりを帯びた。
「なあ……」
と、その声色の変化に気づいてか。先ほどのカラスが、ひょいと顔を上げる。
その小さな目は哲学的であり、無邪気でもあり。アレサンドロの胸に否応なく、在りし日の面影を思い起こさせた。
「なあ……お前らの中からまた魔人が生まれたら……俺に、会いに来てくれるか？」
「アレサンドロ……」
「……ハ」
アレサンドロは、静かに目頭を押さえた。
「これだから、俺ってやつは駄目なんだ。泣くならひとりで泣けってんだ、なあ？」
アー、アー。
「そうだ、そのとおりだ？冷てえな」
……いや、違う。
これは……。
「アレサンドロ！」
「うん？……う、お！」
カラスたちが、いっせいに飛び立った。
「L・Jだ！」
「なんだと？」
アレサンドロは、ユウの指差した方角を、飛び起きるように見やった。
それは、ありえないことだった。
カラスたちや、この周辺に隠れひそんでいるだろうジョーブレイ

カーならばまだしも、遠距離からやってくるＬ・Ｊの存在を、マンムートのレーダーセンサーが見逃すはずがない。
しかし現実問題、Ｌ・Ｊはそこにいた。
遠く山陰に隠れたその姿はいまだ小さなものだったが、確かにふたりの肉眼で確認することができた。
所属を表す肩のペイントはどうか。赤いペンキで、べったりと塗りつぶされていた。
「どういうことだ？どんな魔法を使いやがった」
「とにかく、アレサンドロはブリッジに戻ってくれ。ここは俺がどうにかする」
「いや……相手は三機か。俺も出るぜ」
「駄目だ。やつらはオオカミを狙ってるんだろ」
ユウの不安が、ただ単にＮ・Ｓに対するものだけでないことは、アレサンドロも理解していた。
だがいまは、それをふたりで言い合っている暇はない。
敵Ｌ・Ｊは、そうしている間にも近づいているのだ。
「いいかユウ。俺が出りゃあ、エディンを挑発できる。こっちから仕掛けることができねえなら、あいつから仕掛けさせりゃいいんだ」
アレサンドロの指輪が、閃光を放つ。
『俺はもう、こんなくだらねえ屁のかまし合いはごめんだ。手遅れになる前に、あの野郎を黙らせてやる！』

アレサンドロの乗るオオカミが駆け出し、ユウのＮ・Ｓカラスも、遅れまいと一歩踏み出しかけたとき、ようやく、マンムートの警報が高らかに鳴り響いた。
と、同時に、走るカラスの肩へ降り立った影が、ひとつ。
「カウフマン」
ジョーブレイカーである。
『ジョー、なんで警報が鳴らなかったんだ？』

「カラスだ」
『カラス？』
驚いたユウの足が、つい止まった。
「双角の内部に、巣を作った者がいる」
『それでレーダーが壊れたのか？』
「そうだ」
『修理は？』
「これから詳細を確認する。やつらを近づけるなとの指示だ」
『わかった。もし出られるようなら、テリーも出して欲しい』
「承知した」
ノミのように飛び跳ねたジョーブレイカーが、足元の岩場を実に素早く走り抜けていくのを見送り、ユウもまた、離されてしまったオオカミのあとを追って駆け出した。
オオカミは、敵機まであと数十メートルといったところで立ち止まり、なぜだろう、ぶるぶると、拳を震わせていた。
『アレサンドロ？』
『畜、生……』
『え……？』
『畜生、あの野郎……そこまで堕ちてやがるのか！』

いまこの場景を目にすれば、おそらくハサンでも言葉をなくしたことだろう。
赤い三日月戦線が奪ったという、三機の六〇〇系Ｌ・Ｊが目の前にいる。
そして、それぞれのその手には、陸戦型Ｌ・Ｊの拠点守備用装備である、全身を覆い隠すほどの大シールド。
その大盾の前面に……人間だ。
盾一枚につき二十人からの人間が、ずらりと、ぶら下げられている。
極寒の冷気の中、電気でも当てられたかのように全身を震わせて

いるそれらの多くは、まるで半裸に近い格好だったが、その中の、片手で数えられる程度の人数は鎧を着ていた。
つまり、どこかの騎士たちなのであった。
『なんてことを……』
ユウは一時、茫然となった。
大義という裏づけがあれば、人はここまで残忍になれるものなのか。
いや……しかし、そうだ。
なれるのだ。
自分の生まれた村が、まさに、その残忍さの犠牲となった。
……瞬間。
目蓋を走る蹂躙の残像。
まざまざと思い返される血のにおい。
『痛……うッ！』
こらえようのない頭の痛みが、ユウの頭蓋を走る。
そのユウを置き去りに、
『エディン、ナイデル！』
激昂したアレサンドロは、猛然とＬ・Ｊへ踊りかかっていった。
『アレサンドロ、駄目だ！』
こんな戦いはするべきではない。必ず、後味によくないものを残す。
そんな無駄な死を背負うべきではない。
『アレサンドロ！』
しかし、白銀のオオカミは聞く耳を持たず、突きつけられた人の盾を前に細かなステップを踏んだかと思うと、横合いを転がるように位置を変えていた。
一機の背後にまわりこんだオオカミの腕が、がっちりと、羽交い絞めに決まった。
『さあ、あいつのところへ連れて行ってもらうぜ！』
残りの二機を、こちらも『盾』でけん制しつつ、アレサンドロが

言う。
『あの野郎も、それを望んでやがるんだろうが！』
アレサンドロはもちろん、これでエディンが現れるものだと信じていた。
ところが、アレサンドロの耳へ返ってきたのは、なんと嘲笑だ。
『う……』
目の前の二機が、じわり、間合いを詰めてくるではないか。
『止まれ。てめえらはそのまま、Ｌ・Ｊを降りろ！』
言いながらアレサンドロは、自分の声が震えるのをどうしようもない。
『止まれ、止まらねえか！』
相手Ｌ・Ｊの手にある、凶悪な棘つきの棍棒が持ち上がった。
『や、めろ……』
それが数秒後に叩き潰すだろうこちらの盾と、そこに描かれるだろう惨状を想像し、アレサンドロは、強くかぶりを振った。
『やめろぉぉッ！』

ガン。
ブリキ同士をはたき合わせたような、鈍い金属音が響いた。
二十メートルも向こうへ落ちたのは、ひじから飛ばされた機械の右腕。その手にはまだ、棍棒が握られている。
ガン、ガン、と。
さらに六〇〇系Ｌ・Ｊの特徴である、天を指す二本角を生やした頭部と、ふたつの腕が、宙を舞った。
『テリー！』
まさに、テリーのシューティング・スターである。撃ち下ろしの射撃体勢を取ったそれが、マンムートの屋根から銃口を向けている。
状況をつかめずに右往左往した半壊のＬ・Ｊたちが、カラスの視線を追ってマンムートへ身体を向けた、そのとき。

放たれた二発の銃弾が、それぞれのコクピットを貫いた。
二歩、三歩と、力なく後ずさったＬ・Ｊ二機が、ゆっくりと、天を仰いでのけぞった。
『あ……！』
まずい。
Ｌ・Ｊの手を離れた盾が、表を下に倒れかかっている。
ユウは頭痛を振り払い、二枚の盾の下へ、無理やり身体をねじ入れた。
腕を突っ張り、地を踏みしめて、
『……ふう』
どうにか、騎士たちの命を、鉄板の下敷きにすることだけはまぬがれたようだ。
テリーの弾丸は、それ以上飛んでは来なかった。

『アレサンドロ？』
『う……』
『アレサンドロ』
『あ……！』
一体の、これは無傷のＬ・Ｊをかかえたまま、その陰に隠れるようにして身をすくませていたオオカミは、ユウの呼びかけで、ハッと身構えた。
そして、声をかけてきた相手がカラスとわかると、おびえたように周囲を見まわし、
『お前が……やったのか？』
『え……？』
『ああ、畜生……畜生』
と、嗚咽にも似た声をもらした。
自身を拘束する腕がゆるんだことを察知したＬ・Ｊは、ここぞとばかりにオオカミを突き飛ばし、バーニアを吹かして逃れたが、そこを、テリーの銃弾が襲う。

最後のＬ・Ｊもまた、盾を残し、倒れた。
『アレサンドロ！大丈夫か？』
『う……あ、ああ』
『立てるか？』
『いや、構うな。大丈夫だ』
尻餅をついたオオカミの手は、弱々しく、カラスのそれを払った。
ユウの心に、不安と心配がよぎる。アレサンドロは、震えているようだ。
『すまねえ。先に、戻らせてもらうぜ』
『あ、アレサンドロ……！』
『頼む。ちょいと、気分が悪ぃんだ』
『……わかった』
ユウは、頼りなげな足取りで戻っていくオオカミの背を、なぜだか、ただただ見送ることしかできなかった。

相棒のつとめ

「毛布を！」
「飲み物だ。誰か、飲み物を沸かしてこい！」
「おいおい、なんで騎士なんか助けなきゃならないんだ？」
「そんなこと、どうだっていいじゃありませんか。さ、どいてどいて！」
「外も手伝ってくれ！」

夜ごと停車しては、朝方進行を再開するマンムート。しかし今朝は、その出発の時刻となってもあわただしい空気に包まれていた。
まず、カラスの巣によって故障をきたした、レーダーの修理をしなければならない。
そして、二号車のレクリエーションスペースに受け入れた、総勢六十二名にも及ぶ騎士たちに対しても、下がりきった体温を上げる治療が急がれていた。
「ハサン、アレサンドロはどうした。やつがいなければどうにもならん」
と、応急処置の指揮を取るクジャクが訴えてきたのは、つい先ほどのことだ。
ハサンが床を打つ、こつ、こつ、という、妙にのんびりとした響きが通路を曲がり……、
「……チ」
その口から、かすかな舌打ちがもれた。
薬品庫の扉の前に、ユウがひざをかかえて座りこんでいたのである。
「あ……ハ、ハサン」
ユウは立ち上がると、尻についた泥を払った。
「なにをしている」

「あの、アレサンドロが、ここに……」
「それはわかっている。私は、お前がここで床を暖めていることに、なにか意味があるのかと聞いている」
「それは……」
「フン、カラスのがよっぽど役に立つ」
「あ、ま、待ってくれ！」
叫んだユウはドアとハサンとの間に、ぐいと身体を割りこませた。
「アレサンドロのこと、いまは、そっとしておいてやってくれ」
「ンン？」
「いまは、ひとりになりたいんだ。だから……」
「そう言ったのか」
「え……？」
「やつがそう言ったのか」
「ああ。落ち着いたら、きっと仕事に戻る、そう言ってた」
「そうか」
ハサンはそれでも、ドアの引き手へと手を伸ばした。
カチリ。
それこそふれただけで、魔法のように鍵が開く。
「お前はそこで待て」
「ハサン！」
ハサンは薬品庫へ滑りこみ、うしろ手に、鍵をかけ直した。

「おお、アーレサンドロー」
窓のない部屋だというのに明かりも灯さず。唯一の光源は、ドアののぞき窓から差しこむ光だけ。
いかにも子どもじみた隠れ場所だ。
奥の暗がりには鉄製の椅子と、在庫管理用の書類が乗ったすえつけの机があったが、もちろん、その上の光石スタンドも覆いをかけられていた。
せめてそれだけでも、と並の人間ならば考えただろうが、ハサン

の目は、そんなものがなくとも十分に見える。机の横、ささやかな細い光の筋が照らす五列の薬品棚の中でも、最も奥まった場所にあるそれの陰に、呼吸音も聞き取っていた。

わざと足音を立てて近づくと、

「……また、なぐさめに来たってのか」

ささやくような、アレサンドロの声がした。

「なぐさめて欲しいか、坊や？」

「ああ。あんたにその気があるならな」

「フフン」

闇の中でアレサンドロは、ひざ頭の間に頭を埋めるようにして、うずくまっている。

「どうなぐさめて欲しい」

ひざまずいたハサンが頭をなでると、その身体は、もうひとまわりも小さくなった。

「ハサン……」

「ああ？」

「あいつら、なんなんだ」

「エディン・ナイデル？」

「あいつら……本当に人間か？」

「おそらくな。ただ随分と、質が違うらしい」

「ああ……畜生……」

「アレサンドロ、お前が傷つくことはない」

「いや、怖ぇ。俺は、あいつらと戦うのが、怖ぇ……」

ハサンの眉間に、深いしわが寄った。

「嫌だ、冗談じゃねえ。俺はもう、あいつらとは関わりたくねえ。……あんたならできるか？ふん縛った人間を、頭から叩き潰すような真似が」

「……さて」

「俺にはできねえ。あんたがやると言っても、俺は認めねえ」

「ンン、当然だな」
「俺はホーガンで、ガキをおとりに使った。そんな自分も許せねえ！」
「……」
「それが、あの、野郎……」
語尾を震わせたアレサンドロは、両腕で自身をかきいだくようにして、大きく身震いした。
「……畜生」
それまで頭をなで続けていたハサンの手が、ふと、アレサンドロの冷え切った指を握った。

「すまん」
「……ハ」
アレサンドロは、まさかこの男が謝るとは思ってもいなかったために、また冗談だろうと笑い飛ばした。
しかし、
「すまん、受身にまわりすぎた」
と、語るハサンの目は、アレサンドロが一瞬言葉を失うほどの、真に満ちている。
「別に……あいつがどうかしてるのは、あんたのせいじゃねえ」
「いや、私は知らなかったのだ。騎士ではない者の戦い方を」
「それを言うなら、俺たちだってそうじゃねえか」
「では言い換えよう。過去も、未来もかえりみない者たちの戦い方だ」
アレサンドロは沈黙した。
「つまり、誇りだ」
ハサンは握る手に、力をこめた。
「わかるな？我々は違う。やつらとは、根本的に違う」
「……ああ」
「お前が、自分を恥じることはない。お前の恐怖は、人として正し

い反応だ」
「……ああ」
「よし、今日はもう休め。そして明日からまた働け」
「いや……さっきの、騎士たちはどうなった」
「なに、なんとでもなる」
「ならねえさ。俺も、行くぜ」
「……」
「鉄機兵団の騎士じゃあ、まさか連れて行くわけにもいかねえ。助かったやつらの身の振り方だけ、考えてやってくれ」
「……わかった。頼もしいな、リーダー君」
「できる紋章官殿の、おかげだぜ」
アレサンドロは影の中でかすかに笑い、そして、立ち上がった。

そうして、両手に薬箱をかかえて駆けていくアレサンドロを見送り、ユウは、ホッと胸をなでおろした。
これでもう安心だ。
やはり、ハサンは頼りになる。
「あの、ハサン……」
「ユウ、話がある。こい」
「あ、ハ、ハサン！」
返事も聞かずに、さっさと行ってしまったハサンのあとを、ユウは急いで追いかけた。
ひらめくマントが入っていったのは、ブリーフィングルームだった。
「鍵を閉めろ」
これは、いよいよ大事な話に違いない。そう思ったユウは、しっかりと鍵をまわした。
そして、わずかに躍る心を抑え、振り返ったところで……。
「あぅッ！」

なんと、強烈な張り手を食らい、机に突っ伏してしまったのである。

しびれた頬がみるみる熱くなり、渦を巻く視界全体に、チカチカと星が散る。

肉体はおろか、精神的にも衝撃はなはだしく、ユウは一瞬、これを夢だと錯覚した。

覆いかぶさってきたハサンによって、腕をねじり上げられ、顔面を冷たい机に押しつけられてようやく、痛みが、ユウを覚醒させた。

「理解できているか、ユウ。自分がなぜ、このような扱いを受けるのか」

「あ、い、痛、い！ハサン……！」

「おお、そうだろうとも。痛みを与えているのだからな！」

ハサンの左手がさらに腕を絞り、全体重のかかった右ひじが、ユウの耳の裏へ突き刺さる。

ユウは悲鳴を上げた。

「まったく、お前ほど腹立たしい男もないものだ。テリーを出してくれと聞いたときには、おお、私の弟子もそこまで考えるられるようになったかと、少なからずも感心した。それがなんだ！」

「あ、つ！」

「いいか、ユウ。いまさら、なぜ、などとは聞くまい。このまぬけ頭にも、わかりやすく言ってやる」

「ぅ……う」

「お前の仕事は、アレサンドロが浴びるべき血を、代わりに浴びることだ」

ユウは激痛に悶えながらも、耳に入った血という言葉に、息を呑んだ。

「目の前に茨が生い茂っているならば、お前がその身を横たえ、道となれ」

「ッ……！」

「取られた人質が救えんのならば、お前が人質を斬り殺せ」

「そん、な……！」
「それができんようなら、二度と相棒などと口にするな！」

ユウには理解できなかった。
いや、実際、ハサンの言葉はもっともかもしれない。
だがどうして、ハサンがここまで腹を立てるのか……。
トントン。
「彼氏さん、いるぅ？」
テリーの声だ。
「彼氏さぁん。いないなら、いないって言ってよ」
「ああ、ここにいるとも。なんの用だ」
「セレンさんのとこ、手が足りないんだって。角を分解するのに、ララちゃんのサンセットだけじゃ持ち上げられないって」
「……いま行かせる」
「あいよ」
まるで厳のように押しかぶさっていた重みが、ここで、ふとゆるんだ。
ほう、と張り詰めていた息が抜け、ユウは、まったく、足に力が入らないことに気づく。
あまりの恐怖で、すくみ上がっているのだ。
十数年を共に過ごしたと言っても、ハサンの激憤を受けたのは、いや、見ることさえも初めてのユウであった。
「早く行け」
「あ、ああ」
ユウは机を支えにどうにか立ち上がり、よろよろ、ドアへすがりついた。
「う……」
肩甲骨の間に、ステッキの先が、トン、と当たる。
純白のもやを放つ凍てついた刃に、心臓を貫かれたかのようだ。
「私の言葉、忘れるな」

「……た」
「ユーウー？」
「わ……かった」
「行け」
ユウは、ドアの外にいたテリーにも意識が向かず、ただただ、足元のおぼつかない白雲の中をこいでいく心持ちで、ハッチへ向かっていった。

「大将、派手にやったねぇ」
そう言って、ひょいと顔をのぞかせたテリーが、恐れ知らずにカラカラと笑った。
「びっくりしちゃったよ。ここに入ったと思ったら、いきなりギッタンバッタンやり始めるんだもん」
「フフン、長々の傍観、ご苦労だったな」
「でも、ちょっと、らしくないなぁ。あれは、八つ当たりって言うんだよ。や、つ、あ、た、り」
「そのとおりだ。作戦の責任は、すべて紋章官にある。そう言いたいのだろう、『先輩』？」
テリーは若干機嫌を損ねたらしく、眉を八の字に下げ、唇を尖らせた。
それを鼻で笑ったハサンの指は、パイプへ草を詰め始めている。すでに機嫌は直ったのだろうか。そのような顔だ。
「大将さ、本当に彼氏さんが、言うとおりにすると思ってる？」
「さてな」
「ねぇ、だったら、なにもあんなこと言わなくたっていいじゃない。本気にして人質斬っちゃったら、彼氏さんが立ち直れないよ」
「……テリー」
「あい？」
「仕事へ戻れ」

すごすごと引き上げていくテリーの気配が通路から完全に消えたところで、ハサンはひとつ、大きなため息をはいた。

「馬鹿め」

ハサンは煙草の不味さに、顔をしかめた。

まずは前門の虎二匹

騎士たちは幸い、六十二名全員が小康を得た。

これはなにもアレサンドロひとりの手柄ではなく、低体温症の対処に慣れた、クジャクや北部出身者の応急処置が適切だったのだ。

毛布にくるまれ、引き続きレクリエーションスペースでの治療が続けられることとなった騎士たちは皆、逆らうことなく身をまかせている。いずれ通りがかった町にでも、引き移ってもらうこととなるだろう。

さらにマンムートのレーダーだが、これについてもほどなく修理が終了し、カラスたちはねぐらを失った上に、モチにこっぴどく叱られた。

一日二日はそれを根に持ち、ギャイギャイと騒いでいたようだが、いまはマンムートの屋根に、枝を集め始めているそうだ。

それと入れ替わりに、モチは以前暮らしていた中央ホールの止まり木へ、居を戻していた。

そして……。

マンムートにとって、最も重要な情報がもたらされたのも、この頃であった。

飛行戦艦オルカーン。オットー・ケンベルの将軍機、『超光砲のメラク』。

この二機の居場所が、特定できたのである。

「メラクはここだ。北東、およそ百五十キロ。オルカーンはその南方、ここから二百キロの地点にいる」

「合流は」

「したあと、かもしれんな。挟み撃ちを狙っているか、もしくはメラクの撃ちもらしをオルカーンがすくい取る計画か。オルカーンが猟犬となり、我々を追い立てるつもりかもしれん」

アレサンドロは椅子から身を乗り出し、ハサンの説明に、いちいち相槌を打った。
ブリーフィングルームへ集められた他のメンバーもまた、真剣に耳を傾けている。
「で、どうする」
「さあ、そこだ」
ハサンは指を打ち鳴らした。
「我々に残された道はふたつ。端的に言えば、オルカーンから狙うか、メラクから狙うか」
逃げる、という選択肢がないことに、場の緊張は少なからず高まった。
「空中戦と地上戦。基本となる戦場は異なるが、リスクはどちらも似たようなものだ。どちらもテリー・ロックウッド、おまえがキーマンとなる」
「てはは……やっぱり」
「戦術としては、待ち伏せということになるだろう」
「……ふぅむ」
「質問がなければ、アレサンドロ、決断を」
「エディン・ナイデルはどうする」
険しい顔のクジャクが、手を上げた。
「やつは放置だ」
「なに」
「というよりも、引き連れていく。鉄機兵団の、砲弾の中へな」
「アハッ」

ここでつい吹き出してしまったラフのわき腹を、ユウはひじでつついた。
これは、不謹慎だぞ、と言うよりも、寝た子を起こすなの心境だ。
ユウはまだ、ハサンが怖い。
いつでもにらまれているようで、顔も上げられないのだ。

しかしハサンはそ知らぬ顔で、話を続けた。
「我々は守備的な防御を取りすぎた。攻撃的な防御こそ、真の抑止力となる」
「やつが上手く誘いに乗ると思うか」
「乗らなければ乗らないで結構。的をひとつに絞ることができる」
「じゃあ二号車はどうする。こっちも砲弾の中へ連れて行くってのか」
アレサンドロの指摘に、ハサンはフンと、優しげに鼻を鳴らした。
「状況による」
「状況？」
「まずは、相手を決めなければな」
そこでアレサンドロは、テリーへと向き直った。
「おまえはどうだ」
「俺？」
「もう、腹はすわってんな」
「そりゃ、まあ、たぶんね……」
曖昧顔のテリーから得られる心証は、なにやら判然としない。
強がりなのか、本当に割り切ることができているのか。本人でさえ、戦場に立たなければわからないのではないだろうか。
ならば、少しでも戦いやすいオルカーンを選ぶべきか。
アレサンドロは、待てよと思った。
「悪ぃが、ちょいと考えさせてくれ」
「ンン、どうぞ」
アレサンドロは腕を組み、目蓋を閉じた。

つまり、今回の図式としてはこうだ。
飛行戦艦オルカーンが相手だと言っても、実際そこには、神速のベネトナシュという将軍機がついてくる。
戦場は空だ。
こちらの対応機は、カラス、クジャク、サンセット?。手が少な

い。
　対してメラクは地上戦。二号車の対応さえ間違えなければ、オオカミ、コウモリ、ナーデルバウム、そしてジョーブレイカーの裏工作も可能になる。
……と。
　ここまで考えをめぐらせたところで、アレサンドロはハサンの顔を見た。
「あんたはどう思う？」
　いつものように聞くのは簡単だが、今回はもう少し自分の力で考えてみろよ、と、心がささやきかけてくる。
　アレサンドロは開きかけた口にコーヒーカップを押し当て、言葉を飲みこんだ。

　さて……。
　他にも、なにか考慮しなければならない案件があるはずだ。
　エディン・ナイデルか？
　鉄機兵団へ行き当たる前に、足止め工作を受けたら？
「……違うな」
　アレサンドロは、首を横に振った。
　エディン・ナイデルに、マンムートは破壊できない。
　相手もそれがわかっているからこそ、えげつない策をもって、精神的なダメージを与えてくるのだ。
……そういえば。
　虎の子のＬ・Ｊを、三機ともむざむざ破壊させたのはなぜだろう。
　まだなにかを隠しているのか。
　また、人の命をもてあそぶようなことを考えているのか……。
「チッ」
　アレサンドロは、当初の目的であるオルカーンとメラクのことなどすっかり忘れてしまい、知らぬ間に、どす黒い泥水のようなものを、胸の中で渦巻くがままにさせていた。

そしてその泥水は熱くうねり狂い、しまいには、黒い吐息となって噴き出すのではないかとさえ思われた。
しかし、背筋に近い、どこか奥まった部分では、冷え冷えとした恐怖が揺らぎもせず、鎌首をもたげているのであった。
「アーレサンドロー」
「！」
アレサンドロは、頭から冷や水を浴びせかけられたような気分に陥った。
クジャクが見つめている。
ユウが見つめている。
全員が、自分の出す答えを待っていた。
「よそ見をするな」
苦笑まじりにささやかれたハサンの声に、アレサンドロはようやっと、我を取り戻した。

「答えは出たかな、リーダー君？」
「いや……どうだかな」
「決断は、早ければ早いほどいい」
「……なら」
アレサンドロは、ひと呼吸で心を決めた。
「メラクだ」
「よし、メラクだ」
ハサンは、それでいい、とでも言うように、アレサンドロの肩を叩いた。
「セレン博士は、ジョーブレイカー君と、メラクの予想進路を割り出してくれ」
「できれば、オルカーンも？」
「言わずもがなだな」
「了解」
「フクロウ君は、カラスたちに連絡を頼む」

「ホウ、なにをでしょう」
「メラクとの戦闘域に入る前に、契約を解除する。その前にひとつ頼みごとをするかもしれんが、森に帰る準備も進めておくようにと」
「了解です」
「テーリー」
「……あいよ」
「いよいよだな」
「みたいだね」
「時代が変わるぞ」
「だと、いいね」

放送による全車への通達も完了し、敵は北東、と意気込んだマンムートであったが、とにかく正確な情報をつかむまではと、しばらく南への進行を続けることとなった。
いまは間近に迫った戦闘と、
「遅くとも、明日の日の出までには進路を変えたい」
と、期日を切ったハサンの期待に応えるべく、ブリッジ、機関部、整備その他の全人員が、あくせく動きまわっている状態だ。
無論、こうした中でも元奴隷たちの受け入れ態勢は維持されており、騎士たちの世話も続けられている。
アレサンドロは、それでも少なからぬ人数がマンムートを降りたいと願い出るのではないかと考え、そのときは、とがめ立てることのないよう、自らを戒めた。
なにしろ、今度の戦いはどうなるか、先が見えない。
スナイパー部隊のＬ・Ｊが戦闘に参加すること自体、帝国史上、初めてのことなのである。
天と地。ふたつの利を得た者が勝つ。
などと、至極当然のことを言うしかないのであった。
しかし、アレサンドロの予想に反して、そのような希望を言い出

る者はいなかった。

「なあ、ブルーノ」

アレサンドロは、荷運び作業中の友人、ブルーノに尋ねた。

「あん？」

「あんた、ガキのことが心配じゃあねえのか？」

すると、重さにして二十キロはある小麦の袋をかかえ、格納庫と数ヶ所の食料庫とを行き来していたこの力自慢は、

「てめえ、降りろってのか！」

と、あわや大惨事だ。

「おまえならどうするよ。逃げるか！ここにいるガキを、みんな連れて逃げろって言われて逃げるかよ！」

「いや、逃げねえ」

「チェッ、くだらねえこと言いやがって」

「……でも、よ」

「ああ？」

「逃がしてえってのが、親心じゃねえのか……？」

それと聞き、かつてのガキ大将ブルーノは、気弱になっているリーダーを眺め、汗で光る肩を落とした。

「あのよう、アレサンドロ。忘れちまったか？」

「うん？」

「あの戦でも同じようなことがあったぜ。これ以上は持たねえと言われた砦から、ガキのいる夫婦者は逃がされた。心中させるのは忍びねえってんでな。うちの砦もそうだったじゃねえか」

「ああ」

忘れるも忘れないも、そのときの子どもたちがいま、二十代の若者となって、マンムートを動かす力となっている。

「あんときは俺も見送ったがよ、ああ、よかった、生き延びることができた、なんて顔してるやつはひとりもいなかったぜ。どの夫婦者も、悔しい、申し訳ねえ、そんな面だった」

「……そう、だったな」
「だからよ、おまえがどう思うかは知らねえが、俺はな……あんときの間違いをなぞるのはごめんだぜ」
「ッ……！」
「俺が逃げりゃあ、これからの人生、くさくさし通しで生きていかなきゃならねえ。うちの息子だって、そんな親父は見たくねえさ」

鋼のゴーレム

南西部の大動脈、メリゴ・アピアナス街道。
東から西へと下るその道は、背びれを持つトカゲが横たわっているかのようなメリゴ山脈を抜けたところで、広大な平原に出る。
これが夏であれば、青々としたじゅうたんが、一陣の風によって大海さながらの白波を立てる姿が見られたのだが、いまの季節は冬だ。頭上に広がる灰色の雲。人の背丈をゆうに超える厚い雪の層。たよりなげな一本の細い道筋。それだけであった。
不意に、その人影もないモノクロームの世界に、似つかわしくない物音が轟いた。
ゴロゴロゴロゴロ……と、それは雷のようであったが、絶え間なく響いてくる。
おまけにそれは、山の裏側から近づいてくるようだ。
なだらかな尾根に沿って続く木々の向こうに、雪崩か雲かという雪煙が見え始め、山北を迂回してきたらしいＬ・Ｊの隊列が、そこに姿を現した。
『あれが、ケンベルの部隊だな』
雪に半分身を沈めたオオカミが、脇で、同じようにうつ伏せとなったコウモリに聞いた。
『おそらく』
と、コウモリのハサンは答えた。

いまこの周囲の雪原には、ふたりの他に、誰の機影もない。
マンムートは一キロ後方の山中に身をひそめ、カラス、サンセット?、そしてシューティング・スターの各機は、それぞれ定められたポイントで作戦開始を待っている。クジャクとナーデルバウムは、マンムート待機だ。
その他、雪原のそこここに寝そべっているのは、余りの金属で組

み立てられた、Ｌ・Ｊ大のカカシ。
デコイである。
急ごしらえではあるが、鉄機兵団のレーダーを一秒でもかく乱できれば……という程度の期待には、これで十分応えられるのであった。
続々と現れるＬ・Ｊの二列縦隊は、指令装甲車を挟んで、大きく毛色を変えたように見えた。
『……雨ガッパかよ』
『ンッフフフ』
そう、装甲車のあとから、ぞろぞろと歩み出てきたＬ・Ｊたちは、ケンベル軍の看板とも言える、ライフル部隊であった。アレサンドロをして『雨ガッパ』と言わせた白い迷彩布を、この一軍だけが身につけている。
各々の肩に捧げ持たれているのは、言うまでもなくＬ・Ｊ用ライフル銃で、おそらく型は、テリーのものと共通だろう。
そして……。
『う……！』
それまで、外見的には平然と構えていたアレサンドロの口から、驚愕のうめき声がもれたのはこのときであった。
あの、ゴロゴロという雷鳴にも似た音の正体が、いまこそ戦場に現れたのである。
『……超光砲の、メラク……マジかよ』
アレサンドロは、そうつぶやくより他になかった。
規格外も規格外。それはまるで、茶けた土を盛り上げた小山であった。
キャタピラつきの特注カーゴに乗せられ、横一列にならんだ四台の軍用車で引かれたその全高は、見たところ三十メートルにも達するだろうか。
その体積のほとんどを占めているのは堂々たる下半身とショルダーアーマーで、背に折りたたまれた砲筒は、ライフルと言うにはあ

まりにも巨大すぎる。対して腕は並のＬ・Ｊと大差なく、ショルダーアーマーに埋もれるようにしてついているのだった。
本来あるべき場所に頭部は見当たらず、前方に突き出した、コクピットかと思われる胸の中心に、赤いデュアルアイが煌々と輝いていた。
『メラクを倒すには……メラクが必要』
いつかテリーの言った言葉が、アレサンドロの耳に思い出される。
確かにこの『異形のゴーレム』の前では、シューティング・スターなど、豆鉄砲を持ったおもちゃの騎士だった。
『おい、ハサン』
『なに、案ずるな。やつとの戦い方は、あれが一番よくわかっている』
『そう、だよな……』
『しかし、フフン、大層な行列だな。皇帝陛下でも、こうは引き連れまい』
『おい、大砲も積んでやがる！』
オオカミは、牽引車の荷台に積まれた大口径カノン砲を指差した。
『ジョーブレイカー君の報告にはなかったな』
『どうする』
『祈るのみだ』
『チッ』
『さあ、始まるぞ』

ハサンが言葉を切るや否や、突如、メラクの進行方向にあたる街道沿いの木立で、騒ぎがわき起こった。
それは、樹上を旋回しながら鳴きに鳴く、カラスたちのざわめきであった。
鳥があわてて飛び立つときは、そこに敵がいる証拠。兵法の初歩の初歩をわきまえたケンベル軍は、当然すぐさま進撃を止め、二、三発の銃弾を木立へ送りこむ。

『わぁ……！』

叫びを上げて木立から駆け出したのは、肩の軍団章を赤いペンキで塗りつぶしたＬ・Ｊたち。

『メーテルのご加護を』

ハサンは、声をひそめて笑った。

言うまでもないことだが、故障時ならばともかく、これほど近くにＬ・Ｊがいることを、マンムートのレーダーが察知できないはずはない。

ずっと、わかっていたのだ。

進行方向を北東へ変えたマンムートのあとを、十数体のＬ・Ｊが尾けてきたことも。

それが、赤い三日月戦線のＬ・Ｊであることも。

「あの日、おまえたちにＬ・Ｊを破壊させたのも、我々の目をあざむくためだろう。Ｌ・Ｊは三機のみ、これで危険はないと思わせるためにな。……だが、残念なことに機械は公平だ。よく扱える者に味方をする」

ハサンは作戦会議においてそう語り、復讐に燃えるカラスたちへ、作戦への協力と、赤い三日月戦線の見張りを頼んだ。

そうして、この勇敢にして家族愛に満ちた兵士たちは、行動を共にするジョーブレイカーの合図で、いま宿願かなえるときを迎えたわけであった。

野生のカラスたちはまったく上手く飛びまわり、飛び来る弾丸にふれるものは、一羽としていなかった。

さて……。

一機、また一機と。

赤い三日月戦線のＬ・Ｊが銃弾に倒れていく姿を、深々とリニアシートにもたれたテリーは、感情のこもらぬ目で見ていた。

……いや。

実際はＬ・Ｊを通り越し、その背後に見える、巨大な将軍機を見ていた。

きっと将軍は、これが単なる『道化の客寄せ』であることに、気づいているに違いない。

本命を探せと観測官に命じ、車椅子で移動を始める。

ライフルをつかみ、外へ出るのに一分。

広いカーゴの、全面を覆いつくす雪に舌打ちし、車椅子の車輪にロックをかける。

もう足がなえている、前線は無理だろう、というのは、誰かが流した噂、想像にすぎない。

戦闘の息吹を両足に吹きこんだ将軍は、しっかりと地面を踏みしめて、立ち上がる。

メラクのハッチが開き、昇降用のゴンドラが上下する。

いま、起動スイッチを入れた。

『……よし』

テリーは脳内のキャンバスに思い描いたとおり、このタイミングでメラクのデュアルアイが赤くきらめいたことに満足した。

現実と感覚がリンクできている。

その満足だ。

テリーはそのリンクこそが、スナイパーにとって最も重要な戦場感だと信じている。

たとえば、一秒を十秒にも二十秒にも感じた、などということは、あってはならないのだ。

『ロック』

厳かに響いたテリーの声が、静まり返っていたコクピットに、息を吹き返させた。

外では、まだカラスが鳴いている。

『スナイパーモード、スタンバイ』

ウウ、とうなったコクピット内部が、形を変え始めた。

……怖いか？

青弾頭の銃弾をチェンバーへ押しこみながら、テリーは、我が胸に聞いてみた。
ああ、怖い。
なにが怖い？
愛銃、ラッキーストライクがわずかにボルトアクションを拒み、テリーを苦笑させた。
『……わかってるよ』
テリーはスコープをのぞきこみ、
『リンク』
メラクと、自分だけの世界に没入した。

パタリ、パタリと、メラクの砲筒が組み立てられていく。
煙突のように天高く立ち上がったそれはゆっくりと倒れ、本来頭部があるべき場所、コクピットの上部へ接続し、収まった。
長さにして、五十メートル。
砲口の直径は、中でＬ・Ｊがほふく前進できるほどである。
しかし、メラクの恐ろしさは、この唯一無二の巨大兵器だけではない。
巨体ゆえに機動力は皆無だが、多少のことではびくともしない防御力を誇る。
ならば、シューティング・スターの狙いはただ一点。
その、砲筒の口。武器破壊だ。
砲筒が自分を素通りし、いまだ戦う意欲を失わない赤い三日月戦線のＬ・Ｊへ向くのを、テリーは待った。
メラクは、その願いどおり砲筒を右へ旋回させ、ぴたり、止まった。
『……う』
なんと、その射線は、こちらへ向けられている。
まさか、偶然だ。
テリーは思おうとした。

あれは、狭いカーゴに自由を奪われ、難儀しているだけなのだ……。

だが、筒の奥底に見える闇がみるみるふくれ上がり、スコープの向こうで大きな瞳へと変化するのを、テリーは見てしまった。

そしてその瞳は、さらに大きな、ひとつの顔姿となった。

……見てる。

あの人が、見てる！

テリーの指は恐れおののき、枕を投げつけて幽霊を遠ざけるように、意識を離れて引き金を引いていた。

……チィィン。

尾を引いて飛んだ弾丸はメラクの銃身をかすめ、テリーを絶望させた。

巨大な砲口の奥に、光り輝く炎が見えた。

超光砲

「縮退理論を知ってるかい」
セレンがそう言ったのは、作戦会議の席でだった。
誰もが知らないと答えると、
「そうかい。じゃあ知らなくていい」
と、指示棒で頭をかき、
「つまり超光砲ってのは、荷電粒子による縮退砲。ビーム……まあ、実体のない弾丸を飛ばす兵器だよ」
太陽の光の何千倍も強いものが、目にもとまらぬ速さで飛んでくる、そう考えればいいと、ひと口に説明した。
そのときはさっぱりとわからなかったが、いま、この光景を前にすれば、ユウにでもわかる。
これは、危険なものだ。
『テリー……テリー！』
『あ……か、彼氏さん？』
『バッカ、失敗しちゃってさ』
『ララちゃんも……みんな死んじゃったの？』
『なにそれ、そんなわけないでしょ』
『へぇ？』
『下、下』
『下……？』
テリーはぼんやりとした頭で、コクピットの中をキョロキョロと見まわした。
しかし、目の前のメインモニターは黒く染まり、そこには、刻々と変化する風向風速などのデータが、ずらりと表示されている。
『あ……そっか』
スナイパーモードのままだ。
テリーがモードを解除すると、そこは空だった。

サンセット?越しに見えるモニターの下端には、メラクの超光砲によって焼かれた大地が、深くえぐれた小山まで、一本のわだちのごとく続いていた。

『助けて、もらっちゃった?』

『そういうこと』

『……危ない。そうだ、ここは危ないよ!早く逃げて!』

『え?』

『ララ!』

モチのひと声を号令に、シューティング・スターを抱えたカラスとサンセット?は、パッとその場から飛び退いた。

間近で見る大雷とはこういったものだろうか。一瞬後に訪れた強烈な閃光に、ユウの目がくらむ。

うねり狂う電気の蛇を引き連れて、轟音を引いた超光砲の白い柱が、天高く駆けのぼっていった。

『あれのチャージラグは、きっかり六十秒!』

『わかってるって!』

『じゃあ忘れないで!』

『……フンだ。タイマー入れとけばいいんでしょ』

ぶつくさ言ったララはコンパネを叩き、メインモニターの隅に、六十秒のデジタルカウンターを表示させた。

これが残り十秒になったら、ユウにだけは教えてあげよう、などと思いながら。

そのときである。

眼下の雪原に、高い火柱が上がった。

密かに仕掛けておいた地雷原へ、鉄機兵団のＬ・Ｊが足を踏み入れたのだ。

『彼氏さん、とにかく、ひとかたまりになるのはまずいよ。俺を、どっか適当なところで下ろして』

『どうする気だ?』

『尻ぬぐいは自分でするよ。みんなが逃げるくらいの時間は稼ぐ』
『馬鹿言うな』
カラスとサンセット?は、照準の目をくらませようと、規則性なく飛びまわった。
『まだ計画は終わってない』
ユウは、いまだ雪に身を沈めたままのオオカミとコウモリに視線を落とし、言った。

『テリーは無事、みてえだな』
『フフン、運の強い男だ。またそういう輩は、次もいい場面で役割がまわってくる』
『あいつを責めてやるなよ』
『なに、役者が違ったと、それだけのことだ。責めるほどのことでもない』
『そろそろ、あっちも動き出すか』
『まあ落ち着け。鍵を握っているのは我々ではない。……彼だ』
アレサンドロとハサンの見つめる戦場は、すでに赤い三日月戦線を交えた三つ巴から、鉄機兵団対レッドアンバーの構図へと移り変わっていた。
撃ち出される弾丸は、すべてユウたちのいる空へ向かい、雪原に散ったその他陸戦・空戦用Ｌ・Ｊ部隊は、マンムート本体の出現を警戒しているようだ。
その、一個大隊にも及ぼうかという大軍の足元を、そこここに開いた着弾クレーターを避けつつ、なにかが走っている。
ジョーブレイカーだ。
白装束の忍者は、平時に見れば、おかしくて吹き出してしまいそうなほどの大荷物を背負い、無心に足を動かしていた。
「む……」
突如、目を鋭く尖らせたジョーブレイカーが、五メートルも横に

飛び退き、雪に身を伏せた。
高速回転する弾丸が、うなりを上げて雪面に落ちる。
かき上げられた雪をかぶり、その姿は一時見えなくなったが、それが自分を狙ったものでないことを確認するや、ジョーブレイカーは再び這い出して、疾走を始めた。
いま、この小さな運び屋は、他でもないメラクの特注カーゴへと向かっている。
鉄機兵団の意識は空へ向いているとはいえ、足場の悪さと、時折襲い来る弾丸、その他にも予想できない危険がいくつも転がっている任務である。
時には、同じ方角へ向かうＬ・Ｊの足に便乗し、時には、さらなる危険をおかして雪の中を這い進み。
カーゴの周囲を固めるＬ・Ｊが、右から左、そしてまた右を向く間に、するり、大重量を支えるキャタピラの裏へ飛びこむと、
……ふう。
その口からは、あきれたような吐息がもれた。
ジョーブレイカーは、それでも一瞬たりと動きを止めず、背の布包みをその場へ広げた。
……それは、ひとつが人間の頭ほどもある、雑な作りの爆発物である。
しかし、見てくれはともかく威力は折り紙つきで、スイッチひとつで遠隔爆破できるという優れものだ。
ジョーブレイカーは、それをひとつひとつ、慎重に所定の場所へ貼りつけていき、最後にすべてのスイッチを弾いて、受信機をオンにした。
そして、来たときと同様、瞬く間に姿を消した。

ド、ド、ド、ド……。
炎を噴き上げたカーゴが左キャタピラを跳ね飛ばし、メラクもろ

とも倒れるのを、アレサンドロとハサンは見た。
空にいるユウたちも見た。
『よし、行くぜハサン！』
『手負いの獣は厄介だ。気を抜くなよ』
『ユウ、チャンスチャンス！』
『ああ、俺たちも行こう。テリー、下ろすぞ』
『え、ちょ、ここで？』
『モチ』
『了解です』
『う、わ、わ、わ！』
大気を打った翼が風を払い、Ｎ・Ｓカラスは地上へと滑空した。
身をひるがえして雪原をこするように飛び、腕で支えたシューティング・スターを、主戦場から少し離れた場所に、ポンと解放する。
『うわぁい』
テリーは転がりながら情けない声を出したが、シューティング・スターはほれぼれするような動作で体勢を立て直し、すぐさま引き金を引いた。
敵Ｌ・Ｊ三体が、その餌食となった。
『さっすがぁ！』
『俺がララちゃんなら、テリー・ロックウッドにホレるけどね』
『あ、そ。待ってよぉ、ユーウー』
『もっと優しくしてよぅ、ララちゃあん！』
テリーの声を背に受け流して、カラスとサンセット?は、そのままメラクへと進路を取った。
カーゴ上面をすべり落ちたがために横倒しとなったメラクは、こちらがにらんだとおり、自力では起き上がれない様子だ。超光砲を上下左右に動かし、動作確認をしている。
この時点で発射不能となってくれていればいいが、
『どうだろう』
『さ、どうでしょう』

サンセット?のデジタルカウンターは、とっくの昔にゼロとなっていた。
『ララ、別行動をしよう。北側から行くんだ』
『でも、時間が……!』
『いいから行け!俺はメラクから目を離さない。大丈夫だ』
『うん……わかった』
サンセット?が飛んでいく。
『我々は南から』
『ああ』
『行きましょう。あなたが身を差し出すというのなら、共に』
ユウは、モチに深い感謝を覚えずにはいられなかった。
実を言えば、ハサンに殴られたことを、このモチにだけは話していたのだ。
「挽回の機会は、必ず訪れます」
モチは優しく言ってくれた。
いまがそのときだ。
『アレサンドロとハサンはあそこにいる。テリーはうしろだ』
『はい。では少し、派手にいきましょうか』

モチはまったく、ワシにでもなったようだった。
その羽ばたきは力強く、速さたるや、N・Sに乗りながらユウが息を詰めてしまったほどだ。
もちろんスナイパー部隊の飛ばす弾などかすりもせず、モチはその上空で、からかうように曲芸飛行までして見せる。
その屈辱に耐え切れなくなったらしい空戦用L・Jの一体が迫ってきたが、それは不幸にも味方ライフルの弾道上に入ってしまい、不本意な最期を遂げた。
と……。
『動きます』
メラクの超光砲が、遠く視線の先で持ち上がった。

ユウは必要ないとわかっていながらも、もう一度、眼下のアレサンドロとハサン、テリーの位置を確認し、
『大丈夫だ』
と、呼吸を整える。
超光砲はカラスに照準を定め、その砲筒の先端から、渦巻く光の束を噴き上げた。
まったく、衰えた様子のない光だった。
『もう少し近づきます』
『大丈夫か？』
『これも作戦のうちです』
そこでカラスは、いったん高度を高く取り、天を舞うトビがそうするように、螺旋を描いて最高の攻撃ポイントを探した。
『十秒前！』
気を利かせたララの声が耳に入り、それからきっかり十秒のちに、超光砲が天を突いた。

しかし……。
ここでまさか、このような大きな障害が発生するとは、ユウも、モチもララも、思ってはいなかった。
はからずも、時を同じくして距離を詰めたカラスとサンセット？。二体は超光砲以外の装備に関しても、その射程に踏みこんでしまったのである。
百十ミリバルカン砲、単装ミサイルランチャー。
両手のライフル銃は二十発のケースレス式マガジンを採用した以外は他と共通だが、なんといっても射手のレベルが違う。
メラクはそれらの武器を手足のように操り、バルカン砲を猟犬、ミサイルランチャーを罠、そしてライフルを狩人として、巧みにユウたちを追い立てた。
無論、すべてを呑みこむ超光砲の存在も、忘れてはならなかった。
『一度離れましょう』

『あ、賛成。あたしもそれがいいんじゃないかと思ってた』
『まったく……落とし穴にでも放りこんでやればよかったのです』
モチは珍しく悪態をついた。
どこかで、狩人に追われた経験でもあるのかもしれない。ユウは思った。

さあ、それから超光砲にして三発分も撃ちこまれた頃だろうか、
『……ね、そろそろじゃない？』
『ああ、でも油断するな』
『来ます』
この時点ではもう、ユウたちは前ほど、超光砲に対して恐怖らしい恐怖を感じなくなっていた。
なにしろ来るタイミングはわかっているのだし、巨大すぎる砲口は、狙っている場所を隠し立てすることなく伝えてくれる。
メラクの数メートル厚はあるだろう装甲や、正確すぎる射撃技術は確かに面倒だったが、それについてもあせることはなかった。
なぜならば、ユウたちにとって切り札とも言うべき一手が、山の中に隠されていたからである。
それは、いま撃ち出された超光砲の光が、にごった空の彼方で霧のように拡散するより早く、それ以上の轟音を鳴り響かせて戦場に現れた。
マンムートであった。
「セレン様、上手くいきましたね！」
「まだ早いよ」
「そ、そうですね……」

実は、このメラクをもしのぐ巨大戦車は、シューティング・スターの狙撃が失敗したと見るや二号車を切り離し、硬く凍った土の中を押し進んで、背後の山中に隠れひそんでいたのである。
ジョーブレイカーの工作も、ユウたちの挑発・攻撃もすべて、マ

ンムートが時を計り、メラクを踏み潰すための行動に移る前段階だったのだ。
いま、まさに超光砲は放たれ、次の発射までに六十秒。
コクピットをメラクの顔と言うならば、その頭頂部側から、マンムートは迫った。
幾体かのＬ・Ｊが、突進を止めようと決死の突貫を仕掛けてきたが、マンムートの巨体は、それらをものともしなかった。
「セレン様、超光砲、動きます」
「そうだね、こっちを狙ってる。チャージは？」
「はい、えっと……」
メイは、ひとつの目安であるメラクの機体温度を確認しようと、熱感知センサーへ向き直った。
現在マンムートには、セレンとメイのふたりのみ。ブリッジ詰めの若者たちも皆、作戦参加を志願したが、クジャクとシュナイデ共々、二号車へ残してきている。
モニターに映し出された色を、カラーコードと照らし合わせたメイは、
「あ……！」
息を呑んだ。
「なに」
「チ、チャージ、完了しています！」
「え？」
とっさに目をやったデジタルカウンターの表示は、まだ十五秒も残っている。
しかし、科学者特有の超結果主義が、セレンへ告げた。
これは真実だと。
「メイ！」
「え、きゃ、きゃあああッ！」

戦車の死

だまされた。
ハサンは、何十年かぶりにそう思った。
超光砲の直撃を受け、もうもうと黒煙を吐き続けるマンムート。
あの、象徴ともいえる雄々しい双角はどこへ行ってしまったのか。
それがあった場所からは、黒く溶け落ちたコード類が、まるでタールの樽をひっくり返したかのような有様で垂れ下がっている。
枯れ草迷彩の装甲板は、まるで焼け野原を描いた抽象画だ。
……ああ。
まったく、単純なブラフだった。
本来四十五秒のチャージラグを、六十秒に見せる？
基本中の基本。
なぜ気づかなかった。
科学の進歩を舐めていたのは、自分自身だったというのか。
『アレサンドロ、おまえは、二号車へ退け』
『なに言ってやがる、俺は行くぜ！』
『おまえが行ってどうなる』
『そんなもん知るか！』
アレサンドロはひと声叫ぶと、あとも見ずに駆け出した。
ハサンの足は、動かなかった。
そこへ、空から、
『アレサンドロ！』
『おう、おまえらも無事か！あいつは？ララは！』
『先にマンムートに行った。俺たちもこれから向かう』
『わかった、早く行け！俺もすぐ追いつく！』
『ああ！』
ユウとモチは心の中でうなずき合い、さっと身を返した。
ここにきて強く吹き始めた北風が、雲を呼んでいる。

黒煙を避けつつ、また、黒煙を盾にしながら、カラスはマンムートへ近づいた。

しかし、周囲を取り囲む鉄機兵団のＬ・Ｊは、誰ひとりとして攻撃を仕掛けてこようとはしなかった。

実は、超光砲の一撃により制御を失ったマンムートだが、その後も惰性で走り続け、メラクと激突していたのである。

体格で劣るメラクは弾き飛ばされ、カーゴ、カノン砲搭載の軍用車、陸戦用Ｌ・Ｊを数機巻きこんで、いまは遠く彼方の森で白煙を上げている。

それを助けに行く者、壁となって将軍の元へは行かせまいとする者。

どちらにせよケンベル軍は、撤退の準備を始めていると見てよかった。

『ユウ！』

『ララ、セレンは？』

『わかんないの。ねぇ、どうしよう。どうしよう、ユウ』

ブリッジ下の、黒く変形した装甲板に張りついていたサンセット？から、おろおろとした泣き声が聞こえた。

『ねぇ、どうしよう。ねぇ』

『わかった。俺が見てくる。ララとモチはここにいてくれ。鉄機兵団が動くかもしれない』

『……う、ん』

ララは、ひとまずホッとしたように、か細く答えた。

このララの気持ち、ユウにはよくわかる。

ララは心配でたまらないのだ。

しかし中に入れば、最も目にしたくない光景に遭遇してしまうかもしれない。それが怖くて足が動かないのだ。

「あの窓まで持ち上げてくれ」

Ｎ・Ｓを降りたユウはララにそう頼み、抜け落ちたブリッジの窓

から入ろうと試みた。
かつて強化ガラスがはめこまれていた場所に手をかけ、
「あ、つ！」
思わず、手を引いていた。
見ると、やけどをするほどではなかったが、ゴム質のもので覆われた窓枠には、くっきりと、手のひらの跡が残っている。
『大丈夫？』
「ああ……行ってくる」
ユウは窓枠に足をかけ、骨ばかりとなった薄暗いブリッジへ、腹をすえて、飛びこんだ。

「う……」
ひどいにおいだ。
たき火の燃えさしを思わせるすっぱさと、溶けたゴム。焼けた革。あまりの異臭は目の粘膜からもしみこんでくるようで、ユウはまずポーチからタオルを取り出し、それで鼻と口を覆った。
そこまでしてようやく、ひと息ついてあたりを見まわすことできたのだが……なんということだ。
なにもない。
なにひとつだ。
倒れた椅子のうしろ、崩れた機器類の下。そんなところにふたりが逃げのび、
「やあ、まいったよ」
などと出てきてくれることを期待していたのだが、とんでもない。
これは惨状よりもひどい、空虚だ。炭の城だ。
ユウは茫然と、その場に立ちすくんだ。
「……カウフマン」
「あ、ジョー！」
ユウの胸が高鳴った。

ひしゃげたハンドルロック扉の向こうに現れたのは、まさしくジョーブレイカーだ。
ジョーブレイカーならば、セレンとメイを助けられたかもしれない。
なんといっても超人だ。
「ジョー、ふたりは！」
「私も確かめにきた」
「え……」
ジョーブレイカーは扉の隙間から頭を差し入れ、ブリッジをひと当たりした。
そして、別の陳列棚へ向かう博物館の客のように、どうということはない顔で、またどこかへ行こうとした。
「……待て、待ってくれ！」
ユウは扉に飛びついた。
「どういうことなんだ。ジョーは、あのふたりがどこにいるのか知らないのか？」
「……うむ」
「だったらなんで、そんな平然としていられるんだ！」
叫んでみて、ユウは自分が思った以上にショックを受けていることがよくわかった。
こんなことをジョーブレイカーに言ったところで仕方がないのだ。
ジョーブレイカーは、誰よりも早くマンムートへ駆けつけた。それだけで、気持ちは十二分にわかるだろうに。
「……すまない」
ジョーブレイカーはなにも言わず、手すりの曲がった階段を、一段二段、下りていきかけた。
「……あ」
「……？」
「なんだ、この音」
ユウにつられ、ジョーブレイカーも耳をそばだてる素振りを見せ

た。
それからしばらくは沈黙の時が流れたが、ややあって。
……カン……カン。
今度こそはっきりと、金属面に槌を振るう音が届いてきたのである。
「ジョー、待ってくれ！俺も行く！」
ユウは目の前のハンドルロック錠に手をかけ、がむしゃらに揺さぶった。
しかし、
「くそっ！」
大きく変形した鋼鉄の扉はびくともしない。
すると、駆け戻ってきたジョーブレイカーが向こう側から扉をつかみ、ぐいとひと引き。それだけで、いとも簡単に扉はすっぽ抜けた。
なんという怪力。
「行くぞ」
「あ、ああ、急ごう！」

電源供給が途絶えたマンムートだが、光石を原料とした蛍光塗料を動線に沿って引いているため、内部、特に足元は思いのほか明るい。
その、わずかに青みがかった光の中、ユウはマンムート内部の損傷が、外部装甲板のそれほど絶望的ではないことを知った。
被害が大きいのは、双角を除いたマンムートの前方三分の一。そこは煤と残骸ばかりだが、中ほど三分の一は多くの扉壁が歪みもせずに残り、後方三分の一は、さらに壁に貼られた注意書きまでしっかりと残っている。
例の槌の音は、ユウたちがＬ・Ｊ格納庫近くまで来たところで、ぴたりと止まってしまった。

「どこだろう」
「……」
「いったい、なんの音だったんだ？」
ジョーブレイカーは答えず、壁に耳を押し当てている。
ユウは口をつぐみ、ハサンがいつもやっているように頭を働かせてみようと、目を閉じた。
しかし、様々な可能性を考慮しなければならないとわかっていても、音の正体がセレンとメイだと思いたがる気持ちだけは、どうにも抑えることができなかった。
「カウフマン」
「え？」
ジョーブレイカーの目が、通路の先を見るように言っている。
「あ……！」
下層の機関室へ続く階段から、天井へ向かってひとすじの光が差していた。
「セレ……！」
ジョーブレイカーの手が、すかさず、ユウの口をふさいだ。
「まだわからん」
「でも」
「……」
「……わかった」
音もなく刀を抜いたジョーブレイカーを先頭に、ふたりは、足音を忍ばせて光の元へ向かった。
ひとり分の足音が、ゆっくり、ゆっくりと、ステップを上がってきた。
「あ」
「あ……きゃ、きゃあああ！」
メイだ。
ユウはすぐにそう気づいたが、驚きあわてたメイは目をつぶり、なにやら肩にかついだ筒状の物体をこちらへ向けてくる。いわゆる

ロケットバズーカだが、ユウはその名前さえも知らない。
「メ……」
「いやあああ！」
間一髪。
メイの細い指が引き金を引いた瞬間、ユウの身体はジョーブレイカーによって押し倒されていた。
轟音と熱風が頭上を通過し、すさまじい噴射音を響かせながら、ロケット弾は走る。
突き当たりの壁が木っ端微塵に吹き飛ばされ、冷たい風と冬の日差しが、さっとユウの頬をなでた。
それは、思わず神への感謝を口にしたくなるほどのすがすがしさをはらんでいたが、ユウは、生きた心地もしなかった。
「ジョー、助かった」
「うむ」
「……あ、メ、メイ！」
見ると、反動で五メートルも飛ばされたメイが、壁際で伸びている。
大丈夫かと駆け寄ったユウが頬を叩き、覚醒をうながすと、
「う……うぅん」
メイはうっすらと目を開け、次の瞬間にはまた、悲鳴を上げた。
「メイ、俺だ。ユウだ」
「あ……ユ、ユウさん……？」
「ああ」
「あ、ああ……！」
恐怖から解放された安堵感からだろう。首へしがみついてきたメイを、ユウはしっかりと抱きしめた。
温かい身体。しかし、誰が見てもわかるほどに震えている。
背をさすってやると、腕の力はますます強くなった。
「メイ、セレンは？」
「あ、セ、セレン様！」

「カウフマン、ここだ」
ジョーブレイカーの声に従い、ユウは首を伸ばして階下を見やった。
途中踊り場に、セレンが座りこんでいる。無事だ。
「セレン様！」
ユウを突き飛ばすようにして階段を駆け下りたメイは、今度はその胸にかじりついて泣いた。
セレンは、怪我をしているようだった。

「セレぇン！メイぃ！」
「痛、イタタタ、痛いよ、ララ」
「バカぁ」
「馬鹿じゃない。生きてたんだからね」
「うわぁん、バカぁ」
「はいはい、じゃあ馬鹿でいいよ」
セレンは、肋骨数本にひびが入っていた。
「セレン様は、あたしをかばってくれたんです。それで……」
と、メイは泣き声を出したが、
「その程度ですみゃあ御の字だぜ」
というのが皆の正直なところだ。
なにしろ、ブリッジはあの有様なのだから。
「……あそこは、そんなにひどいのかい」
メイが開けてしまった大穴の近く。光が差しこむ通路上に防水シートを敷き、そこに身を横たえたセレンは、アレサンドロの診察を受けながら、言った。
ちなみにこのときすでに、ケンベル軍の姿はどこにもない。破壊されたＬ・Ｊが取り残されているのみだ。
「なに？」
アレサンドロが聞き返すと、

「ブリッジにはいなかったんだよ、あのとき」
「なら、どこに」
「研究室さ」
セレンは熱っぽく、白い息をはいた。
「戦争は嫌いじゃない。でもそれは、騎士が命の捨て場所を探してるのとは違う」
「……研究のためか」
「なにもそんな顔をすることはないだろ」
「それで？」
「マンムートの操作系統を研究室にまわしておいた。ケンベル相手に、ブリッジは危険だからね」
「なるほどな」
「……この子には、悪いことをしたよ」
「メイか？」
ふ、と笑ったセレンは、首を横に振った。
「マンムート。この子はもう、走れない」
「悪いが、置いていくことになりそうだぜ」
「わかってるよ。データのバックアップも取ってある。でも、研究室のものだけは、運ぶのを手伝って欲しいね」
「ああ、わかった」
「すぐにハゲタカが来る。スダレフのハゲタカが。それだけはごめんだ」
「他には」
「整備用の機材。推進剤のタンク。交換パーツ。それと……あれ」
セレンが指差したのは、薄暗い通路に転がされた、直径五十センチの鉄球みっつ。実はこのひとつひとつに、マンムートを活動させていた高輝度の天然光石が収められている。
この国家的にも貴重な心臓を取り出すために、セレンとメイは怪我を押して機関室へ行き、重光炉を解体した。それがあの、槌の音だったのである。

「あれがありゃあ、またマンムートはよみがえる、か」
「そう、また、別の形に」
「おいおい、今度はなにをたくらんでやがる？」
「さあね。それは私にもわからない」
「チッ」
アレサンドロは、仕方のねえやつだ、と言わんばかりに舌打ちした。
「まあ、その話はあとだ。さっさと作業に移るぜ。オルカーンがすぐそこまで来てるかもしれねえ」
「ああ、よろしく」

そうして、ひとりで大丈夫かと心配するララたちを、
「ああ、問題ないよ。もうやつらもいないんだろ」
と、研究室へ送り出し、セレンはようやくやってきたN・Sコウモリへ、
「降りてこないかい」
声をかけた。
「煙草、吸わせてもらえる？」
「いいとも。痛みは？」
「特に」
「さあ、どうぞ。奥様」
「へえ……パイプが変わると、味も変わるものだね」
「……ふむ」
「テリーは？」
「向こうへ戻した。状況を知らせる者が必要だ」
「そう」
座りこんだふたりは壁に背をもたれ、しばし黙然と、煙草のまわし飲みを続けた。
「……まったく、落ちこむね」

「ああ、私もだ」
「魔術師に、マンムートを壊された」
「フフン、耳が痛い」
「これも計画のうち？」
「なぜ、そう思う？」
「マンムートが、一番大きな火種だったから」
ハサンは、ややさびしげに、にやりとした。
「君は賢い。確かにこれがある限り、我々は多くの厄介ごとを招き続けただろう」
それは、鉄機兵団の目であり、エディンたちの嫉みであり、助けを求める奴隷たちだ。
そして、ともすれば建国という当初の志を忘れ、この鉄の城に守られた暮らしよ永遠なれと願ってしまう心だ。
「だが私は、もう少し、この親愛なるマンムート君に頑張ってもらうつもりだった」
「……ふうん」
「これはまったく、いい戦車だった」
「そうだね」
「……我々の戦車に」
ハサンは杯を捧げるようにパイプをかかげ、ひと口吸った。
「次のマンムートに」
セレンもそれを真似し、パイプの灰を捨てた。

マンムートを失ったことは、あえて言うまでもなくかなりの痛手だった。
まずなによりも、二号車が前に進まない。
敵の位置がつかめない。
Ｌ・Ｊの整備も満足にはおこなえず、もちろん、地中にもぐることもできない。
そうした中で数少ない朗報と言ってよかったのが、
『オルカーン進軍停止』
のニュースだったが、これについても、
「マンムート撃破を知り、我々への対応を協議し直しているのだろう」
と、ハサンが言ったそのとおりならば、長く続く平和ではないわけだ。
「おまけにエディンだ。あいつはどこへ行った？」
「さて……」
「ケンベルはどうだ」
「アーレサンドロー」
「なあ、ハサン。俺はあんたから、これはって言葉が聞きてえ。なにかねえのか、こう、気分の上がるやつがよ」
窓際に立ったハサンは、しばしパイプを陽にかざし、
「まあ、ないでもない」
と、それを唇に挟んだ。

「私が思うに、これでひとまず、戦は回避できたはずだ」
「戦？魔人が立つかもしれねえって言ってた、あれか？」
「そうだ」
なにを言っている、と、疑問を含んだクジャクの視線が、ハサン

を見る。
「我々にとってそうであったように、他の者、帝国中に散らばった入れ墨の者たちにとっても、マンムートは希望だった。それの亡きいま、反帝国運動は、いったん下火になる」
魔人にしても一度辛酸を舐めているだけに、
「なら俺がやってやる」
と、後先考えず立ち上がることもだろう、と言うのだ。
「慎重。我々はその時期に来ている」
「しかしハサン。いつまでもそれでは埒が明かん」
クジャクが言った。
「このまま、あの戦艦が来るのを待つというのか」
「そうは言わん」
「いや、同じことだ。この車も捨て、足で逃げる。俺たちにはその道しかない。そうではないのか、アレサンドロ」
「そう、だな……」
今回のことに関しては、アレサンドロもクジャクが正しいと感じた。
ハサンは口をつぐみ、幅の狭い窓から外を眺めている。
「……よし。このあたりは、あの雪山よりか雪は少ねえ。行けるところまで……」
「おうい、アレサンドロ君！アレサンドロくぅん！」
「ああ？」
「ここか！……がははは、これはすまん。アレサンドロ君を知らんかな？……む、そうか。よしよし。アレサンドロくぅん！」
「……やれやれ、元気のいいオッサンだぜ」
アレサンドロはブリーフィングルーム代わりの一室、これは本当に、ずらりと並んだ居室の中のひとつなのだが、そこから顔を出して手招きした。
「おい、マンタ！」

「おお、アレサンドロ君。絶好のスキー日和だな！」
「俺を誘うつもりなら、悪いが、いまは取りこみ中だ」
「そうか、それは残念！」
マンタは小走りで立ち去りかけ、
「ナイン、ナイン、ナイン（いや、いや、いや）」
遊び歌の一節を歌いながら、また、うしろ走りで戻ってきた。
「ランニングのお誘いもなしだぜ」
「そうではないぞ。うむ、そうではないはずだ！」
「じゃあ？」
「我輩はこれからN・Sを掘り出しに行こうと思うのだが、君もどうかな？」
「ああ……それがあったか」
アレサンドロは頭をかかえてしまった。
土砂崩れの下敷きとなったN・Sマンタのことを、このときまで、すっかり失念してしまっていたのである。
「外はいいぞ。まぶしい太陽！すがすがしい大気！スキーを走らせれば気分爽快！退屈の虫もどこへやら！」
「かもしれねえな」
「よし、では待っているぞ。玄関集合だ！」
「おいおい、待て待て待て」
「む？」
「まあ、入ってくれ。ほら」
マンタはなぜか鼻歌まじりのうきうきとした足取りで、男四人では少々手狭な、仮ブリーフィングルームのドアをくぐった。
「おう、クジャクにハサン君か。君たちも行くかな」
などと、やはりマンタは、のん気にすぎる。
クジャクは馬鹿も休み休み言えと、この気のいい冒険家をしかりつけたが、
「それもいいかもしれんな。いや、むしろ、結構な話だ」
「ハサン、おまえはまたなにを言い出す」

クジャクはあきれ返って、眉間を押さえた。
「くだらん先送りだ。おまえはただ、負けを認められんだけではないのか」
「かもしれん」
「貴様……！」
「おい、クジャク、やめねえか」
ベッドの端から苛立たしげに立ち上がったクジャクを、アレサンドロは身体を張って押しとどめた。
「ハサン、俺はあんたを信じてるぜ。そいつがただの気まぐれじゃねえってな」
「いや、それがわからんのだ」
「なに？」
「私はすっかり、おかしくなってしまった。これは憶測でも、推理などというものでもない。ただの勘だ。勘が、この車を見捨てるなと言っている。彼についてゆけと言っている」
アレサンドロとクジャクは、顔を見合わせた。
ハサンらしからぬとはこのことだ。
しかし、目の前のハサンは、確かにどこか覇気がない。ぼんやりとした視線を、なにを見るでもなく窓の外に送っている。
これが演技であっても驚きはしないだろうが、いつもと違う、とだけは確実に言えた。
「ケンベルにだまされたのは、なにもあんただけのせいじゃねえぜ」
「フフン、そうだろうな。しかし、それはそれだ」
「む……」
「無論アレサンドロ、おまえの判断には従う。おまえが逃亡を選ぶのならばそれもいい。だが、どうだ……すべてのものを捨てるには、我々は多くのものを持ちすぎた。我々にはまだ、別の選択肢が残されているのではないか」
仮ブリーフィングルームは、沈黙に包まれた。

あのマンタでさえ、場の空気に押されたかして、黙って髭をいじりまわしている。
自分が結論を出さなければ先へ進めない。
アレサンドロは、ハサンの言葉、クジャクの言葉を反芻し、口を開いた。
「ハサンに乗るか」
クジャクの小さなため息が聞こえた。
「マンタのN・Sが手に入りゃあ、またなにか、いい思いつきが出るかもしれねえ」
「その間、ここの者たちはどうする」
「いまのところ将軍で動いてんのは、オルカーンのホークだけだ。それもまだ、どう出るかわからねえときてる」
「運に賭けると言うのか」
「そう、なっちまうのかもしれねえな。……そうだ。よしんば逃げるにしても、準備の時間が必要だぜ。その間に、ちょっくら行ってくるってのはどうだ？」
「どう言い訳を重ねようと同じことだ」
「う……」
「フ、フ、まあいい。リーダーはおまえだ。この車は俺が守る」
クジャクは苦笑いしながらも、頼もしく、それを請け負った。
「そうしてくれるか？」
「ああ。あとはテリー・ロックウッドに、ジョーブレイカー」
「シュナイデも居残りだな」
「ララ・シュトラウスはどうする」
「サンセットか、連れ歩くには目立つな」
「だが……」
「ああ、N・S一機にしても、掘り出すのは力仕事だ。サンセットは欲しいな」
アレサンドロの脳裏に、あるひとつの記憶が思い出されたのはそのときだった。

「そうだ、あいつのＬ・Ｊは離れてても呼べたはずだ。ここの、胸飾りのところに細工がしてあってよ」
「そうか、好都合だな」
「これで決まりだ。ハサンも構わねえな」
「ンン、もちろんだ」
「ならマンタ、あんたと一緒に行くぜ」
「うむ、そうだろうとも！」

さて。
この話をユウの元へ持ちこんだのは、例によってララだった。
「ね、ね、聞いた？」
ララが外へ飛び出すと、ユウとテリーはそれぞれの機体に乗りこんで、二号車の屋根から雪をかぶせている。
このように全体を覆っておけば、内側は暗くなるが、上空からの偵察と熱源探知の目はごまかせるのではないか。
二号車に住む、メカニック経験のある北部出身者からの提案であった。
『ララ、危ないから、早くサンセットに』
『そうそう。おトイレ終わってスッキリしたなら、早くこっちに戻ってよ』
「ト……最ッ低！」
ララは顔を真っ赤にして、地団太を踏んだ。
「バカ！おたんこなす！とうへんぼく！」
ユウの前で、なんということを。
『そんなこと言ったって、ねぇ。俺結構オブラートに包んでなかった？……って、待った待った、彼氏さん！わかった、謝るよ。ごめんね、ララちゃん。デリカシーなかったよね』
「うるっさい！テリーなんか腹壊せ！」
『俺もそう思う』

「わぁん、テリーのバカ！バカぁ！」
まったく、好きな男の前で恥をかかせる行為は、どのような罪より重いのだ。
結局、ララはテリーに一発食らわせるまで、承知しなかった。
『うう……イテテ』
テリーの左頬には、見るも痛々しいあざができた。

『それで、なにを聞いてるかって？』
『あ、うん、あのね……』
サンセット？を起動させたララは、中で耳にした、マンタのＮ・Ｓ探しのことをユウに話した。
『そう、か。俺はどっちに？』
『ユウはあたしと一緒で、探しに行くほう。あのバカテリーは居残り』
『そうか。……ん、よかった』
ユウは、実際に選抜したのがアレサンドロ本人だとは露知らず。ハサンが自分を見限ることなくアレサンドロのそばに置いてくれたのだとばかり思いこみ、それを嬉しく思った。
今度こそ、しっかり守らなくては。
そして一方。
ララもまた、ユウのその言葉が、ふたり一緒にいられて嬉しい、という意味だと大いに勘違いしていた。
ユウのために、頑張らなきゃ。
『ね！』
『ああ』
カラスとサンセット？は拳を突き合わせて、互いの健闘を誓い合った。
『そうだ。テリーも、ここでしっかりやんなきゃダメだからね』
『わかってるよ』
『ホントに？』

『あんねぇ。ララちゃんはそうやって、彼氏さんだけ見てりゃいいの』
『また、そんなこと言ってさ』
『だって、昨日も言ったでしょ。撃ち損ねたのは悪いと思ってるけど、別に落ちこんじゃいないって』
『う、ぅん』
『次はね、決めるよ。あの人もその気だろうから』
そう言ってテリーは、胸の弾帯に収まった、青い頭の銃弾にふれた。
『まだ……すごく怖いけどね』
『……テリー』
『……なんてね』
『もぉ、真面目にやりなっての』
『アッハハ。ま、とにかく旦那を頼むよ』

しかし、アレサンドロたちが二号車を離れることについては、やはり人々の中から反対意見も出た。
鉄機兵団が来たときはどうするのか。多くはそれだ。
クジャクは自らが残ることや、いつでも離れられるよう、荷物をまとめる作業もまた同時におこなうことを説き、不安をやわらげるべく立ち働いた。
出発までの一昼夜の間に、二号車の雪カムフラージュも、出入り口以外は完璧に施された。
「セレンは、無理さえしなきゃ動かしてもかまわねえ。痛み止めは渡してある」
「そうか」
「なにかあったら、すぐ連絡をな」
「わかった」
「あとは……」
「フ、フ。アレサンドロ、日が暮れてしまうぞ」

「あ、ああ、そうか。じゃあ、まかせたぜ」
「うむ。皆、油断せずにいけよ」
「いってらっしゃい」

そうして一行は、クジャクとテリーに見送られ、旅立った。
街道に出るまでの獣道には、ジョーブレイカーとシュナイデがつけたらしい赤いリボンの目印が、点々と続いていた。

ゲーム

ピュウイ、ピュウイ……。
鳥が鳴いている。
街道を行く旅人たちが数人、どこから聞こえるのだろうとあたりを見まわしたが、見つかるわけがない。この鳴き声は、ハサンが声帯模写で出しているのだ。
その意味するところは、
『もう少し、ゆっくり』
先頭を進む神官衣のユウは、わずかに歩をゆるめた。

今日で、出発して二日。頭上には、相も変わらず、厚い灰色の雲がかかっている。
このメリゴ・アピアナス街道をこのまま道なりに行けば、あとほんの数キロで、聖ドルフとの合流地点、河口寄りの町バーテに着くだろう。
一行はここまで、幾度か並びを変えながら進んでいたが、いまはユウを先頭に、少し間を置いて、マンタとアレサンドロ。さらにそのうしろを、ララとハサン。モチは、ユウの背負った木箱の中に入っていた。
もちろん、こうして離れて進むのは、手配中の一行がそれと見とがめられないようにするため。そして、急の危険に対しても、素早く対処するためであった。
「ねぇ。あたし昨日、マンタと一緒だったじゃない？」
ふとララが、ずっと思ってたんだけど、とでもいう風に、道連れのハサンへ言い出した。
「それが、今日はハサンってさぁ」
「おや、退屈かな？」
「て言うか、気が利かないって感じ」

「フフン。なら、私をあれだと思えばいい。そう思って、そら、手をつないでみようか」
「冗ッ談」
ララは一笑にふして、突っぱねた。
「ほう、あれとはまだ、指をからませてもいないのか」
「うるっさい。関係ないでしょ」
「肩は？抱かれたか？」
「さぁね」
「……唇は？」
「やめてよぉ」
顔をゆるませたララとハサンは、はたから見れば、親子ともつかない風にじゃれ合った。
それは本当に奇妙なふたりで、すれ違う誰もが、好奇の目を向けたほどだ。
もしやすると、お大尽と、その毒牙にかかろうとする純朴な町娘に見えたかもしれない。
「よしよし、ではお姫様の退屈しのぎに、ひとつゲームをしようか」
「ゲーム？」
「そう、ゲームだ」
ハサンは、風のような速さでララの肩を抱き寄せ、その耳へ唇を寄せた。
「前から、小太りの商人が来るだろう？」
「うぅんと、どこ？」
ララは、目を凝らして前を見た。
ハサンの言うその男は、いまちょうど、ユウとすれ違ったところである。
距離にして、二、三百メートルはあるだろうか。かろうじて、大きな荷物を背負っていることだけは見て取れる。
「あの男が、右利きか、左利きかを当てる。どうだ？」
「あたしが勝ったら？」

「君の愛する騎士様の秘密をひとつ、進呈しよう」
「ハサンが勝ったら？」
「ここから先、バーテに着くまで、私のことをパパと呼ぶこと」
「アハッ！なにそれ」
「中年男のロマンだ」
「変態の間違いでしょ」
「ならば、やめるか？」
「まっさか。あたしは右」
「よし。私は左だ」
にやりと笑ったハサンは、ポケットから大銅貨を取り出し、それを、さりげない動作で十数メートル放った。
つまり、道の真ん中に落ちたそれを、商人がどちらの手で拾うか見ようというのである。
なにも知らない商人は、それまで不機嫌そうに身体を丸め、足早に歩を進めていたが、道に光る五十フォンスの大銅貨に目を留めるや、
「おや。これは運がいい」
という顔をした。
そして、目だけであたりを見まわし、靴の紐を結び直すふりをして……さっと、左手でそれを拾い上げた。
「フフゥン」
ハサンは、したり顔だ。
「あ、ズルしたでしょ」
「まさか。先に選んだのは君だろう？」
「そりゃ、まぁ、そうだけどさ」
「さ、呼んでくれ」
「ええ？ホントに？」
「もちろん。私は娘が欲しかった」
「あ、そ。……だったら」
「ンン？」

「だったら……その、あたしのことも、『君』なんて呼ばないでよね」

ハサンは、顔を真っ赤にしてうつむいてしまったララを眺め、心から嬉しそうに、目を細めた。

「惜しいな。バーテまでなどと期限を切らなければよかった」

「フ、フン。それだけでも呼んであげるんだから、感謝しなっての」

「ああ、まったくだ。さ、行こうか、ララ」

「な、なんで、手なんかつながないといけないわけ？」

「おや、親子とは手をつなぐものだろう」

「そんなの、ハサンの思いこみだっての！」

「ハサン？」

「う、そ、その……パ、パ」

「ああ、いいな」

ハサンは、逃げる間も与えずにララの手を取り、再びうきうきと歩き始めた。

「バーテまでだからね」

「ンン、もちろん」

「ちょっとぉ、はしゃぎすぎ」

ふたりは子どもの遠足のように、つないだ手を大きく振って歩いた。

こうすると、まったく不思議なことに、ふたりは親子のように見えた。

さて、そこからふたりの間でどのようなやりとりがあったかはさておき。

一行がバーテに到着したのは、まだ酒場でも、酒の代わりに昼食を出している時間帯であった。

本来、街道筋の町というのは宿場であり、夕暮れ時からにぎやかになるのが常だ。

しかし、ここは、この時分から宿を取る旅人が少なくない。
それと言うのもこのバーテ、太古から続く聖ドルフの渡し場という歴史も手伝って、観光地としてもその名をはせているのである。
ユウは、商用をかたるマンタとアレサンドロ、そして、この先の景勝地、ラインコープへの観光を名目にしたハサンとララが、無事、宿の扉をくぐるのを見届け、背の木箱をかつぎ直した。
ここから先は別行動。ユウはひとり、この地にあるメイサ神殿へ、情報収集を兼ねて一夜の宿を借りることになっていた。
なにしろ、マンタの記憶が曖昧で、ここから上流に行ったものか、下流に行ったものかわからないというのだから仕方がない。
「……もう着きましたか？」
「ああ。これから、神殿に行く」
「了解です」
背の荷箱に入ったモチはわずかに身じろぎをし、ものの数秒で、再び寝息を立て始めた。
ユウは、その足で、まっすぐに神殿へ向かった。

「いらっしゃい、安くしておきますよ！」
「これはこのあたりの名産で、ブタの腸詰を、生のまま熟成させたものです。ええ、そのままいただけますよ」
「あと十分で、ラインコープ行きの船が出ます！行かれる方はお早めに！」
「神官様！これ、持っていって！お代はいいから！メイサ神殿？あの看板を右！案内しましょうか？」

ユウは丁重に断りながらも、ついつい笑顔になった。
まったく、元気のある町はいい。こちらまで心が豊かになる。
ユウが目指すバーテ・メイサ神殿は、着いてみれば、皆の取った宿から目と鼻の先であったが、そのわずかな距離を進む間だけでも、この町がどれほど平和か、手に取るようにわかった。

人々は皆幸福で、なによりもおおらかだった。
ただひとつ困ったことは、
「神官様、これも！これも！」
と、本来の道幅を半分にもしようかという勢いで立ち並んだ露店から、次々に報謝の品が差し出されてきたことである。
それがどれほどの量だったか、見るに見かねた露天商が、商品である手製のバッグの中から、もっとも安くて大きな手さげ袋を二枚、この難儀している若い神官への報謝として握らせてくれたことでもわかるだろう。ユウは日持ちのしそうな食品を選んで、かなりの量をポーチに詰めこんだが、それでも袋がいっぱいになってしまうほどの品物が残ってしまった。
街道と船着場をつなぐメインストリートを西に折れ、道のり自体にはなんの苦労もなく、ユウはメイサ神殿へたどり着くことができた。
「すみません。お願いします」
手のふさがっていたユウは、神殿の扉を、背中で押すようにしてくぐった。
すぐに、厚いショールを羽織った年配の女神官が、ふくよかな身体を左右に揺さぶって現れた。
「あら、巡礼の方ね」
女神官の声は、美しいソプラノだった。きっと、それは見事に神歌を歌うに違いない。
「一夜の宿をお願いしたいんです」
「ええ、これも縁。さあ、寒いでしょう、早くお入りなさい。そして、メイサに感謝をね」
「はい。あ、これを、神殿に」
女神官は、ユウの両手を占拠していた報謝の品々を、喜んで受け取った。
「まあ、マシュマロがあるわ。私の大好物よ」
「自分は、准神官のヒュー・カウフマンです」

「カウフマン？」
　すると、突如顔色を変えた女神官が、
「……しっ」
　ユウの唇に指をかざした。
　そして、いかにも大げさな身ぶりであたりをうかがったかと思うと、声をひそめてこう言った。
「その名を口にしてはいけません。あなたの名前は……ルカ。そう、ルカ・モールトン、いいですね？」
「あ……」
　ユウは直感した。
　手配書だ。この街にもまた、手配書がまわっていたのだ。
「あの、俺は……！」
「いいえ、いいのです、行かないで。あなたはここにお泊まりなさい。ええ、すべて私にまかせて」
　緊張した面持ちで眉を吊り上げた女神官は、ユウを押しやるように、柱の影へ身を寄せた。
「あなたにはできる限りのことをせよと、大神殿からのおふれです。ああ、それにしてもよかったこと。川向こうのアーカン・メイサ神殿は、レアン祭主のおひざもと。次の大祭主を狙う彼にかかっては、あなたはカジャディール様を陥れる、だしにされてしまいます」
　言いながら女神官は、心底ほっとした様子で、胸をなでおろした。
「私は、マーコット。小さい神殿ですから、ここには私ひとりです。あまり、もてなすこともできませんが、それでも構いませんね？」
　ユウはもちろん、首を縦に振った。
「ありがとうございます」
「いいえ、あなたは神の御前で、偽らざる名を教えてくれました。正直なあなたに、メイサが救いの御手を差し伸べられたのでしょう」
「……はい」
「さあ、まずは部屋に。そのあとで、一緒に、お茶をね」
　ユウは、この美しい笑顔をした敬けんな婦人との出会いに、心か

ら感謝した。
それを正直に口にすると、マーコット神官は、その福々しい顔を真っ赤にして、
「お上手ね」
と、ユウの手の甲をつねった。

こうしてユウは、どうにか予定どおり、メイサ神殿へ腰を落ち着けることを得た。
案内されたのは、マーコット神官の印象がそのまま映し出されたような、清潔感のある、優しいにおいに包まれた一室で、この他に、宿坊として使われているのは四部屋。宿の多い街だけに、数は少ない。
そこでまずユウがしたことは、木箱の中のモチを、窓から裏手の雑木林へと出してやることだった。
「日が出てる間は、この近くにいてくれ」
「了解です」
モチは、ほんの数メートル先の白樺の木に、居心地のよさそうな枝を見つけ、そこに落ち着いた。
白いモチの姿は、白樺の木と元々セットであったかのように、しっくりとおさまった。
さて、では仕事をしようか。
布にくるんだ太刀をベッドの下へ隠し、ユウがマーコット神官を探しに出ようとすると、ちょうど扉がノックされ、本人の声が、ひそやかにうかがいを立ててきた。
「カウフマン……あ、駄目ね、忘れっぽくて。モールトン准神官」
「はい」
「いま、あなたをたずねて、お客様が見えたのだけれど」
「客？」
「男の方で、騎士ではありません。祭壇の前で待つからとおっしゃ

って、いまはそちらに。……どうします？帰っていただきますか？」
「いえ……」
ユウには心当たりがあった。
ハサンとの連絡は、人の集まる夕暮れ時の祈りに紛れて、という予定だったが、なにか不測の事態が起こった場合には、適当な理由をつけて呼び出されることになっていたのだ。
「きっと知り合いです」
「ああそう。なら、早くお行きなさい。人目が気になるようなら、これを。祭室の鍵です」
「すみません」
ユウは、さすが伝統ある神殿らしいクラシカルな鍵を握りしめ、地下の聖堂へと急いだ。
なにがあったものかと気がはやったが、神前にぬかづくその人影には、格段あせる様子も見られなかった。
「ハサン……？」
薄暗い光石灯の光の中で、呼びかけられた人物が立ち上がる。
ひざ頭についた土を払い、その男は言った。
「はじめまして、ヒュー・カウフマン君」
「エディン……ナイデル……！」

折衝

ユウがエディンの顔を見るのは、これが二度目だ。
最初は、あの凧上げの日に見ている。
しかし、それは物陰から盗み見たのであり、エディン・ナイデルはこちらの顔を知らない。
ユウはそう思っていた。
そして、エディンは自分に対して、なんの興味も持っていない。
そう思っていた。
だからこそ、こうしてエディンが自分を訪ねてきた、などということも、にわかには信じられなかった。
「ヒュー君、いや、カウフマン君？」
エディンはまるで、野良犬に餌をやるときにするような、
「自分は怖いものではないよ」
という態度、手ぶりで、ユウに歩み寄ってきた。
「来るな！」
飛び退いたユウを、エディンは笑った。
「う、ふふふ」
「なにがおかしい」
「いや、君が、あんまり可愛いものだから」
「だまれ！」
すると、この声を聞きつけたらしいマーコット神官が、
「カウ……モールトン准神官？」
と、階段の上から、こちらをうかがい見るような声をかけてきた。
もちろんユウとしては、あの親切な婦人をこれ以上巻きこむような真似はしたくない。目の前にいるのが、命をどうとも思わないこの男ならば、なおさらだ。
「……なんでもありません」
「でも……」

「本当になんでもありません、神官様」
エディンが、ユウの言葉を引き取って応えた。
「私と彼の間では、よくあることです。この程度のいさかいは」
言いながらその赤い唇は、にや、と、笑いかけてくる。
「命がけの戦いをしていれば、しばしば、ね」
「……そう。なら、いいのですけれど」
「マーコット神官。祭室をお借りします」
「ええ、どうぞ」
ユウは、エディンを目顔で誘い、祭壇脇のカーテンに隠された扉へ鍵を差した。
重苦しい、いかにも古風な響きが感触となって手のひらに伝わり、ユウは、その扉を開いた。

「……へぇ」
エディンのような人間は、入るどころか、こういった部屋があることさえ知らなかったに違いない。
祭室とは文字どおり祭事をとりおこなう場所であり、神官が神徒たちの悩みを聞き、なぐさめる場所だ。
部屋の広さは神殿によって差があるが、ここは宿坊の一室よりも狭く、ひなびた風合いの木の机と、それを挟んで向かい合わせに置かれた木の椅子が二脚。そして、壁にかけられたメイサの神聖画と、それだけであった。
しかしユウは、この土のむき出しになった洞穴のような場所へ一歩足を踏み入れた瞬間、どれほど心落ち着いたか知れない。
ユウはその、メイサ女神が、幾千幾万の宝石を大地へ放つ様を描いた神聖画を前にして、額と胸にふれた。
……どうか、この胸に勇気が、この頭にハサンの知恵が宿りますように。
ユウは、いままさに、自分が鋼の戦士となったような心持ちがした。

「ねぇ、カウフマン君」
猫なで声を出したエディンが、耳元に熱い吐息を吹きかけてきても、ユウの心は動じなかった。
「ねぇ、カウフマン君。君はどうして彼といるの」
「彼？」
「アレサンドロ・バッジョ」
ユウは、フンと鼻を鳴らしただけで、答えてやろうとはしなかった。
こちらの意見を言うのは、もう少し、相手の出方を見てからだ。
「ねぇ、そうだろう？君の身体には、きっと赤い三日月はない。命令されなければなにもできない、あの馬鹿な奴隷たちとは違う」
「……随分な言い方をするんだな」
「だって、それが真実だから」
うふふ、といつもの含み笑いを見せたエディンは、糖蜜のような、ねったりとした動作でユウから離れ、椅子に腰を下ろした。
「ねぇ、カウフマン君。いや……カウフマン。君が教えてくれないのなら、当てて見せようか。どうして君が、あの男に手を貸しているのか」
ユウは、再び心を落ち着かせるため、額と胸にふれた。
「それは……復讐。帝国への復讐」
「フフン」
知らず、ハサンと同じ笑いが口をついて出た。
「だったらなんだ。同じ目的なら、自分についたほうが得だとでも言うのか」
「まさに、ね」
「冗談じゃない」
「なら、あの男と行けば、復讐は達成されるのかい？」
「え……？」
「あの男には、君の望むような復讐をする気はない。そうだろう？」

ユウはこのとき、エディンがアレサンドロの目的をはかりかねているらしいことに気がついた。
そうだ。すべて知っているような口ぶりであっても、誘導尋問で探りを入れようという、所詮はこの程度なのだ。自身の感情を斬り捨てる冷静さも、洞察力も、到底ハサンには及ばない。
ユウの胸に、めらめらと熱い炎がわき起こった。
それは、自信という名の炎だった。

「ねぇ、カウフマン。私に協力してくれるなら、君の復讐に手を貸してもいい」
「協力……」
「そう、簡単な話。あの男から、オオカミを奪ってくるだけ」
立ち上がったエディンの指が、いまだメイサの神聖画から視線を離さないユウの、左手を取った。
そしてさらに、そのなめらかな指先でN・Sの指輪にふれ、
「これは、カラス」
などと物知り顔に言う。
ユウは特にあらがいもせず、またフンと笑ってやった。
つまらない揺さぶりだと思いながら。
「俺はアレサンドロから離れない」
「……へぇ」
「オオカミが欲しいなら、勝手に的はずれな攻撃をすればいい。俺やハサンがどうしていつもそばにいるか、おまえは考えたこともないみたいだ」
「それはつまり……」
と、エディンの目が、あやしげに光り、
「この指輪がオオカミである、ということも……？」
「さあな」
あえて白々しく答えたユウは、エディンの手の中から、指を抜いた。

「話がそれだけなら帰ってくれ。神殿の手伝いをしたいんだ」
「待った」
「え……？」
「協力してくれないのだったら、こちらは、君の大切な人へ報復をする。そう言ったら？」
「ラ……！」
ユウは、喉から出かかった言葉を、やっとの思いで飲みこんだ。
これはブラフだ。はったりだ。
ハサンとN・Sがある限り、あちらは安全。マンムート二号車も精鋭がそろっている。
「……やれるものなら、やってみろ」
「なら手始めに、先ほどの女神官様を」
「おまえはそれでも人間か！」
「それは違う。私こそ人間だ。君たちこそ、そうではないのだ」
エディンは、自分に溺れたものがよくするように、我が言葉は真理なり、とばかりに、諸手を天へ差し伸べて言った。
「この世界には、正しい人間のみが残ればいい。正しい道を知った、正しい者による、正しい者のための国。私が目指しているのはそれだよ、カウフマン」
「そんなものは詭弁だ」
「いいや、理想だ。現実の有象無象に足を取られて理想も口にできない男には、世界は変えられない」
「なにを！」
「だから、ねぇ、カウフマン。私はオオカミが欲しい。正しい国に神はいらない。ただ、玉座に、あの人の器が欲しい……！」
「勝手にしろ。俺は、絶対に協力しない」
ユウは毅然として言い放った。
「どうしてもと言うなら、神官じゃなく、俺を人質に使え。アレサンドロの前で、舌を噛み切ってやる」
「へぇ」

「さあ、どうした、やってみろ。お前の語る正しさなんてそんなものだと、俺が証明してやる」
　するとエディンはユウの鼻先に顔を近づけ、甘い狂気をはらんだ目を皿のようにして、まじまじと見た。
　そして、くすりと笑い、
「君は、私と同じだ」
「え……？」
「まるで、殉教者」
　と、今度は、声を出して笑った。
「わかった、君はあきらめる。だけれども、あの女神官に君ほどの覚悟があるか、どうか」
「あの人には手を出すな。俺はひとつ、おまえの欲しがる情報を持ってる」
「へぇ、それは？」
「それは……」
「それは？」
「オオカミが、生きているかもしれない」

　ユウは、どうしてこんなことを口にしてしまったのか、自分でもわけがわからなかった。
　しかし、目の前のエディンは最愛の人物をダシに使われたことで、明らかに不快感をもよおしている。
　このままたたみかければ、最悪の結果を回避する道が、どこかに見えるかもしれない。ユウは思った。
「そう、彼は生きている。私の血肉に、深く息づいて」
「そういうことじゃない。現実の話だ」
「まさか」
「だったら、おまえはオオカミの死体を見たのか。その手で確認したのか」
「そ、れは……」

「彼が生きていることを証明する手段、いまはない。でも俺は、そうじゃないかと思ってる」
「……理由は」
ユウは落ち着けと、自らに言い聞かせた。
「以前、俺にそう思わせる情報をくれた人がいた」
「誰」
「メーテル神殿、ディアナ大祭主様」
「ディアナ……」
「でも、これ以上の情報をおまえが手にすることはない。神殿を破壊し、神官を殺すというのならば、俺はもちろん、あの人だって口を開くものか。拉致や脅しや、それ以上のどんな手を使っても、絶対にだ」
「それで私に、どうしろと？」
「今後一切、神殿と神官には危害を加えないこと。俺たちについても、マンムートへ戻るまで手出しをしないこと。それだけを守れば、俺が間に入ってもいい」
「う、ふふふ……」
笑ったエディンはくるりと身を返し、ユウに背を向けた。
そして、ぽきん、ぽきんと、小さくなにかを弾くような音が、聞くともなしに耳に入った。
これは、爪を噛み切る音だ。
エディンは惑乱している。
「どうする、エディン・ナイデル。俺は別に、おまえが断ろうと構わない。そのときは、ここで殺してやる」
「へぇ、神の前で？」
「そうだ。メイサだって許してくださる」
「……そう、神はいつだって君たちに甘い。この世で最も人を殺しているのは、敬けんな神徒たちだというのに」
「おまえと神について語る気はない」
「う、ふふ、ふ……まぁ、いい。君の提案に乗ろう。ただし……」

「誓いは守る」
「誓い！へぇ！神前の誓いなんて、まるで結婚だ！」
エディンは、やけに甲高い声を立てた。
「でもいい、私も誓おう、カウフマン。もし君が約束を違えたら、全国の神殿を標的に加える」
「……ッ」
「君たちがあの戦車に戻ったら、また、こちらから」
「……わかった」
「では……そういうことで」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0813g/

ランドスケープ・アゲート

2011年12月13日11時49分発行